In the sky with Electric Power

直通特急

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｎ　ｔｈｅ　ｓｋｙ　ｗｉｔｈ　Ｅｌｅｃｔｒｉｃ　Ｐｏｗｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ８９９９Ｕ

【作者名】
直通特急

【あらすじ】
大学を飛び級で卒業した俺は、１９４４年４月に第５０１統合戦闘航空団に所属することになった。どうやら男性ウィッチのようだ。
言い忘れてた、俺のストライカーは電気で動くんだった…。

0話（前書き）

このたびはお読み下さいましてありがとうございます。前回の作品を一旦全て削除しました上で新たに修正版という扱いでこの作品を投稿させていただくことにしました、作者の直通特急でございます。
今後ともよろしくお願いいたします。

0話

この回は登場人物のプロフィールとさせていただくことにします。
今後付け足していく所存でございます。

本名

石井　明範　（イシイ　アキノリ）

出身地

東京都葛飾区出身

固有魔法

治癒（本人は自覚していない）

経歴

１９２７年６月６日、葛飾区小松に生まれる。

１９３３年４月、葛飾区立小松尋常小学校に進学。

１９３７年３月、同尋常小学校を卒業。

１９３７年４月、東京高等師範学校附属中学校に進学。

１９４１年３月、同中学校を卒業。

１９４１年４月、東京帝国大学第一工学部電気科に飛び級で進学。

１９４４年３月、同帝国大学を卒業。

１９４４年４月、連合軍第５０１統合戦闘航空団に准尉として入隊。

1話　入隊（前書き）

今回が実質的な修正版第1話となります。それでは今後ともよろしくお願いいたします。

1話　入隊

１９４４年、扶桑皇国のとある大学にて…

「石井、お前はこの大学でよく打ったな～」

「ああ、全くだ。だけど、そんなお前と野球したのも随分の昔の話になっちまったな」

親友であるメンバーたちは口々に同じことを言う。俺の名前は石井（イシイ）明範（アキノリ）だ。今、俺は大学の近くの居酒屋でみんなに送別会を開いて貰っている。

俺は今大学４年生なのだが１７才なのである。これも最近扶桑に出来た「飛び級」の制度のおかげである。う～ん、やっぱり一人称が僕って言うのは気にくわないから俺で行くことにしよう。俺は１３才でこの大学に入学した。その後、どうも自分に魔力が宿っていることに気付き、軍の試験を受けたところ見事に合格、在学中の研究内容だった「電気式ストライカー」の成果も功を奏したらしい。だけど、このストライカーの開発は将来の鉄道のために作ったんだけどな。それはそうとう明日にロンドンに向けて出発するんだ。なんて思っていると、友人の一人が僕に訊いてきた。

「あっちに野球道具は持って行くのか」

「そうしようかな、いつでもまたやれるようにしておきたいから」

「また帰ってきたら、野球やろうぜ。俺達は待ってるから」

「勿論だよ…。だけどみんなありがとう今日は、僕のために」

「何言ってるんだよ。水くさいな。みんな仲間だろ」

「そうだったな…だけど、本当にありがとう…」

・・・

「はい！」

と会話をしたことを思い出した。多分、その後すぐに俺は列車の中で眠ってしまったようだ。だってねぇ、気がついたらもう目的地について車掌に起こされちゃったんだから…。

「バット、重いなぁ…」

そんなこと言っているうちに、基地の前にたどり着いた。思ったほど早く着いたようだったが、入口での手続きが終わるとすぐに入れてもらえた。基地の中はとにかく広い。自分のいた東京帝大（ていだい）の数倍どころじゃあ済まないだろう。今はすっかり日も暮れて…それどころか列車が遅れた終点で居眠りしていたと言うこともあるから時刻は既に夜の7時半だ。ブリタニアの春は日が暮れるのが東京以上に早い。高緯度が影響しているからだろう。

「もう暗いし、急がないとな」

ウィッチ専用の宿泊所の前に着くと、どうもカールスラントの軍人らしい女性がやってきた。

「初めまして、あなたが石井さんね。私はここの隊長のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です。これからよろしくね」

「よろしくお願いします。中佐」

そういうと僕の回りを中佐は一周して不審物がないか一応は調べているようだ。

「ところで、その縦長の袋には何が入っているの」

「バットです」

「バット?。石井さん、野球をなさるの?」

「えぇ」

「そう。とりあえず今夜はもう遅いから荷物を置いたらとりあえず私の部屋に行きましょう。もう一人の上司を紹介しますね。自己紹介は…明日の朝にでも行いましょう」

「了解しました!」

俺は敬礼をしてそう答えた。すると

「あら、若々しくて格好いいわよ」

と中佐は誉めてくれた。寒いからと言って中佐は急いで俺を宿舎の中に入れた。いよいよここでの俺の生活が始まる…。

2話　位

中に入ると中佐の部屋に案内された。前から聞いていたのが、ここは男性がいない場である。だから俺は期待よりも不安の方が大きかった。それはこの瞬間も同じだ。これほど、大学にいたときの仲間達がいて欲しいと思ったことは今までになかっただろう。そんなことを思いながら、荷物を置くと中佐が話し出した。

「あら、緊張しているの？」

「ええ、まぁ」

質問の内容があまりにもストレートだったのでつい本音が出てしまった。すると中佐は笑みのまま更に話しを続けた。

「確かに、この部隊では初の男性隊員だから…」

「列車の中でもそう言われました。お前があの部隊初の男性隊員なのかって」

「あらあら」

話しながら僕の前に座り面と向かって話を続けようとしたので僕は目を反らしてしまった。今まで女性と面と向かって話したことなどそうそうなかったからだ。すると中佐は僕の手に階級章を手渡した。見るとなんと准尉のものであった。すかさず僕は聞き返した。

「それじゃあ改めて初めまして。私がこの部隊の隊長をしている、カールスラント空軍、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です」

「俺…あっいや僕は、大日本扶桑皇国海軍の石井明範です。詳しいことは先の履歴書でご存知かと…」

「ふふ…気にしないでいいわよ。ところで、説明してくれないのかしら？」

何だか軍隊って言うのはまだまだ知らないところが多くてどう対応すればいいのかさっぱり分からない。とりあえず上官の命令は絶対だからこう言われたんだったら答えないといけないんだろうなぁ。

「えっと…今年の春に扶桑の東京帝国大学第一工学部電気科を卒業しました。在学中は野球を少しだけ…」

「はい。よくできました。これからもよろしくね。ここブリタニアは扶桑とは色々と食事、環境、文化も違うと思うけど、石井さんには頑張って欲しいわ」

「はい。皆さんの期待に応えられるように僕も頑張ります」

「さて、それじゃあ階級章を受け取って貰いましょうか…」

そう言うと中佐は僕の前に階級章を差し出した。見たところ海軍の…准尉のもののようだ。

「あの」

「何かしら？」

「これ、准尉のものですよね？。あの、本当にこれを俺が？」

「試験の成績と男性ウィッチという理由を総合的に加味して判断されたそうよ」

まさかいきなり准尉からだとは、良くて兵長ぐらいだと思っていた俺は驚きを隠せなかった。すると、ドアが女性が入ってきた。見ると、扶桑海軍の佐官の制服だったので立ち上がり敬礼をしようとすると。その女性はこう言った。

「ここでは敬礼はしなくていい。私は扶桑皇国海軍所属、坂本美緒少佐だ。君のことは聞いている。頑張ってくれ」

「あら…美緒、盗み聞きしてたの？」

「済まんなミーナ。そういうわけじゃなかったんだがな。私も一目見てみようと思ってな。新人を」

「扶桑皇国海軍の石井明範です」

「ほぅ准尉からスタートか。期待に応えられるようにびしびし鍛えてやるから覚悟しておけよ」

「はぁ…」

「はっはっは。石井、そう気落ちするな」

元気そうな上官でよかったんだか悪かったんだか。その後僕は自室に送って貰いすぐに疲れたからだろう、眠りに就いた…。

3話　自己紹介

一夜明けて、朝を迎えた。ブリタニアの春と言えば東京よりも寒いとのことなんだそうだが今日は意外にもやや暖かい。俺がブリタニアに来たことを歓迎してくれているのだろうか？。

「素振り行くか…」

俺は朝日を眺めながら、そう呟いた。

準備を済ませて外に来たはいいものの…やっぱり緯度が東京よりも高いから、寒い。こういうときは素振りをたくさんすれば温まるから早くやることにしよう。

「ここはもう…扶桑じゃないんだな」

「はっはっは！。そうだぞ石井。ここはもうブリタニア、戦線の最前線だ！」

「あっ！、おはようございます。坂本少佐」

「うむ、お前は早起きなのか？」

「えぇ。扶桑にいたときで部活があったときはこの時間には起きて朝練をしてましたから…」

「そうかそうか。と言うことはそのバットも？」

「はい。折角だからと思って持ってきたんです」

「おぉ。形は違えど野球の練習とはいい心がけだ。これからも、怠らないようにな」

「はい」

少佐がいたのには少し驚いてしまったが…まぁいいだろう。とりあえずこっちに来てから迎える初めての朝な訳だが…空気は東京よりも断然いい。素振りをするにはもってこいだ。

”さてさて…始めるか”

時間はまだ朝の6時過ぎ、本当ならこんなに初日から張り切っちゃいけないのかもしれないかもな。だけどやっぱり素振りはしていて気持ちがいい。それから大体30分くらいしてからだろうか…

「おはよう。石井さん」

「あぁ。中佐…おはようございます」

「よく眠れたかしら?」

「えぇ」

「そう!。ならよかったわ、朝食後この部隊の他の人達に自己紹介をして貰うからそのつもりでいてね」

「えっ、それって…俺がやるんですか?」

「あら、他に誰がやるのかしら？」

正直なところ…あんまりやりたくはない。工学部に女子なんていないし…今まで野球と鉄道のことしか興味を抱かなかったから女性と会話するのは何となく緊張してしまう。おっと、手が震えているようだぞ。

「あらあら、緊張してるのね？」

「えぇ…どうも恥ずかしくて」

「大丈夫よ。ここの人達ならきっと石井さんと仲良くなってくれると思うわ」

「そう…ですか？」

「えぇ！」

俺は中佐の言ってることを信じてみることにしよう。と、この時は思った。一方で、こちらはとある部屋。先ほどの俺と少佐の会話を誰かが望遠鏡で盗み見していたようだ。

”な、何なのですの。あの男性は！？”

そうこうしているうちに時間は経過し、俺はブリーフィングルームに着いた。大学の教室くらい大きな部屋に9人の女性が座っていた。僕と中佐そして少佐は、前に立っていた。予想通り、座っている人たちは動揺しているのか他の人と話していた。すると中佐が

「はい静粛に。」

と言うとみんなは一気に黙った。そのあと中佐はこう続けた。

「今日、扶桑皇国から来た補充隊員の石井明範准尉です。我が隊初の男性ウィッチですから、皆さん仲良くしてあげてくださいね。それじゃ、自己紹介してくれるかしら石井さん」

不安が大きくてあまりしたくなかったのだが、中佐に笑顔で言われたのですることにした。なんだか背中ゾクッとしたような…たぶん気のせいだろう。

「初めまして。先ほども紹介があったように、扶桑皇国から来ました。石井明範です。今17才で今年大学を卒業しました」

「ん?、ちょっと待てミーナ」

中佐に向かって驚いたように質問する女性。中佐と色違いの制服を着ているからたぶんカールスラントの人なんだろう。

「どうしたの、バルクホルン大尉」

この人がバルクホルン大尉かと思っていると、俺にこう訊いてきた。

「イシイと言ったな、お前どういうことだ17才で大学を卒業したって言うのは。宮藤、扶桑の教育課程はどうなっているんだ」

「はい、バルクホルンさん。扶桑の今の教育課程ではどんなに早くても大学に入学するのは18才の筈です。私も不思議です。どうしてですか石井さん」

この人が宮藤さんか、東京では有名だったけどこんな人なのか。そう思いながら俺はこう答えた。

「確かにそうですね。僕は義務教育を修了後すぐに飛び級で東京帝国大学の第一工学部電気科に入学しました」

「飛び級！！！」

宮藤さんやバルクホルン大尉をはじめ、席に座っていた人たちはみんな驚いているようだった。確かにそうだろう。宮藤さんに至っては呆然としていた。

「はい、それで今回ここに来ることになったので、大学で卒業試験を受けたら合格したので先月卒業しました」

みんな凄い奴だなと思っているのだろう。みんなの目がそう言っていた。

「あっ、あと俺、扶桑ではずっと野球をやっていました。上手くはなかったですけど。というわけで、これからよろしくお願いします」

僕が言い終わると、続けざまに中佐がこう言った。

「ありがとう石井さん。それでは宮藤さんと、リーネさん。彼を案内してあげてね」

「「あっ、はい！！」」

二人は同時そう言った。見たところ、とても仲がいいようだ。俺にはそう見える。

「以上で解散とします」

皆が起立をし、姿勢を正したため僕も中佐に向かって姿勢を正した。

ふぅとため息をつくと、みんなが僕の前にやってきた。最初に挨拶をしてくれたのは、宮藤さんとリーネさんだった。

「宮藤芳佳、扶桑海軍軍曹です。よろしくお願いします」

「初めまして、ブリタニア空軍リネット・ビショップ軍曹です。石井さん、よろしくお願いします」

そのあと続けて赤い制服と白い制服（多分、リベリオンとロマーニャの人だろう予習しておいて良かった。）が話しかけてきた。

「私はシャーロット・イェーガー。階級は大尉。よろしくな」

「チャオ、私はフランチェスカ・ルッキーニ。階級はしょーい。よろしく」

そのあと、カールスラント軍の人たちが話しかけてきた。

「先ほどはすまなかった。私はゲルトルート・バルクホルン。階級は大尉。よろしくな」

「私はエーリカ・ハルトマン。階級は中尉。よろしく～」

そのあと、青い服の人がやってきた。多分ガリアだろう。

「私(わたくし)はペリーヌ・クロステルマン。自由ガリア空軍少尉。よろしくお願いしますわ」

その後ろから

「おい、ツンツンメガネ～早くしろヨ～」

と、それに返すように

「もうエイラさんたら…どうしてそう待つことも出来ないのですの」

と怒ったような（いや、怒っているんだろう）口調で言い返した。

「次はいよいよ私たちの番ナンダナ。私は、エイラ・イルマタル・ユーティライネン。スオムス空軍少尉」

「私は、サーニャ・リトヴャク。オラーシャ陸軍中尉です。石井さん、よろしく…ふわぁ～」

やけに眠そうだ。そんなことを思っていると

「ホラ石井、サーニャがこう言ってくれてるんダ。ちゃんと挨拶シロ」

とエイラさんから言われた。俺もそうするつもりだった。

「皆さん、俺は石井明範。扶桑皇国海軍准尉です。これからよろしくお願いします」

俺はみんなにそう言うと、宮藤さんとリーネさんに案内すると言わ

れたので行こうとしたのだが

「待って！！」

とルッキーニ少尉がみんなに言った。

「ん？。どうしたルッキーニ」

「イシイ！！」

「はい？」

「にししし～」

俺はいきなり後ろに立たれてあたふたしていると自分の胸を掴まれた。

「うわ！」

「う～ん、やっぱり男だからなくて当然かぁ…」

「あ、あの！！」

俺はあまりの歓迎に何だか変な気分になったが、イェーガー大尉が言うには

「ここに来た人達はみんな同じ目に遭ってるから気にするな」

と俺を励ました。何はともあれ、ようやく隊の人達に俺は会うことが出来た…。

4話　Electric

ミーティングルームをあとにして、僕と宮藤さん、リーネさんは僕の部屋に向かった。と言ってもまだ何もないが…。そう思っていると、僕はリーネさんと宮藤さん二人に話しかけられた。最初は宮藤さんだった。

「石井さんって凄いです。飛び級で大学を卒業したなんて…。私、今年女学校の二年生になったばかりなんですよ」

「へ～、宮藤軍曹の出身地はどこなんだい？」

「横須賀です。あっ、それと私には軍曹は付けないでもらって結構ですよ」

「そうか、じゃあ”宮藤さん”ってでも呼べばいいのか？」

「はい、そうです石井さん」

「こちらこそね」

「よろしくお願いします。こちらは私の親友のリーネちゃんです」

と言われたのでリーネさんの方を見ると、恥ずかしいからだろうか顔が赤くなっていた。

「石井さん。私もリーネで結構ですよ」

「そうかありがとう。リーネさん」

「いえ、どういたしまして」

「ブリタニア空軍ってことは、ここは地元なのかい？」

「そうです」

すると、宮藤さんが間をわってこう言った。

「リーネちゃんの入れる紅茶はとてもおいしいんですよ」

それに僕も答える。

「ふ～ん、確かにこっちはお茶が有名だからね…」

「えっ、知っていたんですか」

「まぁね…」

そうこうしているうちに僕の部屋の前に着いた。

「ここが石井さんの部屋です。私の隣です」

「そうか、ありがとう二人とも、わざわざ案内までしてくれてね」

「そんなことないですよ。ねっ、リーネちゃん」

「うん、芳佳ちゃん」

この二人本当に仲がいいんだな。そう思いながらドアを開けると中

は綺麗さっぱり何もなかった。今日初めて来たんだから当たり前だろう。有るのはシーツが被せられたベットと大きめ勉強机だった。そう思っていると、リーネさんが訊いてきた。

「石井さん、この棒は何ですか？」

「それはバットだよ」

「バット？」

「うん”野球”ってきいたことない？」

「あっ、私わかるよリーネちゃん」

「本当、芳佳ちゃん？」

「うん。扶桑では有名なスポーツだよ。石井さん勉強だけじゃなくて野球もやるんですか？」

「そうだな～大学にいたときは勉強よりも野球やってたかな。」

「えっ、そうなんですか」

「うん、だって勉強ばっかやってても人間って”だめ”になるから、遊ぶときは遊ばないとね…」

「そうですね」

正直嬉しかった。ここまで野球に興味を抱いてもらっていることに…。

「今度教えてやろうか?、俺、打つのだけは得意だから」

「はいっ!!!、お願いします」

「ははは、元気だねぇ二人とも…」

宮藤さんもリーネさんも同時に返事をした。二人ともいい笑顔だな。

荷物の整理も終わった頃にはすっかり日も登り切っていた。時計は既に昼過ぎの1時半を指していた。

「外に行きたいんだけどいいかな?」

「えっ、構いませんが…何をするんですか?」

「基地のまわりを案内してくれないかな?。それから素振りもしたいし」

「わかりました。じゃあ行きましょうか。石井さん」

「あれ、二人とも忙しいんじゃないの?」

「大丈夫ですよ。今日は石井さんの面倒を見ろと坂本少佐に言われているので。」

「そうなんか、じゃあ行こうか」

ひとまず昼食を済ませると俺は宮藤さんとリーネさんに基地の回りを案内して貰った。その間にも色々な話を聞いた。どうやらこの部

隊は本当に凄いと言うことが徐々に漠然となながら分かってきた。ハルトマン中尉は相当な記録をお持ちとのことだそうだ。俺も折角准尉階級で入れて貰ったんだから…頑張らないとなぁ。

日もすっかり西に傾いてきた。それと同時徐々に辺りも冷え始めてきた。

「石井さん、大丈夫ですか」

「風邪引いちゃいますよ」

宮藤さんとリーネさんは僕にそう言って心配している。だがこれくらい関係ない。

「大丈夫だよ、しばらく振っていればじきに暖まるから…。それより、そこにいると当たるかもしれないよ。お前さん達こそ寒そうだらか先に戻っててていいよ。あとで呼びに来てくれ」

「わかりました。頑張ってくださいね。３０分くらいで出来ると思いますから」

「一回部屋に戻りたいから、もう少し早く来てくれると嬉しいかな」

「はい！！！」

二人は口をそろえてそう言うと行ってしまった。僕も素振りに集中することにした。振っているときもいろいろ考えていた。今までのこと、これからのこと…。

「・・・イ、・・・・・・・・・・・・・・・・イ、・・・・・・・・・・・・・・・イ」

そういえば、風呂はどうなるんだろう。男性用はあるのかな?。そういえば、職業野球どうなったのかな、また巨人軍の優勝かな。

「・・シイ、・・・・・・・シイ、・・・・・・シイ」

さっきから誰かに呼ばれている気がするけど。

「オイ石井、返事シロ!!!。」

本当に呼ばれていた。

「うわっ、ユーティライネン少尉。」

「うわっ、じゃネーヨ。全く、何度呼んでも返事してくれないんだから。それと私はエイラでイイヨ。」

「いや、そう言われましても…一応大尉なんですから…」

「ウルセー、アノナ、私はそう言うのは嫌いなんダ。これは命令ダゾ」

こう言われてしまうとさすがに逆らう事なんて出来るわけがない。

「わかりました。それじゃあ…エイラさん?」

「ウム、それでイイ」

「そうですか…ところで俺に何か?」

「ア、イヤそのなんダ。その振り回しているのは何なのか訊こうと思ッテ…」

「ああ、これはバットですよ。野球用の」

「ソレって私たちの国の”ペサパッロ”のことカ？」

「それに近いと思います。ペサパッロは三角ベースですが扶桑の野球は四角形やるんです。」

「そうなのカ。ッテ、なんでペサパッロ知ってるんダ？あれって確かスオムスのスポーツのはずじゃ…。」

少々ビックリしていたようだ。確かにペサパッロはスオムスだけの遊びだからな。僕の知っている限りでは。そうしていると、一機のストライカーが離陸していった。離陸していった方向を見上げているとエイラさんは僕に説明してくれた。

「あれはサーニャダナ。」

「リトヴャク中尉のことですか？」

「サーニャでイイヨ。サーニャは夜目が利くから夜間哨戒いつも就いてもらっているんダ。」

「そうなんですか。」

「そういえば、お前の機体をまだ見ていなかっタナ。見せてくれないカ？」

空を見上げていると、エイラさんは怒ったように言った。何でだろう顔も赤くなっていた。

「いいですよ。格納庫に行きましょう。それと…。」

「どうかしたノカ？」

「何でさっきから顔が赤いんですか？」

「ウルサイ！！！、上官に口出しするナ」

エイラさんに案内され格納庫に向かうと、シャーリーさんとルッキーニさんもいた。

「よぉー、石井にエイラどうしたんだ？」

開口一番シャーリーさんはそう訊いてきた。

「デート？」

ルッキーニさんもふざけてそう言うと、

「違ウ！！！、石井のストライカーを見に来たんダ。ダロ石井！！！」

従わないとまずい予感がしたので

「ええ、そうです」

と言うと。ルッキーニさんは残念そうな顔をした。一体何を考えて

いるんだか…。

「そういえば、私もまだ石井のストライカー見てなかったな…。良かったら見せてくれないか？」

「ああ～、シャーリーだけズルい、私も私も～」

「いいですよ。せっかくだからみんなで見ましょうか。大尉も少尉も…。どうかしたんですか」

「ああ、あたしとルッキーニは大尉とか付けなくていいよ、それに石井の方が年上だし…」

うん？そう言うのに何で呼び捨てにされてるんだ？まぁいいか。

「わかりました、シャーリーさん、ルッキーニさん」

「私を無視スンナー！！！」

エイラさんがまた怒ってる…。まずい、ここはなんとかしなければ。

「と、とりあえず向かいましょう。僕のは一番右奥のやつです」

と言ってストライカーの前まで来た。するとシャーリーさんは僕に向かってこう言った。

「ちょっと動かしてくれよ」

「えっ、今からですか？」

「うん、飛ばなくていいからさ。エンジンテストみたいな感じで」

ルッキーニさんに顔を向けると

「うん、私もシャーリーに賛成～」

エイラさんも

「私も見てみたいナ」

ここまで来たらやるしかないか～。そう思い。僕はこれを動かすことにした。そういえばみんなこのストライカーが電気式なのを知っているのかな?まぁいいや、バッテリーもまだ十分にあるし。

「随分簡素って言うか…地味なストライカーだな」

「そうですか?。シャーリーさん」

「私もそう思うゾ。だってこのストライカーＦＵＳＯって書いてある以外にＴＩＵってしか書いてないじゃないカ」

確かにエイラさんの言うとおりで、このストライカーは自分が開発したものだし況してや大学の協力を受けて作られたものだから余計な加工は一切していない。アルミは地色むき出しの銀色をしている。

「まぁまぁ…」

「むぅー!!。石井、早く動かしてよぉ～」

「わかりました。じゃあ今から動かしましょう。ちょっと待ってい

てください」

ハンガーに上がりストライカーユニットを穿く。調子は良さそうだ。

「それじゃあいきますね～」

・・・

「なるほどね～、でもどうしてそれなら空気供給用の穴がついているんだ」

「これは、ここから空気を取り入れて、内部の小型の羽を回転させて発電できるようになっているんです。これのおかげで、条件にもよりますが航続距離が１０～２０?伸ばすことが出来ます」

「よく考えられているんダナ。しかしこれもお前が作ったのカ。やっぱお前ッテ、スゲ～ナ～」

「石井、これってビリビリ～って来ないの?」

ルッキーニさんが怖がっているように見えたので安心させるようにこう言った。

「大丈夫ですよ。絶縁対策はばっちりですから」

ルッキーニさんはどうやら安心してくれたようだ。よかった。在学中に何度も感電して絶縁対策を完璧にしておいて正解だった。

「ここに皆さんいたんですね～、夕食が出来ましたよ」

リーネさんが呼びに来てくれたので、みんなで食事に行くことにした…。

5話　bath

素振りしたり、ストライカー動かしたりと。いろいろ疲れたのでお腹が減ったから食堂に向かうことにした。どうも、みんなの話を聞いていると各々が交代で食事当番をしているらしい。今日の当番はカールスラントのバルクホルンさんとハルトマンさんだそうで入ってみると、ジャガイモが蒸かしてあった。

「栄養がとれれば何でもいい。しかも、素材の味が一番楽しめるではないか！」

バルクホルン大尉はそう豪語していた。ただ、腕は悪くなく美味しかった。食後ほっと一息していると、中佐をは地面みんなが席に座らされ、なにやら深刻そうな顔で話し出した。

「皆さん、晩ご飯食べましたね。それで、この後について何だけど」

「おっ風呂でしょ～。それがどーかしたの？」

ルッキーニさんが何気なくと言うと。

「ルッキーニさん、その通りです。この後みんなお風呂に入るでしょ？そうなると困ってくることがあるの」

「どうしてだミーナ？」

バルクホルン大尉も聞き返す。

「今までこの部隊は女性だけだったでしょ、だからお風呂が一つし

かないの。そうなると石井さんが…」

「なるほど、そういうことか」

みんな深刻な顔になってしまった。別に僕は最後でもいいわけでその方があとのことを考えずには入れるから楽なのである。だからこう言った。

「あの、中佐…」

「どうかしたの?、石井さん」

「俺は一番最後でも構わないですよ」

「えっ、でもそれはあなたずっと待たなくちゃいけないことになるのよ」

「この部隊の中で男性は俺一人だけですし。ここは僕が譲歩するべきです」

「そう…、じゃあとりあえず対策は明日発表するとして、今日はそうしましょう。だからみんな急いで入ってね」

中佐がそう言うと、みんなはそれに従い風呂に入ることにしたようだ。長く入ってもらって構わないと言っておいたのでしばらくは戻ってこないだろう。

部屋に戻ると、俺はバットを磨いていた。磨くと言っても、タオルで自分の唾を使って拭くのだが意外と時間が掛かり一本磨くのに20分くらいかかってしまった。二本目に取りかかっていたとき、

ドアがノックされた。

「どうしたんですか？」

そこには宮藤さんがいた。

「あの…、風呂が空きましたので呼びに来ました」

「これはこれは…どうもありがとう」

すぐに案内されて風呂に入った。

・・・・・・カポーン・・・・・・・・・

「はぁ～」

年甲斐もなく、オヤジくさい声を出してしまう。しかしそれほど気持ちいいということだ。そういえばここ三週間まともシャワーを浴びられた日も少なかった。風呂の中でもいろいろと考えていた。予報によれば明後日まではネウロイは来ないらしい。明日はストライカーの整備をしよう。そう考えているうちに十分暖まったので出ることにした。

寝間着（といっても、甚平だが）に着替えて、部屋に戻ると。またノックの音が聞こえた。時計の針はもう１０時を指している。

「こんな時間に誰だろう。もうすぐ消灯だって言うのに…」

僕はそう呟きながらも（勿論、外の人には聞こえないくらいの小声で）、ドアへ向かった。

「どなたですか」

「あっ、石井さん、私です。宮藤です」

僕はためらうことなくドアを開けた。すると

「あっ、あの…」

「もう寒いし中で話そう」

「はい」

部屋の中に案内し彼女を椅子に座らせ僕はベッドに座った。

「どうしたんだい。こんな時間に」

「すいません。寝るところでしたか？」

「いやいや。今風呂から出てきたばっかだからね。消灯ラッパがもうすぐ吹くって言うのにどうしたんだろって思ってね…」

「明日は私とリーネちゃんが食事当番なんです」

なるほど、何となく方向性がわかってきた気がする。

「ほう。それで、俺も参加した方がいいのか？」

「はい、出来れば参加して欲しいのですが…」

「そんな顔するってことは、僕が料理が出来ないと思っているんだね」

「えっ、出来るんですか」

どうも図星だったようだ。こけそうになってしまった。

「まっ、まぁ切ったりは出来るかな…」

「わかりました。じゃあ、明日は起こしに来ますね。いつも何時くらいに起きているのですか？」

「ん～。扶桑にいたときは4時とかかな。遅くても6時には起きてたな」

「えっ！、そんなに早起きだったんですか」

「俺、サーニャさんとは真逆で朝には強いんだけど夜には弱いんだ。実はもう眠くてさ…」

「そうだったんですか。すいません」

「いいよ。もうそろそろ時間だし。そろそろ戻った方がいいんじゃない？」

「そうですね。失礼します」

「じゃあね、また明日」

「はい。おやすみなさい」

そう言うと宮藤さんは僕の部屋から出て行った。それから数分後に消灯ラッパが鳴った。俺も寝ることにした。明日はどんなことが待っているんだろう…。

6話　Ｂｒｅａｋｆａｓｔ

朝５時３０分。目が覚めた。起床ラッパが鳴るまでまだ時間はかなりあるが二度寝するつもりもないし起きることにした。

「随分暗いな…」

俺はぼそっと呟きながら窓から外を眺めていた。まだ春だし、ここは緯度が東京よりも１０度くらい高いこともあってだろう。ようやく太陽の光がうっすらと見えてくるくらいだった…。

そういえば、今日は俺とリーネさんと宮藤さんが料理の当番日である。起こしに来ると言ってはいたもののまだ流石に起きてはいないだろう。俺はひとまず海軍の軍服に着替えることにした。まだ准尉だから坂本少佐らなんかの白い制服とは違う。

「何してようかな…」

また俺は呟いた。なるべく隣の宮藤さんやそのほか隊のメンバーの睡眠を邪魔したくはないのでなるべく騒がないようにしたい。素振りをしに行こうかとも思ったけど宮藤さん達が来てしまうかもしれない。仕方がないから俺は机に向かって本を読むことにした。そうそう、言い忘れていたが俺は鉄道好きでもある。俺の使っているこの電気式ストライカーも本来鉄道への技術発展に貢献できるようにしたものである…。

しばらくしてドアがノックされた。多分宮藤さんだろう。時間は既に６時を過ぎていた。

「どうぞ。入ってください」

「失礼します。石井さん…起きていましたか」

「まぁ、３０分くらい前に起きたかな。いつもそうしているけど…、そんなことより準備でしょ。朝食の」

「はい！。そうしたね」

「じゃあ行こうか。リーネさんは？」

「もう先に行っていますよ。私たちも早く…」

「そうしよう」

俺と宮藤さんは部屋を出た。行く途中、

「今日は3人で作るの？」

「ええ、じきにみんな起きてくると思います」

「そうか。わかった」

俺等は足早に食堂の脇の調理場に向かった。

調理場に着くと、もうリーネさんがエプロンを身にまとって準備をしていた。そういえば俺はその類のものは何もないけど大丈夫なのだろうか。

「おはようございます。石井さん」

「おはようございます。リーネさん」

「今日は扶桑料理を中心に作ります」

そうなのかと思っていると宮藤さんが大きめの割烹着を持ってきた。

「これを着てください」

「そう…。わかった」

男がこんなのと思ったが、着ないと作れないわけだし衛生上問題もある。俺はそれを着ることにした。

「こんな感じかなぁ？」

「はい、とてもお似合いです」

「そう、ありがとう」

宮藤さんの言っていることは本当なのだろうか。まぁいいや。とりあえず何をすればいいのか聞くことにした。

「俺どうすればいい？宮藤さん」

「石井さんには野菜を切ってもらいます。大根を薄く銀杏切りしてください」

「わかった。」

俺は包丁を手に取ったが…案の定だめだった。これは右利き用で片方にしか刃が入っていなかったから切れない。

「あぁ…えっと、両刃のやつはない？。俺左利きなんだよ」

「「えっ、そうなんですか」」

宮藤さんとリーネさんが口をそろえてそう言う。

「でも昨日、字は右手で書いてましたよね。」

「鉛筆は右でやるようにしているんだ。筆記体も書けないし。リーネさんよく見てるんだね」

「いえ、そんなこと…」

「扶桑だとよくあることなんだよ。左利き用のものがなかなか売ってないから、右利きに修正しちゃう人もたくさんいるんだ」

「そうなんですか。あっ、両刃の包丁ならこれを使ってください」

「ありがとう、リーネさん。えっと、薄めだったよね宮藤さん？」

「はい！。そうです」

俺は頷きかえすと作業に取りかかった。扶桑にいたときもたまに野球仲間と料理はしていたからさほど苦ではなかった。全部仕上がるのに5分と掛からなかった。

「こんなもんで大丈夫かな」

俺は宮藤さんに確認を取る。

「はいっ！。とってもいいです！」

と言われたときは、ちょっと嬉しかった。

その後俺はひたすら野菜を切った。人参やらレタスやらいろいろ切った。気がつくと時計の針はもう7時を指していた。

「石井さんって、料理も上手なんですね！」

料理中一段落したときにリーネさんが言ってきた。

「そうかぁ？。扶桑にいたときたまに作ってたからねぇ…野球部の仲間と」

「ええ、とってもお上手ですよ」

嬉しかった。今まで女性にまともにほめられたことなんて無かったから、とても。

起床ラッパが鳴りしばらくすると、隊の人たちがやってきた。

「おはよう石井。なんだ？。今日はお前も調理に参加したのか」

「はい、バルクホルン大尉」

「んー？。石井って料理できるの？」

「ほんのちょっとは出来ますよ…ルッキーニさん。」

「意外だな、石井が料理できるなんて」

「そうナンダナ」

「シャーリーさんもエイラさんも、酷いですよー」

「サーニャはどう思うんダ？」

「いいと思うわ。素敵じゃないエイラ」

「ムム。良かったナ、サーニャに誉められテ」

「ありがとうございます。サーニャさん」

「どういたしまして…ふわぁ」

やっぱり、サーニャさんは夜間哨戒の影響からか眠たそうに見えていたが…本当にすぐにでも寝そうな感じだ。

「あら、石井さんも作ってくれたの」

「あっはい、中佐。でも俺は野菜を切っただけですがね」

「それでも十分立派よ」

「ミーナの言うとおりだぞ石井、これからの扶桑の男は料理も出来なくちゃな」

「ありがとうございます。坂本少佐」

”石井さん…なかなか料理もお上手なようですわね…”

・・・・・・・・・

その後みんなで食事をした。ペリーヌさんは俺に何か言いたそうだった。何だったんだろう。

食事も終わりほっと一息していたらそれは突然訪れた。

「警報だ！」

「全員、出撃！」

「石井、お前も来い！」

「了解です！」

早速、ここでの初戦が始まるようだ…。

7話　The first fighting

食後のひとときも十分に過ごせないまま。俺達はハンガーに向かった。みんな各々の武器を取りストライカーを穿く。僕もそうした。言い忘れていたが俺の武器は主武装が九九式二号二型改１３ｍｍ機関銃で副武装が扶桑皇国海軍の十四年式拳銃であった。

勿論左利き用なんかではないが俺は強引に左で持っていた。副武装の十四年式拳銃は、射撃後の空の熱い薬莢が顔に当たる可能性があったが気にしなかった。

”電流ヨシッ！、電圧ヨシッ！、バッテリーヨシッ！”

「石井、発車ます！」

そう言うと俺は飛び立った。グウォーンという吊り掛け駆動のモーターとともに。しばらくとすると僕は離陸した。加速こそ悪いが軽量化はそれなりに出来ているため、離陸に必要な距離が少なくて済むのだ。みんなが離陸したのを確認すると中佐はネウロイのいるところに向かった。

３０分くらい飛ぶとネウロイが見えてきた。

「石井！、お前は全機隊の後衛だ。自分で判断して行動しろ」

「了解しました」

少佐にそう言われたのでその通りにした。俺は一通り全ての人のフォローに入った。今回のネウロイはさほど大きくはなかったものの、コアが移動するタイプで倒すのに時間がかかってしまった。

「ネウロイの撃墜を確認した！！！」

バルクホルン大尉がそう言うとみんなほっとしていたがそれもつかの間だった。

「まずいわ。海面付近を小型ネウロイが高速で移動中。目標は私たちの基地だわ」

「何！、しかしもう燃料が…」

部隊の全ての人がそうであった。あれだけ激しく攻撃していては燃料の減りも半端じゃなかったのだろう。俺もバッテリーの残りは確かに少なくなってはいたものの、みんなに比べればまだ余裕があった。俺が行くしかないとこの時思った。

「中佐。俺に行かせてください。考えがあるんです」

「わかったわ。急いで！」

「すまない石井、頼んだぞ」

「気にしないでください。バルクホルン大尉」

俺はそう言うと降下を開始した。元々高高度で戦っていたため、

このまま降下して更に風力発電も利用すれば加速力が上がるし降下によるスピードの上昇も期待できた。現にそれは顕著に表れた。僕はすぐネウロイに追いつくことが出来た。

俺はすぐに攻撃態勢に移行した。勿論左に銃を構えた。

「おい、登井が左に構えているぞ」

「登井さんは左利きなんです。シャーリーさん。」

と宮藤さんが答える。そんな会話が聞こえた

俺は全神経を集中させ狙いを定めた。

”ここでしくじれば、みんなに迷惑をかける。失敗は絶対しない。必ず墜とすぞ…”

俺はそう誓い発砲した。数発はかすったりそれたりしたものの、見事ネウロイに命中した。

「…ふぅ。ネウロイの撃墜を確認しました！」

「おぉー、よくやったゾ！」

「凄いじゃないか！」

たくさんの祝福を受けると俺にはどっと疲れが来た。神経を集中させ相当なストレスがかかっていたのだろう。

「よくやったわ、石井さん！」

「石井、凄いじゃないか～」

「はい、モーターの通常回転と風力発電の相乗効果が思った以上に発揮できたようです」

俺がそう言うと

「ん?、モーター?。おい石井、そのストライカーは電気で動いているのか」

とバルクホルン大尉が僕にそう訊いてきた。すると中佐がこう答えた。

「そうよ、トゥルーデ。これは石井さんが在学中自ら開発したものなの」

「えっ!!!」

「そうよね?。石井さん」

「えぇ…正確には大学の同じ研究室の人達と作ったんですが…操縦者が俺しかいなかったんで」

中佐がそう言うとみんな驚いたみたいだった。ただでさえ電気式のストライカーなんてそうそうないし、ましてやそれを自分で開発したというのだから尚更だろう。

するとハルトマン中尉が

「でも何で空気の取り入れ穴が付いているのさ～。電気で動くんだったら関係ないじゃん」

と言ったので

「あぁ…えっと、この取り入れ穴の中に小型のプロペラが付いていてそれで発電することが可能なんです。これを応用すればさっきみたいにモーターの通常回転とこの風力発電で加速性能を向上させることも出来るんです」

と答えると

「ふーん。ウーシュにも見せてあげたいな」

とハルトマン中尉は言った。

「ウーシュ？」

と今度は僕が聞き返すと

「あぁ、私の双子の妹なんだけどね今はカールスラントの技術省にいるんだ」

「なるほど…」

「ここまで来るのにはどれだけ歳月がかかったんだ？」

バルクホルン大尉は訊いてきた。

「2年と6ヶ月くらいですかね。本当はもっとやりたかったんですけど、大学の勉強もあってあまり出来なかったんです。だからこれから徐々に改良していくつもりです」

俺がそう答えると

「それでは私とは馬が合いませんわね。私の固有魔法は電撃ですから」

「大丈夫だと思いますよ。このストライカー避雷針もついてますから」

とペリーヌさんに俺は言い返した。すると

「オー、ツンツンメガネが石井のストライカーに妬いてるナー」

「んもう、どうしてエイラさんはそういう風に言うんですか」

「フフーン」

とエイラさんにいじられたみたいだ。

気がつくと、もう日も傾いていた。今から帰れば基地に着く頃には夕方になっているんだろう。

「さぁ、帰りましょう」

中佐がそう言うと帰路に就いた。

基地に戻ると、夕食の準備に取りかかった。宮藤さんに言われたとおり調理して肉じゃがを作った。食事中にシャーリーさんが

「石井は左利きなんだろ、宮藤から聞いたぞ。なのに何で箸は右で持つんだ？」

「左でも持てるんですけど、扶桑にいたとき箸と鉛筆は右で持てと躾けられたので…」

「ふーん。厳しいんだな。あたしは食べられればいいんだけどね…。てことはお前両利きなのか」

「まぁそういうことになると思います。両利きというか使うものによって分けているって感じですかね。野球も左投げですし」

と話していると。

「私聞いたことあるんだけど、左利きって頭いいんだよね～、だぁから石井も頭いいのかな。」

「さぁ～どうなんでしょうかね。俺にもわかんないですよ」

ハルトマン中尉がそう訊いてきたので正直焦った。扶桑でもよく言われていたが、このことがまさかカールスラントでも知られていたとは…。そんなことを思っていたら

「それにしても石井は凄いナ。何でも作るんダナ」

とエイラさんが言った。

「何でそんなに優秀なのにウィッチなんかになったんダ?、もっといい仕事もたくさんあったダロ?」

「ええ、でもこの仕事がやりたくて就いたんです」

「そうナノカ。まあ頑張れヨ」

「ありがとうございます」

すると食堂のドアが開いた。やってきたのは中佐と少佐だった。そういえば昨日風呂ことは明日つまり今日まで結論を出しておくと言っていたな。

「はい、食事中悪いけどみんな聞いてくれるかしら?」

みんな食べながら中佐の方を向く。

「お風呂の件なんだけど、しばらく石井さんにはみんなのあとに入ってもらうわ。だから、最後になった人は呼びに行ってね」

「これは重要なことだからな。しっかり頼んだぞ」

少佐も念押しする。するとシャーリーさんは

「まぁ一緒に入ってもいんだけどな…」

俺は顔が赤くなってしまう。

「あはははは、石井～何想像してんだ？」

「シャーリーさん。もぅ勘弁してくださいよ～」

俺もいじられたようだ。冗談に聞こえないように言うからこっちまで顔が赤くなるんだけど…。それにあれだし。おかしいなぁ、扶桑にいたときはいじられることあんまり無かったんだけどなぁ…。

食事も終わり僕は部屋に戻ることにした…。

8話　board

食後、女性陣は全員風呂に行ったようだ。俺は自室で一人こもっていた。

”そういえば、今日素振りしなかったな”

そう思うと俺はふと考えた。俺が風呂に入っているときに入口にカードでも提げたら誰も来ないだろう。そうすれば、誤解を招くこともないだろうしと。俺は早速製作を開始した。この隊には合計で８つの国から来ている人たちで構成されている。

本来はブリタニア語だけで十分だがそれでは不平等だし謝った解釈が出てくる可能性もある。しょうがないから俺は８カ国語全てを書くこととした。

とは言っても、俺はブリタニア語しか知らないので他の言語は書庫から辞書を借りてきてそれを書くことにした。

”石井。入っています。”

３０分くらいで完成した。ベニヤ板にそれぞれの言葉をペンキで書いただけだったからそう時間はかからなかった。

「ふぅ、これで何とかなるだろう」

とまた俺は呟いた。そうすると。ノックの音が聞こえた。俺は急いで窓を開けた。俺は慣れているがこのシンナーのにおいは普通の人には悪影響だ。幸い外は風も吹いていた。

「どなたですか」

俺がドアを開けるとそこにはリーネさんがいた。

「あっ、あの、石井さん。お風呂が空きましたのでどうぞ入ってください」

「わかった。どうもありがとう。」

「そ、それじゃあ…あ、あの…私は、失礼します！」

リーネさんはどうも僕に警戒しているのだろうか。いつも怖がっているように見える。

”そんなに俺って威圧感有るのかなぁ？。まぁいいか。”

そう思いながら、僕は風呂に向かった。プラカードを持って…。

風呂に着くと入口にさっき作ったプラカードを置いた。こうしておけば誰も来ないだろう。仮に来ても風呂の中には入ってこないだろう。一応脱衣所を見ると誰の服もないのでほっとした。安心しながらすぐ風呂に入った。

昨日通りの筈だったこの時までは…。

・・・・その頃の中佐室・・・・・

「あぁ、今日は特に疲れたわ。こんなに書類を片付けたんだもの。

さぁ、早く風呂に入らないと…」

中佐は風呂に向かった。今日は特に疲れたらしく、中佐にしては風呂に入るんだそうだ。坂本少佐が言うにはあんまり風呂には入らないんだそうで、今日は珍しいようだ。

「あら？」

風呂の入口で中佐は何かを見つけた。

「あら。石井入ってます…。なんなのかしらこれは」

プラカード見て、中佐は浴場に向かって

「入っているの？。石井さん」

と言った。俺は驚いた、と言うか驚かないはずがないだろう。慌てて湯船に深くつかりながら

「ええ、入ってます。入口のプラカードが見えませんでしたか？」

と答えると

「あら、風呂を独占してもいいと思っているの？」

と言い返された。ルッキーニさんから聞いた話だと、こういうときの中佐は間違えるととんでもないことになるから気をつけろと言っていた。

”まずい…。この場を何とかしなきゃ。”

「いえ、その…。万が一女性が入ってしまうことを防ぐ目的で作らせていただいたんです。中佐に言わなかったのは申し訳ありませんでした。ただ忙しそうでしたので…」

と僕が言うと

「はぁ。全くしょうがないわね。今日のところは勘弁してあげるわ。でも、これからはこういうことはしないでちょうだいね。何かあったも必ず私に言ってからにしてね」

なるほど。うまくいったようだ。風呂の中で喜んでいると

「それで、これは没収します」

”……えっ？何かおかしくない…か？”

「ど、どうしてですか」

「隊の士気のためにも協力してね」

「えっ、でっでも…」

「あらあら、上官にはむかう気？。そんなことはしないわよね」

体中がゾクゾクする。しかも相当危険なオーラが外から自分を飲み込もうとしている。

”危ない、ここは何とかしないと”

「あのぅ…。中佐」

「何、石井明範准尉」

”うわ～、フルネームで呼ばれてる”

「もっ、もう上がりますのでちょっと外にいてもらってもよろしいでしょうか…」

「わかったわ」

”案外、さっぱりしているな。よかったよかった”

俺は急いで着替えて部屋に戻るため、風呂のドアを開けようとした…。すると突然自分でもわからないが、ドアから手を離した。

”自分の手が無意識に危険を察知している…。まさか。”

「ねぇ、いつまで中にいる気ぃ?。そろそろ出てこないのかしらぁ」

中佐の優しそうな声が聞こえる。同時に鳥肌も立つ。僕は覚悟を決めてドアを開けた。

開けると誰もいない。

「なんだ、気のせいだったのか…」

「何が気のせいなのかしら?」

中佐だ。そう俺がドアを出たとたんに俺の真後ろに回り込んだのだ。

もう逃げられない…。

「さて、どうしようかしら…」

中佐の優しい声がまた聞こえた。

「中佐…か、勘弁して下さい…」

「石井さん、上官にはむかったら何が待ってるか知ってる?」

「さ、さぁ…」

すると、中佐は俺の右肩に手を置いてそっと呟いた。

「お仕置きよ…」

俺は気がつかないうちに中佐に引っ張られて、中佐の執務室へと連行された…。

・・・・・・・・・

「はっ!!!」

目が覚めると外はもう日の出の時刻だった。

”そうか、あれは夢だったのか…”

起床ラッパが鳴り、俺は身支度をして廊下に出た。

「おはようございます。石井さん」

「ああ、おはよう。リーネさん。」

なんだか知らないが俺の顔を見ている。しかも何かを心配するような目で。

「あっ、あの石井さん。」

「ん?。何か?」

「その、大きなたんこぶは何なんですか。」

おっと、自分でも気がついていなかったようだ。俺が試しに自分の頭を触ってみると、確かに酷く腫れているのがわかった。

「おはよう、石井さん」

「おはようございます。中佐」

「あらあら、どうしたのそのたんこぶ。誰かに殴られたのかしら…?」

誰かって中佐にに決まってるじゃないですか。と言いたくなるところだったがそのあとが恐いのでやめておいた。

食後、僕は素振りに向かった。４０分ほど練習して、木陰で休憩していると

「あら石井さん。休憩中？」

中佐がそう声をかけてきた。

「え、えぇ…中佐」

「そうなの、そういえばそのたんこぶまだ治らないのね。」

「えっ、ええまぁ」

多分中佐が俺の頭を殴ったんだろう。執務室に連行された付近から記憶が曖昧になっている。そのあと俺はおそらくその場に気絶して、ベッドに運んでもらったんだ。よくもまぁ俺を持ち上げたな。そう思っている。俺は中佐に思いっきり肩をがしっとつかまれた。逃げられないくらいに。

「えっ、ちゅ、中佐？」

僕が慌てていると中佐は僕の耳元で

「いい？。今度はむかったらこんなんじゃ済まないからね」

と囁いた。

「はっ、はい」

俺はいても立ってもいられず、大声で返事をした。すると

「いい子ね。じゃあ頑張ってね」

そう言うと、中佐はどこかに行ってしまった。

俺は呟いた…。

「とんでもないとこに来ちゃったんだな…」と…。

9話　Meeting

それから二週間がたった。ようやく隊の人たちともなじめてきたようだ。まぁ訓練は大変だけどね。今はミーティングの真っ最中で、なにやら考えが中佐にはあるようだ。顔がそう言っている。

「ここのところ、夜間のネウロイの行動に気になるところがあるの。そこで、夜間哨戒のシフトを変更しようと思うの。サーニャさんの他に、エイラさん、宮藤さん、石井さんで組んで欲しいの。よろしいかしら」

実はミーナ中佐がそう言ったのには理由がある。

・・・

「えっ？」

「前に来て挨拶をしてもらえるかしら？」

「は、はぁ…」

一国の首相の前で完全に俺は緊張していた…訳がなかった。俺は嬉しくて嬉しくてしょうがなかった。ただでさえ、先月まで普通の大学生だった俺にとってこんな機会に恵まれるとは願っても見なかったことだったからだ。

「ほぉ。君がかね？」

「はい。私は大日本扶桑皇国海軍石井明範准尉です。４月よりこの部隊に加入いたしました。よろしくお願いします」

「ははは。期待しているよ、何よりもこの部隊では結果を求められるから、新人の君には最初は厳しいとは思うが、頑張ってくれ」

「はい！。ありがとうございます！」

何てことがあった後に帰りの飛行機の中で…坂本少佐はご立腹だった。

「全く！。何かと思えば、また予算の削減だとは」

「美緒、戦争屋なんてそんなものよ」

「確か、前もそんなこと言ってたな…。おっと、済まないな。石井、宮藤。折角だからロンドンでもあるこうかと思ったが」

‘Ｌａ　Ｌａ　Ｌａ…’

「いえ、いいんです坂本さん。私は満足ですから」

‘Ｌａ　Ｌａ　Ｌａ…’

「俺もですよ…ところでさっきから聞こえるこの声は？」

「あぁ、サーニャの歌声だ。いつも夜間哨戒を担ってくれているんだ。前はオストマルクの音楽学校に通っていてな、そのおかげであの美声というわけだ」

「なるほど…」

俺は窓の外にいるサーニャさんに敬礼をしたのだが…顔を赤くして雲の中に消えてしまった。

「サーニャちゃんは恥ずかしがり屋なんです。石井さん」

「そうなんだ…」

”うぅん、困ったわねぇ”

この時中佐は別のことを考えていたようだ。

・・・

ですけど…とか言って拒否出来たらいいんだけど、そんな事は無理なので仕方なく…いやいや快く了承した。とは言っても俺は夜には滅法弱い…。飛行中に居眠りでもしなければいいんだけど、でもまぁ将来運転士になりたいのだから終電の乗務と思えばいいだろう。俺はそう思った。すると

「石井さん。よろしくお願いします」

とサーニャさんに言われた。僕も言い返そうとしていたら

「ホラ石井。サーニャがこう言ってるんダゾ。お前も何か言エ！」

とエイラさんが怒ったように言ってくる。僕が思うにこの人ヘタレなんだろう。

「ええ。こちらこそよろしくお願いします。サーニャさん、エイラさん、宮藤さん。あっ、そうそう、俺に敬語はつけなくていいですよ」

「で、でも…石井さん年上だし…」

「階級は俺の方が下ですからね」

「そう…なの？」

「それでいいんです。皆さん、本当によろしくお願いします」

サーニャさんはおどおどしながらもちゃんと俺にものを言ってくれた。そういえば、サーニャさんは扶桑でも人気があったことを思い出した。

「よ、よろしくナ。」

と間髪を入れずにエイラさんが言い返したあとに

「石井さん。頑張りましょうね。肝油もありますから」

と宮藤さんも言い返した。すると中佐以外みんないやな顔をする。確かにあれはまずいなんてもんじゃないからな。俺も扶桑にいるとき教授のすすめで半強制的に飲まされた想い出があるので、若干ひいてしまう。

「ふぅ、それでは解散。みなさん、もう寝ましょう」

中佐がそう言うと俺も寝ることにした…。

朝になり、いつも通り食堂に向かうとブルーベリーがたくさん置かれていた。リーネさんの実家から送られてきたらしい。あんまり果物は食べない僕も結構食べた。ブルーベリーは目にいいらしい。

食事が終わると

「食べ終わったことだし寝ろ」

と少佐に言われた。まぁ夜間哨戒するんだったら当然だろう。だけど…

「あの、坂本少佐」

「ん?、石井どうしたんだ」

この人本当にこういうことに関しては鈍感だな～。と、この時俺は思った。

「俺はどこで寝ればいいんですか」

「あっ、それは考えていなかったなぁ…うぅん…」

女性と寝ることよりもエイラさんの強烈な視線の方が恐いから…。

「石井、お前自分の部屋で寝ロ」

「はっ？」

「当たり前ダロ。男と女が同じベッドで寝れるカ」

「そうですね。わかりました。それではあとで」

そう言って、部屋に戻ろうとすると

「ま、待って。ダ、ダメよ…石井さんも私たちの部屋で…」

サーニャさんが突然そう言った。

「私は、私は別に構わないわ。石井さんだけ一人なんて可哀想だもの…」

「エッ？、サーニャ？」

この状況で一番焦っているのはエイラさんだろう…。俺も着任早々

からエイラさんがサーニャさんに溺愛しているのには気づいていた。サーニャさんが俺に浸食されるのを一番恐れている、だからなるべく俺との関係を遠ざけたいのだろう。

ただサーニャさんはそういうわけでもなく誰とでも仲良くなりたいようだ。

”一緒に寝よう”

と笑顔で言っているのだから。変なことを想像しているのはエイラさんと後ろで何も言わない宮藤さんだろう。二人とも顔が真っ赤だ。

「ミッ、宮藤はどうなんダ？」

焦ってエイラさんは宮藤さんにも話を振ったようだ。

「えっ、わっ、私も構いませんけど」

宮藤さんは宮藤さんで変なことを考えているみたいだ。そんなつもり、俺には全くないのに。

「ムッ、ショウガネ～ナ～。サーニャもいいって言ってるシ、いいゾ」

とうとうエイラさんも折れたようだ。少佐はそれでいいならそれでいいと言ってどこかへ行ってしまっていた。

と言うわけで、俺は大体１５分後にはサーニャさんの部屋にいた。真っ暗だ。夜に出来るだけ近づけているのだろう。

寝ろと言われるとなかなか寝られないものである。まさにこの時はそうであった。というか今までまともに女性と同じ部屋で寝たことがない僕にとってこの環境は大変なものであった。

「石井さん。眠れないの？」

眠そうにサーニャさんが訊いてくる。心配かけたくもないので

「いぇ、大丈夫ですよ。もう寝ますから」

と答えておいた。と言っても同じベッドで寝てるわけではなく。僕だけ男性用としてベッドが置かれていた。

「サーニャに心配してもらえるナンテ、感謝しろヨナ」

俺が答えた矢先にそう言ってくるのはエイラさん。わかってるよあんたのものなんだものな、サーニャさんは…それを無理矢理取るほど俺も悪いやつじゃないし…。なんてこと思っていると

「石井さん」

と宮藤さんが訊いてきた。てかみんなまだ誰も寝てないじゃないか。まぁそんなことはほっといて

「どうかした？。宮藤さん」

と聞き返した。すると

「石井さんはなんのためにウィッチになったんですか。そしてウィ

ッチを辞めたら何をするんですか？」

と訊かれた。どうしよう、そんな重たいこと突然訊かれてもなんて答えればいいのかなぁ。それじゃあちゃんと答えるか

「そうだな～。俺は国と技術のためにウィッチになったって言えばいいのかな」

「それはどういう意味ですか？」

「まぁ、国のためってのは…俺はこの部隊に”扶桑代表”として…いや”帝大代表”きていると思っているから、その名前に恥じないようにってことかな」

「じゃあ技術のためって言うのは？」

「それは、将来の自分の夢にも関係しているんだけど。これからの時代は俺は電気機器が主流となっていくと思うんだ。燃料には限りがある。だから電気式ストライカーを開発しようと思ったわけだしね」

と宮藤さんと会話を続けていたら

「じゃア、お前の将来の夢って何なんダ？」

とエイラさんは俺に訊いてきた。

「エイラ、私も気になるわ石井さん教えて」

「ホラ、サーニャもこう言ってるんだからちゃんと教えてくレ！」

眠そうで寝ていないサーニャさんも訊いてくる。宮藤さんも当然言ってくれるという目をしているし、エイラさんもそうだった。

「俺、将来運転士になりたいんです、鉄道の。だから電気式ストライカーも開発したんですよ」

と言うと

「えっ?、意外です」

「ダナ。なぁサーニャ」

「うん。とっても意外」

みんな口々にそう言う。何でだろう、やっぱり自分が飛び級で卒業したからかな…。そう思っていると

「だケド、石井は大卒なんだロ?。もっといい仕事に就けるんじゃないカ?」

とエイラさんが訊いてきた

「確かにそうかもしれません。でも好きなことを仕事で出来るって言うのは一番幸せなことだと自分では思っているので」

と言うと

「そうなのカ。お前も意外と普通の人間なんダナ」

「何で普通じゃないと？」

「だってテ、大学飛び級とか普通じゃ考えられないダロ」

と言うと

「そうですよ石井さん。私なんかまだ信じられないんですよ。ほんの少し年上の人が大卒だなんて」

「私も信じられない」

と宮藤さんもサーニャさんも言う。

「それもそうですね。俺も東京にいたときは変人と見られていましたから」

と言うと、みんな笑っていた。まぁ自分でもそう思っているのだからいいのだけど…。

それで会話を終え俺は眠ることにした…。

10話　Steam

目が覚めるとすっかり夕方だった。みんなまだ寝ている。やはり、昼寝に慣れていない俺はなかなか寝付けなかったようだ。俺が起きようとすると、みんな起きたようだ。何か俺のせい？。

「オハヨウ、石井」

「あぁ、おはようございます。エイラさん」

この場合おはようという言葉が果たして適切なのだろうかと考えていると。

「石井さん…おはよう…ふわぁ」

「あぁ、おはようございます。サーニャさん」

そして

「石井さん。おはようございます」

「おはよう、宮藤さん」

と続けざまに挨拶をした。

すると、

「ねぇエイラさん、サーニャちゃん。サウナ行こう。汗でベタベタ」

と宮藤さんが言った。この基地には北欧出身者のためにサウナもあるのか…。

「ソウダナ、行くカ。なぁサーニャ」

どうもサーニャさんだけその気じゃないようだ。どうも眠いというわけだからではないようだ。

「どうシタ？サーニャ？」

「そうです。サーニャさんどうかしたんですか」

とエイラさんも宮藤さんも心配している。すると

「石井さんは？」

とサーニャさんは言った。まさか僕のことを…そこで

「あぁ、待っているんでいいですよ。先に行ってきてください。一緒に入るわけにはいきませんから」

当たり前のことだがこうでも言わないと、サーニャさんはなんて言うかわからない。

「そんなのダメ」

「はっ！？」

何言っているんだこの人は…慌ててエイラさんの方を向いて救援を頼む。どうもエイラさんもそうして欲しかったらしい。

「サッ、サーニャ。どういうことダ?、何で石井が待っているのがダメなんダ?」

エイラさんはそう訊いた。すると

「だってエイラ。石井さんが可哀想じゃない。一人でこんな真っ暗な中で待っているなんて…」

なんだか僕のことをとても心配してくれているようだ。だけど、そんなに僕もアホではない。

「だっ、大丈夫ですよ。ささ行ってきてください。エイラさん、宮藤さん頼みましたよ。まぁ階級的にはそんなこと言える立場じゃありませんが」

流石にこう言えばもう大丈夫だろう。サーニャさん以外の全ての人がほっとした。するとどうもたかをくくっていたようだ

「じゃあ、命令よ。来て」

とサーニャさんに言い返された。

「エッ!!!!」

みんなビックリする。当たり前だろう。

「命令には逆らえない…。エイラ」

「ハ、ハイ!!」

「水着…」

「エッ？」

「こうすれば、みんなでは入れるわ」

満面の笑顔でそう訊かれたエイラさんは、どうも返答に困っていたようだが

「そ、そうナンダナ。というわけで石井、お前も来イ」

「はぁ…」

とは言っても本当に行くべきなのだろうか。俺は悩んだが…命令と言うこともあるし…う～ん、まぁいいかな？。そんな気持ちでとりあえず俺もサウナに向かった。

サウナは初めての経験だったが、蒸し暑かった。これに耐えることが出来れば、東京の夏も楽に過ごせるのだろうが…近くに女性がいると考えるとあんまり落ち着いていられない。しかも俺以外の人は入り慣れているみたいで、のんびりしているようだ。

「石井さん…」

「はい！？」

「大丈夫？。さっきから落ち着かないみたいだけど」

「えぇ…まぁ…なんとか」

何気なく話してくれるのはいいのだが、俺にとっては緊張の連続だ。その後水風呂に入ってようやく落ち着きを取り戻すことが出来た。

俺が先に部屋に戻り数分がすると、みんなも戻ってきた。ちょうど食事の時間だったので、すぐに食堂に向かった。

宮藤さんとリーネさんの会話を聞いたところ今日は、夜間戦闘員のために部屋を暗くしているようだ。

マリーゴールドのハーブティーをペリーヌさんが注いでくれたが、何とも言えない味だった…。もうちょっと砂糖でも入れればいいのに。

夜になり、いよいよ哨戒のためにハンガーに向かった。俺のストライカーはどうやら好調のようだ。この間整備で注油した甲斐があったようだ。

僕等は離陸した。俺のストライカーがやはり一番早く離陸できた、ただみんなに追いつくのは大変だった。

今日はネウロイも休みらしい。僕等はのんびり哨戒を行っていた。すると

「石井さん」

とサーニャさんが話しかけてきた。昼とは打って変わって活発なよ

うだ。

「はいサーニャさん。どうかしたんですか」

「石井さんは大学でなんのお勉強をしていたの？」

「えぇと、正確には電気工学と無線工学でしたけど。それが」

「耳を澄まして」

と言われたので、そうすることにした。なぜか隣でエイラさんが妬いているようだ。すると、遠くからラジオの音が聞こえてきた。

「なるほど、魔導針をラジオ代わりにしているんですね」

「さすがね、よくわかっているのね。ここだと、夜は空気が澄んで遠くの音も拾うことが出来るの」

「へぇ…」

そう話していると

「石井！！！」

「なんです。エイラさん。あぁ、わかりましたエイラさん。宮藤さん」

空気を読んで分担して哨戒に当たることにした。分担と言っても２人ペアで行動するだけで離れたりはしなかった。エイラさんとサーニャさんを組ませるため俺は宮藤さんを呼んだ。

「はい。分担ですね、石井さん」

「よくわかっているんだね、と言うわけでまたあとで」

と言うと

「はい。芳佳ちゃんも気をつけてね」

「気をつけるんダゾ」

「ありがとう、エイラさん、サーニャちゃん」

と言い残し北欧の二人と距離を置いた。

それからしばらく俺は宮藤さんと会話を続けながら哨戒を行った。

家族のこと、学校のこと、友人のこと、そして将来のこと…。

「石井さんはここでの戦いが終わったらどうするんですか？」

「多分大学院に行くと思うよ。すぐ卒業できるだろうし」

「えっ、また飛び級ですか？」

「多分ね。得意分野だから」

俺と宮藤さんは笑った。

「そうですか…本当に凄いんですね。石井さんって」

「宮藤さんも大学に行ったら。医者になりたいんだろう？」

「そうですね、おばあちゃんの診療所も継ぎたいですし」

「頑張ってね。勉強は若いうちじゃないと出来ないから…」

「はい！、ありがとうございます」

と会話を続けていると、突然遠くの方で爆発音が聞こえた。

「おや…？。エイラさん、サーニャさん聞こえましたか？。今の音」

「アァ…」

「大きな音だったわ」

「なっ、なんですか。ネウロイ？」

宮藤さんは慌てた様子で無線（インカム）で話しかける。

「イヤ違うナ」

「うん、私のレーダーも反応していない…」

俺は今の音で何が起こったのかだいたい察知することが出来た。あとはそれの証明だけだ。俺は基地の少佐に連絡した。

「少佐！！！」

「なんだ、石井」

「このあたりに鉄道はありませんか？」

「ちょうどお前達の真下にあるがどうかしたのか。ひょっとしてさっきの爆発音と関係があるのか？」

基地のみんなも起きているようである。救援以来のため、僕は意を決して言った。

「はい。おそらくこの下のどこかで蒸気機関車のボイラーが爆発したんじゃないかなと思いまして。至急救助の応援を」

「わかった。今から私たちも行くから待っていろ」

「「「「了解！」」」」

すると、少し離れたところから忽ち（たちま）白煙が登ってきた。どうやら本当に爆発しているようだぞ…。

11話　復旧

しばらくすると、更に無線が坂本少佐から入った。どうやら、まだ時間が少しかかるから先に向かっていて欲しいとのことだそうだ。

「石井、何とかならないか？」

「わかりました。とりあえず、俺達四人で先に向かいます」

「頼んだぞ」

「急ぎましょう！。事は一刻を争います！」

俺はみんなを先導して現場に向かった。

近づいてみると大変なことになっていた。まずボイラーが爆発した機関車は大破。当然のことながら運行は不能な状態であった。どうも普通列車のようで、客車だけで5両の短い列車であった。しかも、幸運なことに機関手・機関助手ともに軽傷で乗客は全員無事であった。それにこの脱線した区間が単線であったことが何よりの救いだった。単線だと、運転の方式なんかもかなり限られてくるからだ。

「どうすればいいんだダ？。私たちハ」

そうだった、ここにいるのは僕とエイラさん、サーニャさん、宮藤さんのあわせて四名であとから救援が来てくれることになっていたんだ。

「石井さん。どうすればいいですか？」

「石井さん」

俺以外の全員は俺に指示を仰いでいた。鉄道には詳しいから当然と言えば当然のことなんだろうけどな…。

「列車の乗員、乗客は全員無事であることが確認できましたので僕達は二次災害を防ぐことが重要です。僕が機関主にこの区間の運転方式について聞いてくるので少々待っていてください…いや、宮藤さん」

「はい？」

「お前さん、軽い怪我の人の手当とかは出来るか？」

「はい、魔法力はまだ十分にありますから」

「それなら、お願いしてもいいかな？」

「了解！！」

「サーニャさんとエイラさんもそれに協力して下さい」

「「了解！！」」

焦りながらもこう言い、急いで機関手のところに行った。

「機関士さん。５０１統合戦闘航空団のウィッチです。救援に来ました」

「そうか…。助けが来たのか…。ありがとう」

非常に喜んでいてくれていたようだったがそんなことに今は構っている暇はない。

「この区間の運転方式について教えてください」

と続けざまに僕は訊いた。

「この区間は通票閉塞方式です。」

機関手が言ったことで僕は安心できた。

「わかりました。後は俺達に任せていてください。あとダイヤグラムを借りていきます。」

「…わかりました。よろしくお願いします。ただ、この列車は次の駅で急行列車と交換することになっています」

俺は、心臓が一瞬止まりかけた。何だかとんでもないことが迫ってきているようだ。このまま行ったらおそらく急行列車のスピードからして、脱線している車両を機関士が発見してブレーキをかけたのでは遅すぎるだろう。

「りょ、了解しました。それでは、機関士さんも機関助士さんも急いで待避を」

と機関手は言いほっとしたようだった。きっとウィッチだったら大丈夫とでも思っているんだろう。そんなことは全然無いのに。

機関手から聞いた話だとこの区間は通常は通票閉塞方式というものを使っており、これは今脱線しているところから両方の駅の間は単線でこの区間には列車が1列車しか入れない。そうしないと身動きがとれなくなってしまうからだ。これを防ぐために通票（タブレット）と呼ばれる、円盤の金属を使用して両駅間に一本しか列車が走れないようにする方式のことで扶桑でもよく使われている方式である。

まぁ早い話がこの区間を走るには通票という切符が必要で、通票を使用する区間にはそれが一つしかないから必然的に片方の駅で列車を待つ必要があるので安全が保てるというものであった。

機関士は通票をしっかりと持っていた。だから他の列車は走れないのがわかっているので、この時は両隣の駅にこのことを伝えられればそれでいいのだと思っていた。

俺はみんなの前に戻り

「とりあえず。負傷者の治療は俺と宮藤さんで続けて、でエイラさんとサーニャさんは進行方向と逆側の駅に向かってこの事故のことを報告してください」

「了解！！！」

その後、俺は少佐と

「坂本少佐。中佐と相談した上、進行方向側の駅に向かう人を2人に決めてください。その後大至急向かってください」

「了解した。シャーリーとルッキーニを向かわせる」

「わかりました。お願いします」

このような連絡を交わしたあと、急いで僕はダイヤグラムを開いてみた。すると大変なことに気がついた。この後の列車に急行列車があるのだ、それもこの列車のすぐあとに。おそらくこの先の駅で追い越すのであろう、まともに機関手が緊急停止させるにしても１００キロ以上の高速運転をしている機関車を止めるのには数百メートルの距離が必要である。だから

「シャーリーさん!!、ルッキーニさん!!この先の急行列車が今、事故現場に向かって高速で進行しています。直ちにその列車を停止させてください!!」

と言った。すると

「わかった。すぐに止める。行くぞルッキーニ!!!」

「あいよ~シャーリー」

良かった、このことが伝えられて。と同時にエイラさんとサーニャさんが隣の駅に到着し安全の確認が取れたことが報告されて更にほっとした。

「石井」

「エイラさん、どうですか?」

「今駅に着いたゾ。中に駅員がいて、その人に事故の報告を済ませたゾ」

「ありがとうございます。それでは、お二人ともこちらまで」

「ワカッタ」

”よし。ここまで来たんだ、この事故で死者は絶対に出さない。”

俺はそう心に誓って救援活動に入った。まず機関車と客車の切り離し作業にかかった。ブリタニアの鉄道は基本的に連結器がネジ式でネジをひねれば、脱線しているのですぐに機関車と客車が切り離された。その後各車両を回り手動ブレーキと呼ばれるブレーキを各車両目一杯効かせた。車で言うところのサイドブレーキを目一杯効かせたことと同じになる。

そうこうしているうちに中佐達が来た。また、それと同時にルッキーニさんとシャーリーさんから急行列車の停止と駅での安全の確認が取れたとの報告が入った。

「お～い、石井」

「はい？」

「あたしあたし、ルッキーニだよぉ。今急行列車も緊急停止したよぉ」

「そうですか…よかったよかった」

「こっちは、シャーリーだ。さてと石井、戻った方がいいか？」

「それじゃあ、お願いします」

そう会話を済ませると、中佐達は早速復旧作業に取りかかろうとした。まず機関車をどける必要がある。この機関車は重さが７６．２トンもありバルクホルン大尉でも一苦労しながら、何とかどかすことが出来た。

「中佐、後は俺に任せてください」

「わかったわ。私たちはどうすればいいかしら」

「半分に分かれて前方と後方で安全の確保をお願いします。それと宮藤さん」

負傷者の治療が終わりほっとしていた宮藤さんを僕は呼んだ。

「どうしたんですか。石井さん」

「少佐と僕と宮藤さんで機関車を取りに行きましょう」

「えっ！！！！」

みんなびっくりしたようだ。

「どうするつもりなんだ石井」

「そうだよ～、運転でもするのかぁ？」

「全く、あなたと来たらこんな時に素っ頓狂なこと言うのですわね」

みんな口々に批判するので

「そのとおりです。機関車を運転して隣の駅までこの列車を牽引するのです。機関手も機関助手も車掌も乗客の安全確保のため動けないですし」

と僕が言うと

「あなた、機関車も運転できるの？」

と中佐に訊かれ

「車庫で運転させて貰ったことはありますよ」

俺はそう答えた。

「わかったわ。でもくれぐれも無理はしないで」

そう言われ俺達はすぐにシャーリーさんとルッキーニさんが止めてくれていた急行列車の機関車を借りて、事故現場へ向かうことにした。

「石井。私と宮藤はどうすればいいんだ？」

と運転室で訊かれたので

「二人でこの火の中に石炭を投炭してください。運転は俺がしますから」

「わかった」

「わかりました」

二人は口々に了解してくれた。

「出発進行！。制限３５！」

僕はそう言い機関車を発進させた。ブリタニアの機関車は性能がいい、扶桑のよりも遙かに加速力がいいのだ。だが今回は飛ばすわけにはいかないのでゆっくり確実に現場に向かった。

「後方ヨシ！、左方確認異常ナシ！」

点呼をしながらしばらく運転すると、とうとう脱線事故の現場に着いた。俺は速度を落とし列車との連結を終えた。

見てみると、サーニャさん、エイラさん、ルッキーニさん、シャーリーさん達もここに戻り集合していた。

だが、俺はこの列車を隣の駅まで輸送する必要がある。

「それでは、もう一度折り返しましょうか。さっきの駅まで」

と言って逆転機（機関車の進行方向を変える）を使ってバックさせようとすると

「ちょっと待って石井さん。もう私へとへと」

と宮藤さんが今にも倒れそうな疲れ切った声で俺にそう言った。

「わっ、わかった。少佐は大丈夫ですか」

「あぁ、まぁな」

少佐も口では大丈夫と言っているがかなり疲れているようだ。確かにこの投炭作業はとっても労力を必要とするのだ。幾ら軍事で鍛えているとは言ってもそこはさすがに女性なのである。かといって俺が運転席を離れるわけにはいかない。隊の人に交代してもらうことにした。

「中佐。少佐も宮藤さんも疲労がたまっているようです。交代要員が必要です。ただ、この作業は大変重労働です」

と言うとみんな黙ってしまった。誰もこんな仕事やりたくないだろう。すると

「あっ、あの。私がやります」

と小声ながらもサーニャさんがそう言った。俺は驚いたと同時に慌てて

「構いませんが大丈夫ですか。失礼ですがこの作業は大変重労働なんですよ。やるなとは立場上言えませんが…」

と念押しすると

「大丈夫。私なら、きっと出来るわ」

と僕はそれ以上言葉が出てこなかった。

「そうですか…。わかりました」

「待テ！！、サーニャがやるんだったら私もヤル」

エイラさんも予想通りそう言った。二人なら何とかなりそうだ。

「わかりました。すぐに乗ってください」

俺は二人にここに石炭を投炭しろと説明したあと逆転機を使い後退運転を開始した。

「後部ヨシ！、客車ヨシ！、発車！」

俺は勢いよく汽笛を鳴らしたあとゆっくり来た道を戻り駅に向かった。

駅に着くとたくさんの人が俺達に感謝していた、勿論乗務員も…。もう夜が明けようとしていた。俺達は急いで他のメンバーと合流し基地に戻った。

「今回は石井さんのおかげで助かったわ。これからもよろしくね。」

基地に到着して大幅に遅れた全員でのミーティング。開口一番中佐が俺にそう言った。他の隊のメンバーもそう言っている。

「ありがとうございます。でも皆さんがいてくれたので今回はこんなにうまくいったんだなと思います。こちらこそこれからもよろしくお願いします」

と言い返すと

「さて早速なんだけど…、もうしばらく石井さんには夜間哨戒をお願いしたいの。今回の一件もあったし」

みんなも俺も納得し。それでもサーニャさんやエイラさんはとても眠そうな顔をしながらも喜んでいたようだ。

俺も部屋に戻りみんなで休むことにした。今夜に備えて。

寝る前に

「石井アリガトナ。サーニャもホラ」

今日は珍しく、エイラさんから先ににそう言われて

「石井さん。本当にありがとう。とても疲れたけどいい経験になったわ」

とあとからサーニャさんにもそう言われた。宮藤さんはと言うとよほど疲れたのだろう、もうぐっすり眠ってしまっている。

「二人のおかげですよ。折り返しの駅まで頑張っていただいたのですから。これからもよろしくお願いします」

そう僕が言うと二人とも笑顔でうんと言ってくれた。とうとう俺も眠りに就いた…。

12話　Ｂｉｒｔｈｄａｙ－１

夜間哨戒にも慣れてきたこのごろ。昨日ネウロイと格闘したこともあり今日は全員非番になった。だから俺も外出届を出して、出かけることにした。そう言えば今日って…あ、いやまだもう少し先立ったっけなぁ？。何て思っていると…ドアがノックされた。

「はぁい、どうぞ」

「失礼します。あれ？」

「どうかしたの宮藤さん？」

「石井さん。出かけるんですか？」

俺の部屋の前に宮藤さんがリーネさんを連れてやってきた。気づいたらエイラさんとサーニャさんも一緒であった。

「えっ、うんまぁ出かけようかなって思ってさ。今日は休暇取ったし、ロンドンは行ってみたかったから」

と言い返すと

「ジャ、ジャアみんなで行かないカ？」

とエイラさんが更に言い返しみんなもそれに従っているような目をしている。どうやら一緒に行動した方が良さそうだ、ブリタニア育ちのリーネさんもいるし。

「わかりました。一緒に行きましょう」

俺は急いで学帽を被った。これがあればどう見ても学生である、扶桑であれば。

部屋を出るとみんな外で待っていた。すると

「うわぁ、学帽久しぶりに見ましたよ」

と宮藤さんが言った。そうか、こっちでは学帽に詰め襟の学生なんていないものな、俺はそう思っているとリーネさんが

「石井さん。ロンドンまではどうしますか」

と訊いてきた。いまいち僕は質問の意味がよくわからなかったので

「どうするって？」

と聞き返したすると

「ここからロンドンには列車かバスがあるんです。どちらにしますか」

なるほどそういうことか、なんだか俺に選ばせてくれているみたいだったので迷わず

「列車がいいかな」

と言った。するとサーニャさんとエイラさんが

「ふふ。石井さんはやっぱり汽車が好きなのね」

「この間運転もしたもんナ」

と口々に笑いながら言った。

「やめてくださいよ～二人とも～、恥ずかしいじゃありませんか」

とみんなで笑っていると。

「そろそろ駅に向かいましょうか」

とリーネさんに言われたので駅に向かうことにした…。

・・・

ーネさん達はわざと俺をロンドンに連れ出したというわけなようだ。

・・・

「えっ、いいよ。みんなで決めてくれ」

と言うと

「いいんですよ。石井さんの意見で」

と宮藤さんが言ったので

「じゃあ三等でいいかな。安いし」

というとみんな浮かない顔をしている。すると

「石井さん。お給料もらっているんだから、もう少し贅沢してもいいのよ」

とサーニャさんが言ってきた。あまりにも意外だったサーニャさんの口から贅沢だなんて…。まぁ確かに２０ポンドもらっていて三等車の代金の１シリング（１ポンドは２０シリング）で行くのはあまりにもケチすぎるのかもな。

「オイ石井。サーニャもこう言ってるんダ。何とかシロ」

エイラさんにもそう言われた。僕は確か2等は3等の2倍だったことを思い出し2等にすることにした。たかだか１００キロくらい往復するのに1等は贅沢すぎるしな…。

「じゃあ、二等で行きますか」

と僕が言うと

「うん！」

とみんなが言った。とりあえずこれでいいようだ。

切符を買いホームで数分待っているとすぐに列車はやってきた。案の定二等車は空いていた。俺達は空いてる座席に腰掛けた。ベルが鳴り列車は発車した。列車はのどかな田園地帯を駆け抜ける、東京にいたときとは全然違っていた。しばらくすると

「石井さん」

とリーネさんに呼びかけられた。

「どうしたんですか、リーネさん」

と聞き返すと

「ブリタニアの列車の乗り心地はどうですか」

と訊かれたので

「そうですね、最初にこの基地に来たときも列車で来たんですが。やっぱり二等はいいですね。三等は混んでいたし乗り心地も悪かったので。勿論扶桑のラッシュよりはマシですけど」

と答えると

「ねぇ、ラッシュって何？」

とサーニャさんに訊かれた。エイラさんもそれは何だという目をしていので

「ラッシュって言うのは朝の通勤・通学の時間に列車が混むことを言うんです。俺も毎朝そう言う目に遭っていましたから」

と答えた。するとサーニャさんは更に

「混んでいるってどれくらい?。」

と訊いてきた。

「俺、例えるならどれくらいダ?」

とエイラさんも訊いてきた。宮藤さんもリーネさんも興味津々のようだ。

「そうですね、定員が１２４人の車両に２２０人くらいの乗客が乗っているくらいですかね。」

と僕がさらっと言うとみんなびっくりしたようだ。宮藤さんも

「東京のラッシュってそんなに酷いんですか?」

と訊いてきた。

「えぇ、大学の時は通勤の通の字は”通う”の通ではない、”苦痛”の痛だ。なんて言っていましたから」

と言うとみんな笑っていた。

「ぷっ、石井さん…おかしい」

とサーニャさんも

「お前おもしろいナ」

とエイラさんも

「おもしろい話ですね。石井さん」

とリーネさんも

「意外とおもしろいんですね、石井さんって」

とあろう事か宮藤さんまで笑っていた。

「本当なんですって…まぁ来れば分かると思うんですけどねぇ…」

そうこうするうちにロンドンに着いた。さすがにブリタニアの首都である。まさに”ヨーロッパの東京”だ。あくまで東京視点で僕は貫く。

「着いたけど、これからどうするんだい？」

と僕はみんなに訊いてみる。すると

「石井は行きたいところとか無いのカ？」

とエイラさんに言われた。

「えぇまぁみなさんにお任せと言うことで…。僕はここを観光するの初めてなので」

と僕が言うとリーネさんが案内してくれることになった、でもなんでだろう今日はみんなとても僕に親切なのは…と、この時俺は思った…。

13話　Birthday－2

まず僕等は国会議事堂に向かった。ブリタニアの議会は上院と下院から構成されているのは知っていた。と

「リーネちゃん。あの赤い線は何？」

と宮藤さんに訊かれて返答に困るリーネさん。そこで

「えっとね、あれは剣線（ソードライン）って言うんだ」

「ソードライン？」

「えっと…」

まぁ宮藤さんが知らないのも無理はないだろう。日本の場合は帝国議会があって貴族院と衆議院が仲良く（とまぁそれは言い過ぎかな？）政治を行っているから剣を使うことなんて無いものな。

「つまりさ、昔のブリタニアの議員は庶民院、貴族院…まぁ下院と上院だけどね。昔、まだ剣を身につけていた時代に無用な争いを防ぐために考案されたのがこの剣線なんだ。今でも、答弁中にこの線を踏むと反則って言われたりするんだ。宮藤さん」

「へぇ～、じゃあ。これは昔の人の知恵ってことなんですね」

「そういうことさ」

宮藤さんだけに限らずみんな驚いていた。

「石井さんって、ブリタニアのことも知ってるんですね。驚いちゃいました」

「偶々こっちに来る前扶桑でブリタニアについての本を読んでいたらこれが載ってたんだ」

「偉いナ。ちゃんと予習してきたって事カ？」

「えぇ。気候とか文化とか、名所とか調べてる間に…」

「くすっ…なんだか石井さんらしいわ」

「そう…ですか？」

「えぇ、とってもよ」

サーニャさんもご機嫌だった。面と向かって言うわけにはいかないが、この人が我が帝大野球部でも人気だったのはこういったところなのかもしれない。

さて、再び外に出てみると二階建てのバスが走っていた。写真では見ていたがロンドンには二階建てのバスが走っているのである。僕はちょっと乗ってみたいな～、なんて眼差しでバスを見ていると

「石井さん。バスで行きますか？。次の場所はちょっと距離があるので…」

とリーネさんに言われ僕がバスに乗ってみたかったこともありそうすることにした。

「いいの？」

「いいんですよ。今日は石井さんの観光をお手伝いするのが私の役目ですから」

「何だか、悪いなぁ…」

「いいんです、いいんです。気にしないで下さい」

「そう…なら…バスで行くか？。あっ、でも他の人は？」

「石井さん。私もリーネちゃんと同じですよ」

「今日は石井さんが主役」

「そうなんダナ…」

「そうですか…どうもありがとうございます…」

バスに乗ってみると確かに景色はいい。ただ町の至る所がネウロイに攻撃されていて少し残念でもあった。そうこうするうちにバスは目的地に着いたようだ…。

あれから随分いろいろなところを見て回った。一番印象的だったのはバッキンガム宮殿の衛兵の交代式であった。帰りは僕の要望で地下鉄でロンドンのセント・パンクラス駅の前まで戻ってきた、外に出てみるともう夕方であった。

「さてと、帰りましょうか？」

「そうしようか。いやぁ楽しかったよ。どうもありがとうリーネさん」

「いえいえ…そんなことは…」

聞いた話だと、リーネさんは今までずっと女子校にいたんだそうで男性と会話をしたりするのが苦手なんだそうだが、今日見たところではそういったところはなかったように見えた。気のせいなのだろうか?。

「石井さん、帰りはどうするの?」

サーニャさんが困ったような顔をして訊いてきた。多分俺がまた三等で帰るって言うと思っているようだ。本当はそうしたいんだけれども…サーニャさんの困った眼差しと、その後ろから睨みつけるエイラさんの顔を見たらそんな事言えるわけがなかった。

「そうですね…二等にしましょうか?」

「やった!。石井さん、どうもありがとう」

「いえいえ…」

”ふぅ…もし三等だなんて言ってたら、エイラさんに絞められてるだろうな”

それから列車に降りて、基地に到着したわけだがどうも様子がおかしい。俺が部屋に戻って服を着替えると外の廊下には誰もいなかったし、宮藤さんの部屋も中から物音一つしない。というよりは他

の部屋に人の気配すら存在しないのだ。

”おかしいなぁ…ん?”

ドアの前に小さな置き手紙が落ちているのに俺は気がついた。中には宮藤さんが書いたであろう扶桑語で、

‘石井さん、着替えが済みましたらどうぞ食堂へいらして下さい’

と書かれていた。とりあえず言われたとおりにしてみることにしよう。

”でも、なんで…ここに?。あれ?!”

中は驚いたことに本当に真っ暗になっていて何も見えない。すると中から

「石井さん、今日は6月6日よ…?」

とサーニャさんが呟くようにそう俺に訊いてきた。

「あれ?。それじゃあ今日は俺の…誕生日か」

そう俺が言った途端に

そう今日6月6日は僕の誕生日だったのだ。すると

「ふふ、気づくのが遅いですよ聳井さん」

とリーネさんに言われた。突然クラッカーがパンパンと大きな音を

立てて炸裂した。そして、部屋の灯りが点いた。見ると大きなケーキが置かれている。

「石井さん、お誕生日おめでとう！！！！！」

「さぁ早くいらっしゃい！」

「は、はい！！」

と同時にみんなが俺にそう言ってくれた。急いで俺はケーキのろうそくの火を消した、すると待っていたのはみんなからの拍手喝采だった…。

宴会が始まると

「石井、おめでとう。今日でお前も１８か、気持ちを新たに頑張れよ」

と少佐が言ってきた。みんな飲んでいるようで少佐も顔が赤い。

「はい。ありがとうございます」

と俺は答えておいた。すると突然後ろから、シャーリーさんがジョッキを持って

「石井も飲んでみろよ～、うまいぞ」

とリベリオンビールを勧めてきた。酔っていたし断ろうに断れなかったので、飲んだ。濁醪（どぶろく）とは違って、意外とこれがうまいものですぐにジョッキ一杯空けた。言い忘れていたけど、俺が帝大の仲間と

送別会をしたときは…というよりは学校に関するときは飲まなかったと言うだけだ。すると

「なかなかいける口だな、ほらもう一杯」

と言いながらドンとジョッキをもう一つ置いた。さすがにまたすぐに飲むわけにはいかなかったので、ゆっくり飲むようにした。気がつくとシャーリーさんは向こうの方へ言ってしまっていた。

「あらあら石井さん、未成年なのに飲んでいるわね。それもいい具合に…ヒック」

中佐も酔いながらそう言っている。見ると中佐の席のところにはワインの空き瓶が2本ほど有った。

「そう言う中佐こそ、飲んでいるではありませんか」

と俺が言い返す、と同時にしまったとも思った。

「あらあら上官に口答えなんていい度胸ね。まぁいいわ、お誕生日おめでとうね。これからもよろしくぅ…」

「はい。これからもよろしくお願いします」

「ハイ!、いいお返事」

何かいやな予感がしないわけでもないが、とりあえず許してくれたと思った、この時は…。

「石井さん。お誕生日おめでとうございますわ」

「ありがとう。クロステルマン少尉」

「これからも頑張ってくださいね…」

「えぇ、ありが…うわっ」

後ろから突然ハルトマン中尉がのしかかってきた。

「何するんですか中尉」

「私には中尉はなんてつけなくていいよ～。堅苦しいじゃん」

「いやそう言うことじゃなくて…」

ペリーヌさんは唖然とした様子で自分の席に戻っていってしまった。

と、すると

「そんなことより石井。今度ウーシュにあってくれない？。石井の話をしたら会いたい会いたいってうるさいんだよ～」

「…。わかりました、いいですよ」

「う～ん、ありがとう。さすが石井だね～」

酔っ払っているみたいで偉く上機嫌だ。バルクホルン大尉はどうやら飲まされたらしく席で寝てしまっている。そう言うとハルトマンさんも向こうの方へ行ってしまった。

「リーネさん、宮藤さん、サーニャさん、エイラさん」

と僕は今日誘ってくれた４人を呼んだ。

「今日はありがとう。前々から企画してくれてたんだね…」

と俺が言うと

「いいんですよ、みんなこうやって誕生日の時は祝っているんですから…」

とリーネさんが答えてくれた。

「石井さん。おめでとう」

「石井。おめでとうなんダナ。これからもサーニャと私たちのことよろしくナ」

「石井さん、おめでとうございます」

と口々にみんなが言ってくれている。

”みんな、本当にありがとう…。”

俺は心の中でそう言った。しばらくするとこの宴もお開きとなった。大部分の人が結構多めに飲んでいたようだ。俺も例外ではなかった。

次の日みんな飲み過ぎたようで再び全員非番になった。俺も若干だけど頭が痛い、すると突然中佐に呼び出された、なんだかいやな予感がした…。

「はぁ〜い」

「失礼します。ど、どうしたんですか中佐」

俺はおそるおそるそう言った。すると案の定

「あらぁ、石井さん。昨日のことを私が忘れたとでも思ってるの？」

と俺に言ってきた、慌てて出ようとするも足が動かない。きっと恐怖心の所為だろう…。

「普通は酒で忘れてくれるのものなのですが…あっ、しまった」

僕はつい本音が出てしまった…。すると

「そう甘いものではないのよ…」

そして

「言ったわよね。次はこんなものじゃ済まないってこの間…」

俺は覚悟を決めた。だけど…

「でも、昨日はあなたの誕生日だったし、無礼講だったわ」

「えっ？」

「だから今回のことは不問とします」

俺は何かに救われたかのように心の中で喜んだ。

「でも、次やったらどうなるか…わかってますよね？」

俺は中佐の怖ろしい笑顔に怯えた。

「は、はい！」

「いいお返事ね」

最後に俺の耳元で中佐はそう呟いた。とりあえず、結果オーライかな…？。

14話　Polestar

誕生日の次の日だろうと俺達に休みはなかった。今は6月8日の夜18才になって早速の夜間哨戒飛行である。ただこれも今日まで、明日からはまた通常通りの生活に戻ることになっている。因みに宮藤さんは僕より一足先に哨戒任務からは降りている。

だから今日は3人で飛ぶのだ。

「石井さんと飛ぶのもひとまず今日が最後ね…」

サーニャさんは寂しそうにそう言う

「また、機会があったら是非ご一緒しましょう…。大丈夫ですよ、サーニャさんにはエイラさんがいますし」

と俺が言うと

「ナッ、なんで私を話に出すんダ?。私は関係ないダロ」

とエイラさんは慌てて言う。狙い通りの反応だ。俺とサーニャさんは目が合う。すると

「エイラ…。私とじゃイヤなの?」

とサーニャさんは悲しそうな声で追い打ちをかけるように言う。どうやらエイラさんも、自分がいじられている事に気がついたようだ。

「ソッ、そんなわけ無いダロ！！」

と言い返すと同時に

”石井…覚えとけヨ”

とでも言わんばかりに俺をにらんでいる。それはそれでいいのだが、エイラさんもそれなりに怒らせると厄介だからなぁ。況してや他人とは違って悪知恵が働くし…。

しばらくして僕等は哨戒飛行に入った。あの脱線事故を起こした鉄道も今は安全に走っているようだ。この間、新聞にそう書いてあった。

「石井さん、やっぱりあの路線のことが気になるの…？」

突然サーニャさんにそう話しかけられた。

「えぇ、でもなんでそれがわかったんですか？」

と聞き返すと

「ダッテ、お前ずっと下向きながら飛んでるじゃないカ～。誰だってわかるゾ」

とエイラさんに言われた。そうだったのか、自分では気がつかないうちにずっと下を向きながら飛んでいたんだ。

「ふふ、石井さんってやっぱりおもしろい…」

「ウン、ソウダナ」

二人とも笑いながら僕にそう言ってくる。

「二人ともそんなにいじらないでくださいよ～、立場上文句言えないんですから…」

と僕が言うと3人で笑った。

　すると、突然サーニャさんの表情が変わった。

「どうしたサーニャ。ネウロイカ?」

「うん、まだ反応は薄いけど…」

どうやらネウロイが出たらしい。

「応援はどうしますか?」

と俺が訊くと

「必要だわ。ミーナ中佐お願いします」

「わかったわ、しばらく応戦していてちょうだい」

「わかりました」

サーニャさんと中佐は無線で会話して指示を受けた。僕等でみんなが来るまで迎撃するようだ。

「エイラ、石井さん。敵は北極星の右下１６度の位置にいるわ」

「北極星（ポールスター）か…。よし、行きましょう」

僕がそう言うと全速力で敵の位置に僕等は向かった。

敵の近くに着くまでそう時間はかからなかった。近づいてみると

「大きい…」

とサーニャさんが言った。僕もエイラさんも言いはしなかったが同じ意見だった…。

「大丈夫ですよ。皆さんが来るまでは僕等でなんとか出来ると思います」

「そうね、みんなのためにも」

「私もいるから大丈夫ナンダナ」

「それじゃあ、行きましょう…」

それから、５分後に救援部隊が到着した。みんなの活躍もあって最終的には俺が撃ち、見事にネウロイを撃墜した。

「石井、よくやったな」

「石井さん。凄いです～」

少佐と宮藤さんは誉めてくれた。

「ありがとうございます。これで夜間哨戒の任務は終了なんですよね」

「うん、ああそうだったな、短い間だったがご苦労だった」

と少佐は言い返した。

「サーニャさん、エイラさん」

「なに？」

「ドウシタ？」

二人は俺に聞き返した。

「今までありがとうございました。これからもまたご一緒するときがあったらよろしくお願いします」

と僕は一礼をして言った。すると

「ええ」

「ウン」

二人ともいい笑顔だった。

次の日から僕は通常のシフトに戻った。そして、夜間哨戒に出て行く二人を見送った…。

「それじゃあ、お気をつけて…」

「ありがとう。わざわざ見送りに来てくれて」

「いいんですよ。お世話になりましたからね」

「ふふ…やっぱり石井さんは石井さんね」

「えっ？」

「そうダナ。アリガト」

そう言うと、二人は夜になろうとしている空に向かって飛んでいった。俺は駅員のように、指差し確認をしながら

「ヨシ！！！」と、二人の影が見えなくなるまでその場にいた…。

・・・

「この間のこと、覚えてるヨナ？」

「えっ？」

「覚えてるヨナ！！」

何だかいやな予感がする。ここは逃げることにしよう。

「あっ、コラ！！」

「逃げて正解…」

「待テ～！！」

しばらくエイラさんと追いかけっこをすることになるなんてまだ今の俺は知る由もなかった…。

15話　Guest

夜間哨戒からのシフト変更にも徐々に体が慣れてきた。一週間ほどが経過した頃、今日は非番扱いになっていたのだが…

「石井～」

突然自室のドアが開いたと同時にハルトマン中尉が突っ込んできた。椅子に座ってのんびりしていた俺は

「ハルトマン中尉！！」

と驚きながら言い返した。

「今日ここにウーシュが来るんだって、昨日手紙が来たんだけど寝てたから言わなかったんだ～」

「あぁ、なるほど…」

「それからさぁ、前にも行ったけど私には中尉なんてつけなくていいって」

「でも、上官ですから…」

「ふ～ん、サーニャが言ってたとおりだね」

「はい？」

「それじゃあ石井に上官として命令するよ。私には中尉ってつけな

いようにね」

「りょ、了解しました…ハルトマン…さん？」

「それでいいよ。そうだった、というわけで今日はウーシュが来るんだぁ。よろしくね」

「は、はぁ…」

さらっととんでもないことを言う。すると後ろから、バルクホルン大尉もやってきた。

「こらハルトマン！！。ちゃんと服を着ろ」

よく見ていなかったが、ハルトマンさん下着姿のままだった。

「よっ、よく恥ずかしくないんですね」

と俺が言うと

「いいじゃん、トゥルーデ。気にしない気にしない。ほらっ石井もトゥルーデみたいなこと言ってないで…。」

「気にしないわけがあるか、全く。まぁと言うわけだ石井。よろしく頼むな、ちょうど到着したようだ」

ハンガーに向かうと、ハルトマンさんにそっくりな人がいた。双子なんだから当然だろう。

「紹介するよ。こちら私の双子の妹、ウルスラ・ハルトマン中尉だよ～」

「初めまして、紹介があったようにウルスラ・ハルトマンです。今は技術省で研究をしています。今回は電気式ストライカーについて少しお話がしたいと思って…」

何度かハルトマンさんから聞いていたが。ウルスラさんは寡黙な人だ。ずっと本を片手に持っていることも言っていたとおりだ。

「わかりました。ではこちらにどうぞ」

俺は自分のストライカーの前に案内した。すると

「これはどちらで作られたものなのですか」

と訊かれた。すると

「これは石井が、扶桑の大学にいたときに自分で作ったんだって」

とエーリカさんが言った。

「本当ですか」

更に俺はウルスラさんに訊かれた。

「えぇ、でも俺が主に設計したのはモーター等の電気機器で、外板や製図までは自分で、製作は大学の…金属工学部と機械工学部の友人と共同開発しました。」

「凄いですね。ここまで扶桑の学生に技術力があったなんて…」

「自分たちのためでしたから、これで僕が戦っていることをみんなは誇りに思ってくれていますし」

「そうですね。それでは詳細の部品などについて…」

「えぇ、わかりました」

それから2時間ほど姉妹と俺はストライカーの話をしていた。気がつくともうすぐ昼になろうとしていた。

「とまぁ、こんなものですかね」

と僕は一通り機械の説明は終えた。ウルスラさんは僕のストライカーについて詳細なメモを取っている。

「ありがとうございました、石井さん。今後さらなる改良はありますか？」

「そうですねぇ…あらゆる可能性を試してみようかなって今は思っています」

「なるほど、是非頑張ってください」

「ありがとうございます」

とウルスラさんに喝を入れられた。すると

「ねぇねぇ二人とも～、おなか空いたしお昼ご飯にしようよ～」

とエーリカさんが言った。

「そうしますか？」

僕とウルスラさんもそれに賛成し昼食を取ることにした。と言っても今日はバルクホルン大尉の当番なのでジャガイモの蒸かしだけだったが…。

「大尉、他の方々は？」

と僕は訊いてみた。すると

「あぁ、みんな先に食べてしまったようだ。私たちも食べよう」

四人で黙々とイモを食べた。俺は３つ４つが限界だった。正直言ってジャガイモは好きだけども、こういう風に出されたらそんなに多くは食べることなんて出来ない。

「大尉、よくそんなに食べられますね…」

「お前もっと食べないと持たないぞ、夕食もこれだからな」

「トゥルーデ違うよ～、石井はイモばっかじゃヤダって言いたいんだよ」

「そうなのか。石井、それは本当か」

「いやそういうわけじゃなくて…ってハルトマンさんもなんてことを言うんですか」

「石井の目がそう言ってるもん。トゥルーデ、今日の晩ご飯なんか作ってよ～」

「エーリカ、全く。お前というやつは…よしわかった、今日の夕食は何か作ってやろう」

「わ～い。やった～」

本当にこの姉妹対照的だな。エーリカさんはこんなにはしゃいでいるのに、ウルスラさんは寡黙すぎるだろ。

「ウルスラさん」

エーリカさんとバルクホルン大尉はまだ二人でじゃれ合っていて僕等の会話は聞こえていないようだ。
だから僕はウルスラさんに話しかけてみた。

「どうしたんですか。石井さん」

「姉がこうだと大変ではないですか？」

「えぇ、でも掛け買いのない姉様ですから」

「そうですか、あなたも偉いですね」

「石井さんには兄弟は？」

「俺は一人っ子ですから…」

「そうなんですか。ところでですが、今度是非とも技術省の方にも機会がありましたらおいでください」

「えぇ、是非そうさせてもらいますよ」

「ありがとうございます」

「今日はもう帰宅なさるのですか？」

「えぇ、まだ仕事がありますから」

「そうですか、お体に気をつけて」

「えぇ、あなたもお気をつけください」

「ありがとうございます…」

昼食を終えるとウルスラさんは去っていった。噂によるとカールスラントではジェットエンジン式のストライカーが開発中だそうだ。

”僕の電気式はライバルになってしまうのかな…。いや相手にもされないかもな…”

僕はそう思いながらウルスラさんを見送った。すると

「石井～、どうだったウーシュは？」

この人本当に脳天気なんだなと思いながらも

「えぇ、寡黙な人でしたけど話してみると意外といい人でした」

「そう、よかったじゃん。また来るかもね」

「そうですね、是非技術省にも機会があったら来てくれと言われましたし」

「ふ～ん、ウーシュ意外といろんなこと話してくれたんだね。私には全然そう言うこと言ってくれなかったから…私嫌われてるのかな？」

「そんなことないですよ、絶対。あなたのこと掛け買いのない姉様だって言ってましたから」

と言うとハルトマンさんはとても喜んでいるように見えた。確かにお互いウィッチだとなかなか会えないもんな。

「ふ～ん、そうなんだ…」

ハルトマンさんは俺の言った言葉を深くかみしめながらそう答えた。

「石井、ウーシュにあってくれて本当にありがとうね」

「いえいえ、こちらこそ」

俺がそう言うとハルトマンさんは満面の笑みを僕にくれた…。

16話　Dinner

今は朝の5時。6月も半ばを過ぎいよいよ夏に突入しそうな今日この頃。俺はハンガーの脇の芝生のあるところに無理を言ってバッティングゲージを作ってもらった。ゲージと言っても着脱可能なものでいつもはただの芝生で使いたいときだけバッティングゲージになるというものだ。

「朝食まで2時間半か…。とりあえず、ひたすら打つか」

と言いながら自分で作ったボールを置く台を目の前に置く。

「さて…、始めるか」

カーン、カーン、カーン・・・・・・・・・

1時間ほどしただろうか、のどが渇き汗でだくだくになったのでシャワーに向かった。案の定まだ誰もいない。

”水しかでないかもなぁ…”

この時間は誰も使わないからお湯が出ないこともあるのだが今日は運良くお湯が出て助かった。もう暑いとはいえまだ6月である。さすがに朝から冷水は体に悪い。

朝から非常にさっぱりした気分だった。道具を持って自室に戻るとちょうど起床ラッパが鳴った。

「もうそんな時間か…」

僕はそう呟きながら廊下に出た。すると

「あら石井さん、おはよう」

”ゾクッ”

おっと、体が思わず震えてしまう。どうやら俺の中佐に対する恐怖心は相当なものなのだろう。

「おっ、おはようございます。中佐」

「あら、起きていたの？」

「えっ、えぇちょっと前に目が覚めちゃって」

「そうなの、朝強いのね」

「ええ、まぁ」

「まぁいいわ、今日も頑張ってね」

「はい、ありがとうございます」

なんだか背筋が一瞬ゾクッとした気がするが気のせいだろう。僕は食堂に向かった。

「おはようございます。石井さん」

とエプロン姿のリーネさんに言われた、今日の当番らしい…ってことは。

「おはよう、石井さん」

「宮藤さん、ごめんなさい。調理できなくて、夕食は手伝うよ」

「ありがとうございます。石井さん」

忘れていた、素振りなんかやっている場合じゃなかった。僕はご飯を食べ終わると皿洗いを手伝った。

「本当にいいんですか?。石井さん」

「いいんだよ、今朝手伝うの忘れちゃったし。晩ご飯は何か僕が作ってあげるよ。こっちでは魚は捕れるのかい?」

と僕は二人に訊いた。

「えっと、こっちでは何がとれるの?、リーネちゃん」

宮藤さんはブリタニアに関しては疎いようなのでリーネさんに訊くと

「そうですね、北海に近いこのドーバー海峡はいろいろな魚が捕れますよ」

と言われた。

「そうか、あとで中佐に訊いてみるからいけたら市場に行こうかな」

「あっ、あの…」

「どうかしたの、リーネさん」

「わっ、私と芳佳ちゃんも行っても大丈夫ですか？」

「石井さん、私からもお願いです」

「う～ん、まぁいいかな。一人で行くのも寂しいし」

「本当ですか？。ありがとうございます。石井さん、よかったねリーネちゃん」

「うん、芳佳ちゃん」

”この二人は仲がいいなぁ”

俺はそう思いながら皿洗いを再開した。二人もそれを見るとまた後片付けに入った。

”問題は中佐だな～、なんだか目をつけられてるみたいだし。あの人のげんこつ痛いんだよな～。ピッチャーの球よりもヘタしたら痛いかも…”

僕は昔、大学で野球をやっていた時をふと思い出した。

”みんなどうしてんだろうな。今度電話でもしてみるか…。”

僕は皿洗いを終えると中佐の部屋に向かった。

”何もなければいいけど…。”

僕は心底そう思いながらそこへ向かった。そうこうするうちに中佐室に着いた、僕がとんとんとノックをすると

「はぁい、どうぞ」

と中佐は優しそうな声でそう言った。

「失礼します」

俺がそう言うと声で判断したんだろう

「あら石井さん、どうかしたの？」

「いや、その…今から外出って出来ますか？。ちょっと魚を買いに行きたいもので…」

「う～ん、誰か他に行くの？」

「はい、俺の他にリーネさんと宮藤さんが」

「わかったわ、行ってらっしゃい。夕食には間に合うようにね」

「ありがとうございます」

「もし、間に合わなかったらどうなるかわかってるわよね…。あなたには今回階級上、監督責任があるんだからね」

「はい、わかりました。失礼しました」
僕が外に出たとたん、中佐は呟いた
「石井さん、逃げたわね…」
俺には聞こえないほど小さな声で…。
「お待たせしました。二人とも」
「いいんですよ、さぁいきましょう」
「石井さん、今日は何を買うんですか？」
「そうだな、刺身に合いそうなものかな…」
「わぁ～楽しみです、ねぇリーネちゃん」
「うん、芳佳ちゃん。でも、あんまり生ものってこっちの人は食べないんです」
「大丈夫だよ。食べてみればきっと気に入ると思うよ」
「本当ですか？」
「うん。さぁ、行くぞ」
「「はい！！」」

二人と俺はそんな会話をしながらジープに乗り込んだ…。

３０分ほど走ると、町に着いた。早速魚屋に向かおうとすると

「石井さん、他に買いたいものもあるので先にそっちに行ってもいいですか？」

と宮藤さんに訊かれた。

「いいけど、何を買うんだい？。私物はまずいと思うけど…」

と僕が言い返すと

「いえ、今日石井さんが扶桑食を作るので私も何か作ろうかなって…」

と言い返された。

”まぁこれぐらいなら中佐のお咎めもないだろう…。”

俺はそう思い

「わかった。先にそっちに行こう。魚の鮮度も落ちるし…」

と言った。そうすると二人ともとても喜んでいた。

二人に連れられてしばらく歩くと扶桑で言えば”八百屋”とでも言うべきな野菜専門店に着いた。

「二人とも、ここで何を買うの？」

「とりあえず魚料理に合うような、酢の物とかでも作ろうと思って」

「ふ～ん、そうなんだ。わかった」

「石井さんはつま用の大根とか買わなくても大丈夫なんですか？」

「まだ、刺身にするかは決められないからね…。酢の物なら焼き魚と煮魚にしても合うけど…」

「そうですか…」

「まぁとりあえず、人参と長ネギは買っていこうかな…。何かあったら協力してくれないか？」

「勿論ですよ」

と宮藤さんと話しているとと

「石井さんは、もしお刺身が作れないようだったら何を作るんですか？」

とリーネさんも訊いてきた。

「そうだな～、とりあえず煮魚とかかなぁ…」

「そうなんですか」

「うん、いつも二人でこういうところには来ていたの？」

「はい。石井さんが来る前は食材が無くなったらこういうところに買いに来たりもしました」

「そうなんだぁ…」

「最近は補給も定期的に来てくれるのでこういうところには来なくなりましたが」

「ふ～ん」

とそんな会話を三人でしていたら。買うものもそろったようだったので会計を済ませていよいよ魚を買いに行くことにした…。

魚屋の前に近づくと新鮮な魚がたくさんあった。すると

「いらっしゃい！！！、何が欲しいんだい？」

と元気な店主が話しかけてきた。

「今日揚がったのはどれです？」

と訊くと

「今日はイワシが一番捕れたね～」

と言われた、見ると確かにイワシがたくさん置かれている。まだ鮮度も良さそうだ。

「よし、今日はこれにしよう」

と俺が言うと

「石井さん、変更ですか？」

と宮藤さんが訊いてきた。リーネさんも隣で心配しているようだ。

確かにイワシだけだと物足りない。

「ほかに何かないかい？」

店主に更に訊くと

「う～ん、アジもとれたね」

と店主が言い返してきた。俺は安心した。

”アジフライとつみれ汁なら何とかなるだろう”

「よっしゃ。じゃあアジを２５匹とイワシを４０尾もらおうか」

「あいよ！！！！。毎度あり！！！！」

値段もちょうどいい具合だったのだが店主にまけてもらえた。

俺達は三人で等分して車まで魚を運ぶことにした。

「二人とも重くない？」

俺は心配になったので話しかけてみた。

「大丈夫ですよ」

「こっちも大丈夫です」

と二人とも言い返してはいるがどう見ても重そうだ…。

ジープに荷物を積むと早速出発した。

「鮮度が落ちると光り物はまずいから飛ばしていいかい？」

「えっ、あの石井さん。飛ばすってどれくらいですか？」

「行きは７５？最速できたけど、１００？くらいかな」

「えええええ」

なんだかとてもリーネさんは怖がっているようだ。

「石井さん。大丈夫なんですか？」

宮藤さんも訊いてくる。そんなに俺の運転は信用できないのかな…。

「大丈夫だと思うよ」

「私は大丈夫ですけど、リーネちゃんが…」

「リーネさん大丈夫？」

と俺が訊くと暫くの沈黙をおいてから

「わっ、わかりました」

と小さな声で答えた。

「わかった、じゃあ出発しますか」

俺達は出発した。直線の多い道だったので結構飛ばすことができて２０分くらいで帰りは到着できた。

「ひいっ！！。芳佳ちゃ～ん」

「大丈夫だよ、リーネちゃん。でも、うわっ！！」

「制限６５…」

・・・

「石井さん、手伝いますよ」

「私にもやらせてください」

リーネさんと宮藤さんの協力もあって短時間で下準備を終えることができた。

「ありがとう二人とも、あとはつみれを煮て、アジを揚げれば完成だ」

「いえいえ、石井さんもお上手でしたよ。ねぇリーネちゃん」

「うん。石井さん左利きなのにお上手ですね」

誉められるというのは非常に嬉しいものだ。

「そういえば、少佐は参加しないの？」

と俺が訊くと二人は黙り込んでしまう。

「実は、坂本さんは料理が苦手なんです」

「そうなのか…、悪いこと聞いちゃったな」

「いえいえ、いいんですよ」

俺達は下準備したものを保冷の効く場所にしまい。それぞれの行動を取ることにした。

俺はゲージを再び作って、バッティング練習を再開することにした。

「よし、やるか。」

カーン、カーン、カーン・・・・・・・・・・・・

急にボールが見えにくくなった。あたりを見渡すともう夕方であった。もうおなかもペコペコである。とそこへ

「石井さ～ん、夕食の支度です～」

と宮藤さんが呼びに来た。よくこの場所がわかったなと思いながら急いで食堂の調理場に向かった。早速つみれを見てみると幸い問題ないようだった。勿論アジも。

「さて、早速作るか…」

僕はそう呟きながら調理を始めた。まずつみれ汁を作った、今回は醤油ですまし汁のように作った。

「宮藤さん達、ちょっと味見してくれない？」

と言って二人に味見をしてもらうと。

「うわぁ、とっても美味しいです」

「うん、ホントだ。美味しい」

と二人の感想は上々のようだ。肝心のつみれも臭みや味に異常はなく大丈夫だった。

次に僕はアジフライを作った。何とか綺麗に揚げることができたのだが…。

「アッチッ！！」

と俺は言った。見ると皮膚が白くなっている、揚げている内に油がはねたのだろう。すると

「石井さん、待っていてください。今、治しますから」

と宮藤さんが飛んできてお家芸の治癒魔法ですぐに治してもらえた。

「このスープ美味いな～。誰が作ったんだ？」

「それは石井さんが作ったんですよ」

シャーリーさんと宮藤さんの会話が聞こえてくる。

「石井、お前凄いな～。こんなに美味いスープ初めて飲んだぞ。それにこの魚（フィッシュ）も全然くさくないし」

「えぇ、そこは慎重にやりましたから」

「石井、おかわりっ！！！」

ルッキーニさんも気に入ってくれたようだ。

「わかりましたよ、ルッキーニさん」

「おいしい…」

「良かったナ石井、サーニャも気に入ってるみたいダゾ」

「それはそれは、嬉しいです」

”よかった、みんな気に入ってくれているみたいだ…”と心の中で俺は呟いた。

「石井、美味いな。こんなに美味いつみれ汁は久しぶりだ。どうだペリーヌ？」

「えっ、あの…。そうですねとても美味しいですわ。魚のだしが美味く出ていると思います少佐」

「はっはっは、それは良かったな。石井、これからも頑張れよ」

「はい、ありがとうございます少佐」

”石井さんって、意外といい人なのかもしれませんわね…”

「イシイ～、このフライまだある？」

「えぇまだありますけど、ハルトマンさんまだ食べるんですか？」

「ダメ～？、だって美味しいんだもん」

「いっいや、ダメとは言わないですけどおなかのほうは大丈夫なんですか？」

「そうだぞハルトマン。石井も心配しているんだ明日にしろ」

「チェ～、トゥルーデのケチー」

「なっ、ケチだと。お前というやつは」

”この二人は仲いいんだな～”

と思っていると

「石井さん。今日はありがとうね」

”うっ、中佐だ。”

「あら、どうかしたの？。顔色が悪いわよ？」

「いっ、いえ大丈夫ですよ」

「また今度もよろしくね。それと…」

「それと何でしょうか？」

すると耳元でこっそりと

「今回は無事職務を果たしたようね…」

”ゾクッ”

「えっ、ええ。ありがとうございます」

「じゃあ私もこの魚のフライもう一個もらおうかしら」

”よかった。いつもの中佐に戻った”

俺はそう思いながら笑顔で

「はいっ、わかりました」

と言って、フライのあるところへ向かった。

食後皿洗いは俺一人で行った。みんな風呂に行っているのだ。たくさん食器はあったもののちっとも辛くはなかった。

「みんなに美味しい美味しいって食べてもらえて本当に良かった…」

俺はそう呟きながら皿洗いを続けるのであった…。

17話　夜更かしとその後…

皿洗いを終え俺は自室に戻った。風呂に入るまでの数十分、時計の音が大きく聞こえるような錯覚に陥る。さて今日は何をしようか…。

”今日も滞ってたバットふきでもするか…。”

早速僕は作業に取りかかった。今日は捗(はかど)って2本も拭くことができた。さて3本目に取りかかろうとするとドアがノックされ

「石井さん、お風呂空きましたよ」

と宮藤さんに言われた。わざわざ言いに来て貰って申し訳なくいつも思ってしまう。

「あぁ、ありがとうすぐに行くよ」

俺は言ったとおりすぐに向かった。なんだか今日は非常に眠い、風呂の中で寝ないように注意しないとと思いながら風呂に入った。

”この風呂を独占できるなんてなんて幸せなんだろう”

僕はのんびり入っていた。この風呂には時計がない、時間がわからないのだ。ヘタに消灯ラッパ以降まで起きていると中佐に何をされるかわからないので、風呂を出ることにした。本当はこれぐらいの風呂だったら1時間くらいは軽く入っていられるのだがなぁ。坂本少佐ならまだしも中佐は何だか俺からしたら

「恐怖の塊」

と呟くほどの存在である。一瞬呟いたことを後悔したが、幸いなことに回りには誰もいなかった。

風呂を出ると少し暑かった。外に出ることにした。

外は涼しかった。夜の割には月明かりの所為だろうかかなり明るかった。すると

「聳井さん。ここにいたんですか?」

と後ろを振り向くと宮藤さんがいた

「あぁ、宮藤さん。座る?」

「ええ。ありがとうございます」

僕は少し脇にそれ、宮藤さんがそこに座る。滑走路の岸壁の先に座り遙か向こうには大陸があるのだなと思いながら涼んでいた。

「宮藤さん」

「はい?」

「ここにはよく来るの?」

「えぇ、ここ私とリーネちゃんのお気に入りの場所なんです」

「そうなんだ。何だか悪いねぇ…勝手に俺が来ちゃって」

「いっ、いえとんでもないです。これからも、どうぞいらしてください」

「そう?、ありがとう」

俺達はそんな会話をした。

「そろそろ、戻った方がいいんじゃない?」

「そうですね、戻りますか」

そして、僕等は戻ることにした。涼んだおかげでだいぶ心地よくなった。今日はよく眠れそうだ。

すると宮藤さんが話しかけてきた。

「石井さん」

「なんだい?。宮藤さん」

「私、たまに不思議な気持ちになることがあるんです。今もこの世界のどこかで戦争しているんだなって思うとここがあまりにも静かすぎて」

「僕も扶桑にいたときそう思ったことがあったな。でも今はそんなこと言ってられないけどね、国とみんなの期待を背負ってるし…」

「そうですよね、守りたいものが石井さんにもあるんですものね」

「勿論だよ。守りたいんじゃなくて守らなくちゃいけないものもあるしね。」

「石井さんらしいですね」

「そうかぁ？」

「ええ、とっても」

「そうか…。まぁそれはそれでいいか」

俺と宮藤さんは帰り道そんな会話をした。

「じゃあね、宮藤さん」

「はい、石井さん。お休みなさい」

「あぁ、お休み」

俺が部屋に入ったと同時に消灯ラッパが鳴った。危ないところだった、中佐にばれたら一大事だ。

俺は急いでベッドに潜り込む、このベッドで寝る感覚は寝台車に近い。まぁ寝台車もベッドだから当然か…。

「うぅん…今日はよく眠れないなぁ…」

何でかは知らないが今日は、眠りになかなかつけない。風呂に長く入りすぎたのかな？。

”仕方がないなぁ、本でも読んでるかぁ…”

帝大の教授から貰ってきた教科書でも読んでいよう。これは睡眠薬に近いから。

”なるほどなぁ…これを偏微分して…方程式をねぇ…”

本当に5分足らずで俺は眠りに就くことが出来た。ただ問題があった、それは俺が寝てしまった場所と条件だった。俺はまず、学校で居眠りするような形で眠りに就いてしまった。更に、ランプをつけっぱなしにしてしまったのだ。俺は構わないのだが、灯りが外に漏れてしまっていたようだ。それと何もくるまないで眠りに就いてしまった。これでは風邪を引いてしまう。

”あら?。石井さんの部屋から灯りが漏れているわね。まだ起きてるのかしら?”

「石井さん?」

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

「石井さん?。大丈夫?」

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

「入るわよ?」

「ｚｚｚ　ｚｚｚ　ｚｚｚ」

「あら！」

”全くもう。これじゃあ苦学生だわ…。少し前までは石井さんもこんな生活を送っていたのかしらね…。あんまり魔力を夜に使いたくはないんだけど…”

気がつくと俺はベッドの上で朝目覚めた。

「あれ？。昨日俺、教科書読んでる内に寝ちゃったはずなのになぁ…」

着替えを済ませた頃に朝一で中佐が俺の部屋にやってきた。

「石井さん、おはよう」

「あっ、おはようございます中佐」

「昨日はぐっすり眠れたかしら？」

「え、えぇ…」

「接平面の方程式を求めるときには、法線ベクトルを求められればすぐに解ける…」

俺は驚いた。それは昨日俺が読んでいた範囲の一部だったのだ。

「な、なんでそんな事を突然？」

「あなたの持っていたこの教科書、とっても興味深かったし、あなたが大学で勉強していたことが少し分かったような気もしたわ」

「そ、そうですか」

どうやら中佐が何らかの形で俺をベッドまで運んでくれたようだ。

「すいませんでした。昨日は…その…」

中佐が迫ってくる。またこれはげんこつなのだろうか。

「いい？。休みはちゃんと取らなくちゃダメよ」

「は、はい…すいません」

「それじゃあこれを返します。今度からは本当に気をつけるのよ？」

「わかりました」

どうやらその危険性はなかったようだ。幸いなことに教科書も無事で帰ってきた。でも俺は不思議なことに気がついた。それは中佐が去った後になのだが、この教科書は確かに書いてある内容はさっき中佐が言っていたとおりなのだが、帝大のものだから扶桑語で書かれているのだ。

”どうして中佐…扶桑語が分かったんだろう…”

俺はそんな事を思いつつも、ひとまず朝食に向かった。

俺は急いで食堂に向かった。今朝も蒸かしイモだけだった。ここまで言えば誰が作ったかはわかるだろう…。

朝食を終え自室に戻ろうとする僕をバルクホルン大尉は止めた。

「おい石井」

「はい、何でしょう大尉」

「あとでちょっといいか。用があるんだが…」

理由を聞こうと思ったがなんだか大尉の顔がどんよりしていたのであとでにしておこう。

「はい、わかりま…」

突然警報が鳴った。ネウロイのようだ、僕等はすぐにハンガーに向かった。

「石井、発車します！」

俺はすぐに飛び立った。あれから改良を続け離陸に必要な距離が縮まった俺はすぐに飛び上がることができた。

「敵は小型多数。ここより南西部にあり」

中佐がそう言うとみんなそちらの方向に向かった。

今日の俺のストライカーはいつもよりも好調のようだ、風力発電が思ったより効率よく働いているようだ。モーターのほうも回転数をほんのちょっと上げただけなのに全然違う。

「坂本少佐、そろそろ敵が見えてくるはずですが…」

「そうだな…。いたぞあそこだ」

中佐の指の方向を見た。確かに小型のネウロイが５０機前後はいるだろうか…。

「行くぞエーリカ」

「行っくよ～、トゥルーデ」

さすが大記録持ちの二人だ果敢に攻撃している。隣ではシャーリーさんとルッキーニさんもハイスピードで攻めている。野球で言うところの速球派だろう。俺も単機で攻撃を開始する。

「少佐、行きます！」

「わかった。健闘を祈る」

俺は左利きなので他の人の位置関係も把握していなければならない。一番左に向かった。今回のネウロイはそこまで苦労はしなかったが、ビーム射出の周期が今までのよりも短かった気がした。ともかく、これも新設した発電ブレーキ（羽の回転でモーターを逆回転させて減速する方式。）がそれなりの効果を発揮し今日だけで１０機撃墜することができた。

「石井さん。今日は何機ですか？」

宮藤さんが基地に戻る途中訊いてきた。

「今日は…１０機だったかな？」

「そうですか、最近撃墜数も増えてきましたね」

「俺は左利きだからネウロイも不慣れなのかもしれないね…」

と宮藤さんに言うと

「石井、どうしてそうだとわかるんだ？」

とバルクホルン大尉が興味津々に訊いてきた。こういうことには目がないようだ。

「いや、もしネウロイが連携を取り合っているのだとして俺達と格闘をしている場合。左利きは予測がかなり難しいんじゃないかなと思ったので…」

「ふむ、確かにそうかもしれんな」

坂本少佐も話に参加してきた。

「まぁ、今回は１０機も落とせたので嬉しいです」

「はっはっは、そうかそうか。これからも精進しろよ」

「はいっ、ありがとうございます」

俺達は基地に着いた。時計を見るともう昼を過ぎていた。

「バルクホルン大尉」

俺は大尉を呼び止めた。

「ん？」

「あの、相談事とは…」

「あぁ、それについては食事のあとでいいか？」

「はぁ…、わかりました」

「うむ」

と言って大尉は行ってしまった。一体相談事とは何なのだろうか…。

18話　want　to…

昼食を取り部屋に戻ろうとすると案の定バルクホルン大尉が

「石井、２０分後に私の部屋に来い」

と言ってきた。

「おっ、堅物～。石井に気でもあるのか～」

「うっ、うるさいリベリアン。ただの相談だ」

「怒ってるところが更に怪しいねトゥルーデ」

「なっ、ハルトマンまで、くぅー」

”なんだか面倒なことになったな”

「まぁまぁ…大尉、落ち着いてください。とにかく２０分後ですね」

「あぁ、そうだったな」

「ははは。堅物が石井に止められてやんの…」

「くぅー！！」

「大尉、お、落ち着いて下さい…」

部屋に戻った俺はバットを拭いていた。あと一本の半分というと

ころまで来ていたのだった。

気がつくともうすぐ２０分くらいになろうとしていた。僕は大尉の部屋に向かった。

「大尉、いらっしゃいますか？」

ドアをノックしながら俺は訊いた。

「あぁいるぞ。入ってもらって構わない」

「失礼します」

「石井～！」

「うわっ」

後ろからハルトマンさんがしがみついてきた…いやぁ、ぶつかってこられたって言う方が正しいかもしれない。

「なんなんですか～、ハルトマンさん。後ろからのいきなりは酷いですよ～」

「まあまあ気にしない気にしない。石井とトゥルーデの話、私も聞きたいな～っていい？」

「俺は構いませんけど、大尉は…」

「ふぅ、まぁエーリカならいいだろう」

「わ〜い。やった〜」

俺とハルトマンさんは席に座らされた。

「トゥルーデ、何か食べたい〜」

「まったく、お前と来たら。少しは石井を見習え」

「え〜いいじゃん。ねっ、石井」

「えっ、まぁいいですけど…」

「ほらぁ…」

「わかったわかった」

しばらくするとクッキーと紅茶を持ってきてくれた。

「あの、話って言うのは…」

と俺は紅茶を飲んでいる大尉に訊いた。

「そうだったな、今度クリスにもあってくれないか？」

「クリス？」

「トゥルーデの妹なんだ〜」

「はぁ…、でも何で」

「いや、私がこの部隊に男性のウィッチが入ったって言ったら会いたい会いたいってうるさくてな。だから協力してやってもらえないか？」

「いいですけど…。今はどこにいるんですか？」

と俺が言うと大尉の顔は暗くなってしまった。

「実はこの大戦で大怪我をして今は入院中なんだ」

「そうなんですか。悪いこと訊いちゃいましたね。すいません」

「いやいいんだ、気にするな」

「俺はクリスさんに会うのは構いませんけど…」

「そうか、それは嬉しいありがとう」

「二人だけで話してズルい～、私も連れてって」

「私は構わないが石井は？」

「いいですよ別に」

「わ～い、ありがとう石井」

”笑顔がまぶしすぎるな…”

俺は心の中で思った。

「それでいつ頃になるんですか？」

「あぁ今度休暇を取れればなと思っている」

「わかりました。詳細が決まりましたらまた教えてください」

「わかった。ありがとう石井」

「いいんですよ…」

「是非お礼がしたい何がいいか？」

「じゃあ、今晩にもまた何か作ってくださいよ」

「わかった。期待していろ」

「わ～い、トゥルーデの料理だ～。私も手伝う～？」

「ダメだ、お前はいい」

「え～なんで～」

「お前が料理に絡むとろくなことにならない」

「ちぇ～。トゥルーデのケチ～」

”いやあながち間違ってはいないだろう”

「それじゃあ、またあとで」

と言って俺は部屋を出た…。

19話　Guladuate　School

部屋に戻るとすぐに宮藤さんがやってきた。見たところ走ってきたようだ。

「石井さん。お電話です！」

「どうしたの？。そんなに慌てて…」

「て…い…だ…」

「ん？…てい？」

「帝大からです！」

俺はビックリした。まさかここにいる俺に態々東京帝大から電話が直通でかかって来るだなんて…。

「何だって！！！！、わかったすぐ行く」

俺も慌てて電話がある中佐室に向かった。

「失礼します。中佐、電話は？」

「えぇ、ここよ」

「ありがとうございます」

俺は受話器を取った。

「はい。石井です」

「よぉ石井。元気か…お前さぁ、遅いぞ！。恩師様を待たせる気か？」

受話器の声の主は大学時代にお世話になった教授である。

「あぁ、教授。まだ大学には残れてたんですね」

「大きなお世話じゃい！。どっかの誰かさんが、ブリタニアなんかに派遣されちゃって俺もやめようにやめられなくなったのさ」

「それって俺の事ですか？」

「他に誰がいるんだよ…」

「「ははは」」

俺は電話の向こう側にいる教授と笑いあった。

「ところでお前さん。大学院（うえ）へ行く気はあるのか？」

”こんな時になんてことを訊いてくるんだろなぁ。勿論結論なんてとうの昔に決まってるけど…”

俺は心の中でそう思いながらも話を続けた。

「えぇ、こっちの仕事が一段落したら行こうとは思ってますけど」

「やっぱりそうか」

「やっぱり…？」

「実はさぁ、お前さん大学院に無試験での進学が決定したんだよ」

「はぁ！？。教授、とうとうおかしくなったんですか？」

「馬鹿なこと言ってるんじゃない。俺はいつでも元気だぞ。今休学中という扱いにはなっているが、確実にお前は大学院に籍を置いている。いつ頃に扶桑（こっち）には戻ってこられるんだ？」

「それは…まだわかりません。戦況によって大きく変わるでしょうし。ただ近いうちには帰るつもりです」

「わかった。それじゃあ頑張れよ」

「あっあの、教授。教科書を送ってくれませんか？」

「おぉ、さすがだな。やっぱり‘飛び級’なだけあるな？」

「いやぁ、それほどでも…」

「そう言うと思ってよぉ。もうそっちに送ってあるんだ。もうすぐ着くと思うぞ」

俺は教授の嬉しさに懐かしさと責任感を改めて自覚した。

「ありがとうございます。教授、俺が帰ったらまたのみに行きませんか？」

「ははは。楽しみにしてるよ。それじゃあ元気でな」

「教授も、お体をお大事に…」

「あんがと。それじゃあまたな」

「えぇ…失礼します」

俺は静かに受話器を置いた。すると後ろからなにやら気配を感じる。

”何か凄い目で見られてる…”

「扶桑からの連絡は何だったの？」

”うわぁ…恐怖の…いや、読まれるかもしれないから黙っておこう”

と俺は思いながらこう答えた。

「じ、実は…いやその、大学から電話が来て…」

「そう…、それで？」

「教授が言うには、俺が教授の推薦で大学院に無試験での入学が決定したと…」

と言うと

「まぁ！！！、それは凄いじゃない。これであなたも博士になれるのね…」

「そういうことになりますね…。あっ、それでもうすぐ教科書が届くとも…」

「わかりました。届き次第こちらから連絡します」

どうやら、危険回避成功のようだ。危ない危ない…。

「ありがとうございます。中佐」

「それじゃあ戻ってもいいわ…」

”ふぅ～、良かった…。今日は殴られなさそうだ。”

「ありがとうございます。では失礼します…」

その途端、俺は肩を掴まれた。

「えっ？！」

「…とでも言うと思ったのかしら？」

「はい？」

ところで野球で捕手（キャッチャー）をするためには洞察力などを鍛えて、打者の心情を読むと言うことが重要になる。中佐の場合はまさに的確なポジションであるだろう。

「恐怖の何なのかしら…？」

「いえ…あの…」

「今夜、ここに来るように」

「えっ」

「い　い　か　し　ら？」

「は、はい」

「うん、よろしい…」

天国から一瞬で地獄の底まで俺はたたき落とされた。

宮藤さんと少佐が廊下にいた。

「石井さん、何の電話だったんですか？」

真っ先に宮藤さんは俺に訊いてきた。

「石井。私も気になるな～どうしたんだ？。何でも宮藤の話では、大学からだとか…」

少佐も訊きたがったいるようだ。

「俺、大学院への入学が決まったそうで…しかも無試験で」

と俺が答えると、二人とも驚いたような顔をしている。当たり前か…。

「すっ、凄いじゃないですか～、今度みんなでお祝いをしないと…。坂本さんはどう思いますか?」

「うん、良くやったな石井。よしっ、ミーナには私が言っておこう」

「いや、でも別に…そんな事しなくても」

「ダメですよ!。こういうことはみんなで共有しないと」

「そうだ、宮藤の言うとおりだぞ石井。幸せはみんなで分かち合う必要がある。今回の件はそれに値すると私も思うぞ」

「はぁ…ありがとうございます」

と言って俺は部屋に戻った。それどころじゃないけど、まぁ…お祝いをしてくれるのはそれはそれで嬉しいなぁって思ったりもする。

”よっしゃ～、大学院だ!。”

僕は心の中で叫んだ、嬉しかった。と言ってもここは戦場の最前線、あまりうつつを抜かしていてはいけない。俺は机の整理を始めた。ここのところストライカーの改良のレポートが机の上に散乱していたのだ。それを俺はまとめて箱にしまった。

片付けが終わる頃にはもう夕方になっていた。

”ふぅ、汗かきついでに素振りにでも行くか”

俺はバットを持って滑走路の脇に向かった。誰もいなかった。

「これなら心置きなくフルスイングできるな」

ブン、ブン、ブン・・・・・・・

「石井さ～ん、夕食ですよ～」

「ありがとう～宮藤さーん。すぐ行くよぉー」

俺は急いで着替えて食堂に向かった。すると

「石井、大学院だって～凄いな～。どう思うルッキーニ。」

「うじゅー、大学院って凄いのシャーリー？」

「はは、勿論だよ。大学の上にある学校だよ、そこに試験無しでで入学できたんだって」

「すごいじゃん、石井。おめでとー」

「ありがとうございます。シャーリーさん、ルッキーニさん」

と話しているとと

「石井、凄いなクリスもきっと喜ぶぞ」

「えっ、でもハルトマンさんから聞いた話だと、マルセイユ大尉のほうが好きだと…」

「あぁ、あいつか。あいつとは昔一緒に戦っていたからな、凄い負けず嫌いなんだ…」

「なるほど…」

俺は聞き返すのをやめた。何だか気が強そうな気もするから俺もあんまり会いたくはない。

「そっ、そうなんですか…。ところでハルトマンさんは」

「寝ているのだろう…」

「そうですか」

「石井さん」

突然両肩を後ろから掴まれて俺はビックリした。

「中佐!!、どうかしたんですか」

「本当におめでとうね。私から後で話があるから…」

「えっ、ど、どうも」

「とにかくあとでいらっしゃい。わかってるわね?」

「はい…」

またげんこつか、と俺は思った。

今日の夕食はバルクホルン大尉が作ったアイスバインとパンだった。絶妙な味だった。

食事が終わると俺は急いで中佐室に向かった。ドアの前には立つものの、ノックをする気にはまだなれない。

”イヤだなぁ…本当は入りたくなんて…”

「いつまでそこにいる気なのかしら？」

「ひっ！！」

俺は慌てて、部屋に入った。そう言えば中佐の固有魔法は確か三次元把握とかだったと思う。だからすぐに俺がいるって事が分かったのかとこの時改めて自覚した。

「さぁ、入って！！」

「は、はい…」

強力な力で手を引っ張られてどうすることも俺には出来なかった。

「本当におめでとうね。それと、さっきの話の続きを訊かせて貰おうかしら…？」

俺は腹をくくった。もぅどうにでもなってしまえ…。

・・・

宮藤さんがやってきた。気がつくと俺は部屋で床に座り込んでいた。

「いやぁ、中佐を怒らせちゃって…」

「今治しますよ」

「ありがとう…助かるよ」

僕はいろんなところを治してもらった後風呂に向かった。だけど頭を洗おうとお湯を頭にかけた瞬間

「いってぇ…」

と風呂一杯に聞こえる大声を出した。

風呂を出ると、俺はすぐに寝ることにした。

”明日は何もありませんように”

と心の中で思いながら俺は寝た。

その頃中佐室では

「石井さん大丈夫かしら。まぁ大丈夫よね」

と中佐が呟いているのであった…。

20話　Sister

今は朝の6時半。もうすぐ大尉がやってくるはずだ。今日は病院に行く日でなのである。病院と言っても大尉の妹のクリスさんを見舞いに行くのだ、決して中佐からのケガの治療ではない。

「石井、起きているか？」

15分くらいすると大尉がやってきた。俺はもう身支度を済ませてあとは学帽をかぶればいつでも出発ができるようになっていた。

「おはようございます。大尉」

「うん、もうすぐ出発するからそのつもりでいてくれ」

「あの…」

「ん？。どうかしたか？」

「ハルトマンさんは…」

「あぁ、まだ寝ている。どうだ一緒に起こしに行くか」

「は、はぁ…」

俺と大尉はハルトマンさんの部屋に向かった。

「ハルトマンさんはみんなから聞いた話だと随分ずぼらだとか」

「随分どころではないぞ」

「えっ？」

「まぁ来れば分かる」

大尉は怒っているような顔でそう答える。

「さてと…」

と言うとハルトマンさんのドアの前に着いた。

ノックもせず大尉はドアを開けて

「大尉、それはまずいですよ」

「構わん。起きろ、ハルトマン！！」

と大声で言った。見るとハルトマンさんはベッドの上ではなく床にごろ寝のような形で寝ていた。

「た、大尉、いつもこんな感じなんですか？」

俺はもう唖然としてしまうしかない。

「そうなんだ。ほらハルトマン、石井も準備ができているんだ早くしろ」

「うぅん、あと４０分」

「こら起きろ～」

そう言うとハルトマンさんは起きた。大尉曰く今日は珍しく早く起きたようだ。

ハルトマンさんの準備が終わる間、俺と大尉は中佐室に向かった。

「はい、わかりました。休暇届を受け取ります」

「ありがとうミーナ。石井行くぞ」

「はい大尉。それでは中佐失礼します」

「えぇ気をつけてね…」

俺はなんだかほっとした気がした。

俺と大尉達はすぐジープに乗り込んだ。クリスさんの病院までは1時間ほどかかった。

着くやいなや

「ねぇねぇ、何か食べよう～」

とハルトマンさんは俺と大尉に言ってきた。

「だめだ、面会が先だ」

「いいじゃん、トゥルーデのケチ、冷血漢」

「なっ、何だと！」

”なんだかケンカになりそうだな、ここは俺が止めないと…”

「まぁまぁ、二人とも落ち着いてください。先に面会に行きましょう、時間もあまりないですから…」

「そうだな、と言うわけで行くぞハルトマン」

「えぇ～」

嫌々そうなハルトマンさんを前に大尉はどんどん進んでいく。

「うわっ」

大尉は先に前の方にいるから俺の異変に気がつかない。

「石井はトゥルーデの肩を持つの？」

「いや、そういうわけじゃなくて…」

「ニャハハハ。冗談だよ、石井って優しいんだね」

「そんなことは…」

「早くしろ二人とも！」

「はぁい！」

「行こ！、石井」

俺はいろんな人に振り回される運命なのだろうかなぁ…。

「はいはぃ…」

しばらく病院の中を歩いていると個室の病棟にクリスティアーネ・バルクホルンと名前が書かれた部屋があった。間違いなく大尉の妹さんの部屋なのだろう。

「クリス!!」

大尉は叫んだ。俺は知らなかったが意識がここ最近で回復したらしかった。当然叫びたくなるのも無理はないだがここは病院なわけで…

「他の患者さんもいますのでお静かに願います」

「あっ、すいません」

大尉は恥ずかしそうな顔をしてた、すると

「やーい、トゥルーデ。怒られちゃったね」

ハルトマンさんがそうおちょくっても動じない。なぜならクリスさんと大尉の目がお互いに合っていて何も言えなかったのである。

「お姉ちゃん。相変わらずだね」

俺は初めてクリスさんの声を聴いた。まぁ当然なのだが。

「く、クリスこそ…」

大尉が恥ずかしがって黙っていると

「そちらの男性の方は？」

と僕の方を向いてきた。

「あぁ、石井自己紹介できるか？」

大尉もそう言ってきたのでそうすることにした。

「初めまして、今度この５０１統合戦闘航空団に所属することになった扶桑皇国の石井明範と言います。よろしくお願いします。大尉にはいつもお世話になっていまして…」

「えっ！、じゃああなたが男性ウィッチの方なんですか？。」

「はい。そういうことになります」

「私男性のウィッチなんて初めて見ました。こちらこそよろしくお願いします」

と僕が言うと

「石井はね～クリス。扶桑の大学を飛び級で卒業して今大学院生なんだよ～、しかも大学院にも学校の推薦もあって無試験で入学したんだって」

とハルトマンさんが言った。

「ハルトマンさん。何もそこまで言わなくても…恥ずかしいですよ」

「えーいいじゃん。それぐらい」

「いやそれぐらいって…」

と俺達が話していると

「あの飛び級って何なんですか」

とクリスさんは訊いてきた。すると

「いいかクリス。飛び級って言うのは中学校を卒業したらいきなり大学に進むようなことを言うんだ。つまり石井は大学生の学力を中学校までに身につけたと言うことになるんだ」

とバルクホルン大尉は言った。クリスさんはそう大尉が言うととっても驚いたようだ

「えぇ!!、凄いんですね。石井さんって、今度お姉ちゃんでもわからない問題があったら教えてください」

と俺は言われた。

「勿論ですよ。わからないことがあったら、いつでも俺に手紙でも何でもいいので出してください。大尉を経由することになるとは思いますが…」

「ありがとうございます」

と笑顔で言い返してきた。大尉も笑顔になったらきっとこんなに素敵なんだろうな。俺がそう思っていると面会の時間が終了した。俺達はクリスさんに別れを告げると、食事を取った。と言っても軽い食事でコーヒーとパンだけだった。

帰り道、大尉は俺に話しかけてきた。

「石井。私の妹はその…どうだった？」

「えぇ、とても素敵でしたよ。目が輝いてましたね」

「そうか…」

「俺は大尉も笑顔になればきっと素敵だと思いますけど」

「えっ…！？」

大尉は顔が赤くなった。突然のことで動揺しているようだ。

「なっ、何を言うんだ全く。上官をなめているのか！！」

「いっ、いえそんなことは…俺は思ったことをいっただけなのですが…く、苦しい…」

俺は大尉に胸ぐらを掴まれて窒息しかけていた。使い魔を使うなんてズルい…。

「あ、すまんすまん」

「と、とにかく。俺はそう思いましたけど」

「本当に…か？」

「えぇ…」

すると運転しているハルトマンさんも話に参加してきた。

「石井の言うとおりだよ、トゥルーデももう少し笑顔になりなよ～」

「いやハルトマンさん。前、前！！」

「えっ前？」

危うく踏切に突っ込むところだった。

「ふぅー。ありがとう石井。助かったよ」

「助かったよじゃない。あとちょっとで死ぬところだったぞ…」

「気にしない気にしない」

踏切を渡るとまたハルトマンさんは運転に集中して俺等の話には参加してこなくなった。

「石井」

「なんでしょう、大尉？」

「今度私たちにも勉強を教えてくれないか。隊のみんなもきっとそう思っているはずだ」

「当たり前じゃないですか。勿論構いませんよ」

「そうかありがとう。それからクリスの件なんだが…」

「大丈夫ですよ。俺が大尉に教えてあげますから大尉が手紙を書いてください。お姉さんに手紙を持った方が妹さんも喜ばれると思いますよ」

「ありがとう。感謝する」

「いぇ、当然のことだと思いますよ。姉が妹を大切に思うなんて。俺は一人っ子ですから」

「そうなのか」

「えぇ。そういえば、もうすぐ基地みたいですね」

「うむそうだな」

「大尉、今日はありがとうございました」

「石井こそ、今日は本当にありがとう。またよろしくな機会があったら」

「はい！…あっ…」

と言うと大尉は笑顔になってくれた。俺等は基地に到着した…。

21話　Practice

基地に帰ってきた。まだ時間は2時くらいだった。俺はゲージを作ってまた練習することにした。すると、宮藤さんとリーネさんとペリーヌさんがやってきた。

「どうしたの三人とも？」

「いえ、石井さんの練習を見せてもらいたくて…」

「そう…わかった。いいよ、そこに座ってみててな」

「はい。そのできればあとで私たちにも…」

リーネさんは何か言いたいようだったが声が小さく後ろのほうが聞こえなかった。すると

「私たちにも教えてくれませんか？。石井さん」

「いいですよペリーヌさん、でも俺でいいんですか？」

「勿論ですわ。大体あなたしかこの部隊で満足に野球をおやりになられる方がいらっしゃらないのですから」

それから俺は練習を始めた。ちょうど５６球打ったところで、俺は自身の練習をひとまず終わりにした。

「さて…。誰から打つの？」

と言うと誰も何も言わなかった。恥ずかしいのだろうか。すると

「石井さん。私にやらせてもらえませんか？」

「いいですよペリーヌさん」

と言うと俺はペリーヌさんにバットを渡したすると

「重っ…。石井さんこんなに重いものでそのボールを打っているのですか？」

「ええ、それは１０００グラムですから２．２ポンドですねだいたい」

「そっ、そんなに重いんですか？」

リーネさんも驚いたようでそう訊いてきた。

「ええ、これくらい重いから慣性の法則が効率よく利用できるんですよ」

「慣性の法則って学校で習いました」

「そう宮藤さん？」

「はい。たしか物体が動いているときって力を与えなくてもその力を維持しようとする法則ですよね」

「うん。そうだね、これは重さに比例するから、重ければ重いほどボールを遠くに飛ばすことができるんだ。でも規定で決まっている

から一定以上は重くできないんだけどね」

「へ～」

「ささっ、ペリーヌさんやってみましょうか」

ペリーヌさんはゲージに入って構えた。だが打とうとしてもうまくスイングできない。

「ペリーヌさん。体が前のめりになりすぎです。軸足を後ろに持っていて体が後ろのめりになるようにしてください」

「わかりましたわ」

するとたちまち打てるようになった。嬉しかったのだろう顔が少しほほえんでいた。

「良かったですね。打てるようになって」

「えっ、まあガリア貴族の令嬢ならこれぐらいのことは」

「そうですよね。じゃあ次はリーネさん。やってみますか？」

「はい、お願いします～」

早速打ち始めた。すると何となくうまく打てない。当たってはいるのだがどうも擦っているような当たり方でなかなか真芯で捉えられていない。多分胸が邪魔しているんだろうがそんなこと俺の口からは言えない。

「リーネさん。もう少し腰を下ろして下半身が楽になるようにしてみてください」

「はい～、わかりました」

するとまたもうまく打てるようになった。多分目線が下がってボールがうまく見えるようになったのだろう。

「ありがとうございました。なんだかとても嬉しいです」

「そう。それは良かった」

「今度は芳佳ちゃんの番だね」

「うん、リーネちゃん。石井さん、よろしくお願いします」

「うん、同じ扶桑人だからビシバシやろうかな」

「ええー」

「冗談だよ、ほら中に入った入った」

宮藤さんは一番筋が通っていた。扶桑だったら野球は有名だしな。ただ彼女の場合は打ち上がってしまう。

「宮藤さん。もう少し待って打って」

「待って打つ？」

「多分、打つのが早すぎるんだね。一呼吸終えてから打ってみて、

きっとボールがよく見えて打ちやすいと思うよ」

「わかりました」

するとこれもまた打てるようになった。気がつくと夕方になっていた。

「良かったね。みんな打てるようになって。どう野球は楽しい？」

「はい。とてもおもしろかったです。ねっ芳佳ちゃん」

「うん、リーネちゃん」

「それは良かった。ペリーヌさんは？」

「えっ、私はその…。まぁ楽しかったですわよ」

「そう、なら良かった。またやりたくなったら来てね。多分ここにいるときにはやらせてあげられるから…」

「はいっ！」

三人は同時に返事をした。

「さて…、先に君たちは行っていいよ、俺はこれを片付けないといけないから」

「わかりました。行こうリーネちゃん、ペリーヌさん」

三人はそう言うと話しながら食堂のほうに向かった。俺はほっとし

たと同時に嬉しかった。

”さて食事に遅れちまうぞ。急いで片付けないと…”

僕は早速片付けに取りかかった。

夕食が終わるとみんなのいる前で

「石井さん。今日は先にお風呂に入ってちょうだい」

と言った。

「俺は構いませんが皆さんは？」

「大丈夫よ。みんないいって言っているわ」

「わかりました。じゃあ早速」

「うん。よろしくね」

「あっ、中佐。風呂を上がったら誰のところに行けばいいですか？」

「そうね…。とりあえずシャーリーさんのところに行ってちょうだい」

「わかりました」

と俺は言うと風呂に向かった。まだ夕方の6時半。久しぶりにこんなに早く風呂に入った。

「ふぅー、やっぱ一番風呂はいいな」

と、俺は風呂の中で呟く。ここのところいつも遅くに風呂に入っていたからゆっくり浸かりたかったのだ。僕は朝に衣は強いが夜はめっぽう弱い。だから扶桑にいるときも遅くても１１時くらいには寝て朝は４時ぐらいに起きるという生活を送っていた。

”そうだ、教科書もうすぐ来るのかな。着いたら連絡していくらか訊いとかないと”

なんて思っているともう３０分くらいはいった感じだったので出ることにした。脱衣所の時計を見ると案の定７時過ぎを時計の針は指していた。僕は急いで着替えた。

”シャーリーさんのところに行くんだったな…”

と自分で思いながら向かうことにした。

シャーリーさんの部屋の前に着くと俺はノックをした。

「は～い」

「どぞぉ」

中からはシャーリーさんとルッキーニさんの声が聞こえる。

「失礼します」

「石井か～。風呂が空いたってことだな」

「はい、それを伝えに来ました」

「やった～、おっ風呂お風呂～」

ルッキーニさんはなんだかかなり喜んでいるようだ。まぁそれならそれでいいのだが…。

「じゃあ、俺はこれで」

と言って僕が部屋から出ようとすると。

「あっ、ちょっと待ってくれよ」

と突然シャーリーさんに呼び止められた。

「はい。何か？」

「いやなんでもないんだけど。ちょっとぐらい話していかないか？」

「はっ、はぁ…」

俺はシャーリーさんに席に座らされた。すると

「石井。機械は好きか？」

多分そんなことだろうと思っていた。現に今もシャーリーさんの机にはいろいろな部品が置かれてある。

「まぁ嫌いではないですね。大学も工学部でしたから…」

「でも専攻は電気なんだろ？」

「えぇ、ただストライカーに補助エンジンをつけようかどうか悩んでいるんです」

「製図は強制的に友達にやらされたので…」

「ははははっ、そうなのか。私は製図が苦手だからな…」

「シャーリーさんは製図とかで性格に作るよりも試行錯誤のほうのイメージが強いですからね」

「そうなんだよ～。ああいうちまちましたの嫌いでさ。私はもっぱら音速を追い求めているからな」

「マッハですね。確か秒速３４０メートル前後とかですよね。高度にもよりますけど…」

「おっ、さすがだな～。だてに飛び級していないな」

「いえいえ、俺の電気式だったら音速はまだ夢のまた夢の話ですよ」

「そうか？。でも何でモーターで動くストライカーなんか作ったんだ？」

「電気なら空中でも発電できますからね。前にも言いましたが」

「そうだな、エンジンじゃそういうことはできないからな」

「ただモーターだと加減速が悪くて、最近は発電ブレーキで減速性

能は向上したんですが…」

「発電ブレーキ？」

「モーターの逆回転を利用して減速する方式です。自転車でライトをつけるとペダルが重くなった覚えはありませんか？」

「あぁ、確かに。それと同じなのか？」

「えぇ」

「ふ～ん。やっぱおまえすごいな」

「ありがとうございます」

「あっいっけね。私たちこれから風呂に入るんだった」

「あっ…すいません。すっかり忘れていました」

時計を見ると既に３０分は経過していた。

俺は急いで部屋に戻ることにした。

「じゃあ俺はこれで」

と言うと

「石井、ちょっと待って」

今度はルッキーニさんに止められた。

「石井。今度ここんとこ教えてくれない?。難しくてわかんなーい」

どうやら数学の問題のようだ。これくらいなら簡単だ。

「わかりました。じゃあ明日にでも…」

「わーい。ありがとー石井。シャーリーこういうの苦手だから」

「悪いな石井。私は数学あんまり得意じゃないんだ?。」

「いいんですよ全然。それよりもお風呂に…」

「そうだったな、ありがとう石井」

「じゃねー石井」

「はいシャーリーさん、ルッキーニさん。」

二人にそう言うと俺は部屋に戻った。

部屋に戻ると俺は久しぶりに机に向かった。

”何訊かれても大丈夫なようにしないと”

俺はひとまずさっきルッキーニさんに見せてもらった問題を解いてみた。結果は合っていた。

「う~ん。何がわからないのかな~」

俺がそう呟くと。

「そうね。ここのところじゃないかしら…」

と人差し指でさして教えてくれた。

「ありがとうございま…。って、中佐じゃないですか」

「あらあらノックしたんだけどな～。まぁいいじゃない」

「えっ、ええ…」

”ここは無理に逆らわないでおこう”

「ルッキーニさんに頼まれたのね。あの子この問題苦戦していたみたいだから」

「そうみたいですね。多分難しく考えているんだと思います」

「そうね。私もこの問題ちょっと悩んだわ。でも石井さん、すぐ解けたみたいね」

「えぇ、この解き方は大学で詳しく教わりましたから。下級生に教えることが出来るように」

「そうなの。期待しているわよ。この隊で一番出来るかもしれないんだから」

「ありがとうございます。それじゃ問題も解き終わったので寝ます」

「そう、お休みなさい。石井さん」

「はい、中佐も」

「えぇ、ありがとう」

と言うと中佐は俺の部屋から出て行った。

”ふぅ、黙っていて良かった…”

と今日ほど思った日はないと思う。ルッキーニさんには明日教えればいいか…。そう思っていると俺は寝たようだった…。

22話　Math

今日はぐっすり眠れたのだろう。気がつくと4時半を時計の針は指していた。

「久しぶりに勉強するか」

俺は急いで着替えた。今日は珍しく学生服に着替えた。昨日連絡があって今日は扶桑から補充隊員が来るらしい、同じ扶桑人と言うこともあってしっかり、落とし前をつける必要があるのだ。

「さて、ガウスの消去法でもやるか…」

このガウスの消去法というのは複雑な連立方程式を解くために存在する。計算量こそ多いが間違いが少なくできるし文字数が増えても柔軟に対応できることが大きな利点である。工学においては少なからず必要なものなのである。

”さてさてこれか…”

と言うと俺は無言で問題を解き始めた…。

集中するというのは恐ろしいもので気がつくと7時半になっていた。

”おっと、と言うことはもう食事か…”

俺は急いで食堂に向かった。案の定みんなもう食べ始めていた。

「すいません。遅れました」
と俺が言は言った。
「いいんですよ。石井さん。勉強していたんですよね?」
とリーネさんが言った。
「えっ!。なんでそれを?」
「何度もノックしたんですが返事が無くて…芳佳ちゃんと一緒に石井さんの部屋に入ったら石井さん凄く集中して問題を解いていらっしゃったので…」
そうか、俺は気づかないでずっと問題を解いていたのか。
「ごめんなさい、リーネさん。せっかく呼びに来てもらったのに…」
「いいんですよ。気にしないでください」
とリーネさんが言い終わると、ほんのちょっとの沈黙の後
「石井、問題解けたー?」
とルッキーニさんが訊いてきた。
「えぇ、解けましたよ」
「どうどう、難しかった?」

「いや～、そこまで難しくはなかったでしたよ」

「そうなの？」

「はい、俺が思うにルッキーニさん問題を難しく考えすぎなのでは？」

「そう？」

「はい」

「まぁいいやー、あとで教えてね」

「いいですよ」

俺が言い終わると少佐がルッキーニさんにお小言を言った。

「ルッキーニ、教わるのにその態度は何だ？」

「うじゅー」

「い、いいんですよ。少佐。まだ若いんですから…」

「はっはっは。お前も十分にまだ若いだろ？」

「い、いやぁ…その」

「うぅぅ、ルッキーニをこども扱いするな～」

「まぁまぁ、さて俺も朝ご飯にします」

と言って俺はすぐに朝食を取り始めた。食べ終わる途中がこう言った。

「今日は戦闘訓練を行います。でもその前にもうすぐ扶桑からの補充隊員が来るのでそれまでは各自部屋で待機していてください」

「了解！！」

全員が同時にそう言い返した。俺も一旦部屋に戻りルッキーニさんとシャーリーさんのところに向かうことにした。

それから15分後、俺は廊下を歩いていた。これからルッキーニさんに昨日の問題を解説しに行くのだ。とりあえず自前の教科書を持って行ってわかりやすく解説しようと考えている。

なんてことを思っていたら。シャーリーさんの部屋の前に到着した。俺がドアをノックすると

「は～い」

「どうぞー」

と中から二人の声がした。

「失礼します。ルッキーニさん昨日のやつ教えに来ましたよ」

「わるいなー石井。私があんまり人に教えるの得意じゃなくてさ…」

「いいんですよシャーリーさん。気にしないでください」

「うーん、石井、早く教えて教えて」

「はいはい、今教えますよ」

今回ルッキーニさんがわからないといった問題は以下のようなものであった。

問、A君は、硬貨を投げたとき裏と表の出る確率は同じと予想して、実際に硬貨を投げる実験を２０００回行った。その結果は以下の通りになった。投げた回数と表の出た回数は以下の通りになった。（左が投げた回数、右が表の出た回数）

１０回　４回
５００回　１９５回
１０００回　３７８回
２０００回　７６４回

この実験からA君の予想は正しいと言えるだろうか。証明せよ。

という問題だった。明らかに確率の問題なわけであるが、確率は一番思い込むと出来ない分野だとお俺は思っている。

「さてと、硬貨って言うのは当然分かりますよね？」

「当たり前じゃん。お金のことでしょ？」

「そうですよね？。因みに硬貨って表と裏以外に何かありますか？」

「ない」

「その通りです。つまりですね、硬貨を投げたときに表と裏の出る確率は確かに半分ずつ、即ち0．5なんですよ」

すると、シャーリーさんがあることに気がついた。

「あれ？。普通は2分の1じゃないのか？」

確かにその通りなのだが…

「今回は0．5にしておくと色々とわかりやすいんです。まぁ見ていてください…」

「それでそれで？」

「あぁ、だからですね…実験の回数を重ねれば重ねるほど、0．5に本来は近づいていく筈なんです」

「ってことはこれをそれぞれ割ってみればいいの？」

「えぇ。因みに言っておくと今回は間違っていることになりますよ」

「本当だ。意外と簡単なんじゃん。石井、すごいねー私は全然わからなかったのに…」

「さっきも言いましたが、難しく考えすぎなんだと思いますよ。わからなかったら紙に書いてみたり、値を入れてみたりすればいいんですよ。考え方が合っているれば必ずしもこんな風に解かなくていいと俺は思いますよ」

とルッキーニさんに俺が言うと

「石井説得力有るな～。私感心しちゃったよ。ところでさこの問題も教えてくれないか？」

とシャーリーさんが言ってその問題を見せてくれた。内容はこうである

問，次の式の値を求めなさい

（1＋2ｉ）×（5＋6ｉ）

これは複素数の考え方が必要なわけだが、ここで注意しなくてはいけないのは

ｉ×ｉ ＝ －1

になることである。このｉというのは虚数のことで数学上には2乗して値が負になるものが存在しないことからこのように定義されているのである。

「これは普通に展開して解けばいいんですよ」

と言って俺はまた別の紙に書き始めた。

「解いちゃってもいいですか？」

俺はシャーリーさんに念押しした。すると

「いいよ～。わからないところがあったら訊くよ」

と言われた。

「わかりました。それでは解きますね」

ルッキーニさんも不思議そうに俺が解くのを見ているようだ。

「大丈夫ですよ。ルッキーニさん」

と俺が言うとルッキーニさんの顔には笑みが出た。

「これはこうです。かけるの記号は省略しちゃいますね。

（1＋2ｉ）（5＋6ｉ）＝1・5＋1・6・ｉ＋2ｉ・5＋2ｉ・6ｉ＝5＋6ｉ＋10ｉ－12＝－7＋16ｉ

ってな感じで、答えは－7＋16ｉなんですよ」

「あのさぁ、虚数って言うのはどうなると負になるんだ?」

「偶数乗するときですね。ｉの自乗は－1になりますから」

「なるほど～ありがとう、わかりやすかったよ。ところでどうして石井はこの公式をパって出来たんだ?」

「これは扶桑では展開公式と言う風に教わって、覚えさせられるんです」

「ふ～ん、リベリオンじゃこういうことはやらなかったな」

「そうなんですか…。ただ覚えておけば結構問題を解くときは時間短縮になるので便利ですよ」

「ふ～ん、石井、おかげで助かったよ」

「いえいえこちらこそ。シャーリーさん」

俺はルッキーニさんにも訊いてみた。

「ルッキーニさん」

「ん?。なぁに?」

「どうでした、わかってもらえましたか?」

「うん、石井の教え方めっちゃくちゃ上手いよ。シャーリーもこうだったらいいのに…」

「こうじゃなくてゴメンな」

「はは、それは良かったですね。それではミーティングルームに向かいましょうか。そろそろ補充隊員の来る時間ですよ」

「そうだな行こうルッキーニ」

「うん、シャーリー」

「ホントに親子みたいですね…」

「こらっ!。私はまだ16だぞ!!」

「まぁ細かいことは」

「それもそうだな」

俺等は話しながらミーティングルームに向かった。あれ待てよ、年下につっこまれたのって今日が生まれて初めてかもしれないなぁ…。

23話　New　Face

俺とシャーリーさん、ルッキーニさんはブリーフィングルームに入った。見るともう全員そろっているようだった。

「それではこれよりミーティングと補充隊員の紹介を行います」

中佐の一言で皆は話を止めて、静かになった。

「まず石井さん」

”えっ！、なんだ一体”

と俺は思いながらも

「は、はいっ！」

と言ってその場に起立した。

「あなた宛に私の部屋に荷物が届いてます。送り主はＴｏｋｙｏＥｍｐｉｒｅ　Ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙ：東京帝国大学第一工学部電気科です」

「わかりました、きっと教科書だと思います。後で取りに行きます」

「重たいから気をつけてね」

「はぃ…」

中佐は笑顔で答えてくれるも、俺は身震いしながら座った。最近、中佐と話をするだけで何だか怯えてしまうようになってしまった。そんな俺の姿を見かねてか

「石井、大丈夫か？」

と隣に座っていたシャーリーさんが訊いてきた。

”中佐の笑顔がダメなんだとは言えない”

「えぇ、大丈夫です」

「本当か、顔色悪いぞ？」

「きっ、気のせいですよ…」

「そっ、そうか…」

とシャーリーさんはそう言うとまた中佐のほうを見た。

「それでは、補充隊員の紹介を行います。竹井さん、入ってきてください」

ドアが開き、補充隊員の女性が入ってきた。扶桑の軍人で坂本少佐と同じ制服を着ている。

「皆さん、初めまして。私は扶桑皇国海軍竹井醇子大尉です。これからよろしくお願いします」

「それでは皆さんも自己紹介をしてください。それではエイラさん

から…」

と言ってみんなは順番に自己紹介を始めた。この人、美人だなぁって言うのが俺の第一印象だった。そしてどこかであったかもしれないと言うことも思った。多分気のせいだろう。

「それでは石井さん、お願いします」

”ようやく自分の番か、緊張するな…”

と思いながらも俺は

「はい」

と答えながら、またその場に立った。すると脇からシャーリーさんが

「石井、リラックスリラックス…」

とぼそぼそ辛うじて聞こえるぐらいで呟いてくる。いじってるのだろうか。

「俺は扶桑皇国海軍石井明範准尉です。年齢は17才で今は…一応大学院1年生です」

と俺は言った。すると

「あなたが石井さんね」

竹井大尉はそう言い返した。

「えっ、俺のこと知っていたんですか？」

「ここに着く間に資料を読んだわ。帝国大学なんて凄いわ、私は海軍兵学校だったから…」

「たしか、少佐と同じ隊にいたと存じておりますが」

「えぇ、私と美緒…あ、坂本少佐は以前リバウ遣欧艦隊に以前所属していたの」

「そうなんですか…」

と俺が答えると少佐が突然話に割り込んできた。

「竹井は、リバウの貴婦人と呼ばれていたんだ石井。どうだ、気に入ったのか？」

「な、何言ってるんですか少佐」

「ん？。お前もそう言う年頃だろ？」

こうなるといじられるのはもはや宿命だろう。

「石井～この部隊でよかったなぁ～」

「しゃ、シャーリーさん！。勘弁してくださいよ…」

「へ～、じゃあ石井はあたし達に興味も関心も湧かないと…」

「そ、そういうわけじゃないですけど…」

俺は何も言えなくなってしまった。

「あっ、まぁとにかくよろしくお願いします」

「えぇ、よろしく」

と大尉が答えると僕は席に座った。

「ではこれで今日のミーティングは終了とします。竹井さん、この後基地を誰に案内してもらいたいかしら?」

「そうですね、それじゃあ石井さんにお願いしようかしら…」

「えっ、いいですけど…」

「どうしたんだ石井、なにか不服か?」

「いえ。その…俺この部隊に一番新しく入りましたから分からないことたくさんあって…」

「あなたの話いろいろと聞きたいの。お願いできないかしら?」

「はい、わかりました。教科書を取りに行かなくちゃいけないんですけど…」

「構わないわ。一緒に行きましょう」

「は、はぁ…」

”まぁいいか、綺麗な人だし特にいやがる理由もないしな…。でもこの竹井大尉…本当に美人だなぁ、なんで俺なんかに?”

「それでは、解散」

俺等は起立をして中佐に敬礼をした。その後中佐は部屋に戻ったようだ。竹井大尉はと言うと他の隊の人と話をしているようだ。

「先に教科書を取りに行ってきます。大尉」

「わかったわ。あとでここに戻ってきて」

「はい」

俺はミーティングルームを出て中佐室に向かった。

「中佐、預かっていただいてた荷物を引き取りに参りました」

「これよ、重たいけど大丈夫?」

「えぇ、これくらいなら…」

「石井さん、竹井大尉に気に入られたようね」

「そうなんですかね…。まぁ嬉しいですけど」

「大尉の案内よろしくね。午後から訓練よ」

「わかりました。失礼します」

と言って俺は部屋を出た。

「石井さんにも勉強以外に春が来たのかもしれないわね…」

と中佐は僕に聞こえないほどの小さな声で呟いた。

大丈夫と入ったものの、さすがに重たい。これを部屋に持って行くのは結構しんどいが引き受けた以上仕方がない。

「重いなぁこれ…」

自分の部屋の前に荷物を置いたあと急いでミーティングルームの前に僕は向かった。既にさっきから15分以上経過していた。

「すいません。大尉。遅れてしまって」

「いいのよ石井さん。それより案内できるかしら…」

「はいわかりました。どこから向かいましょうか」

「そうね、部屋に連れて行って欲しいわ」

「わかりました、ではご案内します」

俺はそう答えると大尉を部屋の前まで連れて行った。

「ここが大尉の部屋です。どうも来た人順らしいようで、俺は隣の部屋です」

「そうなの、わかったわ。何かあったらすぐに行かせてもらっても構わないかしら？」

「はぁ…いいですよ」

「ありがとう」

俺は竹井大尉の笑顔に危うく見とれてしまいそうになった。

「えっと、じゃあ次はハンガーに案内します」

と言って俺は一通り基地の中を案内した。

「…さて、こんなものですかね。」

「ありがとう石井さん」

「いえ、そんなことはありませんよ」

「あとで話があるんだけど構わないかしら…」

「えっ…はぁいいですが、訓練もありますから夜になっちゃうと思いますよ」

「いいわ。これからよろしくね石井さん」

「はいこちらこそ」

と言うと大尉は部屋に戻った。

”ふぅ、なんだか中佐の言ってたとおりみたいだな”

と俺が思っていると後ろからシャーリーさんとエイラさんがやってきた。

「石井、どうだった初デートは？」

「何言ってるんですかシャーリーさん。脅かさないでくださいよ」

「本当ダロ？。石井、大尉の笑顔に見とれていたじゃないカ」

「そ、そんなこと…ないですよ」

「ホゥ、上官に嘘をつくのカ…」

「だ、だからそんなこと…」

こんな具合で俺が話していることは大尉もわかっていたようだ。

「石井さん…か、気に入ったわ、もっと仲良くなれればいいな、このボールのことも覚えてないだろうし」

と大尉が部屋でそう言っているのを俺は知る由もなかった…。

24話　訓練

昼食を取り終わると、俺達は滑走路に向かった。これから訓練なのである、今日は射撃訓練のようだ…。

「それでは今から訓練を始めます。皆さん主武装の準備をしてください」

中佐がそう言うと。俺は主武装の準備を始めた。俺の主武装は前にも言ったが左利きであるため俺は当然のことながらみんなとは逆向きに銃を携えている。

「あら石井さん。銃の向きが逆じゃない？」

と大尉が訊いてきた。まぁ知らないのも当然だろう。

「竹井さん、石井さんは左利きなんです」

宮藤さんがフォローしてくれた。

「そうなのね、でもさっきペンは右で持っていたわよね？」

「鉛筆と箸だけは右で持つようにしています」

と俺が言い返す大尉はなるほどという顔をした。

「次、石井さんの番ね」

「わかりました、中佐」

俺は構えた、見ると向こうの方に小さな的があることがわかる。

「いいか石井。精神を集中させるんだそうすれば当たる」

少佐はそう言った。確かにそれはわかっていた。

”無風…今だな”

俺はなんのためらいもなく銃を撃った、すると見事に俺の撃った弾丸は的に当たったようだ。

「うん、見事だ石井。最近精度が上がっているな、この調子でがんばるんだ」

「ありがとうございます。坂本少佐」

俺が少佐と話していると

「石井なかなかやるナ、まぁそんなもんじゃ私には勝てないけどナ」

と言ってきた。

「エイラさんにはまだまだですね…」

と俺が言い返すと

「エイラそんな風に言っちゃダメ」

案の定エイラさんはサーニャさんに怒られた。エイラさん、なんだ

か俺のせいで怒られたと言いたいような顔をしていた。なんかまずいことしちゃったのかな…。

訓練は3時過ぎには終わった。俺は一旦部屋に戻って学生服からいつも通り野球用の服に着替えた。

”さてさてまた練習といきますか…”

俺はそう思いながらいつものゲージの場所に向かった。すると

「石井さん、キャッチボールしてくれませんか?」

と宮藤さんが言ってきた。

”野球に関心を持ってくれたみたいだな…。なら良いことだ”

「いいけど、グローブはあるの?。このボールは素手で取ると痛いと思うけど」

「えっ、それは…ないです」

俺は自分のグローブと一応もう一つグローブを持ってきていた。

「気にしないでいいよ、もう一つあるから。右投げだよね…」

「えぇ、そうです」

「ならよかった」

俺は右投げ用のグローブを貸した。それからしばらくキャッチボールをした。しばらくすると

「そういえば、石井さんって左投げなんですね…。今気がつきました」

「そうだね、打つときはどっちでも良いんだけど…」

「そうなんですか～、私は野球は知っているだけで学校でしかやらなかったので全然上手くないんです～」

「誰だって最初はそうだよ。そこから練習して上手くなるもんさ。射撃と同じ」

「そうですか…」

３０分くらいずっとキャッチボールをした後、宮藤さんは俺にありがとうと言ってその場を去っていった。

”ふぅ～、久しぶりに投げたからあとで肩ちゃんと整えておかないと…”

と思いながらも俺はゲージを作って今度は打撃の練習を始めた。初めて１５分くらいすると竹井大尉がやってきた。

「石井さんって野球が好きなのね」

「あっ、大尉。どうしたんですかこんなところにまで…」

「宮藤さんから聞いて来てみたの」

「そうなんですか…」

そう言うと俺はまた練習を始めた…。

5分くらいしたらボールが無くなり俺は回収作業に取りかかろうとした、するとまだ大尉はいた。

「あの、大尉」

「どうしたの?。石井さん」

「打ってみますか?」

「良いの?、私がやっても」

”やりたそうな顔してるしな。宮藤さんから話を聞いてるみたいだし…”

「良いですよ。僕が後ろで見ていますから」

「ありがとう。じゃあグローブ貸してくれるかしら?」

「えっ、あぁキャッチボールですね…。わかりました」

それから俺と大尉はキャッチボールをしばらくした。打ちますかって聞いたのに、キャッチボールしたいなんて…竹井大尉って…?。

「石井さん。宮藤さんから聞いていたとおり左投げなのね」

「はい。左利きですからね…」

それから15分ほど俺と大尉はキャッチボールをした。気がつくともう日もかなり傾いていてボールが見えにくくなっていた。

「大尉、そろそろボールも見えなくなってきたので終わりにしませんか？」

「そうね。ありがとう石井さん。これからどうするの？」

「とりあえず、ここを片付けてそれから部屋に戻ります」

「そう、今夜あなたの部屋に向かわせてもらうわ」

「あぁ、話があるんでしたよね」

「えぇ」

「わかりました」

俺がそう言うと大尉は基地の中に消えた。俺も急いでボールとゲージを片付けて部屋に戻った…。

25話　Salmiakki

今日の夕食は珍しく北欧のものだった。

「あの、これは…？」

俺は誰とは問わずに訊いてみた。すると

「これは私とサーニャが作ったんダ。感謝しろヨナ」

とエイラさんが言ってきた。

「いや、そういうことじゃなくてこの料理はなんなんですか？」

「これはボルシチって言ってオラーシャの伝統的な料理なんダ」

「そうなんですか。てことはサーニャさんが…。あとこの黒い飴みたいなものは？」

「あぁ、それはサルミアッキ。スオムスのお菓子ダ。美味いんダゾ～」

「そうなんですか。いただいても良いですか？」

「オゥ、食ベロ食ベロ」

俺が口に入れた瞬間に

「あっ、石井さん…遅かった」

とサーニャさんが小声で言った。なんのことか徐々にわかってきた。この飴、エイラさんは美味いと言っていたがこれ、噛めば噛むほど不味くなる…。何て表現すればいいのだろうか…醤油というか、ゴムタイヤというか、とにかく不味い。

「これ…不味いですよ～。とにかく…」

「ナッ、ナンダ。どこが不味いんだヨ！！。美味しいダロ！！」

「いや、これは扶桑の人には合いませんよ」

「あら、そうなの。私はとても美味しく思ったけど」

「ホラ、ミーナ中佐はそう言ってるゾ」

”多分中佐は味覚音痴なんだろう…。まぁそんなこと言ったら何されるかわからないな…”

と何とか食べ終わって俺がこんなことを思っていると

「石井さん。ごめんなさい、エイラが酷いことしちゃって…」

とサーニャさんが言ってきた。

「良いんですよ。気にしないでください…。人の感覚は違って当然ですから…。」

「石井さん。このボルシチは私がお母様に教わったの」

と言われたので一口食べてみるととても美味い。さっきの例の飴のおかげでこの料理がとても美味しく感じる。

「とても美味しいです」

「石井さんに喜んでもらえて嬉しい…」

ボソッと何か呟いていたようだが、俺には聞こえなかった。

「えっ、今何か？」

「うぅん、何でもないの…」

「そうですか…」

俺はそう言うと食べることに集中した。食べ終わってほっと一息していると自分の前の席に竹井大尉がいることがわかった。

「あっ、大尉。前にいたんですね、気がつきませんでした」

「あら石井さん。偶然ね」

「ここは何でもかんでも入隊した順なんですね…」

「そうみたいね。石井さん、美緒はどう？」

「いい人だと思います。訓練は厳しいですが他のことに関しては優しいですからね」

「ふふ、美緒は相変わらずなのね…」

「大尉も十分貴婦人だと思いますけど…」

「そう？、ありがとう」

大尉が顔を赤くしてるなぁ。よっぽど恥ずかしいのかなぁ？。

「そういえば、この基地には風呂が一つしかないので先に女性が入るんです。今日は月が出てて明るいので僕はこれから素振りに行きます」

「そう、気をつけてね」

「ありがとうございます。今日は俺が大尉の部屋に向かえばいいですか？」

「そう。わかったわ、そうしてちょうだい」

「了解しました」

俺はそう言うと食器を片付けて素振りに向かった。

食事は終わると俺はすぐに外に出た。今日は満月のようで外はかなり夜の割には明るくなっている。

「ふぅ～、ヨシッ。汗かきついでに行くか。みんな8時半くらいまで風呂に入っているから1時間くらいなら時間はあるだろう。右と左で３０分は出来るな」

言い忘れていたかもしれないが俺は両打ち…いわゆるスイッチヒッ

ターだ。

「まずは右から行くか」

野球では左打ちのほうが何かと有利なのである。と言うのも、一塁への距離が一歩分前後近いし、多くの投手が右打ちなので投手への恐怖心を与えることも出来る。しかも左で野球をする人自体少ないためあまり対戦できない面から有利なのでもある。

２０分くらい右で振ったのち、今度は左に切り替えた。

”やっぱ左打ちの方が俺にはしっくり来るな…”

そう思いながら僕はまた更に３０分近く練習した。気がつくともう８時を若干過ぎていた。

「いけない。そろそろ部屋に戻らないと」

気がつくと手がヒリヒリしていた。部屋に戻ってみると少し驚いた、俺のバットは木目調に若干黄色がかったものなのだが、グリップの部分が少し赤くなっていた。

「そうか…、手を切っていたのか…」

思い起こせば右で打っているときにあまりにもフルスイングして結果、体を支えきれずに転んでしまった。多分その時にケガしたのだろう。

”参ったな～、ここには救急箱なんかないからな～”

すると

「石井さん。風呂が空きました…って、またケガしちゃったんですか？」

「あぁ宮藤さん、さっき素振りしてたらケガしたみたいなんだ」

「大丈夫ですか？。治しますから手貸してください」

ほんの数十秒でそのケガは治った。

「悪いね、いつもいつも」

「良いんですよ。これぐらい」

俺は財布から１０ポンド紙幣を取り出した。

「これ受け取っておいて…」

「いっ、良いんですよ。これぐらい」

「受け取っておいてくれ。これぐらいしないと俺の気が済まないから」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「うん、ありがとうね。風呂が空いたんだったよね、入りに行ってくるよ」

「はい、それじゃ」

俺は風呂に向かった。今日はとても疲れた気がする、久々に長風呂だった…（と言っても３０分くらいだった）。

風呂を上がると、すぐに部屋に向かった。

”そういえば、竹井大尉に呼ばれてたんだったな…。”

俺はすぐに大尉の部屋に向かった。

ドアをノックすると

「どうぞ」

と中から声がしてきた。間違いなく竹井大尉の声だ。

「失礼します」

俺はそう言いながら、竹井大尉の部屋に入った。中はまだ来たばっかりだから綺麗だった。僕の部屋はと言うと机の上には教科書とわら半紙のせいで散らかっていた、机以外もバットとボールが置かれていてお世辞にも綺麗とは言えない状況であった。

「石井さん。忘れないでちゃんと来てくれたのね…」

「えぇ、大尉の命令ですからね」

「そう…。そこに座って」

「はい」

俺は大尉に言われたとおりにした。

「それで話というのは？」

「あなた、東京帝国大学の大学院にいると朝言っていたわよね」

「はい。それが何か？」

「だから、あなたに興味があるの」

「はぁ…」

「だから、これから暫くの間。こうやって一緒に話がしたいの構わないかしら？」

「えぇ、余裕があればいいですよ」

「そう。ありがとう。じゃあ今日はもう良いわ。部屋に戻っても構わないわよ」

「そうですか、わかりました。失礼します」

と言って俺は部屋を出た。すると後ろから何か違和感を感じた。俺が振り向くと中佐がいた。

「石井さん。竹井大尉と仲良くするのは良いけれどほどほどにね。

ウィッチ同士の恋愛は禁止よ…」

と相変わらずしてしまう。

「はい、重々承知しています」

「じゃあね、お休みなさい」

「はい、中佐も」

と言うと俺は部屋に戻ってすぐに寝た。素振りもしていたし疲れていたから。

その頃竹井大尉はと言うと、俺と暫くの間、さっきみたいに話が出来ることをとても喜んでいたようだった。

”石井さんとお話が出来るなんて、私最高だわ。でも、いつまで私に階級をつけて呼ぶのかしら。そろそろ竹井さんって呼ばれてみたいものだわ…”

といった具合に…。

26話　Rains　day

翌朝、目を覚ますと雨が降っていた。とても酷い雨のようだった。
するとドアのノック音が聞こえた。

「はぁい。どうぞ」

と俺が答えると入ってきたのは竹井大尉だった。

「大尉、こんな朝早くからどうしたのですか?。まだ5時ですよ?」

「あら、石井さんこそどうしてこんな朝早くに?」

「俺はいつも4時半くらいには起きてるんですが今日は寝坊しちゃって…」

「あら、どうして?」

「俺の部屋にはカーテンがないですよね?」

「えぇ、それが?」

「日の出になると太陽の光がちょうど部屋に入ってくるんです。だから強制的に起こされるんです。ただ雨の日は目覚まし時計がありませんから寝坊してしまう…って言うことなんです」

「そうなの。よく考えているのね」

「えぇ、まぁ。だてに大卒じゃありませんからね」

と俺が笑顔で言うと

「ふふ、それもそうね…」

「ところでどうして大尉はそんなに朝早くに?。今日は雨も降っているのでネウロイも来ないと思いますよ。今までそうでしたから」

と俺は言った。と言うのもこれまでネウロイとの格闘があったときには必ず雨は降っていなかったのだ。

「私はなんだかあんまりうまく眠れなくて…。どうも時差ボケみたい」

と言うと大尉の足がふらついて俺に倒れかかってきた。

「た、大尉!。…大丈夫ですか」

「えぇ、大丈夫よ…。なんだかとても疲れちゃったみたい。悪いんだけど私の部屋まで介助してくれない?」

「い、いいですよ。ただこのままではちょっと恥ずかしいです」

こう言ってる間もずっと大尉は俺に寄りかかったままだったのだ。

「ふふ、石井さん。初(うぶ)なのね」

「た、大尉。そう言うこと言うと更に恥ずかしくなるじゃないですか」

俺はいても立ってもいられず。大尉を押し戻した。

「ありがとう。早速部屋まで手伝ってちょうだい…」

「わかりました」

大尉と俺の部屋は隣なので、俺は急いで大尉を部屋の入口まで連れて行って部屋の中に入れた。

「これで大丈夫ですか？」

「えぇ、ありがとう。もう大丈夫よ」

「それじゃ、失礼します」

と言って俺は恥ずかしくて急いでまた自分の部屋に向かった。

「もぅ石井さんったら、ダメじゃない。ああいうときはずっとああしておいて欲しいものなのに…」

と俺が部屋に戻ったとき。大尉は自室で呟いていた、この行動全てが大尉の自作自演であったことは言うまでもない…。

今朝は雨で全員非番になったので一同が食堂に介していた。今日はシャーリーさんとルッキーニさんの当番なのだがいつも通り缶詰とパンだけだ。

「まったく、リベリアンの食事は不健康きわまりないな」

とバルクホルン大尉が文句を言うと

「これだからカールスラントの堅物は～」

「なっ、なんだと！」

いつも通りの言い争いが始まる。

”ケンカするほど仲が良いとはまさにこのこと…”

と思いつつも今日はブリーフィングルームの借用を中佐に頼みたいのだ。大学院の教科書が届いたのだが本の内容がわかりにくいので問題を書いて答えていきたいのだが、紙では小さすぎるのでブリーフィングルームの黒板なら大丈夫だろうと思ったからだ。俺は早速中佐に打診した。

「中佐」

「どうしたの石井さん」

「これから1時間くらいブリーフィングルームを貸していただけませんか？」

「どうして？」

「いや黒板が使いたくて…」

「ホントはダメなんだけど、良いわ1時間だけよ」

「ありがとうございます。それでは早速」

「えぇ」

俺が食堂を出ると中佐は少佐に訊いた。

「石井さん。黒板なんか何に使うのかしら。美緒わかる?」

「ん?、そうだな~聳井のことだ。たぶん勉強に使うんじゃないか?」

「そうねぇ、確かに美緒の言うとおりだわ。後で観に行ってみる?」

「いやぁ、私たちには分からないことをきっとやっているんだろう」

「くすっ、それもそうね。そっとしておいてあげましょうか…」

このことを竹井大尉はしっかり聞いていたようだった。というか聞いていないはずがなかったようだった。

俺は早速教科書を持って黒板に向かった。今回の問題は前にも取り書いた「ガウスの消去法」使って連立方程式の解を求めるものである。これは大学から送られてきた、復習用の内容だ。

~~ 問題、次の連立方程式が解を持つかどうか調べ、持つ場合にはその解を求めよ。~~

$$
\begin{aligned}
7x + 4y + z &= 2 \\
4x + 3y + 2z &= 4 \\
10x + 9y + 8z &= 0
\end{aligned}
$$

と言うこの連立方程式が解を持つかどうかを調べることである。この式をガウスの消去法に持ち込むために（ｘ　ｙ　ｚ　ｂ）という行列に変形する必要がある。

（ｘ　ｙ　ｚ　ｂ）

７　４　１　２　…　？

４　３　２　４　…　？

１０　９　８　０　…　？

とこのような行列に変化すればいいのである。

まずこの式では？と？をひっくり返して

４　３　２　４　…　？

７　４　１　２　…　？

１０　９　８　０　…　？

としたあとに？を2倍してその値を？で引けばいいのである。すると

８　６　４　８　…　？×２

７　４　１　２　…　？

１０　９　８　０　…　？

となり、これを？で引くので

１　２　３　６

$$\begin{matrix} 7 & 4 & 1 & 2 \\ 10 & 9 & 8 & 0 \end{matrix}$$

となる。あとは一番上の式を2番目、3番目の式にそれぞれ－7倍、－10倍して足せばいいのである。すると

$$\begin{matrix} 1 & 2 & 3 & 6 \\ 0 & -10 & -20 & -40 \\ 0 & -11 & -22 & -60 \end{matrix}$$

となって二番目の式を－10でわれば綺麗になる。

$$\begin{matrix} 1 & 2 & 3 & 6 \\ 0 & 1 & 2 & 4 \\ 0 & -11 & -22 & -60 \end{matrix}$$

となる。ここで2番目の式を11倍して一番下の式に入れると

$$\begin{matrix} 1 & 2 & 3 & 6 \\ 0 & 1 & 2 & 4 \\ 0 & 0 & 0 & -16 \end{matrix}$$

となる。ここで、これを元の連立方程式に復元することが肝心なのである。これを復元すると

$$\begin{matrix} x & + & 2y & + & 3z & = & 6 \\ y & + & 2z & = & 4 & & \\ 0x & + & 0y & + & 0z & = & -16 \end{matrix}$$

となり、一番下の式が　０　＝　－１６　になってしまい矛盾してしまう。このことからこの方程式の解は存在しないという訳なのである。

「ふぅ、こんなものかなぁ？…おっ、合ってる！！」

と俺が呟くと不意にミーティングルームのドアが開く音がした。

「何それ？。なんだかとても不思議なことをしているのね…」

「竹井大尉。どうしたんですか？」

「あなたがどういう問題を解いているのか見に来たくて…」

「そうなんですか…これはガウスの消去法って言って、たくさんの文字があったときに使うと便利な方法なんですよ」

「へぇ…面白いわね」

と言うと大尉は黒板の方にやってきた。

「やっぱり飛び級で大学まで進学した人なのね」

「いえ、この問題が解けるようになるのには結構時間がかかりましたよ。最初は全然出来なかったんですから」

「でも今できるようになったんでしょう？」

「えぇ、負けたくなかったので…。自分に」

「立派だわ。あなたのそういうところには階級に関係なく尊敬するわ…」

一瞬俺の胸もドキッとこの時はした。

「俺も大尉のことは尊敬していますよ」

「そう、どうして？」

”石井さんにそんなこと言われてとても嬉しいわ”

と大尉は思いながらも質問した。

「人前で絶えず貴婦人であり続けられる精神力は立派だと思います」

「そう、ありがとう。私、石井さんにそう言われるとても嬉しいの…」

「そうなんですか？」

「えぇ…」

”やっぱり中佐の言っていたとおりだな。竹井大尉は俺のことがお気に入りのようだ”

「それじゃあ俺も今日はここまでにします」

「そう、じゃあまたあとでね。今日は何をするのかわからないけど…」

と大尉は言うとその場から消えようとしていた。

「竹井大尉！」

と俺は声を張って呼び止めた。

「どうしたの？。石井さん」

「あとで、一緒に…その…」

「わかってるわ、今夜は私があなたの部屋に向かうわね」

「ありがとうございます」

そう俺が言うと竹井大尉は笑みを浮かべながら、その場を去っていった。

”なんだかすっきりしたな”

すると、中佐がやってきた。

「石井さん、そろそろブリーフィングルームよろしいかしら？」

「あっ、中佐。わかりました。今消します」

「そうしてちょうだい」

俺は言われたとおりに黒板の字を消して、中佐に礼を言った。

「貸していただいてありがとうございました」

「これからも使いたいなら私に言ってちょうだい。それから30分後にミーティングを行うから、必ず来てちょうだいね。場所はいつものところよ」

「了解しました」

俺はそう言うと自室に戻った。

「石井さん春到来おめでとう」

という中佐の歓迎の言葉も聞かずに。どうやら、恋愛禁止といつも言っている中佐でさえもこの時ばかりは俺に聞こえないように祝福しているのであった…。

そうとはわからず、俺は部屋に戻った。

「昨日の血のせいでまた変色してるな、磨くか…」

と俺は言いながら、部屋の中で黙々とバットを磨くことにした。

30分後、俺は今度はミーティングルームに向かった。ミーティングがあるらしい、こんな雨の日に一体何を話し合うのだろうか…。俺はそう思いながらもミーティングルームのドアを開けた。また俺が」一番最後だった。

「石井さん。遅いわよ、今度から気をつけてね」

俺はいつも通り背筋を凍らせながらも

「すいません、中佐」

と言いながらいつもの席に座った。

「はい。それでは全員集まったところで今回のミーティングの概要を説明します」

と中佐は言いそのあとこう続けた。

「最近、気温が上昇してきたためこれから暫くの間の海での訓練の許可がおりました。よって、明日は天候次第では海での訓練になります。心しておいてください…。皆さん、頑張ってね」

どうもそれだけのことであるのかと思っていたら、

「それと、着任した竹井大尉の壮行会を今夜行いたいと思います。皆さん、協力してね」

なるほど、大尉のお祝いか…。僕はそう思いながら自分なりに考えたのだがなかなか名案が思いつかない…。

俺はミーティングが終わったあと、宮藤さんとリーネさんに相談してみた。

「二人はどうするんだい？」

と俺は訊いた。

「また料理を作ろうかと…。こういうときはみんなお国料理を作るんですよ」

とリーネさんが答えた後に

「前は私も扶桑料理を作りましたから石井さんも一緒にどうですか？」

と宮藤さんから僕は誘われた。

「そうだな…そうするか。ところで何を作れば良いんだい？」

更に俺は宮藤さんに訊いてみた。

「そうですね。また魚料理はどうでしょうか？」

「そうだな～。じゃあまた買いに行くか…。二人は来る？」

と俺は訊いた。二人の答えは当然”行く”だった。

昼食後、俺等は早速外出届を出し例の市場に買いに行った。俺はそうでもなかったのだが、二人は市場に着くとゲッソリしていた。訊いたところ酔ってしまったようだ。確かにここまでの道は舗装なんてされてないからぬかるんでいて酔うのも当然か…。

そう思っているといつもの魚屋の前に着いた。すると

「おや、また買いにきたのかい！。今日は何にする？」

と魚屋の店主が言ってきた。確かにこの間みたいにたくさん買えば顔の一つや二つは覚えてくれるだろう…。と、そんなこと思いながらも僕は店主に尋ねた。

「今日は何があるんだい？」

俺も聞き返した。すると

「今朝カンパチが揚がったね～、旬だから美味いよ」

と言われた。俺は迷うことなくそれを二つほど買った。そのあと俺等は野菜専門店にも向かい僕は大根と長ネギを買った。

「石井さん。今日は何を作るんですか？」

帰り道、宮藤さんにそう訊かれた。

「今日は、このカンパチを一匹は刺身でもう一匹は大根と長ネギで煮物と味噌汁を作ることにするよ」

と俺が答えると

「うわぁ、石井さんの料理は結構人気なんですよ！」

と宮藤さんが言った。

「そうなのかい？」

「えぇ、前につみれのおつゆを作ってもらったときも、お風呂の中で石井さんのおつゆが美味しいってみんな言ってましたから…」

「そうなのリーネさん?」

リーネさんは突然僕に話を振られたので少々驚いていたようだが

「はい、そうですよ。お風呂の中でみんな美味しかったって言ってました。特にサーニャさんとエイラさんは気に入ったようです。だから石井さんにボルシチをサーニャさんは作ったんですよ」

「ふ～ん、そうなんだ…」

俺は何となく相槌を打ちながら

”もしかして、この間サーニャさんが呟いていたことってこのことだったのかもしれないな…。でも敢えて訊かないでおこう”

と思った。

それからしばらくして俺等は基地に到着した。まだ4時くらいだったが、今回はカンパチが大きいので早めに調理にかかることにした。まずカンパチを俺は宮藤さん、リーネさんと協力しながら3枚に下ろした。ただ途中でリーネさんはリタイアした。どうもあまりの血の多さに精神的に疲れてしまったらしい。

気がつくともう5時15分前になっていた。魚はと言うと身の上に水を軽く流して血の気を取っておいた状態で置かれていた。さすがに生きが良いだけあってまだまだ新鮮だ、俺は早速大皿の上にさくさくと刺身を切っていった。ただここで困ったのが包丁である。刺身包丁なんてここにはなかったのでなるべく刃が薄いのを使いたかったのだが、生憎薄い包丁はみんな右利き用だった。しょうがな

いから僕は右で刺身を切ることにした。

「あれ、石井さん。左利きじゃなかったんですか？」

「そうなんだけどね宮藤さん、ここの刃が薄い包丁はみんな右利き用しかないから…」

「そうなんですか…。なら、私も手伝います」

そう言うと宮藤さん、それからリーネさんもカムバックし手伝ってくれた。気がつくと厨房にはたくさんの人がいた、どうもいろいろな料理を作っているらしい。

「石井、期待してるゾ。」

突然エイラさんにそう言われた。

「エイラ、石井さんを困惑させちゃダメよ」

「サッ、サーニャ…」

「いいんですよ二人とも、お互いに頑張りましょう」

この北欧コンビはまた温かそうな料理を作っていた、ただサルミアッキはもう勘弁だ…。

「にヒヒー、石井味見させてー」

「あっ、ダメですよルッキーニさん…て、もう遅かったか…」

「うわ～、美味しい」

「悪いな～石井、ルッキーニが勝手につまんじゃって…」

「良いんですよシャーリーさん、一枚や二枚」

この二人はと言うと、どうもサンドウィッチでも作っているようだった。

「あっ、ペリーヌさん」

「あぁ、石井さん、それから宮藤さんとリーネさんまで…」

「ペリーヌさんは何を？」

「私はサラダを作っていますわ」

「そうなんですか、彩り抜群ですね」

「そっ、そう…ありがとうですわ」

俺の言ったとおりペリーヌさんはサラダを作っていた。どの野菜も俺のカンパチのように新鮮そうだった。

「石井～、味見～」

”なんだかさっきものこの下りがあった気がする…”

「あ、ハルトマンさん。何してるんですか」

「いいじゃ～ん、さっきルッキーニは食べてたんだから…。そんなこと言ってるとトゥルーデみたくなっちゃうよ」

「何を言ってるんだハルトマン。済まないな石井」

「いえ、別に良いんですけどね…。美味しいですかハルトマンさん」

「うん。とっても！」

喜んでくれているようだ。正直嬉しい…。この二人はと言うとカールスラントの料理を作っていたようだ、イモじゃなくて良かった思うのは俺だけだろうか…。

俺は最後に煮物と味噌汁を作った。両方とも味は問題なさそうだ。そんなこんなしていると壮行会は始まった。

「それでは、竹井大尉の着任を祝って乾杯！！！」

俺等は一斉に食べ始めた。俺の料理は人気があったらしくすぐにみんな無くなってしまった。中でも味噌汁はとても良い味だったようだ。

「石井さん」

竹井大尉が僕のところにやってきた。

「大尉。どうかしたんですか？」

「あなたがこの味噌汁作ったんだって？」

「えぇ、今回はカンパチで作ってみたんです、いかがでしたか？」

「とても美味しかったわ。また作って欲しいわ…」

「そう言ってもらえると嬉しいです。それと大尉今日は9時頃に俺の部屋に来てください」

「わかったわそれじゃあまたあとで…」

と言うと大尉ら女性陣は風呂に言ってしまった。俺は皿洗いを始めた、今日は量がかなり多かったが何とか全部洗い終えることが出来た。

「石井さん。ここにいたんですね。お風呂、空きましたよ」

「ありがとう宮藤さん…。でもまだちょっと残ってるんだ…」

「いいですよ、私がやっておきますから…」

「そう、ありがとう」

と俺は言うと後は宮藤さんに任せて僕は風呂に入った。不意に鼻の下をさすってみるとひげが結構伸びていることに気がついた。俺は慌てて剃ったものの、カミソリ負けをしてしまった。俺が風呂を上がると既に8時50分を時計の針は指していた。俺は急いで甚平に着替えて部屋に戻った。

しばらくしないうちに大尉が入ってきた。

「こんばんわ。大尉」

「えぇ、今上がってきたのね」

「はい、なかなかいい風呂だったもので、出ように出られなくて」

「ふふ、石井さんったら」

それからしばらく俺と大尉は話をした。すると大尉はいきなり俺にこう訊いてきた。

「そういえば石井さんは海軍だったわよね…」

「えぇ、そうですけどそれがどうかしたんですか？」

「私や美緒もあなたと同じ海軍だから階級はつけなくても良いのにどうしてつけるの？」

「何となくですかね…」

「確かに美緒には石井さんの場合は坂本少佐の方が合うものね…。でも…」

「でも？」

「私は大尉よりも他の呼び方で読んで欲しいわ、なんだか堅苦しくて…」

これほど焦ったことはなかったし、考えたことも今まではなかった。

”これは参ったな～、なんて呼べば良いんだ？。恥ずかしい…”

”あらあら石井さんったら私が一言言っただけでこんなに顔赤くして…。ふふ”

「じゃっ、じゃあ、竹井さんで良いですか？」

「うん。そうしてちょうだい」

「わかりました。たい…いえ竹井さん」

「うん。それじゃあもう寝る時間ね。お休みなさい、石井さん」

「竹井さんもお休みなさい」

「ありがとう」

と言うと竹井さんは俺の部屋を去っていった。しばらくすると俺は部屋の明かりを消してベッドに潜り込んだ。

”竹井さん…か、なんだか竹井さんのことを思うと最近胸が痛くなるんだよな～。でも、こういうのはいけないんだよな。何もなかったことにしよう…、でもそんなこと出来るはずがないよぉ…。もしかして、いや違う。きっと俺は竹井大尉のことが…”

と思っているうちに俺は寝てしまった。その頃竹井さんは

「石井さんったら、竹井さんだなんて…私ますます気に入っちゃったわ。私も明範さんって呼んじゃおうかしら？」

なんて笑顔で呟きながら喜んでいるのであった…。

27話　confession

翌朝、いつも通りの時間に俺は起きた。天気は昨日の雨が嘘のようだ。雲一つ無い快晴である。みんなまだ寝ているのだろう。時間は朝の4時、俺ににとってはいつも起きる時間だが他の人はそうはいかないのである。俺は早速着替えを済ませていつものゲージのところに向かうことにした。

15分後、全ての準備を終えて俺は廊下に出た。俺はいつもの通り、バットとボールを持ってあの場所に向かった。この時竹井さんの部屋の前を通ったのだがまだ寝息が立っていた…が、実は竹井さんが寝たふりをしていたことを俺は知らなかった。

”くすっ…石井さんたら私が起きてることに気がついてないみたいね…”

俺がまだアップをしている頃、偶然俺の前を坂本少佐が通りかかった。

「石井じゃないか、こんな朝早くから何をするつもりだ?」

「野球の練習です」

「おぉ!。まだ続けていたのか?」

「はい。これだけはいつも欠かさず」

「はっはっは。前も言ったが野球の練習も訓練と同じだ。欠かさずやることが肝心だな。がんばるんだぞ!」

「ありがとうございます。少佐も朝の修練ですね」

「そうだ、今日はこの辺を巡回しているからまた会うかもしれない」

「多分次にここで会う頃にはバッティングをしていますから、是非」

「うむ、ありがとう」

そう言うと少佐は走っていった。

”朝から凄いな少佐は…ところでさっきから視線を感じるな…”

と俺は思って後ろを振り向くが何もない。ペリーヌさんの部屋のカーテンがわずかに動いた気がしたのは気のせいだろうか…。

アップを終え俺は早速バッティングを始めた。俺は東京帝国大学に在学し同時に野球部にもいたためいろいろな選手との交流があった。とりわけ自分のあこがれだったのは東選手と、大下選手だった。東選手は東京帝国大学野球部のＯＢで東京六大学野球で初めてホームランを打った選手である。大下選手は明治大学の選手でフォームが印象的だった。彼のフォームは今までの短打狙いのフォームとは違って明らかに長打狙いだったのだ。だから僕も彼のフォームを参考にしていた。過去形になっているのは今は自分で新しいフォームを取り入れたからだ。名前をつけるんだったら一本足打法とでもなるのだろうか?。俺は相手の投手がボールを放ったときに右足を挙げてバランスを取り、その反動でボールを打ち返す。これで真芯で捉えると確実にボールは観客席まで飛んでいくのだ。この時俺が気にしていることは、右足を少し外に出しておくことだ。こうすると

柔軟に対応することが出来る。おっと、長々と話してしまって申し訳なかった。とりあえず俺はそんな事を考えながら野球の練習をしているというわけだ。

”きっと大下選手は職業野球に行くだろう…”

俺は今もそう思っている。

２０分くらいすると後ろからまた視線を感じた…竹井さんだ。

「どうしたんですか、竹井さん?。まだ4時半過ぎですよ」

「あら、そう言うあなたは?」

「俺は毎日のことですんで、勿論昨日みたいに雨が降った日はこうはいきませんが…」

「行くんだったら私も起こしてくれれば良かったのに…」

「えっ…?」

暫くの沈黙の間

”そうか、竹井さんキャッチボールでもしたいのかな?”

と思い、俺はグローブを取り出した。

「竹井さん、キャッチボールしますか?」

「あらあら、わかっちゃうものなのね」

「えぇ、何となくそんな気が…」

「ふふ、あなたって全く…」

俺は竹井さんの声が小さくて後ろの方が良く聞こえなかった。

「今なんか言いましたか？。竹井さん」

「うぅん、なんでもないわ。さぁ、早速始めましょう」

俺と竹井さんはキャッチボールを始めた…。ここまではいつも通りの筈だった。

事の発端は坂本少佐であった。どうも基地を一周して走ってきたあと俺と竹井さんがキャッチボールをしていたのを見ていたらしい。

「なんだ、石井は本当に竹井と仲が良いんだな」

と言いながら基地の中に戻ってそのまま中佐室に向かったようだ。

「ミーナ、石井と竹井のことを放っておいて良いのか？」

「う～ん、難しいところよね。ただあんまり仲が良いから無理に引き離すのもどうかと思うわ…」

「確かにな…」

この時、運が悪かったのは外で盗み聞きをしていたものがいたのだ。供述によると3人いて、ハルトマンさん、シャーリーさん、ルッキ

ーニさんだった、ここまで来ればこの後どうなるかはだいたい予想が付くだろう。案の定、俺と竹井さんが朝食を取りに食堂に一緒に来たら（まぁこれはこれで間違っていたのかもしれない）こう言われた。

「おい石井、キャッチボールだけで良いのか？」

「は？。どういう意味ですかシャーリーさん」

「ふふ～ん、しらを切っても無駄だよ」

「ハルトマンさんまで、一体どういうことなんですか…」

「石井、竹井大尉とつきあってるんだろ？」

「え！！、何言ってるんですか？。俺は竹井さんとキャッチボールしてただけで…」

「なら、どうして今日になって急に大尉から竹井さんに呼び方が変わったんだ？」

「それはその…竹井さんと話し合ってそうしようと…」

「そうなのか大尉？」

「えぇそうよ、でも石井さんから竹井さんで良いですかって聞かれたわ」

「ほら～、やっぱり付き合ってるんだろ？」

”全く大尉まで助けてくれないのか…。よくよく考えたらこの部隊の中で男性は僕一人しかいないからなぁ…”

「た、竹井さんも何とか言ってくださいよ…」

と俺が言うと竹井さんは妙に悲しそうな顔でこう言った。

「じゃあ、石井さんは私と付き合いたくないってこと?」

”はっ?!。何言ってるんだこの人は?”

当たりは静まりかえる…。当然だろう、なんだかみんなの目が俺にそれなりの弁解を求めている。

”どうしよう。このままじゃ誤解は解けないし、だからといって正直に話すと竹井さんを傷つけることになってしまうかもしれない…扶桑男児たるものそんなことはしたくないし…”

俺はそう思いながらこう答えた。

「お、俺はまだ竹井さんとは付き合ってはいません、今朝のキャッチボールもたまたま俺の練習しているところに竹井さんが来ただけなんです…。でも…その、言いにくいんですけど…竹井さんのこと俺隙みたいですから…その…」

すると竹井さん驚いた様子で

「じゃあ、いつか付き合ってくれるのね…」

と訊いてきた。

「えっ、えぇまぁ」

”竹井さん…どう受け止めたのかなぁ…？”

竹井さんの目が潤んでいる

「石井さん、ありがとう」

そう言うと竹井さんは俺に飛びついてきた。周りの人も顔が赤くなっている、勿論僕も例外ではなかった。

「た、竹井さん？！」

「嬉しい。いつかこうなってくれるって信じていたんだもの」

「でも何で？」

というと大尉は俺に一つのボールを取り出した。

「これは？」

「覚えていないの？」

「このサイン…俺のじゃないですか？。やっぱり竹井さんって…」

「くすっ、気がつくのが遅すぎるわ」

思い出した。俺が大学野球で最初に打ったホームランボールだ。実はこのボール、試合終了後にサインをして欲しいと海軍のウィッチ

の女性に頼まれたのだ。折角出しと思い俺もそれに従うことにしたのだが…そのサインをした人が、竹井さんだったというわけだ…。どこかで見た顔をというのはこのことだったんだろう。

「そういうことだったんですか…」

「そうよ、私があの時サインを頼んだ海軍のウィッチだったの」

”そうか、これも縁だったんだな”

「竹井さん、これは運命なのかもしれませんね…」

「そうかもしれないわね」

暫くの沈黙の後、みんなに祝福された。中佐や少佐も今回は大目に見てくれているようだ、ましてや少佐は自分にも少なからず原因があることを珍しく理解していて少佐も協力してくれるらしい。

「それじゃあ、竹井さん朝ご飯にしますか…」

「そうね、石井さん」

俺達は全員で食事を取ることにした。そういえばこれから海での訓練だ。周りの人達は茶化してくれたけどね…。竹井さんは喜んでいたけど、俺はずっと心臓が壊れそうだった。

「中佐、食べたらすぐ海ですか」

「そうね、１０時くらいからにしましょうか…」

「わかりました」

軽い会話を交わした後、俺は自室に戻った。すると、竹井さんがやってきた。

「石井さん」

「なんですか?。竹井さん」

「私たち、これからどうしましょうか?」

「そうですね…うぅんと…お互いに、その…」

「わかってるわ。それ以上言わなくても…」

「そうですか。それではまたあとで、今日はなんだか疲れたので少し寝たいんで」

「あらあら、あんなことで疲れちゃったの?」

「あんなことって…」

「ふふ、冗談よ。お休みなさい、石井さん。またあとでね」

「えぇ、ありがとうございます」

と言うと竹井さんは俺の部屋を去っていった。しばらくすると俺は寝たようだった、目覚まし時計も勿論合わせて…。

その頃竹井さんはと言うと

「石井さんとの関係が認められたなんて、今でも信じられないわ…いつキスしちゃおうかな?…くすっ」

などと言いながらも、非常にうれしがっていたのだった…。

またその頃中佐室では

「美緒、良いの?。あんなこと勝手に認めちゃって…」

「あぁ、すまないミーナ」

「全く、これだから扶桑の魔女は…。でも良いわ、石井さんも竹井さんもとても喜んでいたみたいだから…」

「あぁ、それはそうだな。結局私の言っていたとおりだったんだな」

「あら、私も気がついていたわ。石井さんと竹井大尉がお似合いだって事はね…」

「はっはっは。ミーナも気がついていたのか…」

と話しているのであった…。

28話　海

目が覚めた、時計の針はもう9時半過ぎを指していた。

「もうこんな時間か…起きるか」

と呟きながら俺は起きた、これから海上での訓練があるのだ。宮藤さんやリーネさんから聞いた話だと、何でもストライカーをつけたまま海中に落ちる訓練だそうで過酷だそうだ。

”気合い入れていかないとな…”

俺はそう思いながらも、水着姿に着替えた。水着と言ってもただの海パンだけでは幾ら7月とはいえどもあまりに寒いので上着を着ることにした。

「あら、石井さんも着替え終わっていたのね…」

竹井さんが部屋に入ってきた、それは良いのだがノックをしてくれなかった。

「た、竹井さん。入るときはノックぐらいしてくださいよ～。驚くじゃないですか」

「あら、ごめんなさい。次から気をつけるわ」

「…。竹井さんも着替え終わっていたんですね」

「えぇ、そういえば石井さんは水泳は出来るの？」

「普通に泳ぐことぐらいなら…」

「そうなの…、あらやだ、もう行く時間よ」

「そうですね…。行きましょうか…」

俺はストライカーを持たされて海岸に向かった。見るともうみんなはそれなりに訓練という名で遊んでいる…実にうらやましい。

「いいか、万一操縦中に海上に落下したときの訓練だ。心してかかれ！」

訓練となると少佐は厳しい、しかもこの崖思った以上に高い、これを落ちるのは確かに気が引けるだろう。

「い、石井さんからどうぞ」

宮藤さんからそう言われた…。

「いやぁ、宮藤さんからで…」

「えっ、じゃあリーネちゃんからいいよ」

「う、ううん。芳佳ちゃんからでいいよ」

なんて3人で譲歩し合っていたら、遂に坂本少佐が

「さっさと飛び込め！！」

と俺達を一喝した。しょうがないから俺が一番最初に飛び込んだ。

ザバーン！！！

と大きな音同時に大量の水しぶきを上げながら僕は海に入った。１８年間生きてきた中で一番豪快な海への入り方だ。ただ俺は泳げないわけではない、プールで泳ぐことぐらいなら普通にこなせる。俺はすぐにストライカーを脱いで、浮かび上がった。

「ふぅー、しょっぱいな～やっぱり海は…」

「おぉ、石井初めてにしては早いじゃないか。まだ１５秒くらいしかたっていないぞ」

「ありがとうございます」

と俺が少佐と話していると、突然足を掴まれた。

「うわっ！！」

見ると宮藤さんとリーネさんが俺の足にしがみついているのだ。このままでは三人ともおぼれてしまうので俺は早速２人を助けた。二人はまだ慌てている。

「もう大丈夫だから、二人とも落ち着いて…」

と俺が言うと二人も冷静さを取り戻したようだ。

「全く…。石井はもう大丈夫そうだな、よし上がって良いぞ」

「ありがとうございました。坂本少佐」

「宮藤、リーネお前達はもう少し練習だ」

「えー！！」

と二人はしょげていた。

俺は早速、普通に海に入り始めた。例の北欧コンビは海を眺めているだけだ、琉球の人々も海は眺めるのがいいから海には入らないと聞いたことはあったが、俺は国は違えど初めてそうしている人たちを見ることが出来た。

”せっかくだから入ればいいのに…”

なんて思いながら俺は海の中に潜ってみた。このドーバー海峡は結構魚もいるようだ。扶桑でも俺は祖母の家が外房にあったから九十九里などには行ったことはあるが九十九里は太平洋と言うこともあって波がとても強かったがここは海とは思えないほど穏やかだ。

「随分沖まで来たなぁ…」

するとまた足というか腰が掴まれた。また俺はおぼれかけた。案の定掴んでいたのは竹井さんだった。

「竹井さん…俺を殺さないでくださいよ」

「あら、そんなつもりはなかったわよ、あなたに掴まりたかっただけ…」

「いや、その…」

竹井さんはどんどん顔を近づけてくる。はっきり言って恥ずかしい。

「何かしら?」

「は、恥ずかしいです…」

「くすっ…」

見ると浜辺からだいぶ距離がある。

「俺はもう戻りますけど竹井さんは?」

「あら私だけを置いていくつもり?」

「そっ、それは…。もしかして片道で体力無くしたんですか?」

「そうみたい、疲れちゃったわ。このままじゃ私…溺れちゃうわ」

”狙ってたのかな?”

と俺は思いながらも気がついたら

「じ、じゃあ俺の背中に乗っていてください」

と言っていた。

「ありがとう。石井さん…」

と言うと竹井さんは僕の背中に乗っかった。それを確認して俺も泳ぎ始めた…。

浜辺に着くと俺は死にそうだった、ただでさえ波の抵抗で戻るのが大変なのに竹井さんまで乗ってきたんだから…。

「石井、大丈夫カ?」

「えぇ、なんとか、エイラさん」

「ソウカ…」

「エイラさん」

「ン。何ダ?」

「サーニャさんとエイラさんは入らないんですか?」

「ウン、スオムスでもオラーシャでも海には入らないからナ…」

「そうなんですか。やっぱり」

と俺がエイラさんと話していると、俺の隣に竹井さんが寝転んできた。俺も動こうとしたのだがあまりにも疲れていて体が言うことをきかない。

「た、竹井さん」

「あらどうしたの？。石井さん」

「いきなり隣に寝転がれたら誰だって驚きますよ」

「そうなの？。私は全然気にしないわよ、特に石井さんだったら…」

「にヒヒー、石井達熱いねー」

「本当だな～、ルッキーニもっと言ってやれ～」

「あっ、シャーリーさんもルッキーニさんも止めてくださいよ」

「石井と大尉はお似合いナンダナ」

「エイラもそう思ってたの？」

「サーニャもカ？」

「うん。見ていて、石井さんも竹井大尉もとっても楽しそう…」

「み、皆さん…」

と俺が言い返すと

「ありがとう。四人とも…。」

と竹井さんは竹井さんでずっとこのままであって欲しいようだ。

”やれやれ、俺はどうすれば良いんだ?。どうもしなければいいのか”

俺は空を眺めた、綺麗な青空だ。ネウロイもどこにもいない。予報によれば明日来るそうだ。

「石井さん」

突然竹井さんにそう言われた。と言うか周りを見渡すと宮藤さん、リーネさん、ルッキーニさん、シャーリーさんも砂浜に横になっていた。

「どうしたんですか?」

「この空の下のどこかで戦争なんかしていると思う?」

「思いたくもないですけど現実には起こっているんですよね…」

「えぇ、私たちも頑張らないとね」

「はい」

と俺は言うと起き上がって基地に戻ることにした。

「石井さん」

「今度はどうしたんですか竹井さん?」

「起こして」

「はい？」

「起こして欲しいな」

”このままじゃ多分竹井さんは動かないだろうから起こしてあげるか”

と思い俺は竹井さんを起こしてあげた。

「ありがとう」

すると今度は竹井さんは俺に寄っかかってきた。

「恥ずかしいですよ」

「いいのよ、これくらい」

「でも…」

「上官の命令よ」

「はい」

「くすっ、よろしい」

”軍ってこういうことも出来るか…”

と思いながら俺と竹井さんは基地に戻った、あとで基地に戻ったときみんなに付き合っていると茶化されたと言うことは言うまでもな

い。

みんなの茶化しから避難するために自室に戻った。幸いここには誰もいなかった。見るとベッドの布団がしわくちゃだった。

”いけない、海に行ったときこのままにしていたんだった…。ちょっと直すか”

俺が布団を直しているとドアがノックされた。

「あっ、はぁい」

と俺がドアを開けるとそこにいたのは竹井さん…じゃなくて宮藤さんだった。

「あっ、石井さん…布団を直していたんですね」

「うんまぁそうだけど、どうかしたの？」

「いぇ、その…一緒にお話がしたいなって思って…」

「あぁそうなのか…いいよじゃあ入って」

「いいんですか？。布団がまだ…」

「こんなのいつだって出来るさ…」

そう言うと俺は宮藤さんと一緒に滑走路の先のいつもの場所に向かった。海風のおかげで日差しは強いものの涼しい。

「ここは涼しいな～」

「そうですね、海が目の前ですから」

と言って俺が宮藤さんの顔を見るとやけに顔が暗い。

「どうしたんだ?。そんなくらい顔して…。お前さんらしくないな」

「実はその、石井さんって本当に付き合っているんですか?」

「いや～、今はそうではないけど…、やっぱりそう見えるのか」

「はい。みんな気にしていますよ」

「まぁ今後そういう関係になるとは思うけど…いやなって欲しいけど今はまだかな…」

「そうなんですか?」

「うん、だって竹井さんと付き合うことに俺が拒否する理由ないし。でも不安なんだよね」

「何が不安なんですか?」

「俺、こういうの初めてだから…」

「えっ、石井さんそう言う経験無いんですか?」

「工学部の電気科なんて女が入るわけないしね」

「そっ…そうですね。ごめんなさい」

「良いんだよ…。不安で一杯さ。でも楽しみなんだ」

「そうなんですか？」

「俺は今も竹井さんが寄っかかってきたりすると恥ずかしい、でも竹井さんにはずっとこうしていて欲しいんだ」

「何でですか？」

「俺も男だからね、綺麗な人にあんなことずっとされていたいって思うさ」

「石井さんも青春を楽しんでいるんですね…」

「宮藤さんだって同じだろう？」

「えっ！？」

「だってリーネさんと仲が良いじゃないか」

「それはその…」

みるみる宮藤さんの顔が赤くなっていく。

「ははは」

「もう…石井さん。止めてくださいよ」

「いいんだよ、これで。わかったでしょ？」

「何がですか？」

「これが青春って言うんだよ。青春に年は関係ないのさ。ただ一番青春を楽しめるのが２０歳前後だと僕は思ってるんだ。だから気の持ちようだよ」

と俺が言うと宮藤さんも冷静さを取り戻し再び笑顔になった。

俺と宮藤さんは基地に歩き始めた。

「石井さん、ありがとうございました」

「いいんだよ、俺も決意が固まったから…」

「えっ！、もしかして」

俺はそう言うと宮藤さんにしぃーというポーズをとった。

「うん、でもそれを言うのはもう少し後でにするよ」

「そうですか。楽しみにしていますよ」

「ありがとう。それとこのことはわかってるよね。くれぐれも内密にね…命令なんかしなくても守ってくれるよね？」

「はい！！」

と言うと宮藤さんは基地の中に消えていった、見るとリーネさんと一緒にいるようだ。

”宮藤さんも青春を楽しめよ”

俺はそう思いながら自室に戻って再び布団を片付け始めた。すると

「あら石井さん。布団を片付けていたのね…」

と竹井さんがノックをしながら俺の部屋に入ってきた。

「えぇ、そうなんですよ。朝そのままで海に行っちゃったので…」

「ふふ、石井さんらしいわね。いいわ、私にも手伝わせて」

「いいんですよ。竹井さん、これは僕の仕事ですから」

「いいのよ」

「でも…」

「上官の？」

と竹井さんは笑顔で言ってきた。なので俺も負けじと笑顔で

「命令ですね…」

と言うと

「そう」

と竹井さんも笑顔で俺にそう言いかえしてきた。

俺と竹井さんはすぐに布団を直し終わった。

「ありがとうございました。竹井さん」

「いいのよ、これくらい」

「それじゃあまたあとで」

「えぇ」

というと竹井さんは部屋を出て行った。なんだか話があったようだ。

案の定この時自室で竹井さんは

「もぅ、石井さんったら、ちゃんと片付けてくれてないとダメじゃない。せっかくお話が出来ると思ったのに…」

と笑顔で言っているのであった。

気がつくともう夕方になっていた…。

29話　解説

夕方と言ってもまだ4時を少し回ったくらいで、まだまだ明るかった。しかもブリタニアは高緯度の国でもあるため日の入りがこの時期は7時半くらいなのだ。今日は海に行ったこともあり疲れていたので練習には行かなかった。するとドアのノック音が聞こえた。

「はぁい」

と言いながら俺がドアを開けるとそこにいたのはリーネさんだった。

「おぉ、どうしたんだい？、リーネさん」

「ちょっと私に付いてきてもらっても良いですか？」

「いいけど、どうかしたの？」

「あの…芳佳ちゃんがわからないって言った数学の問題が私にもわからなくて…、石井さんなら何とかなるんじゃないかと思って…」

なるほど、一緒に勉強していたらわからなくなってしまったということだったのか。

「わかった。ちょっと待ってて中佐にブリーフィングルームが使えるか聞いてくるから」

「ありがとうございます。石井さん」

と言ったはいいものの中佐の部屋に行くがただでさえ俺にとっては

億劫なのに、ましてやブリーフィングルームを借りることなど出来るのだろうか…。俺はそう思いながらも中佐室に向かった、案の定ドアをノックすると中佐はいた。

「失礼します、中佐」

「あら、どうしたの石井さん？」

「あの、またその…」

「ブリーフィングルームを貸して欲しいって言いたいのね」

「どうしてそれが？」

「顔に書いてあるもの…」

そういえば最近中佐の笑顔見ても大丈夫なようになってきたようだ。今までは笑顔を見る度に背筋が凍るような思いをしてきたって言うのに…。

「ということは…？」

「いいわよ、食事までにしてちょうだいね」

というと僕は中佐室を出て行った。実はこの時中佐は

「ようやく石井さんも私に慣れてきたようね。一時はいじり過ぎちゃったから心配したけどもう大丈夫ね…」

と小声ながらも笑顔で言っているのであった。

俺は宮藤さんとリーネさんをブリーフィングルームに呼び出した。
すると、竹井さんも付いてきたようだ。

「あの宮藤さん、どうして竹井さんも？」

「はい、どうしてもと言うので…」

「そうなんですか、竹井さん？」

「えぇ、ダメかしら？」

「宮藤さんとリーネさんは？」

「私は良いですよ全然、リーネちゃんは？」

「うん、私も大丈夫ですよ石井さん」

と二人も言っているので良いことにした。

その後三人を席に座らせて俺は教壇の前に立った。すると

「ふふ、石井さん。まるで先生ね…。懐かしいわ～、私もこんな時があったものね…」

と竹井さんが言った。

「そうですね、今だけ俺が先生ですね…。さてそれじゃ解くことに

しますか?。宮藤さん問題を見せてくれない?」

そう言うと僕は宮藤さんが手渡した問題を僕は黒板に書き始めた。

〜問,　１０から１００までの自然数までのうち、素数の積で表される数をｘとする。このｘを素数の積で表したとき、掛け合わされている素数の２の個数をｙとする。例えば４０の時は

４０＝２×２×２×５

なのでｙ＝３となる。この時以下の問に答えなさい。

（１）

ｘ＝５６の時、ｙの値を求めなさい。

（２）

ｙ＝４となるときに最も大きい値を求めなさい。

（３）

ｙ＝２となるようなｘの個数を求めなさい。

〜

という問題である。

「じゃあ解きましょう。三人も準備は大丈夫ですか?」

「「「は〜い」」」

と三人はこの場の空気を読んだのか、こどもっぽく答えてくれた。

「よっし、それじゃあ行こう。まず素因数分解って言うのは分かる？」

「えっと…ある数を積の形で表す…ことですか？」

「そうだね。宮藤さんの言ってるとおりだ。まぁ４０の例を挙げてるから分かると思うけどね。それで、まず（１）なわけだけども、ｘ＝５６ってなってるから、これを素因数分解すればいいわけでさ。

５６＝２×２×２×７

になるんだ。だからｙはって訊かれたら？」

「３ですね！」

「そう！、宮藤さん。正解だね。リーネさんと竹井さんは？」

二人も納得してくれているようだ。

「石井さん、どうして５６の素因数分解はそうなるの？」

「えっとですね…まずこの５６っていうのは偶数ですよね？」

「そうね」

「偶数って事は必ず２の倍数になるんです。そもそも、偶数は２で割りきれる数って定義されてますから。で、素因数分解を求める方法はひたすら割っていくのが楽だと思いますよ」

「割っていく？」

「えぇ。まず

５６÷２＝２８

になりますよね？。この２８って言うのも偶数ですから２で割り切れますよね？。だから

２８÷２＝１４

になります。次に出てきた１４って言うのも２で割り切れて

１４÷２＝７

です。最後に出てきた７は素数と言いまして、７と１しか約数を持たないんです。だからこれ以上他の数で割ると言うことは出来ません。だから素因数分解をすると５６は２×２×２×７になるんです。こんなもんで大丈夫ですか？」

竹井さんも分かっていることを前提に質問していたようで、笑顔で返してくれた。

「さてと、次は（２）だけども…」

俺が言葉を続けようとするとサーニャさんとエイラさんがブリーフィングルームに入ってきた。

「ちょっとタイムね。エイラさんとサーニャさんも前に来たらどうです？」

「石井さん、何をしているの？」

サーニャさんがそう訊いてきた。

「今宮藤さんがわからなかった問題を解説しているんです。よかったらいかがですか？」

「そう…私聞きたいわ。エイラは？」

「ムッ、サーニャがそう言うなら私も聞いていくゾ」

「わかりました。二人とも前に来てください。何も後ろで聞く必要なんて無いんですから…」

と俺が言うと二人も前の方にやってきた。二人が席に着いたのを確認すると俺はまた授業を取り直した。

「さてさて、じゃあ続きから行きましょう。（2）の問題はまずｙ＝4って言ってるから、実際にやってみればいいんだ。

2×2×2×2＝16

だよね。それでこの16に奇数をかけて出来るだけ100以内で大きな数を見つければいいわけ。とりあえず実際にかけていってみようか…。まず1の時は16、3の時は48、5の時は80、7の時は112。さてと、7の時は100をもう超えちゃってるからその一つ手前の数…つまり5が正解って訳なんだよ」

「なるほどぉ…」

「石井さん、どうして奇数じゃないといけないの？」

サーニャさんの質問に俺は驚いた。意外と興味津々のようだ。

「偶数って言うのは必ず2の倍数です。もし16に2をかけると2×2×2×2となってyの数が増えてしまうんです。だから偶数は今回使えないんです」

「そう…あぁ、そうか！！。ありがとう、石井さん」

サーニャさんも納得してくれているようだぞ。意外と俺の授業はわかりやすいのかもしれないなぁなんて重いながら最後の問題に取りかかることにした。

「さてと、それじゃあ次は最後の問題ですね。yが2となるようなxの数はいくつありますか。というわけだけれどもyが2って事は2×2で4だよね。ということはある奇数に4をかけた数が100を超えないものを探してその数を求めればいいんだ。まず100を4で割ると？」

「25ナンダナ」

「そうですね。だから一番大きい数は25というわけ。それで、ここから2ずつ引いていった数の個数がこの問題の答えになる、というわけなんだ。だから23，21，19，17，15，13，11，9，7，5，3の計12個が答えになるって言うわけ」

「石井さん1は入らないんですか？」

「えっとねえ、1って言うのは特殊な数で素因数分解の一意性って言う考え方があってね。そもそも、素数って言うのは自分とでしか約数を構成することが出来ないようなものを言うんだ。3とか5とか11とかみたいにね。だからその考えから行くと1は含めることが出来ないんだ」

「へぇ…そうなんですか。どもありがとうございます」

「さてと、というわけでこの問題の解説はお終いです。宮藤さんとリーネさん、わかった？」

「ばっちりです。ありがとうございました」

「石井さん、ありがとうございました。これで芳佳ちゃんにも教えることが出来るようになりました」

「はは。それはよかったよ、教えた甲斐があった」

他の人達も宮藤さん同様に納得した顔つきだった。

「サーニャさん、エイラさん。どうでした？」

「ウン、わかりやすかったゾ。石井なら先生にもなれるナ」

「ありがとう石井さん。面白かったわ」

「竹井さんは？」

「石井さん、さすがだったわ。どうも、ありがとう」

「いえいえ…さてと、それじゃあ夕食に向かいましょうか?。時間もいい頃ですから」

と俺が言うとみんなで食堂に向かい始めた。向かうと竹井さんが俺を引っ張って呼び止めた。

「石井さん」

「どうしたんですか?。竹井さん」

「ありがとう、久しぶりに学生になれたわ」

「いえいえ、これぐらいのことならいつでも出来ますよ」

「じゃあ今度は私にも教えてちょうだいね」

”おぉ、竹井さんの笑顔はまぶしくて見えない…。おっといかんいかん”

「えっ、えぇ。いつでもいいですよ」

というと竹井さんと俺は再び歩き出した…。

30話　食

食堂に着くとこれまた驚いた。なんだか竹井さんと隣り合わせになるようにみんな座っているのである。

「こっ、これは誰が？」

と俺がみんなに聞こえるように言うと

「わったしだよ～」

とハルトマンさんが言った。

「は、ハルトマンさん。一体どうして…？」

「当たり前でしょ～、付き合ってるんだから」

「いや、だからその…」

竹井さんはというとずっと笑顔だ、当然のことながら俺が拒否できるわけ無かった。

「石井」

といきなりバルクホルン大尉が俺に向かって言った。

「はい！、どうかしましたか大尉？」

あまりの不意打ちだったので少し驚いてしまったが、何のことはな

かった。

「すまない、エーリカも悪意はなかった。許してやってくれ」

”大尉もハルトマンさんと仲が良いんだな”

俺は、忘れていたようだ。俺と竹井さんのためにみんなが協力していることを。

「大尉、大丈夫ですよ。みんな、どうもありがとう」

と俺が言うと拍手が起こった。中には口笛で更に盛り上げてくれる人もいた、誰かなんて言わなくてもわかるだろう。それから俺と竹井さんは席に座りのんびり食事をした。みんな俺と竹井さんには特別なことがない限り話しかけてこなかった、最大限の配慮なんだろう。でもここまでされると竹井さんは嬉しそうだが僕はとても恥ずかしい、顔が固まってしまう。すると竹井さんが話しかけてきた

「石井さん」

「はい、竹井さん?」

「緊張しているの?」

「わかりましたか…。なんだか恥ずかしくて」

「そうね、さっきから顔が真っ赤だもの」

俺もそれは気がついていた、顔が赤いのはわからなかったが顔がとても火照っていたからだ。

「やっぱりそうでしたか」

「ふふ、石井さんたら…」

今日は箸があまり進まなかった、こんな状態じゃなかなか食べられないからな。

「石井さん、食べさせてあげようか？」

「きょ、今日はまだ良いですよ。いずれそうしてもらえれば嬉しいですけど」

「ダメなの？」

「だって恥ずかしいじゃないですか」

「私は良いと思うわ」

「でっ、でも…」

「はい、あーんして」

周りの人達は、黙りこくって俺達の事を見ている。これはみんなの期待に応えてあげないと行けないのかなぁ？。俺は従うことにした。

「あーん…」

”うん、これは美味いななかなか美味いハムだ”

「どう？」

「美味しいです」

「そう、嬉しいわ」

とこんな調子で食事をした。結局竹井さんにあーんをしてもらう羽目になった、まぁこれはこれでいいのだが。問題はあとに待っているのだ。先に今日は用事があるって言って竹井さんが部屋に戻ると、早速俺へのいじりが始まるのだ。

「石井、なかなか見せてくれるね～。私たちもドキドキしちゃったよ」

「にヒヒー、石井はこういうの弱いんだね～、ねっシャーリー」

「そうダナ、石井顔真っ赤だったもんナ」

「エイラみたいだったわ…」

「エッ？、サーニャ？！」

とにかく酷い目に遭わない前に俺も自室に避難した、これからみんな風呂に入るのでとりあえず一安心だ。女性が増えれば増えるほど俺の風呂の時間は相対的に遅くなる。だからこういうときは基本的に俺は鉄道の本を読むことにしている、バットの手入れももう終わってしまっていたし、これくらいしかすることがないのだ。僕は今のところ扶桑の鉄道は電化されていない区間が殆どだがいずれ電車の時代が訪れるような気がするのだ、限りある石炭を使うよりも様々なものから生み出すことが出来る電気のエネルギーのほうが将来

性がある気がするからだ。

４０分ほどすると竹井さんがノックをしてきた。

「どうかしたんで…すか?!」

そこには浴衣姿の竹井さんがいて少し驚いてしまった。この季節に足を出してよく寒くないものだ…なんて関してる場合じゃないぞ。

「風呂が空いたわよ」

「ありがとうございます。では」

俺はいそいで風呂に向かった。

「あらあら、あんなに顔赤くしちゃって、やっぱり初なのね…」

と呟いていることも知らずに。

風呂にはゆっくり浸かった、これからどうしようか考えていたからだ、今度の休暇に買い物に行くことにしよう。勿論買うものなんて言わなくてもわかるだろう。それにはどうしても竹井さんに何とかして訊く必要がある、こうなると頼りになるのは宮藤さんだけだ、あとで聞いておこう。

俺は就寝時間も迫っていたので急いで風呂を上がり部屋に戻った。なんだか変な予感もしたがさすがにまだそれはなかった。部屋について水を飲んで一息入れていると消灯ラッパが鳴った。だから俺も布団に入った、だが実はこの時腹が鳴っていたのだがそれを聞かな

かったことにしていたのだ。俺は寝ることにした…。

案の定夜中に俺は起きた、あまりに空腹だったのである。まぁあんな状況でがつがつ夕食を食べられるはずもない。

「しょうがない、食堂に向かうか…。何か作れるだろう…」

ただこの基地では夜食は禁止されていることを知っていた、今回はそれを無視して作るわけだから中佐にばれたらひとたまりもない。間違いなくげんこつだけじゃ済まないだろう。

とりあえず俺は食堂に向かった。確かにたくさんの食べ物が置いてあった、ただ必ずしもここのものとは限らない、他のメンバーの私物かもしれないからだ。

”どうしよう、見たところ卵とご飯しかないか、あっあと人参もあるな。これならおじやくらいなら作れるか…”

調味料はたくさんあったのでいくらか使ったところでばれることはない、早速調理にかかった。

不意の俺は大学にいた時を思い出した。帝大にいたときもたまに徹夜して学校に残ったときがある、こんな時には友人といろいろなものを作ったなと。

元々夜食というものは簡単にできるものなので15分くらいでおじやは完成した。ここで食べても良かったのだが、なんだかいやな

予感もしたので俺は部屋に持って行くことにした。

部屋に戻って早速食べた。

「うん、まぁうまいな」

一人で何かを食べるのは寂しいことだが、落ち着いて食べることが出来る。といっても落ち着いて食べていられたはほんの一時だった。この時隣の部屋では

「あら、いいにおい。どうも石井さん夜食を取っているみたいね。私も食べてみたいわ、でもどう言えば…?、そうだわ!。」

と呟いていたのだ。まさにいやな予感とはこれのことだった。

俺が部屋で二口目と食べようとしたその時突然ドアがノックされた。

「ん?、誰だこんな時間に」

俺はそう呟きながらもドアを開けた、そこにいたのは竹井さんだった。驚くことに寝癖が全くなかった、まるでどこかにこれから出かけるような感じだった。

”まさか夜食がばれたのかな”

案の定の俺が思ったとおりだった。

「どっ、どうしたんですか?。竹井さん」

「くすっ…とぼけてもムダよ。石井さん、夜食取ってるんでしょ？」

「えっ！」

「ふふ、私も食べてみたいわ～あなたの夜食」

「でっ、でも…」

「あら良いのよ？。ミーナ中佐にこのことを話しても。多分、お仕置きされちゃうと思うけど…」

「うぐ…」

竹井さんはもう食べる気満々のようだ。俺が拒否することが出来ないような言い方をしてくる。

「どうするかしら？」

”まぁいいか、二人で食べてもさほど問題はないだろうし。というか竹井さんの笑顔もなんだか今は恐怖に感じる”

「わかりました。じゃあ一緒に食べましょうか」

と俺が言うと竹井さんはとても喜んでくれたようだ。竹井さんと俺は早速おじやを食べることにした。

「石井さん、これはあなたが作ったの？」

「えぇ、まぁ…」

「凄いわね、私も負けていられないわね」

「えっ？」

「今度は私が作ってあげるわ」

「はぁ…ありがとうございます」

俺はとりあえずお礼をしておいた。竹井さんは早速俺の作ったおじやを食べた。

「あらおいしい」

「それはどうも…」

「…？、石井さんさっきから食べてないわね」

「そりゃあ。匙は一つしかないですから…」

「そうだったわ！。なら…」

そういうと竹井さんは俺の前におじやがのった匙をさしだした。

「はい、あーんして」

「えっ、でも…」

「大丈夫よ、ここなら誰も見ていないから…」

「それもそうでしたね」

と俺は竹井さんに食べさせてもらった。味は同じ筈なのに竹井さんと一緒に食べていると何倍も何十倍も美味しく感じる。

「どう、美味しい？」

「はい、とっても」

「ふふ、嬉しい」

眠いからだろうか竹井さんがいつもとは違ってどことなく幻想的に見える気がした。俺は食べ終わるとすぐに食器を片付けて部屋に戻った、まだ時計の針は2時を指していた、さすがに起きるには早すぎる。俺は再び寝ることにした、俺は皿を洗っている間竹井さんに部屋に待っていてもらっていたのだが部屋に戻ってくると竹井さんは眠かったのだろう先に寝てしまっていた。これが困ったことに俺のベッドで寝ていたのだ。

”弱ったな～、竹井さんの部屋で俺が寝るわけにもいかないし…。しょうがないから運ぶか”

ここで俺はさんざん悩んだ、お姫様抱っこかおんぶにしようか。今までの俺の１８年の人生経験からいくとどうも俺は人を背負うのが苦手のようだ、だから俺は前者にすることにした。

「しょうがない、竹井さん失礼します」

というと俺は竹井さんをお姫様だっこしながら竹井さんのベッドに運んだ。

”ふふ、思った通りだわ。私は寝ていることになっているから抱きついても大丈夫よね…”

この時はまだ気づいていなかったが竹井さんはこの時もわざと寝たふりをしていたのだ。

「う…ううん」

「ん?、竹井さんうなされているのかな?」

「ひっ!」

ギュッ

「た、竹井さん!」

そう、この時竹井さんは俺にしがみついてきたのだ、恥ずかしかったしだれかに見つかると後々まずいので急いで俺は竹井さんをベッドに運んだ。

「…布団を被せてと、ふぅ、これで大丈夫だろう」

と俺は竹井さんがすやすや寝ているのを確認するとほっとした。いつまでもここにいるわけにはいかないので俺は早々と退散することにした、俺は電気を消しながら

「竹井さん、お休みなさい」

と言った。すると気のせいだろうか、竹井さんからも

「石井さんもね」

と聞こえた気がした。

”大成功だわ、石井さんったら抱きしめたときあんなに緊張しちゃって…。ふふ”

廊下に出ると運悪くそこに中佐がいた。

「う、中佐」

「あら石井さん、こんな時間にどうして竹井大尉の部屋から？」

「あっ、あの話すと長くなるので…」

「あら、言わないの？。ならお仕置きするしか…」

「わっ、わかりましたから。とりあえず俺の部屋に」

俺は全てを白状した。

「なるほどね、石井さんが夜食を作っていたら竹井大尉が来て一緒に食べたのね。それでそのあと石井さんが皿を洗って部屋に戻ってくると既に竹井大尉が寝ていたから竹井大尉の部屋に石井さんが竹井大尉を運んだ…、ということかしら」

「はい…、間違いなくそうです」

「ふぅ、本来ならいけないことなんだけどまぁ今回は許してあげる

わ、幸い誰も見ていないみたいだし」

「あっ、ありがとうございます」

「ただし」

「えっ？」

「夜食を取ることは別件です」

「はい？」

「覚悟しなさい」

俺は久しぶりに背筋が凍った気がした…。

翌朝

「おはよう、石井さん」

「あぁ、おはようございます竹井さん」

「あらどうしたの？そのたんこぶ」

「いやちょっと朝起きるとベッドから落ちちゃって…」

「そうなの？、痛くない？。中佐に報告しておく？」

「いっ、いえ。大丈夫ですよこれぐらい」

「そう…」

と俺が竹井さんと話していると中佐がやってきた、これを狙っていたのだろう。

「竹井大尉、おはようございます」

「ミーナ中佐、おはようございます」

「石井さんもおはよう」

「おっ、おはようございます。中佐」

「あらどうしたの石井さん?。そのたんこぶ」

「ベッドから落ちちゃったみたいなんです」

「そうなの…お大事にね、石井さん」

「はい、どうもありがとうございます…」

”まぁ中佐に叩かれたなんて言えないしな”

そう言うと中佐は行ってしまった。

「石井さん」

「はい、大尉?」

「昨日は美味しかったわ。また作ってね…それと…」

「それと何ですか？」

「ダメよ、今度からもっと優しく運んでね」

「えっ！！、もしかしてあのとき起きて…」

俺が続きを言おうとすると竹井さんは耳元でそっと呟いた。

「お願いね…」

「はっ、はい！！」

「よろしい。朝食に向かいましょうか」

「そうですね」

俺と竹井さんは食事に向かった…。

食堂に着き竹井さんと俺が席に座ると宮藤さんが話しかけてきた。

「石井さん、竹井さん」

「どうかしたのかい？。宮藤さん」

「いや、ご飯の量が少なくなっているので心当たりはないかと」

後ろから竹井さんの手が俺をつねっている。

”石井さん、わかっているわよね…”

と言いたいのだろう。

「いや、ちょっとわからないですね」

「そうですか～。じゃあ誰が…？」

と言いながら宮藤さんは行ってしまった。

「ありがとう、石井さん」

俺が竹井さんを見ると竹井さんは笑顔だった。つねられてところがまだヒリヒリする。

「いえ、いいんですよ。これぐらい」

と言いかえすと、ヒリヒリした手で俺は朝食を取ることにした…。

31話　本能

ネウロイはなかなか空気を読んでくれない、せっかくの朝食も俺はライ麦パン一個になってしまった。

「敵の位置はグリッド北。敵は一機みたいだけど大型よ。気をつけてね」

中佐がインカムでそう言う。

”さっさと片付けて朝ご飯の続きを取らないと…”

と思いながら俺はハンガーに向かった。

俺のストライカーは竹井さんが来てもずっと端っこだった。おそらくエンジンとモーターとでは馬が合わないのだろう。

「電流、電圧確認ヨシ！」

俺はいつも通り離陸し皆と合流し敵の位置に向かった、この間に竹井さんが俺のストライカーについて何か疑問を抱いていたようだ、ただいまはそんなことに構っている暇はないのは僕も竹井さんも十分承知している。

中佐の言っていたとおり、ネウロイは一機だけだったがとても大きかった。神宮球場のグランドの半分くらいの大きさだ。これは倒すのに一苦労だ。

「石井以外は攻撃を開始しろ。石井！」

「はい！、少佐」

「お前はいつも通り全員のフォローに入り救援があったらそこで援護をしろ」

「了解しました！！」

俺は動き始めた。

「石井、頼ム」

「石井さん、お願い！」

最初に支援要請が出たのはエイラさん、サーニャさんの北欧コンビからだった。長距離攻撃の護衛だ。

「わかりました、すぐ向かいます」

俺が向かうと直ちに二人は攻撃を開始した。さすがにいつも一緒にいるだけあって攻撃の手際は見事だ。あっという間に攻撃は終了した。俺は二人の攻撃が終了すると俺は護衛から離れた。

「アリガトナ、石井」

「ありがとう。石井さん」

「大丈夫ですよ。」

俺がそう言うとインカムから宮藤さん達の声が今度は聞こえてきた、宮藤さん達とは宮藤さん、リーネさん、ペリーヌさんのことで今は敵機の右側面から攻撃をしている。

「石井さん、援護を！」

「わかりました」

俺が向かうと宮藤さんは疲れていたようだ、ネウロイのビームをずっと魔方陣で防御していたのが原因だ。

「もう大丈夫です、俺も防御に入ります」

「ありがとうございます、石井さん」

「私たちに任せてください」

「行きますわよ」

俺の救援のかいもあってこちらも一段落したようだ。そう言えば、最近このストライカーも徐々にこの部隊での格闘によって慣れてきた。実戦ではどうかと不安にも思っていたが、問題なさそうだ。

「ありがとうございます。石井さん」

「ありがとうございます、助かりましたよ、帰ったら紅茶飲みましょうね」

「見事な防御でしたわ、ありがとう石井さん」

「ありがとうございます、それでは…」

失礼しますと俺が言おうとしたとき

「うぐっ！」

と竹井さんの声が聞こえた。その時僕は本能的に竹井さんがまずいことを悟った。

「宮藤さん！」

「はいっ！」

宮藤さんもだいぶ理解しているようだ。

「一緒に来てくれ！」

「わかりました。ちょっと行ってくるねリーネちゃん、ペリーヌさん」

「うん、気をつけてね芳佳ちゃん」

「ご無事を祈りますわ」

俺と宮藤さんは急いで竹井さんのところに向かった、幸い大きなケガではなかったものの腕から軽く出血していた。

「大丈夫ですか?。竹井さん」

「石井さんに宮藤さん。どうしてここへ？」

「とにかくもう大丈夫です。俺に任せていてください、宮藤さん竹井さんの救助を！」

「わかりました」

俺は竹井さんの無事を見届けると、ネウロイの方に向かおうとしたすると竹井さんが突然こう言った。

「必ず戻ってきてちょうだいね」

「当たり前ですよ、あなたを悲しませるようなことはしません」

「ありがとう…」

俺はネウロイに向かった。

「坂本少佐！」

「わかっている。行くぞ！」

「はい！」

俺は少佐の後に続いて攻撃を開始した。俺は後衛についた。

「石井、大丈夫か！」

「はい、大丈夫です」

と俺が答えた瞬間にコアが見えた。

「少佐、コアです！」

「よし、石井行けー！」

「はいっ！」

・・・

「えぇーいいじゃーん」

「良くない、とまぁ石井、エーリカの最高記録は５５機だ」

”なるほどじゃあ７６機倒せば記録を塗り替えられるのか…”

「なるほど、じゃあ抜きますよ今年」

「ふふ～ん、やれるもんならやってみな～」

と俺とハルトマンさんが話していると竹井さんが後ろからやってきた。

「石井さん、このストライカーってずっと離陸したときから思ってたんだけど…」

「はい、何か？」

「これが、あなたが作ったってやつ？」

「えぇ、これは俺が作った電気式ストライカーです」

「やっぱりね…。離陸するとき省線電車の音がしたから」

「なるほど…。竹井さんはつい最近まで扶桑にいたんですものね」

「えぇ…」

「そういえばケガの方は？」

「宮藤さんのおかげでもう大丈夫よ」

「そうですか…、宮藤さんどうもありがとう」

無線で俺が話しかけると

「いえ、いいんですよ」

と答えてくれた。

「石井さん」

「どうしたんですか?。竹井さん」

「どうしてあのとき私の声だってわかったの?」

「えっ、それはその…」

するとハルトマンさんがいきなり話の間に割って入った。

「大尉、そんなの石井が好きだからに決まってるじゃーん」

「えっ、ハルトマンさんいきなり何を言い出すんですか!…」

「じゃあ石井は竹井大尉のこと嫌いなの~?」

「どうなの、石井さん?」

”いつもこんな感じだな、でも確かに好きだから分かったんだと思うんだけどな”

なんてことを俺は思いながらもこう答えた。

「俺は確かに竹井さんのことが好きです。それと何となく自分の中でもよくわからないのですが、助けなくちゃいけないって本能的にそう思ったんです…だから…」

「ありがとう、石井さん」

俺が続けようとすると竹井さんは俺に抱きついてきた。昨日のように…。

「ひょー熱いね〜、なぁルッキーニどう思う？」

「にヒヒー良いもの見ちゃった」

「たっ、竹井さん。何もこんなところで…」

俺もすぐに顔が赤くなってしまう、すると竹井さんは俺を見つめたほおには涙が伝わっている。

「嬉しい。あなたにそんなこと言ってもらえて…。ありがとう」

「大丈夫ですよ、これからも守りますから」

と俺が言うと竹井さんは涙を拭いて

「よろしくね」

と笑顔で答えた。

「石井、良かったな」

「少佐…」

「さて、基地に帰るぞ」

「了解」

俺達は基地に帰った。

ストライカーを降りると竹井さんはまた俺に寄りかかってきた。

「もぅ、竹井さん…」

「良いじゃないこれぐらい」

「それもそうですね…。それじゃあ部屋に戻りましょうか」

「そうね。行きましょう」

と言うと俺と竹井さんは歩き出した…。

32話　Baseball

部屋に戻ると中佐が珍しくやってきた、因みに言っておくと竹井さんと俺は話をしていた最中だったのだ。

「石井さん、ちょっと良いかしら？」

「はい、なんでしょうか中佐？」

「ちょっと見て欲しいものがあるんだけど…」

「私はいない方が良いでしょうか？」

竹井さんは残念そうな顔でそう中佐に訊く

「そうね、石井さん次第なんだけど」

と中佐に言い返され私もいさせてと言わんばかりの顔でこちらを見てくる。

”う～ん、俺次第なんて言っているからたいそう重要なことでもないのだろう”

と思ったので俺は許可することにした。

「いいですよ。俺は」

「ありがとう石井さん」

「そう…。それで見て欲しいのはこの新聞の記事なの」

そこにはこう書いてあった。

【扶桑の野球選手がブリタニアに結集！！！】

このたび行われることになった、扶桑の職業野球と大学野球の選手の合同チームとのブリタニア代表の親善試合。今回注目の選手は沢村投手と大下外野手そして川上内野手である。いずれも職業野球のスーパースターだ。今回ブリタニア代表との対決で彼らの真価が明らかになることであろう。なお、初戦のドーバーでの試合では第５０１統合戦闘航空団所属の石井明範扶桑皇国海軍准尉も出場予定とのこと…

とまぁ要約するとこんな感じだった。

「えっ、俺？！」

「明日ドーバーでよ。それとハイ、お手紙が届いているわ」

早速その手紙とを開けてみた。送り主は…今回の扶桑代表監督を務めている藤本さんからであった。

「拝啓、このたびはお忙しい中のご依頼を申し訳なく思います。初戦のドーバー戦についてなのですが川上君が軽い故障に陥ってしまいましたので、その補完選手として臨時で試合に出て貰いたく思い、君にこのような手紙を書かせていただきました。ですから、ドーバー戦には遅れないで集合してください」

俺は正直言ってビックリしたけど、まぁ呼ばれたんだったらお祭り騒ぎしないといけないな。

「それじゃあ頑張ってね」

ミーナ中佐はそう言うと部屋を去っていった。部屋が再び俺と竹井さんだけになると竹井さんは大胆にもいきなり俺の両手を掴んだ。

「た、竹井さん?!」

「私にはこんな事しかできないけど…頑張ってね、応援してるわ」

「竹井さん…」

”良かったわね、明日は竹井大尉をあなたがエスコートできて”

ミーナ中佐は外から俺達の事を使い魔で確認するとそう思いながら中佐室へと戻っていったようだ。

「石井さん、そうと決まれば練習よね?」

「えぇ、じゃあしばらく行ってきます」

「気をつけてね」

俺が部屋を出ると竹井さんは

「くすっ…これじゃあまるで本当の夫婦ね…でも、五日はそうなると思うのは私だけなのかしら?」

と呟いていたのだった。

俺はバットを持って滑走路脇に向かった。

”秋を櫻を咲かせてやらなくちゃなぁ…”

そんな事思いつつ素振りを開始した…。

33話　ketsui

早速俺は練習に取りかかった、きっと職業野球の選手も最終調整を行っているのだろうと思いながら。

「明日は大下選手に会えるのかぁ…」

と俺は素振りをしたときに呟いた。当然のことながら俺は嬉しくてしょうがなかった。

大下選手とは何度か対戦したこともある、大下選手は１９２２年生まれで俺は１９２６年生まれと一見すると対戦など普通は不可能なのだが僕が飛び級して進学できたことで奇跡的に対戦が出来たのだ。試合では敵同士だったものの、大学同士の交流と言うこともあって俺と大下選手は知り合いになっていた。他の選手はどうかというと沢村投手とは接点が俺にはなかったものの相当な投手であることは知っていた。彼は１９３４年の大リーグとの壮行試合で大リーグ選抜をゲーリックのソロホームランの１失点に抑えた。こんなこと出来るのは今の扶桑では沢村投手ぐらいしかいない。川上選手も同じく職業野球のスーパースターだ。

「さてさて今日は３２４球打つとするか」

何で自分でもこう呟いたのかはわからないがとりあえず自分の意志だからそうすることにした。

カーン”５６球”・・・・・・・カーン”１５６球”・・・・・・・カーン”２５６球”・・・・・・・

気がつくとあっという間に３２４球を打ち終わった。そしてもうボールが見えにくくなっていることに気がついた時計を見るともう６時を回っていた。すると今日は珍しく、エイラさん、サーニャさんの北欧コンビとシャーリーさん、ルッキーニさんがやってきた。

「オイ聳井。もうすぐ食事ダゾ」

「あぁ、わかりました。今ちょうど俺も片付けをしていたところなので」

「石井さんは明日よっぽど楽しみなのね。何てったって出場するんだものね」

「えぇ、久しぶりに扶桑の野球が出来ますからね」

「私を無視スンナー！！」

「あっ、すいません、そんなつもりは…」

「ははははは。石井は面白いやつだな～」

「…そうですか？、シャーリーさん？」

「うん、だよな～ルッキーニ」

「うん、ねぇ石井。私も打ちたい～」

「えっ、バットでですか？」

「うん」

”弱ったな…。もうこんなにくらいから危ないしな…”

「ごめんなさいルッキーニさん。今日はもう暗いからそれは無理です」

「えぇーつまんないー」

「ごめんなさい、また今度で」

「ルッキーニ、石井もお前のためを思っていってるんだから、今回は我慢しろ」

「は～い。でも約束だからね～石井」

「はいはい」

「ダカラ、私ヲ…」

「わかってますよ。エイラさんもサーニャさんも今度打ちませんか？」

「えっいいの？」

「勿論ですよ」

「でも、石井さんの練習を邪魔しちゃ…」

「気にしないでくださいよ。これぐらいどうにでもなることなんで

すから。せっかく扶桑の野球もみるんですから」

「石井さん、どうもありがとう。エイラは？」

「ウン？、サーニャがやるんだったら、私もやル」

「わかりました。それじゃあまたあとで俺はこれを片付けてから行くので…」

と言うとみんなは去っていった。俺はそのあと急いで片付け基地に戻った。

食堂に着くと竹井さんは朝と同じく俺の隣に座っていた、みんなも少なからず野球というものに興味を持っていたようで明日の試合はどちらが勝つかとみんなで言い合っていた。

「石井さん、良かったわね。みんな野球に興味を持ってもらって…」

「えぇ、本当にそうです。竹井さんはどうですか？」

「私は野球は好きよ、初めて見た試合であなたのホームランを打ってくれたし」

「もしかして、あのときが初めての見に行った試合だったんですか！？」

「えぇ、そうよ。友達に誘われてね、そうしたらあなたがホームラン打ってくれたんだもの、誰だってあんなものが自分のところに来たら好きになるわよ」

「そうだったんですか」

「さぁ食べましょう。ご飯が冷めちゃうわ」

「えぇ、そうしま…って竹井さん？」

「どうしたの？」

「なんで俺の方に椅子を向けてるんですか？」

「ふふ、そんなこと決まってるじゃない…」

この後俺は案の定いつもの通りに食事をした、いつもの通り…。

食後今日は明日野球があるからとなんだかよくわからない理由で先に風呂に入れてもらった。

”明日が楽しみだな…”

俺はそれ以外何も思いつかないでいたが不意にこんなことを思った。

”待てよ、仮に明日竹井さんの目の前でホームランが打てたらどうなるんだろうな…。きっと喜んでもらえるだろうにな…”

現実的には実現不可能なことだとは知りつつも思ってしまった。

”そうしたらプロポーズだって出来るのに…”

なんてことまで…。

風呂を上がると今日は少佐のところに向かった。

「坂本少佐、風呂が空きました」

「そうか、ありがとう。みんなには私が伝えておく」

「それでは…」

「あぁ、待て石井」

「はい？」

「訊きたいことがあるんだが」

「何でしょうか。少佐」

「なぜ私のことを少佐と呼ぶんだ？。私とお前は海軍だから階級はつけなくて良いんだぞ？」

「それはわかっているんですけど…、何となく坂本さんと呼びにくくて」

「そうか…、醇子…いや竹井のことも大尉と呼ばなくなったから出来れば統一して欲しいのだが」

「わかりました、坂本さんでよろしいんですね？」

「うん、それでいい。それと…」

「それと？」

「最近竹井とはどうなんだ？」

「えっ！、どうって…その…」

「はっはっは。まぁいい、私はいちいちとやかく言うつもりはない」

「ありがとうございます。坂本さん」

と俺が喜ぶと不意に坂本さんは険しい顔になる。

「でも、ここは軍隊だということを忘れるなよ」

「はい！」

俺は突然のことだったので少々動揺してしまい、敬礼までしてしまった。すると坂本さんは笑顔で

「うむ、では良いぞ」

と答えた。

「それでは…」

俺は部屋に戻ると今日はすぐに寝た。竹井さんも協力してくれているようだ。

”明日は出たら絶対ホームランを打ってそれを竹井さんにプレゼントしよう。そして…”

と思いながら寝るのであった…。

34話　game－1

翌朝の午前7時過ぎ、俺は先に球場に到着した。これから全体で軽く練習を行うというわけだ。

「おはようございます！！。今日はお世話になります石井明範です！。よろしくお願いします！」

俺は皆さんに負けないように気合いを入れて挨拶した。すると大下さんが

「ははは。石井、朝から気合い入ってるなぁ。まぁでも、あんまり固くなるなよ。これはお祭りなんだからさ」

「はい！」

俺の表紙の抜けたような強めの挨拶には皆さんも笑っていた。これもまぁ結果的には良いのかもしれないな。そのおかげで皆さんとは打ち解けたし、その後の練習もいい気分で行うことが出来た…。

・・・

「すいません、立ち見券１２枚良いですか？」

と中佐は球場の窓口で尋ねた、すると意外な返事がかかってきた。

「皆様がストライクウィッチーズの方々ですね」

「えぇ、そうですが？」

「本日はご来場ありがとうございます。席を無料でご用意いたしておりましたのでどうぞあちらから…」

「あら！、でも誰がそんなことを？」

「はい、何でも政府からのお達しだそうでたまにはこういうのもいいだろうと言うことだそうで」

係員はそう答えた。

「そうなのね…どうもありがとうございます」

隊の人達はそれはもう喜んだようだ。

今日は扶桑とブリタニアの代表の壮行試合なわけで、俺はもう既に準備を終えてキャッチボールをしている。勿論ライトを守る大下さんとだ。

「石井さ～ん！！」

「あぁ、ちょっとすいません大下さん。紹介しますね、こちら俺が

いる５０１統合戦闘航空団の方々です」

「初めまして。僕は東京で野球をしています大下と言います」

軽い自己紹介を大下さんと隊の人達はした。すると

「いやぁ、にしても石井は運がいいよな？」

「えっ？」

「こんな綺麗な人達の中から婚約者（フィアンセ）が生まれるかもしれないんだろ？」

俺は顔を赤くしてしまった。まぁ後で大下さんにもそのことは分かるから今はまだいじられているだけでもいいかな？。

「た、竹井さん？」

「あら、何かしら？」

俺はフェンス越しに最前列に座っている竹井さんと話す。

「その…えっと…」

「くすっ、その姿よく似合ってるわよ。頑張ってね、応援してるから！」

俺は竹井さんの笑顔を見たらほっとした気がした。それから、隊の全てのメンバーの目が僕の出場を喜んでくれていたようだ。

「いってらっしゃい。頑張ってね」

と中佐も

「扶桑人として誇りに思うぞ石井。頑張ってこい！」

と坂本さんも

「頑張ってきてください石井さん。リーネちゃんとペリーヌさんと応援していますから。」

「石井さん、期待してますよ。」

「頑張ってくださいね、ご健闘をお祈りいたしますわ」

と宮藤さん、リーネさん、ペリーヌさんも

「石井、でかいの一発頼むぞ！」

「石井ファイトー！」

とシャーリーさん、ルッキーニさんも

「石井、良い試合を頼むぞ」

「石井、打てなかったらただじゃおかないぞ～」

とバルクホルン大尉とハルトマンさんも

「石井、打ってくれヨ。楽しみにしてるからナ」

「石井さん。頑張って」

とエイラさん、サーニャさんの北欧コンビもみんな応援してくれていた。まぁエイラさんの場合は

”石井、サーニャが応援してるんダゾ。わかってるヨナ?!”

と俺を睨んでもいたが…因みに今回のオーダーはこんな感じだ。

1　三原　セカンド
2　水原　サード
3　小鶴　レフト
4　大下　ライト
5　景浦　センター
6　沢村　ピッチャー
7　吉原　キャッチャー
8　上田　ショート
9　石井　ファースト

俺はラストバッターだったものの気合いを入れた。そして遂に試合は始まった…。

35話　game－2

試合は大歓声の中始まった。今日の試合はブリタニアが先攻、扶桑が後攻だった。1回オモテは扶桑のエース沢村の好投もあって3者凡退に抑えた。1回ウラから扶桑の攻撃は熱かった、打者7人の猛攻で一挙に3点を奪った。その後は沢村の調子が徐々に落ち始め5回に沢村は疲れのせいであろう降板してしまった。ここまで俺は1回打席が回ってきてセンター前ヒットだった。

・・・

竹井さんは俺に手を振っていた。だから俺も振りかえした。だけど、俺はこんなものでは負われないとこの時は思っていた。

・・・

俺の名前がアナウンスされると黄色い声が聞こえた。勿論隊の仲間だ。

「石井ー打てヨ～」

「石井さん、打って～」

他のみんなも応援しているのだろうが宮藤さんとエイラさんの声が良く聞こえた。俺はベンチも観客席の方も見なかった。だが俺は竹井さんも応援してくれているとなぜだか知らないが確信があった。

俺は打席に入った。相手は名前も知らないピッチャーだ。俺はホームランを打つならバックスクリーンと決めていたのだ、観客席だと誰か他の人に持って行かれて竹井さんに渡せないからだ。

”絶対打ってやる！！！”

一球目、二球目ともにボールだった。俺のことを警戒しているようだ、確かに俺が出ればトップバッターに打順が回るのだから警戒もするだろう。しかし三球目が運命を決めた、高めのストレートを投げてきたのだ。

”これならバックスクリーンに運べる！”

俺は迷うことなくバットを振った。

カーン！！

みんなの視線がわかった。俺もボールの行方を追っていた、こういうときは妙に当たりの光景がスローモーションのように見える…。

15分後、俺はボールをバックスクリーンから取ってきてくれた係員から受け取った。そう、俺は見事にサヨナラホームーランを打ったのだ。どうやら壮行試合なのにもかかわらずインタビューを受けることになった。

「石井さん、おめでとうございます」

「いえいえ、自分を出場させてくれた監督と僕を推薦してくれた大下さんのおかげですよ」

と俺が言うと監督も大下さんも

「お前が打ったんだから俺たちは関係ないさ。おめでとうな石井」

「石井、また扶桑でやろうな」

と口々に俺を誉めてくれた。この時、俺はもう一つ勝負に出ようとしていた。もう俺は自分の名前を書いたボールを用意していたのだ。

「監督」

「どうしたんだ?」

「呼びたい人がいるんですが…」

「ここにか…誰だ?」

「観客席のあの人なんですが…」

この時竹井さんはと言うと

”あら、石井さんったら私たちの方を指さして何を話しているのかしら?”

と思っていたようだ。実はこの時俺と監督は

「竹井さんって言うのか。あの美人さん」

「えぇ、あの方をここに呼んで欲しいんです。構いませんか?」

「大丈夫だが何でだ?」

「実はこのボールをここで渡したくて、それと…」

この時監督はそのあと俺が何を言おうとしているのかわかったようだ。

「わかった。お前も男だな。任せろ、大下!」

「はい。監督?」

「実はな…」

「わかりました監督俺が行ってきます。だけど石井、お前もなかなかやるな〜」

数分後竹井さんのところに大下さんは着いた。

「竹井さんという方は？」

「えっ！、私ですが？」

「あなたが竹井さんですね」

「えぇ、そうですが…」

「石井さんが来て欲しいと」

「えっ！！」

この時驚いたのは竹井さんだけでなく他の隊のメンバー全てだった。この時俺はまだ記者と話の続きをしていたものの、胸はいつ張り裂けてもおかしくないほど激しく鼓動を打っていた。

”ドキドキするなぁ…まさか、こんな大事になるなんて…”

「わかりました。すぐ向かいます」

そうこうするうちに竹井さんは俺のところにやってきた。

「どういうつもりなの石井さん？。こんなところに呼び出して」

と竹井さんはいつも通り笑顔で俺にそう訊いてきた。僕は帽子を取った、この帽子を取ると言うことが何を示すか竹井さんもある程度は知っていたらしい。

「竹井さん」

「どうしたの、急に改まって？」

「これを受け取ってくれませんか？」

「えっ！、でもこれさっきのホームランボールじゃない！」

「いいんです。受け取ってください、竹井さんのためにも打ったんですから…」

「そうなのね…ありがとう、受け取るわ」

俺のボールを受け取ると竹井さんはおかしなことに気がついた。俺はサインを縫い目の中の随分と右側寄っていたところに書いたのだ。

「石井さん、なんでこのあなたのサインこんなに右に寄っているの？」

これがこの時俺の考えた最大限の方法だったのだ。

「実は、その…竹井さんには左側に自分の名前を書いて欲しくて…出来ればその…名字を石井にして貰って…」

「えっ！？、それってもしかして…」

竹井さんはとても驚いていたようだ。

「まだ指輪を買いに行ける余裕は自分にはないです…でもいつか必ず買いに行きますから待っていてくれませんか？」

もう竹井さんは自分の感情を抑えることが出来ないようだ。涙が自然と流れている。

「じゃあ…これは」

竹井さんはグスングスンと涙混じりに俺に訊いてきた。

「はい、俺と結婚してください！！」

俺は遂にそう言った。

「あっ、ありがとう…。勿論構わないわ。私…ずっと…ずっと…あなたから…」

俺はそっと竹井さんを抱きしめた。

「もう良いんですよ。何もかもわかっていますから…」

竹井さんは俺にたきしめられるとぎゅっと俺を抱きしめ返してきた。

「石井さん」

「何です…？、竹井さん」

「これからもよろしくね」」

「えぇ、勿論ですよ」

俺と竹井さんは他の人には聞こえないくらいの小さな声でそう話し

た。見ると記者も写真を撮っているし、扶桑、ブリタニア代表の選手も観客もみんな拍手を俺達に送っていた。

「じゃあ戻りましょうか？」

と俺が言うと竹井さんも涙を拭いて

「えぇ、そうしましょう」

と目の下を真っ赤にしながらも笑顔でそう答えてくれた。５０１の人達は専用のバスで来たので帰り道も当然それを使うことになった。帰り際僕がバスに乗ろうとすると大下さんに呼び止められた。

「石井！」

「はい、大下さん」

「おめでとうな、石井」

「ありがとうございます。大下さん、これからも頑張ってください」

「当たり前だよ。お前も頑張れよ」

「えぇ、勿論ですよ」

「よし、じゃあまたな」

「はい、これからもお元気で…」

と俺が大下さんにそう言うとバスは出発した。俺は席に座った、勿

論これから妻となる人の隣に…。

「あなた」

といきなり竹井さんは俺のことをそう呼んできた。

「いきなりじゃあ、驚きますよ」

「いいじゃない、もう夫婦なんだから…。はいこれ」

と渡されたのは石井醇子と左端に石井明範と右端に書かれたボールだった。

「でも、これは…」

「私の宝物はあなたの宝物でもあるでしょう?」

「それもそうですね」

と…そうだもう竹井さんって呼べなくなるけど、俺なんて呼べばいいのか分からないなぁ

「くすっ、その顔だと何て呼べばいいのか悩んでるのかしら?」

「さすがだね、その通りだよ」

「くすっ…醇子でいいわよ」

「で、でも…それじゃあ」

「夫婦の間に階級なんてないわ」

「そうか…確かにそれもそうだね」

俺が納得すると醇子は俺に寄りかかってきた。

「これからもよろしくね、あなた」

と一言言うと醇子は疲れたのであろう、寝てしまったようだ。すると後ろからコツッと頭をつつかれた。振り向くとみんなが俺と醇子のことを見つめていた。

「み、皆さん…」

と俺が言うと

「しぃー」

とみんなが同時にそう言ってきた。

「奥さんを起こしちゃうわ」

「中佐…」

「多分ウィッチ同士の結婚は世界初だと思うわ」

「えっ、それって…」

みんなは中佐が

「せーの」

と小声で言うと

「石井さん、結婚おめでとう」

と小声で言うのであった。

バスはあと数分で基地に到着しそうだ。僕は僕に寄りかかって寝ている醇子の肩をトントンと叩いて起こす。

「もう着くよ」

「そう…ありがとう。あなた」

「今度一緒に買い物に行かないか？」

「ふふ、私はもうあなたの妻なんだからあなたに従うわ」

俺は嬉しかった、なんだかこんなにうまくいくなんて本当にここに来て良かったと思った。

俺と醇子はそれぞれ自室に戻った。すると俺の部屋に驚くことにベッドが二つあるのだ、俺は慌てて醇子の部屋に向かった。

「醇子！」

「どうしたのあなた？」

「お前の部屋にベッドはあるかい？」

「それがないのよ。何か心当たりでもあるの？」

「それが俺の部屋に二つベッドがあるんだ。」

「あら、じゃあその一つが多分私の…」

「そうだろうと俺も思うんだ。でももう食事だからとりあえず食堂に行くか」

「そうね、そうしましょうあなた」

俺と醇子は食堂に向かった。いつも通り座るとハルトマンさんとシャーリーさんが俺の前にやってきた。

「石井、どうだった～部屋の中～？」

わかりきった顔をしてハルトマンさんも

「何か変わってなかったか？」

とシャーリーさんも訊いてきた。

「あなた方だったんですか…、その…ベッドを動かしたのは」

俺はまだ人前で醇子という勇気がないのだ。

「私たちが考えて動かしたのは堅物なんだ」

「なっ、リベリアン、それは黙っておけと…」

「いいじゃんトゥルーデ、せっかく石井達のためにやってあげたんだから」

なんだか俺を無視して三人で会話しているようだった。

「でも何でこんなことを…？」

と俺が訊くとようやくハルトマンさんはこう答えた。

「あったり前じゃ～ん、夫婦なんだから同じ部屋で生活して何がおかしいのさ？」

「そうよあなた、ハルトマンさん達も私たちのためにやってくれたんだから感謝しないと…」

「そういうことじゃなくて…、そりゃハルトマンさん達の協力はとても嬉しいけど、中佐に無許可でそういうことをすると…」

とそこへ中佐もやってきた、どうも今までの会話を全て聞いていたようだ。

「石井さん大丈夫よ。今回は私からもエーリカやトゥルーデ、シャーリーさんにお願いしたの」

「えっ！？」

「せっかく石井さんがプロポーズして夫婦になれたのに、一緒の部屋で暮らせないなんてあまりに理不尽でしょう？」

「でも本当にいいんですか？」

「えぇ、勿論よ。これからも頑張ってね石井さん達」

俺と醇子は目を合わせたそしてお互いに

”よかった”

と言う顔をしあった。

「中佐。今回はどうもありがとうございます。それと、皆さんのご協力に感謝します」

「良いのよ。ふぅそれで今度石井さん達の結婚のお祝いをここでしようと思うの。だからその時もみんな、協力してちょうだいね」

みんなの答えは当然

「了解！！」

だった。俺達は夕食を食べた、夫婦になってもあーんは止めないようだった。周囲の視線はやはりまだ俺には厳しいが十分に美味しかった。

お互いに風呂も上がり午後１０時いつも通り消灯ラッパが鳴る。と、ここまでは今まで通りだった。

「あなた！」

突然醇子は俺がベッドのすぐ脇に立っていると俺を呼んだのだ。

「どうしたんだい、急に俺を呼んで…？」

すると醇子は突然俺を抱きしめた。

「ちょ、ちょっと…うわわ！！」

俺はあまりに突然な出来事だったのでベットに押し倒されてしまった。まさかこんなことされるなんて生まれて初めてだな。

「あなた、よく考えたらさっきのプロポーズ…恥ずかしかったわ」

「えっ！？」

「嬉しかった。だけど、やっぱり恥ずかしかったの…責任取って貰うわよ」

「えっ、な、何を…むぅ！！」

そう言うと醇子は俺にキスをした。とってもとっても強く…。その時間はとっても長く感じた。こんなところ誰かに見つかったら大変だ。

「わ、わかった。今日は勘弁してくれ！」

「くすっ、冗談よ。あなた」

「えっ？」

「本当はこうしたかっただけなのよ。プロポーズしてくれたときの

あなたとっても格好良かった、私はこれからもあなたに一生付いていきます！」

「う、うわっ！」

そう言うと今度は俺に抱きついてきた。俺はもう既に布団に入っていた。今日は俺を抱き枕代わりにするつもりなのだろうか…。再び見ると醇子はもう夢の中、さてと、俺も急いで後を追うとするか…。

36話 The short time of morning

夜中はずっと俺は醇子に従うかのように足が動けばそれに合わせて動かし、顔をモゾモゾと醇子がすれば俺はドキドキしていたわけで…早い話が昨日から今日の今までまだ深い眠りにつけていない。

「ふわぁ…おっと、もう2時半だ！」

俺は昨日の夜、醇子を追うかのように急いで夢の中に落ちたはいいものの、そうだなぁ確か深夜の12時頃に醇子が突然

「うぅん…」

と唸ったのだ。この時は俺も暗くて醇子が寝ぼけていたとは知らずに、真剣に俺は心配してしまったのだ。

「だ、大丈夫か？」

体を揺すっても当の醇子は眠っているわけだ。この時醇子は醇子で本当に夢を見ていたようだ。だから俺にしがみついてきたし…

「ひっ！！」

耳を舐めるわ、頬ずりはしてくるわで俺はドキドキの連続だった。その所為で俺はまだ眠りにつけていないというわけだ。本当なら寝ている間に隣のベッドに醇子を戻すべきなのだろうが…戻すか！。だけど起きたときにどんな目に遭うかなんて俺には分かるわけがない。だけど…このままじゃ埒があかないわけだ。だから急いで醇子を隣のベッドに移そう…。

「よいしょっと…」

「うぅん…」

”ごめんね醇子”

俺はそう思いながら慎重に寝ている醇子を隣のベッドに移した。するとどうだろう、俺も安心出来たようで再び眠りに就くことが出来た。

翌朝、目を覚ますと外は土砂降りの大雨だった。これなら今日はネウロイも来ないだろうから非番だろう。安心して再び寝ようとすると…

「ＺＺＺ　ＺＺＺ　ＺＺＺ」

寝息が聞こえる！！。

「じゅ、醇子！！」

俺は年甲斐もなく大声を上げてしまった。すると醇子は起きた。まさかこれが…

「あら、おはよう。あ・な・た！」

何だか醇子の様子がおかしい。見るからに怒っているし、目だけが笑っていない笑顔だ。本当に怖いぞぉ…。

「ど、どうしたの…？」

「寒いわ」

「えっ！？」

「もっと寄ってちょうだい」

「うわわっ！」

俺はその後、幾ら逃れようとしても逃れることなんて出来なかった。

「あなた、今日は絶対離さないわ…」

なんて耳元で呟かれたんだもの。時間はまだまだ朝の５時過ぎ、起床までは後２時間ほどある。どんな目に遭うんだろうか…。

37話　ｒｅｐｏｓｅ

朝一から醇子に抱きしめられたり…何て言うかペットみたいな扱いをされていた。そうすると醇子は…俺からしたら

”とっても怖い飼い主”

とでも言えばいいだろう。プロポーズして一夜が明けた。勿論醇子への俺の想いは全く変わらないが、正直なところ醇子は…怖い。しかも、やさしさや包容力といったいわゆる‘貴婦人さ’も兼ねそろえていて、なおかつこの怖さだから本当におっかない。

「どうかしたのあなた？」

「い、いやっ。なんでもないよ…」

「そう…朝食に行きましょ！」

「う、うん」

おっと時間を言うのを忘れていた。今は朝の7時半。朝食の時間である。というわけで俺と醇子は食堂へと向かった。今日は土砂降りの大雨だ。多分ネウロイも来ないはずである。昨日のドーバーでの試合の時の天気がまるで嘘のようだ。

「はい、あなた」

いつも通りの食事をする。すると中佐が俺達の前で

「皆さん。今日は見ての通りの雨ですからネウロイの攻撃はないと考えられます。ですから全員非番とします。ゆっくり体を休めてくださいね」

と言った。まずいぞ、醇子の顔がワクワクしているのが分かる。

「あ、あの…」

俺の発言にみんなが目を見張る。

「あら、どうかしたのかしら石井さん?」

「そ、その…こんなこと言っていいのかよく分からないんですけど…」

「何かしら?。言ってちょうだい。力になれるかもしれないわ」

「その…今日は俺朝食終わったら風呂に入りたいんですけど…ダメ…ですか?」

俺は途切れ途切れにそう伝えた。中佐はしばらく考えた後

「…わかったわ。みんな、協力してくれるかしら?」

と全員に言った。するとみんなも快く協力してくれるとのこと、ただ水着を着ろだそうだ。万が一と言うこともあるからだろう。俺もそれに従うにした。

・・・

「ふぅ…」

それから30分後俺は水着姿でありながらもほっとしながら湯船に浸かっていた。昨日のことがまるでついさっきの出来事のように蘇ってくる。俺以外に誰もいない風呂。聞こえるのは噴水のように出てくる源泉と、天井から落ちてくる冷たい水のポチャンと言う音だけ。いつまでものんびり入っていられそうな感じだ。そう、いつまでも…。

「…た!、…なた!、…あなた!!」

「ん?!」

突然誰かの声が聞こえたので目を覚ました。どうやら俺は気がつかないうちに眠ってしまっていたようだ。誰かが起こしてくれたという訳か…。

「うぅん…どうもありがとう…って!!」

どうして醇子が風呂に入っているんだ!?。

これは絶対におかしい。いやいや、おかしくないわけがない。きっと夢を見ているんだ…でも風呂は熱いし頬を引っ張っても痛い。

「あら、どうかしたのあなた?」

「な、なんで、ここに?」

「ほらさっきミーナ中佐が水着を着てねって言ってたじゃない。そ

れはこういう理由があるからよ」

なるほど、みんなで仲良く入ろうと遠回しに言っていたわけだ。見渡すと他の人達ものんびりと風呂に入っている。

「そういうことだったのか」

「くすっ、あなたったら顔真っ赤よ」

「あ、当たり前じゃないか。いきなり起こされたと思ったらまさかじゅ、醇子だったなんて」

そう言うと醇子は微笑み返してくれた。それにしてもここの風呂はとっても気持ちいい。俺も純子ものんびり使っていられそうだぞ。すると…

「じゅんじゅん、ちょっとあけて!!」

ルッキーニさんが醇子の後ろに立った。あぁ、じゅんじゅんっていうのはルッキーニさんが考えた醇子の仇名だ。お互いに石井を名乗るようになったから面倒になったのだろう。それにしてもルッキーニさん…なかなかいいセンスの持ち主だ。

「どうかしたのかしら?。ルッキーニさん?」

「にししし…じゅんじゅんのもなかなかなんだよねぇ…」

「きゃあっ!!」

後ろから醇子はルッキーニさんにやられた。俺は黙ってその場から

逃げだそうとしたが

「おっとぉ!!。石井、奥さんがあんな目に遭ってるのにいいのかぁ？」

「しゃ、シャーリーさん。か、監督責任は…」

「えぇー?。あたしのせいか?。ここは夫なんだったらガツンとさぁ…」

「そ、そういわれましても…」

実はこれ、醇子達が風呂に入る前に決めた悪戯（イタズラ）なんだそうだ。そんな事を俺は知るはずもない。徐々に俺にも怒りの念が現れてきた…。

「やっ…ちょっと…ルッキーニさん!」

「にししし…ありゃ?」

俺はルッキーニさんの右手を押さえた。

「うじゅっ…石井…」

ルッキーニさんはイタズラとは知りながらもそこは男の俺が普通に怒っていたからびくびくしていた。怒鳴るのが扶桑なら定番だけど…軽く注意ぐらいでいいかな?。

「おい。幾ら階級が上だからって…あんまり調子に乗るなよ…わかってるよな?」

「う、うじゅじゅ…」

”エイラ…石井さんあんなに怒ってるね”

”ったく、ルッキーニも大変なやつ怒らせちゃったんダナ。にしてもやっぱり石井は迫力あるナ～”

”くくく、石井のやつまんまと引っかかってるねトゥルーデ”

”こらハルトマン！。まぁ石井も怒らせるとこんな感じになるのか”

”リ、リーネちゃん、ペリーヌさん…”

”あわわわわ…”

”お、落ち着きなさいまし、二人とも”

中佐と坂本さんがいないからこそこういったことも出来るんだろうけどね。

「う、う…シャーリーーー！！」

「おっとと！」

ルッキーニさんはシャーリーさんの胸に飛び込んだ。勿論泣いていた。

「ははは。いやぁルッキーニには悪い思いさせちゃったけどやっぱり石井は迫力あるなぁ」

「えっ？」

「ふふ、実はあなた。これ仕組んだのよ」

「なんだぁ…そういうことだったのか…だったら…」

俺はルッキーニさんのところに向かった。

「ごめんなさいルッキーニさん…その…」

「ぐすっ…うぅ…石井、本当に怒ったら怖いよぉ…」

「こらルッキーニ。石井も奥さんを守ろうとしてやったんだから仕方ないだろ？。ルッキーニこそ謝らないといけないんじゃないか？」

「うぅ…石井、ごめんなさい」

そう言われて俺も初めてほっとした気持ちになった。

「いいんですよ。そう言ってさえくれれば…」

俺はルッキーニさんの頭をそっとなでた。さてと…醇子は

「あなた！！」

「お、おい！。ちょっと、バランスが…」

俺は醇子に体当たりされて風呂の中に倒れ込んだ。

「じゅ、醇子？！」

「私を必死に守ってくれたあなたの姿。とっても格好良かった…ありがとう…」

そう言いながら醇子も俺に抱きついてきた。この後俺達は一層仲がよくなったとは思うけど中佐と坂本さんからルッキーニさん、シャーリーさんと仲良くお説教を受けたことは言うまでもない…。

38話　反省

今まさに地獄を味わっている。悪戯を企てたルッキーニさん、シャーリーさんと共に俺は坂本さんと中佐に執務室で怒られているのだ。今回は醇子も坂本さんや中佐側即ち、怒る方の立場にいる。

「全くお前達は…石井は被害者だとしても」

「うじゅじゅ…」

「あたしまでなんで…」

「シャーリーさんとルッキーニさんには…はぁ、何を罰にしてあげようかしらね美緒？」

「ん？。そうだなぁ、訓練メニューを通常の2倍、いや3倍とかか？」

「「えぇっ！！」」

二人は驚いていた。まぁそれだけのことをしたんだ。まぁ可哀想な気もするけど、仕方がないことなのだろう。

「ん？。何をボケッとしている石井？」

「ふぇっ？」

「お前も一緒に決まっているだろう？」

「えぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

俺が一番三人の中で驚いた。何でなんだ。どうして俺までもが罰を受けなくてはいけないんだ。本来なら俺は被害者になるはずなのに、どうしよう抗議するべきなのだろうか。

「石井大尉、あなたはどう思うかしら？」

おっと、醇子への質問だ。まぁ確かにここでの一番の被害者はやはり仕組まれていたとは言えども実際にルッキーニさんにやられた醇子だろう。こうなったら醇子の俺を助けてくれるという両親を祈るしかない。

「私は悪戯と思ってやりましたから。イェーガー大尉や、ルッキーニ少尉に何も悪意などは感じておりません。勿論、必死に私を助けようとしてくれた石井准尉も同じ気持ちです」

「わかりました…はぁ、それじゃあ美緒。今回のところは…」

「そうだな、説教だけで勘弁してやるか。三人とも、今度からは気をつけるように」

そう言うと俺達ははぁっとため息を吐いた。シャーリーさんとルッキーニさんはすぐに解放されたが俺はといえば、その後は醇子に部屋に連れて行かれた。元はといえば中佐の執務室を出ようとしたときに

「石井准尉、ちょっと…」

と階級で俺の事を呼んで自室に連行したのだ。全く、職権乱用もい

いところと言いたいところだけども、助けてくれた以上従わざるを得ない。

「あなた、ドアを閉めて座ってちょうだい」

俺がいつもの通りにベッドに座ると醇子はドアの鍵を閉めた。俺を逃がさないためだろうか…恐怖を覚える。

「さてと…それっ！！」

「うわっ！！」

いきなり醇子にまた俺は飛びつかれた。

「じゅ、醇子！？」

「さっきは助けてあげたわよ。あなたが罰を受けてる姿なんて見たくないもの、ましてや何もしてないのに…」

「醇子…」

「ありがとう、あなた」

そう言って醇子は優しく唇を重ねてくる。ふわっとだ。俺がそれを拒否する理由もない。時間がゆっくり流れている気がするし、醇子の心臓の音が聞こえてくるぐらい外の世界が静寂に包まれたような錯覚に陥る。

「はぁはぁ…」

俺は醇子のおかしなところに気がついた。何だか俺とキスしてる間に呼吸が激しくと言うか…息苦しそうにしている。

「お、おい…大丈夫か…ぐぅ！！」

今度はとっても強くされた。醇子のやつ…なんだか酒の匂いも少しだけする。もしかして醇子って…

「なぁ醇子…お前さん本当は下戸なんじゃ？」

「そうよ、でも甘酒一杯ぐらいなら大丈夫だわ。今日は3分の1しか飲んでいないし…」

「そ、それ誰に認めて貰ったんだよ…」

「あらぁ？。ミーナ中佐があなたをお仕置きするためだったらいいって…」

「あ、あの人…」

俺は中佐を恨もうとしたが出来なかった。これはこれで悪くはない…さてと、醇子の酔いが覚めるまで付き合うことにしよう…。

39話　Again, Some day

昨日のことは今更言うまでもないだろう。あの後俺は、結局夕食まで醇子と一緒にスキンシップをしていて、なんだかんだ言って癒されたわけだ。さぁそんな事を今はいっている場合ではない。俺達は今、全員空の上にいた、時間は昼前の１１時、どうも今日は予報が外れたようでネウロイが小型７０機と団体で俺達の前にいらしてくれた。当然これから撃墜するのだ。

”石井達は二人で攻撃させた方が有利なのかもしれないな…”

この時坂本さんはそう思っていたらしい。確かに俺が左手に醇子が右に銃を構えて二人で攻撃すれば一気に両方のネウロイを撃墜できる。俺もそうなら良いのかもって思っていた。

「石井達は二人で攻撃しろ！」

「了解！。だそうだ、行くか醇子」

「えぇ、そうしましょうあなた！」

俺達はすぐに攻撃を開始した。最初こそタイミングがなかなか合わなかったものの、５，６機倒してくるとタイミングは完璧に合うようになってきた。ただ数が多すぎだ。最近ネウロイも徐々に進化しているようだ。前は俺の左利きにはネウロイも困惑していたようだが、最近になってどうもその効果が薄れてきている気がした。ネウロイもどうやら少なからず左撃ちについても学習してきているようだ。勿論醇子も苦労しているようだ、数の多さに圧倒されている。

「なんだか数が多いな」

「そうね」

お互いに少々疲れてきているようだった。とその時俺はあること思いついた。今回のネウロイは高速で走行した後急減速して旋回を行う、これによってギリギリの位置ではあるが俺達の弾丸が当たらなくなっていたのだ。というのも苦労していたのは、なにも俺達だけではなかったようだ。宮藤さんやリーネさん、中佐や坂本さんも苦戦しているように見えた。

「坂本さん。なんだかネウロイの攻撃回避の周期がわかった気がします」

「なに、本当か石井！」

「はい、どうも敵は自分たちの攻撃のほんの少し前に減速して旋回するようです」

「わかった。今のことを全員にもう一度報告してくれ」

「わかりました」

と俺は答えるともう一度このことを言った。

「全員に告ぎます！。敵は今言ったとおりで高速飛行、急減速、急旋回を繰り返しているようです。周期は各々異なっているようですが…スピードは見た感じたいそう変わらないようです。ですから、どうぞご参考にしてください！」

「了解！」

とみんなもそれに答えてくれた。

「あなた、良く見つけたわね。さすが飛び級さんね」

「もう…やめてくれよ。恥ずかしいだろ…うわっと！！」

「大丈夫あなた！！」

「これぐらい大丈夫だよ。飛び級だから…」

「あらあら、言ってくれるじゃない」

「さてと、じゃあ行くか！」

「えぇ」

俺達も再び攻撃を開始した。他の人とは違い俺のストライカーは電気式でしかも発電ブレーキという空気ブレーキという強力なブレーキを持ってはいるのだが、発電ブレーキは着陸時以外は使えない。なぜなら車輪が使えないとこのブレーキは作動できないのだ。ただ、俺の機体は最高速度は遅いものの低速飛行が可能だ。他の人のストライカーだとエンジンしかないから失速速度が質量の関係でどうしても失速速度が速くなってしまうのだが俺の場合はモーター自体が軽いので半ばグライダー状態を生み出すことが出来るのだ。だから失速速度はストライカーとしては異例の６５？（凡そ３１ノット）だった。といってもこの６５？というのは設計上もので今回は安全上８０キロを下限として飛行することにした。

「制限９５！」

俺は半ば運転士のように呟きながら徐々に速度を落としていった。ある程度段階を踏んでから速度を落とさないと途中で失速したときに大変なことになる。

「制限９０！」

・・・・・・・

「制限８５！」

俺はその後も順調に速度を落としていった。今回はネウロイに８５？で対応できることがわかったためこれ以上速度を落とさないようにした。僕はネウロイに向かった、案の定俺が撃とうとするとネウロイは急減速を開始した。

”甘いな”

俺は心の中でそう呟きながら銃を撃った、そして見事にネウロイは白色の塵になった。

「石井、一機撃墜！」

そう俺が言うと坂本さんが俺を見ながら答えた。

「良くやったな…っておい、お前失速しているのか？」

「大丈夫ですこのストライカーは最低６５？、３１ノットで航行することが可能なんです」

「そうか、しかしよく考えたな」

「えぇ、モーターの重量を抑えたかいがありました」

「うむ、この調子で頼むぞ！」

「はい！」

俺はそのあとも順調にネウロイを撃墜していった。他の人はどうかというと俺のアドバイスの効果も少なからずあったようであった。

俺が7機目のネウロイを撃墜したのち、最後の一機を醇子が攻撃した。ネウロイは撃墜することが出来たものの苦し紛れにはなった最後のビームが僕をかすめた。幸い俺は回避に成功していた。

「大丈夫？、あなた！」

「うん、何とか避けられたよ」

「ふぅ…、よかった」

と俺と醇子が会話をしていると

「石井、あれを見ロ！」

突然エイラさんがそう叫んだ。ネウロイのビームが線路を破壊していたのだ。実はこの路線は前にも俺達が救援した路線で、救援後にはこの区間は蒸気機関車のボイラー爆発の反省から無煙化…即ち蒸気機関車からディーゼル機関車に置き換えられしかも輸送力増強の

ため複線になっていた。今回は幸い片方の線路、ロンドン方面の線路しか破壊されていなかった。

「坂本さん！、線路が破壊されました」

「うむ、こちらでも確認が出来た、直ちに救助を…」

「あっ、石井さんに坂本さん大変です！」

「どうしたんだ宮藤！」

俺はとっさに宮藤さんの顔が向いている方向を見た、すると高速で事故現場に接近している急行列車が遙か彼方に見えた。

「あっ、あれって一昨日の選手の皆さんじゃないですか？」

遠目の効くリーネさんがそう言った。

「何だって！」

俺はつい大声で言ってしまった。と同時に自分では無意識のうちに銃などの物騒なものを醇子に渡して僕は列車の方に向かった。言い忘れていたのだが、この区間は複線化と同時に連続したカーブを見直して緩やかで大きなカーブを一つ作った。これによって高速運転は可能になったものの肝心の見通しについては今ひとつなところであった。近づいてくる列車のスピードから考えるとどう考えても運転士が線路以上を確認してから非常ブレーキを動作させても、事故現場の前に止めることなど不可能であった。

「おい！！、石井待て！！。勝手な行動を取るな！」

当然坂本さんはそう叫んだが、俺はこう言い返した。

「俺の大切な友人である野球の仲間を助けないわけにはいきません！、処罰は後で受けますから…！」

すると坂本さんも黙ってしまった。不意に

「待ってあなた、私も」

醇子もそう言って俺に付いてこようとした。俺にはそんなこと出来なかった、大切な妻にまでも罰を受けさせるわけにはいかなかったのだ。

「お前はそこにいろ！」

俺がそう答えると

「どうして！」

「罰を受けるのは一人だけで十分だ…」

「でも…」

「いいんだ。頼む、わかってくれ」

「…わかったわ。気をつけてね」

「あぁ、勿論だよ」

と俺は言い終わった後他のメンバーにこう伝えた。

「他の隊の皆さんにお願いです、真下にある事故現場に待機していてください。万が一の時に対応するために、よろしくお願いします」

と俺が言うとみんなは迷うことなく

「了解！！」

と俺に言い返してきた。

”ヨシ、これで準備は大丈夫だ。大下さん、川上さん、沢村さん、藤本監督そして皆さん待っていてください今助けに行きますから！”

俺はそう心の中で叫びながら列車に向かった。

俺は自分の速度と列車を合わせた、すると時速９５？だった。このままでは停止させてもヘタすると緊急停止しても間に合うかどうかだ、この機関車はＤ１６－１型と言ってブリタニアの電気式ディーゼル機関車だ元々欧米の列車は扶桑の列車と違い［動力集中方式］を採用している、この方式は機関車や動力車を列車の両端に集中させて中間車（客車）を無動力な状態で動かすという大胆な方式だ、この方式の大きな欠点は察しのいい方ならわかるかもしれないが、小刻みな速度変化に対応できないのだ。現にリベリオンの貨物列車の場合牽引する機関車は停止するとき３つのブレーキを目一杯効かせて停止するのだ。

その頃車内ではと言うと

「おい大下、あれ昨日の石井じゃないか?」

「あぁ本当だ、何かあったんですかね?。監督」

とのんきに話していた。大下さんの乗っている車両は後ろの客車だった。本来なら昨日のうちに他の場所に向かうはずだったのだが、あの大雨のせいで列車が運休になり今日に振り替えられたのだ。とりあえず前の車両から俺は順に、伏せるように指示をしていった。

俺は前の車両のブリタニア代表の車両の窓をドンドンと叩いた。

「どうしたんだ?、ウィッチさんがなんかご用か?」

”なんてのんきなんだ…おっといけないいけない。すぐに伏せるように言わないと”

「この先に線路陥没している区間があります」

と俺が言うと車内は一気に静まりかえった。

「何だって!、線路陥没!」

「そうです、万が一に備えてすぐに安全な体勢を取ってください。必ずですよ」

「でもしかし…」

「ためらっている暇なんてありません!。二度と野球が出来なくなりますよ!」

と俺が言うと皆席に座り衝撃に備えて身を低くした。

「それではそのまま、待機してください」

と言うと俺は窓を閉めて隣の車両に向かった。

俺はすぐに隣の車両の窓を叩いて窓を開けてもらった。出てきたのは監督だった。

「どうしたんだ石井?、ロンドンでも試合やるのか?」

”ホントに何も知らないって困るな…”

「違います!、今すぐ衝撃に備えてください!」

と俺が言うと皆騒然とした。そして笑いが起こった。

「何言ってるんだ石井?。結婚して嬉しすぎておかしくなったのか?」

「この先で線路が陥没しているんです!。このまま突っ込めば確実に脱線します!」

俺がそう言うと笑いは一気に静まりかえった。とそこへあの沢村さんもやってきた。

「石井、それは本当なのか?」

さすがに幾たびの野球の修羅場を切り抜けてきた選手である、非常に落ち着いていた。

「そうです、沢村さん。このままでは皆一生野球が出来なくなるかもしれません…」

というと今度は後ろの方から大下さんの声が聞こえた。

「監督！」

「どうした大下？」

「ここは彼の意見に従いましょう、俺もこんな事故で野球が出来なくなるなんて御免です」

「そうか…わかった。ヨシッ！、みんな衝撃に備えろ」

監督はさすがである。監督がそう言うとみんな一斉に衝撃に備える体勢を取った。俺は監督にお礼を言った。

「ありがとうございます。監督」

「石井、後は任せたぞ」

「はい。決して野球が出来なくなるようなことにはしません」

と言うと俺は機関車に向かった。機関車の運転士はのほほんと運転していた。俺は乗務員室の窓を叩いた。

バンバンバン！！！・・・・・

さすがに驚いたのだろう、慌てて窓を開けた。

「何やってるんだ!、危ないじゃないか!、一体どうしたんだ?」

「この先で線路が陥没しています」

「何!?」

「だから早く速度を落としてください!!!」

「わかった!」

運転士は俺に言われたとおり、ブレーキをかけた。後事故現場までは1キロあるかないか、止まれるかはわからなかった。

「坂本さん」

俺はインカムで呼んだ。

「どうしたんだ石井?」

「いざというときはお願いします、もうすぐそちらに列車が来ます」

「わかった。みんな準備にかかれ!!」

「了解!」

坂本さん達は坂本さん達で何か考えがあるようだ。

機関車はみるみる速度が落ちていった。

「６５…６０…５５…５０…４５…４０…３５…３０…２５…２０」

ようやく列車の速度が２０キロになりかかろうとしていたとき、もう陥没区間と列車の距離は５０メートルあるかないかだった。俺も万が一に備えて構えた。

”間に合え！。みんながまた野球が出来るように…”

この時、俺はこれ以外のことは頭に思い浮かばなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・

「やった！。間に合った」

俺がそう叫ぶと後ろの方から歓声が飛んできた、代表選手からだった。機関士もほっとした顔で座っていた。

「石井、良くやったな」

「はい、坂本さん」

「うむ、後は会社の方に任せよう」

実はこの時坂本さん達は駅に向かい、このことを連絡していたのだった。

「あっ、ありがとうございました。坂本さん」

「なぁに、これぐらいお前のやったことに比べればたいしたことはないさ」

「いえいえ…」

すると、醇子もやってきた。

「もぅ、これ以上心配かけないでよ…私、あなたがいなくなったら…」

もう顔からはうっすらと涙がこぼれていた。

「大丈夫だよ、こうやって帰ってきたんだから」

「でも…」

「ごめんね。もう心配かけないようにするからさ」

「本当に？」

「あぁ、本当にだよ」

と言うと涙を拭いて醇子はまた笑顔と熱い抱擁を俺にプレゼントしてくれた。

俺は車両の方に向かった、勿論ブリタニア代表からも感謝の声はあったのだがやっぱり扶桑代表からの感謝の念の方が大きかった。

「石井～！！」

大下さんや監督をはじめとするみんなが俺を取り囲んだ。

「な、何なんですか？」

「そんなの決まってるだろ？」

「おっ、大下さん！。それに皆さん、ちょ、うわっ！」

「石井」

「みんな行くぞ！、せーのっ、石井！、ありがとう！」

俺は三回ほど宙に舞った。俺が降りるとその場から惜しげもなく拍手が俺に送られた…。

・・・

「あなた、気をつけてね」

「醇子もな…」

「あ、あなた…？」

「うぅ…。俺さ…醇子のことを…ぐすっ、竹井大尉って呼んでるときから…そのさ…じ、実は…好きだったんだよ…こんな綺麗な人と仲良くなれたらって…」

俺は知らず知らずのうちに涙を流していた。勿論俺と相対（あいたい）する人も同じだった。

「あ、あなた…」

「扶桑の男の中にはよ…人前で泣いちゃいけないって、暗黙の決まりがあるんだよ…ぐっ、だからこうしないといけないのさ…。本当は、俺だって…俺だって…うぅ…」

すると醇子はそっと俺を抱きしめてくれた。

「ダメよ。あなた、それ以上泣いちゃ…私も悲しくなっちゃうわ…。大丈夫よ、私たちはどこにいたって…必ずつながっているから…」

「じゅ、醇子…」

「大丈夫。それがあなたの口癖でしょう？」

俺は醇子に言われてはっとした。ここそ、俺は踏ん張らなくては

いけない。涙なんか流している場合じゃないと…。

・・・

「…いや」

「えっ？」

「いやよやっぱり。せっかく一緒になれたと思ったのにまた離れればなれになっちゃうなんて私…」

顔をうつむけていたのは、僕に涙を見られたくなかったのだろう。今度は俺が泣き続ける妻を抱きしめた。

「あっ！」

「良いか醇子？。離れていたって心が通じていればきっとすぐに会える。そうやって昨日俺に言ってくれたのは醇子だろう？。だから少しの辛抱だよ。扶桑に帰ったら一緒に仲良く暮らそう…」

「本当に？」

「あぁ、本当だよ。だからそれまでは我慢だ」

と俺が言うとようやく笑顔を取り戻したようだ、行く決意も固まったらしい…。

一時間後、醇子は荷物をまとめて輸送機のタラップにいた。もうあっちの隊のメンバーは集結していて後は醇子だけという状況らしい。

「行ってくるわね、あなた。着いたら連絡するわ」

おっと、俺は危うく渡しそびれそうになった。

「待って醇子、これを」

「これ…ボールじゃない？」

「醇子はそれを、俺はそのボールの台座を持っておくよ」

「でも…」

「また戻ってきたら置けばいいだろ？。だから必ず戻ってきてくれよ」

と俺が言うと醇子も笑顔になって

「ふぅ、そうしましょう」

と言った。

その後妻を乗せた輸送機は離陸していった。何も飛行機に限ったことではないが見送りの時などに発車していった列車など見ると妙に心に来る。まさに今俺の感情はその通りだった。

「行かなくて良かったんですか？」

「あぁ、いいんだよ宮藤さん。また会えるんだから…」

「そうですよね、安心しました」

「何が？」

「石井さん、奥さんがいなくなったらどうなっちゃうのかみんな心配していたんですよ」

俺が振り向くとみんなそんな顔をしていた。

「皆さん、大丈夫ですよ。さて…飛行機も行っちゃったんです。俺だけがくよくよしていたら妻に向けられる顔なんてないです」

俺がそう言うと中佐が目の前にやってきた。

「良かったわ…、石井さん元気そうで…。さて私たちも部屋に戻りましょう」

「了解！」

俺達は部屋に戻った。

・・・

「また泣いてるのか？」

「えっ…やっぱりあなたにはお見通しなのね…」

「勿論、夫なんだから」

「よかった、あなたの声が聞けて」

「今度は直接会ってまた話をしよう」

「そうね、ありがとう」

「うん、それじゃあ」

「えぇ、また今度」

俺はそっと受話器を置いた。

「石井さん、本当に良かったの？」

「何がです中佐？」

「一緒に転属しなくて…」

「俺は初めてこの部隊に入ったんです、解散されない限り俺はここに残ります」

と俺が答えると中佐は安心したようだ。

「そう…、ありがとう。昨日泣いていたのはもう大丈夫なようね。

それじゃあ、これからもよろしく頼むわね」

「ど、どうしてそれを？」

「私はこの部隊の隊長よ？」

「し、失礼しました！！」

「くすっ、よろしい。ハイ、それじゃあそれと…」

なにやらいやな予感しかしない。

「そ、それとなんですか？」

「今までは奥さんもいたからある程度は目をつぶっていたけど…」

”ここに来てこの状況ってまさか…”

「これからはもっとビシバシ行くわね」

「はい…。了解です中佐」

「それと私、中佐だけだとなんだかよそよそしくていやなのよね…」

”なんだ～、そんなことを言うのもためらっていたのか…”

「じゃあこれからはミーナ中佐で」

「うん、それじゃあこれからもよろしくね」

「了解！」

俺はそう言うと部屋に戻った。とそれと同時に消灯ラッパも鳴り俺は寝ることにした。ベッドはと言うと、また戻ってきたときのためにそのまま残すことにしておいた。明かりを消そうとすると台座だけが残ったボールケースが見えた。

”きっと醇子もボールを見て同じことを思っているんだろうな。だけど、いつまでも感傷に浸っているわけにはいかない、俺も夫なんだからな…”

と思いながら

「よし、寝るか！」

と呟きながら俺はベッドに入った…。

40話　sister－1

妻が去ってから早いもので二週間が経過した。最初の一週間こそ毎日のように電話をしてきたが徐々に慣れてきたのだろうかそれとも仕事が忙しいのだろうか、今週は一回しかかってきていない。

”まぁいいか、さて今日もいい天気だし素振りに行くか…”

外に出ると暑い、じりじりと日差しが滑走路に照りつける。ただ海風があるので涼しくないわけでもない。扶桑とは違いブリタニアはカラっと暑いと言えばいいのだろうか、例えれば北海道のような暑さだ。だからといって決して湿度が低いわけではない、それどころか冬場は扶桑よりもブリタニアの方が高いのだ。

ではなぜ乾燥したように感じるのか?。それは気温に大きく関係がある。ここは扶桑よりも年間の平均気温が１０度ほど低い。これによって湿度が仮に高くても相対的に乾燥しているように感じるのだ。ましてやここは海の目の前で海風が常時当たる、これにより換気もスムーズだし何より人の感覚器官は風に当たると涼しいと感じるのだ。

”さて、そろそろ始めるか。”

俺はいつも通りゲージを設営していた、すると屋根を組み立て終えた頃に不意にのどが渇いてしまった。練習の前には水を飲んでくるのだが今日は忘れてしまった。

「ふぅ、しょうがない。水、飲んでくるか…」

俺はそう呟きながら食堂に向かった…。この時、俺は何か気配を感じたが気のせいだろうと思い、振り向こうともしなかった…。

・・・

そう言うと二人の顔にはまた笑顔が戻った。

「でもこんな綺麗なシーツがあるってことは二人ともまだ洗濯の途中なんじゃ…」

と俺が言うと二人は

「「あっ！」」

と同時に言った、それとも叫んだという方が適切だろうか…。

「石井さん、すいません。私たちまだ…」

「わかってるよリーネさん。早く戻りな…。終わったらまた来ればいいよ」

「はい、それでは失礼します。行こう芳佳ちゃん」

「うんリーネちゃん。それじゃあ石井さんまた後で」

そう言うと二人は走って物干し竿の方に向かった。俺も練習に取りかかった。

・・・

ているんだけど…今度手紙でも出すか”

・・・・・・・の・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・ぇ・・・・・・・・・

”そういえばさっきから声が聞こえる気がする…。そういえば前にもこんなことあったなあのときは確かここに来たばっかりでしかも夕方だったよな、そうそうエイラさんにユーティライネン少尉って言ったらエイラでイイヨとか言われたんだったっけ…”

どうも今回も気のせいではなく現実のようだった。

「ねえ!!!」

あまりの大声に少し驚いてしまった。

「うわっ!」

「全くもう、何回人を呼ばせれば気が済むの?」

「すっ、すいません」

「もう…」

”あれこの人達誰だ?。どうも市民のようだけどどうしてこんなところまで入ってこられたんだ?、普通なら守衛で止められるはずなのに”

俺は今まで見たこともない人たちに出会っていた。右側の人はなんというかゲートルが派手だ、そして左側の人は服が真っ黒だ、なん

というか正直言って怖い。見たところ、二人とも女性のようだ。

「あのさ」

突然右側の人が俺に尋ねてきた。

「はい？」

「リーネはどこ？」

”なんだ～この人？。リーネさんと仲がいいのか知らないけど随分馴れ馴れしいな”

俺はそう思いながらもこう答えた。

「多分物干し台のところにいると思いますけど…」

と俺が答えると二人は俺を見ながらこう続けた。

「わかんないから案内してよ」

「はっ？」

「いいじゃん、せっかく来たことなんだし、ねっ！」

”う～ん、まぁいいか”

「わかりました案内しましょう」

「ありがとう。これで一安心だわ、ねぇビューリング？」

”ビューリング？”

そうか、この真っ黒な人はビューリングさんって言うのか。さっきから何も言わないでタバコをプカプカ吸ってばかりだけど…。

「行くんだったら、早く…」

「あっ、そうだった。それじゃあよろしく」

なんだかこの二人、僕のこと部下と思ってるのかもしれないがこう見えても俺は准尉なのである。まぁこの際そんなことはいい、いや良くないはずなのだが…まぁいいか。

俺は二人をリーネさんのいるところに案内した。

「リーネさん」

「あれ、どうしたんですか？。石井さん？」

「あの…あなたに会いたいって言う人たちがいるんだけど…」

「えっ？！」

「それでもうそこにいるんだ…。どうする？」

「何々？、リーネちゃんにお客さん？」

「そうなんだよ宮藤さん」

「私は会ってみたいなリーネちゃんのお友達」

「よ、芳佳ちゃん」

「で」

「あっ石井さん、ごめんなさい」

「どうする？」

「わかりました。呼んできてください」

「そう、と言うかもうそこにいるんだけどね」

俺が呼びに行くと二人はなんのお構いもなしにリーネさんと宮藤さんの前に現れた。

「よっ、リーネ！」

例の派手な人はいつも呼んでいるかのような口調でそう言った。後ろからでは真っ黒な人がまたタバコを吹かしている。

「…！！。……」

と俺は異変に気づいた。さっきからリーネさんは震えながら、絶句している。

「お、お姉ちゃん…」

とリーネさんは呟いた。

「えっ、この人リーネちゃんのお姉ちゃんなの？」

と宮藤さんも困惑していたようだった。勿論無理はない、俺も同じだったのだから…。

41話　sister－2

リーネさん、宮藤さん、俺と驚かなかった人はいないだろう。この人がリーネさんのお姉さんだったなんて。

「あらら、ビックリさせちゃったかしらね」

”そりゃ誰だって驚くだろう、あんなに馴れ馴れしく俺に居場所を聞いてきて案内したらお姉さんだったなんてなぁ。にしてもこれがリーネさんの姉か。随分対照的だな”

一方で隣のビューリングさんはと言うと相変わらずタバコを吸っている。

「それじゃ、改めて初めまして。私の名前はウィルマ・ビショップ、リーネの姉よ。元ファラウェイランド空軍所属のウィッチよ。今は年齢で退役しちゃったけどね…。最終階級は軍曹だったわ」

とウィルマさんが言うと隣のビューリングさんも続けた。

「私はエリザベス・F・ビューリング。元ブリタニア空軍所属のウィッチ。最終階級は少尉。よろしく」

何となく思ったのだがこの二人、どうも相対的だ。明るいウィルマさんと寡黙なビューリングさん。何となくハルトマン姉妹を思い浮かべる。まぁエーリカさんほど脳天気というか天使ではないようだが。

俺も相手にさせているだけでは失礼なので、挨拶をすることにし

た。

「初めまして、私は扶桑皇国海軍の宮藤芳佳です。階級はリーネちゃ…いえリーネさんと同じく軍曹です。よろしくお願いします」

リーネさんは二人を知っているようだったので挨拶はしなかった。

と言うことで次に俺が挨拶をした。

「初めまして、俺は石井明範です。宮藤さんと同じ扶桑皇国海軍のウィッチです。階級は准尉です。今後ともよろしくお願いします」

と俺が言うとウィルマさんは何か感づいたようだ。

「あれ?、あなたがあの石井さん?」

「はい?」

「ほら、この間ドーバーでサヨナラホームラン打った」

意外なことに俺がホームランを打っていたことを知っていたようだった。

「えぇ、そうですけど…どうしてそれを?」

「だって、ビューリングと私、観客席で見ていたんだもの」

「あぁ…ってことは…。もしかして」

「えぇ、見ていたわよ。試合後のものも…言って欲しい?」

案の定知っていたようだ、ただここでもう一度あのことを思い出すとなんだかとても恥ずかしい。いや決して悪いことではないのだがどうも動揺が収まらない。

「いっ、いえ。いいですよ」

と俺は言い返した。俺の行動を予測していたのだろうか、随分と笑っていた。

「あはははははは。やっぱり恥ずかしいか～」

「それはそうとう、二人は仲がいいんですね…」

と俺が言うとリーネさんが

「お姉ちゃんとビューリングさんは元々同僚だったんです」

と説明してくれた。なるほど、そうだったのか。なんて思ってるとビューリングさんが懐から古新聞を取り出して僕に受け渡した。

「あの…これは？」

「この記事を見れば誰だってあんたが誰かぐらいわかる」

なんだろうと思い記事を読んでみた。

【扶桑の男性ウィッチがホームラン級の偉業を】

昨日行われた勲章授与式に一人の外国人男性の姿があった。その名は石井明範、大日本扶桑皇国海軍准尉だ。彼は二度にわたって鉄道

事故復旧の救援と定時運行への早期回復に貢献したとして、このたびジョージ・メダルをチャーチル首相から授与された。実はこの授賞式の三日前には我が国の野球ナショナルチームから劇的なサヨナラホームランを放って扶桑代表のチームの勝利にも貢献している。またこの試合で彼はウィニングボールでプロポーズをして見事に成功した。今後の彼の活躍には色々な面において期待が出来るであろう…。

　これは恥ずかしい。さすがに堪えるものがある。何もここまで誇張して（プロポーズとかは間違ってはいないが。）書く必要まではない。

「うわぁ、石井さんのこと記事にもなっていたんですね」

「そうみたいだね宮藤さん。ところでビューリングさん」

「ん？」

「これは国内だけで収まっているんですか？」

「どういう意味だ？」

「だから、その…これ海外には」

とビューリングさんに訊くとそれを遮ってウィルマさんが答えた。

「あぁ、この記事たしか、海外にも報道されたはずだよ」

「えぇ！？、それって具体的には…」

「多分アフリカにも扶桑にも届いているんじゃないの？」

俺は愕然とした。

”これは帝大に帰ったら多分いじられるな。多分奥さんを連れてこいとか言われそうだ…。まぁ醇子ならいいと言ってくれるはずだけど…”

「そうですか…」

俺は呟くように答えた。

「あら大丈夫？」

「えぇ…」

俺ははっとした、今は練習の途中だったんだ。

「あっ、じゃあ俺はまた練習があるんで、これで…。」

「あっ、ちょっと。」

俺はその場を走って逃げた。恥ずかしくてこれ以上あの中にいるとおかしくなりそうだった。

俺は再び練習を開始した。幸いゲージの中は日差しが無くなった分涼しく感じた。

・・・

「だからって、そんなに吸われたら…ゴホッ！…体に毒ですよ」

「なんだ？、吸いたいのか？」

”何考えてんだこの人…”

「いえいえ。そういうわけでは」

「そうか…」

タバコを後ろで吹かされている状況でまともな練習も出来るはずが無く僕は、今日の練習を打ち切った。

「練習、止めるのか？」

「えっ、えぇ。煙い中では集中できませんから」

「そうか…」

”なんだこの人、自分が悪いって自覚してないのかなぁ…”

俺がゲージを片付け始めるとビューリングさんはまたタバコを吸い始めた。気がつくと隣にはウィルマさんの姿もあった。

俺が最後のゲージをたたみ終えて片付けが完了するとビューリングさんは突然俺に尋ねてきた。

「おい」

「はい？」

「ちょっとストライカーを見せてくれないか？、ウィルマも一緒だから」

と俺がウィルマさんの方を見ると

「うん、私もみたいな。あなたのやつって電気で動くんでしょ？」

”まぁいいか。せっかく来てもらったんだし”

俺はそう思い

「あぁ…いいですよ。ハンガーに向かいましょうか…」

俺は二人を自分のストライカーの前に連れて行った。

「これがあんたのストライカーか」

「えぇ、そうですよ。ビューリングさん」

「懐かしいな～」

「何がですウィルマさん？」

「私たちはもう乗れないからさ…そうだ石井、動かしてみてよ」

「えっ？」

「いいでしょ？、せっかく来たんだしそれに電気のストライカーなんて滅多にみれないんだから」

俺はビューリングさんにも視線を向けたが同じだった。相変わらずタバコを吸っていたもののそのタバコの煙が

”やってくれるよな”

と言いたそうだった。

「…わかりました。じゃあ下がっていてください」

俺はモーターを動かし始めた。またハンガーの中に醇子曰く省線電車のような音、すなわち吊り掛けモーターの音がこだまする。

・・・

気がつくともう夕方になっていた。

「あのお二人はこの後は？」

「あっ、いけないもうこんな時間だわ、そろそろ帰らないと」

「お帰りになるんですか？」

「えぇ。石井、ちょっとおいでよ。さっきのお礼にビューリングのやつ見せてあげるから…」

「は、はぁ」

俺とウィルマさんとビューリングさんは基地の門の前に向かった。
すると突然ウィルマさんは俺に訊いてきた。

「石井」

「はい？」

「リーネは元気にやっているの？」

「だと思いますけど」

「良かった。私ね、リーネが心配だったの私と違ってあの子内気だったから」

「宮藤さんのおかげであんなに変わったんだと思いますよ」

「やっぱりそうなのね。あの子に感謝しなくちゃ。あっ、しまった」

「どうかしたんですか?。忘れ物とか…」

「違うわよ、あなたのサインボール見るの忘れちゃったわ」

「えっ!!!」

「せっかく来たから見ていこうと思ったのに」

”そうだった、確かウィルマさんとビューリングさんあの試合見てたんだったな”

俺は返答に困ったが少し考えて正直に答えた。

「ウィルマさん。実はあのボール今はここにはないんです」

「えっ?、どうして?」

「醇子…いえ妻に預けたんですよ。俺の部屋にはそのボールを置く台座しか今はないんです」

その話を聞いていたのだろうビューリングさんはこう言った。

「また会ったときのためか?」

「えぇ、そうですよ」

「なかなかやるのね」

とビューリングさんは言うと足を止めたお目当てのところに到着したようだ。見るとバイクがある。

「これ、ビューリングさんのバイクですか？」

「そうなの、ビューリングはバイク好きだから」

「へぇー、じゃあ二人はこれで…」

「そう、これからロンドンに帰るの」

そう言うと二人はヘルメットをかぶった。エンジンの音は俺のストライカーよりは酷くはないがけたたましい。

「石井」

「はいなんでしょう？」

「リーネによろしく言っといてね」

「呼んできましょうか？」

「大丈夫だよ。ほら」

とウィルマさんの指さされた方向を見るとリーネさんと宮藤さんが手を振って見送っていた。

「わかりました。それじゃあ気をつけて」

「うん、ありがとう。それじゃあ行こう、ビューリング」

とその時ビューリングさんが

「石井！」

と俺のことを呼んだ。

「はい！」

「これからも気を緩めず、頑張れよ。ブリタニアで一番期待されてるんだからな」

俺は笑顔でそして強く

「えぇ、勿論ですよ」

と答えた。するとビューリングさん達は行ってしまった。動き出した瞬間にビューリングさんの口がほほえんでいるように見えた気がした。

その後俺は基地に戻った、するとリーネさんと宮藤さんがやってきた。

「石井さん」

「どうしたのリーネさん？」

「あの、その…私のお姉ちゃんはどうでしたか？」

「あぁ、元気そうな人だったね」

「そうですか…」

「あっ、そうそう、宮藤さん」

「はい！、どうしたんですか石井さん？」

宮藤さんは突然俺に話を振られて少し動揺しているようだった。

「ウィルマさんがお礼を言っていたよ」

「えっ！、私にですか！？」

「あぁ、リーネをこんなに変えてくれてありがとうって」

するとリーネさんは驚いたように俺に聞き返してきた。

「えっ、もしかしてそれって」

「うん、内気な性格を変えてくれてありがとうって」

「もう、お姉ちゃんったら…」

リーネさんは怒っているような口調で言っていたものの笑顔だった、きっと嬉しかったのだろう。その後僕は洗濯物の取り込みを手伝った。

・・・

その夜、俺は突然ミーナ中佐にまた呼び出された。

”なんだろう、また何か俺やらかしちゃったのかな?”

「失礼しますミーナ中佐」

「石井さん、こちらにいらっしゃい」

なんだか今日はとてもいやな予感がする、と言うかそれ以外に何も思い浮かべられない。

「さあ、早く」

「はっ…はい」

俺はミーナ中佐の前に来た。

「あなた、民間人にストライカーを勝手に見せたそうね…」

「も、申し訳ありません。リーネさんのお姉さんだったのでつい…」

「これは明らかな軍紀違反よ…と言いたいところなんだけど。」

「はい?」

「全くもう、今度からは気をつけてね。今回はリーネさんのお姉さんとブリタニア空軍から謝罪の連絡がありましたから今回は許します」

「あっ、ありがとうございます」

「でも…」

「でも？」

「次やったらただじゃおかないわよ？」

「はい、肝に銘じておきます」

「ふぅ、それじゃあいいわ」

”良かった、今日はお咎めなしか”

とほっとしていたのもつかの間だった。

「でもお説教があなたには必要なようね。美緒！」

「あぁ、わかっている。石井、ミーナと一緒にちょっと来い」

「えっ！。でも…」

「つべこべ言わずにさっさと来い！！！！！」

「はっ、はい！！」

その後俺は結局夜中の1時半まで説教された。途中で何度か寝こけてしまったがその度にミーナ中佐と坂本さんからビンタが飛んできた。

結局翌日は寝不足で朝起きられず俺は寝坊してしまいまたミーナ中

佐に説教をされるのであった…。

４３話　低速（前書き）

４２話は縁起が悪いですので欠番とさせて頂きます。読者の皆様にはご理解のほど、よろしくお願いいたします。

43話　低速

翌日は起きると早速説教を食らった。単に寝坊したからだ。

「全くもう、もう少し気を引き締めてもらわないとね…」

「はい」

もうかれこれ一時間、俺は立ちっぱなしだ。扶桑にいたときの通学で慣れていたとはいえこの緊張感は通勤電車になかった。

「ねえ」

「はい」

「A」

「はい」

どうやら俺は立っている打ちに意識が遠のいていたらしい。更に運が悪いことにこれに自分で気づけなかった。みるみるうちにミーナ中佐の顔が怖くなっていく。

「石井准尉！！」

「は、はい！！」

「あなたね、わかっているの…」

その時俺を救ってくれたのはあろう事かネウロイだった。そう、警報が鳴ったのだ。

「ミーナ中佐!!!、ネウロイが」

俺はミーナ中佐にそう叫んだ。こうなってしまえばこっちのものだ。ネウロイが出たとなればのんきに説教などしていられない。

「わかっているわ。直ちに出撃よ」

俺はハンガーに向かった。中佐がインカムで言うには今日の敵は小型が多くも少なくもない位の量だ。今回はミーナ中佐は基地に残っていた。

「電流ヨシ、電圧ヨシ、出発!」

俺はいつもの通りそう言いながら離陸した。

「よし、行くぞ!」

坂本さんの一声で皆は敵のいる方向に向かった。まだこの時は今回のネウロイが俺を更に疲れさせるなんて知る由もなかった。

俺達はいつも通り攻撃を開始した。するとまず異常に気づいたのは高速コンビのシャーリーさんとルッキーニさんだった。

「あれ、こいつら…」

「ねぇ、シャーリーこのネウロイなんだか急に早くなったり急に遅

くなったりするよ」

その後続々とみんなそれに気がついた。

「ホントだこいつら加減速が半端じゃないよぉ。トゥルーデどうしよう？」

「あぁ、私も考えているところだエーリカ」

「どうしよう、リーネちゃん」

「う～ん、厳しいね芳佳ちゃん」

坂本さんも何も言わないが苦しんでいるようだった。いざとなったら扶桑刀があることはあるのだがこんなにたくさんのネウロイを斬ったら刃もいくらかくたびれてしまうから攻撃できないようであった。

とは言ってもさすがは世界のスーパーエースだけあってもう３０機あったネウロイが半分くらいになっていた。その時俺はふと思った。

”まてよ、俺のストライカーだったら何とかなるかも…”

俺は前にもやった低速飛行をしようと企んでいた。まずみんながおとりと言ったら語弊があるかもしれないが、ネウロイに先行する、この時俺は低速飛行をする。そしてネウロイが速度を落とした瞬間に俺が急加速し攻撃をする。こうすればネウロイが加速する前に攻撃することが出来る、スピードが遅いのだから射撃に集中でき命中精度が向上すると僕は考えたのだ。俺は早速そのアイデアを実行することにした。

「坂本さん、ここは俺に任せていてください」

「何か考えでもあるのか？」

「俺のストライカーなら何とかなるかもしれません」

「うむ、わかった。お前に任せよう」

「皆さんにお願いです。俺が合図を送ったらネウロイになるべく高速で接近してください。ネウロイが減速した際に俺が急加速し後ろから叩きます。」

「ちょっと待て石井」

「どうかしたんですかバルクホルン大尉？」

「それじゃあお前の体力が…」

「それは俺にもわかりません。でも今はこれをやるしかないんです」

「…わかった」

「他の方もよろしいですか？。」

皆は少しためらっていたようだ。俺のことを心配してくれているのだろうか。

「私、やっぱり石井さんだけに任せるなんて出来ません」

「宮藤さん、何言ってるんだ？」

「石井さん、あなたには奥さんがいるんですよ！」

「えっ？」

「石井さんがここで倒れたら、間違いなく奥さん…いや石井大尉は悲しみますよ。そんなことしてもいいんですか！！」

「それは、その…」

「私も一緒にやります」

「えっ？、あっ！、ちょっと宮藤さん！」

俺の隣に宮藤さんは失速速度ギリギリで俺と編隊を組んだ。失速ギリギリだけあってとても不安定そうだ。

「理論はわかりました。私も精一杯頑張ります」

残りの数を僕は数えてみると１４機だった。僕は彼女の目を見た、そこには１００％成功を確信する目しかなかった。

「よし、わかった。７機７機で半々に行こう」

「了解！」

「それでは皆さんもお願いします」

「了解！！」

俺の方にはバルクホルン大尉、ハルトマンさん、坂本さん。宮藤さんの方にはそれ以外のメンバーが向かった。ピーアール画は早速速度を落とし始めた。今はもうある程度速度を落としていた。

「制限８０」

「制限７５」

「制限７０」

「制限６５」

俺は遂に失速速度限界の時速６５キロにまで速度を落とした。みるみる他の人から離されていく、勿論宮藤さんからもだ。

「石井、準備はいいか！」

「はい、いつでも！」

「よしそれじゃあ行くぞ」

「はい！」

俺はすぐに加速を開始した。こうすることによってネウロイが止まった瞬間に俺が高速で接近し攻撃することが出来る。距離の問題からスピードは出せて２３０キロ前後だがこれでも十分に遅い方だった。

”いける！”

案の定ネウロイは速度を落とした。しかし俺のことまでは頭に入っていなかったのだろう。後ろから来た僕にあっという間に塵にされた。

「良くやった石井。この調子で頼むぞ」

「はい！」

と同時に宮藤さんの方でも一機目撃墜を知らせるリーネさんの声が聞こえてきた。

「宮藤さん」

「はい？」

「墜ちるなよ」

「はい、石井さんこそ」

「あぁ、勿論だ」

俺達はそう言うと再び攻撃を開始した…。

「二人とも良くやったな。おかげで全て撃墜することが出来た」

「いえいえ、とんでもないです」

「なんだ石井。醇子とこれをやりたかったのか？」

「え～、せっかく頑張ったのに石井さん酷いです～」

「えっ、いや…そういうわけでは…」

「あっはっはっは。石井はいじりがいがあるな～」

「もう坂本さん…」

と今、俺達は笑いながら基地に帰還している。そう、攻撃は成功したのだ。

”でも侮れないな、どんどんネウロイも頭を使ってきてる。このままじゃもしかしたら大変なことになるかもしれない。今日からネウロイについてレポートを書いていくようにしよう”

と俺は笑いながらも密かにそう考えた。するとシャーリーさんが勝負を挑んできた。

「石井」

「どうしたんですか?、シャーリーさん」

「明日勝負しないか?」

「何でですか?」

「ストライカーでだよ」

「えっ！」

「私のＰ－５１とお前の電気式のどっちが高性能かさ、ひいてはエンジンとモーターの勝負だな」

「ほう、面白い。石井、やってみたらどうだ？」

「坂本さんまで…、まぁそこまで言うんだったらいいですよ。やってみましょう」

「本当か！、内容は明日の本番の時に伝えるよ」

「わかりました」

「おいおい、二人とも」

「バルクホルン大尉、どうか？」

「あまりうつつを抜かすなよ、ここは戦場なんだからな」

「これだから堅物は～」

「なっ、なんだとリベリアン！！！」

”げっ、また二人がもめ始めたよ。ここは俺がまた沈めないと。はぁ、疲れるな～。こっちはただでさえ低速飛行で疲れてるって言うのに”

「ほらほら二人とも、いい加減にしてください」

「石井、お前もお前だ。軽々しく勝負に乗るな」

「まぁまぁ、ここは俺も性能試験をしたいので…、今回は大目に見てくださいよ」

「う～む、まぁそこまで言うのならいいだろう」

「シャーリーさん、明日はよろしくお願いします」

「おう、よろしくな」

と会話を交わしながら俺達は基地に着いた…。

45話　adjustmentcoordination

基地に戻ると早速俺は機器の修繕を行った。と言ってもまともな修繕はまだここに来てからしていなかった。具体的には分解してこの部品のチェックを行うものだ。今回の勝負はヘタするとストライカーに致命的なダメージを与える恐れがある、そんなことが当然許されるわけではない。このストライカーは扶桑のそして東京帝国大学の技術の結晶なのだ。

「モーターの異常はないようだな。ただ油がいくらか少ないようだな。ここのところの発電ブレーキを使うとうるさかったのはこれが原因だな」

「おぉ、石井じゃん。お前も検査かぁ？」

「あっ、シャーリーさん」

「あははは、そんなかしこまらなくてもいいんだよ」

「はぁ…」

「あたしも自分のストライカー見に来たんだ」

と言うとシャーリーさんは自分のストライカーの方に向かっていった。見たところ結構入念に検査しているようだ、よっぽど明日の勝負に気合いを入れているのだろう。

”スピード狂なんだな、ホントに”

「さて、整備の続きをしないと。あっ、危ない危ないここはまだ検電していなかったな」

検電とはその部分が電荷を帯びているか、つまり電気が流れているかどうかを調べることである。これを怠ると感電する危険性もある。

「あれ、検電器はどこだ？」

「はぃ…石井さん…」

「あぁどうも…。ってエイラさんとサーニャさん。いつの間にここに」

「ナンダ、気がつかなかったのカ？」

「え、えぇ」

「シャーリーさんと石井さんが話している時くらいからいたわ…」

どうも俺は二人の存在に気がつかずにシャーリーさんと会話をしていたようだった。

「でも何で？」

「電気で動くストライカーなんテ、あんまり見られないからナ」

「せっかくだからどう検査するのか見てみたくて…ダメかしら？」

なんだかこういうときのサーニャさんの顔はとても寂しそうだ。しかもエイラさんはエイラさんで

”サーニャを悲しませたらどうなるカ、わかってるよナ…”

ということを目で伝えている。一応警告をすることにした。ストライカーは構造上アースをつけられない、だから俺は感電事故防止のために慎重に作業している。

「いいですけど、感電する可能性がありますよ」

「ナニ！、石井どのくらいダ！？」

「場所にもよりますけど俺のモーターは直流方式ですから高いところは１５００ボルトですね」

なんだか二人に１５００ボルトと言っても理解してもらえてないようだった。１５００ボルトだから何って言う顔をしていた。

「たぶん、即死だと思いますよ」

「えっ！」

「なんだっテ！」

二人ともようやく事の重大さを理解してくれたようだった。当然のことながら感電させた場合の責任は俺にある、面倒くさいというわけではなかったが素人に電気は危険がつきものである。前にも言ったことがあるが俺も大学にいたときは何度も感電した、幸いにも殆どやけどくらいのケガで済んではいたものの。

「それでもいいんだったら構いませんけど…」

と俺が更に念押しするとエイラさんは考え込んでしまった。サーニャさんにケガをさせるわけにはいかない（勿論それはこっちも同じだが）がせっかくだから見させてあげたいと何ともいえない袋小路に入ってしまったのだから。

”ふぅ、ここまで言えば大丈夫かな？、多分エイラさんが危ないから止めようとか言って戻っていってくれるだろう。見てくれるのはとても嬉しいんだけど危ないし、ケガしてからじゃあ遅いからな”

「私はいいわ、それでも」

「えっ、今なんて？」

「石井さん、それでもいいから見せて」

「いいんですか？」

「うん。エイラはどうするの？」

「サッ、サーニャがそう言うんだったら私も見るゾ」

”参ったな～、まぁせっかくだからいいか。多分二人もどれくらい危険かわかってくれたから多分危ないことはしないだろう”

「…わかりました。いいですよ」

「アリガトナ石井」

「ありがとう石井さん」

二人ともワクワクしていたようだが、こっちは緊張の連続だ。そういえばこんな事昔大学の教授が自分たちに言っていたのを不意に思い出した。まさか１８で俺がこんな風に思うなんて…。俺は二人に機器の説明から始めることとした。

俺は早速二人に説明を始めた。二人ともなぜかは知らないが興味津々のようで結構真剣に聞いていたし何かとわからないところは質問もしてきた。元々今日は明日に備えての検査だったので簡単なことしかしないつもりだったのだが、しょうがないからギヤなどを取り外して車軸の磁粉探傷検査などをすることにした。

「石井、これから何するんダ？」

「磁粉探傷検査ですよ。よいしょっと」

「石井さん、磁粉探傷って？」

「まぁ見ていてください。次期にわかりますよ」

と言うと俺はギヤを取り出した。それを回転台の上に載せると俺はこう二人に訊いてみた。

「じゃあ、エイラさん、サーニャさん」

「何ダ？」

「何ですか、石井さん？」

「今からこの車軸の傷を見つけてください」

「何言ってんダお前!、目に見える傷が全てとは限らないじゃないカ!」

「えぇ、目で見える傷も目で見えない傷もあるはずだわ」

二人は意外と察しがいい。この磁粉探傷検査とはまず、車軸全体に蛍光塗料などをつけた磁粉（砂鉄を細かくしたもの）を撒くというかつける。すると傷の出来ている部分には磁粉が残って傷を覆うようにそれが被さる。そうしたら、ライトを車軸に当てる、この時車軸をゆっくり回転させる。こうすることによって目には見えにくい傷もわかるようになるのだ。これは例えるなら皮膚のケガの上に出来るかさぶたを見つけるようなものである。

「なかなかいいところに気がつきましたね。勿論全ての傷を見つけるのは不可能です、でも、できるだけ小さな傷も見つけたいですよね」

「まぁそうダナ」

「この時必要なのが磁粉探傷検査なんです」

「どうやってこれでわかるの?」

「えぇ、まずこれを車軸に撒きます」

みるみるうちに傷の付いたところに磁粉が残っていく。

「あっ、粉が残ってる」

「石井、どうしてなんダ？」

「これは、傷の部分の磁束に反応するんです」

「磁束？」

「その素材が持つ磁気のことです。傷が出来ている部分の磁束は傷が出来ていないところと違って、少々傷の外側に漏れてしまうんです。この漏れている磁束に砂鉄が反応してくっつくんです」

二人ともよくわかっていないようだ。

「まぁ、ライトを当てればわかりますよ」

俺はライトを当てた、すると二人は驚いたようだ。ライトを当てると蛍光塗料に反応した磁粉が光る。これによって細かな傷を探し出すことが出来るのだ、と俺は二人に説明した。

「こんな小さな傷まで綺麗にわかるわ」

「ホントダ、こんなに傷が出来ているのカ…」

「この方法は金属の表面部分の傷を検査するのにはもってこいの方法なんですよ」

「石井さん、どうしてこんな事を？」

「えっ？。だって二人とも面白そうに見ていましたから、こう言う

経験ってなかなかないですしね」

「ジャ、ジャア私たちのためにやってくれたのカ？」

「まぁそうですね。工学に興味を持つ女性なんてなかなかいないですから。まぁ勿論、高速で回転するものにはどんなに小さい傷も次第に金属疲労を起こして事故の原因につながりますからね」

「ありがとう石井さん。いい思い出が出来たわ」

「アリガトナ石井。サーニャもこんなに喜んでるゾ」

「いいんですよ、また何か気になったことがあったら。俺に訊いてください。それと」

「「それと？（ソレと？）」」

二人は口をそろえて俺に聞き返してきた。

「このことはみんなにも伝えてください」

「えっ、どうして石井さん？」

「技術は隠して続けていても意味がありません。技術はいつか公開することによってよりよいものを作ろうと競争を産み経済、技術ともに発達するのです」

と俺が政治家みたいなことを言うと二人はまた驚いていたようだ。

「くく…何だっテ！？」

「ぷふ、石井さん。おかしい」

なんだか二人とも笑っているようだ。

「そんなにおかしいですかぁ？」

「ウン」

「だって、いきなり真剣な顔で話すんだもの…」

「もぅ…」

俺も自分におかしくなって笑っていた。

「サーニャちゃん達、こんなところにいたんですね」

「あっ、宮藤さん」

「エイラさん、石井さんご飯の準備が出来ました」

「オォ、リーネも一緒だったのカ」

「そうみたいですね。エイラさん。俺も一段落したので今日はこの辺で大丈夫です」

「磁粉探傷の結果ハ？」

「問題ないです」

「ソウカ、明日は頑張れヨ」

「はい！」

実はこの時ストライカーにある安全装置の開発を計画していたのだがそれはまた別のお話ということで。

俺等は食堂に向かった…。

46話　bath－time

食事に向かうともう準備がされていた。今日はシャーリーさんとルッキーニさんの番で缶詰とパンだ。

”まぁこう言う質素な食事も決して悪くはないがもう少し何とかならないかな”

ただ、こう思っていても、俺は他のことにで頭がすぐ一杯になってしまう。実は俺は今ストライカーユニットの安全装置の開発を秘密裏に行っているのだ。その名はＡＳＣ（Ａｕｔｏｍａｔｉｃ　Ｓｔｒｉｋｅｒ　Ｃｏｎｔｒｏｌ　自動ストライカー制御装置）だ、これは着陸時の滑走路オーバーラン防止のため着陸するある程度前からストライカーの速度を段階的に落とすというものである。ただ速度を落とすだけではあまり意味がない、この装置の大きな特徴は速度を落とした後なのだ。仮に設定速度をオーバーすると自動的に警報が鳴りストライカーのエアブレーキが動作するのだ。

でもこれを作るためには当然速度を読み取る装置が必要になる、俺はすぐに空気取り入れ口の中の風力発電用の羽を利用できるからいいものの他のストライカーはそうはいかない、しかもモーターとエンジンでは加減速に相当な差がある。このことが大きな壁となって俺の研究はなかなかうまくいかなかったのだ。

長々と俺は無言でこんな事を思っていた。俺は考え事をしていても他の人からしたら自分のやっていることと言ったら何も食べないで無言で座っているだけだ。それをきっと心配したのだろうリーネさんが話しかけてきた。

「石井さん！、石井さん！」

「えっ！、あぁ、どうかしたの？」

「訊きたいのはこっちの方ですよ。さっきから石井さんずっと座ったまま食べも話もしないので…どうかしたんですか？」

「いやちょっと考え事していててね…」

と俺が答えると

「もぅ…」

と怒った声でそうは言っていたが内面では安心していたようだった。俺はその後再び食べ始めた。

３０分くらいたっただろう。食事を終え皆と話しているとミーナ中佐が

「はい、注目！」

と言った。それに従い俺等はミーナ中佐の方を向いた。するとミーナ中佐はこう言った。

「今日まで石井さんにはずっと私たちの後にお風呂に入ってもらっていましたね、でも今日からはその心配はありません」

すかさず俺は

「えっ！、それって…」

と聞き返した。まさか男性ウィッチ一人のために風呂まで作るとは思っていなかったからだ。

「はい、施設班のおかげで男性用のお風呂が出来ました。だから石井さん好きな時間にお風呂には入れるわよ」

俺は嬉しくてしょうがなかった。これから眠たい思いをして風呂に入る心配もないし、先に入れてもらっても後の人のことを考えて急いで出る必要もないのだ。

俺はこのミーティングを終えると早速風呂に向かった。ミーナ中佐が言っていた話だと男性用の風呂は女性用の風呂の隣（まぁ隣と言っても少し離れてはいるが…）にあるらしい。

”それにしてもよく作ってくれたな。この基地には男性ウィッチが俺しかいないのに…”

女性用の風呂の隣を見ると右側の方に入口があるのが見えた。向かってみると入口に青色ののれんが掛かっていた。間違いなく男性用の風呂だ。

”青いのれんなんて…、どこで仕入れたんだ?”

俺は不思議に一瞬思ったものの気にせず、そのままのれんをくぐった。中にはこぢんまりとした脱衣所があった。まぁ男性ウィッチの少なさからしてしょうがないのだろう、俺はそう思いながらも早く風呂に入りたかったので急いで服を脱いだ。ここのところ酷暑が続き暑くて暑くてしょうがない。こういうときはぬるめの風呂に長時間入るのが一番効果的だ。

「さてさて、入るとするか」

俺は風呂へのドアを開けた。すると、中にはなんと言えばいいか銭湯並みの風呂が一つあった、手を入れてみるとちょうどいい具合の温度だ。俺は昔からの習慣で風呂にまず体を洗いその後風呂に入って出る。シャワーも一応三つ完備されていた。

俺が体を洗っていると突然大きな女性の声が響いてきた。

「きゃあっ、ちょっとエイラさん!!」

「おぉ、リーネ。ムフフ」

ドキッとして後ろを見たがそこにあるのは壁だけだ。上を見てみるとここは扶桑の銭湯と同じような構造をしていて天井が男女共用となっている。だから向こうからの声もこっちからの声の聞こえるようになっているのだ。勿論俺はまだ何も言っていないが…。

「ちょっとエイラさん。もう少し上品にお風呂に浸かれませんの?」

「フフーン、ツンツンメガネは残念だからナ…」

「な、残念ってどういうことなのですの?」

どうやら声の主はペリーヌさんとエイラさんのようだ。もめているんだかなんなんだかよくわからないが何となく想像はつくが敢えてここで言うこともないだろう。

「芳佳はどうだ〜?」

「わっ、ルッキーニちゃん！！！」

「う～ん、やっぱり残念～」

「残念！？、残念ってどういう意味！！！」

どうやら宮藤さんとルッキーニさんも同じようなことをしているようだ。俺はこの間に体を洗い終わり風呂に浸かっていた。目をつぶると危うく歌いそうになるところだった。風呂の中で歌を歌うと言うことはなかなか気持ちがいいものなのだがここで歌うと一大事だ。自分の歌が上手いとは言わないがヘタとも自分ではわからないのだただ扶桑にいたときには低い声が行かせる歌がいいと友人にはよく言われていた。

「そういえバ…」

突然エイラさんが隣でみんなに聞こえるようにそう言った。俺はさっきからずっと無言で風呂に入っている。

「どうしたんですか、エイラさん？」

宮藤さんも気になったのかエイラさんに質問してみる。すると

「イヤ、石井がいるんじゃないカと思っテ」

「そう言われればそうですね。明かりも付いてますし、石井さ～ん」

俺はどうすればいいか困ったが答えることにした。

「はい」

「いたんですか」

「えぇ…だいぶ前から」

と俺が言うとリーネさんがおそるおそる訊いてきた。

「石井さん、じゃあさっきの…その…」

リーネさんの顔が赤いのは見なくてもわかる。と言うか赤い顔が俺の目の前に出てくる。

「いいよ、それ以上は言わなくて。俺は何も見ていないし聞いていない。これでいいだろ?」

「あっ、ありがとうございます」

「うん…。ところで宮藤さん」

「はい?」

「そこには誰がいるんだ?」

俺が聞く宮藤さんはミーナ中佐と坂本さん以外は全員いると言った。今日はサーニャさんもお休みなのだ。

すると、突然シャーリーさんが俺に話しかけてきた。

「石井、こっちに来ないか~?」

ちょっと想像したりしなかったりもしたが、やっぱりそんなことは出来ない。

「な、何言ってるんですか！」

「ははははは、石井は本当にいじりがいがあるな～」

と俺が向こうに聞こえないように（と言うかシャーリーさんの笑い声で聞こえない）はぁーとため息を掃いた。

「おい、リベリアン」

この声はバルクホルン大尉だ。なんだかいい予感が珍しくする。

「なんだ～？、堅物」

「あまり石井をいじるな。可哀想だろ」

”ほっ、ようやくまともな意見が出た”

と思ったのもつかの間、ハルトマンさんの存在を俺は忘れていた。

「そうそう、トゥルーデの言うとおりだよシャーリー。石井にはもう奥さんがいるんだから…」

「そうだなエーリカ…って、何を言わせる！！」

「いいじゃんいいじゃん、ね～石井」

”えっ！！！
”

俺は驚いた。もう俺は体が熱くてしょうがなかった、しかも恥ずかしいのだろうか背筋がピリピリする。

「何がです?、ハルトマンさん」

「あぁ～そうやってごまかすんだ～、いいよ～だ。後で奥さんにそう伝えておくから…」

「やっ、止めてくださいよ。妻は関係ないでしょうが！」

「やっぱり、気にしてるんじゃん」

俺はこれ以上いると体が持たないと思ったから風呂を上がることにした。

脱衣所を出ると消灯ギリギリだった。俺は急いで台津所と浴室の電気を消し部屋に戻った。今日は幸い誰にも見つからず部屋に戻ることが出来た。

「さて、寝るか。」

そう呟くと俺は部屋の明かりを消して布団に入った。それとほぼ同時に消灯ラッパが鳴った。

”明日は勝負か…。勝てるところはじゃんじゃん勝たないとな…”

そう思いながら俺は眠りに落ちるのであった…。

47話　1300g

今日は久しぶりに早く起きることが出来た。時計の針を見てみるとまだ5時前だ。

”こんなに朝早く起きるの久しぶりだな…。素振りにでも行くか…。う〜ん、でも一応今日勝負があるから道具箱も持って行っておくか…”

そう思いながら俺はハンガーに向かった。とりあえず俺はストライカーの確認を行った後、素振りをすることにした。

ハンガーは真っ暗というか入口のそばだけしか朝日が出ておらず、ストライカーのあるところは真っ暗だった。

「電気、電気と…」

俺はスイッチの明かりをつけたみるみるうちにその場が明るくなっていく。すると上の方からなにやら声が聞こえてきた…。

「う〜ん、だれ〜?、明かりつけたの〜」

どうやら声の主はルッキーニさんのようだ、いつもルッキーニさんの寝る場所は変動する。今日はどうやらこのハンガーの上の鉄骨の部分のようだ。

「すいません、ルッキーニさん」

「う〜ん、その声は石井か〜今何時〜?」

「ようやく5時ですね」

「まだ早いよ～」

「わかりました、今消しますよ…」

俺は明かりを消した。

”どうしようかな、電気がなきゃ見えないし…。まぁいいか、ヘタにいじるのもあれだし…”

俺はそう思ったので自分のストライカーの前に道具箱を置いてゲージの方に向かった。実は俺は訓練や銭湯の合間の休みなどを使って簡易のトスマシーンを開発したのだ。これで練習方法が大きく変わった、一度に56球セットできるのでボールをいちいち取り出したりする必要がなくなったのだ。

”さて、始めるとするか…”

俺は練習を始めた…。

カーン・・・・・・、カーン・・・・・・、コツッ・・・・・・、

カーン・・・・・・。

トスマシーンの所為かは知らないがどうも真芯から15球に一度くらい外してしまいゴロを打ってしまう。まあこう言うものは試行錯誤だ。これからいい製品が出来ていけばいい、俺はそう思っていた。それに真芯から他の球は基本的に外していないので理想的なスイングが出来てむしろ俺は気持ちが良かった。すると後ろからいきなり

「わ〜！！！」

と大声が聞こえた。

「ひっ！！」

俺は驚いて変な声を出してしまった。それが彼女にとってはおかしかったようで笑っていた、彼女の名前は勿論ルッキーニさんだった。

「石井」

「はい？」

「私にも打たせて〜」

「えっ、でも眠いんじゃ？」

「だって、さっき石井が起こしたじゃん。それに…」

「それに？」

「前やらせてくれるって言ってたじゃん」

そう、あれは野球の親善試合の前の日に俺がゲージを片付けていた時のことである。ルッキーニさんが自分も打ちたいと強請ってきたのだ。たださすがにもう暗くなっていたので今度打たせると約束してその場を切り抜けたのだ。

「いいですけど、大丈夫ですか？。朝からいきなりって…」

「石井が出来るんだから大丈夫でしょ」

「そうですか、わかりました。じゃあ少し待っていてください」

「わ～い、やった～」

満面の笑みで俺の方を見ている。これはシャーリーさんが大事にしたがるのも無理はない。俺はルッキーニさんに使えそうなバットを探した、身長も体重も（失礼だから面と向かってルッキーニさんには言えないが…。）まだ子供なルッキーニさんに無理に重たいバットを使わせると腰などを痛める恐れがある。

”えっと…なるべく軽いやつを…そうだな～出来れば９００を割るくらいのものがいいな”

なんて俺が思っているとルッキーニさんは

「石井！、あたしこれにする～」

と言って俺にバットを見せてきた。

「あぁいいで…ってダメですよ。それは」

「えぇ～なんで～？」

ルッキーニさんが俺に見せたバットはさっきまで俺が使っていたものだった。俺はバットが折れたりして使えなくなるのは仕方がないことと思っているので気にしないが、これはルッキーニさんには使わせるわけにはいかない。そのバットというのは練習専用のバット

で１３００グラムも重さがあるのである。これだとルッキーニさんがバットに振られてしまってとても危ない。

「そのバットは１３００グラムも重さがあるんです。それじゃあルッキーニさんがバットに振られちゃいますよ」

「えぇ～、いいじゃ～ん」

「ダメです」

「いいの?、奥さんにこのこと話しても…」

「それとこれとは別です…って、１２歳のあなたがなんてこと言ってるんですか」

「うー、ルッキーニを子供扱いするな～」

”まずいぞ、怒り出している。ここは抑えさせないと…”

俺は女性が怒り出すと何かと運が悪くなる。坂本さんにせよミーナ中佐にせよ醇子にせよ…。だから俺は急いで１３００グラムがいかに危険か教えることにした。

「いいですかルッキーニさん。１３００グラムのバットは体にとても負担がかかるんですよ。普通の選手でもこんなに重たいバットは試合では使わないんです」

「そうなの…?」

「はい、９００グラム前後のバットを使うんですよ。前後って言う

のは個人個人が調節してベストな重さを見つけるんです」

「ふ～ん、ごめんなさい。わがまま言って…」

「わかってくれればいいんですよ。ここは俺にバットを選ばせてください」

「うん」

ルッキーニさんも納得してくれたようだ。どうも前に俺が数学を教えたときから俺のことを信用というか尊敬というか、上官なのにもかかわらず俺に従ってくれている。きっとシャーリーさんがそう思っているからなのかもしれない。

俺はルッキーニさんにも扱えそうな８６０グラムのバットを手に取った。これは非常に軽い方である、俺はルッキーニさんをゲージの中に入れトスマシーンのスイッチを入れた。

「よし、これで準備は出来ました」

「うん、で、どこからボールは出てくるの？」

「足下の穴のところからです。タイミングは2，3球も打っていれば自然と慣れてきますよ」

「ありがと」

と言うとルッキーニさんは振り始めた。さすがに体が小さいから苦労はしていたようだったけれど、なかなかシュアな打撃だ。流れに沿うというか多分バットが重すぎて振り遅れているのだろう。だが

それがうまい具合に流し打ちを可能にしているのだ。

「いいですよ、そのまま頑張ってください…はい後１５球」

俺の声は聞こえてはいるものの返事が出来ないみたいだ。

打撃が終わるとルッキーニさんは倒れてしまった。

「うにゃうにゃうにゃ～」

「あっ、大丈夫ですか！！」

「う～ん、石井なんだかあたし眠いみたい～」

やはり早朝の練習が堪えたようだ。俺はルッキーニさんの毛布を取りゲージのところの横の芝生に寝かせた。幸いもう夏だから寒くはない。

「やれやれ…」

俺はまた練習を再開した。だが打撃の音で目が覚めたら可哀想だったので俺は素振りをすることにした。横ではルッキーニさんがすやすやと寝ている。ふと見てみると顔がとても笑顔だ。

”何の夢見てるんだろうな、きっと美味いもんでも食べてるんだろうな…”

俺はここのところ夢を見ていない、多分毎日に疲れているのだろう。帝大にいたときも俺はあんまり夢を見なかった気がする。

「ムニャムニャ、い・・・し・・・い」

どうやら夢の中にも俺が出ているようだ。するとルッキーニさんはこう続けた。

「打てたよ・・・・ホームラン」

俺は素振りを続けた。勿論無視するはずがなかった。

「お見事…ルッキーニさん」

俺は笑顔でボソッとルッキーニさんに呟いた…。時計を見るともう6時前だった。起床時間まではあと1時間ある、俺は今日の朝練はここで締めて部屋に戻ることにした…。

48話　勝負

俺はその後ストライカーの中などを軽く確認してから部屋に戻った。

朝食後俺はミーナ中佐に呼び出されたので中佐室に向かった。何もしていないはずなのだが…。

「失礼します」

俺は中佐室をノックしながら入った。すると中にはハルトマンさんとバルクホルン大尉とミーナ中佐の他に後二人…いや正確にはウルスラさんともう一人見知らぬひとがいた。

「石井、悪かったな急に呼び出して」

「本当、石井さん。ごめんなさいね」

「いいんですよ、ミーナ中佐、バルクホルン大尉」

俺は大尉の前の席に座った。座れとは言われなかったが、みんな俺が着席することには同意しているような顔をしていた。

「石井さん。お久しぶりです」

「あぁ、ウルスラさん。今日はいったいどのようなご用件で?」

「えぇ、石井さんがストライカーの性能試験をするから来ないかと姉様からお手紙をいただきまして」

見るとエーリカさんは笑顔で俺の方を見てる。自分ではいいことをしたと思っているのだろうが、俺にとってはプレッシャー以外の何者でもない。ただこういう風に技術省の人を呼び出すことが出来るエーリカさんは凄いと改めて感心した。ただ一つ気になることがある、それはウルスラさんの隣にいる少女だ。多分同じ制服だからカールスラントの人なのだろうが幼く見えるからだろうかは定かではないが、どことなく学校の制服のように見えてしまう。と、俺がそんなことを思っているとウルスラさんが俺にこう言った。

「紹介がまだでしたね…。ヘルマ！」

と言うと彼女は俺の方に顔を向けた。

”ふ～ん、この人はヘルマさんって言うのか…。何だか小さくて、女の子って感じだな”

俺がそう思っているとそのヘルマさんはこう言った。

「初めまして。私は第１３１先行実験隊第三中隊所属、ヘルマ・レンナルツであります。階級は曹長であります。石井さん、今回はストライカーの性能試験を行うという事でこの基地に来ました。よろしくお願いします」

随分元気な人だ。～でありますとか特に…。

「初めまして、俺は大日本扶桑皇国海軍准尉石井明範です。今日はわざわざカールスラントからお越しいただきありがとうございます」

「いえいえ、電気式ストライカーを見るのは私も初めてでありまし

て、今日は是非ともご参考にさせてください」

「いいですよ。じっくり見ていってください。ウルスラさん今日はありがとうございます。」

「いえ、石井さん今日は頑張ってください」

「ありがとうございます…。で、ミーナ中佐、話というのは…」

「えぇ、この二人がいらしてくれたことを伝えたくて呼んだんだけど、その必要はもう無いみたいね」

「そうみたいですね」

と俺等が話しているといきなりエーリカさんがヘルマさんをいじり始めた。

「どうしてヘルマは来たの～？」

「そっ、それは電気式ストライカーの性能を見に…」

「えー？、うまい案がわかないから石井のものをパクリに来たんじゃないの？」

「何言っているのでありますか、そんなことは決してありません」

「ホントかなー？、石井気をつけてねー」

「何をですエーリカさん？」

「ヘルマだよ、パくられちゃうかもよ。ネタが切れたのかもね」

「だから、そんなことは！！」

「ほら、こう言ってるし」

「ムキー！！。ハルトマン注意にはもう少し航空歩兵としての精神を！！」

他のウルスラさんや大尉そして俺は深いため息を掃いた。すると

「はいはい、二人ともその辺にしてね…」

と久しぶりに俺の背中に何かが来た気がした。それはみんなも同じようだった。最後に軽く挨拶を交わすと、俺は中佐室を出た…。

今、俺はシャーリーさんの脇で空中停止（ホバリング）している。

「石井、手加減はなしだからな」

「勿論ですよ」

俺等は軽く会話を交わした後、体制を整えた。

「まずは上昇試験で～す」

リーネさんの間延びしたような声がインカムから聞こえてきた。

「こっちはいいぞ」

「こっちも」

俺もシャーリーさんも用意が出来た。俺のストライカーは上昇はそこそこ出来ると思うのだが…。

「よ～い、スタート！！！」

俺とシャーリーさんはルッキーニさんがフラッグを振ると一斉にスタートした。計測はサーニャさんが魔導針を使って行っているからかなり精度はいい。

「サーニャが測れバ、大丈夫ダ」

とさっきエイラさんも言っていた。こう思っている間にも俺とシャーリーさんは上昇を続けていた。さすがにシャーリーさんは高度１２０００メートルを超えた当たりから上昇力が落ちていくように思えた。俺はどうかというと問題なかった。モーターの稼働限界は－２５度ととっくに過ぎているがそれはあくまで計算上のものでついさっき、高度１００００メートルくらいまでは元気だった。しかし、今は１３０００メートルだ。どうして俺がまだ上昇できるかというと、モーターの惰性回転を使ったからである。高速で回転させていたモーターを今俺は惰性回転で動かしている。惰性である以上ある程度上昇力は低下していくもののまだまだ問題ない。

「よし、更に行くか！！！」

と俺が呟いたのが聞こえていたようだ。

「何！！」

と驚きながら俺を見上げていた。エンジンはどうしても空気が薄くなると上昇しにくくなる、現にシャーリーさんがそうだ。

「シャーリーさん、高度１万２０００メートルで上昇が止まりました。石井さん、まだ上昇を続けています」

「でも、あいつ今無動力ダゾ」

「そうね、エイラ」

俺のストライカーの上昇が止まったとき高度は２３４１７メートルを指していた。

「吐く息が白いな…」

と俺は呟いた。まぁこんな高さにもなればそれは当然だろう。俺は急いで降下を始めた、ここは寒くて仕方がなかった。一刻も早く俺は地上に戻ろうと俺は降下を開始した。

「石井さん」

「あぁ、ウルスラさん」

「お疲れ様でした」

「いえいえ、そんなことは。そういえばヘルマさん」

「はい、何でありますか？」

「どうでしたか？、俺の上昇試験は？。何か参考になりましたか？」

見るとヘルマさんはカールスラント語でたくさんのメモを取っていた。まぁ盗むところは盗め、と言ったところだろうか。これじゃあエーリカさんの言ってたとおりだけど…まぁ今年の冬にでも大幅な改造をする予定だからね。

「はい、石井さん。次の試験も頑張ってください」

「ありがとう。それでは」

と俺はお礼を言うと食事を取りに基地に向かった。

「ふぅ…」

俺が基地に着くと早速シャーリーさんが俺の前にやってきた。

「あぁ、シャーリーさん」

「石井凄かったな～、あの高さ最長不倒になるんじゃないか？」

「そうなんですかね？」

「ん？、嬉しくないのか？」

「いや、嬉しいですけど…やっぱり」

「醇子にも見ていて欲しかった～」

いきなり後ろから俺はどつかれたそんなことをするのはこの基地では一人しかいない、勿論ハルトマンさんだ。

「は、ハルトマンさん！！」

「石井の考えてる事なんて見え見えだよ～」

俺は言い返す言葉がなかった。確かにその通りだったからだ。

「石井」

突然シャーリーさんが俺のことを呼んだ。

「はい？」

「次の勝負は私がもらうぞ」

「負けませんよ」

俺とシャーリーさんは笑顔で言い合った。

次の試験は耐重量試験だった。これはいかに装備を重くして飛ぶことが出来るかである。シャーリーさんも俺もありったけの武器と弾薬を積んで飛ぼうとした。

「石井さん」

「宮藤さん、どうかした？。それにリーネさんも…」

「あっ、あのそんなに持って大丈夫なんですか？」

「多分…大丈夫…かなぁ？」

「多分って」

「まぁだめなときは落とすよ」

俺はそう言って飛び立った。今回は積載可能な武装の重さが俺の方が１．５倍くらい重い。勿論俺はありったけの武装を積んだ。

「おっ、石井～、気合い入れてるな」

「勿論ですよ。負けるわけにはいきませんから…」

「ははははは、まぁ頑張れな」

シャーリーさんは俺のことを見くびっていたようだ、確かにシャーリーさんのストライカーのＰ－５１は出力が１２６０ｋＷもある万能ストライカーだ。だが俺のストライカーも負けてはいない、俺のストライカーは最初は出力が１３００ｋＷだったがここに来て改良を重ねた結果１６５０ｋＷにまで強化することが出来た。これは扶桑で言うところのＥＦ－５７型電気機関車並みだ。出力からすれば俺の方が勝っているがこっちの方が武装が１．５倍も重いので、五分五分のような感じがした。

ところが、終わってみると結果は若干の差で俺の負けだった。

「シャーリーさん、強いですよ」

「私のストライカーは万能型だからな…」

「次はスピード試験だし、これじゃあ勝ち目がないですよ…」

「ははははは。まぁやってみないとわからないさ」

俺等はすぐに高速度試験を始めるため、すぐに用意をした。武装はと言うとみんなが手分けして基地に運んでくれた。

「おーい、みんなありがとー」

「皆さんのご協力に感謝します」

俺等二人は言葉違えどみんなにお礼をした。

「それでは位置について～」

俺等二人は構えた。

「石井。負けないぞ」

「勿論、こちらもですよ」

「ふふ、そうこなくっちゃな」

俺等は笑顔で二人でこう話していた。

「よ～い。ドン！！」

俺等二人はスタートしたみるみるうちにシャーリーさんに俺は離されていく。

「凄いわね、二人とも…」

「そうでありますね、ハルトマン中尉…」

「二人とも凄い…」

「速いナ～」

「わ～速い…石井さん、シャーリーさんに追いついてる…」

「うん、そうだね芳佳ちゃん」

「トゥルーデ速いね…」

「あぁ石井もリベリアンも良くやるものだな…」

「ミーナ、どう思う」

「凄いわね、石井さんのストライカーあんな性能があったなんて」

「全くですわ。見事なものです」

と下では皆がこのような会話をしていたようだったのだが俺等にはそんなものは聞こえては来なかった。俺は風力発電装置をつけた、するとみるみるうちにシャーリーさんとの距離が縮まった。

「あっ、あと少し…」

と呟いた。すると

「くっ…、負けるか…」

シャーリーさんもこのように言い返してきた。もうゴールは目の前だった。

夕方になってウルスラさんとヘルマさんが帰った後、俺はハンガーにいた。ストライカーの整備を行っているのだ、結果はどうだったかというと引き分けだった。どうやら完全に同着だったらしい。俺が整備をしているとシャーリーさんとルッキーニさんがやってきた。

「石井」

「いしい～」

「あぁ二人とも」

「今日は楽しかったよ、ありがとう」

「石井、速かったね～」

「いえいえ、こちらもたくさんの結果がわかりましたから…、多分これを提出すれば院は卒業できるでしょう」

「これだけでか？」

「えぇ、ストライカーの特性について１０００ページも書けば…」

「「１０００ページ！！」」

二人は同時にそう言った。まぁこんなことをやるのは扶桑でも卒論の時くらいだからな。と俺がそう思っていると二人はこう続けた。

「そうだった、食事の時間だ」

「うん、ごはんだよ～石井」

確かに時計の針はもう６時を指していた。

「わかりました。行きましょう」

俺等三人は廊下を歩き出した。ルッキーニさんは走って先に行ってしまった。

「ったく、ルッキーニ…」

「もうお母さんのようですね…」

「私はまだ１６だぞ。それにお前だって１８…。あっ」

「どうかしたんですか？」

「悪かったな私の方が年下だったのに…今までずっと呼び捨てで…」

「いいんですよ、それよりシャーリーさん」

「どうかしたのか？」

「また、やりましょう。次は負けませんよ」

と俺は言った。するとシャーリーさんも笑顔で

「おぅ、楽しみにしているよ…」

と答えてくれた…。

・・・

「石井准尉には婚約者がいるとの噂が…」

「そうよ。姉様の手紙に書いてあったわ…」

と珍しくウルスラさんはいろいろなことをしゃべっていた…。

49話　alcohol

夕食を取ると俺は素振りに向かった。今日は暑かったし、汗かきついでに振ろうと思ったのだ。だから今日は少なめに食事を取った。少ないと言っても前みたいにミーナ中佐のお怒りを買わないように今日は夜食を取らなくても大丈夫な程度で少なめにした。

”さて、ゲージをっと…”

俺はそう思いながらゲージの方に向かった。もう日も暮れていてシーツをこの間のように使う必要もなくなっていた。しかも朝練習をしていたので設営も楽に行うことが出来た。

カーン……カーン……カーン……

今日はいい感じで朝からバットが振れている。ここまでいいのは久しぶりだ、これがもっと有効活用できればいいのだが…。そう思っているとミーナ中佐がやってきた。俺は見えないふりをした、何かあると厄介なのだ。

「石井さん」

「あぁ…どうしましたかミーナ中佐？」

「あら、わからないとでも思ってるの？」

「えっ」

「さっきからずっといたのに気づかないふりをしていたわよね？」

「えっ、そっ、そんなことは…」

「まあいいわ。もう少ししたらお風呂に入ってちょうだいね」

「は、はい！」

「それと…」

「それと？」

「私にもそれやらせてくれないかしら？」

”なんだ、早く言ってくれればいいのに”

俺はそう思いながらもゲージを出てミーナ中佐にバッドを渡した。

「いいですよ、さぁ」

「ありがとう。この下から出てくるやつを打てばいいのね」

「えぇ」

と言うとミーナ中佐は突然使い魔を発動した。バッティングの方はと言うと…凄いの一言に尽きる。非常に鋭い打球だ、まさに使い魔がオオカミだからなのだろうか、多分だが女性の職業野球があれば「安打製造機」の異名をも取れるだろう。内野ゴロでもこのスピードだったらグラブにはそう簡単には収まってくれないだろう。そう考えるとバルクホルン大尉も同じだ。大尉は固有魔法が怪力だからホームラン量産であろう。

俺がそんなことを思っているとどうやらミーナ中佐は満足したようだ。ゲージから出た。

「ふぅ、ありがとう石井さん」

「いえいえ。これぐらい」

「後で私の部屋に来なさい。美緒も一緒だから」

「えっ！」

「いい？」

「はっ、はぁ…」

”またお説教かな…。今回は何もしてないのに…”

そう思っているとミーナ中佐は言ってしまった。俺もさすがに汗で体が冷えてきたので風呂に向かうことにした。この後体が思わぬ事で熱くなってしょうがなくなることも知らないまま。

俺は早速風呂に向かった。隣ではわいわいがやがやと盛り上がっている。男性用と女性用で風呂の電気系統は異なっているので俺が風呂に入ってることに皆気がついたようだった。

「はぁ～」

と、俺が体を洗って湯船に浸かりそうため息を漏らすと待っていたかのように

「お〜い、石井」

とそう言ってきた。勿論ハルトマンさんだ。

「どうかしたんですか〜？」

「どうしたんだよー。ため息なんか漏らして。何か困ったことでもあるのか？」

”ミーナ中佐に呼び出されてなんて言えないよな…当然”

俺はそう思いながらこう答えた。

「いえ、何でもありませんよ…」

どうもこういうときのハルトマンさんは冴えている。簡単に嘘と見破られてしまった。

「ふふーん、石井の嘘はすぐわかるんだ〜。奥さんにそう言っとかないと…」

「ちょ、なんでいきなりじゅ、いや妻を出してくるんですか？」

「だって、こういうのは奥さんじゃなきゃ治せないでしょ。それとも、今ここで言えばこのことは黙ってあげていてもいいけど。幸いまだここには私以外誰もいないから」

聞いたところによるとそうらしいが、見て確認できるわけでもないし、不安はあった。だが言わないと言わなかったで醇子に不安を与

えてしまう。それは避けたいし避けなければいけない。しょうがないので俺は正直にこのことを言うことにした。

「実は、この後ミーナ中佐に呼び出されてて」

と言うと、ハルトマンさんは意外だったのだろう。エッというような声が聞こえてきた。

「それで、何かやったの？」

「それが全くなんです。しかも坂本さんも一緒だなんて」

と俺が言うとハルトマンさんは急に元気になったみたいだった。

「大丈夫だよ、だったら。多分」

「そうなんですか」

「うん。ミーナは意外と優しいから」

それを聞いて俺はほっとした。体も温まってきたので俺は風呂を上がった。勿論俺は出るときにハルトマンさんにお礼を言っておいた。それから、俺は早速ミーナ中佐の部屋に向かった。

ミーナ中佐の部屋の前に付き俺はドアをノックした。

「どうぞ～」

とミーナ中佐の声がした。なんだか知らないがとてもミーナ中佐の機嫌はいいみたいだ。声がそう言っている。俺が中に入ると坂本さ

んとミーナ中佐は？んでいるようだった。

「あら～、石井さん。良く来てくれたのね。あなたが最後よ～」

「はっはっは、そうだな」

「あの～、二人とも…」

俺は何が何だかよくわからなかったのだが、坂本さんもミーナ中佐も椅子に座れと言うので俺はそうすることにした。よく見ると、二人ともいい感じに顔が赤くなっている。椅子に座ると早速俺は訊いた。

「あの…ミーナ中佐」

「あら～、なぁに？」

「その…話って言うのは？」

と俺が聞くと坂本さんとミーナ中佐はそれぞれ別々の酒を取り出してきた。見ると坂本さんのは焼酎でミーナ中佐のはワインだった。

「それで、これは？」

「飲み比べて欲しいの…どっちが美味しいか」

「えっ！？」

俺は驚いてしまった、あまりにも突然だったので…。俺は一応訊いてみることにした。

「あの…、何でこんな事を…」

「ミーナがワインの方がうまいと言って聞かないのだ」

「あら美緒こそ、焼酎が一番だなんて…」

「あの俺が最後って事は…」

「えぇ、あなた以外の人にはもうやってもらったわ」

”これって犯罪?”

俺はそう思いながらも?むことを決心した。幸いこの二つのお酒アルコール度数はそこまで高くない。にもかかわらず何でこの二人はこんなにできあがっているのだろうか…。この時俺は不思議でしょうがなかった。

それはさておき?むことにしたのだが…

「あの、これって?まなくちゃいけないんですか?」

「何か不服なのか?」

坂本さんは半ば酔いながら俺に聞いてきた。

「えぇ、だって俺未成年ですし…」

と俺が言うとミーナ中佐も坂本さんも笑っていた。

「はっはっは。石井はもう十分大人だ」

「でっ、でも」

「あら。そういえば、醇子さんから石井さんはああ言えばいいって教わったわ」

”それってまさか…”

「なんなんだミーナ、私にも教えてくれ」

と言うとミーナ中佐は坂本さんに耳打ちした。

「あぁ、なるほどな…。石井、私はお前の上官だぞ」

”やっぱり…”

俺がそう思ったときはもう手遅れだった。

「上官の…」

とミーナ中佐も言ってきた。俺は

「はぁ…。わかりました」

と諦めながら言った。

まず最初に焼酎を飲んだ。これはアルコールが少なくしかもまろやかだ。多分米のおかげなのだろう、扶桑人に合った味だ。その次

に俺はワインを飲んだ。これはこれでブドウの味がして美味しい。ジュースにアルコールを入れるとこんな味なのかと俺は思った。

俺が飲み終わると

「どうだ石井」

「石井さんどっちが美味しいかしら?」

と二人は聞いてきた。俺は非常に困った、味はどちらもいいのだが作り方も材料も全く違う。俺は正直にこのことを言うことにした。

「どちらも美味しかったです」

「何?」

「えっ?」

二人とも酔っているからだろうか、とんでもない威圧感を感じる。

”おっとっと、ここで負けたらまずい”

俺はそう思いながらこう続けた。

「その…、焼酎はまろやかで美味しいし、ワインはワインでブドウの味がして美味しいです。でもこれのどっちの方がうまいかなんて…そりゃ俺は扶桑人ですから焼酎の方が口当たりはいいですがかといってワインが悪いかと言ったらそういうわけではないですし。そもそも作り方が違うんですから比べることなんてできないですよ」

と俺が力説すると

「よし」

「わかったわ」

と二人は納得してくれて安心できた…なんて思っていたら次の瞬間その俺の思いはもろくも崩れた。

「じゃあ」

「何ですか坂本さん?」

すると坂本さんはミーナ中佐の方を向いた。

「そうね美緒」

「何なんですか??」

「もう少しわかるまで付き合ってもらおうかしら、石井さん」

「……」

俺はもうあきれかえって言う言葉もなかった。ちなみ今の時間は9時だ。それからというもの俺は地獄のような世界にいた。

この後俺は11時まで付き合わされ結局部屋に戻ったときは完全に酔っていた。この時俺の体は火照っていて暑くてしょうがなかった。寝るのに苦労したのは言うまでもない…。

50話　ガス欠

気がついたら朝になっていた。記憶が曖昧になっているのは昨日飲まされたからに違いない。11時くらいまでそうされていたことは覚えているがその間のことは殆ど覚えていない。しかしアルコール度数の低い酒だったからだろうか、今はかなりスッキリしている。

「早いけど、素振りに行くか…」

俺はいつも通りゲージの方に向かった。さすがに5時だとまだ少し暗い、だが日はもう出ていたので打つことは可能だった。だが、あんまり暗い中で打つのは好きではない。俺はまずランニングをすることにした。

「とりあえず、基地の周りを二周くらいすれば明るくなるだろう…」

俺はそう呟きながら走り始めた。ここは野球の練習には抜群に言い海の近くで風がやまない。まるで自然の大型扇風機だ。これは気持ちがいい、走っても走っても涼しい。元々朝早くしかもこの風なら暑くなんてない。

ふと見ると、前の方に走っている姿が見えた。扶桑刀を持ちながら走っている。ここまで言えば誰かわかるだろう。

「おはようございます…。坂本さん」

「おお、石井か。朝から早いな」

「坂本さんこそ…」

「これから一緒に練習しないか？」

「えっ、でも俺は素振りですけど…」

「はっはっは、構わん構わん」

「そうですか…わかりました」

「うむ」

そう軽く会話を交わすと俺と坂本さんはまた無言で走り始めた。

ランニングを終えると俺と坂本さんは素振りを開始した。素振りと言っても俺はゲージの中でバッティング練習だ。朝一からだといつも最初はなかなかうまくいかないところなのだが昨日飲んで頭がスッキリしたからだろうか、今日は絶好調だ。ゲージじゃなくて普通にフリーバッティングをしたら確実に柵越え連発だろう。

俺がゲージを出て休憩していると坂本さんが話しかけてきた。

「石井」

「はい、どうかしましたか？」

「前、一緒に練習しようと言ったまま…だったな」

「あぁ、そうでしたね。あのときは酔…いやいや妻が来ちゃいましたから…」

「はっはっは。お前今醇子と言いそうだったな」

「あっ、その…」

「気にするな気にするな。あぁ、あのときは確かにそうだった」

「じゃあ、今やりますか？」

「いいのか？」

「ええ、俺も一人で毎朝やるのは寂しいですから…」

「はっはっは。そうかそうか」

と少佐は笑いながらそう答えた。俺と少佐は練習をすることにした。多分キャッチボールぐらいだろうと、この時は思っていた。

俺は早速グローブを持ってきた。それを俺は坂本さんに渡した。すると坂本さんはきょとんとしながら

「なんだ、これじゃあ竹井…いやお前の妻がやっていたやつと同じじゃないか」

と言った。俺はビックリした。まさか坂本さんのやりたいものがキャッチボールじゃなかったなんて…。俺は慌てて

「えっ、じゃあ何をしましょうか？」

と言うと坂本さんはこう言い返してきた。

「うん、前に石井がドーバーで試合に出る前に選手がボールを取る練習をしていただろ。ほら、一人が打ってそのボールを取るやつだ」

それを聞いて俺はノックのことだろうと瞬間的にわかった。ただここではそれはあまりにも危険だ。まず返球をするんだったら前もってキャッチボールをして肩を温めておかなくちゃいけないし、ましてや滑走路は芝生でも土でもないアスファルトだ。軟式、硬式を問わずに野球をしていた人ならアスファルトで野球をするとどうなるかだいたい想像が付くだろう。まずボールの跳ね方が違う、土や芝生よりもボールはバウンドする。しかも摩擦が少ないからボールの威力が落ちにくいからケガもしやすくなってしまう。だから俺は

「坂本さん。ここでそれをやるのは無理です」

と答えた。すると

「ふむ、そうか…でも何でだ?」

納得はしてくれたようだがどうも理由が知りたいようだ。俺は

「ここではボールの跳ね方が違いますし、地面が土でも芝生でもないからケガをしてしまいます」

と言った。すると坂本さんもキャッチボールでいいと妥協してくれた。

俺は早速、準備を始めた。ここの基地の人は幸いなことに今まで練習した人は全員右投げだ。だからグローブは一つで大丈夫なのだ。仮に左投げがいても俺は一塁手だったからファーストミットもあるから問題はないのだが…。さすが毎朝刀で素振りをしているだけ合

って、フォームにムダな動きが無く俺のグローブにスバッと入ってくる。逆にズバッと来すぎて痛いくらいだ。俺はと言うと前に肩を壊しかけたことがあってそれ以来肩は非常に弱くなってしまったのだ。だから送球回数が他のところに比べて少なく左投げでも出来る一塁手に俺はなったのだ。

「石井、どうかしたのか?。顔色が悪いぞ」

さっきからも言っているようにボールが速すぎて痛いのだ。ファーストミットは速いボールでも取るときに負担がかかりにくい構造になっているのだがそれでも痛い。

”まずいな…。ここで痛いなんて言えないし”

と俺は思いながら

「何でもないですよ。坂本さん」

と笑顔で言い返した。すると

「そうか、じゃあそろそろ本気で行くぞ」

その言葉を聞いた瞬間俺は凍り付いた。まさか今のが本気じゃなかったなんて…。

３０分後、練習は終わった。グローブを取ってみると手が腫れていた。触ってみると非常に痛い。運良く宮藤さんが近くを通りかかってくれたので

「宮藤さん。ちょっと…」

と俺は彼女を呼び手を見せた。

「うわっ、どうしたんですかこれ？。今、治しますね」

そう言うと宮藤さんは使い魔を解放して俺の手をすぐに治してくれた。俺はまた気を取り直して食堂に向かおうとした…。すると警報が鳴った。

「あぁ～、朝食が遠のいていく」

俺は半ばガス欠状態のまま、ハンガーに駆け出した。

・・・

「ふむ、そうか。気合いを入れていけよ」

「はい」

俺はそうバルクホルン大尉に渇を入れられた。一応ハイとは言っておいたもののさすがに空腹は耐え難い、しかも上空は寒くこの空きっ腹にはあまりにも過酷だ。俺は速く片付けて帰ろうと思った。

しばらく攻撃をしていると、今回のネウロイは全体的に速く感じる。これは気のせいなのだろうか。他の人を見る限り俺並みには苦労していないようだ。

その頃ミーナ中佐はリーネさん、宮藤さんとこんな会話をしていた。

「やっぱりおかしいわ」

「えっ！」

「石井さん、やけに動きが悪いわね」

「そういえば、ネウロイに付いていくのがやっとみたいですね」

「あっ、リーネちゃん。石井さんの視線がおかしくない？」

「そうだね…、確かにそう言われてみれば。今日は当たってないね…」

その頃俺は非常に苦労していた。まず空腹のせいで血糖値が低下したのだろう。ネウロイが徐々にダブって見えるようになっていた。

”まずいな、このままじゃミーナ中佐達に感づかれる”

俺は必死にそう思いながら攻撃を続けた。ただでさえ見え方がおかしいのだからまともに当たるはずがない。俺はしょうがないから片目をつぶって攻撃を開始した。これでだいぶ目は見やすくなったが今度は目測が怪しくなってきた。距離感が全くつかめないのだ、これのせいでまるで蒸気機関車の機関士のようにいちいち顔を左の方に出して確認する羽目になってしまった。後から聞いた話だとこの時ミーナ中佐は俺の以上に完全に気がついていたようである。

「くっ…」

俺はそう呟いた。もう声を出すほどのエネルギーすら俺にはなかった。

しばらくすると更に大変なことに気がついた。空腹による魔法力の低下でモーターの回転数が落ちてきたのだ。空中で停止したら一大事である。俺は一時的にモーターを惰性回転にし、魔法がたまったら再びモーターを回転させる事にした。これでいくらかは出力が回復できた。しかしためてそれを一気に放出するという動作もこの時の俺には大変な負担であった。

”もぅ…あんまり…考えることも出来ないな…”

と思いながらも俺は最後のネウロイを撃墜することが出来た。もうこの辺まで来るとどうやら俺は本能で攻撃をしていたようだ。ネウロイは撃墜するものだ、だから目の前にいたら撃墜すると言う本能で…。今日自分が墜とせたのはわずかに４機だった。

全員のいるところにやっとの思いで到着するとミーナ中佐が酷く心

配した様子で俺に訊いてきた。

「石井さん」

「は…い」

「どうしたの今日は?。さっきから全然元気がないみたいね。あなたは朝に強いはずなのに…」

「それが…その…で…」

俺はガス欠という単語すら既に言えなくなっていた。もう俺の限界はとうに過ぎていた…。

「石井さん。どうしたの!。石井さん!!」

ミーナ中佐の叫び声がその時かすかに聞こえた。

・・・

俺はミーナ中佐にまじめな顔で訊かれた。いつものあの笑い声ではないが別の意味で怖い。

「はい」

「あなたはどうして空中で倒れたの？」

「それが、その…」

「どうしたの、早く答えなさい」

「朝練のせいでガス欠になって…」

と俺が言うとミーナ中佐とそのほかの全ての人はほっとしたようだった。だが、ミーナ中佐だけは落胆した顔をした。

「そうだったのね…。みんな心配したのよ。いきなり意識を失ったから」

「すいません。皆さん」

俺は皆にベッドの上から謝罪をした。皆も許してくれているようだった。といきなり

「練習もほどほどにしとかないとね～。トゥルーデも私もみんなもとっても心配したんだよ～」

ハルトマンさんは言った。確かにそうだろう。少なくとも俺の異常に一番早く気がついたのはバルクホルン大尉だった。

「すいません。ハルトマンさん」

「いいっていいって」

「そういえばバルクホルン大尉が一番先にこのことに気づきましたよね」

「あぁ、石井にしては元気がなかったからな」

「すいません。ご迷惑をおかけして…」

「あぁ、全くだ。次からは気をつけるんだぞ」

「はい」

と俺が答えるとバルクホルン大尉にも笑顔が戻った。するとミーナ中佐がいきなり俺にこう言ってきた。

「石井准尉。あなたにはしばらく朝練の禁止を言い渡します」

「えっ！」

「今回のことがあったのに、まだ懲りないの？」

”朝練禁止！？、まぁこんかいの事に関しては俺は口出しできないか…”

「わかりました…」

俺は仕方なく了承した。俺はもう起きても大丈夫のようだ、幸い点

滴のおかげもあって空腹感もない。俺はベッドを降りると自室に戻ろうとした。すると宮藤さんが俺のところに大急ぎで

「石井さ～ん」

と大きな声で叫びながらやってきた。

「どうしたの宮藤さん。俺に何か用？」

「で、電話が。奥さんから…」

俺は急いで中佐室に向かった。どうやらミーナ中佐がこのことを報告したらしい。となるとこの後何が起こるかは想像いただけるであろう。俺はおそるおそる受話器を取った。

「もしもし」

「あなた！！」

いきなり醇子の叫び声が聞こえてきた。どうやら酷くご立腹のようだ。

「はい」

「ダメじゃない。いきなり空中で意識を失うだなんて」

「すみません…」

「本当よ！。全く、私あなたがいなくなっちゃったらどうすればいいの？」

今度はいきなり声がかすれてきてる、泣いているようだ。俺はこの時改めて大変なことをしたんだと思った。

「ごめん、醇子。これからは気をつけるよ。もう君を悲しませるようなことは俺もしたくない」

「本当に？」

「あぁ、本当だよ」

そう俺が答えると醇子も落ち着いてくれたようだ。

「わかったわあなた。今回は許してあげるわ」

「ありがとう」

と、俺がほっと出来るのもつかの間だった。

「でも、次やったら。わかってますよね…」

突然醇子の敬語を訊くと全身の毛が逆立つ。

「わっ、わかってるよ。勿論」

と俺が答えると

「わかったわ。それじゃあ気をつけてね。近いうちに会えると思うから…」

と言いながら電話を切った。俺もほっとした気持ちで静かに受話器を置いた。

さっきから何か気配を感じると思っていたら後ろにはミーナ中佐がいた。勿論坂本さんも一緒だ。これは明らかに悪い予感がする。

「石井さん」

「はい、ミーナ中佐」

「わかった?。今回のことでどれだけあなたのことを心配してくれる人がたくさんいるのか」

「はい。すいませんでした。以後、気をつけます」

「石井済まなかったな。私もお前に無理に付き合わせたりしてしまって」

「そんなことないですよ、坂本さん。元々は俺の所為ですから…」

「そうか、ありがとう」

そう言うと俺は中佐室を出て部屋に戻った。これからどうすればいいのだろうか…。

５０話　ガス欠（後書き）

どうも、作者の直通特急でございます。

この文章も今回でついに５０話を達成するに至りました。ひとえに、これは読者の皆様の厚いご支援のおかげでもあります。そこで、本日は主人公の石井准尉をお招きいたしました…。

准「どうも、扶桑皇国海軍の石井明範准尉です」

直「直通特急です。石井准尉、５０話達成おめでとうございます」

准「ありがとうございます。５０１の人も、妻も喜んでいましたよ」

直「いやぁ…それにしても軍隊って言うのは色々大変ですね」

准「えぇ。みんな優しくしてくれて、和気藹々とやらせて貰ってるんですけど…」

直「ミーナ中佐だとか奥様が怖いと？」

准「大声では言えないですけどね…」

直「ははは。それはまぁ、どの世界でも…」

ミ＆醇「誰が怖いって？」

直「あっ！！！。ミーナ中佐に石井醇子大尉」

准「醇子！？。どうしてここに、それからミーナ中佐も」

ミ「折角だからと思って、あなたの奥さんの石井大尉もお招きして覗きに来たのだけれど…」

醇「二人とも、お仕置きが必要なようね…」

直＆ａｍｐ；准「あわわわ…」

ミ＆ａｍｐ；醇「さぁ！！」

・・・

51話　Shopping　to　London

俺は中佐室を出るととりあえず部屋に戻った。こんな状況にまで陥って素振りをする勇気は俺にあるわけがない。部屋に戻ると改めて自分の部屋が汚いことがわかった。

”まずいな、このありさまじゃあ醇子に合わせる顔がないな。いつ来ても大丈夫なように片付けておかないと…”

俺の部屋はベッドが二つあるのだが。妻の方のベッドは使われてないので綺麗なのだが俺の方は布団が龍のように巻き上がっている。ここのところ暑い夜が続きどうしても寝相が悪くなってしまったのだ。俺は早速布団の整備をした。

”これじゃあまるで寝台車の給仕だな…”

不意に俺は扶桑の寝台列車の給仕のことを思い出した。野球仲間と北海道に旅行したときに夜行列車を使ったのだ。常磐線経由急行７０１列車青森行きは夜の７時に上野駅を出る列車で夏ともなれば寝台券を取るのは至難の業なのだ。と言うのもこの列車は青森で青函連絡船に接続するのは勿論のこと、函館駅では稚内桟橋（わっかないさんばし）行きの急行列車にも接続するのだ。これで稚内桟橋まで向かいそこから連絡船に乗れば２日後の夕方５時頃にはオラーシャの極東の拠点でもある樺太（サハリン）に着くことが出来るのだ。俺等はその列車を使って北海道の札幌に向かったのだ…。その時乗ったこの７０１列車に‘列車給仕’はいたのだ。寝台の解体や整備などを行ってくれる、いわばホテルのボーイさんだ。勿論乗客の中には‘ボーイさん’と呼んでいる客もいた。

そんなことを思っていると布団の整備もすぐに終わった。時計の針を見るとまだ11時前だ。今までここに来てからのことを振り返ると俺はどうも野球の練習時間が多すぎたようだ。言い忘れていたがさっき医務室を出るとき医者からも

「今日は安静にしてください」

と言われていたのだ。だからあまりこれ以上部屋の中でがさがさしているとまた何か言われそうな気がした。

俺は久しぶりにミーティングルームに向かった。ミーティングルームにはソファーがあり今は誰もいないみたいだ。俺はとりあえず一番端のソファーに座った。椅子の質はいい、扶桑の通勤電車の何十倍も良い。

”はぁ〜、こんな日もあって良いのかもな”

と思っていると坂本さんと宮藤さんが通りかかった。

「石井さん。どうしたんですか?、こんなところで」

「部屋にいてもなんだかね…。ここなら落ち着くって言うか、その気が楽だから…」

「はっはっは。石井も野球を取られるとまるで人が変わったようだな」

「坂本さん…。まぁ、そうですね」

俺は笑顔でそう言った。まぁ元はと言えば坂本さんの剛速球から今

日の悲劇は始まったのだが…。軽く会話を交わすと二人は行ってしまった。宮藤さんが言うには荷物運びのお手伝いだそうだ。二人が言ってしばらくすると周囲を伺いながらリーネさんとエイラさんがやってきた。

リーネさんとエイラさんは俺の脇のソファーに並んで座った。

「石井さん」

最初はリーネさんからだった。俺はいきなりだったので

「はい！？」

と少々驚きながらも答えた。すると今度はエイラさんからだ。

「石井！」

「何ですかエイラさん？」

「明日は何の日か知ってるカ？」

「8月17日ですね…。あっ！、サーニャさんと宮藤さんの…」

そう。今まですっかり忘れていた、明日は二人の誕生日なのだ。この部隊でしかも全く違う国の人なのに誕生日が同じだなんてなんと言うことなのだろう。

”こういうことを奇跡って言うんだろうな…”

と俺が思っているとリーネさんは続けた。

「覚えててくれていたんですね」

「あぁ、まぁね。前に聞いたことがあったから…」

するとエイラさんもそれに加わってきた。

「それでなんだけどナ。頼みがあるんダ」

「はい、何でしょう?。出来る限り協力はしますけど…」

俺はこの時変に思った。エイラさんの顔がいつもより暗い。本来ならサーニャさんに関わることならもっと喜怒哀楽が激しいのに、今日はなんだかそれが少ないというか激しくないのだ。俺はこのことをこの時は黙っていた。

”きっと、そうなんだろうな…”

と俺は思った…。

３０分後俺は学生服で駅にいた。俺はエイラさんと買い物に出たのだ。リーネさんは宮藤さんに怪しまれないようにと来なかった。サーニャさんは夜間哨戒で今日は朝戦闘があったから今頃はぐっすり眠っている。俺とエイラさんは切符売り場に向かった。

「ロンドンまで往復で」

「等級は?」

「さんと…」

「イヤ、二等にしてクレ。二等で二枚ダ」

いきなりエイラさんは俺と駅員の会話に割って入ってきた。

「えっ！」

俺が驚く暇もエイラさんは与えてはくれなかった。駅員は

「わかりました。ロンドンまで往復二枚、二等でですね」

とその後俺とエイラさんは来た列車の二等車に向かい合わせの状態で座った。早速エイラさんのお小言が始まった。勿論理由はさっきの駅での列車の切符の話だ。

「石井！」

どうやら少し怒っているようだ。

「はい。どうかしましたか…？」

俺はおそるおそる答えた。

「ドウシタじゃネーヨ。何でお前二等にしないんダ！」

「だって、わざわざ１００？くらいにいちいち倍のお金を払ってなんか…」

「何！」

突然エイラさんが怒り始めた。運が悪いことに俺と同じ考えの人がブリタニアには多いのだろう。二等車には俺とエイラさん以外誰も乗っていなかった。非常にいやな予感がする。

「イイカ、石井！。奥さんもいるのに、ケチケチして三等ばっか乗ってたラ、嫌われちゃうゾ」

「いっ、いきなり何言い出すんですか」

「フフーン、石井やっぱり奥さんの話に弱いんダナ～」

「ちょっと、エイラさん…」

「ジャアこうしよウ。これから私とかサーニャと一緒に列車に乗るときは特に言われない限りは三等は禁止ナ。」

「はっ！。ちょっと何言ってるんですか！。」

「いいんだゾ～。このこと奥さんに話してモ…。石井はいつも三等しか乗ろうとしないケチなやつってナ～」

俺はもう何も言い返せなかった。

「わかりました。そうします…エイラさん」

「ウン、それでいいんダ」

エイラさんもようやく納得してくれたようだった。デモどうして俺が三等にこだわるかを伝えることにした。

「エイラさんはどうして三等が嫌いなんですか？」

「スオムスとかオラーシャじゃ三等はスリも多いし女性には何かと危険がつきものなんダナ。ダカラ、三等は嫌いなわけサ」

”なるほど、確かに扶桑でも長距離列車はスリが多いって聞くしな…。でも俺が乗る列車は三等でもそういうことはないんだけどな…„

俺がそんなことを思っているとエイラさんは俺に

「石井はどうしてそんなに三等がいいんダ？。危なくて汚いの二…」

と訊いてきた。

「三等車は扶桑では一番両数が多いんです。特急列車でも一等は一両あるかないかで急行に至っては二等車が一両あるかぐらいなんです。扶桑の人間は列車で贅沢しないでお土産をみんなに買っていこうとか結構考えますからね…。俺がいつも通学に使ってた路線も四両編成でしたけどみんな三等車だけでしたよ」

「信じられネー。それで前言ってたけど混んでいるんダロ？」

「えぇ、酷いときは駅で列車を三本くらい見送ったこともありましたよ」

「…どうしてダ？、混んでいたからか？」

「いえ、列車に順番で乗らなくちゃいけないので…。混むと入場制限があるんです」

「凄いナ」

「是非扶桑にいらしてください、サーニャさんと…俺が案内しますから」

「ナッ、どうしてそこでサーニャを出してくるんダ？」

「前扶桑の鉄道の話をしたらとても喜んでくれていましたよ。多分ですけど、サーニャさんもエイラさんと一緒に来られたら嬉しいと思いますけど…」

「どうしてそう思うんダ？」

「だって、相思相愛じゃないですか？」

俺は言った直後に後悔した。前からしつこく言っているがこの車両には俺とエイラさんしかいない。

「お前…そう言って前モ、飛んでいるときに私にそんなこと言ってたヨナ…」

「えぇ、まさか、思い出しちゃったんですか？」

「あぁ、そういえばあのときのお礼もまだだったよナ…」

幸いもうすぐロンドンに着きそうだった。俺はとうやらこの鉄道に救われたようだ、これも少なからずこの路線の恩返しなのだろうか。

「まもなく、終点のロンドンです。お忘れ物なさいませんようご注意ください」

車掌のアナウンスも聞こえた。俺はほっと胸をなで下ろした。

「エイラさん、もうロンドンですよ」

「ムッ…、仕方がナイ」

どうやらエイラさんも落ち着いてくれたようだった。

俺等はロンドンの駅に降り立った。

ロンドンのセント・パンクラス駅を出ると久しぶりの町並みに少しぐっと来た。

「ロンドンか…」

「何言ってるんダ?、お前、前にも来たダロ?」

「いや、久しぶりでしたから…」

「ソレもそうダナ」

俺等はこんな会話をしながらバスに乗った。ブリタニアの市内のバスはみんな二階建てだ。前来たときもこの二階建てバスに乗った、あのときは俺の誕生日、そして今日は宮藤さんとサーニャさんの誕生日プレゼントを買うためにこのバスに乗ったのだ。なんだかとても不思議な気分がした。多分、またこの二階建てバスに乗るときも誰かしらの誕生日に関係しているのであろう。

俺等は市内の繁華街の入口に降りた。例えるなら横浜中華街の西

門のようなところだろうか…。早速俺とエイラさんは門をくぐり中の方に入っていった。中にはこれまたたくさんの店が並んでいた。前来たときにもこのあたりには来たことは来たのだがバスの乗り換えで立ち寄ったくらいで特に気をつけてみることはなかった。しばらく歩いていると

「ここダここダ」

とエイラさんはメモを見ながら小さな店を指さした。皆のプレゼントは聞いた話だとここで揃うらしい。‘小さな百貨店’と言ったところだろうか…。

中に入ると俺等以外誰もいなかった。今はだいたい午後1時半だ、こんな昼下がりのしかも平日に来る客なんてそうそういないのだろう。

「いらっしゃいませ」

と中から店員の女性がやってきた。

「石井、買いたいもののリストを店員に言ってくれないカ?」

「えっ、なんで俺が?」

「ウルサイ、上官の命令ダ」

多分自分で頼むのが恥ずかしいのだろう。俺も昔はそうだった、スパイクを買う時なんて一人じゃ行けなかった。この、店員に何かを頼むというのはなかなか勇気のいることなのだ。

いつまでも店員を待たせるのは失礼だから、俺はすぐ店員に訊くことにした。

「あの」

「はい」

「このメモに書いてあるものがここだったらすぐ手に入るとお聞きして…」

と言うと俺はメモを取り出した。書いてあるのはエイラさんとリーネさんの物だ。他の人は自分たちで何とかすると言っていた。俺はと言うと特に何もあげられるものがない。ただここでそんなことを言うとエイラさんに何をされるかわからないし、多分基地に戻ったらリーネさんにも叱られてしまうことだろう。それはなんとしても避けたい。扶桑であれば俺と醇子が持っているサインボールと台座見たくみんなのサインでごまかしたりも出来るのだがブリタニアには野球の道具を扱う店などはっきり言って、ない。あるのはクリケットやサッカー、そしてラグビーの道具の店ばかりだ。とりあえず俺は買い物を済ませると店の外に出た。

しばらく歩いていると偶然というか奇跡というか野球の用品を売っている店があったのだ。

「エイラさん。実は俺まだ何贈ろうか考えてなかったんです」

「ナンダッテ！、お前…」

みるみるうちにエイラさんの顔が険しくなっていく。

「落ち着いてください。まだ話には続きがあるんですよ。今アイデアが浮かんだんです」

「そうなのカ？」

「はい。俺らしい贈り物が出来ると思います」

エイラさんも俺が立ち止まった場所の前に野球用品の店があるのを知り何となく察してくれたようだ。

「ワカッタ。じっくり見てこイ」

エイラさんから許可をもらい、俺はその店に入っていった。野球用品のプレゼントなんてなんだか男にあげるようなプレゼントであるかもしれないが、野球に興味を持ってくれている宮藤さんには道って事はないだろう。問題はサーニャさんだ。エイラさんにあんなことを言った以上、ヘタな物を買うことは許されないしエイラさんを傷つけてしまう。とその時

”そうだ！、その手があったな…”

俺に突如名案が浮かんだ。まさにインスピレーションだ。俺は大急ぎでエイラさんをグローブ売り場のところに連れてきた。

「石井、こんなところにどうしたんダヨ？。私は野球なんか興味ネーゾ」

「まぁまぁそう言わずに…、実はサーニャさんにグローブとボールを買ってあげようと思っているのですが…」

「ナニ！、お前…。サーニャへのプレゼントをそんな物で済ませる気カ…」

またエイラさんは怒り始めた。計算通りだ。

「まぁ待ってくださいよ。キャッチボールをするには最低でも2人は必要ですよね」

「まぁそうダナ。ソレがどうかしたのカ？」

「エイラさんとおそろいで買えばできるじゃありませんか？」

「！！！」

エイラさんは妄想しているのだろうか鼻の下が伸びている。

「エイラさん…？」

「ナッ、ナンダ？！」

「これでわかってもらえましたよね？」

「アァ、ワカッタ。そういうことなら構わナイ。因みに私もサーニャも右投げダゾ」

「わかりました」

そう言うとエイラさんは笑顔で先に店を出て行った。俺はグローブを四つとボールを一ダース買った。最初の二つは宮藤さんとリーネさん、そしてもう二つはサーニャさんとエイラさんのお揃いのもの

だ。

買い終わると早速、駅に向かい列車に乗り込んだ…。帰りの列車ではエイラさんは疲れたのだろうか、ぐっすり寝てしまっている。外を見ればもう日も傾いてすっかり橙色だ。

”ふぅ、帰りはエイラさんが寝てくれて助かった。行きのあの様子じゃあ、帰りは思いやられたけど…”

と俺は安心しながら外を眺めていた…。

52話　震え

基地に戻ると。早速リーネさんが俺の部屋にやってきた。

「失礼します。石井さん」

「おぉ、リーネさん」

「石井さん。プレゼントはどうしたんですか？」

「やっぱり気になるんだね…」

「えぇ」

「グローブにしたよ。リーネさんの分も買っておいたよ」

俺の一言にリーネさんは困惑気味のようだ。

「何でですか？」

「だって、二人じゃなきゃキャッチボールは出来ないからさ…」

それを訊いてリーネさんはようやく俺が何が言いたいかを理解してくれたようだ。

「ありがとうございます。石井さん」

「いいんだよ。それよりわかってるよね」

「はい、勿論明日までは秘密です」

と確認し合うとリーネさんは納得してくれたようだ。笑顔で俺の部屋を出て行った。

俺は外を見た。もう太陽もかなり小さくなってきている。俺はようやく一日が終わったとほっとした。朝一から坂本さんの剛速球を受けそのまま食事を取らずに出撃した結果ガス欠で倒れてミーナ中佐に朝練の禁止を言い渡されて…もう今日は散々だ。ただ、ロンドンに買い物に行けたのはとても良かった。明日が楽しみだ。

そんなことを俺が思っていると食事の時間になった。今日はシャーリーさんの番…ということはまた缶詰だ。ちょっと憂鬱だったがとりあえず食堂に向かった、俺はいつもの席に座った。するとなんだか俺のだけ量が多い気がする。少なくとも他の人の1．5倍くらいはありそうだ。

「石井、元気かー？」

「あぁ、シャーリーさん。俺は元気ですけど…それよりみんなより俺の食事の量多くないですか？」

「当たり前だろー、お前朝点滴しか摂ってないんだろ～？」

「えぇ、まぁそうですけど…」

「だったら食べないとダメだろ？。大きくなれないぞ？」

まぁせっかくのご厚意に甘えることにしたのだが大きくなれないって…。まぁ細かいことは気にしないで行こう。俺はパンと缶詰だけ

でここまで腹がふくれることは生まれて初めてな気がした。食後俺はすぐに風呂に向かった。

風呂に向かうと隣はまだ静かだ。きっと誰もいないのだろう。俺はゆっくり浸かった、今日は特に疲れた気がする。まぁ空中で倒れた後にロンドンに買い物に行ったのだからしょうがないと言えばしょうがない。俺はそんなことを思いながら風呂に浸かっていた。

隣が騒がしくなってきた、どうやら皆も入ってきたようだ。俺は風呂を上がることにした、体もそれなりに温まっていたし何かといじられるからだ。俺が上がろうとすると

「お～い、石井！」

と案の定ハルトマンさんからの声が聞こえた。無視すると後々厄介なのでしょうがないから答えることにした。

「どうしたんですか?。ハルトマンさん」

「さっき宮藤から聞いたんだけどさ～」

「えぇ」

「奥さんから電話がかかってきたんだって～?」

「えっ！、えぇ、まぁ…」

「奥さんに怒られたんだね～、ダメだな石井は～。奥さんに嫌われちゃうぞ～」

「もう、止めてくださいよ」

俺は恥ずかしながらそう言った。向こうでは笑い声が聞こえる。ただ彼女たちの言うことがわからないわけではない、俺は醇子に不安を与えてしまったのだから。今度合ったらきっちり謝ろうとこの時俺は思った。俺は風呂を上がった。

俺は部屋に戻った。まだ消灯の時間まではいくらか時間があった。ただ、なにもすることがないのだ。磨くくらい汚れているバットもボールもなかった。

「醇子とも今日は電話したし…、また滑走路でも行くか」

俺はそう呟いた後廊下に出た。勿論向かう先は滑走路だ。今日は夜になっても良い天気で月がかなり明るく見える。海風もちょうど良い具合に吹いてくれていて文句なしだ。

「ふぅ、ここは気持ちが良いな…でも…」

誰もいないから独り言を話しても大丈夫だろうと思ってそう呟いたのだがどうやらそれは間違いのようだった。

「奥さんがいないと寂しいもんね～」

またまた後ろにいたのはハルトマンさんだった。ただよく見ると後ろにはバルクホルン大尉の姿もある。

「どうしたんですか?、二人とも」

と俺は二人に訊いた。

「そう言う石井は？」

「まだ時間があったので、ここに涼みに…」

「じゃあ、私たちと同じだなエーリカ」

「そうみたいだねトゥルーデ」

と二人は言うと俺の隣に座った。

「石井は…」

不意にバルクホルン大尉はそう俺に訊いてきた。

「あっ、すまない…。石井はここが解放されたらどうするんだ？」

「そうですね…、前はすぐに大学院に戻ろうと思っていたんですけどね…。でも今はちょっと変わってきてるかもしれませんね…」

ハルトマンさんも会話に入ってきた…。

「奥さんがいるから？」

「えぇ。妻とも会いたいですし。でも、このままじゃ大学院にも」

「そうなんだ～、頑張ってね」

「えぇ」

俺はそう答えると不意にクリスさんのことが心配になった。だからバルクホルン大尉に尋ねてみることにした。最近全然クリスさんとは会っていない。最近ロンドンは落ち着いてはいるものの、大切な人がいるもの同士。気になってしまうのだ。

「バルクホルン大尉」

「どうした？」

「最近、クリスさんの調子は？」

「あぁ、回復に向かっているようだ」

「そうですか…。それは良かった」

「心配してくれるのか？」

「えぇ、俺にも大事な人がいますからね」

勿論ハルトマンさんもバルクホルン大尉も醇子のことであることは百も承知だ。するとハルトマンさんがいきなり。

「あぁ～、石井もしかして浮気？」

「なっ！、何を言っているのだハルトマン。ほら石井も」

俺は怖くて震えが止まらなかった。このことが醇子にばれたらと、勿論浮気をしてるつもりは俺には全くない。ただ同じ隊の仲間として心配しているだけなのだ。だが、人間の恐怖心とは不思議な物で一度怒られると思うとなかなか精神が回復しないのだ。

「大丈夫〜?、石井。冗談だから心配しないで…。ありがとう、トゥルーデとクリスを心配してくれて…」

俺はそうハルトマンさんが言うとようやく落ち着きを取り戻した。

「ふぅ…」

「大丈夫か石井?。ほらエーリカも」

「石井ごめんね。大丈夫?」

「えぇ…。なんとか」

「済まない」

「いいんですよ。ハルトマンさん急に変なこと言わないでくださいよ〜」

「ごめんごめん。でも何であんなに怖がっていたの?」

「当たり前じゃないですか。怖いんですから…」

他の人はまだ気づいていないようだが、醇子もミーナ中佐とよく似た雰囲気がどことなくあるのだ。正直ミーナ中佐のげんこつはデットボールより痛いかもしれない。さすがに頭にデットボールを食らったことはないが腰などに何度も当たったことがある。時としてそれを凌ぐほどのげんこつを食らうときもあるのだ。

「ふふ〜ん。良いこと聞いちゃった〜」

ハルトマンさんは笑顔で俺にそう言った。そう言われた瞬間俺もしまったと思った。

「こら、エーリカ！。あんまり石井をいじるな」

「うそうそ。じゃあ、私たちはそろそろ戻ろうか。ね、トゥルーデ」

「あぁそうだなエーリカ。石井、お前は？」

「俺はもう少しここにいます」

「そうか。それじゃあな」

「はい」

と俺が言うとバルクホルン大尉は妙に改まって

「石井！」

と俺のことを呼んだ。

「はい？」

「その…、また今度一緒に見舞いに行かないか？」

”なんだ、そんなことぐらいそんなかしこまって言わなくても良いのに…”

俺はそう思いながらも

「勿論ですよ。妻も一緒で構いませんか？」

と俺が聞き返すと

「あぁ。クリスもいろいろな人に会いたがっているからな」

とバルクホルン大尉は答えた。

「わかりました。俺もプレゼントしたい物があるので」

「何なんだそれは？」

「秘密です」

と俺が答えるとバルクホルン大尉は

「そうか…」

と笑顔で答えてくれた。

会話が終わると二人は去っていった。俺はまだ消灯までは時間があったので少しここに残っていることにした。俺の場合寒いくらいの方がかえって寝やすいからだ。

「はぁ～」

二人がいなくなったことも確認し俺は思いっきりため息をした。ハルトマンさんも悪気がないとは思うのだがあの性格だ。きっとまたいじられてしまうのだろう。すると

「あら、石井さん」

と後ろから声がした。見るとミーナ中佐だった。

「ミ、ミーナ中佐」

俺は少し驚いてしまった。まさか本当に来るなんて…。

「そろそろ戻りなさい」

「はい。わかりました」

俺はミーナ中佐と一緒に戻った。

「石井さん」

「はい？」

「奥さんとはどうなの？」

「えぇ、今日は怒られちゃいまして…」

「そうよ…。気をつけなさいね。女性は怖いのよ…」

一番言われたくない人に言われた。まぁ俺はここで厄介になるのを防ぐために

「わかりました。肝に銘じておきます」

と無難に答えておいた。これが幸いだった。

「気をつけてね」

ミーナ中佐はご機嫌のようだった。俺の部屋と中佐室は場所が違うから途中で別れることになる。

「じゃあお休みなさいね。石井さん」

「えぇ、ミーナ中佐も」

「ありがとう」

俺は軽く会話を交わすと部屋に戻った。消灯ラッパが鳴る前だったが今日は疲れていたので俺はすぐ寝てしまった…。

53話　Ohayo－Liner

失敗した。いつも通り起きてしまった。まだ5時前、扶桑で言えばようやく始発列車が走り出す時間だ。本当ならここで朝練に行くところなのだが生憎、昨日ミーナ中佐から‘当分の間朝練禁止’を直々に言われたので、朝練は出来ない。

”醇子がいればこういうとき少なからず変わってくるのかもしれないな…”

と俺は思いながらも部屋の明かりをつけた。朝練は禁止だが起きてしまったものは仕方がない。俺は例のストライカーの報告書を書くことにした。これはおそらく１０００ページ程度かかると思われる大学院提出用の報告書だ。最近計画がなかなか進行していないがＡＳＣについても追々書いていくつもりだ。

「それじゃあ、書くか…」

俺はそう呟くと報告書を書き始めた。

再び時計を見ると6時半くらいになっていた。報告書の進みは快調で4ページほど書くことが出来た。この時間にもなってくるとミーナ中佐や坂本さんも起きる。坂本さんは基本的に毎朝朝練をしているので雨が降らない限りは俺と同じくらいの時間には起きている。多分醇子も起きているのだろう、元々彼女も早起きなほうだから。

さすがに1時間でも報告書に集中すると疲れる。

”そういえば、この基地では朝風呂が出来るんだって宮藤さんが言

っていたな…〟

と言うことを俺は思い出した。正直報告書をやっていたので目も肩も疲れてたしこっている。これで風呂に入れば体調もいくらか良くなるだろう。そう思ったので俺は風呂に向かうことにした。

男性用の風呂にもしっかりとお湯は来ている。何とも勿体ないような気もしたが、多分これでも問題ないのだろう。この基地の風呂は温泉なのだ。源泉掛け流しとは何とも贅沢なものだ。俺はすぐに風呂に入った。

「はぁ〜」

と俺はため息をした。こんなに気持ちが良い朝も久しぶりだ。まるで温泉旅館に泊まっているような気分だ。すると向こうの方も俺の存在に気がついたのだろう。

「石井」

と坂本さんが声をかけてきた。

「はい」

「なんだ、お前も朝風呂だったのか」

「えぇ、今日は朝起きてからレポートを書いてまして、それでちょっと…」

「はっはっは。それはそれは結構なことだな」

「今朝も朝練ですか？」

「ああ、毎日欠かさず行っているんだ」

「凄いですね。本当なら俺も今朝やりたかったんですけど…」

「はっはっは。ミーナは怖いからな～」

「止めてくださいよ～。壁に耳あり障子に目ありですよ、坂本さん」

「おっと、すまんすまん」

と俺等はこんな会話をしばらく続けた。すると俺は今日が特別な日であることを思い出した。

「坂本さん」

「なんだ？」

「今日は…。その…」

俺が何を言いたいのか悟ってくれたようだ。

「あぁ、勿論わかっている。心配するな」

「そうですか…。それじゃあ、俺は」

と言うと俺は風呂を上がった。どうやら入れ替わりでペリーヌさんが入ってきたようだ。まぁ坂本さんのことを尊敬しているから（ほかにも何かあるのかもしれないが…）一緒に入りたいのだろう。

俺が着替えてのれんをくぐると

「あら、石井さん」

と目の前には運悪くミーナ中佐がいた。勿論いやな予感しかしない。

「おはようございます。ミーナ中佐」

「えぇ、おはよう」

「それじゃあ…」

と言って俺が行こうとすると俺はいきなりミーナ中佐に肩を掴まれた。

「えっ！」

「私が知らないとでも思ってるの？」

「何のことですか？」

「私はそんなに怖いのかしらね…」

”なんで知ってるんだこの人。さっきからずっとここにいたのか？”

俺は勿論怖くてしょうがなかった。

「いや…その…」

「ふふ、まあ今回は朝だから…我慢してあげるわ。でも、今度やったら罰として…」

俺は唾を飲み込んだ。

「トイレ掃除です」

とミーナ中佐が言ったときはほっとした。何を言い出すかわからないとき、こういう風に言われると妙に落ち着くのは俺だけだろうか。

「わかりました」

俺がそう答えるとミーナ中佐は

「よろしい」

と、また笑顔で俺に言ってその場を去っていった。

”あぁ、朝からこんな目に遭うなんて…”

とは重いながらも俺は部屋に戻った。俺が部屋に戻って数分たつと起床ラッパが鳴った。みんなは寝覚めが悪いようでなかなか起きてこない。するとまたミーナ中佐が今度は俺の部屋にやってきた。

「石井さん」

「はい」

「ちょっと頼みがあるんだけど…よろしいかしら?」

とミーナ中佐は俺に言った。俺もそれの内容だけ一応聞いてみることにした。

聞いた話によれば隊のメンバーを起こすのを手伝って欲しいとのことだそうだ。

「…と、まぁこんな感じなんだけど。手伝ってもらえないかしら?」

正直引き受けたくなかった。多分自分以外の男性ウィッチでもそう答えるだろう。ドアをノックして皆起きてくれるような寝起きのいい隊なら良いのかもしれないが、ここの隊にはハルトマンさんだとかエイラさんだとかの寝起きの悪い人が多い。

「あのぅ、それはちょっと…」

「あら、ダメなのかしら?」

”当たり前だろ…、女性の部屋まで行って人を起こすなんて…”

「えっ、えぇ…」

「そう…やってくれたら朝練をやらせてあげてもいいんだけど…」

なんだか知らないが、とても俺に人を起こす作業を手伝って欲しいようだ。俺も朝練を再開させてくれるなんて言われたらさすがに考えてしまう。

「いいのよ…。無理しなくても…」

そんな風に言われては余計やれと言ってくるようなものだ。俺は朝

練もやりたかったし仕方がないからやることにした。

早速ミーナ中佐にメモを渡された。

「そこに書いてある人を起こしてちょうだいね」

「わかりました」

この時俺は安易にわかったなんて言ってしまった。メモを開いてみてみると、ハルトマンさん、リーネさん、宮藤さん、エイラさんの計四人。寝起きが悪い人がたくさんいたのだ。

「あっ、あの…」

聞こえないふりをしていたのか、それとも本当に聞こえていなかったのかはわからないがミーナ中佐は行ってしまった。

”いつまで考えていてもしょうがない。早速作業にかかるか…”

俺はそう思い、まずはリーネさんの部屋に向かった。寝起きが悪い人はたくさんいるのだがリーネさんはこの中でも特例で寝起きは悪くはない。ドアを俺がノックして

「リーネさん。起こしに来ました…。大丈夫ですよね」

と俺がドア越しに言うと

「はい。石井さん、ありがとうございます」

と返してきた。だから俺は安心して次のところに向かった。ここか

ら問題なのである、とりあえず隣の部屋の宮藤さんを訪ねた。まずはノックをして見る事にした。

「宮藤さん、起床の時間ですよ」

俺はドアをノックしながらそう言った。反応はどうやらかすかにあるようだ。

「そろそろ起きてください！」

と俺が声を少し大きめに言うとどうやら起きてくれたようだ。この状況で中に入るのは無理だ。俺は既に準備が出来ていたリーネさんにこの後の対応を頼み（勿論このことはミーナ中佐には秘密だが…）その場を去った。

次に俺が向かったのはエイラさんの部屋だった。俺が入ろうとすると中でどさっと大きな音がした。すると

「あぁ、もう…。また部屋間違えテ」

どうやら夜間哨戒から帰ってきたサーニャさんが部屋を間違えたらしい。俺は知らないがこのことはどうやらいつものことのようだ。しばらくすると

「キョーダケダカンナー」

といつものように棒読みしたような声が聞こえた。エイラさんを起こす手間が省けて正直俺はほっとした。

「エイラさん」

俺はドア越しにノックをしながら言った。

「石井カ。どうしたんダ？」

「起こしに行けってミーナ中佐から頼まれたんですが…大丈夫そうですね」

「アァ、アリガト」

相手も十分に目が覚めていたみたいなので、俺は次のところに向かった。

正直言ってここからが問題なのだ。ハルトマンさんはちっとやそっとのことでは絶対に起きない。ここはバルクホルン大尉に協力を依頼するほかないのだ。ただ、大尉の性格から考えるとこのことは秘密にしておいてくれと言うのはいささか厄介だ。とはいっても起こさないわけにはいかない。

”仕方がないか…”

と思いながらもハルトマンさんの部屋に着くともうバルクホルン大尉がハルトマンさんを起こしていた。これは良かったと思い俺はそこを後にした。このことが後でミーナ中佐の怒りを買うことになるなんて…。

朝食後今日は前からも言っていたが宮藤さんとサーニャさんの誕生日だ。だがその誕生会も夜に行うので俺はゲージの方に向かった。勿論野球の練習だ。朝練は禁止されていても、食後の運動に別に問題ないだろうと思ったのだ。俺はいつものようにバットをもってゲ

ージのドアを開けた。すると後ろから肩をグイッと強い力で掴まれた。万力の数倍はあるかもしれないというその力で掴んでいたのはあろう事かミーナ中佐だった。笑顔の裏にはとんでもない恐怖をその時俺は感じた。

「ミーナ中佐!!」

「石井さん。あなた私の頼みを少しサボったでしょ?」

「へっ!?」

まさかばれているとは思っていなかったがばれていたようだ。

「トゥルーデとフラウから聞いたけどあなた、フラウを起こしに来なかったようね」

「えぇ、その…大尉がもう起こしていたので必要ないかなと思って…」

「そう…。しかも禁止していた野球の練習をしているなんて」

「えっ!、あれは朝練だけじゃあないんですか?。医者も今日は特に何も言いませんでしたよ?」

「私の頼みを引き受けてくれたから許可したのよ…」

「うっ…」

俺はもう何も言えなくなってしまった。その後いつもの通りげんこつを食らった。幸いなことにリーネさんの方はばれてはいないよう

だった。それだけでも十分だった。

”はぁ…。さて、練習を再開するか。それにしても頭が痛いな”

俺はそう思いながら練習を再開した…。

54話　practice?

叩かれてから30分くらい練習したのだが未だに頭がヒリヒリする。今日は宮藤さんとサーニャさんの誕生日だ。そう思いながら内角打ちの練習をしているとリーネさんがやってきた。

「石井さん」

「どうしたんだい?」

「あの…芳佳ちゃんがもしここに来たら打たせてあげてください」

「わかった。でもあんまり勧めちゃっていいの?」

前はこの辺ではノックが出来ないと思っていたのだが、滑走路の脇の森の奥に芝生がある。ここをミーナ中佐の許可を得て整備をした(と言っても崖の部分に3メートル前後のフェンスをつけただけなのだが…。)結果によってノックが出来るようになった。一応両翼はだいたい90メートルぐらいは確保できた。しかし少しボールが飛ぶと多分森の中に入っていってしまう。

「それもそうですね…」

”そうだ、フリーバッティングでもさせてあげるか”

俺はとっさにそう思った。さすがに投手ではないからコントロールは全くだめだが打撃投手というか打たせるために投げることぐらいは出来る。俺はリーネさんもいるからそれでいいんじゃないかと思った。俺はファーストミットで投げられるし、あと一つグローブが

あるから。交代交代で打つことが出来る。

「フリーバッティングやるか？」

「えぅ！？」

フリーバッティングが何か知らないのかもしれない。だがやった方がわかりやすい。スポーツという物は口で説明するよりも実際に身をもって知った方が良い。

「石井さん、リーネちゃん」

とちょうど運良く宮藤さんもやってきた。

「宮藤さん」

「何ですか？、石井さん」

「たまには思いっきりホームラン打ってみたくない？」

「えっ？」

リーネさんも宮藤さんもうまく理解できていないようだ。困惑する二人を見て俺は

「ついておいで…」

と一声かけてから、例の場所に向かった。

5分くらいでその場所には到着できた。ここは風が非常に強い、

崖の近くで且つ海の近くという地形が影響しているのだろう。扶桑で例えると洲崎球場といったところだろうか。

「あの…石井さん？」

俺がゲージを流用して、打撃投手の安全を確保する柵を取り付けているとリーネさんはグローブをつけたまま俺に訊いてきた。

「ん？」

「どのあたりいればいいですか？」

「そうだね～、とりあえずここから宮藤さんと俺の一直線上に３０歩森に進んだくらいかな？」

と俺が言うとリーネさんも移動してくれた。俺はリーネさんに合図を送った。海風で声が通りにくいのだ、内容は俺が両手を挙げて準備が整っていればそれに両手で合図を返すというきわめて単純なものだ。リーネさんの答えは勿論，準備完了です，と言ったものだった。

「宮藤さん、行くよ～」

「は～い」

俺がそう言うと宮藤さんもそれに応答してくれた。俺は早速軽く一球投げてみた。すると宮藤さんは大きな空振りだった。危うく転びそうになった。

「大丈夫か～？」

俺は心配になった。これでケガなんかさせたら多々ジじゃあ済まないからだ。しかし俺の心配はただの杞憂だったようだ。

「はい～、もう一丁」

と宮藤さんは威勢良く言い返してきてくれた。

「よしっ！」

改めて俺はリーネさんに‘飛ぶ’と合図を送った。俺が振りかぶって第二球目を投げると今度は宮藤さんもバットに当てることが出来た。ただ当てることが精一杯のようでギリギリピッチャーフライト言ったところだ。

「宮藤さん、もっと楽にして」

「はい」

それからは安定して振ることが出来たようだ。多分だがここの隊のメンバーには怪力のバルクホルン大尉を除いてバットが重たいのだろう身をもってそのことを体験できるのもこう言った練習のおかげだ。

宮藤さんは３０球ぐらい打つのが精一杯のようだった。

「はぁ…はぁ…石井さん、もうダメです」

「そうか…、当たりは良かったんだけどね。もう少し坂本さんに鍛えてもらえばいいと思うよ」

「はい！。ありがとうございました」

「じゃあ、交代しようか」

そう言うと俺はリーネさんを呼び戻した。単純に俺は宮藤さんとリーネさんを攻守交代させた。

「それじゃあ宮藤さん」

と言いながら俺は宮藤さんにグローブを渡した。宮藤さんも察してくれたようだ。宮藤さんはグローブを受け取るとさっきリーネさんがいたあたりに行った。宮藤さんが位置に着いたので俺は合図を送った、準備が出来たようだ。

「行くよ、リーネさん」

と俺は言ったがリーネさんは返事がなかった。見ると結構威圧感がある。

”絶対に打つ…芳佳ちゃんのために…”

とでも思っているのだろうか…。終わってみれば確かにそう思っていたのかもしれない。リーネさんは結構宮藤さんを走らせていた。と言うのもリーネさんはボールに逆らわないよう打つので右に左に打つことが出来るのだ。フリーバッティングではこういうことにも気がつく。

俺は二人を自分のところに呼んだ。

「それじゃあ…、戻りますか…」

と言って俺が片付けようとすると二人は動かなかった。

「どうかしたの？。まだ打ち足りない？」

「何言ってるんですか。石井さんがまだ打ってないじゃないですか！」

意外だった。まさか自分に打たせてくれるだなんて思っていなかったから。

「いいの？。俺が打っても…」

「いいんですよ、さぁ」

と俺は宮藤さんにバットを差し出された。なんだか不思議な気持ちだった。

ともかくせっかくの宮藤さんの好意を受け取らないわけにはいかなかった。ましてや今日は宮藤さんの誕生日だから。

俺は一応構えた。投げるのは宮藤さんだ、きっとリーネさんが投げさせてあげたのだろう。

「石井さーん。大丈夫ですかー？」

「あぁ！」

と俺が言うと宮藤さんは投げてきた、俺は速い球よりも遅い球を打つ方が得意なのだ。俺は一球目を見逃した、打てないと言うよりは

打たなかったのだ。まぁ格好良く言えば様子見だ。

「どうしたんですかー？」

宮藤さんも不思議に思って俺に訊いてきた。

「なんでもない、なんでも…」

と俺が答えると変な顔をしながらも二球目を投げてきた。俺は今度こそちゃんと打った。リーネさんの位置はだいたいセンターフライの一ぐらいなのだ。しかし、初心者にそんな高いフライが捕れるわけがない。リーネさんは案の定エラーしてしまった。

「ドンマイドンマイ！！！リーネちゃん」

宮藤さんも必死に励ましていた…。それから１９球俺は打った。最後くらいは本気で打とうと思っていた。

「じゃあこれで最後で」

と俺が言うと宮藤さんは

「わかりましたー」

と言い返してきた。宮藤さんの最後の打球はまるであのときのドーバーのピッチャーと同じようなものだった。俺は思いっきり振り抜いた、するとボールはみるみる飛んでいって森の中に入った。と同時にドスンと大きな音がした。

俺等三人はドスンという音のした方に向かった。俺が打ったボー

ルは推定で１１０メートルくらい目測で飛んだ気がする。

「何だったんでしょうね？」

「本当だね～、ドスンだなんて。何か化け物かね…？」

と俺が宮藤さんに言うと突然

「えええええっ！」

とリーネさんが突然大きな声で叫んだ。

「どうしたの？、リーネさん」

と俺はリーネさんに訊いた。

「だっ、だって…化け物って」

そういうことか。リーネさんはこういうのはどうも非常に苦手のようだ。俺は化け物なんてあんまり信じていないから特に気にしないのだが…。あっ、それとも醇子で…おっとこれ以上は言わないでおこう。

「リ、リーネちゃん。落ち着いて…」

宮藤さんは俺に目で助けを頼んでいる。勿論俺もそれに従わないわけにはいかない。

「大丈夫だからリーネさん。昼間からそんな物でないって…」

「ほっ、本当ですか？」

「本当だよリーネちゃん」

と俺等が言うとようやく収まったようだ。

「ごめんねリーネさん。俺があんなこと言っちゃったから…」

「うぅん、いいんですよ石井さん」

「本当？」

「はい、芳佳ちゃんも一緒ですから…」

そう言うと俺等はまた例の音がした場所に向かった。

その場所に近づくとそこには隊の人全員がここにいた。見ると、ルッキーニさんが

「ううぇ～ん、ううぇ～ん」

と泣いている。宮藤さんとリーネさんが

「どうしたのルッキーニちゃん」

と心配しながら尋ねると、ルッキーニさんはこう答えた。

「あのね、私の秘密基地のね、屋根にね、穴が空いちゃったの…」

俺は背筋が凍り付いた。この犯人は間違いなく俺である、と言うか

この場合で犯人が俺じゃない可能性は０％だ。それを裏付けるかのごとくルッキーニさんが指した屋根に空いた穴を見てみると見事に野球のボールの大きさと一致した。

「今、みんなでの穴を作った物が何か探しているのよ…」

後ろからミーナ中佐が俺等にそう言ってきた。

”やばいぞ。もし、このことがばれたら…”

背中を多量の汗が流れていることに俺は気がついた。俺はもう無我夢中で探すのを手伝い始めた。勿論、宮藤さんもリーネさんも俺がこんなに焦っている理由はわかる。

「石井さん」

と宮藤さんは小声で俺にそう言ってきた。

「どうしたの？」

「もし私かリーネさんがボールを見つけたら石井さんに渡しますね…」

「本当に！？」

「勿論ですよ。だからお互いに」

「あぁ、そうだな」

と俺等は小声で確認し合うと、別々に作業に入った。その頃実はも

うハルトマンさんがボールを見つけていたのだ。

”あっ、これだな～。穴を開けたのは…。ふふ～ん、石井を少しいじってやるか…”

と思いながら…。そして

「ねぇシャーリー」

「ん?、どうしたハルトマン」

「ねぇねぇ、これ見てよ!」

とシャーリーさんに尋ねながら。この二人が組んだらどんな目に遭うか俺はまだ知らなかった。

それから30分くらい俺は焦りながらボールを探した。勿論ボールが見つかるはずはないのだが俺はその時はそのことを当然知らない。

”おかしいな…、あんなに高い放物線だったからそんなに遠くには落ちてないはずだったんだけど…”

と俺は思いながら必死に探していた。すると、少し森の中で開けたところにあったのだ。白地に赤い縫い目のある紛れもない野球用のボールが。

「おっ!」

俺は小声ながらもそう声を上げた。なくすとまずい物や他の人に見

つかるとまずい物を紛失して自分で見つけると飛び上がるくらい嬉しくなるのと同時にほっとする。俺の状況はまさに今それだった。

俺がボールを取ろうとすると

「ふふ～ん、やっぱり石井だったのか～」

とハルトマンさんの声がした。その後

「ルッキーニがこのこと知ったらどうなるかな～」

とシャーリーさんの声も聞こえた。俺はボールを取るのを止めて

「二人は気づいていたんですね」

と俺は言った。すると二人は俺の前に姿を現した。

「どうしたい?。石井?」

ハルトマンさんは現れるなり俺にそう訊いてきた。

「どういうことですか?」

「このボール。欲しいでしょ?」

「え、ええぇ」

「じゃあさこうしない?。」

と言うとシャーリーさんもハルトマンさんも俺をグランドの方に連

れて行った…。

55話　match

俺をグランドの方に連れていくとシャーリーさんはいきなり

「ハイ、石井の…」

と言って俺にファーストミットを渡した。なんだかいやな予感がした。

「あの…、一体なにを…」

と俺は二人に訊いた。

「何って、勝負だけど」

とハルトマンさんとシャーリーさんは同時に言った。

「何ですか?、その勝負って」

「野球で勝負するんだよ〜、私が打てなかったらボールを返してあげる。」

「じゃあ、俺が負けたら…」

「えっ?、それは勿論ミーナに報告しないとね…」

ハルトマンさんがこう言うと本当に怖い。扶桑で野球をやっていたときもここまで野球のことで恐怖を覚えたことはなかった。シャーリーさんも

「あっ、私に打たれても負けだからね」

「えっ！」

「ルッキーニのことだしな～」

どさくさに紛れて二人も打ち取らなくちゃいけないだなんて。とりあえず俺は設営しっぱなしだった打撃投手用の柵の前に向かった。

俺は準備を整えた。最初に勝負をするのはハルトマンさんだ。その時俺は勝敗基準を訊いた。

「どうしたら勝ち負けが決まるんですか？」

「え～と、１０球投げて４球以上私とシャーリーに打たれたら負けね」

”６球打ち取るのか…。厄介だな”

そんなことを思いながらも俺は構えた。意外なことにハルトマンさんの打撃のフォームがかなり整っている。よくよく考えたら前にミーナ中佐もゲージで打ったときもえらくスイングが安定していた。何でなのだろう…。とりあえず俺は様子見の意味を込めて内角低めを投げた。

「えぃ！！」

俺は目を疑った。ボールは後ろのフェンスに当たった。勿論ファールボールなのだが真後ろにボールが行くというのはタイミングがち

ょうど合っていると言うことで、早い話がバットをボールに当てる位置が少しずれていただけでそれさえ調節できれば普通に安打（ヒット）が打てると言うことだ。要するに、ハルトマンさんは少なからず野球を知っていることになる。

「あ～あ、ずれちゃったよ～シャーリー」

「ははははは、まぁそんなもんさ」

”なんで二人とも野球を知っているんだ?”

俺がそんな顔をしているとそれに感づいたのかシャーリーさんは俺にこう言った。

「石井」

「はい?!」

「私の出身の国は?」

「リベリオンでしたよね…あっ!」

「言っていたよ。扶桑のサワムラは凄かったってベーブ・ルースもルー・ゲーリックも」

「じゃあシャーリーさん、もしかして…」

「野球のことは少なからず知ってるよ。サイ・ヤングとウォーレン・スパーンの速球は凄かったな。見ててシビれちゃったよ」

俺は改めて恐怖を覚えた。ハルトマンさんでこんなものじゃシャーリーさんにはきっと殆どヒットにされてしまう。更にハルトマンさんもこう俺に訊いてきた。

「石井はこの間ミーナがゲージで打っているのを見ていたんだよね…」

「えぇ、バットコントロールは見事でしたよ」

「カールスラントにも一応野球とソフトボールのリーグはあるんだよね～。ミーナとかトゥルーデともたまに遊んでたんだ～」

こういうときに追い打ちをかけるようにこう言われると俺はさらなる恐怖を覚えた。でも自分にもプライドというか自信がある。

”俺だって六大学で野球をやっていたんだ。扶桑の野球を見せてやるか”

と思いながらも表面上では笑顔で

「じゃぁ、二球目いきますよ。ファールは勿論含みませんよね」

「うん、ヒットとかだけだよ」

この後俺は5球目までパーフェクトに封じた、幸いしたのが俺が左投げだったからだ。そこまでこの二人は気にしていなかったようだが左投げの投手は右投げに比べると圧倒的に少ないのだ。少ないと言うことはあまり左投げの投手とは勝負が出来ない（勝負する機会が少ない）。つまり投手が有利なのだ。

「じゃあ6球目…ですね」

「うん！」

俺は6球目を放った。するとハルトマンさんのバットは空を切った。
そう、俺が勝ったのだ。

「あ～あ、負けちゃったよ～。やっぱカールスラントの野球のレベルはまだまだなんだね」

とハルトマンさんは半ば負け惜しみでそう言った。

「でも楽しかったですよ。最初のファールは正直びびりましたから俺も…」

「本当？」

「えぇ、だから。あんまり気を抜くと打たれると思ったので少し力を入れて投げたんです」

「ズルいよ～。まぁでもシャーリーが何とかしてくれるかな」

と言うとシャーリーさんも

「ははははは。まぁ私も何とか出来ればな」

と言った。その頃俺等のことを見つめる視線がたくさんあったことを俺等はまだ知らなかった…。

「おいミーナ」

「待ってトゥルーデ。もう少し見てみましょう。石井さんの実力がわかるわ」

「…そうか、わかった」

「坂本さん、ペリーヌさん。石井さん…どうなっちゃうんでしょうかね？」

「全く、石井さんと来たらもう…」

「まだわからんな。シャーリーが打席に入ったら少なからず驚くことになるとは思うが」

「そうなんですか」

「あぁ…」

「とにかく、もう少し見る必要がありますわね」

”石井さん…、頑張ってください。私と芳佳ちゃんのために…ここまで苦労をかけてしまって申し訳ありません”

「エイラ、石井さん…」

「大丈夫ダロ？。タロットはそう言ってるゾ」

「…当たるの？」

「大丈夫ダッテ」

”シャーリーもハルトマンも石井もどうなっちゃうのかな―。別に私も屋根が壊れたぐらいだから…”

勿論ほかの9人のメンバーがこう思っていることもこう話していることも。

ハルトマンさんの後は勿論シャーリーさんとの勝負だ。俺はまだこの時は

”多分、打ち取れるだろう…。”

くらいの軽い気持ちでいたのだが、それはどうやら間違いのようだった。シャーリーさんが入ったのは左打ちのバッターボックスだったのだ。

「えっ！。」

「ははは。私が左打ちじゃあ悪いかい？。」

「いや、そういうわけじゃ…でもどうして？。」

「ベーブ・ルースとかみたいに打てるやつってみんな左打ちだからさ…。だから私も右投げだけど左で打つことにしたんだ。勿論元々右利きだから右で打てないこともないけどね。」

俺は衝撃を受けた。俺自身左打ちと勝負なんてしたことがなかったのだ。そりゃ左打ちの人にも扶桑で投げたことはあったがあくまでそれはフリーバッティングでの話で真剣勝負という勝負はしていなかったのだ。

”とりあえず、行くか…。待っていても始まらないしな。”

と俺は思いながら

「それじゃあ、行きます。」

とシャーリーさんに言った。するとシャーリーさんも

「あぁ、いいぞ。いつでもおいで。」

と自信満々で言った。その自信は嘘ではなかった。最初はハルトマンさんと同じく様子見で高めを投げたのだが見事に打ち返されてしまった。センター前ヒットと言ったところだろうか。

「石井～、扶桑の野球はそんなもんなのか?、それじゃあいつまでたってもリベリオンには勝てないぞ。」

その時俺の心に何か来たようだ。心のエンジンがかかった…とは敢えて言わないでおこう。どうやら俺の心のモーターが回転を始めたようだ。しかも通常回転の何倍もで。

「シャーリーさん。負けませんよ!!!。」

「おぅ、さぁこい。」

俺は少し考えた。すると

”それにしてもあんなにうまくはじき返されると厳しいな。…待てよ！、こうすればいいのかもしれない。肩に少なからず来るとは思うけど…。”

と名案が浮かび上がったのだ。

「おい、石井！、どうしたんだ？。怖いのか～。」

とシャーリーさんは俺を急かす。こんな事を俺が考えているなんて知る由もない。ハルトマンさん

”これなら石井も観念するかな～？。”

と半ば笑みを浮かべながら俺の方を見ている。どうやら後ろの方で見ている人たちもそのようだった。しつこく言うがまだこの人達の存在を俺等は知らない。

「すいません。シャーリーさん。行きますよ。」

と言いながら俺は投げた。すると

「何っ！？。」

「えっ！？。」

とシャーリーさんもハルトマンさんも驚いたようだ。俺は横手投げ（サイドスロー）で投げてみたのだ。こうすると左打者にはボール

の軌道が見えにくくなるから打ちにくくなるのだ。つまりサイドスローで投げれば投手に有利なのだ。しかも上手投げ（オーバースロー）とよりも軌道が元々低いから低めが苦手な人には更に有利なのだ。

「どうかしたんですか？。」

「何でもない。今のはストライクだな。」

「えぇ、それじゃあ次行きますよ。」

「おぅ！！！。」

とシャーリーさんは威勢よく言ってはいたものの勝負は既に決着が付いていたと言っても過言ではなかった。それから7球目まで俺はパーフェクトだった。

「後一球ですね。」

「ああ。」

俺はまたボールを放った。しかし今度はシャーリーさんの意地の一打で再び安打を許してしまった。

「あんなところヒットにするなんて…。」

「はは。これぐらいしないと面白くないだろう？。」

「まぁ…そうですね。」

俺は次の球を投げた。すると今度もまた安打を打たれてしまった。

「…打たれたか…。」

「石井。」

「はい。」

「次で決めよう。」

「勿論ですよシャーリーさん。」

ここにいる全ての人が勝負の行方を真剣に見守っていた。

”2球とも内角を打たれているな。多分内角を狙ってるのかな…。”

”2球とも内角か～、次は外に来るか…。”

どうやら俺とシャーリーさんの考えは異なっていたようだ。俺は敢えて内角を投げたのだ、狙っていると言うことは自信が生まれるからきっと力が入りすぎて空振りすると思ったのだ。

結果は勿論空振りだった。

「よし。」

と俺は言った。危ないところだったが見事に抑えることが出来た。

「石井はやっぱり強かったな～。良いところまで言ったんだけどね…。」

「シャーリーさんもなかなか手強かったですよ。」

「ははは。そうか?、それは嬉しいな~。石井、ありがとう。」

「えぇ。こちらこそ。」

と言うと俺とシャーリーさんは握手をした。すると

「ねぇ石井!。」

とハルトマンさんが突然俺を呼んだ。

「どうかしたんですか?、ハルトマンさん。」

「勝負は決まっちゃったけど、石井も打ってみてくれない?。」

「えっ!?。」

「まぁいいじゃん、勝負は決まったけどさ。見てみたな~石井のスイング…。」

するとシャーリーさんも

「あぁ、私も見てみたいな…。石井、私からもお願いできない?。」

”まぁ、勝負には関係ないって言ってるからいいか…。”

俺は安易に引き受けてしまった。勿論後ろの人たちにもこのことは聞こえていた。

「今度は石井さんの番みたいですね…坂本さん。」

「あぁ、またホームランが見れるのか…。」

「ミーナ！。また石井ことだからきっと秘密基地を…。」

「まぁまぁトゥルーデ。いいんじゃないかしら、せっかくなんだから。」

「…そうか。ミーナがそう言うなら構わないが。ルッキーニはどうなんだ？。」

「うにゃ？。」

「また秘密基地に穴が空くかもしれないぞ。」

「えー！！、まぁそうなったら石井にはお説教しないとね。」

「ふっ、そうか。」

「エイラ…石井さんが打つみたいね。」

「そうなんダナ。カードは…言わないでおこウ。せっかくだからナ。」

「ふふ、エイラったら…。」

「さっ、サーニャ…。」

「ペリーヌさん。」

「どうしたんですの？、リーネさん。」

「どうなると思いますか？。」

「さぁね、でもやるのだったらそれなりの期待はしてしまいますわ。」

「そうですよね…。」

しかしながら俺等にはこのような会話は聞こえてこなかった。

俺は早速バッターボックスに入った。勿論左打ちの方に。

「石井は左打ちだったんだよね～」

投手ハルトマンさんがしてくれるようだ。

「えぇ、一応…」

俺は両打ちであることを黙っておいた。後で驚かせようと思ったのだ。

「じゃぁ、いっくよ～」

と言うとハルトマンさんはボールを投げてきた。打ちごろのスローボールだ。俺は勿論振った。すると少しバットの位置が高かったのだろう。ゴロになってしまった。

「あれれ～、石井～、疲れちゃったの～？」

「石井、どうしたんだよ？、手加減か？」

「いえいえ、少しずれちゃったので…。次行きましょうか」

「わかった」

次の当たりは文句なしのホームランだった。今度は幸い何も音がしなかった。

「おお～、凄いな石井…」

「文句なしだな」

「そうですか？」

「うん、さぁさぁ、次行こう」

「えぇ」

それから3球続けて俺はホームランを放った。俺にとっては正直なところホームラン競争のようなものだ。

「次からは後半ですね…」

「うん。じゃあシャーリーと代わるよ」

「え、いいのか？。ハルトマン？」

「気にしない気にしない！」

「そうか、ありがとうハルトマン」

「うん」

”そうか…投手交代か…。じゃあ今だな”

「ちょっとタイムで」

「ん、どうかしたのか？」

「いや、ちょっと向きを…」

「向き？」

と言うと俺は左から右に立ち位置を変えた。

「何！？。石井、お前右でも打てるのか？」

「多分…ですけど…。もう随分右で打ってないですから打てるかはわからないですけど」

「そうか…楽しみだな…」

と言うとシャーリーさんは早速投げてきた。案の定俺は空振りしてしまった。

「ははははは。石井、無理はしなくてもいいんだぞ～」

「大丈夫ですよ」

「そうか～？」

「えぇ」

「そうか、じゃあ次行くぞ～」

と言うとシャーリーさんは2球目を投げてきた。今度こそ俺はバットで捉えることが出来た。勿論当たりはホームランだった。どうやら森の随分奥の方、つまり滑走路よりまで飛んだようだ。

「…す、凄いな…」

「うん、トゥルーデくらいじゃないと勝てないよ」

シャーリーさんもハルトマンさんもそうとう驚いていたようだ。それから2球は右で打ったが2球ともフライだった。

「じゃあ最後は左で打ちますね」

「そうか。石井はやっぱり左の方がしっくり来るな。ドーバーでも左で打っていたからな…」

「えぇ、また狙いますよ…」

「そう来なくっちゃな…」

シャーリーさんは最後のボールを投げてきた。打って欲しいと気持ちを込めていたのだろう高めのボールだった。あのドーバーの時と同じだ。勿論俺もその期待に応えた。俺の打ったボールはまた森の方に向かった。勿論ボールは森の中に消えた。

「凄いな石井。両打席でホームランか」

「やったじゃーん」

「ありがとうございます。二人とも」

と俺等が話していると

「本当ね、さすがだわ石井さん」

と後ろから別の声が聞こえた。勿論その声の主はミーナ中佐だった。

「ミーナ中佐!!!、それに皆さんも…」

振り返ると皆が俺のことを見ていた。不思議なことにみんな怒っているようには見えなかった。

「石井さん」

「はい」

「みんな凄いって言っていたわよ、あなたの打球」

「そうですか…それはどうも」

するとバルクホルン大尉が俺に

「でも石井、飛ばしすぎだ」

と言ってきた。そう、ルッキーニさんの秘密基地に穴を開けたのは俺なのだ。

「すいません大尉、それにルッキーニさん」

「いいよ。また直せばいいんだから」

「…ありがとうございます」

するとみんなが口々に俺に向かって

「石井さん、凄かったです。投げても打っても…。ねぇ芳佳ちゃん」

「うん、本当にリーネちゃん」

「石井、見事だったぞ。ペリーヌはどう思う?」

「あっ、その…お見事でしたわ」

「石井さん、凄かったわ…」

「石井はよく飛ばすんダナ」

と言って来た。すると

「石井さん」

とミーナ中佐が俺のことを呼んだ。

「はい。何なんでしょうか？」

と俺が答えると

「今度は別の隊と勝負してみない？」

と訊いてきた。何のこと俺には良く理解できなかった。

「どういうことですか？」

「石井さんがいるんだったらってほかの隊から勝負したいって言われているのよ…。勿論５０４部隊、つまり石井大尉のいるところからも言われているの」

要するに俺等と野球なりソフトボールなりで勝負がしたいと言うことだそうだ。勿論醇子が来るんだったら拒否しないわけにはいかない。

「いいですよ。でも野球は９人でやるものですよ？」

「勿論、それは知っているわ…だから」

「だから？」

「あなたに教えて欲しいの」

「皆さんをですか？」

「ダメかしら？」

すると皆が俺の方を見ている。これは間違いなくやって欲しいと依頼をする目だ。

「…わかりました。時間に余裕が出来たときならいいですよ」

「そう、ありがとうね」

「いえいえ」

「それと」

「それと？」

突然俺はいやな予感がした。

「後で私の部屋まで来なさい」

「えっ！」

「ルッキーニさんの秘密基地を壊したことについて少し」

「それは不問じゃ…」

「何か言いましたか？」

「…いえ、何でもないです」

「そう…。それじゃあ」

そう言われると俺は強制的にミーナ中佐の部屋に連れて行かれた。勿論坂本さんも一緒だが今回はそれにおまけしてバルクホルン大尉も一緒だった。それから1時間近く俺はお説教を受けることになった。

それから俺は一時間近くお説教を受けた。実は後から壊された秘密基地の使用者であるルッキーニさんも来たのだ。１２歳の少尉に１８歳の准尉である俺がお説教を食らうなんてまさにここが軍隊であるからであろう。

「石井、わかった～？」

「はい、以後気をつけます」

「よし、わかったならいいよ」

「はい」

とルッキーニさんのお説教が済むと

「コホン」

とミーナ中佐が咳を軽くした。どうやらそろそろしめてくれるようだ。

「それじゃあ石井さん」

「はい、ミーナ中佐」

「もう行ってもいいわよ」

”よし…ようやく解放されたな”

「はい！」

と俺は元気よく返事をした。そして部屋から出ようと起ち上がった。すると偶然なのかはわからないがいきなりジリリリンと電話が鳴った。

「はい」

とミーナ中佐が出た。俺は一応自分のことかもしれないと思って部屋に待機していた。するとその考えはどうやら当たっていたようだ。

「石井さん」

「はい」

「お電話よ。あなたに…」

ミーナ中佐の笑顔が誰かを言わなくても俺にはわかった。他の人も

わかっていたようだ。ルッキーニさんに至っては

「奥さんでしょー？」

とわざと電話の向こうの醇子に聞こえるように言ってきたのだから。

「やめてくださいよ。ルッキーニさん」

「にヒヒー、本当のことなんだからいいじゃん」

「そっ、そうですけど…」

坂本さんは大笑いだし、バルクホルン大尉に至っては顔を赤くしながらあきれている。俺はとりあえず受話器を取った。

「もしもし」

「あなた、あなたなの？」

「そうだよ」

「ふふ、元気そうで何よりだわ」

「君もね…、ところでどうして電話なんか？」

「あら、夫婦がこう会話しちゃいけないかしら？」

「いや、そういうわけじゃないけど」

「冗談よ。今度そっちに行くのは知ってるわよね」

「えっ…あぁ、何でもこの部隊に野球をやりに来るんだって？」

「ええ、正確にはソフトボールだけどね」

俺はこの時初めて知ったのだが今回やるのは野球ではなくソフトボールのようだ。たしかに女性のしかも初心者にいきなり野球というのは危険がありすぎる。

「ほかの隊からも来るみたいよ」

「そうなの？」

「ミーナ中佐からまだ聞いてなかったの？」

「あぁ、今もちょっとね」

「そう…、今回来るのは私たち５０４部隊と５０２部隊よ」

「なるほど…」

「えぇ、だからあなたも頑張ってね。みんなの育成」

「あぁ、勿論だよ。君も頑張ってね」

「えぇ、負けないわよ」

「こっちこそ」

「ふふ、じゃあね。今度は電話じゃなくて」

「うん、その場で会おう」

「ありがとう。それじゃあ」

「あぁ、また」

と言って俺は電話を切った。振り向くと中佐室にいる四人の視線が痛い。顔が赤くなってしまう。

「あらあら石井さん…」

「全く、石井は…」

「はっはっは。石井は面白いな」

「にヒヒ、いい物見ちゃった」

「も、もう止めてくださいよ皆さん…」

俺はいても立ってもいられず中佐室を出て自室に向かった。

この時ミーナ中佐の部屋では俺のことでいろいろと盛り上がっていたようだった…。

55話　match（後書き）

こ、こんばんは。ようやく准尉と共に再びこの場に戻ってくることが出来ました、作者の直通特急でございます。

直「いやぁ、それにしても二人のお仕置きは凄かったですねぇ」

准「本当ですよ～」

直「それに耐えている石井准尉は凄いと思いますよ」

准「ありがとうございます～。直通特急さんもはじめてなのによく耐えましたね」

直「今回のお仕置きは、ミーナ中佐のげんこつ１０発と石井大尉の平手打ち１０発の計２０発でした」

准「ホームラン級の破壊力ですからねぇ」

直「あ、あんまり言うとまた来ますから」

准「おっと、そうでした…ね？」

ミ＆ａｍｐ；醇「二人とも随分楽しそうね」

直「え、えぇ…」

准「ま、まぁね」

ミ「ふふ、もう少しお話ししていてもいいわよ」

醇「あなた、折角なんだから色々話すといいわ」

准「あ、ありがとう…」

ミ&醇「それじゃあ」

直「ふぅ…」

准「あぶないところだった…」

というわけで、次回も是非是非お楽しみ下さい…

56話　Baseball　of　Fu－fu

俺が部屋に戻りドアを開けようとすると

「石井さん、待って」

と後ろの方から声が聞こえた。振り向くとそこにはサーニャさんとエイラさんがいた。

「どうしたんですか二人とも?」

と俺が訊くとこう続いた。

「あのナ石井、今からその…野球を教えてくれないカ?」

「えっ?」

「ダメかしら…石井さん」

「いや…その…」

「石井、サーニャがやりたいって言ってるんダゾ…」

その後にエイラさんはまるで

”わかってるヨナ…”

とでも言いたそうな顔をしている。ここまで言われて俺が断ったら、逆に俺が悪者扱いされてしまいそうだ。しかもエイラさんは

「石井、私たちが下手なプレーばっかやってたラ、指導力不足で奥さんに怒られるかもしれないゾ…それでもいいのカ？」

とまで付け足してきた。確かに醇子のいる前でそんなことをしたらきっと何かしら言われてしまいそうだ。勿論仮にそれまでまじめに練習したとしていったとしても多かれ少なかれ失策（エラー）はできてしまう。俺は正直この時まだ迷っていた。ルッキーニさんの秘密基地を壊してしまったし…、だがサーニャさんやエイラさんは明日からまた夜間哨戒の任務があるから練習できるような日は今日しかない。

少しばかり考えて

「わかりました。いいですよ…」

と俺は答えた。そう…俺は練習をやることにしたのだ。

「アリガトナ石井」

「ありがとう、石井さん」

と二人は俺が答えると笑顔になった。俺は思わず照れそうになったが醇子のことを考えるとそんなことは言っていられなかった。

二人がそう言うと

「そういえば、それで練習するんですか？」

と俺は二人に訊いた。軍服で野球をやるのは少なからず動きにくそうだ。

「アァ、これしかないからナ…」

「えぇ、そうするしかないわ」

二人の答えはこうだった。俺は

「そうですか…後で俺がミーナ中佐に頼んでおきましょう」

と二人に言った。すると

「何をダ？」

とエイラさんが訊いてきたので俺はこう言った。するとしばらく会話が続いた。

「なんと言いますか練習着というかユニホームというか…」

「ユニホームって前ドーバーで石井さんが着ていたようなもの？」

「えぇ、野球をやるんだったらあれの方が動きやすいですから」

「そんなもの、ミーナ中佐が買ってくれるのかナ？」

「出来るんだったら、俺が大学に頼んでもいいですけどね」

「大学って石井さんの？」

「えぇ、俺の大学のユニホームは大学の略称の刺繍が付いているだけですからそれさえとればただの練習着ですよ」

「ソウカ…、まぁ今日はこれでやるしかないんだけどナ」

「そうですね、じゃあちょっと待っててください。ちゃんと着替えますから」

「ふふ、石井さんのユニホーム姿久しぶりね…」

「あぁ、本当ダナ」

「二人とも、やめてくださいよ…」

そう答えると俺は一旦部屋に入って着替え始めた。正直俺もこのユニホームに着替えるのは久しぶりだ。このユニホームを着るとまだあのときの記憶がついさっきかのごとく鮮明によみがえってくる…あのとき醇子へしたことを…。

俺は早速ユニホームに着替えて、例の場所に向かった。向かう途中サーニャさんに

「石井さん、胸のＴＩＵって何の略なの?」

と訊かれた。

「これは　Ｔｏｋｙｏ　Ｉｎｐｅｒｉａｌ　Ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｙの略で扶桑語に訳すと‘東京帝国大学’って意味になるんですよ」

「そうなの?」

「そういえバ、お前のところのユニホームは本当にそれしか特徴が

ないナ」

「そうですね。ほかの大学のユニホームは結構綺麗なんですけどね」

「見てみたいわね」

「だったら今度是非扶桑にいらしてください。エイラさんと一緒に」

「なっ、なんで私も一緒なんダ？」

「いや…せっかくですからサーニャさん一人で来るのも寂しいでしょうし」

と俺が答えると

「エイラ…私と一緒じゃイヤなの？」

とサーニャさんはエイラさんにそう訊いた。勿論エイラさんは

「そっ、そんなわけネーじゃン」

とそうとう焦りながら答えた。一瞬だけ俺の方をにらんでいた気がする…多分気のせいだろう…。

そうこうするうちに俺等はグランドに到着した。準備体操を済ませた後俺は二人にグローブを渡した。勿論プレゼント用の物ではない。俺がもらったものだ。実は扶桑にいたときもこのような物を親戚からもらったことがあったのだが、買ってきた物が殆ど右投げ用だったのだ。だがら大部分のグローブを俺はいろいろな人に転属させた。二人にグローブを渡すと俺は早速キャッチボールを始めさせ

た。

「最初はキャッチボールから行きましょうか」

「どうすればいいんダ？。」

「簡単ですよ。エイラさんがサーニャさんに投げて、サーニャさんがエイラさんに投げてを繰り返すんです」

「バカにしてるのカ？、そんな練習が何になるんだヨ？」

「これは肩の準備体操です。真剣にやらないと肩を壊しますよ…」

と俺が真顔で言うとエイラさんもやり始めた。５分もすれば肩は温まったようだ。

「そろそろ…良さそうですぅ」

と俺は言った。俺の方針としては二人がやりたいことをやることにした。だから俺は二人に何がやりたいか訊いてみることにした。一応ソフトボール用のバットとボールは俺が少なからず抑えている。

「そういえば、今日は何がしたいんですか？」

「そうダナ…サーニャは何がしたいんダ？」

やっぱりこういうときは必ずエイラさんはサーニャさんに訊く。サーニャさんは少し考えた後

「…そうね。やっぱり打ちたいわ」

どうやらバッティングをしたいようだ。俺はバッティングの準備を始めることにした。

早速俺は打撃投手用の柵の設営にかかった。今回はソフトボールなので投手は下投げをしないといけないのだが、柵を設営する関係上どうしても上投げになってしまう。なので今回は俺がひたすら打撃投手を務めることにした。勿論サイドスローぐらいなら出来るので、出来る限りサイドスローにすることにした。ただサイドスローは基本的にオーバースローよりも肩に負担がかかる。早い話が肩を壊しやすいのだ。ましてや俺は一塁手（ファースト）でそもそも肩があんまり強くない、ただ皆のためなら背に腹はかえられない。

「あれ、石井さんが投げるの？」

とサーニャさんがそう言ってきた。

「えぇ、勿論」

と俺が返すと意外なことに

「私が投げちゃダメかしら？」

と俺に質問してきた。エイラさんはと言うと俺が消石灰で書いたバッターボックスに立っていたのだが

「石井！！。サーニャが投げたいって言ってるんだカラ、投げさせロ！！」

と大きな声で俺にそう言ってきた。そういうわけなので俺はサーニ

ャさんにボールを渡して守備に就くことにした。正直エイラさんにはある程度期待していた。ペサバッロをスオムスでやっていたと聞いていたからだ。このペサパッロというスポーツはフェアゾーンの奥、野球で言えば観客席にノーバウンドで落ちるとホームランにならず全てファールになってしまうのが特徴だ。だからペサパッロでは長打よりも短打を小刻みに打つことの方が重要視される。これはどちらかというと日本の野球のように‘次の打者へつなげる’という精神に近い。だから仮にエイラさんを投入するのだったら、俺は1番かまたは下位打線で‘切り込み隊長’のようにプレイをして欲しいのだ。

俺は後ろの方で守っていた。

「石井さん、大丈夫ですか?」

とサーニャさんは必死に大きな声で俺にそう言ってきた。俺はいてもたってもいられず

「大丈夫ですよ。いつでもどうぞ」

と答えた。するとサーニャさんはエイラさんに投球を開始した。最初の方こそ多分

”サーニャの投げる球ナンテ…打てなイ”

とでも思っていたのだろう、空振りやファールチップが多かった。その後サーニャさんに

「エイラ…打って」

と言われてからは結構いい当たりが俺の方にも飛んできた。俺のいる位置はだいたい外野のセンターの定位置ぐらいだ。エイラさんはうまい具合に外野手の手前くらいに落としてくるようなヒットばかり放つ。よく見ると使い魔を発動していた。未来予知のおかげで守備に就いている選手（今回は俺だが）の移動する位置を予知しながら放っているのだろう。しかもペサパッロをやっていたおかげもあってバットコントロールはいい。これはトップバッターに任命するかどうかを真剣に考えた。本当ならすぐにでもそうしたいところなのだがこの隊にはルッキーニさんがいる。彼女の場合（こんな事面と向かっていったら多分怒られるが…）背が小さくすばしっこいためトップバッターにはもってこいなのだ。

”監督って言うのもなかなか大変だな。ましてや俺もプレイヤーだし…”

と俺は思った。きっとドーバーで出してくれたときも藤本監督はこんな気持ちだったのだろう。自分がその立場になってみるとよくわかる。

俺は少し視点を変えてサーニャさんを観ることにした。さっきから何気なく投げているのだがうまい具合にエイラさんにいい当たりを打たせているようにも思える。もしそれを意図的にやっているのだったらこれは大発見だ。この制球力を応用すれば‘打たせて取る’という野球がしやすくなる。俺はエイラさんが休憩している間にサーニャさんに尋ねてみることにした。

「サーニャさん」

「どうしたの、石井さん?」

「さっきから後ろで守っている間サーニャさんの投球を観ていたのですが…。」

「えっ、何かダメだったことでもあったの？。」

なんだか自分がしてはいけないことしてしまったと勘違いしているだろう。非常に申し訳なさそうな顔をしている。

「そうじゃないんですよ」

と俺が答えると不思議そうな顔をして。

「じゃあどういうことなの？」

と俺に訊いてきた。

「さっきから…そのエイラさんがいい当たりを打てるように投げていませんか？」

「えっ！」

どうやら図星のようだ。エイラさんはと言うと休んでいてまだ気づいていない。

「…ごめんなさい。私、エイラを喜ばせようと思ってつい…」

「いいんですよ、それより俺が気にしているのはサーニャさんの制球力なんです」

「制球力？」

「いわゆるボールのコントロールです。それをもしサーニャさんが意図的にあそこまでしているのだったらそれはすごいことなんです」

「…そうなの？」

「えぇ、このまま練習すれば投手になると思いますよ」

と俺がそう言うと

「え、本当に？」

ととても驚いた。ここまで制球力があるのに投手起用をしないなんて勿体ない話だ。

「…私は投手をやってみたいわ…」

答えは意外なものだった。ここまで意志が固いのであればもはや俺に拒否権はない。すると

「ナンダナンダ？。どうかしたノカ？」

と休んでいたエイラさんもやってきた。俺はその後サーニャさんにこう更に訊いた。

「サーニャさん。誰にあなたの投げるボールを受け取ってもらいたいですか？」

「えっ！？」

「捕手（キャッチャー）のことですよ。サーニャさんの投げたボールを打者（バッター）の後ろで受け取る人です…」

「私を無視スンナー！」

といきなりエイラさんは俺等の話に割ってこう叫んだ。すると

「エイラがいぃ…」

と小さな声でそうサーニャさんは言った。俺もそうであろうとだいたいは気がついていた。俺はバッテリーを最初に決定することにした。

「エイラさん」

「ナンダ！？」

「サーニャさん」

「どうしたの、急に改まって」

「二人のポジションは決定しました」

「ナンダッテ？！」

「えっ！」

「サーニャさんが投手でエイラさんが捕手です。これで全試合に臨もうと思います」

二人とも俺の言っていることに納得してくれたようだった。エイラさんもサーニャさんの球ならきっととれるだろう。

「ワカッタ…、これからは捕手として頑張るヨ。大会まデ…」

「私も投手として頑張ります」

と二人とも笑顔でそう言ってくれた。それからしばらくバッテリーの練習をするともう夕方になっていた。

「それじゃあ、ここまでに今日はしましょうか」

「そうダナ。もう夕方だしナ」

「そうね」

と二人も納得してくれたようだ。二人はいくらか疲れていたようだったが後片付けもちゃんとやってくれた。これから誕生会だというのに…。

基地に戻る途中サーニャさんは先を急ぐエイラさんに聞こえないように俺に

「石井さん…ありがとう。エイラと組ませてくれて」

と言ってきた。

「そんなことないですよ…。これからも頑張りましょうね。絶対勝ちましょう」

と俺が答えると

「うん！」

とサーニャさんは笑顔でそう返してきてくれた…。

57話　Net & Scold

俺は基地に戻ると早速自室に戻った。ゲージ（柵）の網を今日は取り外しているのだ。今日始めグランドでこれを使ったのだがどうも汚れが目立っていることに気がついたのだ。だから今日は網を外して大がかりな整備を行うことにしたのだ。大がかりと言っても軽く水拭きした後にすぐにから拭きをして綺麗に磨くというものだけだがこれを一人でやるのは一苦労なのだ。しかもこの後にバットも磨かないといけないししかもこれからやる誕生会にも間に合わないといない。

”まさに突貫工事だな…”

と俺は思いつつも早速作業に取りかかった。１５分くらいした頃、ドアがノックされた。

「は～い、どうぞ～」

と俺が答えるとドアが開いた。そこにいたのは坂本さんだった。

「坂本さん、すいませんこんな姿で」

俺は今あぐらをかきながら柵を磨いていてしかもドアに背を向けいているのだ。だから必然的にそのドアから入ってきた坂本さんにも背を向けいていることになる。すると

「いや構わん。気にするな」

と坂本さんも俺のしていることをどうやら理解してくれたようで許

してくれた。それから坂本さんは俺にこう訊いてきた。

「石井」

「はい、なんですか坂本さん?」

「大変そうだな…手伝うか?」

これは嬉しかった。正直俺も猫の手を借りたいほどな状況だったのだ。幸いハルトマンさんみたいに（こんな事普通に言ったら何をされるかわからないが）何かしら心配しなくても済むし、ミーナ中佐みたい（こちらも同じだがこちらは更に酷い目に遭いそうだ）に何かと威圧感というか脅威を感じながら整備をする必要もない。だから俺も

「そうですか、ありがとうございます。是非お願いします」

と坂本さんに支援の要請をした。とりあえず坂本さんには俺が網を取り外した柵を拭いてもらうことにした。

「…なるほどな濡れたぞうきんで拭いた後に乾いたぞうきんで拭くのか」

「はい、そうしないと柵がさびてしまうので」

「わかった。任せておけ」

といいながら俺は安心して網を取り外す作業に取りかかった。すると

「これじゃあ、まるで漁師だな」

といきなり坂本さんが俺にそう言ってきた。確かにこの光景だけを見れば漁から戻ってきた漁師そのものだ。

「そうですね。言われればそう見えてきちゃいましたよ」

「はっはっは。石井は面白いやつだな」

俺は不意に坂本さんにさっきのソフトボールの件について訊いてみることにした。

「坂本さん」

「ん?。どうかしたのか石井?」

「坂本さんはどこを守りたいですか?」

「…ポジションと言うことか?」

「はい、既に投手と捕手…即ちピッチャーとキャッチャーは決定してしまいましたが。ファースト以外ならどこでも今なら空いていますよ」

「どうしてファーストは空いてないんだ?。あ、そうか、お前が守るのか」

「はい」

「そうか…正直私はどこでも構わない。ただ、私もそれなりに体を鍛えているから。そう言う面が行かせるようなところがいいな」

「具体的に訊きますが。毎日どのようなことをして鍛えているのですか？」

「そうだな…簡単に言うと２０キロくらい走った後に私の刀で素振りをするといった感じだな」

俺はそれを参考にしながら考えた。２０キロを毎朝は知っているのだから体力は申し分ないだろう。まして走れるのだからこれは外野がいいのであろう。しかしながら俺は早速自分のポジション配置の問題に気がついたようだ。よくよく考えたら３チームで総当たり戦を行うとして考えると決勝戦まで含めると最低でも３試合することになる。仮に引き分けなどをした場合は更に試合数が増える可能性がある。こうなるとサーニャさん一人ではパンクしてしまう。なので俺は坂本さんには外野兼投手をしてもらうことをお願いすることにした。

「どうしたんだ石井？。急に黙り込んで…」

「すいません、坂本さんの守備位置を考えていたので」

「そうか…それで決まったか？」

どうやら坂本さんも少なからずワクワクしているようだ。こう言う坂本さんを観ることはなかなか出来ないから少し嬉しかった。早速俺は坂本さんに守備位置を説明することにした。

「そうですね…坂本さんには通常は外野を守ってもらって、いざというときには投手をやってもらえませんでしょうか？」

「なるほど…しかし石井。さっき投手はもう埋まったと」

「えぇ、投手はサーニャさんで決定はしたんですが。サーニャさん一人ではパンクしてしまう恐れがありますので」

「そうか…わかった。石井がそう言うのならそれでいい。よろしく頼むぞ」

「はい。明日の朝早速やりますか？」

「あぁ、出来るのならな。だが石井」

「はい？」

「今度は空中で倒れるなよ」

「…もう坂本さん…やめてくださいよ…」

「はっはっはっは」

俺等はそれから作業を続けた。話して捗ったのだろうかしばらくすると作業は完了した。気がつくともう誕生会の時間の少し前になっていた。

「さて…こんなものか？」

「そうですね坂本さん。わざわざお手伝いありがとうございました」

「気にするな。私も楽しかったぞ。それじゃあ石井明日からよろしく頼むな」

「はい」

そう言うと坂本さんはドアを開けて部屋を去っていった。俺はその後学生服に着替えた。誕生会にこんな汚れた服で行くのは失礼もいいところだ。そして俺はプレゼントを取り出した。そしてそれを持って行くことにした。

食堂に着くともう準備はされていた。だがまだ皆準備に追われていてせかせかと急いでいる。今回俺はプレゼントを買いに行ったことソフトボールのコーチ（監督はミーナ中佐で指示は俺が行い実際に選手交代などの時はミーナ中佐が審判（アンパイヤ）のところまで行く。）を引き受けたことで今回この準備作業は免除となっていた。まだ皆忙しそうに作業していたから邪魔にならないように隣の隣の小さな部屋で待っていることにした。準備が出来たらリーネさんが伝えに来てくれるとのことだ。

「…それじゃあ準備が出来たら呼びに来ますね」

「ありがとう、リーネさん」

そう言うとリーネさんはバタンとドアを閉めて行ってしまった。ここには俺しか今はいない。多分醇子がここにいたら隣に座っていることなのだろう。最近はどうも醇子のいない生活に疲れが出ているようだ。というのもお互いに離ればなれでいる異常相手のことを必要以上に思ってしまう。現に醇子からもたまに電話もかかってくるし、いざ電話に出るとなかなか電話を切りたくなくなってしまう。しかも今度会えるというのが更にこれに拍車をかけているようだ。期日がしっかりわかっているから余計に早くその日が来ないかと待ってしまうのだ。例えるなら子供が旅行に出かける一週間くらい前

から‘もうすぐだね、もうすぐだね’と言っているようなものだ。

「石井～！」

と俺がそんなことを思っているとドアをバターンと開けて勢いよくハルトマンさんが入ってきた。どうやらハルトマンさんも準備が終わるで暇を出されたようだ。そして勢いよく俺に飛びついてきそうになった。醇子がいる以上それは許されない。俺はそれを躱(かわ)した。まるでビーンボールを避けるバッターのように、とハルトマンさんは前にあったソファーにずぼっと突っ込んだ。幸いなことに今回は痛くはなかったのだろうが起き上がると俺にこう言ってきた。

「いった～い、もうひどいよひどいよ！！。石井！！」

「そんなこと言われても」

「とにかく、飛びかかってくる淑女(レディー)から避けるなんて最低だよ！」

「いゃ…その…」

「そうやってると奥さんにも嫌われちゃうよ！！」

”勿論醇子にそんなことはしないけど…”

と俺は思っていた物のこれ以上女性を怒らせると何かとよろしくない。だから俺はそろそろ謝罪に転向することにした。

「すいません。以後気をつけます」

「ホントだよもぅ…」

「すいません」

「石井？」

「はい？」

「とりあえず謝っとけ…とか思っていない？」

”まずいな…まさにその通りなんだけど”

こういうときのハルトマンさんの洞察力は凄い。とりあえず俺は誤魔化すことにした。どこまで通じるかわからないけれど…。

「そんなことありませんよ」

「う～ん、本当？」

「えぇ…」

「そぅ…まぁいいか」

”よかった”

俺は自分では気がついていなかったようだが俺はこの時ほっとしてしまい声が出てしまったようだ。どうやらそれをハルトマンさんは狙っていたようだった。

「やっぱり…」

「えっ?!。どうかしたんですかハルトマンさん?」

「本当にそう思ってないんだったら、そんな風に，ほっ，とはしないよね…」

「えっ…いや…その…」

「自分の嘘がうまく行ったから、その安堵感から声が漏れたんだよね」

完全にばれてしまったようだ。

「いや…その…」

「そこに座りなさい!!」

と俺を一人がけ用のソファーに座るように命じた。

「えっ…その…」

と俺がためらっているとハルトマンさんは急に笑顔になって

「上官の?」

と言ってきた。ここまで言われたら俺にはもはや余地はない。俺は

「はい…」

と言いながらその席に座った。それから暫くの間俺はお説教を受けることになった…。

58話　Ｂｉｒｔｈ（前書き）

お断り

鉄道唱歌につきましては第１集から第５集までの全てが大和田建樹氏の作曲されましたものは著作権が消滅していると言うことにつきましては、ＪＡＳＲＡＣにおいて確認出来ましたので掲載させて頂きます。ですが、万が一問題等がございましたら、ご面倒ではございますが、作者直通特急までご一報下さい。それではどうぞ、本文の方をお楽しみ下さい。

58話　Birth

お説教と言っても本当のお説教は15分くらいで終わった。

「…わかった?。石井」

「はい。今後は気をつけます」

というとようやくハルトマンさんはほっとしたような表情に戻った。するといきなり俺にこんな事を訊いてきた。

「ねぇ石井。今日の私のプレーどうだった?」

「そうですね…なかなかコンパクトなスイングだったと思います」

「やっぱり〜、それを意識してみたんだ」

俺がハルトマンさんの話を聞いている限りだと長打は狙えないような気がする。それよりも安打を狙うべき選手だ。エイラさんと言いルッキーニさんと言いやはり女性に長打を狙わせるのはいささか難しい。ただ足が皆速い。おそらく俺がこの隊では一番遅いだろう。俺はハルトマンさんにポジションについて訊いてみることにした。

「ハルトマンさん」

「ん〜?」

「ハルトマンさんはどこを守りたいですか?」

「どうして？」

「いや、今ポジションを考えていたので」

「石井はよく考えるんだね」

「いえいえ…それでどこを？」

「う～ん、石井は私はどこなら守れると思う？」

”俺に訊かれても…”

と思いながらも俺は考えた。正直ハルトマンさんは決して身長が高いわけではない。その分足は速いから本来なら外野手をお願いしたいところなのだが、身長が低くしかも女性であるから肩も当然のことながら弱い。正直外野を任せるわけにはいかない。となると必然的に肩が弱くても守ることが可能な一塁や二塁を守らせることになるが既に一塁は俺が取ってしまっている。勿論俺が指名打者で出ても構わないのだがそうするときっと皆のことだから守備がままならなくなってしまうだろう。

しばらく考えて俺は結論をハルトマンさんに言った。

「本来なら俊足を足を活かせるように外野をお願いしたいのですが…。ハルトマンさんの肩の力をまだ知らないのでわかりませんね。肩の強さ次第では内外野代わってくると思いますよ」

と俺が答えるとハルトマンさんはいきなりこう質問してきた。

「トゥルーデはどこを守るの？」

俺はバルクホルン大尉には少なからず期待があった。固有魔法が怪力だったからだ。正直俺は四番を任せても構わないと思っている。とりあえず詳しいことを俺は聞き返した。

「前の隊で多かれ少なかれ皆さんで野球はしていたんですよね？」

「うん。やっぱトゥルーデは怪力だったから。外野をやることが多かったかな」

俺の意見とぴたりと重なった。

「俺もそのつもりで行こうと思います。それと…」

俺は一呼吸置きながらこう言った。

「バルクホルン大尉には全試合四番になってもらおうと思っています」

と俺は宣言した。すると

「そうなのね…トゥルーデを四番にね、でも石井じゃなくていいの？」

「えっ？」

「石井は四番が一番似合うと思うんだけど」

「俺…四番だと打てなくなっちゃうんです。上がっちゃって」

「あらあら、監督さんがそれじゃあ困っちゃうわ」
と後ろからミーナ中佐がそう言いながら入ってきた。
「あっ、ミーナ中佐」
「ミーナ、どうしたの？」
「私もここで待機って言われたのよ」
「そうだったんですか」
と俺が言うと
「それより石井さん。さっきのポジションの話を悪いんだけど最初からしてもらえないかしら？」
とミーナ中佐は言った。それから5分くらいの間俺はポジションについて話した。
「…なるほどね。ありがとう」
「いえいえミーナ中佐」
「それでさ～石井」
「はい、何でしょうハルトマンさん」
「私はひとまず保留って言うのはわかったけど、ミーナはどうするの？」

俺はそう言われると

「えっ！」

と言い返してミーナ中佐の方を見た。するとミーナ中佐は

「そうね…石井さん。出来れば今教えてくれないかしら？」

と俺は言われた。俺は正直ミーナ中佐にも外野を任せるつもりでいた。やはり肩にいくらか期待している面があるのだ、なんでたってあの強力なげんこつが出来るのだから。勿論、こんな事は口が裂けても言えないけど。

「そうですね、ミーナ中佐には外野を守ってもらいましょう」

「わかったわ」

「それではよろしくお願いします」

「えぇ、こちらこそ」

と三人でそんな話をしているとリーネさんが

「お待たせしました。準備が出来ましたので」

とやってきた。俺等は早速食堂に向かった。いよいよプレゼントを渡すときがやってきたようだ。まだ皆気がついていないらしい。

誕生会は盛大に始まった。サーニャさんと宮藤さんが今回の主役

だ。

「二人ともおめでとうございます」

「ありがとうございます。石井さん」

「ありがとう…石井さん」

二人ともとても喜んでいるようだ。すると

「は〜い、みんな〜。それではプレゼントを二人に」

とミーナ中佐が言った。そう言うと皆は各々プレゼントを渡し始めた。実は会が始まる前に皆にお願いして俺は一番最後にさせてもらうことにしたのだ。

いよいよ俺の番が回ってきた。俺は人よりもたくさんプレゼントがある。

「宮藤さんとサーニャさんには色違いなんですがこれを…」

というと二人に俺はグローブを渡した。宮藤さんのはオレンジ色でサーニャさんの皮色（明るい黄色）のものだった。

「石井さん、グローブありがとうございます」

「グローブなんて石井さんらしいわね。どうもありがとう。

と二人も喜んでいたようだ。更に俺は二人を驚かそうとした。

「実はまだ終わりではないんですよ」
と俺が続けると二人は同時
「えっ！」
と言った。口で説明するよりも見せた方が早いと思ったので。俺はリーネさんとエイラさんに
「リーネさん、エイラさん」
と読んだ後二人にそれぞれボールを軽く投げた。すると二人ともちゃんと取ってくれた。オレンジ色のグローブをつけたリーネさんと、皮色のグローブをつけたエイラさんは…。宮藤さんとサーニャさんはとても驚いていたようだったから
「キャッチボールって言うのは二人じゃないと出来ないんです」
と俺は言った。すると二人はようやく気がついてくれたようだった。
「石井さん…これって」
とサーニャさんがそう俺に言ってきた。
「えぇ、これでいつでもエイラさんとキャッチボールが出来るようになるんですよ」
「それじゃあ」
「えぇ、勿論宮藤さんもリーネさんと」

と俺が二人に答えるととても二人は喜んでいた。サーニャさんに至ってはエイラさんに飛びついて喜んでいた。実はまだ俺の仕事は残っているのだ。

「実はグローブは皆さんにもあるんですよ」

と言うとほかのメンバーはエッという顔をした。だから俺は次のように言った。

「実はこの間宮藤さん達へのプレゼントを買いに行ったとき皆さんにも買っておいたんです。いつでもキャッチボールが出来るように」

と俺は言うとみんなにそれぞれグローブを渡した。幸いだったのがこの隊は俺以外全員右投げなのだ。つまり左投げなのは俺だけなのだ。幾ら扶桑とブリタニアが野球の壮行試合をしたからと言って左投げのグローブはなかなか売ってはいない。

するとシャーリーさんが俺に

「お前、これ全部で幾らしたんだ?」

と訊いてきた。

すると

「だいたい9ポンドくらいだったと思いますよ」

「お前そんな大金…」

とバルクホルン大尉も俺に言ってきた。だから俺は

「皆さんが使ってくれればそれで満足なんですよ。もし申し訳ない気持ちがあるんだったら今度の試合は優勝しましょう！！」

と俺が言うと皆

「おー！！」

と大声で返してくれた。それから俺等は誕生会を2時間ほど続けた。

盛大な誕生会の後、俺は風呂に向かった。今は午後の8時半くらいだ。外を見ると雲が多くなってきている。

”明日の朝練は無理かもしれないな…”

と思いながら俺は風呂に向かった。

俺が風呂に向かうと隣はまだ静かだった。目で確認は出来ないからよくわからないが誰もいないだろう。多分だが誕生会の後は皆疲れるから先に風呂に入ろうなんて考えを持っている人はそうそういないのだろう。

「ふぅ」

と俺は湯船に浸かるとそうため息を漏らした。今日は特に疲れたような気がした。朝から野球をしていたししかもその後自分の不注意でルッキーニさんの秘密基地に穴を開けてしかもそれを隠すためハルトマンさんとシャーリーさんと勝負して勝ったはいいもののミーナ中佐ほか全ての隊の人に見られてしかもお説教を二度も食らうな

んて（ミーナ中佐とハルトマンさん）。今日はとても運が悪い日なのだろう。という頃はしばらくすると今度はかなり運がいい日が来るのかもしれない。俺はそう思うことにした。

俺は気がついたら歌っていたようだった。俺が歌える歌はあまり多くはない。基本的には学校の寮歌だったり軍歌だったり野球の歌だ。ただ扶桑にいたときには野球の友人達と鉄道唱歌も歌っていた。この鉄道唱歌というのは第１集から第５集まであり扶桑の鉄道の幹線の名所だったり歴史的な遺産だったりを七五調で歌っているのだ。第１集は東京から神戸までを、２集は神戸から長崎までを、３集は上野から東北線で青森まで向かいそこから常磐線経由で上野に戻ってくるという経路を、４集は上野から長野や金沢を通って米原までを、５集は難波から奈良や和歌山を通って難波に戻ってくる経路といった感じに。

俺はいつもこの歌を日替わりというか風呂に入ったときの思いつきで歌っていた。こう言う歌は誰かが歌えば必ず誰かが続けてくれるのだ。というのもこの鉄道唱歌は文部省推奨の扶桑の地理を覚える歌なのだ。ただだいたい歌が終わる前に皆上がってしまうのだ。この歌は最低でも６４番目まではある（最高は７２番）。だから歌い終わる前に皆からだが温まって上がってしまうのだ。

「汽笛一声新橋を

はや我が汽車は離れたり

愛宕の山に入り残る

月を旅路の友として…」

と俺は第１集の歌を歌っていた。新橋は扶桑の鉄道起点の駅でもあ

るのだ。１８７２年に新橋から横浜が開通したのが扶桑の鉄道の始まりだ。だから年配の教授などは東海道線に乗るときは東京駅からでなくて新橋から乗る人もいた。

「ふふ、石井さんは歌も上手なのね」

といきなり隣からサーニャさんの声がしてきて非常に驚いた。しかも恥ずかしかった。一気にのぼせてしまいそうだった。

「きっ、聞いていたんですか？」

と俺は焦りながらそう訊いた。

「勿論よ…。素敵な歌だったわ」

「そうですか…」

「石井」

といきなりエイラさんの声も聞こえた。どうやら二人は今日はサウナではなく風呂に入っているようだ、正直言ってこれは珍しい。

「どうかしたんですか？。エイラさん」

「その歌はなんて言うんダ？」

「鉄道唱歌って言います？」

「鉄道の歌なのカ？」

「なんていうか、扶桑のどの辺に何があるのかって言うのを歌にして覚えやすくしたものです」

するとサーニャさんが

「地理の覚え歌なのね…」

と言ってきた。確かにその通りである。これは覚え歌でもあるのだ、だから小学校の時もみかんの産地だとか師団の位置だとかはすぐに覚えることが出来た（たとえば扶桑の第六師団があるのは熊本、第五師団は広島）。東海道本線と山陽本線は日本の鉄道の大動脈だし、俺自身鉄道が好きだったと言うこともあってこの歌はすんなりと覚えることが出来た。

「まさにその通りです。サーニャさん」

「ありがとう」

と目では見えなかったがサーニャさんは喜んでいたようだった。と同時にエイラさんが焼きもちを妬いているようにも思えた。これは見えなくても何となくそう思えるからである。

「石井」

と案の定エイラさんは俺にまた何かを訊いてきた。

「どうしたですか？」

「その…今日はアリガトナ。サーニャもとても喜んでいるんダ」

「グローブですか？」

「アァ、それで何だけどナ。明日から早速練習をしようってさっきサーニャと決めたんダ」

俺は嬉しかった。勿論二人も喜んでいるし、何より喜んでいるのはもらわれたグローブだろう。本来の使い方をしてもらえるのだからきっと…。と俺は思いながらもこう返した。

「それは嬉しいです。プレゼントした甲斐がありました」

「ウン。さっきは石井から言ってもらったケド…。なっ、サーニャ」

「うん、そうね。エイラ」

「えっ？」

と俺は思わず二人に聞き返した。すると二人は同時に

「優勝するぞー（ゾー）！！」

と大きな声で俺に言ってきた。

「頑張りましょう！！」

と俺も大きな声で言い返した。するとなにやら隣の方がうるさくなってきた。どうやらいろいろな人が入ってきたようだった。

「あ～、エイラにサーニャじゃ～ん」

「こらエーリカ！。何という口の利き方だ！」

「トゥルーデ、気にしない気にしない」

「気にしないわけがないだろ！」

「あっエイラとサーニャ、今日はサウナじゃないんだ」

「おっ、本当だ。珍しいな」

「芳佳ちゃん、ペリーヌさん」

「どうしたのリーネちゃん？」

「どうしたのですかリーネさん？」

「明日の朝からキャッチボールしませんか？」

「いいよリーネちゃん。やろうやろう、ペリーヌさんも…」

「えっ？。ま、まぁ…構いませんわよ」

「ありがとう芳佳ちゃん、ペリーヌさん」

と坂本さんとミーナ中佐以外は全員風呂に来たようだ。そうなると俺は再び黙って風呂に入ることにした。何かと面倒なことに巻き込まれたくないのだ。すると

「石井さん…」

とサーニャさんが俺を呼んだ。なんだかいやな予感がしないわけでもなかったがエイラさんがいる以上サーニャさんの呼び出しを無視すると後々大変なことになる。仕方がなかったから俺は

「どうかしたんですか？」

と答えた。すると

「さっきの歌、もう少し歌ってもらえないかしら…」

案の定、俺の予感は間違っていなかったようだ。

「えっ、でも…」

と俺が躊躇しているとを有無を言わさず

「石井、サーニャが頼んでいるんだゾ」

「石井、歌ってよ～さもないと」

とエイラさんとハルトマンさんがそう言ってきた。仕方がないから俺は

「わかりました。でもお願いがあります。この歌は結構長いですけど最後まで風呂にいてくれるんだったら歌っても構いませんよ」

と言い返した。すると二人は

「そんなことカ…ワカッタ」

「いいよ～」

と軽く了承してくれた。

”勝ったな…。いつもこうされていては俺もダメだものな…”

と心の中で思いながら俺は

「右は高輪泉岳寺

四十七士の墓どころ

雪は消えても消え残る

名は千歳の後までも…」

と二番目を歌い始めた。この時宮藤さんはリーネさんと

「リーネちゃん。この歌は私も知ってるんだけど」

「うん、それがどうかしたの？」

「この歌は確か６６番まであるんだよ…。この歌は学校でもたまに出てきたんだ扶桑の地理を覚えるのに便利だって」

「えっ！？。じゃあ私たち…」

「うん…そうみたい」

と俺に気を遣って小声で会話をしていたそうだった。

それから３０分くらい俺は歌い続けた。そしていよいよ

「明けなば更に乗り換えて

山陽道を進まましし

天気は明日も望みあり

柳にかすむ月の影…」

と６６番までを歌い終わった。すると隣では

「石井～、この歌長すぎ～」

「そうダナ…私モ…のぼせちゃったゾ…」

と二人は酔ったような声でそう俺に言ってきた。完全に二人とものぼせているようだ。俺はというとこの歌を扶桑ではずっと歌っていた身だから何のことはない。あともう１集行けそうなぐらいの余裕はある。

「大丈夫ですか二人とも…」

と風呂を上がって俺が二人に尋ねると

「石井…覚えてろヨ…」

「うう～、石井にしてやられたよ～。」

と二人は半ば怒りながらそう俺に言い返してきた。ただ今夜は二人ともぐっすり眠れることだろう。十分に温まったのだから…。

59話　朝練

いつも通り朝はやってきた。今は朝の5時だ。坂本さんが何時頃から練習をしているかわからなかったがとりあえずこれぐらいの時間に起きれば十分だろう。俺は急いで練習着に着替えてグランドに向かった。案の定もうそこには坂本さんはいた。

「おはようございます。遅くなってすいません」

と俺が言うと

「あぁ。構わん、気にするな。礼を言うのは私の方だ」

と言い返してきた。

「どういうことですか？」

「私の朝練に付き合ってくれて済まないな」

「いいんですよ、その代わり頑張りましょう」

「ああ！！」

俺と坂本さんは早速キャッチボールから練習を開始した。

「坂本さん。それでは始めましょうか」

「あ、あぁ」

キャッチボールを続けて暫くの間坂本さんは俺のことを不思議な顔で眺めていた。

「どうかしたんですか?、坂本さん」

「まるで鏡のようでな」

「鏡?」

「私が右投げでお前が左投げだから私には鏡のように見えるんだ」

「なるほど…」

確かに左投げなんて滅多に見ないから新鮮なのだろう、坂本さんにとっては。

キャッチボールを済ませるとまずは坂本さんに何がしたいか訊くことに俺はした。

「坂本さん、今日は何を?」

「そうだな、前から私がやりたかったやつは出来るか?」

きっとノックのことであろうと俺は思ったので

「ノックですか?」

と訊くと案の定

「ああそれだ」

と坂本さんは言い返してきた。ここなら問題なくノックも出来る。俺は坂本さんの意見に従うことにした。

「それじゃあノックを始めましょうか」

「わかった」

と俺は言うと急いで打撃用のゲージを準備した。これは実際に打つわけではなくゲージの中央部がホームベースに来るようにして返球時の目標を作るためである。これと同時にボールが後ろに反れないから片付けるときに楽なのだ。

「それじゃあ、坂本さん…まずは軽く行きますよ」

「ああ、よろしく頼む！！」

坂本さんはどうも少なからず野球を知っているようで俺が打つ体勢に入ると自然と構えた。これはもしかしたら野球じゃなくてほかのことで身につけたのかもしれない…。とりあえず俺はまず軽く坂本さんの前にゴロを打ってみた。さすがにそこは初心者だ。エラーをしてしまった、どうもボールを止めることは出来たのだが全体的に焦っているようだ。

「坂本さん。そこまで焦らなくても大丈夫です、もっとゆっくりで大丈夫ですよ」

と俺は言った。正直俺のチームの育成方針は「打たれたら打ち返せ」なのだ。野球は幾ら守備がうまくても点が取れなければ勝つことは出来ない。逆にたかだかエラーの一つで負けるかと言えば必ずしも

そういうわけではない。俺が思うに守備力を高めるのは少なからず野球を知っていないと無理だと思うのだ。だから俺は些細なミスは気にせずに点をたくさん取って相手を圧倒すればいいと思っている。今回の坂本さんのプレーもそうだ。焦って後ろの送球をそらしてしまっては意味がない。大事なのは「次の走者（ランナー）を返させない」ことだ。

「ああ、わかった。次を頼む」

坂本さんはもう一度俺にノックを頼んできた。同じ要領で俺は打った、すると今度はちゃんと送球をすることが出来たししかもゲージの中にぴったり投げて返してきた。

「その調子です」

「うむ」

こんな調子で坂本さんは黙々と練習を行っていった。

気がつくともう起床ラッパの鳴る時間になっていた。ノッカーをやっていた俺も汗でびしょびしょだ。坂本さんもかなり疲れているようだ。結局坂本さんは今朝だけで１４４球ノックを行った。誰だって朝一でこれだけ練習すれば疲れるのは当然だろう。

「お疲れ様でした。坂本さん、今日の朝練はここまでにしましょう」

「あぁそうだな。これから風呂に行かないか？」

「朝風呂…ですか？」

「あぁ、こういうときは風呂に限る」

「わかりました」

と軽く会話を交わした後に肩のクールダウンをかねて軽くキャッチボールをした後俺と坂本さんは風呂に向かった。

・・・

そうなんだと俺は思った。このときまでは…。因みに今日は8月19日だ。

「それでいつになるんですか？」

「それが…8月23日なの」

「そうなんですか…って23日ですか？。今日入れてあと5日しかないですよ！？」

「そうみたいなの…だから石井さん頑張ってくださいね！」

俺は久しぶりに背筋に何かが通った気がした。なんだか今日のミーナ中佐の笑顔は笑顔のほかに何かもっと凄い物を感じる。

「それで…」

とミーナ中佐はまだ続けた。

「開催予定地はここのグランド。出場部隊は私たち501部隊、東部の502部隊通称ブレイブ・ウィッチーズ、そして石井さんの奥さんのいる504部隊通称スクトゥムです」

早い話が俺の指導の時間はあまりにも少ないと言うことだ。ましてやネウロイが今日からいつ来るかわからないから余計に時間がない。ネウロイは最近出現する周期が長くなっているから一度出てきてしまえばその後は安心して練習を指導することが出来るのだ。

「あと…」

まだミーナ中佐は話があるようだ。

「５０２，５０４の各部隊は前日にはこの基地に到着してもらい試合の翌日にかえってもらう予定です。ですからほかの隊の人はここで2泊することになります」

俺は嬉しかった。醇子と二日もいられるなんて。すると

「石井～、喜びすぎ～」

とハルトマンさんがいつも通りの口調で俺にそう言ってきた。

「えっ？」

「そりゃ奥さんに会いたいのはわかるけどさ～」

「だから…何で俺がそう思っていると？」

「だってそんなに笑顔なんだもん」

「あっ…」

と俺は朝一から恥ずかしい思いをしてしまった。この後俺がシャーリーさんにいじられたのは言うまでもない。

食後俺はまたグランドに戻った。実は折れたバットや不必要になった廃材を流用してトンボ（地面を均す道具）を作ったのだ。やはりグランドは神聖なものだ。俺は早速それを持って行きグランドを整備することにした…。

60話　Ｔｅａｒ

整備もようやく一段落した。いやぁ、トンボで地面を均すって言うのはなかなか疲れるものだ。

「ふぅ…こんなもんかなぁ？」

ほっと辺りを見渡していると警報が鳴った。どうやらネウロイが来たようだ。今回は前の時とは違って食事もしっかり取ってあるからガス欠なんてことはまず無いだろう。急いで俺はハンガーに戻りストライカーを穿いた。

「電圧、電流異常ナシ、石井出ます！」

といつも通り俺は言って。離陸した。今回は俺が一番最後だった、グランドから距離が離れているから仕方がないのだろう。

「今回のネウロイは小型多数との報告を受けているわ」

とミーナ中佐が言った。すると

「石井、この前みたいに倒れるなよ～」

とシャーリーさんが俺に言ってきた。

「えぇ…勿論ですよ」

と俺も言い返した。

しばらく飛ぶと見えてきた。今回は多数の名にふさわしく幾らあるかわからないくらいだ。少なく見積もっても１５０はある。この間のかりもあるから俺はたくさん落とすことにした。攻撃を開始するとまたしても今回のネウロイには撃墜に大きな問題があることがわかった。このネウロイどうやら放電をわずかながらしているようだ。機器が誤作動することはない程度ではあるけど、不安だから降下することにした。

「坂本さん、少し速度を下げます」

「どうかしたのか？」

「このネウロイ、放電しているみたいです」

そう言うと一斉に

「何？」

と皆は言い返した。

「皆さんにはおそらく問題ないでしょう、避雷針（アース）も付いていますから。問題なのは俺です。俺のストライカーはモーターで動いてますから…だからモーターを停止した状態で飛行します」

モーターを停止すると言っても、暫くの間はモーターの惰性回転で少なからず飛べるし、風力発電とグライダー状態を利用すれば墜ちることはまずない。暫くの沈黙をおいてミーナ中佐も坂本さんも

「わかったわ。石井さん気をつけてね」

「気をつけろよ、石井」

と俺の行動を許可してくれた。実は最近利き手の矯正をしているのだ。いつもは左手で打っているのだが最近は両手でも打てるようになっていた。これは俺と坂本さんとミーナ中佐の上層部しか知らないことだった。早い話が俺は野球でも戦闘でも両撃ち（両打ち）になったのだ。まだ今回はそれを発動するまでもない。とりあえず俺は速度を落として低速飛行を開始した。

「１００…９５…９０…８５。」

と今回はどうやら８５キロ前後で対応できることがわかった。

”さて、それじゃあ試合開始（プレーボール）といこうか…”

と俺は心の中で呟きながら攻撃を開始した。正直俺は自分よりもモーターのことを心配した。人間は口がきけるがモーターはそうはいかない。それと同時に人間は危険を察知すると回避することが出来るがモーターは回避できない。手遅れにならないよう慎重に扱った。今回は救援を俺が行うことも俺が要求することも非常に難しい。というのもこの速度では皆失速してしまうし、俺が救援に呼ばれても加速するのに時間がかかるからだ。

「くっ…」

「多すぎるわ…」

と坂本さんもミーナ中佐も呟いていた。確かにその通りだった。幾らハルトマンさんやバルクホルン大尉が頑張ってもこの数は多すぎた。時折

「石井さん…大丈夫ですか」

「石井、大丈夫カ?」

と宮藤さんやエイラさんが俺のことを心配していた。どうも俺の低速飛行は他の人から見ると失速しているように見えるらしい。そのたびに俺も

「大丈夫です。問題ありません」

と答えていた。

最後の一機をハルトマンさんが墜とすと戦いは終わった。今日俺は17機墜とすことが出来た。帰る途中にバルクホルン大尉が俺のストライカーについてまた質問をしてきた。

「おい、石井」

「どうかしましたか大尉?」

「お前のストライカーはどこまで速度を落とせるんだ?」

「設計上は時速70キロでしたが、この間実際に飛ばしたら時速55キロまでは大丈夫でした」

「55キロだと!、どうやったらそんなに低速で飛べるんだ?」

「全ての部品を極限まで軽量化しています。モーターを切っても風力発電を使えばグライダー状態にできるので…」

「そうか…さすがだな…」

「どうかしたんですか？」

「いや…実はそのストライカーをクリスに見せてやってくれないか？」

「えっ？」

と俺が疑問をもっているとハルトマンさんが横からこう言ってきた。

「あれからクリスなんだけどね、石井のファンになったんだって」

「えっ？！」

「こらエーリカ！！。余計なことを…」

と同時にバルクホルン大尉はハルトマンさんの頭にボカッと一発お見舞いした。

「いった～い、トゥルーデ強すぎ…、それでね石井が婚約してるのは知ってるんだけど野球とか男性ウィッチとかで純粋にファンなんだって」

なるほど俺の知る限りではファン第一号だ。今度見舞いに行って欲しいと大尉が言ったのもこれが理由だったのだろう。俺は嬉しかった。婚約していることを理解しながらも俺のファンになってくれているクリスさんのことを…。扶桑でもこう言う例は良くある。既婚の職業野球の選手を応援する女性も少なからず存在するのだ。きっ

とそれと同じような心理であると俺は思う。醇子がファン第一号という人ももしかしたらいるかもしれないが、醇子はファンではなく俺の妻である。ましてや俺等の仲はファンの範疇で収まる物では到底ない。そう思っていることも勿論わかるのだがそれ以上の感情を俺等はお互いに抱いているのだ。

「そうなんですか…じゃあ何かプレゼントしないと行けませんね」

と俺は二人に言った。

「本当か！」

バルクホルン大尉はとても妹のことが好きなようだ。一人しかいない妹なのだからそれは当然と言えば当然なのだが。この時もバルクホルン大尉はとても喜んでいるように聞こえた。

「えぇ…。何がいいでしょうかね？」

「そうだな…石井に限らずどんな人でもクリスはサインを強請(ねだ)るな」

「サインですか…。わかりました…それと」

「それと？」

「ファン第一号ですから、バットにでも書きましょうか…」

「よかったじゃんトゥルーデ、クリスもとっても喜ぶよ」

「あぁ…そうだな。でも石井…本当にいいのか？」

「いいんですよ。俺はファンを大切にするのは義務であり使命であると思っていますから…」

「そうか…本当にありがとう」

珍しくバルクホルン大尉は俺から顔を背けた。多分嬉しくて泣いているのだろう。幾ら顔では強気であってもこういうところはやはり‘お姉さん’なのだ。なんてことを俺が思っていると

「あぁ！！、堅物～泣いてるのか～？」

「バルクホルンが泣いてる～」

と早速シャーリーさんとルッキーニさんが茶化し始めた。それからは勿論

「なっ、何を言うリベリアン！！！、目にゴミが入っただけだ！！！」

とまたいつもの光景が空中で見ることができた。ただ今回はハルトマンさんも混じってなんだか大混戦になっているようだ。すると俺のところにミーナ中佐がやってきた。

「石井さん…ありがとうね」

「いえ、いいんですよ」

「トゥルーデもかなり喜んでいてくれてるわ。実はねここのところクリスの調子があまり良くないの」

「本当ですか！？」

「えぇ、ただ調子が悪いって言ってもトゥルーデや石井さん達に会えないから寂しいみたいなの。それがどうも体調に出ちゃったみたいなのよ…」

「そうだったんですか…。だからあんなにバルクホルン大尉も…」

「そういうことね。医師の診察によればあなたたちに会えばまた良くなるそうよ」

「そうなんですね、じゃあ必ず行きますよ」

「ふふ…そうしてちょうだいね。よろしく石井さん」

「えぇ」

と俺が言い返すとミーナ中佐はまた編隊の先頭の方に戻っていった。

気がつくと基地はもう目の前だった。

61話　Present to Chris

ネウロイを撃墜した翌日、俺とハルトマンさん、バルクホルン大尉そして今回は宮藤さんとリーネさんで病院に向かった。これからまた俺はクリスさんの見舞いに行くのだ。

「済まんな…石井そして宮藤にリーネも…」

「気にしないでください大尉。ファンを大切にするのは当たり前ですから…」

「私たちのことも全然気にしないでくださいバルクホルンさん。私たちも会うのが楽しみなんですから…ねっ、芳佳ちゃん」

「はい、私もとってもクリスちゃんに会ってみたかったんです」

と俺等三人が言うと大尉も少なからず喜んでいたようだった。今回俺はクリスさんにどう渡せばいいかわからないのでとりあえずバットを持って行って、してもらいたいことをするという形式を取った。せっかくクリスさんが俺のファン第一号になってくれたのだ。俺が全てを決めてしまってはいけない。あくまで選手はチームのためそしてファンのために戦う。これが俺の考えなのだ。ジープの中でも野球の話を俺等はした。

「石井はどうして野球をするようになったの？」

とまず最初にハルトマンさんが俺にこう聞いてきたのが始まりだった。

「そうですね…確か家族で野球を見に行ったのが始まりだったと思います」

俺がこう答えると宮藤さんやリーネさん、そして大尉も話に参加してきた。

「実際に野球を始めたのは…いつ頃なんですか？」

「そうだね～確か小学校２年生くらいからだったかな…キャッチボールと父親としたのが…その時からだと思うな」

「じゃあ…」

「なんだいリーネさん」

「１０年くらいでここまでうまくなったんですか？」

「うん、多分リーネさんや宮藤さんもその気になったら俺に今からでも追いつけると思うけどね…」

「本当ですか？」

「うん、練習量に比例するから」

「やっぱりそうなのか…」

「えぇ大尉…。ん、大尉？」

「どうかしたのか？」

「何だか浮かない顔をしているみたいですが」

「実はな…クリスが今度の試合を観戦しに行きたいと言っているんだ」

「それはそれは…しかしなぜまた浮かない顔を…」

「自信がないんだ、私がいいプレーを出来るかどうか…」

珍しく大尉は弱気だった。確かに俺が全試合四番にすると決めてしまったから萎縮してしまっているのかもしれない。ただ正直言って大尉が使い魔を発動すれば俺でも飛距離やボールのスピードなどは到底かなわない。俺は正直な意見をコーチとして伝えることにした。

「大尉」

「どうしたんだ?」

「四番打者というのは確かに責任重大です。塁(ベース)にたまった走者(ランナー)を本塁(ホーム)に返さなくちゃいけないのですから…でも打てないときは打てないんです?」

「どういう意味だ?」

俺の思ったとおり話に食いついてきた。

「打てないときは打てないで仕方がないんです。確かにそうチャンスはそう多くはありませんが一度の失敗やミスを恐れては何も出来ないんです。大尉は今、まさにその恐怖の中にいるんです。正直俺はエラーをしたり点を取られたりするのは仕方がないと思っていま

す。俺だってエラーはするんですら…。ただ俺が重点を置いているのはその後なんです」

「と言うと？」

「点は取られたら取り返せばいいんです。打って打って打ちまくる…これが俺のチーム方針なんです。ミーナ中佐も一応は納得してくれています。だから俺はノックは基礎的なことをやって打撃に重点を置いているんです。勿論全てホームランを狙えだとかそう言うわけではなくて戦略的なことも含めての打撃ですけどね…」

と俺が言うとバルクホルン大尉は

「だから何が言いたいんだ？」

と俺に再び尋ねてきた。

「だから、大尉には何も恐れないでどっしりとバッターボックスにはいって欲しいんです。そうすれば仮に三振しても，大尉は頑張っている，と思ってくれるはずですよ」

と俺は言ったすると

「本当か！？」

と大尉はまた今度は驚きながら俺にそう訊いてきた。

「えぇ勿論ですよ…全力でプレーしている人を笑う人なんていませんよ」

と俺が答えると大尉は

「そうか…私は今まで何か…その…お前の言う恐怖とやらにとらわれていたのかもしれない。ありがとう石井、礼を言うぞ」

と笑顔で俺に言ってくれた。気がつくともう病院は目と鼻の先だった。

病院の前に車を止めると俺等はすぐにクリスさんの病室に向かった。今回は大尉もこの前来たときの反省からだろうか廊下は走らなかった（勿論走らないのが当然なのだが…）。早速俺等はクリスさんのいる病室に入った。

「クリス！！」

とバルクホルン大尉はいつもの通り声を上げた。この前からクリスさんは個室に移っていたのだ。

「お姉ちゃん。それに皆さん」

とクリスさんも俺等にそう言ってくれた。俺はと言うと後ろの方で隠れていた、プレゼントが見えないようにしたかったからだ。

「あぁ紹介がまだだったなクリス。宮藤、リーネ…頼む」

と大尉は二人に自己紹介をするように頼んだ。すると二人も快く引き受けてくれたようだった。

「私はブリタニア空軍所属のリネット・ビショップ軍曹です。よろしくお願いします」

「私は扶桑皇国海軍の宮藤芳佳軍曹です。クリスちゃんのことはバルクホルンさんから聞いています。よろしくお願いします」

と二人は言った。するとクリスさんも

「クリス・バルクホルンです。ウィッチのお友達が増えてとっても嬉しいです！」

とかなり喜んでいた。すると俺とも目があった。

「あっ、石井さんも来てくれたんですか？」

と俺に言った。

「えぇ、お久しぶりですクリスさん」

と俺が答えるとクリスさんは俺の手に持っている物をじっと眺めてから

「石井さん、その細長い物は…」

と俺に訊いてきた。だから俺は答えることにした。

「大尉…あ、いやねぇ、クリスさんのお姉さんから聞いた話なんだけど」

”お姉さん！！！”

と俺以外の誰もが俺のその一言に反応しているように聞こえた。俺

がそんな単語を使うなんて思ってもいなかったのだろう。

「はい？」

「どうもクリスさん。俺のファンなんだってね…」

と俺が言うとクリスさんは驚きながら

「えっ…えぇ、そうです」

と答えた。

「どうも君が俺のファンの第一号なんだ」

「本当ですか!?。奥さんは…」

「よく知ってくれてるんだね。妻は妻、ファンはファンさ」

「そうですか…」

「そこで何だけど君にプレゼントがあってね…」

「えっ!!!。なんなんですか」

とクリスさんに俺は訊かれた。だから俺はさっきクリスさんに言われた細長い物を指差しながら

「これだよ」

と笑顔で答えた。俺はバットを取り出した。まだ未使用のやつだか

らとても綺麗だ。

「これは…もしかして？」

「バットだよ」

と俺が言うとクリスさんはとても驚いたと同時に喜んでくれたようだった。

「ありがとうございます。大切にします」

とクリスさんは続けて言った。でもまだこれでは未完成なのだ。

「クリスさん…まだ終わりじゃないんですよ」

「何かあるんですか？」

とクリスさんは俺にそう質問してきた。だから俺はクリスさんにこれから渡すバットを再び持って

「石井明範のファン第一号であることをここに証する。クリスティアーネ・バルクホルン様」

とサインペンで書いた。勿論大尉に教えてもらったカールスラント語で。

「さて、これで完成っと」

「ありがとうございます。私、ずっとこれ大切にします、これからも頑張ってください」

ととても喜んだ顔でクリスさんはそう俺に言ってくれた。それから俺等は1時間少し会話を楽しんだ。

帰る時間になり俺は

「クリスさん。今度の大会も楽しみにしていてくださいね」

と俺は言った。すると

「はいっ！！。とっても楽しみにしています」

と満面の笑みで俺等にそう答えてくれた。

帰り道俺等はみんなで話しながら帰った。

「よかったですね、クリスさんお元気そうで。ねっ芳佳ちゃん」

「うん、そうだねリーネちゃん。クリスちゃんもとっても可愛かったし」

「ありがとうリーネ、宮藤。だがこれも石井のおかげだ」

「いえいえ…そんなことはないですよ大尉」

「お前がプレゼントしてやったサイン入りのバットはクリスのことだ。一生大事にすると思う」

「是非ともそうしてください。きっとバットも喜んでくれるはずです」

「あぁ…」

すると運転中のハルトマンさんも

「でも…トゥルーデも楽しそうだったよ。クリスと話してるとき…あと…」

「ん?。あとなんだエーリカ?。」

「石井がお姉さんって言ったとき~。」

「なっ!!!!!」

と言うと皆静まりかえってしまった。と同時に、バルクホルン大尉の顔が赤くなった…。

62話　Thinking time

基地に戻ると早速俺はグランドに向かった。と言っても誰かいるわけではない。今日の練習は各自で練習してもらうようにしたのだ。昨日は戦闘の後、皆基地に戻るとノックを俺がやったから少なくとも送球とかは一応出来るようにはなった。これだけ出来れば上出来だ。俺も今日は練習よりは設備の補強というか外野と観客席の境界線（フェンス）を設置しに来たのだ。と言ってもすぐに出来るような物ではないので今日はまず境界線上に消石灰で線を引きその線上に何本か杭を打ち込みその杭得意の間にひもを通して仮設することにした。運動会などで作るような物と同じだ。とりあえず俺はホームベースにひもを打ち付けて消石灰を外野の方に持って行った。数学のコンパスと同じ要領だ。後はひもを伸ばしたまま前に進めば勝手に円周が作れる。

「ふぅ…なんとか半分か…」

ちょうど真ん中まで来たときもう空はもうかなり紅くなっていた。早くしないと夕食まで間に合わなくなってしまう。ただこの作業は本来もう線を引く係とひもをホームベースで抑えている係が必要なのだ。早い話が二人一組でやらないとうまくいかないのだ。とそこにどこから来たかはわからないがシャーリーさんとルッキーニさんがやってきた。

「あっ、石井じゃ～ん」

「おぉ石井だ。何してるんだ?」

「あぁ二人とも…今線を引いてて」

「この白線のことか？」

「えぇ、これから杭も打ち込まなくちゃいけないんです」

と俺が言うと

「ねぇねぇシャーリー。私たちもやろうよ～」

「う～ん？、ルッキーニはこれがやりたいのか？」

「うんうん」

とルッキーニさんとシャーリーさんが言った。これは好都合だった。どうやら手伝ってくれそうだ。とりあえず俺は

「ありがとうございます。じゃあシャーリーさんがひもをホームベースで押さえながらルッキーニさんがこの先をまっすぐ引いていってください」

と言って二人に線引きを頼んだ。

二人とも楽しみながらやっているようだ。しかも見事なできだ俺以上にしっかりした円周が引けている。やっぱり一人でやるのと二人一組でやるのとでは相当な差が生まれてくるのだ。そんなことに俺は感心しながらも杭を打ち込み始めた。今回の円の半径は女性基準に合わせたのでホームベースから外野の線までの距離が６０メートルになった。本来は６０．９５メートル以上なのだが今回は初心者もいるのと円を引くときに便利なように６０メートルにした。だから円周自体は９０メートル前後だ。柵は今回１６本あるので６メ

ートルずつ位の間隔で打ち込んでいけばいいのだ。早速俺は杭を打ち始めた。

「今度は杭を打ち込んでいるのか…」

「えぇ、観客席と区別しなくてはいけないですからね」

「私たちもやりた～い」

「えっ、ルッキーニさんも杭を打ち込むのを…ですか？」

「うん！！！」

とルッキーニさんはこれもどうやらやりたいようだ。一応ハンマーは二つあったから片方をルッキーニさんに貸して反対側から打っていってもらうことにした。

「じゃあこの7本の杭を反対側から6メートル間隔で打っていってください」

「わかった。じゃあ行こうかルッキーニ」

「うん！」

そう言うとシャーリーさんとルッキーニさんは反対側の方に向かっていった。俺も作業を再開した。

30分ほどで全ての杭が打ち込み終わった。ひもを通すのみシャーリーさんとルッキーニさんは手伝ってくれたから…いやぁ、本当に大助かりだった。

「ありがとうございました。シャーリーさん、ルッキーニさん」

「いいんだよ石井」

「どういたしまして～」

と二人に俺はお礼を言った。その後荷物を持って二人と俺は話しながら基地に戻った。

再び基地に戻り、自分の部屋に戻ると俺は不意に野球のボールの台座を見た。そう、台座の上に置くべき筈のボールは今ここにはない。醇子が持っているのだ。

”また会うときにボールを台座に置けばいい”

とあのとき言ったのは紛れもなく俺だ。だがやはり主人（ボール）のいない台座はどこか寂しそうだ。近寄って改めてみるとどうやら少しほこりがかぶっていた。

”これはまずいな…綺麗に拭かないと”

と思いながら俺は台座を拭いた。元々小さいから作業はすぐに終わったが…どことなく楽しみだ、ボールがもうすぐ少しの間だけ戻ってくると言うことが…。

”いま、醇子はどう思っているのかな…”

と俺は思った。どことなく寂しい、前にも言ったが会える日がわかっているからこそ待ち遠しくてしょうがないのだ。しかしながらい

つも言っていることなのだがこういうときこそ頑張らなくてはいけないと思う。勿論醇子もそう思っているに違いないし俺は敢えてこの隊に残ったのだ。だからこそこういうときは耐えなくてはいけないと思う…。

”ここに来たときどうすればいいかな…？”

と俺は思いながらも

「石井さん、食事が出来ましたよ～」

と宮藤さんに呼び出されて

「わかった。今行くよ～」

と言いながら食堂に向かった…。

・・・

扶桑に帰ったら一緒に仲良く暮らすとも約束してくれた。でもそれはまだしばらく先になりそう。最近前線がどうも移ってきてるみたいでここも忙しくなってしまったのから…でも今度の週末はあの人と一緒に過ごせる。勿論ソフトボールの親善大会があるから…。私は今も期待と興奮を隠せない。不意に私はあのボールを見た。右端に石井醇子と左端に石井明範と書かれた野球のボールを。

”早く会いたいわ…あなた…”

と思っていると

「石井、食事の時間よ」

「ありがとうフェル」

と私は呼ばれた。私は食事に向かうことにした。

”あなた…あなたは今どんなことを思っているの…?”

と夕焼けに染まった空を眺めながら…。

63話　Rainy Day

翌日は雨だった。こういう日は基本的には非番になる…と思っていたら今日は全員での教練になった。朝食を済ませてブリーフィングルームに行くともうみんな揃っていた。俺が席に座ると

「ハイ、それじゃあ教練を始めますね」

とミーナ中佐が言い話を始めた。今日のお題は‘世界各国の地理と情勢’だそうだ。正直俺は鉄道が好きだからこれぐらいのことは聞かなくてもわかる。読者の皆様にも経験があるかもしれないが自分が理解していることを授業で行うというのは非常に退屈なものだ。現に俺はそうだった。扶桑にいたときも自分のわかる授業は大抵寝ていたりほかのことをしていた。そんなことを思いだしつつ

”ここは軍隊だからな～、真面目に聞かないとな…”

と自分に言い聞かせながらもそれを実際にするというのは非常に難しい、扶桑で培った技術はそう簡単には変えられないのだ。俺は気がついたら寝ていたようだ。

「…ですからオストマルクというのは…あら？」

ミーナ中佐は俺が寝ているのにどうやら気がついたようだ。教卓に立つ教師からは学生が何をしているかよくわかるとよく言われるがまさにその通りのようだった。

「石井さん…石井さん！」

「あっ、はい」

俺はミーナ中佐に起こされたこの辺は万国共通のようだ、国が変わるからと言って寝てる人を起こさないというわけではないようだ。ミーナ中佐は笑顔の裏に何か悪い魂胆を秘めながら俺に

「ヒスパニアとヘルウェティアの首都はどこかしら？」

と訊いてきた。俺がこれならわからないと思ったのだろう。

”石井…残念だったナ…”

とエイラさんと

”石井さん…多分怒られちゃいますよ”

と宮藤さんは俺を見ながらこう思っているように俺からは伺えた。でもそれは俺が答えられないときの場合だ。早い話が俺が質問に答えてそれが合ってさえすればいいのだ。

「ヒスパニアがマドリードでヘルウェティアがベルンですね」

と俺が答えるとミーナ中佐をはじめとする全員が俺の言動に驚いたようだ。と同時に

”これぐらいなら寝ていてもわかる”

とミーナ中佐に意思表示もすることが出来た。ミーナ中佐は引きつったように

「そっ…その通りね。よくわかっているのね石井さん…」

と言いながら教練は再開した。気がつくと俺は３０分くらい寝ていることに気がついた。

”もう眠気も無くなったし…教練を聞くか…”

と俺は思い再びノートを取り始めた。今日は隣に偶々リーネさんと宮藤さんがいたので

「二人とも…」

と俺は小声で二人を呼んだ。勿論ノートを写させてもらうためだ。

「どうかしたんですか？」

と二人は口をそろえて言った。

「ノートを写させてくれないかい？」

と俺は二人に訊いた。すると二人は

「いいですよ…。ねぇリーネちゃん」

「うん、芳佳ちゃん。石井さん…私も構いませんよ」

と二人とも快く了承してくれた。早速俺は二人にノートを借りて写し始めた。

”なるほど…国際情勢は俺が扶桑で習ったときからだいぶ変わって

いるようだな…”

と思いながら5分くらいでノートの写しは終わった。本当はまだたくさん書いてあるのだがこれぐらいで十分だ。

「ありがとう二人とも…」

と俺は小声で俺は二人にノートを返した。

「石井さん…」

「全然写してないみたいですけど…」

と二人は心配そうに俺ノートを見てきた。確かに二人に比べたら最低限のことしか書いていないから。書いている量は確かに少ない。

「大丈夫だよ…」

と俺が答えると二人もとりあえずは納得してくれた。すると二人はまたミーナ中佐の黒板を再び見始めた。俺も再び黒板を見た。すると扶桑についてであった、しかも内容は鉄道だ。これは俺が聞かないわけがない。世界的に見ても扶桑の鉄道は凄いということを再認識することが出来た。

教練が終わると俺はハンガーに向かった。

”ここのところストライカーを整備していないな…”

と教練のお終いに思ったからだ。ハンガーにはもうシャーリーさんとルッキーニさんがいた。

「石井じゃ～ん」

「よぉ石井。お前もストライカー見に来たのか？」

「えぇ…ここのところあんまり整備してなかったですし…」

「ふ～ん。で、整備って何をするんだ？」

「とりあえず蓋を外してモーターに異常がないかどうかを調べるって感じですかね…」

と俺はシャーリーさんに話した。すると例によって

「ねぇ石井。見せて見せて～」

とルッキーニさんが言ってきた。

「検査を…ですか？」

「うん。ダメ～？。石井？」」

今日は特に危険も伴わないからいいことにした。前のエイラさんとサーニャさんが見学した時ほど危険は伴わないはずだから…。

「…わかりました。いいですよ」

「本当か、ありがとう！！」

「わ～いやったー！！」

と二人も楽しみにしているようだ。

とりあえず俺は二人を案内した。と言ってもやることは変わらないまず俺はストライカーの外板を外した。すると二人は

「おぉー」

と驚いた。俺のストライカーは基本的には主電動機（モーター）と風力発電用の駆動装置とバッテリーの三つしか大きく分けて無くあとは基本的にそれらをつなげるコードが入っているだけだ。況してや俺の主電動機は吊り掛け駆動方式だから構造もかなり単純で簡素だ。その中で一つだけ特異な物がある。これは赤いスイッチで万が一ストライカーを安全に止められないような状況になった場合に使う‘電機子短絡スイッチ’だ。これは主電動機を短絡させて強力な電気ブレーキを動作させるものだ。ただこれは必然的に主電動機を破壊するため未だに使ったことがないし今後とも使わないように心がけている。

「石井…その赤いスイッチはな～に？」

とルッキーニさんがその短絡スイッチを指差しながらそう訊いてきた。

「これは電機子短絡スイッチって言います」

「でんきし…？？」

「簡単に言うと強力なブレーキを発生させるスイッチです」

「そうなんだ～」

本当に簡単に言うとこうなってしまうがとりあえずルッキーニさんが納得してくれたので良かったが今度はシャーリーさんがそのスイッチについて更に訊いてきた。

「でもどうして中に付いてるんだ？」

「えっ？」

「だってそんな中に付いていたらすぐに使えないだろう？」

「そうですね…、まぁこれは使っていいものじゃないですから」

「ん？…もしかしてそのブレーキってそんなにやばいものなのか？」

「さすが機械に詳しいことはありますねシャーリーさん」

「いやぁ…なんとなくそんな気がしてな～。ははははは」

と半ば照れ隠しに笑いながら俺にそう言い返してきた。とても喜んでいるようだ。俺はその後にこう続けた。

「このスイッチは万が一ストライカーを安全に停止できないような場合に使うものなんです。これは主電動機を破壊します。だからこれで停止した後は主電動機を修理するか取り替える必要があるんです」

「そうなのか…って事はこれを空中で使ったら…」

「大丈夫ですよ。風力発電とは別回路にも変更できますからね…仮

に風力発電を使わなくてもグライダー状態でゆっくり降下できますから…」

「そうなのか～、でも石井のストライカーは本当に凄いな」

「えっ、どこがですか？」

「私は初めてこうやって石井のストライカーの中を見たんだけどさ～やっぱり構造が全然違うなって」

「たしかにそうですね…皆さんのはエンジンですけど俺のはモーターですからね」

「うん、なかなか面白いよ」

「いえいえ、そんなことは」

と俺とシャーリーさんが話していると

「むー、シャーリーと石井ばっかしゃべっててズルいよ～」

とルッキーニさんが怒りながらそう言った。大切なシャーリーさんを俺に撮られてしまって焼きもちを妬いているのだろう。

「ごめんなさいルッキーニさん。じゃあ作業を再開しますね」

と言うとルッキーニさんもそこまでひどく怒っているわけではなかったようだ。早速俺はストライカーのモーターのチェックをした。しばらくするとまた油が少なくなっていることに気がついたので勿論注油もした。後は風力発電の方も今回は調べてみることにした。

こちらの方も特に異常はなかった。

「さて…作動テストですね」

と俺は言った。作動テストと言ってもストライカーを軽く動かすだけだ。

「おぉ、また石井のあの独特のモーターの音が聞けるのか～」

「にひひー、あの音特徴あるよね～」

と二人も楽しみにしているようだ。確かに吊り掛け駆動は‘グウォーン’という独特な音がする。ただこれは扶桑の電車では当たり前のように聞ける音なのだが…。とりあえず俺はモーターを動かしてみた。これはいいさすがに整備をした後のストライカーは調子がいいみたいだ。

作動テストを終えてストライカーを停止させた。

「いや～面白かった～。ありがと～石井」

「楽しかったよ石井。どうもありがとう」

と二人もとても喜んでくれているようだ。

「いえいえ…また機会があったら是非…」

と俺が言い返すと

「うん」

「ははは、勿論よろしく頼むな」

と二人は笑顔でそう言い返してくれた。気がつくともう時計の針は５時半を回っていた…。俺等は食事に向かった。

食堂に向かうと机がかなり伸びていることに気がついた。伸びているというか先の方が増設されているといった方が適切なのかもしれない。

「ミーナ中佐…これは？」

と俺が訊くとミーナ中佐は

「明後日からほかの隊の人も来るから早めに机を増やしておいたの」

と言った。まぁこれに関しては俺も納得がいった。

”５０４部隊はきっと俺等の隣に座るのだろう”

と俺が思っていると

「奥さんがいるもんね～」

といきなりハルトマンさんが言った。これには正直焦った。俺は思わず

「ハルトマンさん、いきなり何を言ってるんですか？」

と聞き返した。

「あれ～?。本当にそう思っていたんだ」

「えっ?!」

俺はこの時とんでもないミスを犯してしまっていたようだ。

「さっきから、ずっと隣の椅子ばっか見つめてたから何となくそう思ったんだけど…」

とハルトマンさんは言った。要するに俺が引っかかってしまったのだ。

「石井は奥さんが恋しいんだね～」

「えっ!。まぁそうなんでしょうね。自分でもよくわからないんですけど…」

「まぁもうすぐ会えるんだからいいじゃん」

「そうですよね」

と俺等が会話をしているとミーナ中佐が皆に向かって

「23日なんだけどみんなで歓迎会をやらないかしら?」

と言った。まぁ親善試合を行う位なのだからこれぐらいあってもおかしくはない。俺も特に気になったこともなく賛成した。

「石井さん」

不意にミーナ中佐は俺にそう尋ねてきた。まだ話は終わっていないようだ。

「何でしょうか…ミーナ中佐」

「今回は石井さん夫婦のお祝い会も同時にやろうと思うの」

そう、醇子が異動してしまったから出来なかったあのお祝い会だ。

「本当ですか…？」

「えぇ本当よ」

「そうですか…ありがとうございます。是非とも…」

と俺が言うと皆も俺の答えがそうであろうと思っていたのだろう。

「石井、やるじゃーん」

だとか

「よかったナ、石井」

とかっていう風にみんなから祝福の声がわき上がった。俺も本当に嬉しかった。

”醇子、楽しみにしていてね…”

と俺は思いつつ食事を終え風呂に向かった。

・・・

部屋に戻るとまだまだ俺の部屋が汚れていることに気がついた。床などは特にひどいというわけではないのだが机が問題だ。扶桑にいたときも教授の研修室は汚くて当然だったからこの環境にも慣れてしまっている。それがどうやらまずいようだ。再び俺は机を掃除することにした。

”さて…この報告書はこの辺で…この…教科書か、これはこっちと…”

こんな要領ではあったものの片付け自体は１５分くらいで終わることが出来た。

「ふぅ…片付けも終わったことだから風呂にでも行くか…」

そう呟きながら俺は風呂に向かった。風呂に向かう途中

”そういえば、醇子はまだ風呂が男女で別れたことを知らないんだよな…”

と俺は思った。どうやら今日の俺の頭は冴えているようだ。いろいろなことが頭の中に浮かんでくる。しかしどれにも必ず醇子がつきまとっている。どうやら自分の脳も心も醇子が来るのを楽しみにしているようだ。

風呂の中ではさすがに何も思い浮かばなかった。しかし外に出て降りしきる雨を観ているとまたいろいろなことが頭の中に浮かんできた。

”明日、休暇届を出して買いに行くか…”

とこんな事までも思い浮かべた。俺が部屋に戻るとすぐに消灯ラッパが鳴ったので俺も寝ることにした。部屋の明かりを消してベットに横になる前に俺はカーテンの脇から外を見た。外はまだ雨が降っていた…。

64話　For　London

起床ラッパがなる前にまた俺は起きた。時計は5時半を指している。外はと言うとかなり明るいカーテンを開けてみると太陽がもう一日の始まりを告げていた。早速俺は着替えて朝練に向かうことにした。

着替えを済ませてグランドに向かうと惨状とまではさすがに言えないが少なからず昨日の雨で泥濘（ぬかるみ）があった。このグランドの状態で野球をやると明日明後日に響いてしまう、だから今日は滑走路脇にゲージを立てて打撃練習をすることにした。

「さて…早速練習を始めるか」

俺はそう呟きながら練習を始めた。最近暑さが増してきているような気がする。8月だから仕方がないことなのかもしれないがそれでも暑い。俺は正直なところ寒さよりも暑さのほうが苦手だ。寒さというのは服をいくらか着れば凌ぐことが出来るが暑さはそうはいかない。服を脱ぐにも限界があるのだ。だから朝…しかも5時半からこの暑さとはなんだか気が重い。

”それにしても暑いな…後で朝風呂にでも行くか…”

そう思いながらも俺は練習を続けた。

30分くらいした頃だろうか、急にバルクホルン大尉が一人でやってきた。

「石井」

と大尉からは後ろから呼ばれた。最近わかったのだがこのゲージで練習していると後ろが全く見えないから名前を急に呼ばれるととても驚くのだ。例によって俺も

「あ、はい」

とビックリしながら振り向いた。

「あっ…大丈夫か?。別に驚かすつもりはなかったのだが…」

「い、いえ、大丈夫ですよ」

「そうか…それはよかった」

「大尉、どうかしたんですかこんな朝早くに?」

「あっ、それがだな…その…」

俺は何となくわかった気がする。きっと大尉も練習がしたいのだろうしかし大尉のことだ人前でやりたくないのだろう。だいたい人前で俺や大尉が練習するとハルトマンさんやシャーリーさんに何かといじられる。だからというわけではないが俺も朝練が出来るときは朝練をするようにしている。

「朝練ですね…」

「…やっぱりわかるのか!!」

「えぇ…クリスさんのことを思うと…ですよね」

「あぁ、そうなんだ」

「いいですよ、さぁ」

俺はゲージを出て大尉に譲った。

「いいのか？」

「勿論ですよ」

「ありがとう、石井」

「大尉には期待していますからね、俺も」

「何！？」

「全試合四番で打ってもらうんですから」

「そうか…それもそうだな」

そう言うと大尉は口を閉じて練習を始めた俺も後ろからじっと見ていた。最初の１セットは使い魔を発動しないで打っていたのだがそれでも当たりはよかった。普通に柵越えが出来るくらいの当たりであった。日々体を鍛えているからだと思い俺は感心した。

「石井、もう１セットいいか？」

「えぇ、勿論ですよ」

「ありがとう」

そう言うと大尉は使い魔を発動した。いよいよである、ここからが怪力の本領を発揮するところだ。

「うーおりゃー」

その時ボカッと鈍い音がした。何というかバットでゴムまりを打つような感じだ。見るとゲージに穴が空いていた。

”すごいな…これは相手にとって脅威となるな…”

俺はそんなことを思いつつ、更に大尉の練習をじっと見ていた。

１５分ほどで大尉の練習は終わったのだが使い魔を発動した状態で打たれたボールはどれもぼろぼろであった。まるでひたすらノックに使われたようなボールだった。

「悪かったな…練習の間に急に割り込んで…」

「いえ…いいんですよ。大尉の当たりを見られただけでも十分収穫でしたから」

「そうか…でどうだったんだ、私の当たりは…」

「文句ありませんね。見事な当たりだったと思います。試合でもその当たりが出来るように頑張ってください」

と言うと大尉は安心したのかほっとした顔で

「そうか、ありがとう」

と俺に言った。それからしばらくして大尉はハンガーのほうに戻っていった。俺も汗で体が冷えてしまったようだ、急いで朝風呂に向かった。

体を洗って早速俺は風呂に浸かった。いつ入ってもやはり風呂というものはいい。そんなことを思いながら風呂には入っていた。そして、風呂を上がり朝食を終えると俺はミーナ中佐に外出届を出しに向かった。

「失礼します」

「あら石井さん、どうしたの？」

「その…これを」

と言いながら俺はミーナ中佐に外出届を渡した。本来外出届は内容は公開されないがここで受理されるにはいくらかの質問が時としてある。外出目的がわからないときはよく質問を受ける。他の人はどうか知らないが俺の場合は追求が多い気がする。俺の気のせいなのだろうか。

「ロンドンね…」

「えぇ」

一応外出目的の欄には‘買い物’と書いてあったのだが買う物は勿論‘指輪’だ。さすがに野球のボールだけでは醇子も寂しいだろう。かといって俺には今余裕がそこまであるわけでもないし況してやお互いに軍人だ。守るべきところは守らなくてはいけない。決して高いものは買えないだろう、それでも俺は醇子のために買ってあげたいのだ。俺の妻なのだから…。

「買い物って書いてあるけど…何を買いに行くのかしら?」

一番訊かれたくないことを訊かれてしまった。正直どう返答すればいいか俺は困った。

「それがその…野球のボールを…」

と俺はひとまず言い訳してみた。これが俺の最初のミスだった。

「あら…でもこの間ボールは1ダース買ってきたわよね…」

「えっ!!。えぇ…でもどうやら足りなかったみたいで…」

「それは無駄遣いということじゃないのかしら?」

「いや…その…」

「もしかして私にウソをついてるの?」

こういうときの女性の洞察力は凄いと俺は思う。まさに今俺はミーナ中佐にウソをついているのだ。そんなことを思っていると更にミーナ中佐は俺に近寄ってきて

「どうなのかしらぁ？」

とまでも言ってきた。ここまで来て俺が言い訳を出来るはずがない。

「すいません…実は…」

と俺は渋々ながらも本当の目的を言おうとした。すると

「よかったわ…ちゃんと言ってくれて」

と突然ミーナ中佐は俺にそう言った。

「どういうことですか？」

「わかるわよ…奥さんの物で何かご用があるんでしょ？」

「えっ！。えぇ…まさにその通りです」

と俺が答えるとミーナ中佐は笑顔で

「気をつけていってらっしゃい。これは受理します」

と言ってくれた。俺は思わず

「ありがとうございます！！」

と言うと同時に礼をしてしまった。商談などが上手く言ったときに電話口でも礼をしてしまう企業戦士（サラリーマン）と同じようなものだ。つまり俺にとってはそれほど嬉しいことなのだ。ただ唯一違っていたのはこの後だった。

「でも…」

「でも、何ですか。ミーナ中佐？」

「私にウソをついたわよね…」

「えっ！」

なんだかとてもいやな予感がする。

「それについては後で話があるから今夜ここにいらっしゃい」

「でも…」

「わかったわね？」

俺は渋々

「はい、了解しました」

と言った。それから俺は一旦部屋に戻り学生服に着替えた後（のち）、駅に向かった。

早速俺は駅に着いた。後ろを見渡しても誰もいない。幸いなことに今日は一人で買い物に行ける。だから俺は当然の事ながら三等で行くつもりだ。

「ロンドンまで三等一枚」

と言いながら俺は待合室で列車を待った。列車の到着時間が近くならないと改札が開かないのは扶桑と同じだ。ただ列車はあと15分で来るはずだからそろそろ改札も開くだろうと俺は思っていた。すると出札口の向こう側にいる駅員の元に電話がかかってきた。

「了解しました…5分延ですね」

と言う会話が俺には聞こえてしまった。扶桑ではこういうときはすぐにアナウンスが入るのが当たり前なのだがブリタニアはと言うとアナウンスこそするものの何となく、数分の遅れは当たり前、と言いたそうな言い方だ。そこが少しだけだがムカッと来る。しかしながらきっと駅員も、迷惑をかけて申し訳ない、と思っているはずだし俺の場合はロンドンから先に乗り換えるわけでもないから特には気にしなかった。

「お客さん、次の列車少し遅れているみたいですからもう少々お待ちください」

「わかりました」

そう言うと駅員も安心したのかほっとした顔をしてまた部屋の中に戻っていった。こういうときは何となく一人でいると寂しい。思えば一人でこの駅にいるのはここに始めてきたとき以来だ。それからというもの必ず誰かと一緒に列車に乗っていた、だからブリタニアに来て一人で列車に乗るのはまだ2回目だ。幾ら鉄道の好きな俺であっても他国で列車に一人で乗るのはやはり心細いものだ。

なんてことを思っていると改札が開いた。思っていた以上に一人で何かを考えている時間は長かったようだ。早速俺は三等車に乗り

込んだ。すると結構この時間は混んでいることがわかった。もう席が空いていなかったのだ。扶桑では当たり前のことだから気にしないのだがブリタニアの客車はつり革がない。仕方がないから俺はデッキで立っていた。俺の乗った列車は5両編成で1番前の車両が二等車でそれ以外は三等車だ。三等車が多いのは万国共通だ。正直言って二等車はあまり好きではない。勿論夜行などに乗るときは二等のほうがいくらか便利だがわざわざ買い物に行くだけに二等を使うというのは何とも勿体なく思ってしまう。

「ふぅ…エイラさん達がいないのは寂しいけど…三等に乗れて気分的には楽だな。二等は堅苦しくて何となく俺には会わないな…」

と俺は呟いた。デッキの真下にはちょうど台車がある。独り言をしても車内とデッキはドアで区切られているし況してやこの‘ガタンガタン’という台車の音もあるから何にも問題ないのだ。早い話がこの場所はうるさいから独り言をしても問題ないと言うことだ…。

「お客様、切符を拝見させていただきます。」

と前の車両から幌を渡ってきた車掌が俺にそう言った。

「あっ、はいはい…」

と俺は答えながら切符を渡した。

「あの、お客様」

「はい…どうかしましたか?」

「この切符についてなんですが」

こういうとき俺は焦ってしまう。扶桑ではキセルをすると全区間の運賃の3倍を請求されるからだ。

「そっ…それがなっ、何か!?」

と俺は慌てて聞き返した。すると意外な答えが返ってきた。

「実は二等車に私たちと同じ区間の切符を買った男性の人が三等にいたらこちらに連れてきてくれと言われまして…」

俺はほっとした。どうやらキセルなどの不正乗車にでっち上げられたことではないと言うことがわかったからだ。ただ気になるのはそんなことよりも車掌の言ったことだ俺は

「そのお願いをした人たちは女性ですか?」

と訊いた。これが男性か女性かでだいぶ状況が変わってくる。もしエイラさんが乗っていたら早速俺はこの間の命令に背くことになる。仏の顔も三度とはよく言ったものだがこうなるとエイラさんもただじゃあおかないだろう。俺は車掌が男性と言ってくれることを期待した。

「えぇ、もしかしてお知り合いか何かで?」

と車掌は俺にそう言ってきた。

”あぁ、やられたな”

と思いながらも俺は

「いえ…その仕事の同僚で」

と答えた。わざわざウィッチであることを伝えなくても問題はないだろうと思ったからだ。案の定車掌も

「あぁ、そうなんですか」

と特に気にとめていなかった。

早速俺は車掌に案内されて二等車の中に入った。すると今日は二頭も少なからず席が埋まっていた。だがその目はすぐにわかった。

”あっ…エイラさん”

と俺は思った。見ると俺を半ばにらんでいるようにも見えた。

「お客様、こちらのお客様でしょうか？」

車掌は俺をエイラさん達の区画に連れて行って話しかけた。

「アァ、この人ダ。アリガトウ」

とエイラさんはそう答えた。すると車掌は

「それでは二等車の追加料金をお支払いください」

と俺に言ってきた。本当は拒否したかったのだがみんなの目線が俺をそうさせてはくれなかった。仕方なく俺は二等の運賃を払った。

「ありがとうございます。それではごゆっくり…」

と俺に言い残して二等車を去っていった。それからすぐに

「石井、ここに座レ」

とエイラさんに俺は言われた。そこはエイラさんの目の前だ。今日はエイラさんのほかにもサーニャさんと宮藤さんそしてリーネさんもいた。つまり4対1なのだ。とりあえず俺は席に座った。

「石井」

とまた俺のことをエイラさんは呼んだ。それがまるで‘プレイボール’と審判がコールしたかの如く口々にお説教が始まった。理由は‘三等に乗ったこと’と‘一人で買い物に行ったこと’だった。早速前者のことからお説教は始まった。

「石井、この間約束したヨナ…。忘れたナンテ、言わせネーゾ」

「すいません。今日は俺だけで買い物に行こうと思っていましたから。それに俺が駅に着いたときには誰もいなかったですし」

「あっ、それは私たちが石井さんが出た後にすぐに追いかけたからです。列車もギリギリの時間だったからわからなかったんですよ。」

「そうなのか…ありがとう宮藤さん」

「私を無視スンナー!!」

「あっ、すいません。エイラさん…」

この間サーンヤさんとリーネさんは俺のことをひたすら見ているだけだったのだが、さすがに可哀想と思ったのだろう、介入してきた。

「あの…エイラさん…そこまで言うと石井さんが可哀想ですよ」

「ムッ、リーネは石井の肩を持つのカ？」

「いや、そういうわけじゃなくて…ねっ芳佳ちゃん」

「え、う、うんそうだねリーネちゃん」

「お、お前ラ…」

「エイラ！！」

「ウン？。ドウシタサーニャ」

「石井さんをあんまりいじめちゃダメ」

「エ、サ、サーニャ…」

俺はエイラさん以外に

”皆さんどうもありがとう”

と目線で送った。皆もそれをどうやら受け取ってくれたようだ。

「ま、まぁ。今度から気をつけるんだゾ」

「はい、了解しました。エイラさん」

それからしばらくして列車は遂にロンドンに到着した…。

65話　Buying

俺はどうやら勘違いしていたようだ。お説教はまだ終わっていなかった。改札で切符を駅員に渡して駅を出た後もエイラさんはまだ俺にお小言をずっと言っていた。サーニャさんに止められても起こり続けるなんてよっぽどなことだ。とは言っても怒っている内容はさっきとは違って、俺が一人で買い物に行ったこと、だった。

「それにしても、石井はダメダナ～」

「何がですかエイラさん？」

「指輪のサイズを測るの二、それを頼んだ宮藤をおいていくナンテ…」

そうなのだ。随分前の話なのだが醇子がまだこの隊にいたとき実はもう指輪のサイズは測っていたのだ。宮藤さんに俺は頼んで…。

「そうですよ。石井さん…私を置いていったら測れないじゃないですか」

「そうだね、ごめんごめん。宮藤さん」

と俺等が話しているとリーネさんが

「この先の宝石店の隣に紅茶が美味しい喫茶店があるんです。帰りにみんなで寄りませんか？」

と俺等に話しかけてきた。すると

「エイラ…私…行きたい」

とサーニャさんは言った。暑いからだろうかそれとも眠いからだろうかは定かではないがどことなく声がか弱い。

「石井」

いきなりエイラさんは俺を呼んだ。

「どうしたんですか、エイラさん」

「サーニャもこう言ってるんダゾ。帰りにお茶をしないカ？」

俺も今日は暑いから休憩を入れてちょうどいいだろうと思っていたので

「わかりました…俺も構いませんよ」

と答えた。すると宮藤さんもどうやらお茶に賛成だったらしくリーネさんにそのことを伝えると

「それじゃあ、決定ですね」

とリーネさんは俺等に言った。

しばらく歩くと宝石店が見えてきた。さすがに中には俺と宮藤さんしか入らなかった。ほかの人たちは暑いから先に喫茶店に行ってるとのことだ。

「いらっしゃいませ。今日はどのようなご用件で？」
と上品そうな店員が俺等に話しかけてきた。
「あの～指輪が欲しいんですけど…」
「はい、どのような物を？」
「その、婚約指輪なんですけど…」
「かしこまりました。それではこちらの方へ…」
と愛想よく俺等を婚約指輪がたくさん入ったケースの前に連れて行ってくれた。すると
「失礼ですが…そちらのお連れの方は？」
と店員は俺に訊いてきた。
「あぁ、こちらの人に婚約者の指のサイズを測ってもらったので」
「なるほど、そういうことですか」
と俺等は軽く談笑しながら指輪を眺めた。そこまで高い物は学生でもあるし軍人でもあるから買うわけにはいかない。俺は今まで給料は殆ど使わないで貯めておいたから７０ポンドくらいで買える物にしたい。すると８０ポンドだが気に入った物を見つけた。
「店員さん、この８０ポンドのやつを試させてもらっても構いませんか？」

「かしこまりました」

「宮藤さん…頼めるかな?。」

「はい、勿論です。」

そう言うと店員さんは宮藤さんの左手の薬指に指輪をはめた。すると

「ぴったりですよ。石井さん」

「そう…よかった」

と宮藤さんと俺は喜んだ。すると店員も笑顔で俺等に話しかけてきた。

「いかがですかお客様。こちらの商品はとても純朴なものでとても人気のある物なのですよ」

どうやら人気商品のようだ。

「そうですね…これをじゃあお願いします」

「かしこまりました。誠にありがとうございます」

そう言うと店員は

「それではケースを込みで８０ポンドでございます」

と俺等に言ってきた。物は試しと俺は思い値切ってみることにした。

「もう少し安くなりませんか？」

そう言うと店員は少し考えてから

「う～ん、そうですね…それでは７５ポンドで…」

「出来れば７０ポンドのして欲しいのですけど」

そう言うと店員は

「少々お待ちください。確認を取って参ります」

と言いながら店の奥の方に言ってしまった。ここには今宮藤さんと俺しかいない。

「石井さん凄いですね。ブリタニアにまで来て値切りをするなんて」

「勿論だよ。扶桑で出来ることなんだからブリタニアでもきっと出来ると思ってね」

と俺が言うと宮藤さんは笑いながら

「それもそうですね」

と俺に言い返してきた。すると店員も店の奥から戻ってきて

「お客様、今回は特別に７０ポンドでいいと店長が仰ってくれました」

と笑顔で俺等にそう言ってくれた。

「そうですか…どうもありがとうございます」

俺は早速その場で７０ポンドを支払い指輪を受け取った。そして店を出ると俺等も喫茶店に向かった。そこで飲んだ紅茶もとても美味しかった。お茶を済ませると俺等はまたロンドンから列車で帰った。ロンドンでも切符を俺は買うときに行き先を伝えた後思わず

「三等で…」

と言ってしまったがすぐに後ろから視線とつねりがきたので

「いや、やっぱり二等で」

と俺は言った。それから列車に乗り、俺等は帰った。基地に戻ると俺は今日買った婚約指輪を俺の机の中に入れておいた。ここは鍵がかけられるから醇子でも開けることは出来ないのだ。

「ふぅ…これヨシと…」

と鍵を閉めると俺はそう呟いた。日はもうかなり紅くなっていた。いよいよ明日は醇子が来るのだ。そう思いながら食堂に向かった。

食事を済ませると俺はゲージに向かった。これから練習をしようと思っているのだ、明日は全員でほかの隊が車での間ひたすらバッティング練習をしようと思っているのだ。そうすると俺はコーチだから基本的には練習が出来ない。だから今やろうと思ったのだ。

”ジャガイモ二つだとさすがに明日まで持たないかな…。”

そう、今日の夕食はバルクホルン大尉が作ってくれたのだ。勿論蒸かしイモだけだ。ジャガイモが決して嫌いなわけではないのだがひたすらそれだけを食べるというのは結構苦労するものだ。今夜は練習しようと決めていたから少なめに食べておいた。

「さてさて…始めるか」

そう俺は呟きながら練習を始めた。ここのところ絶好調だ。ボールの方が俺のバットに来てくれているような錯覚に陥ってしまうほどボールがバットによく当たる。しかも殆どの当たりが柵越えまたはフェンス直撃ぐらいの鋭い打球だから尚更だ。

”うん、いい感じだ…”

と俺は思いながら練習を続けた。

1時間くらい練習をして俺は引き上げることにした。オーバーワークは禁物だ。

”そういえば、何か忘れているような”

と思いながら俺は部屋に戻った。すると俺の部屋の前にミーナ中佐がいた。笑顔ながらいつものようにとてつもない恐怖を感じる。俺は動けなくなってしまった。

「石井さん」

「はい！。どうしましたかミーナ中佐」

「あなたぁ…これで2回目よね？」

「えっ！？」

「私の呼び出しに背いたの…」

確かにその通りだった。前には部屋に中から鍵をかけて安心していたのだが結果的にはその後大変な目にあった。1度目でそう言う目に遭ったのだから2度目となると更に怖ろしい。

「そ、そうですか？。ミーナ中佐」

だんだんとミーナ中佐は俺に近寄ってくる。

「そうやって、また誤魔化すつもりなの？」

終始ミーナ中佐は笑顔なのだが目だけが笑っていない。これは非常にまずい状況だ。前にルッキーニさんがシャーリーさんのストライカーを壊したときとよく似たような顔だ。逃げようにも逃げられない。これほど自分の身に危険を感じたことはなかった。

「すいません。その…今日は忙しかったものでつい…。」

と正直に俺は謝った。

「そう…。なら…」

許してくれるという言葉を俺は期待した。だがそれは無かった。

「今日はお説教だけにしておくわね」

「えっ！？」

「あら、いやならいいのよ…勿論…」

「わかりました。ただ先に風呂に行きたいのですが…」

俺はさっき練習に戻ってきて汗びっしょりなのだ。こんな格好じゃミーナ中佐にも失礼だし俺自身も風邪を引いてしまう。さすがにミーナ中佐もその辺は考慮してくれた。

「それじゃあ３０分後に私の部屋にね」

「はい！」

「忘れたりしたらどうなるか…言わなくてもわかってるわよね」

「えっ…えぇ。勿論ですよ」

「そう…よかったわ」

そう言うとミーナ中佐は俺の目の前から去っていった。それから俺は風呂に入った後ミーナ中佐のお説教を受けることになった。結局お説教は２時間近く続いた。勿論坂本さんもその場にはいた。また俺はベッドに入る時間が１２時を回ってしまった。だが不意に眠りに就くときに

”今日はもう醇子が来る日なのか…”

と思うと妙に疲れが無くなった気がした。俺は眠りに就いた。これ

から自分の妻に会えることを楽しみにしながら。そして、自分が買った指輪は月明かりに照らされて、美しい光を放っていた…。

66話　Uniform

目が覚めた。まだ朝の5時半だ。人間の睡眠の周期は1時間半であると扶桑にいたときに聞いたことがある、だから調子は抜群にいい。

”さて…もうすぐ来るのか…”

と思いながらも俺はグランドに向かった。グランドをトンボで均すからである。勿論この後練習もするのだが均されていないグランドでは足を取られやすいし思わぬケガや事故につながる恐れもあるからだ。作業は30分くらいで終わった。

「あら石井さん、おはよう」

整備を終えトンボをグランドの隅に寄せていると後ろからミーナ中佐がそう俺のことを呼んできた。昨日のお説教などもあるから正直なところ非常に怖い。

”ミーナ中佐だ…”

俺は恐怖心に耐えながらも

「おはようございます。ミーナ中佐」

と答えた。

「石井さん」

と俺が答えるとまたミーナ中佐は俺のことを呼んだ。

「どうかしたんですか？」

「いよいよ明日ね…」

「そうなりましたね」

「今日はどんな練習をするの？」

「そうですね…ミーナ中佐を含めて皆さんにはバッティングを中心に行ってもらおうと…」

その後まだ俺は言いたいことがあったのだがミーナ中佐は俺の話を遮った。

「違うわ」

「えっ？！」

「石井さんはどうするのって聞いているの」

俺は返答に困った。基本的に俺は練習の時はコーチングが殆どだから俺自身の練習は早朝や夜などの自主練のみなのだ。

「どうするの…石井さん」

とミーナ中佐は俺が返答を考えていると更に念押ししてきた。慌てて俺も返答した。

「そっ、そうですね。基本的には皆さんのコーチを…」

「ダメよ！」

「えっ！。でも俺はコーチですから」

「コーチであるあなたも監督である私も一応プレイヤーなのよ。だからちゃんと練習しなくちゃダメじゃない。監督の私だってみんなに混じって練習しているんだから」

どうやらミーナ中佐としては俺だけいつもコーチばっかりしていないでたまには一緒に練習をしようということらしい。

「ただ、俺がいないとコーチは誰が？」

「石井さん、その心配はもう必要ないわ」

「えっ！？」

足音がして後ろを振り向くとそこには隊の人全員がいた。

「石井さん」

とサーニャさんが代表して俺を呼んだ、そしてこう続けた。

「私たちならもう大丈夫よ。ここまで急ピッチで石井さんにはいろいろなことを教わったけれど、みんな自分が何をどうすべきかはもうわかっているわ。だから石井さんにも自分の練習をして欲しいの」

俺は嬉しかった。コーチが必要なくなった理由が俺の指導力不足だ

からではなく皆が野球を十分に理解してくれたからだ。確かにもう俺のコーチとしての役目はどうやら終わったようだ。だがこれからはまだ大切な試合がある俺も選手として頑張ろうと思う。

「ありがとうございます。皆さん。お互いに頑張りましょう」

と俺は笑顔で言った。すると皆も笑いながら

「ハイ!!」

と言ってくれた。ひとまず基地に戻り朝食を終えると俺等は練習を始めた。

今日は予定通りバッティングの練習だ。明日に試合も控えているからバッティングにした。

「石井さん」

「どうかしましたかサーニャさん?」

「その…石井さんはいつ打つの?」

俺も今日でコーチの役目は終わったから普通の選手と何ら変わらない。ただ一応今までコーチとしてやっていた以上わからないところや難しいところは俺に訊いてくるのだ。練習前のキャッチボールの時もそうだった。ルッキーニさんがどうやったらうまくボールを捕球(キャッチ)出来るのかと訊いてきた。見てみるとルッキーニさんはグラブを横に寝かせて取っていたのだ。だから俺は、グローブは縦に使うもの、と教えた。すると見違えるかのようにうまく取れるようになった。そういうところも考慮すると俺は一番最後に打つのが普通であ

る。

「そうですね…俺は一番最後に打とうかと…」

するとサーニャさんはエイラさんを呼び何かを話していた。勿論俺に聞こえないようにだ。話が終わるとエイラさんは俺に向かって

「石井、今からラ打ってくレ」

と言ってきた。

「え、いいんですか？」

と俺は聞き返した。すると

「いいのよ…みんなも石井さんの打つところ見てみたいと思うの。多分みんなの守備力も上がると思うわ」

とサーニャさんが俺にそう言ってきた。扶桑でも同じなのだがバッティング練習中打たない人は基本的には守備に就く。だから俺が打てば皆も盛り上がるのではとサーニャさんは思ったのだろう。せっかく先に打たせてくれるというのだから拒否する理由はどこにもない。

「ありがとうございます。それでは…」

そう言いながら俺はホームベースの方に向かった。するとちょうどよくハルトマンさんがバッティングを終えたところであった。

「おっ、次は石井が打つのか～。もう秘密基地は壊すなよ～」

「もう、やめてくださいよ。ハルトマンさん」

俺はハルトマンさんと軽くそのような会話をすると打席に立った。
今日の打撃投手はシャーリーさんだ。俺が構えると

「お～いみんな～。石井は飛ばすから下がれ～」

とほかの野手に大声で言った。この時俺は扶桑の大学野球にいた時を思い出した。去年の今頃もこんな感じで野球を帝大でしていたのだ。

・・・

「それじゃあ行くぞ、石井」

と俺に言ってきた。シャーリーさんが投手をやっているなら捕手はもう誰か言わなくてもわかるだろう。

「石井～たくさん打ってよ。シャーリーどんどん投げてくるから」

「わかりました。ありがとう、ルッキーニさん」

すると言ったとおり早速第一球目を投げてきた。見送ろうかとも思ったけど軽く流して打ってみた。すると

「う～ん、石井。ホームラン打ってよ～」

とキャッチャーから要望が来た。ほかの皆もどうやらそれを期待しているようだ。

「ごめんなさい。最初だったもので…次は行きますよ」

と言いながら俺は再び構えた。今度こそ俺の当たりは抜群のホームランだった。それから俺は１０球ずつ左右で打ったがどちらでも半分以上が柵越えとなった。

練習を終えて皆が引き上げると俺は一人でグランドを整備し始めた。皆はどうやら風呂に向かったようだ。

”今日の練習はとても気分がよかったな…俺も早く整備したら風呂に向かおう”

そう思いながら再び俺は整備を再開した。

それから…大体1時間後、整備を終え早速俺は風呂に向かった。
隣はもう既に盛り上がっているようだ。ほかの隊の人たちが来たらきっと隣は騒がしくなるのだろうがこちらは俺だけだ。するといつものように隣から俺を呼ぶ声がした。

「お～い石井、いるのか～？」

「は～い、いますよ～シャーリーさん」

「そっか～」

と今日はなにやら会話が少なめだ。何でかはよくわからないがきっとこれから醇子に俺が会うからなのであろう…。

風呂を出ると目の前にはまたミーナ中佐がいた。

「石井さん」

”また何かお説教かな…？”

「どうかしたんですか？。ミーナ中佐」

「ちょっと今から私の部屋まで来てくれるかしら？」

俺はいやな予感しかしなかった。とりあえず俺はミーナ中佐の後を追いながら中佐室に向かった。

中佐室に入るとそこには大きな箱が2つほどあった。その時俺は思い出した。この間ミーナ中佐の許可を得てユニホームを作っても

らったのだ。

”石井さんと同じものがいい…”

それが皆の結論だった。勿論俺と同じ物とは東京帝国大学野球部のユニホームだ。最初は俺の力ではどうにもならないから諦めてくれていったのだが皆の意見は変わらなかった。ダメ元で扶桑の教授に頼んでみたところ

・・・

「当たり前じゃないですか！」

・・・

”すいません、サーニャさん。お先に…”

と思いながら俺は見た。すると‘Саня．В．Литвяк’としっかりキリル文字で書かれていた。こういう扶桑の技術力はすばらしいとつくづく感心した。

それぞれのメンバーのユニホームに分けていると。二つほどユニホームが余った。

「あれ？」

「どうかしたのかしら？。石井さん」

ユニホームの仕分け作業を手伝ってくれていたミーナ中佐も作業を一旦中断して俺の方に寄ってきた。見ると皆のと全く同じユニホームのようだ。裏をひっくり返してみると比較的大きい方のユニホームには‘Ａ．ＩＳＨＩＩ’と書かれていた。間違いなく俺のだろう…とするともうだいぶ予想は付いていたのだが‘Ｊ．ＩＳＨＩＩ’ともう一つの小さいユニホームには書かれていた。どうやら俺等の話は扶桑にも多かれ少なかれ伝わっているようだ。更にその下、つまり俺のユニホームが入っていた箱の底の部分には小さな置き手紙が添えられていた。名前は…大学の教授からだった。その一部始終を見ていたミーナ中佐は俺に

「石井さん…その手紙読んでもらえるかしら？」

と言ってきた。勿論俺もそうするつもりだった。

「わかりました」

と俺は言うと一旦一呼吸置いてその手紙を読み始めた。

「残暑厳しき折ですがいかがお過ごしでしょうか…なんてな。こんな堅苦しい挨拶は最初だけにしてもらうぞ。元気か？。こっちは私、そしてお前の友人みんな元気だ。最近お前の活躍を新聞やラジオでよく聞くよ。頑張っているみたいだな。私たちもとても嬉しいし誇りに思うぞ。今回のユニホームは大学とスポーツ店に頼んで特別に名前入りで作ってもらった。是非とも大切に使ってくれと他の隊の人にも伝えておいてくれ。そろそろ私も時間のようだ。これから北海道に学生達と研究で行かなくちゃ行けないんだ。それじゃあまた今度会うときを楽しみにしているぞ。追伸、とりあえず扶桑に戻ってきたら必ず大学には来い。お前の奥さんも連れてな…」

との内容だった。最後の部分の‘奥さんも連れてな…’と言うところは少し驚いてしまったがそれでもとても嬉しかった。隣で聞いていたミーナ中佐も

「あらあら石井さん。帰ったら忙しくなるわね…」

と笑いながら俺のことを応援してくれていた。

皆が風呂を上がる頃を見計らってミーナ中佐は全員をミーティングルームに呼んだ。

「…さて、それじゃあ石井さんからユニホームを受け取ってくださいね」

と言うと皆は俺のところにやってきた。みんな自分の名前の刺繍が入っているところをとても気に入ってくれたようだった。

「わぁ…私の名前はちゃんとキリル文字になってる…」

とサーニャさんもとても喜んでいた。すると後ろからエイラさんが

「石井、アリガトナ。サーニャを喜ばせてくれテ…」

と言ってきた。

「いいんですよエイラさん。その代わり試合の方も頑張ってくださいね」

「勿論なんダナ」

俺とエイラさんがそんな会話をしていると宮藤さんとリーネさんそしてサーニャさんが俺のところに寄ってきた。

「石井さん」

「どうしたんだ、みんなで来て…。もしかして何か悪いところでもあった?」

「いえ…そういうことじゃなくて」

「ん?。どうかしたの宮藤さん?」

「石井さんのユニホームどうなのか一緒に訊こうって…さっき芳佳ちゃんと決めたんです」

「俺の?」

「石井さん…石井さんのユニホームも見せてくれないかしら?」

「石井、私からも頼ム。サーニャもこう言ってるんダ。見せてくれないカ?」

別に気にすることもなかったので俺は皆にユニホームを見せることにした。俺のユニホームは背番号３６だ。昔…と言っても帝大時代からだが俺はこの背番号でなぜか知らないがずっとプレーしている。それを向こうの大学の教授も知っていたのだろう。

「みんなと同じなのね…。なんだか私たちもこの大学生になったみたいだわ。ねぇエイラ」

「ソッ、ソウダナ。私たちは大学に入ってないからナ…」

「大丈夫ですよ。いつでも勉強する気があれば入れます」

「そうなんだけどナ…」

とみんなで談笑していると。ルッキーニさんが

「あっ、もう一つ中に入ってるよ!」

と俺の妻のユニホームを見つけた。

”いけない!!。さっき隠すのを忘れてた…”

そう俺が思ったときはもう手遅れだった。

「あぁ～、Ｊ．ＩＳＨＩＩ，って書いてある～」

とハルトマンさんが大声で言った。すると案の定シャーリーさんからも

「石井～、どさくさに紛れてお前も結構やるな～」

と俺のことをいじってきた。

「違うんですよ～、これは向こうの教授のご好意で…」

なんて俺が言ったところで、ただの言い訳にしか他の隊の人には聞こえていなかったようだった…。

67話　Meeting　Again

ユニホームを配り終わると他の人たちは皆自室なり元いた場所なりに去っていった。自分の名前入りユニホームをもらいみんな大喜びしながら…。俺もとりあえず部屋に戻った。部屋は少なくとも汚くはなっていない。何となく空気がこもっているような機がしたので俺は換気をすることにした。

ここは海の目の前。だから常時海風が吹いているからすぐに換気が出来るのだ。

”ここはこういうときはとても便利だな”

するとドアをトントンと叩きながらミーナ中佐が入ってきた。

「石井さん。もうあと３０分くらいで奥さん達も５０２の方々も到着するみたいなの」

「そうですか…わかりました。それでは先に下に行っています」

「そう、わかったわ」

俺は嬉しくてしょうがなかった。もうすぐ醇子に会えるのだから…。

とりあえず俺はいつも通りゲージを設営してバッティングを始めた。今朝やった練習は‘最後の全体練習’だった。要は‘自主練’はまだ終わっていない。と言うか明日の朝も俺は自主練をしようと思っている。

”さて…それじゃあ始めるか…”

そう俺は思いながら練習を始めた。やはり醇子に会えるという力は大きいのだろう、ボールがいつもにましてバットに当たると鋭く跳ね返っていく。まるでピンポン球のようだ。思えばここまで誰かが来るのを楽しみにしたと言う思い出は扶桑だと祖母が俺の家に来るとき以来かもしれない。

こういうときの30分というのは非常に長く感じるのが普通なのだが俺の場合はそういうわけでもなかった。気がつくとミーナ中佐が言っていた時間まであと5分ぐらいしかない。

”さて…バットを…ん!?”

俺は自分の手を見てぞっとした。バットが真っ赤なのだ。両手からもほんの少しなのだが出血していた。きっと少し血が流れただけでも手で握っているから気づかないうちにバットのグリップ全体を赤く血が染めてしまったのだろう。ちょうどよくそこに宮藤さんとリーネさんがやってきた。

「宮藤さん…ちょっといいかな?」

「はい。どうかしたんですか?。」

俺が呼ぶと二人は来た。どうかしたのかと言う顔つきだ。

「どうかしたんですか?。石井さん」

「ちょっと手をね…」

と言って俺は宮藤さんに手を見せた。すると

「石井さん…幾らもうすぐ奥さんに会えるからって力入れすぎですよ～」

と言いながらも俺の手を魔法ですぐに治してくれた。

「ありがとう…。宮藤さん」

「いいんですよ。そんなことよりも石井さん。着替えないんですか？」

俺はどうやらすっかり忘れていたようだ。慌てて宮藤さんに

「ありがとう!!。教えてくれて…」

と俺は言うとすぐに自室に戻って学生服に着替えた。勿論正装だから学帽もかぶって。

「これでよし…と。」

そう言うと俺はすぐに下の滑走路に戻った。

「遅いゾ石井。どうしたんダ？」

「いや…その着替えるのが遅れてしまって…」

俺は息を切らしながらもエイラさんにそう伝えた。するとすぐに飛行機のエンジン音が聞こえたと思ったらすぐに3機の輸送機が滑走路に降り立った。

「変ねぇ…2機の筈なんだけど…」

「あぁそうだな」

と坂本さんとミーナ中佐は話していた。確かに二つの隊が来るのだから単純に考えても2機しか必要ないはずだ。とりあえずその3機は俺等の目の前にちょうど止まった。最初に降り立った人を見てミーナ中佐、バルクホルン大尉、ハルトマンさんのカールスラント組はとても驚いていた。

「マルセイユ!!。どうしてここに?」

ハルトマンさんは驚きながらもそう訊いた。なんと俺の目の前にいるのが‘アフリカの星’と呼ばれるハンナ・ユスティーナ・マルセイユ大尉なのだ。

「一位を決めるのに私たちを入れないのはおかしくないか?」

どうやら俺等のこの大会を聞きつけてはるばるアフリカからやってきたようだ。するとマルセイユ大尉は俺を見て

「お前が石井というのか」

と言った。

「えぇそうですけど」

「私は是非とも勝負がしたくて来た」

「はい？」

するとハルトマンさんが俺の耳元で

「マルセイユはすっごく負けず嫌いなんだ」

と囁いた。なるほど俺が野球で活躍しているのを見て少し悔しく思ったのだろう。前ハルトマンさんから聞いた話だとカールスラントでハルトマンさん達がソフトボールをやっていたときには必ずマルセイユ大尉は2試合に1本くらいはホームランを打っていたそうだ。だから今回も俺に勝つがためにやってきたようだ。

「オイ！。聞いているのか！」

「えっ…えぇ。ま、まぁ、お互いに頑張りましょう」

「あぁ、よろしくな！」

そう言うとマルセイユさん達アフリカ組はミーナ中佐の方に向かった。気がつくと502部隊の方々もミーナ中佐の方に向かっていた。となると残りは醇子のいる504部隊だけなのだが…

”石井大尉、後ろから行っちゃいなよ！”

”シャーリーさん、でも、大丈夫かしらね？”

”大丈夫だよ。石井は大尉が来るのをずっと楽しみにしてたんだからさ”

”そう…わかったわ”

「あなた！！」

「ん？」

慌てて後ろを振り返ると、いきなり後ろから飛びつかれてとても俺は驚いた。飛びついてきたのは紛れもなく醇子だった。

「いきなり驚くじゃないか～」

「くすっ…あなたの言葉が聞けて嬉しいわ」

「会えるのを楽しみに待っていたよ」

醇子はもう泣きそうなくらい喜んでいる。

「私もよ…あなたに会えるのをずっと待っていたわ。」

そう言うと醇子は俺の胸に顔をうずめた。俺はとても嬉しかった…。

早速俺等はそれぞれの部屋に戻っていった。勿論他の隊の人は2人1組くらいでの相部屋だったのだが俺と醇子はいつも通り俺等の部屋だった。

「長旅ご苦労様だったねぇ」

「えぇ、さすがにロマーニャからここは遠いわね。でもあなたに会えたから疲れなんて吹き飛んじゃったわ」

「そうか…ありがとう」

そう言うと醇子は

「会わせたい人がいるのだけどいいかしら？」

と不意に俺にそう言ってきた。

「あぁ…勿論いいよ」

そう言うと醇子は

「ありがとう。あなた」

といいながら部屋を出て行った。一体誰を連れてくるのだろうか。

5分くらいすると醇子は俺の部屋に戻ってきた。見ると後ろの方には三人の女性がいた。見るとどの人もズボンが赤い。

「紹介するわ。左からルチアナ・マッツェイ少尉、フェルナンディア・マルヴェッツィ中尉、マルチナ・クレスピ曹長よ。‘ロマーニャの赤ズボン隊’って呼ばれているの」

その愛称を聞いて何となく俺もわかった。この‘赤ズボン隊’と言う言葉は少なからず俺も耳にしたことがあったからだ。そんなことを俺が思っていると

「三人とも、自己紹介をお願いできるかしら？」

と醇子はその三人に向かってそう言った。すると三人もそれに従い俺に自己紹介を始めた。

「初めまして。私はロマーニャ空軍少尉のルチアナ・マッツェイです。石井大尉にはいつもお世話になっています。よろしくお願いします」

「私はフェルナンディア・マルヴェッツイ。ロマーニャ空軍中尉よ。みんなから‘フェル’って呼ばれているの。以後よろしく！！」

「ボクはマルチナ・クレスピ。ロマーニャ空軍曹長。よろしくね！！」

どうやらこの隊はルチアナ少尉が寡黙でフェルナンディア中尉とルチアナ曹長が元気というか明るいというか騒がしいようだ。と、そんなことを思いつつも俺も自己紹介をした。

「初めまして。大日本扶桑皇国海軍准尉の石井明範です。よろしくお願いします。一応言っておくと石井大尉の夫です」

「あらいやだわ、あなた。大尉だなんて…いつも通り呼んでくれればいいのに」

と醇子は俺にそう言ってきた。

「そんなこと言われても…一応公式の場なんだし」

「そんなに堅苦しくしなくてもいいのよ」

これを見ている他の三人には面白かったのだろう。皆クスクスと笑っていた。

俺は改めて醇子に

「それで…他に理由があったんじゃないかい？」

と訊いた。すると

「あっ、そうだったわね。あなた…いつもの練習を今日はしないの？」

と再び俺に醇子はそう訊いてきた。

「自主練のこと？」

「うん。この三人、あなたの練習が見てみたいんだって」

そう訊いて俺は不思議に思った。とりあえず

「そうなんですか皆さん？」

と俺は三人に向かってそう訊いた。

「はい。是非ともお願いできないでしょうか？」

「准尉～。フェルは練習をとても見てみたいってロマーニャを飛び立ったときからずっと言ってたんだよ～」

「ちょっ、ちょっとマルチナ何を言ってるのよ！？」

見てみるとフェルナンディアさんは顔を赤くしながら照れている。もしかして俺のファンなのかもしれない…考えすぎだろうか。とこ

の時俺は思っていた。すると顔を赤くしながらもフェルナンディア中尉は俺に向かって

「とっ、ともかくお願いできない？」

と言ってきた。本当は見せたくはなかったのだ。幾ら他の隊の人で醇子の部下であるとはいえ。敵（ライバル）であることには変わりない。ここで俺の練習を見せると俺の実力が見抜かれてしまう。だが

「あなた…お願いできないかしら…」

と醇子に顔を近づけられてそうお願いされたらなんだか拒否した俺の方が悪者扱いされてしまう。仕方がないから俺は

「わかりました。それじゃあ今夜ハンガーの脇にいらしてください」

と言った。すると三人は

「ありがとうございます」

「ありがとう！！。石井」

「石井、ありがとう！！」

と口々に俺にお礼を言ってきたし醇子も

「ありがとう…あなた。私も行くわね」

と言ってきた。

”これでよかったんだろうな…”

と俺が思っていると不意に

「あの～、そういえば…」

とルチアナ少尉は言った。すると

「どうかしたのルチアナ？」

と醇子は少尉に聞き返した。すると

「石井准尉は今何歳なのですか？」

と俺に向かって聞き返してきた。

「１８歳ですけど…どうかしたんですか？」

「えっ、それじゃあどうして今大学院生なんですか？」

と俺が答えると少尉は驚いたような顔をしてそう言ってきた。すると

「ごめんなさい…あなた。あなたのほうからみんなに言ってもらった方がいいかなって思って黙っていたのよ」

と醇子が俺に耳元でそう囁いた。つまりこれは俺が説明しろと言うことだ。だから俺はそうすることにした。

「俺は飛び級で進学したんです。１５歳で東京帝国大学に進学して今年大学を卒業してこの間大学院に進学が決まりました」

そう言うと少尉を含め他の三人全員はとても驚いているような顔をした。まぁ当然のことと言えば当然なのだろう。いきなり‘飛び級で大学に進学した’なんて言われたら驚かない人なんていないだろう。

「すごいね…本当にそんな人がいるなんて…ボクは今も信じられないよ」

「本当ね。こんな人が大尉の夫だなんて…」

「…」

三人とも口々に驚いていることがわかるような発言をしていた。少尉に至っては口が開いたままで何も言えなかった。すると醇子が

「あらあら。まだまだそれ以外にもたくさん言ってないことはあるのよ…」

と三人に向かって笑顔でそう言った。なんだかいやな予感がする。

「プロポーズの時なんてね…」

次に醇子が発した言葉はそれだった俺は思わず。

「ちょっ、ちょっとやめてくれよ!!!。恥ずかしいじゃないか」

と俺は言い返したしかしその時はもう遅かった。

「何なんですか〜知りたいです〜」

「私も私も。秘密はよくないわ！」

「ボクもそう思うな！！」

と‘赤ズボン隊’の三人も醇子に同意したようだ。俺は思わず部屋から逃げようとしたのだが

「あなた…出て行ったらどうなるかわかってるわよね？」

と醇子が俺に笑顔でそう囁いたから動けなかった。この後俺は消防車が必要なくらい顔が赤くなってしまった…。

俺はもう恥ずかしくてしょうがなかった。醇子が俺がプロポーズした時を‘赤ズボン隊’の三人に事細かに説明しているのだ。しかも俺はここから逃げられないからずっとそれを聞かされている。

「…だから嬉しかったの。とってもね…」

「もう醇子。それくらいにしてくれよ～。恥ずかしいじゃないか～」

「ダメよ。せっかくなんだから…ねっみんな？」

そう言うと赤ズボン隊の人たちも

「はい。是非とも参考に…」

「これからが面白いところなんだから…」

「ボクももっと聞きたい」

といった感じである。だから俺の意見が通るはずもない。ふと俺が時計の針を見るともう6時になろうとしていた。もうそろそろ食事の時間だ。俺はこれをいいことに

「そろそろ食事じゃないか？」

と四人に告げた。するとそこに丁度よく

「食事の用意が出来ましたよ…」

と宮藤さんが伝えに来てくれた。俺は安心した。これでこの話の続きを淳子が言うこともないと思ったからだ。食後は俺の練習を見に来ると言っているし。別にプロポーズの話をされるのがイヤだって訳じゃあないんだけれども俺が一緒に聞かなくちゃいけないというのが大変なのだ。醇子は兵器なのかもしれないが俺が基本的に告白しているから俺にとっては非常に恥ずかしいのだ。

そんなことを俺が思っていると赤ズボン隊の三人は食堂の方にもう向かっていた。部屋に残されたのは俺と醇子だけだ。すると醇子はそれを見計らったのか俺に話しかけてきた。

「あなた」

「どうかしたのか醇子？」

「久しぶりね、こうして二人でこの部屋にいるのも…」

「そうだね。こういうの夫婦水入らずって言うのかな…」

「あら、あなたが私に質問するなんて…ちょっと意外だわ」

「はは、そういうときもあるさ…」

「ふふ…それもそうね」

「そろそろ行こうか。食堂に」

「えぇ、そうしましょうかしら。宮藤さん達も心配するし…」

そう醇子が言うと俺等は立ち上がって食堂に向かった。向かう途中に俺は醇子にお願いを頼んでみた。

「なぁ醇子」

「どうしたのあなた?」

「その…食事の時なんだけど…」

「あーんをしないで欲しいとかっていうのはダメよ」

「えっ!!。わかってたのか?」

「勿論よ、あなたのことはお見通しよ…ふふ。もぅ、新婚なんだからいちゃいちゃしてても大丈夫なのよ」

「でも…他の隊の人もいるし…」

「大丈夫よ」

「でも」

と俺が逆らおうとするとお決まりのように醇子は

「上官の…？」

と俺に言ってきた。久しぶりの醇子のその言葉に懐かしさを感じながらも俺はそれと同時に残念な気持ちにもなった。とりあえず

「わかりました…。大尉」

と俺は言い返した。すると

「よろしい…ふふ」

と醇子は笑みを浮かべながら俺にそう言ってきた。

”これがかかあ天下っていうのかな…”

なんてことを俺は思い浮かべながら食堂に醇子と向かった…

・・・

俺はまだ躊躇っていた。許して欲しい、５０１の人だけならまだしも、５０２，５０４の部隊に加えてアフリカの人達までいる中で‘あ～ん’だなんて、無理がありすぎる。

「ダメよ。折角また会えたんだもの、これも楽しみにしてきたのよ私」

「えぇぇ…そこをなんとか」

「あなた、往生際が悪いわよ。それっ！」

「んん！！」

強引に醇子に食べさせられた。確かに…美味しいし、醇子に食べさせてもらえるなんて嬉しい、だけど…

”ねぇねぇシャーリー、久しぶりに見えたね”

”あぁ、石井もたじたじだなぁ”

「エイラ、私にもあれ…お願い」

「ナ、ナンダッテ！！」

恥ずかしかった。

・・・

今日の夕食はとても大人数で食べた気がする。まぁ元々3隊の筈がマルセイユ大尉のいるアフリカ部隊まで来てしまって4隊で同じところで食事をするのだから当たり前と言えば当たり前だ。坂本さんは

「食事は大人数の方がいいな。はっはっは」

といつも通りでいたが俺はそういうわけにはいかなかった。醇子はいつも通り俺と食事をした。前いたときならまだ10人前後だから良かったものの今日明日は男性が俺だけで後40人くらいは皆女性だ。ただでさえ俺は肩身が狭いのに醇子が余計に俺を恥ずかしい思いにさせるのだからゆっくりのんびりとなんて食事が出来るわけがなかった。

とりあえず俺は食べ終わるとすぐにハンガーに向かった。妻に頼まれたから自主練をすることにしたのだ。早速ゲージを設営して俺は練習を始めた。

”しばらくすれば醇子達も来るだろう…”

と思いながら。すると

「あら、501（ここ）のウィッチさんは練習熱心なのね…」

と聞き慣れない声がした。振り返ってみてみるとそこにはゴーグルを頭にかけた扶桑陸軍のと思われる軍服を着た女性がいた。俺はその人の名前を知らなかった。

「あの…どちら様でしょうか？」

と俺は聞き返した。すると

「あなた…遅くなってごめんなさい」

と醇子が例の赤ズボン隊を連れてやってきた。するとその扶桑陸軍の女性は

「あら竹井じゃない！」

とその女性は言った。どうやら醇子が結婚したことをまだ知らないようだ。すると醇子も

「あっ加東少佐。お久しぶりです」

と挨拶をした。聞く限りだとこの人は加東少佐という人だそうだ。俺がそう思っていると醇子が

「この人は加東圭子少佐よ。今はアフリカで隊の指揮をなさっているの。もうあがりを迎えられているから飛べないんだけどね」

と言った。すると加東少佐も

「初めまして。私は今紹介があったとおり加東圭子、扶桑皇国陸軍少佐よ。今はアフリカ派遣独立飛行中隊の隊長というか指揮官になっているわ。よろしくね」

と自己紹介をしてきた。俺も勿論自己紹介をした。

「初めまして。俺は扶桑皇国海軍准尉の石井明範です。よろしくお

願いします」

と俺が言うと醇子は更に

「彼が私の夫なの、加東少佐」

と付け加えた。すると

「えっ、本当なの？」

と加東少佐は驚きながら俺等にそう言ってきた。まぁさっき醇子のことを‘竹井’って呼んでたからおかしくはないのだが…。とりあえずその辺は醇子の説明の甲斐もあって加東少佐は理解してくれたようだ。するとその場にいたフェルナンディア中尉が

「石井！。早く打つところを見せてよ！」

と俺に言ってきた。俺は驚きながらも

「あ、はい…わかりました」

と言いながら再び構えた。すると加東少佐もそれを見ることにしたようだ。ここまで後ろから視線を感じながらバッティング練習をするなんて生まれて初めてだ。

「見ていてねみんな。あれが私の夫のバッティングよ」

「はい、大尉」

と後ろでは醇子が赤ズボン隊の人にそう言い聞かせていた。

最初の当たりは俺も緊張してしまい、打ち上げてしまった。すると後ろからはため息が聞こえたような気がした。そんなことをいちいち気にしていたら打てるボールも打てなくなってしまう。

”次は次だ…切り替えていこう”

そう自分に言い聞かせながら俺は再び構えた。すると今度の当たりは鋭いライナー性の当たりだった。すると今後は後ろかた感嘆のため息がこぼれた…。

それから俺は３０球ほど打った。結果的には殆どライナーばっかではあったがあの当たりから行くと皆殆どが安打（ヒット）だった。すると

「石井准尉の当たりは凄かったです。参考になりました」

「石井って意外と打てるんだね…」

「ボクもいい経験になったよ」

と赤ズボン隊の人たちも

「面白かったわ。ありがとう石井さん」

と加東少佐も喜んでいてくれたようだった。

「よかったわあなた。さすがね」

「当たり前だろ?。こう見えても、六大学野球出身だぞ?」

「ホームランボールもプレゼントしてくれたしね」

「お、おい…それは、さすがに恥ずかしい」

「くすっ…」

醇子も喜んでくれているようで俺はほっとした。これで練習を終えゲージを片付けると風呂に俺は向かった…。

68話　502

俺は急いで風呂に向かった。まだ大部分の人は風呂に入っていないようだったからだ

”人が多いと何かと厄介だからな…”

そう。ハルトマンさんとかが入っていてそこに多くの人が来てなおかつ俺が風呂に入っていると必ず俺は絡まれてしまう。それが嫌なのだ。況してや今日は醇子もいるから手を組まれたらどうしようもない。それを避けるためにも俺は風呂に向かったのだ。

早速俺は風呂に入った。男性用が出来てから自分の好きな時間に風呂には入れるようになったのでとても楽になった。しかもこの風呂は男性ウィッチがここに赴任しない限り俺の物なのだ。それとも相まって相当のんびり風呂に浸かれる。

”ふぅ…醇子のおかげで良くも悪くも今日はとても疲れたな…”

そんなことを俺が思っていると隣が少し騒がしくなった。

「ニパ、扶桑の風呂はどうダ？」

「あぁ。カウハバ基地にもあるけどここまで立派じゃないからな、とっても気持ちいいよ」

「サーニャさん。とても気持ちいいです」

「よかった…サーシャさんも気に入ってくれて」

「あぁサーニャさん」

「…？。どうかしたのニパさん？」

「そちらの人は，熊さん，で大丈夫だよ」

「ニパさん。風呂に入っているときはずっと正座ね！」

「えぇ～」

とどうやらエイラさんとサーニャさんが誰かと話しているようだ。ニパさんとは言っていたが多分略称だろうしボクルイーシキンさんと言う人も俺は知らない。するとエイラさんが俺が風呂に入っていることに気がついたようだ。

「オーイ石井」

「はぁい？」

「そっちはドウダー？」

「問題ないですよ」

「ソウカァ…」

会話は軽くすぐに済んだのだがが何かいやな予感がする。するとあっちではエイラさんとサーニャさんが俺のことを説明し始めた。

「今の人は、石井明範准尉。扶桑皇国の人ナンダ」

「今大学院生なのよ」

と二人が俺のことを説明すると

「准尉って事は私よりも上の人か…」

「大学院生ってどういうことなんですか？」

とその見知らぬ二人はそう訊いていた。

「ソウダナ。石井はここに入ったときから准尉待遇ナンダ」

「いきなり准尉から？、どういうことだ？」

「石井さんは扶桑では相当優秀なのよ」

「どういう意味でですか？」

「アァ、石井は今１８ナンダ」

「エッ？！。それで大学院生ってどういうことなんだよイッル」

「石井さんは義務教育を修了したらすぐに大学に入ったの」

「飛び級って事ですか？」

「そういうことダナ」

「だから准尉待遇なのかぁ」

そう言うとエイラさんとサーニャさんが頷いているような気がした。

俺は風呂を上がった。あの後すぐにルッキーニさんが風呂に飛び込んだようで水しぶきがこっちに来たからだ。

”危ないところだったな…。後もう少し遅くまで入っていたら大変なことになるとこだった”

俺はそう思いながら部屋に向かっていた。すると向こうの方から醇子がやってきた。

「あらあなた。もう上がっちゃったの？」

「えっ…うん。まぁそうだけど」

「もう一回入りましょうよ」

「えっ！？」

「私だけじゃあ心細いし」

「もう他の人がいるから大丈夫だよ」

「あなたがいないと寂しいわ…」

仕方がないので俺は風呂にもう一度入った。また今度も恥ずかしくて水風呂でもすぐに温まってしまいそうなくらい顔が熱くなった。

本来夏場の風呂というものは体を適度の暖め就寝しやすくするも

のだと俺は思っているのだが、今日は体がとても熱い。二回も風呂に入った挙げ句に二度目の風呂であれだけいじられたのだから仕方がないと言えば仕方がないのだが…。

まだ消灯時間までは少なからず時間がある。俺は滑走路先に向かった。海風で涼めるし皆各々の部屋で盛り上がっていたから誰もいないだろうと思ったからだ。

”あそこなら…誰もいないからのんびり出来るだろう…。誰もいなかったら歌でも歌うか…”

と思いながら俺は滑走路先に向かった。

案の定そこには誰もいなかった。振り返って基地を見てみるとたくさんの部屋に明かりが付いていた。わずかな時間だがこの光は照らされ続けるのだ。まるで出発直前の夜行列車のようだ。まじまじとこの場所から基地を眺めたのは初めてだが改めてこの基地は大きいことに気がついた。そして明かりの数、まるで東京駅のようだ。

「さて…誰もいないしな…」

と俺は呟いた。せっかくだから一曲歌おうと思ったのだ。だが何を歌えばいいのかわからない。鉄道唱歌見たく長い歌は歌っている途中に誰か来てしまう。これでは非常に恥ずかしい。況してや他の隊の人に見られれば変に思われてしまう、そうすると必然的に俺の妻である醇子にもその余波が及んでしまう。これはなんとしても避けたい。だが生憎なことに俺は今どうしても鉄道唱歌しか頭の中に浮かんでこない。どうすればいいだろうかと思ったが、なんのことはなかった。つまり最初から歌うから終わらないのであって最後の歌詞だけを歌えばすぐ終わるのだ。だがすぐ終わるのはあまりにも風

情がないから。俺は最後の歌詞をゆっくり歌うことにした。今回歌ったのは鉄道唱歌第三集‘東北・岩城編’だ。この歌の最後の歌詞だけを俺は歌った。

「祝え人々　鉄道の
開けし時に　逢える身を
上野の山も　響くまで
鉄道唱歌の　声たてて…」

この鉄道唱歌では第何集かにもよるが鉄道の開通を祝っている場面や次の旅への期待、旅の終わりの寂しさを時として表現している。今の歌詞もそうだ。今でこそこの東北本線と常磐線はふそうを代表する幹線となったわけだが、開通当初は今よりも車両も設備もかなり貧弱だった…。

「また鉄道唱歌～？」

後ろからやってきたのはハルトマンさんだった。見るとハルトマンさん一人だ。

「あぁハルトマンさん。もう歌い終わりましたよ、一番最後の歌詞だけ歌いましたから…」

「そっか」

「あの、失礼ですけど大尉とかは…」

「あぁ、部屋で話してるよ」

「ハルトマンさんは？」

「私は少し疲れちゃったから…」

「そうなんですか」

そう言うとハルトマンさんは俺の隣に座ってきた。するとその逆側にも気配を感じた。見るとそこにいたのは醇子だった。

「うわ。石井大尉」

「醇子！。というかどうしてここが…」

「あらあら、ハルトマンさんの後を追ったらここにあなたがいたから…」

「そうか」

そう俺が言うとそれから暫くの間俺とハルトマンさんと醇子の三人で会話をした。この二人がいると言うことは何かと俺にとっては厄介だ。こういうときのハルトマンさんは悪魔もいいところだ。

「そういえば石井ったらね～この間私が飛びつこうとしたら避けたんだよ～大尉」

”え、なんでそれを今、況してや醇子に…”

俺はそう思ったが言ってしまった以上どうしようもない。そこに丁

度運良く消灯ラッパが鳴った。

「いけない！。トゥルーデに怒られちゃう！」

そう言いながらハルトマンさんは慌てながらハンガーの方に駆けていった。

「私たちも帰りましょうか…」

「そうだね」

そう言うと俺等も基地に向かって戻り始めた。

部屋に入るととたんに醇子は豹変した。

「ねぇ…」

”なんだか凄い殺気を感じるな…やっぱりさっきのこと怒ってるのかな？”

俺がそう思ったことはどうやら間違いではなかったようだ。

「私が飛びついてもハルトマンさんみたいに避けるの？」

「いや…それは…」

「どうなの！？」

俺は正直に答えた。

「勿論避けないさ。ハルトマンさんには失礼なことをしたけど。醇子がいる以上それが出来なかったんだ」

「どうして？」

そう言うと俺は醇子をそっと抱きしめながら

「俺は決めてるんだよ。飛び込んでいいのは醇子だけだって…」

と言った。そう言うと醇子もようやくこのことを理解してくれたようだった。

「そうだったのね…。ごめんなさいあなた」

「いいんだよ、わかってくれれば」

そう言うと醇子は俺に笑顔を見せてくれた。

もう消灯ラッパが鳴ってから時間がたっているので俺等は急いで寝ることにした。明かりを消して俺がベッドに入ろうとした。

「真っ暗だなぁ…」

「今日は曇っているのかしらね？」

「さぁ…うわわっ！！」

その時俺は何かに押されてベッドに倒れ込んだ。勿論犯人は醇子だ。

「な、醇子。何を？」

「あなた、今日私と再会したのに忘れていることない？」

「忘れていること？」

「キスよ…」

「はい！？」

「今まで気がついてなかったのね…なら、たっぷりお返ししてあげるわ」

「い、いや…その…」

「今夜寝かせてあげるかは…あなた次第ってところね…」

「ちょ、ちょっと…！！！」

その後、なんとか寝かせて貰うことにはなったのだが、それはまだまだ先の話だった…。

69話　一番列車

時計の針はまだ4時半を指していたが俺は起きた。勿論抱きつかれていたのだがそれから俺は器用に抜け出してだが。いやぁ、昨日結局俺が寝たのは…12時過ぎぐらいかなぁ…

・・・

・・・

「今回の敵は一機よ。他の人なら速度が遅いと言わなくちゃいけないのだけれどあなたなら大丈夫ね」

「勿論です！」

「わかったわ。石井准尉、離陸を許可します！」

「了解！」

そう言われると俺は離陸を開始した。吊り掛け駆動の主電動機（モーター）を唸らせて…。

ネウロイを探しているときにミーナ中佐は俺にさらなる詳細を教えてくれた。

「石井さん、今回のネウロイはさっきも言ったけれど一機だけ、ただ速度が９５キロと非常に遅いわ。そこに気をつけてちょうだい」

「了解しました！」

俺がそう言うとネウロイの方から俺の前に姿を現してくれた。確かに遅いという第一印象を受けた。何となく俺を真似ているのだろうか。俺は後追いの状況でその敵を追った。その時俺は

”待てよ…、仮に俺の真似をしているんだったら…”

と不意に思った。だから俺は速度を上げた。すると

「石井さん、ネウロイの速度が上がっているわ！」

とミーナ中佐が驚いたように声を上げた。まさに俺の思ったとおりだった。ただこの低速での飛行は俺の方が一枚上手だった。低速域の加減速は俺のストライカーの方が勝っていたからだ。

「大丈夫です、問題有りません！」

と俺は言いながらネウロイへの攻撃を開始した。巧みに速度を変えてくるのも俺の戦術によく似ている。どうやら俺のデータも少なからず残されているようだ。しかも俺が左撃ちと言うことも…。

”しょうがない、今まで黙ってたけどそうするしかないな”

俺は銃を右手に持った、一応こういうときのために右でも当たるようには訓練していたのだ。これにはさすがのネウロイも参ったようだった。俺が右手に銃を持ち替えてすぐにネウロイは俺の手によって撃墜された。

「石井、ネウロイの撃墜を確認しました！」

「ありがとう、石井さん。早速戻ってきてちょうだい」

「了解」

帰り道は一人だととてもいろいろなことを考えられる。

”そういえば、まだ球場の整備をしてなかったな、帰ったらやらなきゃな。あっ、その後に醇子を起こしておかないと…。昨日できなかったから今日は抽選会も行わないとな”

そうこうするうちに滑走路が見えてきた。俺はモーターを停止させ

て発電ブレーキの準備を始めた。俺の場合は滑走路の半分前後の位置に降りても十分停止できる。

ドスン！！！

「ふぅ、着陸成功っと…」

ドスンと降りることも航空の世界においては結構重要なことなのだこうすることによって力が分散されて滑走停止に少なからず効果があるのだ。これに強力な発電ブレーキをつけるのだからまさに鬼に金棒だ。

ハンガーのいつもの場所に着くとそこには結構な人がいた。もう朝の警報で皆起きてしまったのだろう。

「ありがとうね。石井さん、おかげで助かったわ」

「いえいえ…」

ミーナ中佐から早速お礼が来た。すると同時にその場に歓声が上がった。起きてきた人もとても驚いているようだ。まぁこんな朝早くからここまで動ける人なんてそうそういないのだろう。その中にはマルセイユ大尉もいた。

「石井！」

「あぁ、マルセイユ大尉どうかしたのですか？」

「その、お前はいつも何時に起きているんだ？」

「そうですね…だいたい４時から5時ぐらいには」

「な、４時から5時!?」

その時俺はマルセイユ大尉がとっても負けず嫌いだったことを思い出した。本当なら

”起きる時間はさすがに俺の方が勝ってますよね…”

”く、くそ…起きる時間は勝てない…”

とかと言ってもよかったのだが後々を考えて俺は言わなかった。こういう強気で負けず嫌いな人は怒らせたり悔しがらせたりすると大変な目に遭うからだ。勿論野球では悔しんではもらおうとは思っているのだが…。

その中に醇子の姿もあった。もう着替えて髪も整えていた。気がつくと大部分の人はまたもう一眠りしようとハンガーからいなくなっていた。ここにいるのはミーナ中佐と俺、そして醇子だけだ。

「おかえり、あなた」

「うん、ありがとう」

お互いに顔を見ながら俺等はそう言い合った。こんな朝は生まれて初めてかもしれない。すると醇子は俺にこう訊いてきた。

「これから、どうするの?」

「そうだな…グランドの整備をしないとね。今日は一般にも公開さ

れるから」

そう、せっかくならと俺の提案で付近の住民なども招待したのだ。せっかく試合をやるのだったらドーバーみたいなと風になって欲しいからだ。

「そう…わかったわ。それじゃあ私も一緒に行くわ」

「わかった…いいよ」

するとミーナ中佐が笑いながら

「あら石井さん。今日は拒否しないのね…どうかしたの？」

と俺に訊いてきた。だから俺もこう答えた。

「えぇ…拒否したところで必ず醇子は来ますからね。勿論それを俺は止めるつもりもありませんし俺が来て欲しいくらいですから」

と笑顔で。そうすると醇子もミーナ中佐も笑っていた。早速俺と醇子はグランドの整備に向かった。

グランドにはまだ誰もいなかった。当たり前だろう。こんな朝早くから練習なんて俺くらいなものだ。扶桑人は‘とにかく勤勉で練習熱心’と言うイメージが他の国では当たり前のようだ。ここブリタニアでもそれは仲間はずれではない。そう思われいるならそうするまでだと俺は思っている。

「あなた」

醇子は俺にそう訊いてきた。指示を求めているようだ。

「ん？」

「練習って言ってたけど…」

「そうだね。せっかくだからキャッチボールでもしようか…」

そう言うと醇子は笑顔で

「えぇ」

と答えてくれた。正直それを俺は待っていたのだ。やっぱり妻と…いや醇子とするキャッチボールが一番楽しい。と同時に俺はまたこうやってキャッチボールが出来ることをとても喜んだ。

早速俺と醇子はキャッチボールを始めた。この練習は野球の基本でもある相手に正確にボールを投げることが出来るようにする訓練であるのと同時に会話等をして楽しく練習するものでもある。俺は勿論話をすることにした。

「なぁ醇子」

「どうしたのあなた？」

「久しぶりだな…。醇子とキャッチボールするの」

「えぇ…本当ね。私は今も信じられないわ」

「俺とこれをしていることがかい？」

「そうよ、前はこうもいかないですぐにお別れだったもの」

確かにそうだった。あの時は俺が勲章授与式をここでやったすぐ後に異動させられてしまったからキャッチボールなどしている暇なんてなかったのだ。

「そういえば、あのボールは？」

「今は部屋に飾ってあるわ。勿論台座の上よ」

「きっと喜んでるだろうね。ボールも…」

「くすっ、そうね」

それから俺と醇子はキャッチボールを２０分くらい楽しんだ。勿論練習のためでもあったのだが。

気がつくともう起床ラッパが鳴っていた。勿論これから試合ではあるのだが醇子は妻であることには変わりはない。そんなことを思っていると醇子は俺の方によってきた。寄ってきたと言うとわかりにくいかもしれないがこの時醇子は俺の３０センチくらい前まで体を寄せてきたのだ。このことを学術的には‘密接距離’といい愛撫や慰め、保護の意識を持つ距離だそうだ。つまり何らかの理由があって醇子は俺にここまで寄ってきたのだろう。

「あなた…」

不意に醇子は俺に話しかけてきた。なんだかとてもこういうときは緊張する。心拍数も自分でわかるくらいみるみる上昇している。早

い話がどうやら俺はドキドキしているようだ。

「どうしたの醇子？」

俺は聞き返した。

「私は何も出来なかったの？」

俺は思わず

「えっ！？」

と聞き返してしまった。意味がよくわからなかったのだ。

「あなたにいつもしてもらってばかりだった…。だから今…」

そう言うと醇子は俺にギュッと抱きついてきた。力はかなり強かった。しかしながら不思議なことに痛みは全くなかった。それどころかむしろ嬉しい気持ちの方が大きかった。

「どういうことなんだ！？。」

俺はうれしさを隠しつつ敢えて焦りを演じながらそう醇子に訊いた。

「あなたからいつも抱きしめてくれていたじゃない」

「えっ？。でもここに来たときお前さんは？」

「あの時はまだ私の‘片思い’だったのよ？」

そうだった。確かにあの時はまだ醇子の方が俺への気持ちが大きかった。早い話が俺は醇子をそこまで特に気にしてはいなかったのだ。だがそんな気持ちもいつしか消え去り、俺は醇子を‘守らなくてはならない存在（パートナー）’と思うようになったのだ。

「そうだったね…」

「うん。私またすぐに離ればなれになっちゃうなんて嫌だわ…」

「大丈夫だよ、すぐに会えるから。俺はガリアを奪還したらすぐに扶桑に帰る。だからその時は醇子も休暇をもらって一緒に暮らそう。それでいいか？」

そう言うと醇子は俺をじっと笑顔で見て

「勿論よあなた…」

と言ってくれた。

そう言うと醇子は俺から離れた。見ると俺の服の醇子の顔があった位置は何か濡れたような跡があった。きっと泣いていたのだろう。だがそれを敢えて訊く必要もないだろう。俺は醇子が俺のことをこうして大切に思ってくれるだけで十分なのだ。

「そろそろ、帰ろうか。朝ご飯だよ？」

「うん。そうしましょう、あ・な・た」

「お、おい…」

「くすっ」

俺等は基地に戻り朝食をとりに食堂に向かった…。

70話　完食

食堂にはもう朝食が準備されていた。実は今夜は俺もまた調理をすることになっているのだがまだこのことを知っているのは５０１の人たちだけだ。一応皆にも頼んで秘密にはしておいてはもらっている。今日の試合を例の魚屋も見に来るそうだ。前もって電話しておいていい物を持って行くと約束してくれていた。

とりあえず俺は席に着いた。もうだいたいの人たちは揃っている。食後には早速試合の抽選会を行うのだ。今回はアフリカ部隊と５０２部隊は混成チームで望むことになった。アフリカ部隊は今回５人、５０２部隊は８人しかいないから丁度いい。因みに言っておくと５０４は９人、俺等の５０１は１２人いる。

「あなた。食べましょう」

そう醇子は俺に言ってきた。どうやら何も食べない俺を不思議に思ったのだろう。

「また、食べさせて欲しいの？」

とまで訊いてきたのだから。昨日はそれで大変な目に遭った。例の赤ズボン隊も顔を真っ赤にしながら俺等の前で食べていた。ただ何でかは知らないが食事が終わるとマルチナさんが

・・・

「ん？」

「参考になったよ。どうもありがとっ！」

「え？！」

「じゃあね！！」

「あ、ちょっと…うぅん、なんのこととかな？」

・・・

「いやだから…その…」

俺が返答に困っているとどう解釈したのかは知らないが多分醇子のことだから

”明範さん、きっと恥ずかしがっているのね…。だから私に食べさせて欲しくないね。”

とでも思ったのだろう。

「あなた！」

と少し強めに俺に向かってそう言ってきた。

「は、はい！？」

「もう…あなたったら素直じゃないんだから」

「えっ？」

「はい。あ～ん」

「で、でも」

見ると隣の赤ズボン隊は赤くなっていて。逆に座る５０１部隊の人からは笑顔が送られている。

”ふふ～ん、石井も奥さんにあぁされちゃ～ね～”

”エイラにもやって欲しいわ”

「エイラ…」

「ムリダナ」

とかという風なことを各々が思い浮かべながら。俺がためらっていると

「あなた、勇気を出すのも必要な事よ」

「こ、これも？」

「そうよ…逆らうことが許されると思ってるのかしら？」

これ以上言われて俺が拒否できる余地などもう無かった。しょうがないから俺は食べた。

「おいしい？」

「うん、とっても」

”えっ…1回じゃないの？”

俺はその後一応朝食は食べきった。俺は醇子の皿にあったものを全て食べて醇子は俺皿にあったもの全てを。

「あら、石井さん達残さず食べてるわ。偉いわね」

「ありがとうございます。ミーナ中佐。ほら、あなたもお礼を」

「あ、あぁ…ありがとうございます」

「うふふ…それじゃあ部屋でしばらく待機していてください。次期に石井准尉にはチームのことについて相談がありますから」

「了解、それじゃああなた。帰りましょう？」

「そ、そうだね…」

さすがは俺の妻なだけあるなぁとこの時はただただ感心するばかりであった…。

71話　ｎａｍｅ（前書き）

今回登場するチーム名は、皆様のご存知の通りでございます。それでは…

71話　name

食事を終えると各部隊はそれぞれ待機を命じられた。俺は先にグランドに向かい欠く設備の準備を始めた。ラインは前もって引いてあった物なので薄くなっている部分を新たに引くことで事足りた。チーム名は枠の関係で統合戦闘航空団なんかといちいち書いていることは出来ないから、何か考えて貰うことにしよう。

”このことをミーナ中佐に報告しないとな…。”

と思いながら俺は他の外野と観客席のフェンス、バッターボックスの後ろの観客席の観客をファールボールから守るためのネット、ファールネットにたわみなどがないかを確認した後に俺は基地に急いだ。

早速基地に戻ると俺はミーナ中佐の元に向かった。勿論ミーナ中佐は中佐室にいる。醇子は今頃多分だが俺の部屋で赤ズボン隊をはじめとする５０４部隊の作戦会議でもしているのだろう。そんなことを思っていると中佐室のドアの前に俺は着きノックをした。

「は～い」

中からミーナ中佐の声が聞こえたと同時に俺はドアを開けて。

「おはようございます。ミーナ中佐」

と挨拶をした。

「あら石井さん。おはよう。どうかしたの？」

するとミーナ中佐も挨拶をしながら俺にそう訊いてきた。

「実はですね。今、球場（グランド）の確認をしてきたのですが、得点板にどのように書けばいいかわからなくて…」

「あら、普通に部隊の名前じゃあいけないのかしら？」

「はい、正式名称では長すぎますし数字だけだとアフリカ部隊は数字がありませんから…」

「そうね…それじゃあ各隊の人に訊いて名前を決めてもらってくれるかしら？」

「わかりました。それでは抽選会の時にその後については決めましょう」

「わかったわ、よろしくね石井さん」

「はい。ところでこの部隊は…」

「‘Ｓｔｒｉｋｅ　Ｗｉｔｃｈｅｓ’じゃあダメなのかしら？」

「いやぁ…折角ですからもう少し捻っても…」

「確かにそうね。それじゃあ、ここは海が近いから…ホエールズでいいんじゃないかしら？」

「ホエールズって…鯨ですよね？」

「あら?。私でもそれぐらいのことは分かるわ。鯨みたいに大きくノビノビと野球が出来たらいいなって」

「あぁ…なるほど」

”なら、扶桑語表現は…大洋だな”

何てことを俺は思った。そうだ。チーム名は俺の独断で決めるわけにはいかなかったのだがこの場合は仕方がなかった。とりあえず俺はメモを取って

「わかりました。とりあえずかそれを候補にしておきます。他の人にも相談してみますね」

と言った。するとミーナ中佐もそれならそれでいいと言ってくれた。早速俺は中佐室を出てひとまず５０２部隊の隊長の部屋に向かった。

部屋の前に着くと後ろになにやら気配を感じた。振り向くとミーナ中佐がそこにいた。

「ミ、ミーナ中佐。付いてきてたんですか!?」

「あら、ダメだったかしら?」

「いえ、そういうわけでは」

俺はここに来るまでミーナ中佐の悪口などを言わなくてよかったとこの時深く思った。するとミーナ中佐は俺に向かって

「５０２部隊の隊長は私たちと同じカールスラント出身なの。しか

も、５０２部隊にはエーリカの元教官もいるから私がいた方が話がしやすいんじゃないかと思ってね」

と言ってきた。なるほど、そうだったのか。確かにカールスラントの欧州から見れば俺のいる扶桑など極東の小さな島国だものな…。

早速俺とミーナ中佐はノックと同時に部屋に入った。すると中には案の定ハルトマンさんと、バルクホルン大尉、そして指示棒が似合いそうな小柄の女性と何というか、姐さん、とでも言えばいいような女性がそこにはいた。

「悪いわね、４人ともお話中のところ…」

ミーナ中佐がそう言うと

「大丈夫だよミーナ。ね、トゥルーデ」

「あぁ、私たちも今来たところなんだ」

「ミーナ隊長、問題有りませんよ」

「ミーナ中佐気にするな」

と４人は口々にそう言ってきた。すると大尉は俺の存在に気がついたようで

「ところで石井までどうしたんだ？」

と俺に向かって訊いてきた。

「はい、各部隊の代表の方にチーム名を決めてもらおうと思いまして。得点板の関係上正式名称では書けませんから何かあればと思いまして…」

そう言ってると後ろでドアがバターンと開いた。振り返るとそこにいたのはマルセイユ大尉だった。

「おい！。何で私たちも話しに参加させないんだ?。今回私たち‘アフリカ部隊’と５０２は合同で出場するんだぞ！」

かなりご立腹のようだ。そういえば今思うとここにはカールスラントの人、しかも女性が６人いる。早い話が俺にとっては圧倒的に不利なのだ。とりあえず俺は

「申し訳ありません大尉。じきに伺おうと思っていたのですが…」

と謝った。するとようやく大尉も落ち着いてくれたようだった。正直なところマルセイユ大尉は勢いが強すぎて、少し苦手だ。

早速マルセイユ大尉も入れて俺はチーム名について質問しようとした。すると例の小柄の女性が

「そういえば自己紹介がまだでしたね」

と俺に向かってそう言ってきた。すると

「石井、この際だからしちゃえば～?」

とハルトマンさんが言ってきたので俺はそうすることにした。

「わかりましたハルトマンさん。俺は大日本扶桑皇国海軍准尉の石井明範です。よろしくお願いします」

と軽く自己紹介をした。すると相手の人達も俺に自己紹介をしてくれた。

「初めまして。私はエディータ・ロスマンカールスラント空軍曹長です。石井さんよろしくお願いします。今は第５０２統合戦闘航空団で教育係をしています」

早い話がロスマンさんは‘５０２の先生’のようだ。

「私はグンドュラ・ラル。カールスラント空軍大尉だ。今は５０２の隊長としている。以後よろしくな！」

二人はどうやら隊長と先生のようだ。そんなことを思っているとハルトマンさんは

「石井はね～ロスマン。今大学院生なんだよ～」

と軽～く俺の紹介をしてくれた。すると

「そうなんですか。失礼ですが今はおいくつで？」

と俺に向かってロスマンさんは訊いてきた。

「この間１８歳になりました」

俺は普通に答えたすると真っ先にそれを否定したのはマルセイユ大尉だった。

「えっ？」

「石井、ウソをつくならもう少しまともにしろ！。だいたい１８で既に大卒なやつなんてどこにいるんだ？」

すると俺が答える前にハルトマンさんが

「マルセイユ、石井は凄いんだよ～。まぁ教えてあげてよ～石井」

と俺に笑顔でそう言ってきた。マルセイユ大尉も不思議に思いながら俺の方を向いてきた。と言うかラル大尉もロスマンさんも俺の方を向いてどういうことなのか教えて欲しいと俺に目で意思表示してきた。

「俺は中学を卒業したらすぐに東京帝国大学に進学したんです」

そう言うとマルセイユ大尉は

「なに！？」

と非常に驚いた様子で俺の方を見てきた。

「俺はいわゆる飛び級で大学に進学したんです。そして今年の春に大学を卒業してこの間電話が来て大学院への進学が決まったんです」

そう言うとそこにいた3人はとても驚いていたようだ。信じられないといった顔をしていると言っても過言ではないだろう。すると

「そうなんですか。通りでウィッチながら大学院生なのですね」

とロスマンさんは俺に向かってそう言ってきたし

「お前は結構凄いやつなんだな…。今度５０２に来ないか？」

とラル隊長は俺に向かってそう訊いてきた…。

それからしばらく６人で会話をした結果５０２とアフリカの混成チームの名前は‘ブレーブス’と命名することに決定した。ブレーブスは５０２部隊の愛称でもある‘Ｂｒａｖｅ　Ｗｉｔｈｃｅｓ’から来ている。

”扶桑語表現なら阪急だな…”

「皆さん、どうもありがとうございました。それではこの名前で登録させていただきます」

とお礼を言うと俺は部屋を後にした。ミーナ中佐はまだ少し話していくと言っていたので俺は一人で廊下に出た。

”さて…次は醇子の部隊か”

と思いながら俺はひとまず自分の部屋に向かった。

自分の部屋に着いた。だがおかしなことに中から物音一つしない。

”あれ？。ここにはいないのかな…”

と俺は思いつつも部屋の中に入った。すると中は暗かった。暗かっ

たと言っても部屋の明かりがないからだろう。

”う～ん、弱ったな…これじゃあ醇子がどこにいるのかわからないな”

ふと見ると俺のベットの枕が床に落ちていることに気がついた。朝起きたときに俺は枕なんかを落とした記憶なんて無かった。俺は変に思いながらもそっちの方に近づいていった。実はこの時醇子は壁のところ（つまりドアを開けては言ってきた俺からしたら死角）にいたのだ。ではどうして俺がここに来るのがわかったのか。実はさっき５０２の部隊のところで会話をしていたときにほんの少しだがミーナ中佐が

「少し、用事があるから話しててね」

と言って5分ほど外に出て行っていたのだ。この時ミーナ中佐は俺の部屋に来ていて醇子をはじめとする５０４部隊全員にチーム名を考えていてもらっていたのだ。この時醇子はこう考えたそうだ。

”後で明範さんが来るのよね。そういえば、私が後ろから飛びついたらまた驚くのかしら…ふふ。ちょうどいいしやってみましょう”

そう考えた醇子は早々とチーム名を決めた後ずっとこういう風にして待っていたのだ。何でこんなに時間に余裕があるかというと今日は試合をするとどの部隊もわかっていたから朝食が6時半からだったのだ。因みに言っておくと今は7時半だ。

俺が枕を拾おうとすると後ろからいきなりどつかれたというかタックルされた状態で俺はベットに飛び込んだ。勿論犯人は醇子だ。

「うぐっ！」

「やっぱりここに来たのね。あなた」

「ま、まぁそうだねここに来ればいると思ったし…でも」

「どうかしたのあなた？」

「どうして後ろからいきなり…」

「驚くのかなって思って」

「そりゃ…驚くけど…」

実は今俺は驚きよりも苦しさを感じる後ろからいきなり抱きつかれてベッドに倒れ込んだのだから。俺はしばらくして起き上がった。すると醇子が

「もうチーム名は決めてあるわ」

と言った。俺は安心したこれで時間が少なからず浮くからだ。

「それで、どういうチーム名に？」

「ふふ…。それはあとでね」

と言うと醇子は俺に抱きついてきた。俺も笑顔で

「わかったよ」

と答えた。ため息混じりではあるけど俺は醇子に抱きしめられながらしばらく時間を潰すことにした。

それから大体15分後、もう客が入っているとの情報がミーナ中佐の元から入ってきたので見に行くと既に内外野ともにほぼ満席であった。

「石井さん。私たち期待されているのね」

「えぇ、そうみたいですね…」

そう軽く会話を俺とミーナ中佐は会話を交わすと基地に戻った。これだけのわずかな会話でも俺等には相当な期待がかけられていることを俺等は十分に察することが出来た。

基地に戻ると早速俺等は抽選会を行った。この抽選会で試合が決定するのだ。今回は‘ダブルエリミネーション方式’を取ることにした。これは1敗しても決勝戦に勧める方式で早い話が‘敗者復活戦’があるのだ。この方式をとると2敗した時点で敗退が決定する。ただ今回困ったのは俺等が3チームで行うことなのだ。そうしてしまうと必然的に1チームがシード権を得てしまうのだ。だが強引に4チームにすることは不可能なので今回は3チームで変則的に行うことにした。一応試合の順番としては以下の通りになった。ここでは長いから扶桑語表現にしておくことにしよう

第1試合

大洋（501）　対　阪急（502・アフリカ合同）

第2試合

スクトゥム（５０４）　対　第１試合の勝者
第３試合
第１試合の敗者　対　第２試合の敗者
第４試合（決勝戦）
第２試合の勝者　対　第３試合の勝者

こういう風にはなったのだがこうすると第１試合と第３試合のチームが同じになってしまう可能性があるのだが仕方がない。とりあえずこれで試合を開催することにした。

ミーナ中佐はそれからしばらくすると５０１部隊の全員を中佐室に集めた。作戦会議を行うというのだ。俺も急いで向かった。
俺が最後に到着したようで、部屋に入るとすぐに話が始まった。

「さぁ、いよいよ試合になりましたね。みんな頑張りましょうね！。後は石井さんから」

いきなりミーナ中佐は俺に話を振ったので少々驚いてしまったがとりあえず俺は皆の前に出て一言話すことにした。

「皆さん。今まで頑張ってきたことを全て出し切れるようにしましょう。そして…優勝しましょう！」

そう俺が言うと皆も

「了解！！」

と返してくれた。早速俺等はユニホームに着替えることにした。俺も勿論部屋に戻った。すると当たり前なのだが醇子がいた。

「あら、あなた。そのユニホームは？」

「あぁ、みんなで着ようということになってね。他のユニホームを勧めたんだけど俺と一緒がいいってみんな言うから大学に俺がお願いしたんだよ。そうしたら…」

「作ってくれたって言う訳ね」

「うん」

「私も欲しかったわ～、５０１の隊員なら今頃あなたと同じユニホームが着られたのでしょうね」

俺はまだ醇子にはユニホームと指輪のことは全くしゃべっていない。

”ごめんな、醇子。今夜必ず渡すよ”

そう心の中で俺は思いながら

「まぁまぁ、そういわずにさ…。醇子も５０４の隊長みたいなもんなんだから頑張ってね」

と言った。すると醇子も笑顔で

「えぇ、お互いに頑張りましょう」

と言ってきた。

着替え終わると俺はすぐに部屋を出ようとした。すると後ろから醇子にまた抱きつかれた。

「どうかしたの…？」

俺は振り返って醇子を見つめたままそう言った。

「いえ…なんだかあなたが凛々しくて」

「抱きつきたくなったのか…」

「えぇ」

そう言うと俺は醇子を再び抱きしめた。醇子も負けじと俺に抱きついてきた。正直痛かったが俺にとってはとても嬉しいことだった。

「何度も言うみたいなんだけど…あなた。頑張ってね」

「あぁ、勿論だよ。醇子もね」

「えぇ」

そう言うと俺は部屋を出た。醇子はこれから着替えるようだ。俺は廊下を出ると空を見上げた。もう暑くはなっていたのだが外は雲一つ無い快晴だった。

”こんな中で試合が出来るなんて…頑張らなくちゃな”

そう思いながら俺は再び中佐室に戻った…。

71話　name（後書き）

どうも、作者の直通特急です。さてさて、本日も石井准尉をお招きいたしました。

准「こんにちは」

直「こんにちは」

准「今日は一体？」

直「いえ…今回の文章に登場した阪急と大洋の真相は？」

准「直通特急さんならご存知かと？」

直「そりゃあそうですけど…」

准「まぁいいんじゃないですか？。醇子達も喜んでるし…」

直「そうですか…そうですよね？。わかりました。それじゃあ本日はここまでと言うことで」

リ「石井さん、直通特急さん。折角ですからお茶でもいかがですか？」

准「おぉ、リーネさんありがとう。直通特急さんもさぁさぁ」

直「いいんですか？。それじゃあ、皆様この辺で失礼いたします…あっ、まってくださぁぁぁいい！！」

72話　Order

試合は早速始まった。今日のオーダーは

1　ルッキーニ（中堅手（センター））
2　サーニャ（投手（ピッチャー））
3　坂本（左翼手（レフト））
4　バルクホルン（二塁手（セカンド））
5　ミーナ（右翼手（ライト））
6　シャーリー（三塁手（サード））
7　ハルトマン（遊撃手（ショート））
8　エイラ（捕手（キャッチャー））
9　石井（一塁手（ファースト））

だ。公約通りバルクホルン大尉には4番に入ってもらった。

俺等は後攻だった。早速相手のブレーブスの選手が打席に入った。
エイラさんは何でだかは知らないが囁きながら相手の打者を誘導していた。

「おいニパ…ドウダ？」

「何がだよイッル！」

「何がッテ…グランドの状態ダヨ」

「あぁ、まあいんじゃないか？」

”引っかかったナ…”

どうやらエイラさんは打席で選手と会話をすることによって相手選手を陥れているようだ。

”エイラさん考えたものだな…”

と俺はこの時思っていた。

早速エイラさんはトップバッターを三振にとってみせた。これにはどうやらサーニャさんにも自信を与えたいと思う力も少なからず影響しているようだ。次に出てきた人もこれまた俺の知らない人だった…。またしてもエイラさんは三振にをとってみせた。

”そういえばエイラさんは固有魔法が未来予知だから…なるほどそういうことか。”

俺は密かにそんなことを思いながらも3人目のバッターが打席に入ると構えた。すると2球目のボールを鮮やかにセンター前に打ち返した。この大会の初ヒットだ。一塁に入ると俺はその人に話しかけた。

「いい当たりでしたね」

「あぁ、ありがとうございます。私はライーサ・ペットゲン。カールスラント空軍少尉です」

「俺は扶桑皇国海軍准尉の石井明範です」

「あ、あなたが石井さんですか…」

「ご存じでしたか？」

「えぇ、マルセイユからいろいろ聞かされてますので」

「と言うと？」

「石井准尉は私のライバル候補だって…スポーツでは…。学力じゃ到底無理だって言ってましたけどね…」

そう言うと少尉の顔から笑みがこぼれた。

”なるほど…マルセイユ大尉とペットゲン少尉は野球で言うところのバッテリーみたいなものか”

俺がそんなことを思っていると次に打席に構えたのはマルセイユ大尉だった。すると俺の方にバットを向けてきた。元々大尉は右打ちなのだが

「石井！。お前に当ててみせる！」

と俺に聞こえるよう大声でそう言ってきた。一応臨戦態勢には入った。

”右打ちだから流して打ってくるなんてね～況してやマルセイユ大尉はどうもハルトマンさんとかから訊いている限りだとプルヒッターだからこっちには来ないと思うんだけど…って！！！？？？。”

俺は驚いた。目の前に弾丸ライナーでぼるが突っ走って来るではないか。一応構えていたこともあって俺はボールを取ることが出来た。

「ははは。やっぱり取られたか石井には」

「大尉凄いですね。でも負けませんよ、俺は‘グランドに虹を架ける’ことが仕事ですから」

「おぉ、言ってくれるじゃないか、私も負けないからな！！」

そう軽く言葉を交わすと早速俺も大尉もベンチに引き上げた…交代（チェンジ）だ。

俺等のチームのトップバッターはルッキーニさんだ。俺はルッキーニさんにセーフティーバントを狙うように指示した。失礼なことなのだがルッキーニさんは身長が低い（まぁ本人に言ったら子供扱いするなと勝って言われそうだが…）。だから長打を狙うのは難しい、ならばバットを短く持ってセンター前ヒットぐらいを狙うのが最良だ。だが俺は敢えてセーフティーバントを頼んだのだ。これは相手の投手であるマルセイユ大尉を始め全ての人がそんなことをするなんて微塵にも思っていなさそうだったからだ。早い話が‘勘’だ。さてさてどんな風になるのやらこの時俺はまだ知る由もなかった。

「石井、見ててね！。私じゃ石井みたいに大きな当たりは打てないけど、私にしかできないものがあるの」

「頑張ってくださいね。最初のバッターが塁に出るのと出ないのとじゃあかなり代わってきますから」

「むぅぅぅ。石井、緊張させないでよ～」

「あぁ。すいません」

「ははは。石井はどこでも石井のままだな」

「しゃ、シャーリーさん」

「くすっ、それじゃあみんな。今日は頑張っていきましょうね？」

ミーナ中佐の一声を聞くと俺も含めてみんなは

「はい！！」

と強く答え返した…。

73話　第1試合

結果は大成功だった。いきなりのセーフティーバントは相手に脅威を与えることが出来たしそれからも試合の展開を有利に持って行くことが出来た。だが所詮は付け焼き刃の練習。勿論サーニャさんも健闘はしたのだがそれでもある程度は打たれてしまった。もし実況中継があったらこんな感じだろう…

・・・

とその時シャーリーさんの見事な当たりが聞こえた。ライト前ヒットだ。俺はここで2打数1安打のハルトマンさんを降ろしてリーネさんを代打に出した。俺はこの回に賭けることにしたのだ。

リーネさんはかなり緊張しているようだった。

「リーネさん、大丈夫？」

「えっ…その…あの」

酷く上がってしまっている。俺はそっと

「リーネさん、ダメならダメでもいいんだ。俺は一度や二度の失敗で人を見きったりはしないよ」

と言ってあげた。すると少しながらもリーネさんは落ち着いたようだった。

”この場合なら私が一番出来そうなのは…”

打席には言ったリーネさんはこの時こんな事を考えていたようだった。結果は見事に送りバント成功だった。大役を終えたリーネさんは笑顔でベンチに戻ってきた。すると皆も

「よくやったナリーネ」

「リーネちゃんすご～い」

と言った具合に歓迎していた。すると俺にリーネさんは

「石井さん、ありがとうございました。あの時私にあんなこと言ってくれなかったら私打てなかったかもしれません…」

と俺に言ってきた。俺は

「いいんだよ。後は俺が何とかするから！」

と言いながらネクストバッターズサークルに向かったしリーネさんを誉めていたエイラさんもバッターボックスに入っていった。俺はこの時エイラさん次第で入る打席を変えようと思っていた。

”私は未来予知の魔法が使えるんダナ…だったらこうすればいいんダナ”

エイラさんは2球目を打ってレフト前ヒットにした。シャーリーさんも3塁で止まってくれたので一死走者一塁、三塁という絶好な状況を俺に作ってくれた。ここで俺が打席に入ると観客からは大きな歓声が起こった。前の打席が俺は場外の3ランホームランだったのだ。あんな当たりを見せつけられればどんな観客でもきっと俺のことを応援したくなるだろう。

俺は皿に観客を驚かせたし相手の投手でもあるマルセイユ大尉をも驚かせた。

「何、右に入るだと」

俺は右打席に入ったのだ。実はこの時マルセイユ大尉の心理を考えていたのだ。ソフトボールには盗塁がないここは満塁策を取るのだろうと俺は読んだのだ。別に取らないのならばワンストライクなりワンボールなり取られた後に俺は左に変えようと思っていたからだ。

大尉のバッテリーの相手でもあるベットゲン少尉は俺の思ったと

おり敬遠をマルセイユ大尉に要求してきた。するとマルセイユ大尉はタイムをかけてベットゲン少尉と何かを話した。戻ってきたベットゲン少尉は立ち上がらなかった。どうやらマルセイユ大尉に説得されて俺と勝負をすることにしたようだ。こうなれば俺も左打席に行くつもりはなくなった。せっかく右で勝負するつもりに相手がなったのだから…。

1ストライク2ボールになった。

”石井、確かにお前は見事だ。だがここで勝つのは私だ”

そう思いながら投げたのだろうかマルセイユ大尉は俺が思うに今日一番の速さのボールを投げてきた。俺は

”大尉、そこは俺が大好きなところですよ…”

と思いながらボールをはじき返した。するとボールは高い放物線を描きながらレフトスタンドに入っていった。俺は初試合で両打席本塁打を達成したのだ。ホームに戻ってくると皆が俺を出迎えてくれた。マルセイユ大尉も涙を浮かべながら俺に笑顔で

「石井、次は負けないからな…」

と言ってきた。勿論俺も

「俺も同じですよ大尉」

と言い返した。すると皆が俺の頭をぽかぽかと叩き始めた。どうやらこの辺は万国共通なのだろうか手痛い歓迎だ。

「石井やったじゃ～ん。奥さんにいいところ見せられたね！！」

「ありがとう、私石井さんのおかげで勝てた…」

「イタタタタ…皆さん…痛いですよ」

俺の声が観客と皆(ナイン)の歓声で聞こえなかったのは言うまでもない…。

74話　Second　Game

早速第1試合が終わった。これで俺は醇子と戦うことが確定したのだ。手痛い歓迎の後俺等はベンチの奥にあるロッカールームに集まった。

「みんな、よく頑張ってくれたわね」

ミーナ中佐の一言からこの会議というか話し合いは始まった。正直言って俺が一番心配していたのはサーニャさんだった。9回を投げて6失点、体力的にも精神的にも相当なものがきているはずだからだ。

「サーニャさん、エイラさん」

俺は二人を呼んだ。

「ン、ドウシタ石井？」

「石井さん、どうかしたの？」

俺の思ったとおりだった。二人とも相当疲れているようだ。この後はすぐに第2試合があるから体力の回復を悠長にまっているわけにはいかない。

「二人には次の試合は降りてもらいます」

俺は二人に告げた、すると二人は

「何でダヨ?!。私たちは十分にプレーはしたゾ」

「私もエイラと同じよ、石井さん、どうして?。」

それなりに怒っているのかはわからないがプレーをしたいとひたすら俺に言ってくる。

”ここは騙してもしょうがないな…”

そう思いながら俺はこう二人に告げた。

「確かに、エイラさんもサーニャさんも立派に活躍していました。それは俺も否定しません。ですが二人とも疲れいるではありませんか、一応降りて貰うのは次の試合だけですから」

すると二人はなんだか‘もしかして!’と言うような顔をしながら俺にこう訊いてきた。

「石井、それっテ」

「その次の試合には出してくれるって言うことなの?」

俺はとても嬉しかった。ここまでソフトボールとは言えども‘バットでボールを打つ’と言うスポーツに興味を持ってもらえてしかも自分から率先してプレーをしたいなんて言ってもらえるなんて。そんなことを思いながらも俺は

「それはわかりません。体力の回復次第です。ただ途中交代なんかもあるかもしれませんから次の試合はゆっくり休んでください」

と言った。すると二人は

「了解！」

と笑顔で俺に返してくれた。

さてそうなると試合はどうすればいいだろうか。勿論投手と捕手をそれぞれ変えられれば話はそう難しくはないのかもしれないが…。前の試合ではペリーヌさんと宮藤さんが試合に出ていなかった。とりあえずこの二人と交代することは確定した。しかし問題なのはその後だ。いきなり宮藤さんかペリーヌさんのどちらかに投げさせるなんて事は無理というか不可能だ。少なくとも他の人と守備交代をして野手として試合に出てもらうしかない。俺はさっきの試合のスコアブックを独り見ながら考えていた。

「う～ん、どうしようかな」

するとミーナ中佐が

「石井さん、そろそろオーダーを提出する時間よ…ってまだ決めていないようね」

と言いながらやってきた。

「えぇ…どうにもこうにもうまく行かなくて…ミーナ中佐は何かいい考えはお持ちではないでしょうか？」

「そうね…トゥルーデとエーリカだったら何とかなるかもしれないわ。あの子達カールスラントにいたときはバッテリーもちょっとやってたから」

俺はそれを訊いて何かに導かれたかのような錯覚に陥った。実は丁度俺もハルトマンさんとバルクホルン大尉に組んでもらおうと思っていたのだが少し不安があったのだ。だがミーナ中佐の一言で俺は安心した。

”これでオーダーが決められる！！”

俺はそう思いながら

「ミーナ中佐、ありがとうございます！！」

とお礼を言った。しばらくして俺はオーダー表を提出した

1　ルッキーニ　（中堅手（センター））

2　ハルトマン　（投手（ピッチャー））

3　坂本　（左翼手（レフト））

4　バルクホルン　（捕手（キャッチャー））

5　ミーナ　（右翼手（ライト））

6　シャーリー　（三塁手（サード））

7　宮藤　（二塁手（セカンド））

8　ペリーヌ　（遊撃手（ショート））

9　石井　（一塁手（ファースト））

と書かれた物を…。

審判（アンパイヤ）のところにそれを持って行くと丁度対戦相手でもある５０４の人もいた。紛れもなく醇子だった。

「あなた」

俺が何も言わないで戻ろうとすると醇子は俺を引き留めた。

「どうかしたの？」

俺は敢えて素っ気なく聞き返した。一応この試合の間は敵（ライバル）なのだ、幾ら自分の妻であっても…。するとそんなことを醇子も少なからず理解してくれていたらようだった。

「あなた、私たちは強いわよ」

笑みを浮かべながらそう俺に言ってきた。

”醇子…お前さんってやつは…”

俺はそう思いながらも笑顔で

「わかってるって、こっちも負けないよ」

と言い返してベンチに戻った。

今回俺等はまた後攻だ。相手は前の試合で俺等のプレーをずっと見ていたから少し俺には不安があった。早い話が戦略が筒抜けになっているかもしれないからだ。況してやバッテリーと二遊間だけしか選手を替えていないから他の選手がどんな物かももう知られてしまっている。

”ハルトマンさんがどこまで持つかだな…。”

そんなことを思っていると

「内野の人～ちょっと来て～」

と俺等のことを呼んだ。まだ試合は始まっていない審判（アンパイヤ）も特に気にはしていないようだった…。

早速試合は始まった。トップバッターは昨日会ったマルチナ曹長だ。

「ぼくにも打てるくらいのスピードがいいな～」

ハルトマンさんにボールのスピードを要求しているようだ。俺が見る限りだと曹長もルッキーニさんとよく似ているような気がする。だからこそトップバッターなのだろう。

・・・カーン・・・

と早速2球目を打ってきた。二塁、つまり宮藤さんの正面にボールは転がった。俺はこのとき俺の心は不安以外の何者でもなかった。

宮藤さんには失礼なのかもしれないが…。

”エラーなんかしないよな”

と俺は思っていた。するとちゃんと宮藤さんは取ってくれた。早い話が二塁（セカンド）ゴロにすることが出来た。

その後も順調にハルトマンさんは後続を打ち取り、交代になった。早速ベンチで俺は宮藤さんを呼んだ。

「石井さん、どうかしたんですか？」

「さっきはありがとう。最初の試合だったから不安だったんだけど心配なさそうだね」

「石井さんに恥ずかしいところは見せるわけにはいきませんので…」

「えっ！？」

「あっ、いや、その…奥さんもいますから私たちも頑張っていかないと…と思って」

俺は皆に緊張をかけていることがわかった。もしかしたら醇子もこれを狙っているのかもしれない。ただここまで来たのだから俺等も負けるわけにはいかない。

「宮藤さん、取れなかったら取れなかったでもいいんだよ。後でいくらでも何とかなるから」

「本当にそれでいいんですか？」

「勿論だよ。点を取られても取り返せばいいだけの話だからさ」

「わかりました！！！。私頑張ります！！」

どうやら周りで俺等の話を聞いていた他の人もほっとしてくれたようだ。まだまだ試合は始まったばかりだ…。

75話　完全試合!?

醇子の言っていたことはどうも間違いではなかったようだ。どうもこのチームは‘打撃’よりも‘投球’の方に重点を置いているようだ、俗に言うところの‘投高打低’のチームだ。と言うのも今日の投手(ピッチャー)はフェルナンディア中尉なのだが制球力(コントロール)が非常にいい投手なのだ。スピードなどはそこそこなのだがキャッチャーのマッツェイ少尉のリードのおかげもあって第1打席は俺まで完全(パーフェクト)に抑えられていた。俺がいなかったらもしかしたら完全試合(パーフェクトゲーム)になっていたかもしれない。だが俺がいる限りそんなことをさせるつもりはない。俺はバッターボックスに向かった。

「9番、ファースト、石井、扶桑皇国海軍准尉、背番号36」

と場内アナウンスが流れると一斉に歓声が起こった。観客はどうも”石井なら何とかなるかもしれない!!”

と思っているようだ。勿論そう思われているのならばそうするまでだ。俺がバッターボックスに入るといきなり相手投手のフェルナンディア中尉は俺に笑みを浮かべながら大声で

「石井。私のボールは打てないわ!」

と告げてきた。どうやら今までの俺等のチームの不甲斐なさを見て俺をいじっているようだ。多分醇子の影響も少なからずあるのだろう。俺は無言のまま構えた。するとフェルナンディア中尉もむっとした表情に戻り投球モーションに入った。この時内野手全員は俺がさっきの試合で長打を打ったことを考慮」してかかなり後ろで守っ

ていた…。俺は1球目を見逃した、ぎりぎりボールのようだ。

”ふん。一丁前にボールを見極めることぐらいは出来るのね…。でも今度こそ必ずストライクゾーンに入れてみせるわ”

この時フェルナンディア中尉はそう思っていた。俺はと言うと

”確かに速いな、見た感じだと総武線の急行ぐらいかな…。これを打っちゃうと次の打席でスピードを上げられるかもしれないな”

と思っていた。とその時俺はインスピレーションの如く

”待てよ、相手の選手はみんな深めに守っているな。じゃあ試しにバットを短くでも持ってみるか”

と思った。そんなこととは知らずにフェルナンディア中尉は俺に2球目を投げる投球動作（モーション）に入った。

「石井がバット、短く持ってる！！」

とハルトマンさんはベンチで呟いた。

”さすが醇子の言っていたとおり強いチームだったな。でも俺の方が一枚も二枚も上手だ！”

そう心で俺は叫びながら再びバットを持ってボールを打ち返した…。

俺は気がつくと一塁にいた。どうやら成功したようだった。フェルナンディア中尉も完全試合に出来なくなり相当悔しがっているようだ。

”くぅ〜！！。石井に打たれた…”

「ナイスバッティングねあなた。さすが六大学野球ね」

一塁にいたのは醇子だった。どうやら俺と同じところで守りたいのだろう。俺は笑顔で

「ありがとう」

と呟くとまた野球に集中した…。

76話　試合終了

審判（アンパイヤ）が

「ストライク！。バッターアウト！。ゲームセット！！」

と叫んだ。この瞬間に、俺達第５０１統合戦闘航空団…あぁ、この試合で言えば大洋は記念すべきこのソフトボール大会の初代覇者となった。

内外野の選手はみんな、マウンドの前に集まった。勝利に沸いているとサーニャさんが

「エイラ！。私たち、やったのね！」

と叫んだ。感情にあまりあらわにしないサーニャさんもここぞとばかりに喜んでいる。

「ウン。石井のおかげなんダナ」

「えっ？」

エイラさんの言葉に俺は少し困惑した。どういう意味かよく分からなかったのだ。

「石井が私たちを優勝させてくれたものみたいナンダナ」

「そうですわね。私たちの優勝は、石井さん抜きでは出来ませんでしたわ！」

「奥さんの前でいいとこ見せられたしね！」

「ちょ、ちょっと。みなさん！！」

「石井、おめでと～！！」

その後は三回くらい宙を俺は舞った気がした。

・・・

それからしばらくして夏の練習をしていたときだった。俺は軍の検査を受けることになったのだ。と言うのもどうも俺の魔法力に扶桑の軍隊が密かに動いていたようだった。俺の運命を決めたのはこの時だったのかもしれない、海軍と陸軍の選択だった。俺は迷うことなく海軍に決めた祖父の代から俺の家系はずっと海軍だったのだ。だけど、親父は軍人に自分が似合わないと言って、消防士になったんだけどね。勿論野球が出来るんだから検査には文句なしで合格することが出来た。

検査から二日三日して俺がいつも通り大学の野球場で練習をしていると友人が

「石井、手紙だぞ～。海軍からだ」

「なんだ?。えっと…石井明範、貴君を来年度から第５０１統合戦闘航空団に編入することが決定した」

「えっ!?。５０１って、あの宮藤さんがいるところだろ?」

「なんだお前知ってるのか?」

「知ってるも何も…有名だぞ。石井こそ知らなかったのか?」

「あぁ。まぁ何だか凄いところに決まったみたいだな…」

「お～い。みんな～、石井を胴上げだ～!!」

「えっ、ちょっと!!」

早い話が‘男性ウィッチ’として認められたと言うことだ。他の部員達も非常にこのことを誇りに思ってくれたしその場で胴上げをしてもらった。実を言うと俺はこの時に帝大野球部で史上最速の‘就職先決定’という記録を打ち立てたのだ。

次の日に学校に向かうと野球場がとても綺麗になっていて他の部員共々俺はとても驚いた。聞いた話だと俺のウィッチ任命を記念して整備が行われたそうだ。こうなったら俺等もやるしかない、それから秋のリーグまで毎日が特訓のようだった。しかしながらそこには誰も不満を漏らしたり疲れを見せたりしなかった。それどころか俺等には疲れなんて全くなかった。

”学校のお礼のためにも、そして石井のためにも”

と言う思いで皆、一所懸命練習したいたのだから…。

結果はゆっくりながらも確実に就いていった。この頃は東都大学野球連盟に所属していた専修大学が優勝を重ねていた頃でもあった。俺等は練習試合を行ったのだ。終わってみれば９－１で俺等が勝ったのだ。この試合で勝ったことも大きかったのかもしれない。それからしばらくして始まった六大学野球の秋のリーグで俺等は快進撃を始めた。この時俺は立教の１回戦（つまり開幕戦）と慶應との２回戦でホームランを打った。この立教の１回戦で打ったホームランを俺は後になって醇子に返してもらうことになるなんて俺はまだ知らない。ただ既にこの時には

「石井」

「ん?。なんですか監督」

「お前さんのこの間の試合のホームランボールは海軍のウィッチが持って帰ってしまったそうだ。残念だったな」

「へぇ～。そうなんですかぁ…まぁ仕方ないですかね…」

と監督には言われていた。この時俺は

”もしかしたらいずれ会えるかもしれないから、今はいいか…”

と思っていた。それからしばらくして俺等は早稲田と戦った。そう優勝決定戦まで俺等は駒を進めていたのだ。この試合はダブルヘッダーで行われた。第１試合を５－１で下した俺等は意気揚々と第２試合に臨んだ。しかしながらさすがに早稲田と言うこともあって第２試合は１点を争うゲームとなった。

９回のウラ、無死（ノーアウト）、走者（ランナー）なしで俺に打順が回ってきた。早速俺は左打席に入った。第２試合はそれまでに２度俺はバッターボックスに入ったのだが三振と邪飛（ファールフライ）といい結果を残せていなかった。

”三度目の正直だ…！！”

俺は自分にそう言い聞かせながら構えた。するとその気持ちがボールに伝わったようだった。俺は初球を打ちサヨナラホームラン（１×－０）で早稲田を下すことが出来たのだった。次の日のどこの新聞の記事を見ても俺のことは、今いるこの５０１への編入が決定したことと相まってか‘六大学野球の魔法使い’と書かかれていた…。

・・・

「・・・さん、石井さん！」

俺をミーナ中佐は呼んでいたようだった。今は閉会式だ。日もかなり傾いている。俺はどうやら何かしらの記録があるので呼び出されたようだ。今日は俺等の５０１…（おっと）、ドーバー・マリーンズが優勝することが出来たのだ。決勝戦ではなんと２チームが更に合同したオールスターを俺等は対決した。そして俺等は見事に優勝することが出来たのだ。

早速俺はミーナ中佐に呼ばれて皆の前に向かった。観客も拍手で俺のことを喜んでいた。

「ホエール（大洋）ズ主将、大日本扶桑皇国海軍、石井明範准尉。あなたは第５０１統合戦闘航空団、ホエール（大洋）ズを本日の大会で優勝に導きました。それを記念してここに優勝旗と優勝杯を授与します。」

俺はミーナ中佐から優勝旗を優勝杯を受け取った。すると観客からは惜しげもなく拍手と歓声が聞こえた。他の隊の人たちも笑顔で俺に拍手を送っていた。俺が戻ろうとするとサーニャさんとエイラさんが俺の持っていた優勝旗と優勝杯を持って戻っていった。俺が

”なんなんだ？一体？！”

と思っているとミーナ中佐は更に続けた。

「また石井准尉の成績でもある１２打数７安打の打率．５３９、本塁打４、打点９を記念して石井准尉には金メダルを授与します」

俺はミーナ中佐にメダルをかけてもらった。俺は非常に嬉しかった。

最後にミーナ中佐は俺の耳元で

「石井さん、本当ありがとうね。そして、おめでとう…」

と呟いた…。

俺が皆のところに戻ると待っていたかのように俺を取り囲み始めた。勿論その後にしてもらったこととといえばそれは言うまでもないだろう。またまた俺は宙を舞った…。

77話　Ｅｎｇａｇｅｍｅｎｔ　ｒｉｎｇ

その後俺等は基地に戻った。食事があるからだ。本当はダメらしいのだがせっかく来てくれたのだから思いで作りにとミーナ中佐に無理を頼んで朝会った王君の家族を基地の中に招待した。早速俺は王さん家族を自室に案内した。すると貞治（サダハル）君はとても喜んでいるようだ。

「ありがとう、石井さん！」

「いいんだよ、その代わり扶桑のみんなには内緒だよ？」

「うん！」

俺と貞治君が話しているとお母さんの登美さんとお父さんの仕福さんが俺に話しかけてきた。

「石井さん、どうもすいません」

「石井さん、ありがとう。息子の貞治もこんなに喜んでいるよ」

二人もとても喜んでいるようだ。俺は改めてこの家族を誘ってよかったと非常に思っている。するとドアの向こうからミーナ中佐が俺のことを呼んだ。俺は動揺を抑えつつも外に出ようとした。すると貞治君は俺に

「誰なの？石井さん」

と訊いてきた。因みに行っておくと醇子は今風呂にシャワーに向か

っているようだ。風呂にも後で入ると入っていたがさすがにシャワーくらいは浴びたいのだろう。

「ミーナ中佐だよ、貞治君」

すると子供というのは正直なものだ。

「ミーナ中佐って朝、石井さんが言ってたとっても怖い中佐でしょ？。いきなり殴ってきたりするとかって言ってなかったっけ？」

と俺に向かって貞治君はそう言ってきた。と同時に俺は大変な過ちを犯していた事に気がついた、実は朝試合前に

・・・

・・・

…準備は出来ているわね？」

と俺に向かってそう言ってきた。準備というのは勿論指輪のことだろう。

「えぇ、勿論ですよ」

と俺は笑顔で返したするとミーナ中佐も安心したようだ。

俺は貞治君や仕福さんをつれて風呂に向かった。３人で入っても全然問題はなかった。風呂を上がると俺は学生服に着替えた。その後醇子が部屋に戻っていたようなので王さん家族のことは醇子に任せて俺は食堂に向かった。今日はいつもの魚屋の親父さんも来てくれていて俺に鮪とタコを置いていった。実を言うとタコは扶桑とロマーニャ以外では基本的には食べないそうだ。リーネさんに至っては悲鳴を上げながら宮藤さんに助けを求めていた。

「芳佳ちゃん、助けて～」

「大丈夫だよリーネちゃん」

といった感じに、況してや俺がマグロの解体をしていたから尚更だった。リーネさんは失神寸前だった。解体と言っても赤身の部分を５０キロほどおいていったぐらいだからたいしたことはなかったのだが…。

その後盛大に食事は始まった。やはりロマーニャ人のルッキーニさんとか赤ズボン隊の人しか食べてはいなかったようだが

「ねぇシャーリー」

「ん?。どしたルッキーニ?」

「シャーリーもタコ食べてよ〜」

”うえっ、私は嫌いなんだよな〜この絡み具合が…”

「ねぇシャーリー」

「わ、わかったよ。一つだけな」

そう言うとシャーリーさんはタコを一つつまんで食べた。すると

「あれ、これなかなかうまいな。石井が作ったのか?」

とそこに丁度いた俺にそう話しかけてきた。

「えぇ、十分に蒸しましたからね。柔らかくて美味しいと思いますよ」

そう俺が言うと周りにいた人たちも群がって食べ始めた。どうやら気に入ってくれたようだ。その中には醇子の姿もあった。笑顔なところからとても気に入ってくれていたようだ。俺は王さん家族にも話しかけてみた。

「いかがですか?。ここは?」

「ありがとうございます石井さん。本当に貞治もこんなに喜んでいますよ」

「ありがとう石井さん、息子がここまで喜んでいるのは久しぶりだよ」

「そうですか、そう言っていただけると俺も嬉しいです」

「ねぇ石井さん!!」

「ん?。どうしたの貞治君」

「俺ね野球選手になりたいんだ!!。石井さんみたいにたくさんホームランを打ちたいの」

「ははは。そうかそうか、じゃあなってくれよ!、頑張ればすぐに俺を抜かすことが出来ると思うよ。君が将来野球選手になったら試合に見に行ってあげるよ」

「本当!?」

「あぁ、勿論本当だよ。その代わりホームランを打ってくれよ?」

「うん!」

俺は嬉しかった。正直こんなに俺のことを凄い選手だって言ってくれるのは…。

俺は一旦部屋に戻った。例の準備があるからだ。

”あったあった。これでヨシッと…”

そう俺は心の中で呟くと再び食堂に戻った。

俺が戻るとミーナ中佐もそれを見ていたのだろう。皆を座らせた後に俺を皆から見える位置に立たせた。

「石井准尉から奥さんの石井大尉に渡したい物があるそうなの」

そう言うと醇子は何なんだろうと言った顔をして俺の目の前にやってきた。俺はこの時心臓が張り裂けそうだった。前醇子にプロポーズしたときは野球場で皆観客も騒いでいたからよかったのだが今は俺等に皆視線が向けられていてしかも黙られている。

「あなた?。渡したい物って何?」

先に醇子がそう言ってきてくれたので俺はほっとした。俺はこの時緊張して何も言い出せなかったのだ。

「あぁ、そうそう。これなんだけど。」

そう言うと俺は野球のユニホームを取り出した。勿論‘Ｊ．Ｉｓｈｉｉ’と書かれているものだ。

「まぁ、これあなたと同じユニホームじゃない。でもどうして?」

「いやねぇ…その、俺等のが送られてきたときにこれも一緒に入ってたんだよ」

「そうだったのね…ありがとうあなた!!」

と言うと醇子は俺に飛びついてきそうになった、慌ててそれを俺は止めた。すると醇子は不思議そうな顔をして

「おっとっと…」

「あら、恥ずかしいの?。あなた?。私は別に…」

と俺に訊いてきた。俺は小さなケースを取り出すと

「まだそれだけじゃないんだよ…」

と小さな声でそう言った。

「えっ、もしかしてあなた!」

すると醇子は何か察したのだろうとても驚いたようだ。俺は箱の中から指輪を取りだした。

「いつまでもボールだけじゃあいけないよね。今まで待っていてくれて、本当にありがとう」

そう俺が言うと醇子は嬉しいのだろう。涙を流していた。

「お願い…指にはめさせて…あなたから…私はもう…前がよく見えないの」

「わかってるって…」

もうかすれ声になっている。だからこそ俺は薬指にしっかりとはめてあげた。勿論サイズはぴったりだった。

「ありがとう…あなた…」

すると俺に醇子は抱きついてきた。そして

「もう…あなた…大好きよ。もう…どこにも行かないで」

と呟いてきた。俺も

「勿論だよ…醇子から離れるなんて俺にはあり得ないよ…」

と言い返した。すると周りにいた人たちは俺等を拍手で出迎えてくれた。するとその一部始終を見ていた貞治君は用意された部屋に俺等が送り届けると

「石井さん、頑張ってね！」

と俺等のことを応援してくれた。

「勿論だよ、君も頑張るんだよ！」

「うん！」

そう言うと俺等は王さん一家の部屋の戸をそっと閉めた。

「行きましょう、私たちの部屋に…」

「そうだね」

勿論二人で寄り添いながら。醇子の薬指には金の指輪が輝いていた…。

78話　Why?

部屋に戻ると俺は風呂に向かった。さっきの一件で大汗をかいてしまったのだ。風呂に向かう途中に丁度エイラさん達にあった。見るとエイラさんとサーニャさんの他にも二人ほど知らない人がいる。

「あっ、石井さん」

「石井、これから風呂カ？」

「えぇ、さっきので汗かいちゃったんで」

「ふっ、石井さんらしいわね」

サーニャさん俺は笑われてしまって少し恥ずかしくなってしまった。するとエイラさんの隣にいる人が俺に話しかけてきた。見たところエイラさんと同じ軍服を着てるからきっとスオムスの人なんだろう。

「イッルの言っていたとおりだな」

「えっ！？」

「おいニパ！、お前まだ自己紹介してないダロ！」

「あっそうだった。私はニッカ・エドワーディン・カタヤイネン。スオムス空軍曹長、今は第５０２統合戦闘航空団にいる」

「石井、ニパで十分ダゾ」

「おいイッル！」

「だって石井は上官ダゾ？。ナッ石井」

「え、えぇ。初めまして俺は扶桑皇国海軍の石井明範准尉です。よろしくお願いします」

俺がそう言うとサーニャさんの隣にいた黒い服の女性が今度は俺に自己紹介をしてきた。赤い星が付いているからきっとオラーシャの人だろう。

「私はアレクサンドラ・ポクルイーシキン、オラーシャ陸軍大尉です。よろしくお願いします」

「ボクルイーシキンさんは‘サーシャ’さんって呼ばれいるの」

「そうなんですか、ニパさん、サーシャさん。これからも、よろしくお願いしますね」

そう自己紹介をすると俺は風呂に向かおうとした。すると後ろからエイラさん達もやってきた。話によるとこれからエイラさん達も風呂に向かうとのことだ。せっかくだからと5人で風呂に向かっていると。後ろから俺は抱きしめられた。勿論醇子だ。醇子と俺を見てその場にいた4人は顔が赤くなってしまっている。

「あなた、私を置いていくなんて酷いわよ」

「えっ？。だってさっきシャワーに…」

「シャワーだけじゃあちゃんと温まらないわよ？」

「そ、そうか…」

「あら…あなたどうかしたの？」

後ろから抱きしめられているから俺はうまく呼吸が出来ないのだ。

「じゅ、醇子…苦しい…」

「あらやだ！。ごめんなさいあなた」

そう言うと醇子は俺から手を離した。

「いや…大丈夫だよ」

「そう、よかった」

見ると他の人たちも俺等の光景を見て顔を赤くしながらも笑顔だった。こんな仲睦まじい夫婦を見たら誰だって恥ずかしくなるし笑顔になりたくもなるだろう。とりあえず俺等は風呂に向かった。どうやら俺等に協力してくれたのだろう、エイラさんやサーニャさん達は先に行ってしまった。

「行きましょう、あなた」

「そうするか」

俺等はお互いのスピードを保ったままゆっくりと風呂に向かった…。

風呂を上がると俺等は部屋でゆっくりとした。気がつくと雨が降

り始めていた。ブリタニアは雨が降るとめっきり気温が落ちる。寒いくらいだ。そんなことを思っていると宮藤さんと坂本さん、そしてリーネさんが扶桑茶を持ってきて俺の部屋にやってきた。

「あ、坂本さんに宮藤さんそれからリーネさんまで。どうかしたんですか？」

「あぁ、そのな、せっかくだからみんなでここでお茶でも飲もうかと思ってな」

「芳佳ちゃんが言い始めたんです。そうしたら坂本少佐もと」

「石井さん、一緒に飲みませんか？」

俺は醇子に訊いているのかそれとも俺に訊いているのかわからなかった。とりあえず俺は

「俺はいいけど、醇子はどうしたい？」

と言った。すると醇子も

「せっかくだからいただきましょう。あなた」

と言い返してきた。そんなこんなで俺等はお茶を飲むことになった。

早速俺等はお茶を飲み始めた。冷える夜にこの温かいお茶は本当に助かる。すると宮藤さんが

「そういえば石井大尉はどうして石井さんのことが好きになったんですか？」

と醇子に訊いた。俺もそれについては聞いたことがなかったので期待しながら俺も淳子の声に耳を傾けた。

「そうね…あれは去年のことだったわ。私たちは東京六大学野球の試合を見に行ったの。その時だったわ、明範さんが私の席にホームランを打ってくれたのよ。私はいわゆる一目惚れって言うのになっちゃったのよ。勿論そのボールも持って帰ったわ。私の宝物だったから。それからしばらくして石井さんが徴兵検査を受けてウィッチになったって言うことがわかったのよ。しかもそのまま５０１統合戦闘航空団に准尉階級で入るって言う情報もわかったわ。だから私もここに最初は赴任したのよ」

俺はこの時はっきりと醇子がどうして俺のことを好きになったのかがわかった。俺のホームランボールのおかげなのだ。やっぱりあの時死ぬ気で練習したことが実を結んだのだろう。俺がそんなことを思っていると今度はリーネさんが

「石井准尉はどうして奥さんのことを？」

と俺に訊いてきた。俺もだいたい質問されるかなと予想していたのでそこまで焦ることはなかった。

「俺は正直ここに来るまでは醇子…竹井大尉のことはあまり知らなかったのですが、貴婦人って呼ばれていたことだけ有って美人だなって思いましたよ。さっき醇子も俺に一目惚れだったって言っていましたけど俺も同じような物でした。でも最初は恥ずかしかったですね…いきなり飛びつかれたりしましたから…。でも不思議なことに嬉しいという過去の人は守らなくちゃ行けないって自分で思うようになっていったんです。それが‘好き’と言うことと同じである

ことに気がつくのはそう長くはありませんでした。それがはっきりわかったのは醇子がネウロイにやられたときですね。初めてあの時自分が本当に守らなくてはならない人が醇子だって言うことがはっきりわかったんです」

俺がそう言うと醇子は

「そうだったのね…嬉しいわ、私のことをそんなに思ってくれていたなんて」

と俺に言ってきた。

「そんなことないよ。醇子だって俺のことを思ってくれていたんだろ？」

「えぇ、勿論よ」

するとそれを聞いていた坂本さんは

「はっはっは。いや～石井がこんなことを言うなんて意外だな。とまぁ相思相愛なわけだな」

俺等はその言葉を聞いてお互いに目を合わせた。勿論お互いに笑顔だった。

お茶を飲み終えると俺等は寝ることにした。外の雨はよりいっそう酷くなっていた。勿論俺と醇子は同じベッドで寝ている。というかまた醇子が俺のところに潜り込んできたのだ。

「なぁ醇子」

「どうしたのあなた？」

「明日はこの雨じゃあ帰れないかもしれないな」

「そうね…でもそうしたらあなたとまたこうして寝られるのよね」

「はは、それもそうだな」

その時である雷鳴が鳴り響くと同時に閃光が走った。醇子はここぞと思って俺に

「きゃっ！」

と言いながら飛びついてきた。

「じゅ、醇子…」

「こわいわ、あなた…」

俺は醇子にこうされることも幸せなのだろうと思いつつも

「もう、大丈夫だって。俺がいるんだから」

と言った。すると醇子も

「うん…あなた…」

「ん？」

とそのとき、そっと醇子は俺にキスをした。気がつくと俺等は仲良く眠りに就いていたようだった…。

79話　Planning

俺は早速爆睡した。ソフトボールもやったし、指輪もプレゼントしたから疲れたんだろう…ということにしておこう。

「Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…Ｚｚｚ」

俺が寝息を立てているのを確認すると、醇子はベッドから起き上がった。

”ふふ、明範さんったら幸せそうに寝てるわ。少しだけ待っててね…”

そう言いながら醇子は立ち上がった…

・・・

「こんばんは」

「はっはっは。醇子、そんなに礼儀正しくする必要はないぞ」

「くすっ、美緒は相変わらずね…」

「こ、こんばんは…石井大尉」

「あら、宮藤さん。緊張してるの？」

「え、いや…その」

私はとある用事でこの部屋を訪れた。その頃明範さんはと言えば

「Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…Ｚｚｚ」

と寝息を立てて爆睡していたみたいだわ。

「それじゃあ本題に入りましょう。宮藤さん、石井さん夫婦の件はどうなのかしら？」

「はい！。予定通り、石井大尉のウェディングドレスと、石井准尉のタキシードスーツは完成しています」

「おぉ、よしか～噛まないで言えたね」

「ル、ルッキーニちゃん。やめてよ～もぅ～」

「ははは。それにしても石井のやつ、よく眠ってられるなぁ」

「明範さんは今日は頑張ってたからね…」

そう、明範さんには秘密で私たちは私たちで別に秘密のプレゼントを用意していたの。明範さんと電話で話をした日の晩に私がいたロマーニャにブリタニアから…ミーナ隊長から電話がかかってきたの。

・・・

・・・

80話　Midnight

僕は夜中に目が覚めてしまった。時計の針を見るとまだ深夜の1時半だ。さすがにこれは‘朝’ではなく‘夜’だ。とりあえずのどが渇いてしまっていたので歯を磨き治して水を飲んだ後に再び寝ることにした。

とりあえず僕は洗面所に向かうと歯を磨いた。ここまでは普通だった。問題はこの後だった。僕はとりあえず食堂に向かった。水道があるしコップもそこにはたくさんあるからだ。するとリーネさんが部屋から出てきた。

「聲井さん…こんな時間にどうかしたんですか…?。」

とてもおどおどしながら僕にそう言ってきた。前もリーネさんにお化けの話をしたら大変なことになったことを僕は思い出した。きっと怖いのが極度に苦手なのだろう。

「いやそのね、食堂に水を飲みに行こうかと…。」

すると後ろから

「あら…あなた、私も連れてってちょうだい。」

と小声で耳元で囁かれた。リーネさんは前々からわかっていたようだがいきなり背後からそんなこととをされたら誰だって驚いてしまう。

「醇子!!!!!、ついてきたのか?。」

「えぇ…こう言うのって面白いわね、肝試しみたい。」

「醇子…。」

「さぁリーネさんもあなたも行きましょう。」

「はい、そうしましょう甕井さん。」

僕は2人に連れて行かれるかのように食堂に向かった。するとなにやら食堂からごそごそと音がするのだ。もうリーネさんは驚きを隠せない。

「いっ、甕井さん…中から…音が…。」

「大丈夫だよリーネさん。僕等以外にも同じような考えを持っている人がいるんだよ。」

そう僕が言い聞かすとリーネさんも落ち着いてくれたようだ。醇子はと言うととてもワクワクしているようだ。

”こういうときって醇子は怖くないんだな…。僕もそれなりに緊張はしているんだけど…。”

僕はゆっくり食堂のドアを開けた。すると中にいたのはマルセイユ大尉とベットゲン少尉だった。二人に聞いてみるとやはり同じ事だった。喉が渇いたから二人でここに来たそうだ。それからしばらく僕等はリーネさんの入れてくれた紅茶を飲みながら話をした。

「明日は帰れないかもしれないな…。」

「そうですね。大尉。他の部隊の方もそれは同じ事でしょう。」

「そうだな…。」

するとペットゲン少尉が僕に

「登井准尉は最初から准尉だったようですが…。」

と質問してきた。他の人たちもそうだったかという顔をして僕の答えを聞こうとしていた。

「はい、なんでも今までの僕の学力と入隊時の試験の成績を考慮してとのことだそうで。」

「そうなんですか、それじゃあでも飛び級って言ってましたけど大学では何をなさっていたのですか?。」

「一応大学では電気工学を専攻して無線工学も少しやっていました。だから今のストライカーにもその影響が強く出ているんです。」

「ん?、どういうことだ?。」

いきなりマルセイユ大尉はそう呟いた。

「どうかしましたか大尉?。」

「いやお前のストライカーは何か特徴があるのか?。」

「えぇ、あのストライカーは電気で動くんですよ。」

そう僕が言うとアフリカの二人は

「電気!?。」

と口をそろえてそう言った。

「どういうことだ!?。」

「魔法力でエンジンではなくモーターを動かして飛ばすんです。」

「そうなのか…ってそんなものどこが作るんだ!!。カールスラントでも扶桑でもそんな物が売っているとは聞いたことがないぞ!!。」

大尉は驚いた様子でそう僕に言ってきた。するとペットゲン少尉が

「もしかして!!、聳井さんが在学中に作ったんですか?。」

と僕に訊いてきた。

「その通りです。今僕が使っているストライカーは僕が大学にいるときに開発した物です。今も改良を重ねています。」

するとマルセイユ大尉は僕に不気味な笑みを浮かべた。

「聳井!、明日私と勝負をしろ!!。」

「えっ?。」

「いいか！。」

「はぁ…はい。」

僕はどさくさに紛れて承諾してしまった。そうすると大尉達は先に部屋に戻ってしまった。その後僕等もすぐに部屋に戻った。

明かりを消して寝ようとする。勿論醇子は僕の隣にいる。

「あなた…。」

と醇子は僕に尋ねてきた。

「どうかしたのか醇子。」

「明日大丈夫なの？。」

「なにが？。」

「マルセイユさんとの勝負よ。」

「ははは。心配してくれるのか。」

「勿論よ…大切なあなただもの。」

僕は一呼吸置いてからこう話した。

「実は前にもシャーリーさんと勝負をしたことがあってね、それもあるからこういうのにはもう慣れているんだ。だから大丈夫だよ。」

「本当に?、あなた。」

「あぁ、本当だよ。」

すると醇子は笑顔に戻り

「そう…よかった。それじゃあお休みなさい。あなた。」

と僕に言うと、目を閉じた。それからしばらくしないうちに僕も寝た…。

81話　成績

朝も俺等は雷鳴で目が覚めた。また雨は酷くなってきているようだ。時計は朝の6時半を告げている。

「あなた…試合、昨日でよかったわね」

「あぁ、本当だな」

俺は醇子とそう会話を軽く交わすと廊下に出た。先に俺が着替えていたので部屋にいる必要もない。俺は先にミーティングルームに向かうと醇子に告げていたのでミーティングルームに向かった。

ミーティングルームには明かりこそついてはいるが誰もいない。ただ雷がうるさいからそろそろ皆起きてくるだろうとは思っていた…。

俺がしばらく待っていると醇子が宮藤さんを連れてやってきた。聞いた話だと一緒にミーティングルームにおいでと誘ったそうだ。

「おはようございます。石井さん」

「あぁ、おはよう宮藤さん」

俺はそう挨拶を交わすとそれから暫くの間雑談をした。昨日お茶を飲んだときにも宮藤さんはいたがそれとは別の質問をしてきた。

「石井さんはいつ自分の能力に気がついたんですか?」

「ん?、何の能力?」

「‘飛び級’出来るくらいの…その…」

「学力ってこと?」

そう俺が言うと宮藤さんはこくりと頷いた。

「私はその…理科の成績が扶桑にいたときは4だったので…」

「えっ!、十分いいんじゃないかな?」

「いえ…違うんです。私のところは10段階評価なので…」

俺はどうも勘違いをしていたようだ。宮藤さんのいた女学校では10段階評価だったようだ。俺のいたところは5段階評価だったから一見すると‘4’と俺が訊くと5段階中で4を想像するからかなりいい成績だと思ってしまう。ところが宮藤さんの場合は10段階中で4、早い話が5段階中で言うところの‘2’なわけである。俺は扶桑の教育方針にはどうも気にくわない。特に義務教育課程だ。これは‘相対評価’という評価にも欠点があると思う。この方式は統計的に判断して行う物で成績上位の何%が5（または10）と言った具合に振り分けていく方法だ。この方法だと転校生などは学校自体で統計を行う母体、つまり全体の成績順が変わってくるから前の学校で5だった人が3になってしまったりするのだ。とまあとりあえず宮藤さんの場合はこういうことは抜きにして俺は訊いてみることにした。

「宮藤さんは…理科が苦手なの?」

「はい…理科だけに限った事じゃなくて理数系はどうも苦手で…」

すると醇子も話しに飛び入りしてくる形で

「そうそう…私も数学は苦手だったわ」

と俺に言ってきた。俺は自分で思っている中では理系でも文系でもないと思う。こんなことを言ってしまうと失礼なことなのかもしれないが俺は基本的に一般科目は特に悪くはなかった。それでこそ‘4’だとか‘5’がそれなりに多かった。逆に言うと国語と図工が苦手だった。製図とは違い俺は絵を描くのがとてもできが悪いのだ。国語はと言うと‘作者の気持ちになって’とか言う理由で作文をさせられることが俺は大嫌いだった。家庭科は勿論習ってはいないものの母親の手伝いなどをよくしていたから自炊ぐらいなら困ったことはない。

「2人ともそれじゃあ文系なのかな～？」

と俺が二人に訊くと

「いや…そういうわけじゃないんですけど…どうも解くのが苦手で」

「そう…私も宮藤さんと同じなの。別に文系って言うわけでもないんだけれど何となく難しく感じちゃうのよ」

俺はその時はっと思った。これは苦手意識があるだけなのかもしれないと…実は俺にもこういう経験があったのだ。あれは確か小学3年か4年の時だったと思う。四捨五入と概数（ガイスウ）の考え方が俺にはどうも理解できなかった。こういう物は一旦そういう風に思い込んでしまうとなかなかときにくくなってしまうのだ。前にそれで間違えた

というトラウマが深く刻み込まれるからだ。とりあえず俺はそのことに気になったので

「2人とも何かでとんでもない間違えをしたこととかがあるの？」

と訊いてみた。すると

「はい…私は‘オームの法則’で」

「私は2次関数でね」

と思った通りだった。その後俺は2人にこう言った。

「それは‘苦手って思い込んでいる’だけだと思うな。確かに一度そう思い込んじゃうとなかなかそれから抜け出すのは難しい。袋小路みたいなものだからね。俺にもそういうときがあったからわかるけどそういうときはその少し前からやり直してみればいいんじゃないかな。間違えたとこだけを修正するよりは少なからず面倒にはなるけどね。そうすればきっとどこで自分が間違えたかがわかるようになると思うよ」

すると2人は俺に

「それじゃあわからないときがあったら」

「あなたに訊けばいいのかしら？」

と訊いてきた。

「勿論、俺が全て出来る訳じゃあないけど教えられることは何でも

教えてあげるよ」

と俺は答えた。すると後ろから

「ふ〜ん、でも生物とかは私に訊いた方がいいよ〜」

とハルトマンさんの声がいきなり聞こえた。

「うわっ！、ハルトマンさん！、いきなり後ろに立たないでくださいよ」

「いいじゃんいいじゃん」

そう言うと宮藤さんの隣にハルトマンさんは座って

「私は将来医者になりたいんだ〜。だから生物とかは一応勉強しているんだよ〜」

と言った。確かにそう言うのならばそれの方がいいのかもしれない。俺もそれに賛成だ。

「俺もその方がいいかな。俺は電気だとか物理だとかは得意だからね、勿論数学もだけど…」

と俺が言った。するとハルトマンさんは

「石井の苦手なものは何なの？」

と俺に訊いてきた。

「そうですね…国語はあんまり…」

と俺が言うと

「えっ！。石井さんって国語が苦手だったんですか？」

「あらあなた意外なのね…私は結構得意だったわ。」

と2人に俺は言われた。

「うん。自分の意見を書けとかって言うのはそこまで面倒じゃなかったけど。‘作者の気持ちになって’作文を書けとかって言うのは大嫌いだったね。だから国語はずっと‘3’だったよ…」

そう俺が言うと扶桑の二人はなるほどという顔をしていたのだがハルトマンさんだけ不思議な顔をして

「あれ～?、私たちのところだと‘良’になるからいいんじゃないの？」

と俺に訊いてきた。それから後でわかったことなのだがカールスラントでは成績がいい順に1，2，3，4，5，6と決められているとのことだった…。

82話　Baseball　on　the　run　way

食事を終えると俺はハンガーに強制的に向かわされた。勿論俺を連れて行ったのはマルセイユ大尉だ。見るとアフリカから来た人たちが揃っているようだ。

「おはよう、石井さん」

「あぁ加東少佐。おはようございます。それと」

俺はその隣にいた女性に目を向けた。見ると扶桑陸軍の制服である。

「わっ、私は扶桑皇国陸軍の稲垣真美です。曹長です。よろしくお願いします」

この人は稲垣さんと言うそうだ。

「初めまして、俺は扶桑皇国海軍准尉の石井明範です。よろしくお願いします」

と軽く挨拶を俺が交わしているといきなりマルセイユ大尉が俺に

「石井!、これから早速やるぞ!」

と勝負を俺に言いつけてきた。と言うのもの今日はこの雷雨の影響もありどの部隊も帰宅を諦め翌日以降に変更していたのだ。だから今日一日は俺等を除いて非番になっている。

「やるって…勝負のことですか?」

「勿論だろ！、ほらっ！、早くストライカーをはけ！」

「そんなこと言ったって外は雷まで落ちてるんです…」

その時である俺が‘よ’と言おうとした瞬間に雷が落ちた。俺のストライカーには一応避雷器もついているし絶縁対策も完璧なのだがわざわざ自分から雷に当たりに行きたくはない。にもかかわらずマルセイユ大尉は更に俺に

「ふっ、お前逃げるのか？、昨日散々あんなことを言っておきながら…」

俺は別に勝負をしたくないというわけではなくて何もこんな状況でやるのはどうなのかと訊きたいだけなのだ。

「だからその…明日でもいいんじゃないですか？、何もこんな天気の中…」

「そうですよマルセイユ大尉、ここは諦めましょう」

「なんだライーサまで石井の肩を持つのか？」

「マルセイユ、ここはやめておきましょう」

「そうですよ大尉。ケガしてからじゃあ遅いんですから」

そう俺等が言うと大意もようやく理解してくれたようで

「ふん…まぁお前達がそこまで言うんだったら明日まで待ってやろ

う」

と大尉は言った。俺等がどれだけ安心したことか…。ただ俺に長々とほっとさせてはくれないようだ。

「その代わり石井」

「はい、なんでしょうか大尉？」

「いまここで野球で勝負をしろ！」

「えっ？」

「お前は確かゲージを作っているんだったよな…」

「え、えぇ…一応」

「それを今からここに張れ」

「でも下は滑走路ですよ！！」

「なんだそれぐらいのことで逃げるのか？。扶桑の学生野球なんてそんなものなのか」

と笑みを浮かべたまま大尉は俺にそう言った。そこまで言われて俺も引き下がるわけにはいかない。まだ大尉は俺の実力に気がついていないようだ。

「わかりました。そこまで言うなら」

そう言うと俺はゲージを作った。今回の勝負は一対一の打撃勝負だ。前にハルトマンさん達とやったようなものだ。今回は打ち返した数で決着がつく。

「それじゃあ早速石井からやってくれ」

そう言われたので俺はバッターボックスに入った。

”私が負ける筈なんてない…況してや扶桑の大学生なんかにな”

大尉は大きく振りかぶって1球目を投げてきた。意外と早かった。きっと１３０キロぐらいは出ているだろう。女性でここまで出せるなんて凄い人だ。

「どうだ石井。私は負けないぞ！」

その時俺は

・・・

「はっはっはっは。石井はそんなものか」

悔しかったが仕方がなかった。マルセイユ大尉のボールは意外にもボールにノビがあって打ちにくかったのだ。早速俺とマルセイユ大尉は攻守交代をした。マルセイユ大尉は俺がピッチャーマウンドに立つやいなや

「石井、入らないんなら前から投げてもいいぞ！」

と俺に向かって言ってきた。どうやら相当な自信家のようだ。脇で見ている加東少佐やベットゲン少尉、そして稲垣さんまであきれた顔でマルセイユ大尉のことを見ている。

”まぁ俺のいいところはこの大きさなんだけどね…”

俺はにやりと笑みを浮かべた。

”ん、なんだ石井のやつ、少し不気味だな…”

マルセイユ大尉も顔には表さなかったがそういったことを思っているように俺には見えた。早速俺は構えて第1球目を投げた。すると大尉は驚いたような顔で1球目を見送った。

「ストライクですよね…。今の位置なら」

俺の投げたボールは目測で時速４０キロ前後だ。前に俺は一時期肩を壊しかけたことがあってそれ以来俺の肩は驚異的に弱いのだ。だから一塁を守っているわけである。このとてつもない遅さはその時に培ったものだ。殆どの人があまりにもボールが‘遅すぎて’打て

なかったのだ。マルセイユ大尉も同じだった。俺のボールは2球3球見たところでそう簡単に目が慣れるほど，速いボール，ではないのだ。

後1球空振れば大尉の負けと言うところまでいよいよやってきた。

「大尉…わかってますよね」

「あぁ！、勿論だ！」

そう言うと俺はボールを放った。大尉はバットに当たりはしたもののファールチップだった。俺は勝ったのだ。さすがにこのボールの遅さは大尉でも無理だったようだ。

「俺の勝ちですね…大尉」

「うぐぐぐぐ…お前の勝ちだ」

大尉は相当悔しがっていたようだ。まぁ大尉の性格からしたら当然のことだろう。

「大尉…悔しいですか？」

「当たり前だろう！」

そう俺は大尉に言われた。

「大尉…いい勝負をありがとうございました」

俺は笑顔で右手を差し出した。

「なんだ、そんなことを私が今できると思っているのか！」

「大尉…勝者を称えないのはスポーツマンシップに反しますよ。また勝負するときに大尉が勝てばいいじゃないですか…」

そう言うと大尉もそれに気がついたようだ。俺の手をがしっと掴みながら

「そうだな！。次もよろしくな！」

と俺に言ってきた。

ゲージを片付け終えた直後に警報が鳴った。真っ先に俺は離陸した…。

83話　解放

まさかこんな雷雨の日にネウロイが来るなんて思いもしなかったがとりあえず俺は先に敵のところに先行した。

「ミーナ中佐、石井です」

「石井さん、敵はそこから1キロ先にいるわ。だから気をつけ…」

その時である俺のストライカーのすぐ脇を雷が落ちたのだ。幸い感電などはなく機器も正常に動いている。だがその時俺は驚いてしまって

「うわっ！！」

と声を上げてしまった。

「大丈夫?、石井さん」

「えぇ、機器などに異常はありません。このまま敵にところに向かいます」

「気をつけてちょうだいね」

ミーナ中佐がそう言うと俺は更に雷雲の中を敵のところに前進した。

ミーナ中佐に言われた辺りを見回しても特にネウロイは見当たらない。俺はもしかしてと思いながらも

「ミーナ中佐が敵が見当たりません」

とミーナ中佐に俺は訊いた。

「困ったわ、どうやら雷雲の中にいるみたいなの」

俺は自分の真上にある雷雲を見渡した。暗い海から見る雷雲は余計に黒色が協調されていてまさに不気味の一言に尽きる。

”入道雲か…”

「石井～お待たせ～」

「石井、大丈夫か？」

「あぁ、バルクホルンさんにハルトマンさん」

二人が駆けつけてきた。他の人たちも後から来るとのことだ。俺は既にこの時、無線（インカム）の電源を落としていた。

「石井…ミーナがインカムを切っていないかって？」

ハルトマンさんはこの時俺にそう言ってきた。勿論その通りだった。ミーナ中佐にこれからすることがばれたら大変なことになるからだ。

「ハルトマンさん、俺は雷雲（あのなか）に行ってこようと思います」

それを聞いてそこにいた二人はとても驚いた。

「えぇ～！、石井どうかしちゃったの？。あの中がどれだけ危険か

わかってないの？」

「ハルトマンの言うとおりだ！、石井あの中は危険だ」

俺にもそんなことはわかっていた。雷雲は正式名称を積乱雲という。内部は大気が非常に不安定で強力な上昇気流と同時に下降風が激しく吹いている。また内部は光も届来にくいから非常に暗い上に温度も非常に低い。雷が落ちているときに急に外が冷えてくるのは同じ理論だ。今その状況下に俺とハルトマンさんとバルクホルン大尉はいる。

「…俺はそれでも行きます」

「おい石井！！、まだわからないのか…」

「守りたいって宮藤さんがよく言いますよね…。俺だってそれは同じです。それに俺は負けたくないんです」

「何に負けるって言うんだ？」

「目の前にいるネウロイですよ」

「いい加減にしろ！！、お前は自分の命と引き替えにネウロイを倒すというのか？。妻もいるのというのに」

「負けたくもないし逃げたくもないんですよ。大尉はソフトボールをやっていたんですよね」

「えっ！？、あぁそうだがそれがどうかしたのか？」

ハルトマンさんは終始黙って俺等を見ている。

「大きく振りかぶって投げてくるピッチャーのボールを振りもせずにアウトになれますか？」

「何！？」

「それと同じなんですよ。ここで退いたら更に戦況は悪化するかもしれないんですよ」

「くっ…お前というやつは…」

ミーナ中佐もこの時しっかりと俺等の会話を聴いていたようだった。すると沈黙を打ち破るかのようにハルトマンさんは言った。

「トゥルーデ」

「ん？、お前も石井を止めてくれるのか？」

「行かせてあげなよ！」

「何！？、お前まで石井を支持するのか？」

「私…なんだか石井なら大丈夫な気がするんだ。自分でもよくわからないんだけどちゃんと戻ってきてくれるって言う自信が私にもあるの」

「しかしだなぁハルトマン、お前だってあの中がどれだけ危険なのかわかっているだろう！！」

「ねぇトゥルーデ石井を信じてあげようよ」

「…。なぜだ、なぜそこまで石井を信用できるのだ?」

ハルトマンさんはそうバルクホルン大尉に訊かれると静かにこう答えた。

「私ね…石井がこの隊に入ってからトゥルーデも変わったと思っているの。宮藤の影響も強いと思うけど石井の力も大きいと私は思っているの。クリスだって現によくなってきたじゃない。私が思うには多分クリスは石井って言うあこがれの人を見つけたから頑張って生きていこうって考えてるんだと思うの。だから石井のことをクリスは信じているんだと思うの。だから私も石井のことを信じてあげたいし、トゥルーデも信じてあげなくちゃいけないと思うの!」

そうハルトマンさんが言うとバルクホルン大尉は静かに

「ふぅ…確かにそうなのかもしれないな。私は石井のことを十分に信用していなかったのかもしれないな」

と言った。するとすぐに大尉は大きな声で

「石井!、必ず戻って来いよ!」

と俺に言った。ハルトマンさんも

「石井!、約束してよ。また帰ってくるって…」

と俺に向かってそう言った。するとインカムを通じて醇子とミーナ中佐の声が聞こえてきた。

「石井さん、必ず戻ってきてちょうだいね」

「あなた！。私もこれからそっちに向かうわ。だからお願い。必ず帰ってきて！」

「了解しました！。それでは向かいます！」

そう言うと俺は雷雲の中に突入した…。

俺は雷雲の中に入った。案の定そこは大気が非常に不安定だった。上昇気流で急上昇したと思ったら今度は下降風で急降下、まさに荒波に這う船の如く俺は上下動を繰り返した。

”くそっ…なかなか前に進めないな…”

そんなことを思っていると隣を何かが高速で通過していった。俺もそれを追いかけることにした。するとそこには巨大なネウロイの巣が構成されていた。

「なっ…なんだよあれ…」

俺は思わずその大きさに絶句してしまった。神宮球場が何個はいるとか言う話ではない。とてつもなく大きいのだ。その中にはなにやら金属の塊のような物が見えた。

俺は無線（インカム）の電源をつけた。

「ミーナ中佐！、ミーナ中佐！、応答してください」

するとそこから聞こえてきたのは男の声だった。

「君が石井明範准尉か…」

「はい、そうですけどあなたは」

「私はトレヴァー・マロニー。ブリタニア空軍大将だ」

俺はその時

”あいつか”

と思い出したと同時に憎悪の念がわいた。いつもリーネさんは言っていた。私たちに圧力をかけてきたり妨害をしたりしてくる厄介なやつだと…。確かに声を聴いた限りでは俺もムカッとした。

「これはこれは、一体いかがされましたのでしょうか閣下？」

「早速で申し訳ないのだが君は基地に帰投してくれ、他の隊員は全員こちらで拘束させてもらった」

「何ですって！」

俺は驚いた。まさにクーデターのようだ。

「君のせいなのだよ、この雷雲の秘密そして‘ウォーロック’を見てしまったのだから」

大将が言うそのウォーロックというのがさっき俺の隣を通過していった物であろう。この時俺はそうであると察した。すると大将は

「帰投した後、君のストライカーは没収させてもらう」

「えっ！？」

「独断専行だからね…しかも私は君の上官でもある」

相手のほくそ笑んだ顔が俺にも浮かんでくる。その頃ハルトマンさんとバルクホルン大尉が他の隊員をボコボコにしていることをまだ大将は知らない。

「さぁ…早く戻ってきなさい」

と大将は自信満々にそう言った。俺にはそれがおかしくてしょうがなかった。

「ははははははは」

俺は大笑いをその場でした。

「何だ貴様！、何のつもりなんだ！」

大将の怒りに満ちあふれた顔が俺にはおかしい具合に見えてくる。

「だって、あんたの言っていることがおかしくてしょうがないんだよ」

「何だと！」

「このストライカーは誰も奪えない」

”ざまぁ見ろ、大将のくせにしゃしゃりやがって…”

そんなことを思いいながらも俺は大将に説明した。

「大将、俺のストライカーの籍は東京帝国大学第一工学部電気科にあるんです。早い話が俺は大学からこれを貸し出してもらっているんですよ。だから大将の意見に従う必要は俺にはないんですよ」

「なっ！！、何をふざけたことを…」

俺はその時さっき大将の言っていたウォーロックが突然赤くなるのを見た。‘ネウロイ化’してしまったようだ。大将のいる司令室も動きが慌ただしくなっている。どうやらその深刻性に気がついているようだ。と同時に司令室のドアが勢いよく開けられた音が聞こえた、するとマロニー大将の悲鳴が聞こえた後にミーナ中佐の声がした。

「石井さん、そこにいるウォーロックを倒せばどうやらそのネウロイの巣もなくなるようなの」

「そうなんですね。わかりました。これより攻撃を開始します。あっあと」

「どうかしたの石井さん」

「大将に言いたいことがあるので代わってください」

そう言うとミーナ中佐は大将に俺の声が聞こえるように調節してくれた。

「大将、あんたは大将失格だな。いきなり出てきてしかも俺等を陥れようとまでしてくれたんだからな…挙げ句の果てには俺等の帝大の技術の結晶までもを取り上げようとしてくれるなんて…卑怯者が！」

俺はそう言った後、ミーナ中佐に

「以上でお終いです。それでは向かいます！！」

と言った。

「気をつけてちょうだいね…」

俺はそう言うとウォーロックの方に向かった。

ウォーロックは確かに大将ご自慢と言うこともあって非常に強い、しかもそれがネウロイ化したのだから尚更だ。すると俺のストライカーの脇についている避雷器用の集電靴（シュウデンカ）が焦げて落ちていった。

”くそっ…やるな”

俺はそんなことを思いながらもあることにふと気がついた、まるでインスピレーションの如くに。

”待てよ…この雷を応用すれば…”

俺はそう思うとウォーロックを誘導し始めた。思った通りで俺を敵と思いついてきてくれている。

”雷が直撃すればひとたまりもないはずだ”

俺はそう思った。そうすると俺はネウロイの燃料タンクにわざと弾を当てた。これによって燃料が外に漏れる形になった。後はこれに雷が直撃すれば勝手に引火、爆発してくれる。

結果は予想通りだった。ウォーロックの頑丈な装甲も自然の脅威には勝てなかった。そこに残ったのは大きなネウロイのコアだった。

”これがコアか…”

そんなこと俺が思っているといきなりビームが飛んできた。慌ててそれを回避しながら攻撃を開始した。コアはなかなか頑丈だった。

”もうここまでか…”

そう俺が思っていると瞬間的にさっきの場面がよみがえってきた。そうバルクホルン大尉に行かせてくれと言っていたときだ。

”大きく振りかぶって投げてくるピッチャーのボールを振りもせずにアウトになれますか…”

俺は大尉にそう言ったんだ、だから俺もこんな事で簡単に逃げ出してはならない。するとチャンスが訪れた雷が直撃しコアが一瞬ひるんだのだ。

”今だ!!”

俺は思いっきり攻撃を開始した。するとコアは反撃もむなしく空に白色の塵となって消滅した。

「ミーナ中佐…攻撃は完了しました。俺は無事です。ネウロイの消滅を確認しました」

すると俺の後ろには光があふれていた。巣が消えたおかげでその部分に光が差し込んでくるのだ。

「・・・

たままこう言った。

「もういいの。こうして戻ってきてくれたんだから…」

「許してくれるのか…こんな俺を…君に心配をかけた俺を…」

「勿論よ。だって私の大切な人なのだもの…」

醇子は俺を見つめながらそして目の下を赤くしたまま俺にそう言った。俺も自然と涙がこぼれた。

「あら…あなたが泣くところを初めて見ちゃったわ」

醇子は笑みを浮かべたままそう言った。

「ごめんね、醇子！」

そう言うと俺は醇子を強く抱きしめた。醇子も負けじと俺を強く抱きしめてきた。

「もう…いいって言ってるでしょ。そのかわり約束して。もう私から離れないって…」

「あぁ…勿論だよ。」

そう俺等が話しているとミーナ中佐の声が聞こえた。

「石井准尉、大変お疲れ様でした。あなたのおかげでガリア地方一帯のネウロイの消滅を確認できました」

「ということは…」

「そう！、ガリアを解放したのよ！」

俺はその場で醇子と再び喜びを分かち合った…。

俺が大仕事を成し遂げて基地に帰還すると皆が俺を拍手で出迎えてくれた…。するとペリーヌさんが涙を流したまま俺にお礼を言ってきてくれた。

「石井さん…その…ありがとうございます。このご恩は一生忘れませんわ」

「ありがとうペリーヌさん。今度はペリーヌさんが国を見事に復興させてくださいね」

そう俺が言うとペリーヌさんは

「勿論ですわ！」

と笑みを浮かべながら俺に言った。

「さて石井！」

いきなり坂本さんは俺を呼んだ。

「どうかしたんですか?、妙に張り切っていますけど…」

そう言うと皆は俺を取り囲んだ。

「もしかして」

と俺が皆に聞くとどうやらその通りのようだった。皆は俺を持ち上げると

「石井さん、ありがとう！！」

と言った。俺はそれから空を何度も舞った…。

84話　mari

皆の胴上げが終わると全員で食堂に向かった。元々今日は普通の日であったのだから特に食事は合成でも何でもなかったのが空腹であった俺にとってはそれでも十分だった。外を見るともう暗くなっていた。嵐の中をずっと飛行していたから気がついたらとっくに昼を過ぎていて夕方になっていたようだった。さっき雲の間から見た光も紅(あか)みを帯びていた。

「あなた、本当にお疲れ様」

「あぁ、ありがとう醇子。だけど本当に何もしなくていいの？」

「あら、何のこと？」

「その…醇子にたくさん心配かけたから…その」

俺は恩返しと言うかお詫びというかわからないが心配をかけさせた醇子に何かプレゼントだったりお礼だったりをしなくていいのかと思っていたのだ。さっきも醇子はいらないって言っていたものの気になったからもう一度訊いてみたのだ。すると醇子は笑顔でこう言った。

「そう…そこまであなたが言うんだったら」

「うん、何かな？」

というわけで俺は強制的に風呂に向かわされた。

「あなた、ゆっくり浸かって疲れを取ってきてちょうだい」

「そ、そんなことでいいの？」

「まぁまぁ、とりあえずお風呂に行ってくれれば次に何をすればいいのか分かるわ」

「そうか…わかった」

よくわからないけどまぁいいかな。ともかく風呂に浸かるとようやく自分のしたことに実感がわいてきた。

風呂を上がると、醇子が何を言いたかったのか分かったような気がした。

”あれ？、服がないぞ！”

俺は驚いた。脱衣所にあったはずの俺の軍服が一式無くなっているのだ。これでは…非常にまずい。すると脇のかごの中になにやら別の服がおいてあった。よく見てみると紙が添えられていた。

”石井さん、風呂を上がったらこれを着て食堂までいらしてください。　宮藤芳佳　リネット・ビショップ”

”どうしたんだろうな？、二人とも改まって…。まぁいいや”

早速着替えてみると…どうやらタキシードのようである。

「ふぅ…こんなもんかな？」

俺は脱衣所の鏡の前でネクタイを確認すると急いで俺は食堂に向かった。

”生まれて初めてだなぁ…こんな服着るの”

食堂に向かう途中に俺はそんな事を思っていた。まぁこの服が何を意味するのかぐらいは分かっている。

”にしても、一体何なんだろうな?。お偉いさんでもいらしてるのかな?。おっと、食堂に入れって書いてあったよな…”

入ってみると驚くことに醇子が…純白のウエディングドレス姿でそこに立っていた。そして、他の隊の人も含め全員がそこに座っていた。しかもとっても喜ばしい顔をしている。

「どういうことで…?」

俺はなんだか訳が分からず、気が動転してる。誰かの助けが必要だ。

「石井少尉には申し訳なかったんだけれど、私たちの間で秘密裏に進めていたの」

「あなたがネウロイを倒したら結婚式を挙げようって」

「そうだったのか…えっ?」

俺は何かおかしいことに、この時でも気がついた。俺って…准尉だったはずじゃあ?。

「石井准尉」

ミーナ中佐がそう言い返した。

「は、はい？」

「…って言うのはもうさっきまでよ」

「えっ？」

「先ほど、扶桑海軍から連絡がありました。石井明範准尉に、ネウロイ撃退・ガリア解放の功労を称え少尉に昇格を命じる…ってね」

俺が風呂に入っている間にそんな事が起こっていたようだ。よくもまぁのんきに俺も風呂なんかに入っていたものだ。

「さっ、あなた。みんなもいるんだから…」

そう醇子は俺の手を掴んできた。なんだか今日は醇子がいつもに増してとっても綺麗だ。

「あ、あぁ…」

そういうと皆は俺等を拍手で出迎えてくれた。ミーナ中佐が神父のつとめを果たしてくれた。俺は上手ではなかったが醇子をしっかりと…エスコートした。

「あなた…さすがね」

「そんなことはないさ」

そんなことを小声で交わしながら俺等はミーナ中佐…いやいや神父の前に辿り着いた。

「石井明範さん。あなたは竹井醇子さんと結婚し、妻としようとしています。あなたは、この結婚を神の導きによるものだと受け取り、その教えに従って、夫としての分を果たし、常に妻を愛し、敬い、慰め、助けて変わることなく、その健やかなるときも、病めるときも、富めるときも、貧しきときも、死が二人を分かつときまで、命の日の続く限り、あなたの妻に対して、堅く節操を守ることを約束しますか？」

「約束します」

「竹井醇子さん。あなたは石井明範さんと結婚し、夫としようとしています。あなたは、この結婚を神の導きによるものだと受け取り、その教えに従って、妻としての分を果たし、常に夫を愛し、敬い、慰め、助けて変わることなく、その健やかなるときも、病めるときも、富めるときも、貧しきときも、死が二人を分かつときまで、命の日の続く限り、あなたの夫に対して、堅く節操を守ることを約束しますか？」

「約束します」

俺と醇子は同じ事を訊かれ同じように答えた。必ず俺はこの誓いを守り抜こうと思う。きっと…いや勿論醇子も同じであろう。その後俺等は…キスをして…永遠の愛を誓った。

「いや～、石井夫妻には熱くさせられるね～」

「シャーリーさん、酷いですよ～」

「でもでも～、私たちにもいい勉強になったよ」

「ルッキーニさんまで…」

「石井さん達、とっても素敵だったわ。そうよね？、エイラ」

「アァ、最高だったゾ」

「ありがとう。サーニャさん、エイラさん」

「おめでとう！、二人とも」

「美緒…これからは石井になるけど…よろしくね」

「あぁ。石井もしっかり醇子を支えてあげるんだぞ」

「勿論ですよ。坂本さん」

「二人とも頑張ってね。それからこれからもよろしくね。石井少尉は今後は？」

「俺は、大学院に戻ります」

「そう…頑張ってね」

「ありがとうございます…」

「石井さん、これからも末永くお幸せに」

「私も芳佳ちゃんとペリーヌさんと一緒に頑張りますから」

「石井さん、お疲れ様でした。これからも頑張ってください」

「私もガリアを復興させることに全力を尽くしますわ」

「皆さん、頑張ってくださいね」

「でもさ～、トゥルーデ」

「なんだ?、エーリカ」

「石井達のキス…もう一回みたいよね?」

「なっ、何をいきなりお前は言うんだ?!」

「だって、二人ともラブラブなんだもん」

「お前というやつは…」

「ねぇ石井」

「えっ!?」

俺はハルトマンさんにお願いされてどうすればいいかよく分からなかった。醇子はと言うと…

「あなた、私も…」

とだけしか言ってくれない。俺はもう一度口づけを交わすことにした。

その後マルセイユ大尉とかにもお祝いをして貰った。他の隊で一番喜んでいたのは、ロマーニャの赤ズボン隊の人達かな?。まぁ醇子の直属の部下と言っても過言ではないから、彼女たちも嬉しいのだろう。

「それじゃあ、あなた。おやすみなさい」

「うん…」

最後にキスをして一日を終えようと俺はした…だけど、何だか落ち着かない。

「うぅん…」

すると

「あなた、眠れないの?」

と醇子は訊いてきた。まさしくその通りだ。なんだかこう…ドキドキすると言うかなんというか、とりあえず落ち着かない。

”ふふ、明範さんって意外と我慢強いのね。シャーリーさんはリベリオンの特製だって言ってたのに…”

実はさっきの結婚式の後に

・・・

気が動転して、俺は動けない。醇子はお構いなしに俺の胸元に耳を当てた。

「な、醇子!?」

「くすっ、やっぱりあなたもドキドキしてるのね」

「えっ?」

「さっきシャーリーさんからジュースを貰ったでしょ?」

「うん…ん?」

すると醇子は、今度は俺の耳元で

「あのジュースにはね…媚薬が入ってたのよ」

と囁いた。

「な、なんて…!?」

俺の心臓はもうそろそろ壊れそうだった。と同時に何で自分がこんなに落ち着かないのか分かって、少しだけほっとした。

「ねぇあなた。そのジュースを私も飲んだのは知ってるわよね?」

「じゅ、醇子。顔が近い…よ?!」

「ねぇ!」

「は、はい」

「もっとあなたが欲しい。勿論分かっているわよ。航空歩兵（ウィッチ）は純潔を守らなくちゃいけないのは…だけど大丈夫よ。キスならいくらでも出来る」

貴婦人だから気品は有るけど、な、何を言ってるのかよく分からない。

「ちょっと醇子…！！！！」

「あなた、今夜は私がいいって言うまで付き合ってもらえるかしら？」

「えぇっ！？」

「あら？。さっきの話はまだ終わってないわよ…風呂を入ってきたら次のことが分かるって言ったわよね？」

ともかく、まだまだ俺は眠れないようだ。だけど、本当に好きな人だからよしとするかぁ…

85話　L?gion　d'honneur

いやぁ…昨夜は大変だった。結局醇子には11時くらいまで付き合ったかな?。まぁそれはさておき、今日はいい天気だ。だけど、俺はまだ正直眠い。もう少し寝ることにしよう。

「あなた、おはよう」

「Zzz…ぅん」

「あなた?」

「ぅぅん…Zzz」

「起きないの?」

「Zzz…」

「そうなのね。それがあなたの答えね…なら、起こしてあげるわ」

次の瞬間醇子はうつぶせで眠る俺の背中の上に跨がって、体を密着させてきた。こうなると俺もビックリして、起きようとした。

「お、起きられないよ…」

「あら、寝言かしら?」

「あんなに寝息を立てていたんだから、そう簡単には起きないわよね」

「お、起きます！！！」

「もぅ」

「す、すいません」

危ないところだった。あのままほったらかしにしておいたら、醇子が何をしでかすか何て分かりっこない。

朝食を醇子と食べているとミーナ中佐が俺等の前にやってきた。

「石井少尉」

俺は久しぶりに軍隊らしくミーナ中佐に言われて少し驚いた。

「どうかしたんですか？」

「後でみんなの前であなたのことについて少し話さなくちゃいけないことがあるから食べ終わったらでいいから正装になってくれないかしら？」

早い話が話があるから着替えておけと言うことだ。なんだかいやな予感もしたのだが拒否するわけにも行かないので俺は

「わかりました」

とだけ言っておいた。するとミーナ中佐はうんと頷きそのまま自席に戻って言ってしまった。

「あなた」

いきなり醇子が俺を呼んだ。

「どうかしたのか?。醇子」

「何なのかしらね…正装で話すことがあるって」

「さぁ…もしかして俺等の会見とか?」

そう俺が冗談を言うと醇子はもうと笑顔で言い返してきた。俺等は朝食を再開した。

食事が終わると俺は急いで部屋に戻った。勿論俺にとっての正装というのが学生服姿であることをミーナ中佐は知っている。だから何も怖がることは無かった。

「失礼するわよあなた…。あら…」

俺は醇子の方を向いた。そういえば俺の正装姿を見るのは久しいのかもしれない。いつもは野球がしやすいような服を着ているから尚更だろう。最近は出かけるときなどにしか学生服を俺も着なくなってしまっていた。

「どうかしたのか醇子?」

「あなたの学生服姿ってこうやってまじまじと見るととても格好いいわね」

俺は恥ずかしくてどう振る舞えばいいかわからなくなってしまった。

すると俺はまだ学生帽をかぶっていないことに気がついた。すると醇子は静かに俺の学生帽をとった。そして有無を言わさずに俺にそれを被せようとした。だがそこは身長の差で届かない。醇子は背伸びをしながらも必死に俺に帽子を被せようとしている。俺は静かにしゃがんで醇子に届くようにしてあげた。

「あら…あなた」

「いいんだよ。俺は帽子を被せてもらってる身。これくらいしないと罰が当たるよ」

そう俺が言うと醇子は笑みを浮かべたまま俺に静かに帽子を被せてくれた。

「ありがとう、醇子」

「いいのよ、あなた」

そう会話を交わすと俺等はブリーフィングルームに向かった。見ると昨日同様他の隊の人までいるではないか。

「あら、丁度来たわね」

「あっ、ミーナ中佐。これって？」

「まあ座ってちょうだい」

「はっ、はぁ…」

俺と醇子は最前列の席に座らされた。するとそれを待っていたかの

如くミーナ中佐は話し始めた。

「はい、皆さん。今日は勲章の授与式にご参加いただいてありがとうございます」

”勲章の授与式？”

俺はそう思いながらもミーナ中佐の話を聞いた。

「それでは石井少尉。前に」

「えっ？」

俺は驚きながらも前に向かった。すると壇上にはペリーヌさんがいた。

「石井少尉、このたびは我が祖国ガリアを解放していただいて本当にありがとうございました。本当はこんなものではとても少尉の功績には及ばないのですが受け取ってはいただけないでしょうか」

ペリーヌさんは俺に勲章を箱に入れられた状態で渡してきた。

「これは？」

「レジオンドヌール勲章ですわ」

「これがですか」

俺が感嘆の笑みを浮かべながらそう言うとペリーヌさんは

「ご存知でしたの？」

と俺に聞いてきた。実は扶桑でもしばらく前に山本権兵衛元海軍大臣が受け取っていたのである。俺はそんな大臣と同等なことをしたのだと思うと非常に嬉しかった。本当は命令に背き独断専行をしたのだから厳罰も覚悟していた。にもかかわらず俺を‘英雄’と称えてくれるがリアを嬉しく思った。

「えぇ…。前にも扶桑で山本海軍大臣が受け取りましたから」

「そういえば前に扶桑人がこれを受け取ったというのは聞いてはいましたわ」

俺は不意に不安に思った。俺がこんな名誉高き勲章を授かっていいのかと

「ペリーヌさん」

「どうかしまして？」

「本当に俺がこんな物を受け取ってもよろしいのですか？」

「どういうことですの？」

「いや…決してガリアをバカにしているとか言うわけではなくて俺がこんな名誉ある勲章を受け取れる立場にあるのかどうかと…」

そう俺が言うとペリーヌさんは安心した様子で俺にこう言った。

「是非とも…受け取ってください。准尉は我が祖国を解放していた

だいたのです。祖国を解放していただいてそれ以上の喜びは今の私にはございません」

俺は本当にこれをもらってもいいと認められたようだった。座っていた他の隊の人たちも俺に拍手を送ってくれた。

「ありがとうございます。少尉。これは大切にさせていただきます」

そう俺は言って静かにそれを受け取った。

「石井少尉」

「はい？」

「あなたはもう立派に少尉の顔よ。これからまたこの部隊が再編成されたらよろしく頼むわね」

と俺に言ってきてくれた。俺はそう言われて迷うことなくそれを受け取った。するとミーナ中佐は他の隊の人がいる前で堂々の第５０１統合戦闘航空団の解散宣言を行った。

その後俺と醇子は部屋に戻った。俺は一応片付けを始めた。この片付けというのは何も醇子が帰るからと言うわけではない。俺が今日がリア地方一帯のネウロイを殲滅させたからこの部隊も存在理由が無くなってしまったのだ。と言うことはじきに正式な解散命令が来るはずだ。そんなときにあたふたしたくはないから少しずつ片付けておこうと思ったのだ。醇子がこういうときに手伝わないわけがない、俺はいいと言ったのだがどうしてもと言われて断れなかった。

「あなた…これは…？」

「あぁ、その‘大学’って書かれているところに入れておいてくれ」

「は〜い」

俺が本棚の教科書をしまっていると不意に醇子は

「あら？」

と言う声を漏らした。

「どうかしたの？」

「この写真はな〜に？」

と言われて俺は醇子の手渡した写真を見た。それは俺等帝大野球部が史上初のリーグ優勝を成し遂げたときの記念写真だ。皆であの時は優勝決定戦の翌日までずっとどんちゃん騒ぎをしていたことが目に浮かんでくる。

「あぁ、それは俺のいた帝大野球部が初めて六大学野球で優勝したときの記念写真だよ」

「そうなのね、でもなんだかあなた疲れているように見えるわね」

実はこの時俺はサヨナラホームランを打ったこともあり胴上げをさせてもらったのだが、これがどうもよくなかったらしい。初めて胴上げされたと言うことあったのだろうが少し気分が悪くなっていたのだ。勿論その後のどんちゃん騒ぎでそんなのは吹っ飛んでしまったのだが…。

「実はね…」

と俺は今書いているようなことを言ったすると醇子はクスッと笑いながら

「あなたらしいわね」

と俺に言った。

醇子の手伝いの甲斐もあって片付けは一応終わった。もしかしたらまた使うかもしれないと思ってすぐ使いそうな教科書や本は箱の一番上に入れておいた。元々一番最後にここに入隊したのだから荷物もそこまで多くもない。

「ありがとう醇子、おかげで助かったよ」

「ふふ、どういたしましてあなた」

そう二人で会話を交わすと俺は風呂に向かった。

もうすぐ解散と思うとなんだか寂しくもなってしまう。そう思っていると隣に入っている貞治君が俺に

「石井さん、どうしたの？」

と訊いてきた。本来ならば今日帰宅する予定だったのだがあの嵐の影響で帰ろうに帰れずという状況に陥ってしまいやむを得ずミーナ中佐の計らいでもう一泊させてもらうことになったのだ。父親は俺に貞治君を任せて体を洗っている。

「何でもないよ貞治君」

「ウソだ！！」

「えっ！、どうしてわかったの？」

「だってさっきから暗い顔してるんだもん！！」

貞治君が言うには俺はそうだったらしい。すると隣から

「や～い、石井」

とハルトマンさんが俺にそう言ってきた。

「石井はウソつくのヘタなんだからダメだよ～」

そうハルトマンさんが言った直後にゴツッと言う音が隣から聞こえてきた。

「いった～い、もぅトゥルーデ、ひどいよ～」

「お前がそんなことばっかりしているからだろう！！」

隣の会話を聞いていたのだろう貞治君は俺に

「石井さんのいるところっていつもこんななの？」

と訊いてきた。俺は

「う〜ん、あんまり大声じゃ言えないけど戦闘の時とか訓練の時以外はこんな調子かな」

と困りながらも俺は答えた。ここはタダでさえ声が反響するから向こう側に聞こえないように細心の注意を払った。バルクホルン大尉はともかくハルトマンさんに聞かれたら後々大変な目に遭うからだ。

「そうなんだ〜」

「でもね貞治君、みんなは世界のスーパースターなんだよ」

「そうなの？」

「あぁ、みんな自分の国のために命を賭けて戦っているんだ。勿論俺もだけどね」

「凄いんだね、ウィッチって」

そう言うと貞治君はどうやら落ち込んでしまったようだ。彼には魔法力がない。元々男性で魔法力があることが珍しいぐらいだから当然のことなのだろう。俺はそっと話しかけた。

「大丈夫だよ…自分が好きなことをずっとやっていけばきっと君もスーパースターになれるよ」

「本当？」

「あぁ、本当だとも。君は野球選手になりたいんだろう？」

「うん」

「練習を頑張れば君だってホームラン王になれると思うよ」

「本当かな、でもどうして？」

「えっ！？、そんなの簡単だよ、君は王君だろう？」

「えっ！」

俺はそう言うと貞治君の肩を軽く叩き

「いいかい？、君には素質があると思う。だから諦めないでずっと努力をし続けるんだそうすれば本当にホームラン王になると俺は確信してるよ。君のその目がそう言ってるんだ」

と耳元で軽く囁いた。すると

「わかった！！、僕頑張るよ！！」

と貞治君は大きな声でそう言った。

「あぁ、その意気だ。頑張るんだよ！！」

「うん！！」

そう貞治君が言ったのを見届けて俺は風呂を上がった。

俺が風呂を上がって外に出ると運が悪いことにハルトマンさんがいた。

「あっ、ハルトマンさん！！」

なんだかハルトマンさんの笑顔には恐怖を感じる。と同時に俺には悪寒が走った。

「石井…私に聞こえてないと思ってるの？」

「な、何のことですか？」

「ふ～ん、いいの～？。とぼけちゃって…奥さんに言っちゃうよ～」

俺は全てを見透かされていたようだ。そうなると俺は非常にまずい。

「すいません。あれはついついのことで…」

と俺が言うと後ろからミーナ中佐もやってきた。

「あら、石井さんにエーリカじゃない。どうかしたの？」

俺は逃げようとしたが時既に遅かった。

「あらあら、そういう事だったの。丁度いいわ、石井さんこれから…」

そういえばまだミーナ中佐のお説教をまだ俺は受けていなかったのだ。こういうときは不運というのは重なるもので前から醇子もやってきた。

「あらあなた。それからハルトマンさんにミーナ隊長。うちの主人がどうかしましたか？」

「あぁ、実はね…」

そう言うとミーナ中佐は俺を抑えた。と同時にハルトマンさんが醇子の耳元で今あったことを全て囁いた。

「あらあら…そういうことなのね、あなた」

「えっ、いや…その」

俺があたふたしているとミーナ中佐が

「じゃあ石井さんにこれからみんなでお説教しましょうか」

と言った。すると

「そうね…そうしましょうね、あなた」

「私も私も～」

「あ、いや…その…」

俺が躊躇っていると、ミーナ中佐と醇子は

「「いいわよね？」」

と同時に言い返した。もう俺が逆らうことなんて出来るわけがなかった。

と醇子もハルトマンさんもそう言った。俺に逆らう余地なんて無か

った。それから俺は自分の部屋でたっぷりお説教を受けた…。その罰なのかは知らないがその晩は寝るときに醇子がとても強く抱きしめてくれた、苦しくてよく眠れなかった…。

86話　Last game

翌朝、食事を済ませると、俺は一人、野球のユニホームに着替えてグランドに向かった。

「ここのグランドとももうすぐお別れか」

俺はしみじみとそう呟いた。今までのことが走馬燈のようによみがえってくる。

”最初…ここに来たときはとても不安だったんだよな。初の男性ウィッチだったし…そうそういきなり准尉階級で驚いたんだっけ。その後皆と自己紹介をしてすぐに打ち解けたしな、その後大学院への無試験入学が決まって…そうそう、あの後だったなバルクホルン大尉の妹のクリスさんに会いに行ったのは。そしてその後だ醇子が竹井大尉としてここに赴任してきたんだったな。そしたら最初から醇子は俺にもうアタックしてきてくれたんだよな。俺も次第に醇子に惹かれていったし…そして念願の大下さん達との野球の試合も出来てしかもサヨナラホームランまで打って醇子にプロポーズも出来て…。そしていろいろあったけどこのグランドで一昨日は試合をしたんだよな…。そして、俺はガリアを解放した”

俺は不意に涙がこぼれてしまった。いつもは湯水のようにあって当たり前と思っていたこのグランドもいざお別れがわかるとなると妙に寂しい。いつまでも泣いているわけにはいかない。俺はここに最後のお別れをしようと思ってきたのだ。早速俺はバッティングを始めた。

”せっかくだから本物の野球をしよう”

そう思い俺はいつも通り硬球でバッティングをした。みるみるボールは外野席まで飛んでいく、まるで虹のように…。

１０球ほど打った頃だろうか、俺は目の前にボールがないことに気がついた。

「あれれ?。さっきまでそこに6ダースくらい合ったんだけど」

俺は当たりを見渡した。するとそこには５０１と醇子がユニホーム姿でそこに立っていた。

「石井さん」

「どうかしたんですかミーナ中佐?。みんなでユニホームなんかに着替えて」

「石井さん、私たちは家族って言ったわよね」

「えっ?、えぇ…」

「私たちに抜け駆けてそういう事をするのはダメよ」

「って言うことは?」

「あなた、私たちあなたと勝負がしたいの」

「勝負?」

俺がそう訊くとマルセイユ大尉が

「私が勧めたんだ！！。お前と最後に勝負をしたらいいんじゃないかってな！！」

と間を割ってそう言った。なるほど俺との勝負か…。

”最後だし…せっかくだからみんなでやるか！”

俺はそう心の中で叫んだと同時に

「いいですよ！！、やりましょう！！」

そう言うと早速勝負は始まった。

・・・

「まぁね、伊達に六大学野球経験してないからね」

「くすっ…」

今日はキャッチャーを醇子が引き受けてくれている。まさに女房役だな…

・・・

「そうか」

と声が小さくなってしまう。

「でもね」

すると醇子は急に笑顔になった。そして

「この勝負は勝たせてもらうわ！」

と元気よく言ってきた。ここまで言われたら全力で相手に挑まないと失礼だ。帝大も俺が入学した当初は野球部はＡクラスになんかは入れなかった。いつも最下位争いをしていたようなチームだった。そんなチームにも早稲田や慶應といった上位のチームはいつも全力で俺等の相手をしてくれていた。だからこそ俺等も全力で立ち向かった。‘勝負の精神’とでも言えばいいのだろうか。俺は六大学野球で全力プレーというのはどんなものなのか知ることが出来た。だからこそ今は手を抜く事なんて絶対に出来ない。

「あぁ！！、俺も全力で行くよ！！」

俺は笑顔でそう答えた…。

・・・

「いよいよお別れね…あなた」

見るからに悲しそうな目で俺にそう醇子は言ってくる。

「そうだね…俺も寂しいよ。でも俺の部隊はこれで解散だ。扶桑に帰ってくればいつでも会えるよ」

「でも…私は寂しいわ」

すると俺は醇子の左手を取った。

「この指輪は俺が贈ったものだ。だから寂しかったらあのユニホームと指輪を思い出して」

すると醇子はようやく笑顔を取り戻して

「えぇ…」

と言い返した。すると後ろの方から坂本さんがやってきた。

「あぁ…二人とも」

「どうかしたんですか坂本さん？」

「美緒、どうかしたの？」

前の部隊で醇子と坂本さんは同じだったらしく、こういうとき醇子は坂本さんのことを名前で呼ぶのだ。

「実はな、大尉に５０１への出向命令が出ていたんだ」

「えっ！？」

醇子は酷く驚いていたようだった。

「理由は５０４へのストライカーユニットなどの移送の際の補助だそうだ」

坂本さんが話していく度に醇子の笑顔がよくなっていく。そのスピードと言ったらストライカーの何倍もの速さだ。勿論俺も嬉しい。どうやらここに残れると言いたいことだそうだ。

「ということは美緒…私、もしかして」

「あぁ、残留だな」

すると醇子は笑顔で俺に飛びついてきた。

「やったわ！！、あなたとまたここにいられるのね」

「おい醇子…恥ずかしいよ」

俺が離そうとすると

「ダメよ、離れないからね…」

「おいおい…」

俺がそう言うと醇子は俺を見ながら笑顔でいつものように

「上官の…？」

と言ってきた。幾ら中尉に俺が昇進したとはいえども醇子は大尉なのだ。逆らおうに逆らえない。ただハルトマンさんなどとは同等になった。何もなければいいのだが…。

「石井准尉…いや、今は石井少尉だな」

後ろからやってきたのはあの‘赤ズボン隊’のメンバーだ

「石井少尉、大尉をよろしくお願いします」

とルチアナ少尉が言った後に

「大尉としばらく買い物に行けなくなるのは寂しいけど…少尉、大尉をよろしくね！」

とクレスピ曹長から、そして

「石井少尉、その大尉をよろしく頼むわよ」

とフェルナンディア中尉は言った。

「わかった。皆さんも頑張ってくださいね」

そう俺が3人に言うと3人はもちろんという自信に満ちた顔で俺を見た。

５０４部隊と５０２部隊が飛び立った後最後に戻っていくのはア

フリカ部隊だ。

「石井！」

後ろから来たのはマルセイユ大尉だ。

「どうかしたんですか？」

俺は大尉に訊いた。すると

「今度は私が勝つからそのつもりでいろよ！」

と俺に言ってきた。口元は緩んでいたがその自信は俺にも来る物があった。

「勿論ですよ、ただ俺も負けませんけどね…」

俺もいつでもいいという意味を込めてそう言った。すると大尉は笑顔のまま輸送機に乗り込んだ、入口では大尉に気づかれないようにベットゲン少尉が俺にお礼の意味を込めてお辞儀をしていた。まもなく輸送機は飛び立っていった…。

皆が帰ってしまい基地の中は妙に閑散としていた。貞治君も先ほど送ってきてしまったから本当に静かだ。帰り際貞治君は

「石井さん！、頑張ってね！」

と笑顔で俺に大声で言っていた。

「あなた」

いきなり後ろから俺は囁かれて驚いてしまった。

「醇子！、どうかしたのか？」

「ミーナ中佐がミーティングルームにって」

「そう…わかった、じゃあ行こうか」

「えぇ！」

そう言うと俺は醇子と手をつないだままミーティングルームに向かった…。

87話　家がない…！？（前書き）

87話　家がない…！？

まだ時間にすると昼過ぎだった。

「ねぇあなた」

お茶を一緒に部屋で飲んでいた醇子が俺に話しかけてきた。

「どうかしたの醇子？」

「明日、ロンドンにお買い物に行かないかしら？」

実を言うとつい最近まで俺はあまりお金がなかった。勿論その理由は愛する醇子のための指輪代だったのだからおかしな事は全くもってない。だが少尉昇格とガリア解放の特別手当が出てその不安もなくなった。今手持ちでだいたい６５ポンドほど有る。俺も明日は別に用事もなかったからそうすることにした。

「いいよ。別に明日は用事もないから」

「よかった。ありがとうあなた」

俺は一つ気になったことがあった。俺と醇子だけで行くのかそれとも他の人も連れて行くのかと。別に迷惑とかそういうわけではないのだがエイラさんが一緒だとまた二等がどうだこうだで面倒なことになるのだ。

「ところでだけど…」

「うん？」

「明日は誰か一緒に行くのか？」

「えぇ、エイラさん達に行かない買って誘われたの」

”ふっ、思い知ったカ、石井！！”

そんなことを思っているエイラさんの顔が頭の中に浮かんでくる。
更に俺は気になったので

「明日は何でロンドンまで行くんだ？」

とも訊いた。すると

「何って列車に決まってるじゃない。あなたもその方がいいでしょ？」

列車で行くことはわかっているのだが問題はその後だエイラさん達と行くとなるといつもの俺の行動が醇子にばれてしまう。況してやエイラさんのことだから誇張するに決まってる。

「ところでその列車について何だけど」

と俺が切り出すと

「三等で行かないかって？」

と醇子は言い返してきた。俺の予感はいささか間違ってはなかったのだろう。多分エイラさんからの入れ知恵だろう。

「ど、どうしてそのことを？」

俺は慌てながらも聞き返した。

「エイラさんから聞いたの。あなたがいつもケチケチして三等に乗りたがってるって」

やっぱり俺の事をいくらか誇張しながらエイラさんは醇子に入れ知恵していたようだ。

「それでね」

まだ醇子の話には続きがあるようだ。

「えっ？」

「エイラさんが私にあなたのそういうところを治して欲しいってお願いされたの。だから…」

なんだか非常にいやな予感がする。こういう状況はなんだかミーナ中佐に呼び出しを食らったときのようだ。威圧感むき出しでしかも太陽の位置が災いして醇子の笑顔が暗く見える。俺は怯えながらも

「だ…だから？」

と聞き返した。

「お説教よ」

とうとう醇子の笑顔にまで背筋に何かが走るようになってしまった。
それから俺はみっちり1時間近くお説教を受けることになった。

なんだかとても1時間とは思えないほど濃厚なお説教となった。
醇子の本性がわかったような気がした。

「…何を考えてるの?。あ・な・た」

どうやら背筋も慣れてしまったようだ。もう何も感じない。

「な、なんでもないよ…」

俺がそう言うと醇子は俺の顔をのぞき込みながら

「本当?」

と訊いてきた。ここまで来ると逃げように逃げられなくなってしまう。が、とうとう醇子のお説教も終わりを迎えたようだ。

「ふぅ…まぁここまで言えば大丈夫かしらね」

ようやく醇子の許しを得たようだ。このお説教で俺はブリタニアにいる間、三等に一人であろうと誰かと一緒であろうと乗ってはいけないと決めさせられた。それはエイラさんとした約束を遙か上を行くものでもし三等に乗れば後でとんでもない目に遭うらしい。早い話が三等に載れば罰を受けると言うことだ。まぁ俺は怖いもの知らずではないから無理をして三等なんかに乗って罰を受けたくもない。
その時である

「待って、醇子」

俺は急に醇子を呼んだ。というのも扶桑に帰ってから学校を通うのには電車で通わないと行けない。勿論通学定期券を買うつもりなのだが二等車の通学定期券なんて扶桑には俺の知る限りない。学生は三等で当たり前なのだ。

「どうしたのあなた？」

「扶桑ではどうすればいいんだい？」

「あら…また言って欲しいの？」

「いや…そういうことじゃなくて大学に通うときは定期券なんだけど」

そう言うと醇子は俺と同じ事を思ったらしい。この辺はさすがリバウの貴婦人，だけあって

「いいわ…扶桑にいるときは不問にしてあげる」

と言ってくれた。早い話が扶桑なら一等だろう三等だろうと構わないと言うことだ。

「ありがとう、醇子」

俺は改めてお礼を醇子に言った。するとさっきまでのお説教の笑顔とは違い醇子の顔にはいつも通りの笑顔に戻っていた。

俺はひとまずミーティングルームに向かった。ここでお茶を飲むことにしたのだ。するとリーネさん達もそこにはいた。

「あぁ、リーネさんに宮藤さん、それからペリーヌさんまで」

と俺は言った。

「あっ、石井さん。これから紅茶を飲むんですけどよかったらいかがですか？」

とリーネさんは俺に言ってきた。醇子はというと

「あなた、いただきましょう」

と言っているから俺もそうすることにした。俺は久しぶりに外にあるバルコニーというかテラスに向かった。今までは部屋で飲むことの方が多かったからだ。

早速俺等は紅茶を飲み始めた。ここのテラスからは晴れている日はガリアがよく見える。例えるならば冬の晴れた日に横浜港から千葉の木更津が見えるようなものだ。今日はとても綺麗にガリアが見える。

「綺麗ね…あなた」

「あぁ…こうみるかぎりではね…」

俺と醇子は飲みながらそんな会話をしていた。俺はまだ自分の力でガリアを解放したような気にはなっていない。むしろ誰かが助けてくれたのではと思うくらいだ。でも

「石井少尉には感謝の気持ちで一杯ですわ」

「私もペリーヌさんと同じです。私の故郷のブリタニアとガリアを救っていただいて本当に感謝しています」

「石井さんは凄いです。私よりも後に入ったのにこんな大仕事やってのけるなんて」

とペリーヌさん、リーネさん、宮藤さんの言ってることからして本当に自分の力で解放したのだろうと思うことぐらいは出来る。

「ありがとうございます、皆さん。でもこれからは皆さんにも頑張ってもらわないと。ペリーヌさんとリーネさんは祖国の復興、そして宮藤さんには学校の勉強をね…」

そう俺が笑顔で言うと三人はもちろんという顔をしていた。するとミーナ中佐がそこにやってきた。

「石井少尉」

俺は階級名で呼ばれて幾分驚いてしまったがすぐに取り直して

「どうかしたんですかミーナ中佐？」

と聞き返した。すると

「あなたに家族からお手紙が届いているの」

とミーナ中佐は言いながら俺に手紙を渡した。手紙の裏には東京都葛飾区小松　石井　文子　と母親の名前が書かれていた。

「なんて書いてあるんですか?」

俺は宮藤さんにそう訊かれた。だからみんなの前で読むことにした。

「拝啓いかがお過ごしでしょうか?。こっちは元気です。といっても元気だけなのは体だけです…ん?」

ここまでだけで何かいやな予感がしたがとりあえず続きを読むことにした。

「このあいだこの付近一帯は台風の影響で壊滅的被害を受けました。我が家も一応は形を保ってはいるのですが一階が浸水してしまいました。あなたの部屋は特に問題はなかったようです。そこでなのですが母さんは千葉の実家に、父さんは会社の寮に一時的に移住しています。もし扶桑にじきに帰ってくるのであればその時は連絡をしてください。それではお体にお気をつけて今後の生活を楽しんでください。あぁ、もうすぐ帰ってくるんでしたね。 追伸、一階の浸水の復旧工事は全くめどが立っていません。この間大工さんに聞きに行ったところヘタをすると一年近くはかかる見込みだそうです」

俺は手紙を読んで唖然としてしまった。なんとこっちに来ている間に帰るべき家を失ってしまったのだ。勿論周りの人も俺がしゃべっていたのだから読んでいるも同然だ。

「石井さん、困ったわね」

ミーナ中佐が第一声を上げた。

「そうね…どうしましょうかしら、あなた?」

それに続いて醇子も俺の事を心配している。すると宮藤さんが突然

「私の家は？」

と大声で訊いてきた。

「え、宮藤さんの家って…」

「鎌倉です」

まぁ鎌倉なら横須賀線が通っているから一応通学は可能である。況してや俺はいつでも大学院も卒業できる身だから基本的には朝遅めに登校しても問題ない。

「いいじゃないあなた。そうしましょうよ。ねっ！！」

醇子がなぜか偉く張り切っている。

「宮藤さんの家族はいいって言ってるの？」

「あぁ…多分大丈夫です。部屋も一応余ってますから」

「ほらあなた。いいって言ってるんだから」

醇子と宮藤さんの頼みを俺は拒否することが出来なかった。俺は

「わかりました。それじゃあしばらく厄介になろうと思います」

と言った。すると宮藤さんはとても喜んでいたようだ。

「石井さんにいつでもこれで勉強を教えてもらえますから、私もう怖くありません試験」

そう宮藤さんが言うと

「ぷっ…もう芳佳ちゃんったら」

「まぁ石井さんがいれば大丈夫ですわね」

「あらあら、よかったわね宮藤さん」

と皆口々に俺の帰る場所が見つかって安心してくれていたようだ。

醇子も

「よかったわね、あなた」

ととても喜んでくれていた。まぁ人に何かを教えるのは俺も嫌いではないと言うよりは好きだから勉強を教えることぐらいどうって事はない。俺は帰る場所が見つかったという喜びと同時にまたいつもこうやって話が出来ると思えて嬉しかった…。

88話　Ｏｎｉ－ｇｏｋｋｏ

紅茶を飲み終えると俺は部屋に先に戻った。醇子が来る前までに報告書（レポート）は終えておこうと思ったのだがそうはいかなかった。それでも全体の9割方は完成していた。後はコメントを書くぐらいだ。このコメントというのが非常に難しい、何せこの電気式ストライカーは改良を今も重ねていて常に性能が変わっていってしまうのだ。シャーリーさんのＰ－５１と同じようなものだ。

俺はペンの手が止まってしまう。何を書けばいいのだろうか…。

「あなたご飯が…あら？」

「石井さん、その分厚い辞書みたいなのは何ですか！？」

後ろから醇子がやってきた。見ると宮藤さんも一緒だ。

「これは論文だよ。宮藤さん。これを提出すれば卒業できるんだ」

すると宮藤さんは俺の書いた論文を見た。

「電気式ストライカーの戦闘力並びに性能・特性について…」

俺の論文のタイトルはいつもそんな具合だ。俺はヘタに格好つけてタイトルを書くよりも普通に報告したいことをタイトルにした方がいいと思っている。宮藤さんは俺の報告書をぱらぱらと見始めた。俺は花とかの絵を描くのは嫌いだが製図はそこまで不得意ではない。

「うわ～、石井さんこれ全部一人で書いたんですか？」

俺は凡(およ)そ１０００ページくらい書いた。例えるなら扶桑の時刻表半年分ぐらいだ。そこに俺はびっしりと報告すべき事を書いている。ここまでしているのだから、逆にこれだけでは卒業できないと言われたら俺はどうかしてしまいそうだ。

「うん。一応ね…」

するとそれを見た醇子は

「あらあなた…私のことよりもストライカーの方が大事なのかしら？」

と訊いてきた。

「な、何言ってるんだよ！」

「だって、ここまで事細かに説明できるんだもの」

「それはあくまでこれが研究材料だからだよ。しかも…」

「しかも…何？」

「その…醇子とストライカーだったら醇子を取るに決まってるだろ！！」

「どうして？」

「だって…その…ストライカーは何度でも新しいのに取り替えられるけど君はこの世界でたった一人しかいないだろ…」

俺は恥ずかしくてどう説明していいかわからなくなってしまった。
すると醇子は笑顔で
「冗談よ」
と俺に言ってきた。
「えっ！」
「ちょっとからかっただけよ。でもよかったわ」
「何が？」
すると醇子は宮藤さんがいるのにお構いなく俺に抱きついて
「あなたにそんなことを言ってもらえたから…」
と笑顔で俺に囁いた。それを見て宮藤さんは紅潮していた。
「お、おい醇子、宮藤さんが」
「あらやだ、そうだったわ！！」
と我に返って醇子は俺から離れた。すると宮藤さんもようやく落ち着いたようだ。
「石井さん、食事の用意が出来ました」
「行きましょうあなた…」

「あぁ、そうだったね。行こうか」

宮藤さんと醇子に連れられて俺は部屋を出た。

早速俺は食堂に向かった。この食堂とももうすぐお別れだ。そんなことを言っていると全ての物にそう言う思いが生じてしまってきりがない。いつも通り醇子は

「はい、あなた…」

と俺に食べさせてくれる。他の人たちもそれが当たり前のような顔をしている。勿論ルッキーニさんとかにはいじられたりはするが…。

「みんなちょっときいてくれるかしら?」

するとミーナ中佐が突然立ち上がって俺等にそう言った。するとミーナ中佐はこう続けた。

「私たちももう一緒にいられる時間が短くなったわよね。だから思い出作りにと思って明日は私も含めて全員でロンドンに行こうと思うの。勿論列車よ」

そう言うと皆はとても喜んでいるようだ。ペリーヌさんも坂本さんが行くならと行くことを決意したようだ。しかしながら俺は少し引っかかったところがあった。

「ミーナ中佐?」

「どうかしたの石井さん」

「その…ミーナ中佐は」

「勿論三等以外よ」

俺はため息を吐いた。すると待っていたのは醇子とエイラさんの視線だった。

「石井、ちょっと来イ！」

「あなた…さっきいったわよね？」

「ひっ…」

俺は昼食を食べ終えた状態で話を聞くことになったのでもここに残る必要はなかった。早い話が俺は逃げたのだ。俺は一目散に走り始めた。

「あっ…」

「逃げタ…ナ！！」

こうなると男女比の関係から俺は全員に追われる羽目になる。前にルッキーニさんがこういう目に遭ったことを俺は覚えている。その時ルッキーニさんは警報装置を起動させたそうで後々大変なことになったと言っていた。だから俺はその場所には出来るだけ近づかないようにしながら逃げ回った。するとルッキーニさんはこういうときは追いかけるのに一所懸命になる。

「シャーリー」

「おぅ、あたしの実力を見てろ！！」

そう言うとシャーリーさんは突然加速しだした。勝負をかけているようだ。俺も一応野球で足は鍛えているからそれなりの自信はある。

”まずいぞ…このままじゃ捕まる”

そう思いながら俺も速度を上げた。

「石井～、そろそろ諦めたらどうだ～？」

「無理に決まってるじゃないですかシャーリーさん～」

”くそ…こうなったら”

俺は曲がり角で急にスライディングをして進路を急に変えた。案の定シャーリーさんは止まりきれずに少しオーバーランしてしまった。その間に俺はまた全速力で走り始めた。

１５分後、俺は環状道路の辺りまで逃げてきた。

「ここまで来ればもう大丈夫だろう…って」

「おーい、マテ～」

あの声はエイラさんだ。また俺は逃げる羽目になった。走っている最中に考えたのだがサーニャさんなら魔導心を使った俺のいる位置が特定できてしまう。ということは俺に逃げ場はないのだ。不運なことに前からも

「あの辺にいるはずだ」

というバルクホルン大尉の声が聞こえてきた。これこそまさしく挟み撃ちだ。

”まずいな…どうしよう”

俺は目の前が林とまではいかないが木々が生い茂っているところがある。ひとまず俺はそこに隠れることにした…。

「あっ大尉。石井はいなかったのカ？」

「あぁ、ミーナ達にも訊いてみたのだが、いなかったらしい」

「石井のやつ、帰ったらお仕置きダナ」

「あぁ、みんなでしてやるか！」

「にヒヒ～、シャーリー私たちもお仕置きできるのかな？」

「あぁ、そうだな～まぁお説教じゃないか？」

「おぉ～それは楽しそうだね～。私も頑張って探そうっと」

「そうだったな、さて私たちはもう一度向こうの方を…」

「ウン、じゃあサーニャ。私たちは向こうに行こウ」

そう言うと皆は駆け出そうとした。と同時に俺もほっと一息つこう

としたのだがそうはさせてくれなかった。

「待って！」

いきなりサーニャさんはそう言った。なんだかいやな予感がする。

「ン？、どうかしたノカ？。サーニャ」

幸いそこにいるのはエイラさんとサーニャさんだけのようだ。

「この辺りにいる」

サーニャさんにそう言われて俺は動揺が隠せなかった。しかも隠れることが出来そうな場所なんて俺のいるこの場所以外にない。すると運が悪いことに醇子もやってきたようだった。

「あぁエイラさん達」

「あぁ醇子大尉。石井がどうもこの辺にいるみたいなんダ」

「そうなのね…もう明範さんには後でたっぷりお仕置きをしてあげないと…」

「あの醇子大尉、それってお説教のことですか？」

「そうね…明範さんには一番それが効くみたい」

「ジャア私たちも一緒でいいかナ？。さっき、あいつには全員でしてやろうって事になってナ」

「いいわよ、その方があの人にも効くと思うわ」

もうここまで来たらとことん逃げるしかない。俺はその場に落ちていた石を投げて別のところで音が鳴るようにした。すると運良く三人ともそれに引っかかってくれたようだった。

”よし、今のうちに…”

そう思い俺は再び走り始めた。

5分ほど走っただろうか、もう俺は疲れてへとへとになってしまっていた。幸い周りには誰もいないからしばらく休むことにした。

「ふぅ…ここなら問題ないだろう」

と俺が呟いた、すると

「ふ〜ん、何が問題ないの」

と俺に誰かが訊いてきた。こういうときは事の重大さになかなか気がつかないものなのだ。

「何って、大尉とかに見つからないからって…」

俺にそう訊いてきたのはハルトマンさんだった。するとハルトマンさんは俺を掴んで

「石井、見〜っけた!!」

と叫んだ。俺は今すぐにでも手を振り払って更に逃げようとした。

だけど

「逃げるんだ?。もしここで私に何かあったら怒られるだけじゃ済まないと思うよ?」

とハルトマンさんに更に言われたためどうしようもなかった。間もなくして俺は皆に連行されてお説教を全員から受けることになったのは言うまでもない…。

89話　お説教とその後

それから2時間ほど俺はお説教を受けた。こういうときは上官だろうと部下だろうと関係ないようだ。時計補針を見ると既に5時を指していた。さすがにミーナ中佐は俺の足回りを考慮してくれて

「もう、正座じゃなくてもいいわよ」

とは言ってくれた。それでも少なからず足には来ていた。ミーナ中佐に試しに

「あの…そろそろ勘弁を」

と言ってみた。すると

「あらぁら、せっかく私たちが石井少尉のためを思ってやっているのに」

と立ち上がった。この2時間の間にこういう光景は何度もあった。こういうときは必ずといっていいほどミーナ中佐、坂本さんそして醇子の何かしらの罰があってミーナ中佐と坂本さんはげんこつ、醇子は平手打ちだ。公開処刑もいいところだ。さすがにもうなれてきたから大丈夫と言いたいところなのだがさすがにこの三人が立ち上がって俺に向かってくるときはいつまでたっても慣れない。

「す、すいませんでした！！」

俺が慌てて謝罪するとミーナ中佐も

「ふぅ、わかればいいのよ。石井さん」

とミーナ中佐は不満げに席に戻った。げんこつを俺にお見舞いすることが出来ないからだろうか。とまあげんこつだとか平手打ちだとかかなり痛そうなことを言っているのだがどうやら手加減をしてくれているようで、そこまで痛くはない。たんこぶも出来ないくらいだからだ。

それから15分くらいした頃だろうか

「さて…それじゃあ」

とミーナ中佐が言った。もしかしてと思い俺は大いに期待をした。だが

「私と石井大尉、それから美緒以外は解散ね」

とミーナ中佐は続けた。俺の期待はもろくも崩れ去ったようだ。

しかしいざ皆が去ってみると俺を三人は見ながら

「大丈夫かしら?、石井さん」

「あなた、もう大丈夫よ」

「もう怒らないから安心しろ石井」

それぞれそう言ってきた。俺は他の人から酷く怯えているように見えていたようだった。まぁその三人が俺に向かってきたら誰だってそうなるだろう。

それからしばらくして皆でお茶を飲み始めて徐々に俺も落ち着きを取り戻してきた頃に

「それにしても、どうしてお前は三等にそんなにこだわるんだ?」

と坂本さんは俺に訊いてきた。

「そうね…確かにそれは私も気になるわ石井さん。どうしてなのかしら」

「あなた、よかったら教えてもらえないかしら」

そう三人に言われたから俺は説明とまではいかないが話すことにした。

「俺はここに来るまでは学生でしたからね。扶桑でもどこかに出かけるときはずっと学生服でしたから二等なんて贅沢だって思って乗れませんでした。坂本さんとかなら軍人ですから一等、二等、三等どれに乗っても問題ないと思いますが俺等学生は暗黙の了解で特に用事がないときは三等意外に乗ってはいけなかったのです。勿論帰省だとか遠出だとかで乗ることはありましたけど」

「あら、じゃああなた部活の遠征とかはどうしてたの?」

すると醇子が俺にそう訊いてきた。俺のいた東京帝国大学は他の北海道、東北、名古屋、京都、大阪、九州の各帝国大学と毎年様々なスポーツでトーナメント大会を行っていたのだ。そのことを前に醇子には話したことがあるから、きっとそれに関係しているのだろう。

「遠征費次第でしたね。三等か三等寝台かでしたけど。だいたい５００キロを超えるか超えないかで決めていましたけどね」

「えぇっ！！、５００キロってだいたいベルリンからドルトムントと同じ距離よ。それまではずっと三等で行ってたの？」

ミーナ中佐は俺の話にとても驚いていたようだった。坂本さんや醇子でさえも驚いていたのだから。

「ということはお前は北海道だとか九州に行かない限りは？」

「えぇ、基本的には三等でしたよ」

「でもどうして？」

「えっ？」

「どうしてなのあなた？、疲れだってたまるでしょうし何より質が悪いじゃない。車掌の態度も全然変わってくるのはあなたも知っているでしょう？」

確かに醇子の言うとおりだった。二等と三等ではかなり差が出てくる。二等では俺等は乗客をお客様と思ってちゃんとしたサービスが受けられるし車掌もそれなりの対応をしてくれる。ところが三等は車掌は威圧的に俺等に対応する。キセルなどがいないか厳しく見極めなくてはいけないからだろう、勿論水なども駅の水飲み場に行かないと飲めない。そのことを醇子は知っているようだ。

「俺はそれでもいいんだよ醇子。列車が好きだからでもあるし仲間と一緒に話しながら乗るんだったら三等が一番だよ」

と俺は言った。すると他の人も理解はしてくれたようだ。

「そうだったのか…石井は別に三等にこだわるとかって言う訳じゃなくて三等に乗るのが当たり前だと思っていたのか」

「えぇ、そうなんですよ坂本さん」

「でも驚いたわ」

「えっ?、何にですかミーナ中佐」

「５００キロまでは座っていくというあなたたち扶桑の学生によ。私には考えられないわ」

「そうですね、ミーナ中佐達のカールスラントと扶桑の鉄道はシステムが全然違いますから。今度扶桑に是非いらしてください。案内しますよ」

「あらあら、それじゃあ楽しみにしてるわね」

すると醇子がいきなり飛びかかってきた。

「うわっ、じゅ、醇子!」

「ごめんなさいねあなた。私あなたがそんなことを考えていたなんて知らないで」

「いいんだよ、そういうときも誰にだってあるさ」

「…私を許してくれるの？」

「勿論だよ。許さないわけがないだろう？」

「ありがとう…あなた」

そう俺等が話しているのを見てミーナ中佐と坂本さんは

「あらあら」

「熱いな二人とも」

と俺等に言ってきた。すると

「でも…」

とミーナ中佐は言った。何かいやな予感がする。

「でもなんですか？。ミーナ中佐」

「明日は二等よ。ふふ」

そう笑顔で俺に言った。俺の予感もたまには外れるようだ。明日は別に二等であろうと俺は気にしないだろう話すことが出来る仲間…いや家族がたくさんいるんだから。

もう時間は６時半になっていた。早速俺は夕食に向かった。ルッキーニさんは明日が楽しみでしょうがないらしい。

「ねぇ、シャーリー」

「ん?、どうしたルッキーニ」

「明日はどこ行こうか~?」

「そうだな、美味いもんでも食べに行くか?」

「わ~い、やった~」

もうネウロイが来ないとわかっているからこそ皆ここまで安心しているようだ。ハルトマンさんも偉く楽しそうな顔がしている。

「なんでお前はそんなに楽しそうなんだ?」

「だって~、お菓子が買えるじゃん」

「全く…私は買わせないぞ」

「えぇ~、トゥルーデひどいよ~」

まぁハルトマンさんは早速雲行きが怪しくなってはいるが…。他の人話を聞いている限りだとリーネさんと宮藤さんは一緒に買い物に、エイラさんとサーニャさんも同じであるようだ。ペリーヌさんは坂本さんとミーナ中佐と一緒にどこかに向かうとは聞こえた。

「ねぇ、あなた?」

と醇子は皆の話を聞いて思ったのだろう。

「明日はどこに行きましょうかしら」

と俺にそう訊いてきた。

「そうだね…醇子はどうしたい？」

「私はあなたに付いていくわ、あなたの妻なんだから…」

「いいよ、君の行きたいところに行こう」

「えっ…でも」

「いいんだよ、いつも迷惑ばっかけてるからたまにはこうしないと罰が当たるよ」

「そぅ…わかったわ。それじゃあ買い物に行きましょう」

醇子がそう言ったので俺は

「わかった。そうしようか」

と俺は言い返した。すると醇子は喜んでいたようだった。

食事を終えると俺は風呂に向かった。するとおかしな事に気がついた。いつもとのれんが違っているのだ。違うというか今日に限って男性用と女性用の風呂が入れ替わっているのだ。すると先に来ていたルッキーニさん達も驚いていたようだ。

「あっ、石井」

「よお～石井じゃないか」

「ルッキーニさんにシャーリーさん、これは一体…」

「それがな～、わからないんだよ私たちにも」

「石井はどうしてこうなったかわかる～？」

「いえ、たぶん係の人が間違えたんじゃあ？」

するとミーナ中佐が

「そんなことないわ」

と言いながらやってきた。

「ミーナ中佐、それは一体？」

「たまには石井さんにも大きな風呂で疲れを取ってもらおうと思って、今日は風呂を入れ替えてみたの」

そう言うとそこにいた俺とルッキーニさん、シャーリーさんは納得した。

「でも、ミーナ中佐。他の人はこのことを…」

「大丈夫よ、多分ね」

「多分って」

「あら、また私に歯向かうつもりなの？」

俺は不意に前にもこういうことがあってげんこつを食らったことを思い出した。あれは入隊直後のことだった。善意で作ったボードを没収されてしかも独占していると言われてげんこつを食らったのだ。俺は同じ過ちを何度も繰り返したくない。

「いえ、なんでもないです」

「そう…それじゃあよろしくね。石井さん、ルッキーニさん、シャーリーさん」

そう言うとミーナ中佐は笑顔のまま去っていった。俺等もお互いに風呂に入ることにした。

やっぱり大きな風呂に入るのは気持ちがいい。すると

「ねぇ、シャーリーこの風呂せまい～」

「はは、我慢しろルッキーニ」

と隣から声が聞こえてきた。なんだかここに居づらくも思ったのだが気にせず入り続けることにした。この風呂にはしばらく入っていなかった。男性用の風呂が出来てから俺はずっと男性用にしか入っていないからだ。こういうのは早い話が初めてなのだ。それにしてもミーナ中佐はどうしてこんな事を思ったのだろう。他の人はどうかというと必ずしも皆がちゃんとこのことを判断は出来なかったようだ。

「あれ～なんで男用ののれんがあるんだろう?。まぁいいか…」

そう言いながらハルトマンさんは風呂に入っていった。

男性であろうと女性であろうと風呂に入る前には必ず脱衣所を通らなくてはならない。俺は基本的に一人で風呂に入るし。しかも寝間着も別にあるから服を結構乱雑に脱ぐ傾向にある。ハルトマンさんもそれに気がついたようだ。

「あれ～？、これって石井の…もしかして」

丁度それは俺が頭を洗っているときであった。基本的に頭を洗うとき俺は石鹸が入らないように目をつぶっている。だから当然のことであるが横はおろか前すら見えない。

「ふぅ…後は流すだ…」

「石井～！！！、入ってるのぉ？」

といきなり大きな声が聞こえた。どうやら風呂の入口からハルトマンさんが俺がいるかどうかを確認しているようだ。

「うわっ、ハルトマンさん！！」

「その声はいるんだね」

「えぇ、今日はミーナ中佐のご好意で風呂を入れ替えたんです」

「ふ～ん、だからのれんが変わってたんだ～」

「はい、そういうことです」

するとハルトマンさんも納得してくれたようで

「わかった～」

と言いながら戸を閉めて反対側の方に向かったようだ。しばらくすると隣の方でハルトマンさんの声が聞こえのだから。

「ねぇ、ここ狭いね～」

「ほら～シャーリー、ハルトマンもこう言ってるんだよ～」

「ははははは。確かにそうかもしれないな～。石井はいつもここに入っているのか～」

「あんなに石井はでかいのに、よくこの風呂で事足りるね～」

とそんなことを隣では言っていた。悪口なのかはわからないがまぁ俺は別に構わない。

体を洗い終わって俺は再び風呂に入り始めた。やっぱりこういうときは長風呂をついついしてしまいたくなってしまう。さっきハルトマンさん達も言っていたが無効の風呂は確かにここよりは圧倒的に狭い。足を伸ばしたらそれっきりだ。ただ入るのは基本的に俺だけだから特に気にはしていない。

”最後になるかもしれないな、この風呂に入るのも…”

俺はそう思いながら風呂に浸かっていた。すると

「あなた?、入ってるの?」

とまたドアの方から声が聞こえた。紛れもなく醇子だ。するとどうやら隣にも聞こえていたようだった。

「石井～一緒に入っちゃえば～？」

「よぉ～ヒューヒュー」

「こらリベリアン、それからエーリカも…」

「これぐらいしないとトゥルーデ」

「堅物、もう少し柔らかくなれよ～」

「こら、なにをするんだ！！」

と隣からヤジが聞こえた。俺が気がつかないうちにどうやらバルクホルン大尉も風呂に入ってきたようだ。

「…あ、あなた？」

「あぁ、入ってるよ」

「そう…あのね…」

「私も一緒に入っていいかしら？」

「えぇっ！！！」

俺は驚いてしょうがなかった。まさかやじられていたことが現実に

なるなんて…。俺はそう言ってもらえて嬉しいのだがここはあくまで軍隊だから他の人のことも考えて、ここは遠慮すべきだ。

「そうだね…さすがにそれはまずいんじゃ…」

「そう言うと思ったから、美緒！」

”えっ！？”

これには予想外だった。ななんと坂本さんまでそこに入るじゃないか。

「石井、私もいるから大丈夫だ」

「さっ、坂本さん。ダメですよ。こんな事？」

「ん？、何を恥ずかしがっているんだ？」

「当たり前ですよ！！。俺が先に上がりますからしばらく待っていてください！！」

ちょっとばかり一緒に入ってもいいかなとは思ったのだが、さすがにそれはやはりいろいろな意味でまずい。俺は二人を一旦外に追いやると急いで着替えた。

消灯ラッパが鳴った。まだ醇子は風呂から戻ってきていない。きっと水でも飲んでいるのだろう。

「寒いな…、湯冷めしたみたいだ」

どうやら俺は風呂で温まりすぎたらしくベッドのシーツがとても冷たく感じてしまうのだ。とそこに醇子が戻ってきた。俺は未だに寒くて震えていた。

「ただいまあなた…って、どうしちゃったの震えちゃって」

「あぁお帰り醇子。その…湯冷めしちゃったみたいで寒いんだ」

「そうだったのね…。じゃあこうすればいいわね」

すると醇子はいつも通り俺に抱きついてきた。

「どう?、これで少しは温かくなった?」

醇子が風呂上がりと言うこともあるが俺の恥ずかしさもあって一気に体は温かいを通り越して暑くなってしまった。

「うっ…うん。ありがとう醇子。もう大丈夫だよ」

と俺が言ったのだが

「ダメよ。すぐにまた冷えちゃうわ、今日もこのまま寝ましょう。…はぁ」

そう言うと醇子はあくびをしながら俺の言葉を聞く前に部屋の明かりを落とした。

「お、おい、醇子!!。…って」

「Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…」

気がつくと醇子はもう眠ってしまっていた。

「やれやれ、仕方がないか…」

”でもこういうのもいいな…”

俺はそう呟き、そして、そう思いながら眠りについた…。

90話　Certain

夜中に俺は目が覚めてしまった。どうやら醇子を抱きしめていて暑くなってしかも手も痺れてしまったようだ。

”ふぅ…水でも飲みに行くか”

俺はトイレに向かった後に食堂に向かった。前は一人で夜食を作ることもあったが今はそんなことは出来ない。醇子を起こしてしまうことになる。

食堂の時計の針を見るとまだ午前3時半だった。もうすぐ坂本さんが朝練を始める時間でもある。扶桑にいたときはこのくらいの時間に起きていたときもあった。それは試験期間の時だ、俺の友達は基本的に夜遅くまで勉強してそれから寝るという人が大半であった。俺はそれとは全くの逆で寄る早く寝て朝（友人によると3時半は夜らしい…）早く起きて勉強していたのだ。どちらがいいとは一概には言えないが俺の感覚だと朝といた問題をとくと意外と解き方を覚えることが出来た気がする。

”さて…水も飲んだことだし戻るか”

俺は再び部屋に戻った。

部屋に戻りベッドにつくと今度は醇子が

「くしゅん！！」

とくしゃみをしていた。見るとだいぶ布団から離れてしまっている。

”一緒に寝ようって言っておきながら醇子ってやつは…”

俺は笑みを浮かべながらそっと布団を掛けてあげた。するとそれをどうやら狙っていたようだった。いきなりがばっと起き上がって俺を布団に倒した。

「うわっ、醇子!!。いきなり何するんだよ!!」

俺は驚きながらそう醇子に問うた。

「ふふ…あなたの優しさを確かめようと思って」

「確かめる?」

「うん、ちゃんと布団を掛けてくれるかなって…」

「てことは醇子、わざと布団から…」

そう俺が更に続けようとすると笑顔のまま、また寝始めた。しかも今度は俺にくっつきながら。

「やれやれ…しょうがないな」

俺も笑いながら再び眠りについた…。

91話　出発前

結局俺はまた1時間半後の6時に起きた。人間の睡眠の周期は聞いた話によると90分、つまり1時間半だそうでそれに合わせて睡眠時間を調節すると寝覚めがいいとのことだ。俺は大抵6時間か7時間半くらいは寝ている。ただどうやらこれに当てはまっているので寝覚めはそう悪くはない。俺は早速起きると外に向かった。もうゲージなどは片付けてしまったから打撃練習は出来ないが素振りぐらいなら出来る。

”懐かしいな…、入隊した日もこうして素振りしてたんだっけ。そうそう、しばらくしたらエイラさんがやってきたんだよな。夜間哨戒で飛び立つサーニャさんを見て顔が赤くなってたよな”

するといきなりだった。

「赤くて悪かったナ…」

エイラさんがそう言ったのは。

「あっ、エイラさん」

「エイラさんじゃネーヨ、お前また私に痛い目に遭いたいのカ？」

「いえ、そんなことは…」

見るとサーニャさんも一緒だ。一応ネウロイは来ないとはわかっているがやはり油断は出来ない、エイラさんとサーニャさんは基地周辺の夜間哨戒を引き受けてくれているのだ。

「エイラ…そんなこと言っちゃダメ。石井さんが可哀想…」

「サ、サーニャ～」

「ごめんなさいね石井さん。エイラが酷いこと言っちゃって…」

「大丈夫ですよ、それより二人とも大丈夫なんですか？」

「えっ？」

「何がダ？、石井」

「今日これから出かけるんですよ？」

「私たちはこれから仮眠を取るからそれで大丈夫ダ」

「うん、私も楽しみだから大丈夫よ」

「そうですか、それじゃあまた後で…」

そう俺が言うと二人は行ってしまった。あの二人は本当に仲がいいようだ。きっと隊が解散しても一緒に行動をするのだろう。そんなことを思いながら再び俺は振り始めた。

海風は非常に心地いい。帝大にいたときも朝練はあったのだがあれは地獄と言っても過言ではなかった。扶桑の夏は朝から暑いというか湿度が高いから肌の具合が非常に悪い。何かがまとわりついているような感覚だ、しかもそれで日が出てくると尚更条件は悪くなる。ただでさえ汗をかきやすいのに更に汗をかかされてしまう。俺

は倒れたことはなかったが友人の何人かは暑さで倒れてしまったことさえもある。どれも日射病だった。幸いにも皆症状は軽かったが。こういう場合は基本的にはベンチに皆で運んで脇の下や首の両脇に氷嚢なりぬれぞうきんなどをおいて体を冷やして、その後意識が回復したら塩と砂糖を混ぜた水を飲ませていた。これでしばらく休んでいればすぐによくなった。ここではそういう事はないだろう。ただでさえ高緯度で涼しいし海風もあるからだ。

２５０回くらい振り終えると俺はバットを片付けて風呂に向かった。

”おぉ、のれんが変わってるな。またいつも通りか”

そう思いながら俺はいつも入っている小さな方の風呂に向かった。幸い、誰もいなかった。

早速俺は風呂に入った。坂本さんもよく言っているのだがやはり汗をかいた後の風呂は最高だ。シャワーではこの気持ちはわからない。

「ふぅ〜、今日はこれから出かけるのか…」

俺はそう呟いた。すると

「ほぅ、石井入ってるのか…」

隣から坂本さんの声が聞こえた。

「あぁ坂本さん」

「石井も今日は素振りか？」

「えぇ、体が鈍っちゃいますからね」

「そうかそうか。練習熱心なのはいいことだ。扶桑に帰ったらまたやるつもりなのか？」

「はい、出来るんだったらやりたいですね」

「ん？、その言い方だと出来ないかもしれないのか？」

「六大学野球に大学院生の出場は認められていませんしもうすぐ卒業できる見込みですから」

「お前のお得意の飛び級でか？」

「お得意だなんて…」

「はっはっは。お前は面白いやつだな」

坂本さんは偉く上機嫌のようだ。まぁそれならそれでも構わないのだが。

「ところでだがお前は今日はどうするつもりなんだ？」

「俺は妻と買い物に」

「ほぅ、せっせと家族サービスというやつか」

「まぁそんなところですね。大切な妻ですから」

「はっはっは。まぁせっかくだから楽しむんだな」

「はい」

俺はそう言うと風呂を上がって部屋に戻った。

廊下を歩くだけでも気持ちいい風が入ってくる。ここの立地条件は最高だ。

部屋に戻ると醇子はもう起きていた。鏡を見て髪をとかしている。こういう醇子の後ろ姿も可愛い…。鏡に俺の姿が映ったのだろう。

「あら、おかえりなさい。あなた」

と俺に行ってきた。

「あぁ、ただいま醇子」

「ねぇ、あなた。今日は何を買いに行こうかしら?」

「え?。君の好きな物でいいよ」

「そう…わかったわ。私、あなたに買ってあげたい物があるの」

「そうか…それは一体?」

「ふふ…お楽しみよ。さて私も準備が終わったから食事に行きましょう」

「う、うん」

そう言うと俺と醇子は部屋を出て食堂に向かった。一体何を醇子は俺に買ってあげたいのだろうか。

92話　In the train.

食事を終えると早速皆は準備を始めた。勿論俺も例外ではない、早速学生服に着替えた。朝風呂をしたこともあって着替えるとてもさっぱりする。醇子は海軍の軍服だ。俺にも一応届いてはいるのだが出かけるのにわざわざ自分が軍人であることを意思表示したくない。俺は学生なのだ。詰め襟と学帽そして革靴で十分だ。

「ふふ、あなたが学生服だったら私も着替えちゃおうかしら？」

俺はその時ドキッとしてしまった。醇子の服装は基本的には軍服と寝間着姿以外見たことがないからだ。

「きっ、着替えるって何に？」

俺は焦りながらもそう訊いた。すると醇子は

「冗談よ。せっかくだからお洋服も買いに行こうかしらね…」

と俺に言ってきた。俺はほっとしながら

「いいよ、そうしようか」

と言い返した。

３０分後俺等は駅に着いた。今日は一応４０ポンドほど基地においてきたので今は７９ポンドほど有る。これだけあれば醇子が欲しい物も特に問題なく買ってあげられるだろう。醇子の買い物は俺の買い物でもある。いつも心配ばっかり醇子にかけてしまっているの

だから、これくらいして当然なのだ。

「石井さん…切符を買ってきてくれるかしら?」

ミーナ中佐は俺にそう言った。どうやら昨日言っていたことを試しているらしい。ここで俺が三等の切符を買わなければいいのであろう。

「えっと…往復でいいですか?」

「えぇ、そうしてもらえるかしら?」

「わかりました、それでは…」

そう答えると俺は窓口に向かった。いつも通りの駅員さんだ。顔も覚えられてしまっているようだ。

「あぁ、いつものお客さん。今日もロンドンまでですか」

「はい、大人12人、子供1人往復で」

「えっと、三等でしたっけ?、お客さんいつも三等に乗ってるから」

後ろからの12人の視線が俺に降りかかっているをとても強く感じた。この時俺はいつも列車に乗るとき三等がいいというのを駅員に覚えられていてしまったのだ。

「いや、今日は二等で…」

慌てて俺はそう言い返した。

「そうですか…わかりました」

”珍しいな、この人いつもは三等に乗るのに…”

駅員も不思議に思ったのは一瞬だけですぐにいつもの笑顔の接客に戻った。

俺はおそるおそるミーナ中佐のところに戻った。

「切符を買ってきました…」

「あら石井さん」

と同時に俺は周りをとり囲まれた。これでは逃げように逃げられない。

「はい…」

どうやらこれは何かのだましだったようで、いつもの笑顔で

「どうもありがとうね！」

と俺に言ってきた。俺は慌てて皆に切符を配った。もうすぐ列車が来るからだ。

「さて…それじゃあ行きましょうかしらね」

ミーナ中佐の一声で俺等は改札口を通りホームに向かった。

列車に乗り込むと隣に座っていた醇子が

「あなた、どうかしたの?。不機嫌そうな顔をして…」

と俺に訊いてきた。どうやら俺の不機嫌さは顔に表れてしまっていたようだった。

「いや…列車がちょっと遅れてたからね」

俺は慌ててそう言い返した。実は俺等の乗ったこの列車はいま15分遅れて走っている。車掌に理由を聞いてもはっきりとした答えが返ってこなかったからずるずると遅れが出てしまっているのだろう。扶桑の鉄道ならこんな事は決してない。勿論雨や雪、事故と行った不可抗力がない限りではあるが。

「あら?、カールスラントでもこれくらいの遅れはよくあるわよ?」

向かい合わせに座っていたミーナ中佐が俺にそう訊いてきた。俺等の乗っている列車は4人で1ボックスの座席配置だ。4人と行ってもこっちの列車は大きめに作られているため。バルクホルン大尉とハルトマンさんも座っている。早い話が2人用の席を3人で使っていると言うことだ。それでもまだ余裕があるから問題はないのだが。

「石井、扶桑の列車はそんなに正確なのか?」

バルクホルン大尉は俺にそう訊いてきた。

「えぇ、扶桑では鉄道の遅れは秒で計算しますからね」

「秒、それはどういうことだ?」

「扶桑の西寄りでは鉄道の遅れを乗客に言うのは３０秒以上で俺の住んでる東側では路線にもよりますが１分以上で遅れ扱いになって駅員が乗客にアナウンスをします」

そう言うとミーナ中佐も驚かないはずがなかった。

「あら、扶桑の列車はそんなに正確なの？」

「扶桑ではそれが当たり前ですからね。昔から時間にうるさい国ですから」

すると醇子も話しに加わってきた。

「そういえばあなた将来、運転士になりたいとか行ってたわよね？」

「え、うん。まぁそうだね」

「ほぅ、石井の運転か…なったら是非乗りに行ってみたいな。ハルトマンはどうだ？」

「う～ん、面白そう。私にも運転させてくれるかな？」

「そんなことは無理に決まってるだろう！」

「えぇ～、頼むよ石井！」

「そ、そんなこと言われても」

「ふふ、石井さんたじたじね」

「み、ミーナ中佐まで…」

すると醇子が俺に寄りかかってきた。たじたじという言葉に反応したのだろう。

「醇子、どうしたんだ、いきなり」

「もう少しあなたのたじたじっぷりを見ていたいのよ」

すると案の定ハルトマンさんから

「おぉ～、二人は熱いね～」

とのヤジ。もう俺はおかしくなってしまいそうなくらい恥ずかしかった。車窓の風景もだいぶ建物が多くなってきた。終着駅のセント・パンクラスはもう目の前だった…。

・・・

私が明範さんのことをいつ好きになったのか、確か前にもそう訊かれたことが明範さん本人からあったわ。あの時は確か六大学の試合を見に行って一目惚れしたなんて言ったっけ。確かにそれも間違ってはいなかったのだけれど他にも理由はたくさんあるの。

その日、私は美緒と一緒に東京の明治神宮野球場にいた。

「美緒、どうして野球場に?」

「あぁ、５０１に入隊予定のウィッチが今から試合を行うんでな。」

「それって美緒、もしかして」

「あぁ、男性ウィッチなんだ。ほらあの選手だ」

見ると随分若く見える男性の人だった。身長こそ他の人に引けを取らなくらい高かったもののどことなく顔がまだ幼かった。

「あのユニホームは東京帝国大学ね」

「あぁ、そうなんだ」

「それと美緒、あの人随分若く見えないかしら?」

すると美緒は急に真面目な顔になったわ。いつものことだったから驚きはしなかった。それよりもこういう話になると美緒は真面目な顔になるから特に気にしなかった。

「彼は飛び級なんだ」

「飛び級！」

「あぁ、何でも中学を卒業したらすぐにこの東京帝大に入学したそうだ」

「そうなのね…石井さんって言うのかしら？」

私はスコアボードの名前を追っていった。見るとそこには石井と書かれていた。すると美緒は私に写真と履歴書のような物を見せた。

「これが彼の情報だ」

見るとそこには彼の出身、試験の成績、現在住所などの機密情報がたくさん書かれていた。こういうところの方が逆に目につかれないと美緒も思っていたのかしら。確かに誰も私たちの物を見なんかはしなかった。

”石井明範（いしいあきのり）さんって言うのね…”

私は履歴書の後ろに付いている証明写真のような扶桑海軍独特の彼の写真を見た。そこには詰め襟、学帽姿の凛々しい明範さんの姿が映っていた。私はこのときここまで格好いい男性はいないってはっきり思ったわ。学生服をここまで立派に着こなしている人なんて初めてだった。一気に私はその人の虜になった。

”はぁ…あの人ともう少し近寄れないのかしら…？”

そう思いながら試合を見続けた。

1時間ほどそれからたった。試合は石井さんのいる帝大がいい具合に攻めてはいるのだけれどもう少し攻めたいようなところだった。そこに待ってましたと言わないばかりに石井さんが打ったの。

「おぉ、いいあたりだな…って」

「美緒！、これもかして！」

すると私の丁度お腹の辺りにそのボールは落ちてきた。すると周りでは既に歓声が起こっていた。

「美緒…？」

「あぁ、わかっている。あいつはもしかしたら凄いことをやってのけるかもしれないな」

「そうね…」

”石井さん、私もあなたに会いたいわ。楽しみにしてるわね…”

この時私はそんなことを思っていた。

それから、はや1年近くが経って今はこうして明範さんの妻になっている。彼はいつも私のことを思ってくれているし私の言うことなら一通り利いてくれるわ、でも私も明範さんの悲しむ顔を見たくはないからあんまりなことはさせないんだけどね。

気がついたらロンドンに着いたようだわ。明範さんは私が

「一緒に降りましょう？」

って言ったら恥ずかしがりながらも

「えっ、うっ…うん」

と言いながら一緒に手をつなぎながら降りてくれたわ。今日は明範さんのために私が素敵なプレゼントを贈ろうと思うの。基地で服の冗談を言ったけどそれはあながち間違いではないの。

「おい…醇子」

すると私に明範さんは話しかけてきた。

「どうかしたの?、あなた」

「今日は何を買うんだい?」

私は不覚にも笑ってしまったわ。質問があまりにも直球(ストレート)過ぎるんだもの。言ってあげようかとも思ったけどやっぱり言わない。最後までずっと秘密で行こうと思うわ。楽しみは最後に取っておく物でしょ?。

「ふふ…秘密よ」

「えっ?」

「いいじゃないの、さっあなた。行きましょう」

そう言うと私は明範さんの右腕を抱きしめた。すると他の人も空気を読んでくれたわ

「それじゃあ石井達。帰りの列車に間に合うようにな」

「はい…了解しました」

「ふふ、こういうことを言うのはあなたの専売特許ね」

「もぅ…やめてくれよ…」

そう笑みを浮かべながら言うあなたはとっても素敵よ。私はやっぱりあなたと結ばれる運命だったのだと思うわ。でもちっとも後悔なんかしていない。大切な人とこうして歩いていられるのだから…。

93話　Civil　Clothes

俺と醇子は皆と別れると早速買い物に出た。何を買いに行くのかまだ俺にはわからない。

「なぁ醇子…いったい？」

「ふふ…あなたったら。そんなに訊いてばっかだと嫌っちゃうわよ」

「醇子…」

醇子は今日はなんだか意地悪な気もするがそれはそれでも構わない。次期にわかることなのだから。

気がつくと俺は醇子に連れられて洋服店の前にいた。ようやく醇子が俺に買いたいって言うものがわかった気がする。

「醇子、もしかしてだけど？」

すると醇子は俺にそれ以上言っちゃだめだと自分の口を人差し指で遮った。

「そうよ、あなたいつも学生服なんだもの。だからよそ行きの服も買っておいた方がいいでしょ？」

どうやら醇子は俺に服を買わせたいそうだった。実を言うと俺も学生服だけでは物足りないというか不安が少なからずあったのだ。学生服というのは値段などもあってそう何着も持てるものではない。汚れしまったりすると出かけることが重なっているときなどクリー

ニングに出せなくなったりして見窄らしくなってしまう。況してや学生服は学校の象徴だ。みだりに着崩したり等もってのほかだが、それ以前に大学を卒業してしまったら俺は着られなくなってしまう。だからこそよそ行きの服は必要なのだ。

「…そうだね、それじゃあ入るか？」

俺がそう言うと醇子は迷うことなく

「えぇ」

と言いながらその店の中に入っていった。

ここブリタニアは紳士の国としても有名だ。だから背広なんかはいくらでも売っていた。あんまり背広を着る機会は今まで俺にはあまりなかったそれこそ学生服で皆、事足りてしまうようなことばっかりだったから…。

「あなた…これなんかいいんじゃないかしら？」

醇子はそう言いながら店員と一緒に仕立てる生地を持ってきた。醇子の目利きはどうも悪くはないようだ。生地の色は明るい黒色と言えばいいのだろうか、とにかく自分に合いそうなものだった。

「凄いね…この生地気に入ったよ。これにしようか。」

俺は即決でこれにした。別に特にこだわりがあるわけでもないからこれで構わない。

早速俺は仕立てのための採寸を行った。意外とこう言う物は緊張

するものだ。

「お客さん、随分大きいんですね」

「そうなんですかね…？」

「主人は身長が高いですから…」

そんな雑談を交わしている内に採寸は終わった。店主が言うには夕方にはできあがるとのことだ。何でも偶々その生地があるからすぐに作ることが出来るらしい。それまで俺等は暇になったわけだ。

「それではお代の方は引き渡しの時に…」

「わかりました。よろしくお願いします」

そう言葉を交わすと俺等は店を後にした。

次に向かったのも洋服店だった。だが今回は嗜好がどうも変わっていて女性物が中心の店だった。

「私、あなたに選んでもらいたいの」

店に入る前に醇子は俺にそう言った。俺は戸惑ってしまった。自分の服も満足に考えたこともないこの俺が女性用の服を況してや妻である醇子の服を選ぶだなんて。

「えっ！！、そんなこといきなり言われても…」

「私だってさっきが初めてだったのよ」

「でも…」

「あなた…私の夫なのに私の服は選べないの？」

「うっ…そういうわけじゃなくて」

「じゃあどういうわけなの？」

多分俺がためらっている理由がわかっているからこそ醇子は敢えてこういう風にしつこく訊いてくるのだろう。まぁいつまでもためらってるわけには俺もいかない。勇気を出して店の中に入った。

店の中は百貨店の婦人服売り場のような形になっていて自分の想像通りだった。ただお値段が少なからず百貨店よりは良心的ではない。早い話が高いというわけだ。醇子は早速俺に

「あなた、それじゃあよろしくね。私はついて回ってるから」

と言った。どうやら店員にもこのことが聞こえていたのだろう、空気を読んでかは知らないが俺等に話しかけてこなかった。百歩譲って醇子に合うサイズがあるのかどうかを確認するのは訊いてもいいことにしてくれた。

”どれがいいかな、正直醇子は和服が一番似合うと思うんだけど…。それは扶桑人だから当たり前なのかなぁ？”

そんなことを想いながらも俺は遂に醇子に似合いそうな服を見つけた。

「こんなのでどうかな…」

「あら本当に初めてなの？」

「えっ？」

「あなたにしてはかなりいいところを突いてくるわ。さすが私の夫ね。ありがとう」

「いや…そんなことは」

俺は不意に値札を見た。すると

”これで17ポンド！！、う～ん、まぁいいか。せっかくだし”

と俺は思った。これぐらい醇子の心労に比べたら安いものだ、いやそれどころかこんなもの幾ら買ったって精算は出来ないだろう。早速俺は醇子に合うサイズの物を購入しら、そして店を後にした。

時間はだいぶ経っていたようだ。もうすぐ昼過ぎと言ったところだろう。

「あなた…そろそろお茶でも飲まないかしら？」

醇子は俺にそう言ってきた。すると前からリーネさんと宮藤さんがいた。

「あぁ石井さん」

「あら二人とも奇遇ね」

「これから私と芳佳ちゃんはお茶を飲みに行こうと思うんですけど、石井さん達もご一緒されてはいかがですか？」

リーネさんは俺等にそう言ってきた。俺も醇子もだいぶ歩き疲れていたから

「あなた？」

「うん、それじゃあお願いしようかな」

とリーネさんに言い、喫茶店に向かった。

しばらく歩いて俺等は小さな喫茶店に入った。リーネさんと宮藤さんが言うには昔ここで‘パルフェ’とか言う美味しいお菓子があったらしいが今はないそうだ。まぁ俺にそんな物は似合わないかもしれないからそれはそれで良いのかもしれない。しかも醇子のことだからきっといつものことをするに違いないだろう。ただでさえ基地でするときも恥ずかしいのにここでやられたら俺はおそらく死んでしまう。

「残念だったわね、あなた」

「ん？、あぁそうだね」

醇子はとても残念がっていた。人間は食べ物への執着心は怖ろしいものだから仕方がないのだろう。

「石井さん達はどちらに行かれてたんですか？」

するとリーネさんは俺等にそう訊いてきた。

「あぁ、ちょっと服を買いにね…」

俺がそう答えると宮藤さんもそれに参加してきた。

「へ～、夫婦で…ですか？」

「あっ、あぁそうなんだよ」

「どんな物を買ってあげたんですか？」

「あっ、リーネさん…それはその…」

「…？、どうかしたんですか？」

「それは後でのお楽しみよ」

醇子のフォローもあって何とかその場を切り抜けることが出来た。

俺等はその後リーネさんが頼んでくれた紅茶を飲んだ。これがまたとても美味しい。

「あら、美味しい紅茶ね、あなた」

「うん…でもリーネさん。何でここを？」

「ここは紅茶が美味しいことで有名なので…。前に芳佳ちゃん達とも飲みに来たことがあるんです」

「そうなの、宮藤さん？」

「はい！、あの時はさっき話したお菓子も一緒に食べたんです。それがとても美味しくて美味しくて。ハルトマンさんは全種類注文したくらいなんですよ」

「全種類！！、さすがハルトマンさんだね。何考えてんだか…」

「あなた、そういう風に言ったら怒られちゃうわよ」

醇子は俺に笑顔ながらもそう注意してきた。注意と言っても軽いお小言だが。すると

「ホントホント！！、石井、後で覚えておきなさい！！」

と別の人の声が俺の耳には入ってきた。

「はいはい…ってハルトマンさん！。どうしてここに？」

「またパルフェ食べに来たんだけど…もうないんだよね。ねっ、トゥルーデ」

「あぁ、私たちはエーリカがお菓子を買いに来たついでにここによったのだ」

「そうなんですか…大尉」

これで話が済めばいいのだが済まないから困ったことなのだ。

ハルトマンさんは俺の隣に座ってきた。つまり俺は両側を醇子とハルトマンさんに挟まることになったのだ。

「石井～、またまたお説教だね」

「えっ！。なんのことで…？」

「あぁ～とぼけるんだ～、ねぇ大尉？」

「えぇ…。」

この二人がタックを組むと大変な目に遭うのだ。さすがにここは公共の場だからいつもの何倍も軽めではあったがそれでも俺には十分に来た。いつもこれぐらいならいいのに…。まさに口は災いの元である。

紅茶を飲み終えると三々五々に俺等は散った。もうさっきの仕立屋に向かっても丁度いい頃だ。

「それではまた後で、石井さん」

「集合時間に遅れないようにな」

「リーネさん、宮藤さん、ハルトマンさん、大尉もお気をつけて」

そう俺は告げると再び醇子と共に歩き出した。

「ねぇ、あなた」

「ん？、どうしたんだ？」

「この部隊は本当にいいわね。本当の家族みたい」

「何言ってるんだよ、俺等はもう夫婦じゃないか。これからも末永くよろしく頼むよ…醇子」

どうやら醇子もこの部隊が解散されるのが少なからず寂しいようだ。俺はそっと醇子にそう言ってあげたすると醇子も

「えぇ、勿論よ！！」

と俺に笑顔で返してきてくれた。

早速俺等はあの仕立屋に着いた。中に入ると

「あぁ、先ほどの…」

と店主が話しかけてきてくれた。

「もう出来てるのかしら？」

「はい。こちらでいかがでしょうか？」

見ると俺も醇子もその背広に目を奪われた。これならいつでも出かけることが出来そうだ。

「ありがとうございます」

そう言いながら醇子は会計を済ませようとした。すると

「お客様、帽子（ハット）はいかがなさいましょうか？」

と店主は俺等には問うてきた。すると醇子も

「あらやだ！、買い忘れてたわ」

と言った。すると店主は予想通りといった様子で

「こちらの物などいかがでしょうか？」

と俺等に夏用のカンカン帽と冬用のソフト帽を見せてきた。どちらも背広にうまく調和しそうなものだった。

「じゃあそれもいただくわ。あと…」

と醇子は言うとそこに並んでいた中から青一色のネクタイを取り

「これもつけていただけるかしら？」

と店主に頼んだ。勿論店主は快くそれらを引き受けてくれた。

「それではお代の方がこちらに…」

そう言いながら店主は俺等に伝票を出してきた。勿論今の帽子やネクタイも込みでだ。

「５３ポンド！、醇子…こんなに高い物を俺に？」

「えぇ、せっかくなんだから贅沢しないと…。」

そう言いながら醇子は店主に支払った。よくよく考えたら大尉階級の醇子と少尉（まぁつい最近まで准尉だったが…）階級の俺の給料

の差は歴然だ。しかも醇子は坂本さんが言うには前々から堅実な人であったらしい。着々とお金を貯めていたのだろう、そのお金俺のために使ってくれていると思うと俺は嬉しかった。俺は早速店を出ようとすると

「まだよ。あなた」

と俺を醇子は呼び止めた。

「まだって言うのは？」

そう言うと醇子は笑顔で店主に

「それじゃあお願いできるかしら？」

と頼んだ。

「勿論でございます、奥様。お客様さぁあちらへ…」

と店主は俺と醇子を連れて試着室の方へ向かった。

「醇子、これは一体？」

「ぅふふ…せっかくだから着替えて帰りましょう」

「えぇ！！」

「私たちが着替えたところみんなが見たらどうなるか気になるでしょ？」

「ま…まぁそうだけど…」

「だからほら、私も着替えるんだから」

そう言いながら俺と醇子は試着室には行って着替えた。試着室には鏡があって自分の服装が確認できるだがどうも自分の姿が恥ずかしい。ずっと出かけるときは学生服だったから余計にそう感じるのかもしれない。ひとまず俺はネクタイなどを締めて試着室を出た。するとそこにいたのは俺が買ってあげたワンピース姿でそこにいた。

「あなた、とても似合ってるわ！」

「醇子だって…」

俺等がそう話していると店主が

「二人ともよくお似合いでございますよ」

と笑顔で言ってきてくれた。

集合時間の１０分くらい前に俺等は駅に到着した。もう皆揃っていた。こっちの人はどうも列車の発車時間の１５～２０分くらい前にはもう駅に着いているのが当たり前のようだ。扶桑だったら1本くらい乗り過ごしてもすぐに次のが来るから特に気にしないのだが…。

「遅くなってすいません。坂本さん」

すると皆は俺等の服装に驚いたようだ。なんてったって俺は背広姿で醇子はワンピースなのだから。

「お、お前達どうしたんダ?!」

「せっかくだからと思って買ったんです」

「あら、二人ともよく似合ってるわ。特に石井さん、その服装ならどこにいても不思議ではないわね」

「そうですか…?」

「あぁ、お前がここまで背広が似合うとは思ってなかったよ」

「ありがとうございます。坂本さん」

「あなた…よかったわね」

「あぁ、本当だな」

「石井大尉…素敵です~そのワンピース」

「ありがとう宮藤さん、これは明範さんに選んでもらったの」

「へ~、石井って意外とセンス有るんだね」

「こらエーリカ!!、そんな言い方したら失礼だろ」

「えー?、だってそうじゃん。シャーリーはどう思う?」

「ん?、そうだな~石井の姿だったら軽くニューヨークでは問題なさそうだな。ウォール街とか似合いそうだよ」

「石井の服装。なんだかお父さんみたい」

とルッキーニさんが言った。すると

「そうね…５０１のお父さんね、石井さんは…その服装だと」

「そうですか？」

「えぇ、素敵よ…ほれぼれしちゃうわ」

「それはどうも…」

俺は危うく笑顔になりそうだった。

「あなた…」

「う、うん。わかってるよ」

「ひょ～奥さんは怖いね～」

「ちょ、ちょっとシャーリーさん」

「ははは。冗談冗談。そろそろみんないかないか？」

「あぁ、もうこんな時間だな。よし、みんな行くぞ」

そう坂本さんが言うと皆は列車に向かった。勿論帰りも二等だ。

しばらく乗っていると醇子がいきなり話しかけてきた。

「あなた…」

俺はさっきのこともあったから幾分おそるおそる

「どうかしたの醇子？」

と答えた。すると俺の予想はどうも外れていたようで醇子は笑顔だった。

「いい買い物したわね」

「うん…そうだったね、みんな喜んでたみたいだし」

「この服は大切にするわね」

「俺もさ。ありがとうね」

「えぇ！」

列車は俺達の会話にお構いなく、目的地までひたすら走り続けていた…。

94話　Last　bath　time.

基地に戻ると俺は早速着替えた。俺が背広を脱ごうとすると後ろには醇子がいた。見ると両手をさしのべている。

「ん?、どうかしたの?」

俺は醇子に背中を叩かれた。

「イタタタタ…どうしたの?。醇子」

「もぅ、あなたったらどこまで鈍感なの?」

見ると醇子はまだ両手をさしのべていた。どうやらが背広を脱ぐのを待っているようだ。

「あぁ…ごめんごめん」

俺が背広を脱いで醇子に渡すと

「もぅ」

と醇子は言った。顔は怒っていたが目は笑っていた。

俺は先に風呂に向かった。今日は昨日とは違っていつも通り男性用の風呂が小さい方になっていた。

「はぁ〜。背中がまだヒリヒリするな〜。」

さっき醇子に叩かれたところはまだ痛む。かなり強い力で叩いたのだろう。といってもミーナ中佐のげんこつよりは幾分マシだが…。さっき基地に戻ってくると大きな戦艦が停泊していた。坂本さんが言うには明日にもここを出航するとのこと。つまり今日がここでの最後の風呂であって最後の夕食なのだ。

”いよいよ明日だな…、長いようで短かったな…”

俺はしみじみと風呂の中で今までのことを思い出した。特に醇子のことを…。最初は竹井大尉としてここに赴任した醇子。最初こそ俺はまるっきり興味がなかった。でも日に日に俺は醇子の魅力に惹かれていった。勿論魅力だけが俺をプロポーズに導いたわけではない。醇子には何とも口で言い表すのが難しい‘何か’があるのだ。

元々醇子が俺の事を赴任したときから気があるのはうすうす気がついていた。最初に基地を案内したときも俺を直接指名してきた。俺は最初、ただの面白半分なのかなと思っていた。デモし第二層ではないことに俺は気がついていった。もし面白半分なのだったら俺が起きる時間を見計らって部屋に入ってきたりキャッチボールだってしてくれないだろう。本気で俺の事を醇子が好きだって言うのがわかったのはやはりあの朝の事件だろう。ハルトマンさんにもその点では感謝している。もしかしたら鈍感の俺なら一生そのことに気がつけなかったのかもしれないのだから。そしてその後のネウロイとの格闘で俺は醇子の声が一瞬でわかった。これは何かの運命なのかもしれない…。そしてあのドーバーでのホームランももしかしたら醇子が打たせてくれたのかもしれない…。

「あなた…あなた?」

すると醇子の声が聞こえた。

「あなた、入ってるの？」

「えっ、うん。入ってるよ」

「そう…こっちには今ミーナ中佐も一緒にいるの」

「石井さん、そっちのお湯加減はどう？」

「えぇ、上々ですよ…。でもなんだか今日はまた後で来ようかなって。もう最後ですから」

「そうねぇ、せっかくだからまた後でみんなで入りに来ましょう」

「えぇ…って俺はこっちですよ！」

「ふふ、勿論よ。それでも十分よ」

「あなた…勿論入ってくれるわよね」

「あぁ、こっちならね…」

「よかった」

俺は醇子が今どう思っているかなんてわかりっこない。でも俺は信じている。

”俺が醇子のことが大好きなんだから、醇子も俺の事が大好きなんだ”

と。

食事を終えると坂本さんは

「全員で一緒の風呂に入ろう！」

と俺等に言ってきた。皆は大賛成していたのだが俺はどうすればいいのかわからなかった。すると

「大丈夫よ石井さん。ねぇみんな！！、水着を今すぐ用意して！」

そう言うと皆は一斉に食堂を飛び出して部屋に戻っていった。確かにこれなら問題はない。温かいプールに入っているのと同じだ。

「あなた…また一緒に入れるわね」

「え！！、う、うん、そうだね…」

俺は醇子が妙に喜んでいることが少し気になったがこの時はそれもよしとしてあまり深くは考えなかった。

早速俺等も水着に着替えて風呂に向かった。すると中はもう盛り上がっていた。しかも少なからず酒の臭いもした。見ると宮藤さんが割烹着姿で熱燗を持っていた。

「宮藤さん…これは？」

醇子はおそるおそる宮藤さんに訊いた。

「あぁ、坂本さんが風呂で？もうというので…」

「そ、そうなのね…」

醇子は何か焦っているようだった。これはひょっとすると醇子の弱みを掴んだのかもしれない。

「醇子、もしかして酒が苦手なのか？」

すると醇子は何かドキッとしたような顔をしながらも

「えっ！！、そ、そんなことないわよ、あなた！！。さぁ入りましょう」

と言い返した。どうやらこれは完全に俺の思ったとおりのようだ…というわけではなくてこの時俺はすっかりあることに忘れていた。

それからしばらく風呂に入っていると醇子は

「喉が渇いたわね…」

と俺にボソッと言った。

「酒でいいんじゃない？」

「えっ！！」

「だって大丈夫なんでしょ？」

「そっ、そうだけど」

というと醇子は自分から勢いよく酒を飲んだ。どうやら自棄(やけ)になったようだ。すると醇子は俺に倒れたというかいきなり寄りかかってきた。一応言っておくと俺等がいるのは湯船の中だ。もう他の人もだいぶ酔っている。

「だっ、大丈夫か!!、醇子?」

「……」

「じゅ、醇子?」

「…ぁ…な…た…」

「どうかしたのか?、醇子?」

と俺が言うと次の瞬間風呂だろうとお構いなしに醇子は俺に飛びついてきた。

「うわっ!」

「あなた!!、大大大だ〜い好き!」

俺はこの時、後悔した。そうだった醇子はかなり酒に弱いんだった。俺はこれぐらいの濃度の酒ならいくらでも大丈夫だが醇子にはこれでも十分すぎるようだ。

「わっ、わかったから。とりあえず離れてくれ。暑いよ…」

すると醇子は笑顔で俺に

「ダメよ!!」

と言ってきた。見ると醇子の笑顔は既に変わり果てていた。いつもの普通の笑顔ではなく怒っているときのような笑顔だ。俺は急に風呂の中なのに寒気が体中を走り抜けた。

「私はずっとこうしていたいの…」

ようやく醇子は離れてくれるのかと思ったら。俺を抱きしめたまま風呂の中で夢を見始めたようだ。

「う〜ん、あなた…だ〜い好き」

”夢の中でも俺が出てきているのか…”

俺の口元も緩んでしまった。

なんてそんなことをのんきに思っている場合ではない。俺は急いで醇子を抱きしめたまま（風呂を出るとき酔っている皆にいじられたのは公然の秘密である）風呂を上がった。体を拭いた後に俺は醇子を部屋に連れて行った。ここで困ったのが醇子の着替えだ。俺がするわけにも行かない。すると割烹着姿の宮藤さんがそこにいた。

「あれ…石井さん達もう上がっちゃったんですか?」

「えっ…うん、ちょっと訳ありでね…。宮藤さんちょっとお願いがあるんだけど…」

「なんでしょうか?」

そう言うと俺は醇子の着替えを宮藤さんに任せた。俺は宮藤さんが着替えを行っている間部屋の外にいた。俺はというと先に布団の中でモゾモゾと着替えを済ませていたのだ。その時も醇子はいい顔でムニャムニャと声を立てながら寝ていた。

5分くらいで宮藤さんは出てきた。

「石井さん、もう大丈夫ですよ…うわっ」

「にヒヒ～、よしか～早く入ろう！！」

見るとルッキーニさんが酔いながらそこにはいた。

「そういうわけなので、石井さん、お休みなさい…ってうわっ！」

宮藤さんは半ば強制的に風呂に連れて行かれてしまった。俺も寒くなってきたので自分のベッドの中に入った。すると醇子がくしゃみをあげた。急いで確認してみると醇子は寒そうだった。

”もう、今日だけ特別だよ…”

いつもと俺は逆のことをしてあげた。早い話が俺が今日は醇子のベットで一緒に寝てあげるのだ。順紺ベットは窓際にあって月明かりがとても綺麗だ。

”綺麗な月だな…でも醇子にはかなわないけどな…”

俺はそう笑い思いながら醇子を抱きしめていつもの通り夢に落ちた。

・・・

私は夜中に目が覚めた。隣ではスヤスヤと夫である明範さんが寝ている。時計の針を見るともう2時を回っていた。

”ふふ…明範さんの寝顔って…”

思えば私は明範さんを今まで結構振り回してきたと思う。上官であるとかそう言う前に明範さんにはそう言う素質というかそう言う運命であるような気がするの。‘女に振り回される’という運命に…。いつも私を寝るときだって私が抱きしめたら抱きしめたまま寝てくれている。手が疲れようと彼はお構いなし、私のためを思ってずっとそうしていてくれる。

「…ぁれ、醇子…起きたのか…」

「えぇ、目が覚めちゃって」

「今日は帰る日なんだから…もう少し…寝てないと…ダメだよ…」

そう言うと明範さんはまた寝てしまった。本人が一番疲れているだわ、きっと…。私もなんだか眠くなってきた。明範さんの寝顔を見たからかもしれないし、やっぱりまだ私の体のどこかが睡眠を求めているのかもしれない。

私は再び明範さんに抱きしめられて眠ることにする。

”明範さん…私は酔っているときのことも覚えているのよ。だから…”

私はそう思いそして

「明範さん…大好きよ」

と彼の耳元つぶやき私は再び眠りに就いた…。

95話　少しの間の別れ

潮風がとても気持ちがいい、いま俺等は海の上にいる。といってもストライカーで飛んでいるわけではない。そう、俺等は解散となり今扶桑に向かっているところだ。ブリタニア出身のリーネさんはペリーヌさんと一緒にガリアに行くとのことだ。ミーナ中佐、バルクホルン大尉、ハルトマンさんのカールスラント組はガリアでの伝令待ち。ルッキーニさんとシャーリーさん、そしてサーニャさん、エイラさんも同様だ。だからこの船がガリアに着くまでは皆一緒というわけだ。もうガリアは目の前だ。俺がそう海から見える大陸を見ていた丁度その時である。

「もうすぐお別れね…あなた」

醇子は俺にそう言ってきた。そう、醇子はこれから一時的に５０４に戻らなくてはいけないのだ。扶桑に戻ってくるのは１２月の終わり頃、丁度サトゥルヌス祭ぐらいにはかえってこれそうとのことだ。それでも４ヶ月近くのお別れだ。といっても扶桑にはこれから１ヶ月くらいしないと着かないから本当に会えないのは実質３ヶ月前後だ。

「あぁ…また会うときまで…元気でね。醇子」

俺はこの時なんて言えばいいかわからなかった…。ただ醇子は前に別れたときとは違い

「えぇ…あなたもお元気でね」

と言った。

それから3時間ほどで船はガリアの港、パ・ド・カレーに着いた。皆は順々に船を下船していく。リーネさんに至っては宮藤さんと別れるのが相当悲しいのだろう。泣きながら

「また必ず会おうね…芳佳ちゃん」

と言いながら宮藤さんと抱き合っていた。醇子はというと

「本当に大丈夫なのか?。醇子」

と俺が訊くと。

「えぇ、大丈夫よ…これぐらいの…こと」

と途切れ途切れに言った。泣くのを必死に堪えているのだろう。

「また…会えるん…だから」

途切れ途切れの言葉を続けようとする醇子を俺は黙ってみてはいられなかった。俺は醇子を優しく抱いた。

「あ…あなた」

「もういいよ」

「えっ?」

「泣きたいんだろう?」

「やっぱり…わかるのね」

「勿論だよ。君の夫なんだから」

「そうよね…よかった」

そう俺に埋もれたまま醇子は言うと、不意に俺の顔を向き笑顔になってくれた。俺もこの時泣きたくてしょうがなかった。でもここで醇子を悲しませるわけにはいかない。俺は必死に笑顔を振る舞った。

船は補給を終えるとその日のうちに早速扶桑に向かって出航した。勿論下には醇子を始め元５０１のメンバーが手を振って俺等と別れを交わした。醇子も俺に手を振っていた。不意に俺にも涙が出てきた。それを醇子は見逃す筈がなかった。

「あなた～！！」

と俺に聞こえるほど大きな声で俺にそう言ってきた。醇子なりの俺を悲しませない方法なのだろう。俺も醇子の声を聞くと不意に安心感がわいてきた。

”たった４ヶ月じゃあないか、４ヶ月すればまたすぐに会えるんだ！！”

俺はそう思うともう涙は出なくなった。俺は醇子に敬礼をした。扶桑男児として…。

それからほぼ半月が経って、俺等は扶桑の横須賀港に到着した。今回ここまでの長旅をともにしたのは坂本さんと宮藤さんだ。

「石井さん…着きましたね。私の家には案内しますから安心してくださいね」

「うん。本当にありがとうね宮藤さん。俺なんかを居候させてもらって」

「いいんですよ…困ったときはお互い様じゃないですか！」

すると坂本さんも荷物を抱えて部屋から出てきた。

「私も落ち着いたら宮藤の家に向かおうと思う。そのときはまたよろしくな」

「はい！！、坂本さん」

「それから石井」

「はい、なんでしょう？」

「宮藤のことよろしく頼むぞ！」

「と言いますと？」

すると宮藤さんも俺に

「勉強ですよ！！、石井さんがいればもしかしたら一番になれるかもしれませんからね」

と言った。

「そ、そうかな…？」

俺が言い返すと、坂本さんも

「あぁ、宮藤の言うとおりだ。石井、５０１のメンバーとして協力してやってくれ！」

と俺に言ってきた。俺は急に自信が湧いてきた。なんとかなるかもしれない。

「勿論です。俺、頑張りますから！」

と元気よく答えた。すると坂本さんも笑いながら俺等のことを応援していてくれたようだ。

下船して港に立つと俺は不意に涙がこみ上げてきた。

”祖国だ…扶桑に帰ってきたんだ！”

見ると自分の母親もいた。

「あぁ、母さん」

「明範…元気そうだね。手紙は読んだよ、あなた結婚したんだってね」

「うん…いずれ挨拶に行くと思うよ」

「わかったわ。いつでもいらっしゃい。母さんはもうお前のこれからの人生はお前に託すから後は自分たちで頑張るのよ」

こういう母の一言というのは責任感と同時にうれしさも伝わってくる。

「あぁ、勿論だよ」

すると母さんは宮藤さんのお母さんとお祖母(ばあ)さんにも挨拶をしていた。

「うちの明範がしばらくお世話になると思いますが、よろしくお願いします」

「いえいえ、石井さんには勉強を教えてもらうんだって芳佳も喜んでいますから」

「うちは部屋も余っているから心配いらないよ」

俺も

「これから暫くの間、よろしくお願いします」

と挨拶をした。

早速俺は母さんを横須賀駅まで送り列車に乗って帰るのを見届けると宮藤さんの家に向かった。宮藤さんの家は小高い丘にある。そのおかげもあってさっきまでいた横須賀の軍港が目と鼻の先に見える。すると前から宮藤さんと同じセーラー服を着た女の子がやってきた。

「芳佳ちゃ～ん」

「あぁ、みっちゃ～ん！」

どうやら二人は友人のようだ。早速そこで立ち話をしていた。すると

「ねえ芳佳ちゃん、そちらの男の人は？」

と宮藤さんに俺の事を訊いてきた。

「あぁ、石井さんだよ」

と俺に顔を向けながら俺に自己紹介をして欲しいとの意思表示をしてきた。

「初めまして。俺は扶桑海軍の石井明範少尉です。宮藤さん達と同じ第５０１統合戦闘航空団の一員でした」

と俺が言うとその女の子も

「初めまして、私は山川美千子。横須賀第四女子中学校の３年生です。芳佳ちゃんとは幼なじみで仲良しなんです」

「そうなんですか、これからもよろしくお願いします。山川さん」

「はい！！、こちらこそです。石井さん」

すると宮藤さんは俺の事を自慢したいのだろう。

「石井さんは、東京帝国大学の大学院生なんだよ～」

と言った。

「あっ…宮藤さん。そんなことをいちいち言わなくてもいいのに…」

「せっかくなんですから、いいじゃないですか」

「まぁ、そう言われればそうだね」

すると山川さんもとても驚いていたようだ。

「うわ～、大学院生の人なんて私、初めてみました。私、来年に横浜の師範学校に行きたいんです」

「それってもしかして神奈川師範学校のこと？」

「えっ！！、えぇ、でもどうしてそれを？」

「神奈川師範は有名だからね、俺の友達も何人か行ってるよ」

「そうだったんですか…」

すると山川さんは俺に何か言いたそうだ。何となく何を言いたいか俺はもうわかっていた。

「山川さんも…わからないところがあったらいつでもおいで、教えてあげるから」

と俺は言った。すると山川さんは

「本当ですか！！、ありがとうございます」

と、とっても喜んでいた。

それからすぐに山川さんは俺等と別れた。今家に帰る途中とのことだ。早速俺は宮藤さんの家にお邪魔した。そして客間に通された。俺は正座をして宮藤さん一家に

「これから暫くの間よろしくお願いします」

と挨拶をした。すると皆、快く了承してくれた。俺は早速自転車を借りて横須賀駅に向かった。新しい定期を買わなくてはいけないからだ。もう通学証明証などはさっき大学の教授から受け取っていたのだ。そう…大学の教授や友達も俺の凱旋を見届けに来てくれたのだ。皆も自分のことのようにとても喜んでくれていた。

”さて…明日から新生活か…。頑張らなくちゃな…醇子に会うときのためにも…”

俺はそう心に誓いながら駅に向かったのだった…。

96話　Hokkaido　part1

扶桑に帰ってから、早いもので二ヶ月が経過した。季節は師走…丁度今日から12月だ。

「それじゃあ、行ってきます」

「はい、石井さん。気をつけて行ってきてくださいね」

「ありがとうね。宮藤さんも、頑張って」

「はい！！」

途中まで宮藤さんと一緒の道なわけで、ここから俺は一人で東京の帝大に通学する。幸いなことにここは横須賀線の始発列車が多数出発するから、座っていくことが出来る。

「讀賣ね」

いつも通り新聞を買って、俺は列車に乗り込んだ。

車内の混雑を乗り越えて、俺は東京帝国大学に到着した。いつも通り研究室に入る。

「おはようございます、教授」

「あぁ、おはよう」

「石井、おはよう」

「おぉ、おはよう。あれ、お前は今日は朝番だっけ？」

友達に挨拶を交わし、学生服の上着を脱いでほっと一息入れてさぁけんきゅうに入ろうと思った矢先に教授が一枚のわら半紙とそれから手紙を差し出した。見ると…北海道帝国大学の文字と、それからキリル文字で書かれている手紙が俺にあった。

「お前さんに今朝届いていたやつだ。開けて見てくれや」

「はぁ…」

北海道帝大の紙は、今度遊びに来ないかとあっちの友人からのものだった。丁度研究している内容で、耐寒構造が機能しているかどうか調査をしたかったと言うこともあるから、行くことにしようとこの時は思った。

「なるほど…これは…明後日ですか？」

「そうなんだよ。きっぷは用意しておいたからな」

「は、はぁ…」

すると、今度はキリル文字で書かれた手紙を開けてみた。予想通り、あの人からだった。

・・・

こんにちは、サーニャ・V・リトヴァクです。今は…にいます。今度、エイラと一緒に扶桑を訪れることになりました。両親が見つかり、ほっとしています。詳細は以下に書いてありますので、迎えに来ていただけると嬉しいです。それでは…。

石井カ、私ダ。忘れたとは言わせネーゾ。エイラ・イルマタル・ユーティライネンだ。サーニャと私とで扶桑に行くことになったんダ。迎えに来てくれると思ってるからナ。楽しみにしているゾ。それじゃあナ

・・・

「いえ、友達も連れて行くことにしたんで…いいですよね？」

「お、おぅ。金さえ払えばいいけどな…土産は、お前さん未成年だからなぁ…」

「リンゴジュースなんてどうです？」

「それでいいや」

リンゴジュースならあっちからでも一応送ることが出来るから、みんなもそれでいいと言ってくれた。それはそうとう、夕方になると上野駅に向かった。幸いなことに俺の隣の席がみんな空いていてくれていたから、その座席を抑えた。そして、その後東京駅から横須賀線に乗り込んで宮藤さんの家がある横須賀まで向かった。

「ただいま戻りました」

「おかえりなさい。石井さん…さぁお風呂が出来てますよ」

「すいません。いつもいつも先に…」

宮藤さんのお母さんのご好意で寒くなってきたこの頃は一番風呂を毎日楽しむことが出来る。

風呂を上がると、俺達は食事をすることになった。いつも通りの光景だ。

「あぁ、宮藤さん」

「はい？。どうしたんですか？」

「北海道に来てくれないかな？」

「「「えっ！？」」」

宮藤さん一家は驚いた。事情を説明するとお祖母さんとお母さんは納得してくれた。況してや俺が一緒に行くと言うから安心してくれているのだろう。

「…というわけでして、どう宮藤さん？」

「え、でも…」

「切符を今日買ってきておいたから一緒に行ってくれると嬉しいな。サーニャさんも会いたがってるみたいだしさ」

「芳佳、折角なんだから行ってらっしゃい。石井さん、明後日でしたよね？」

「えぇ」

「わかりました。それじゃあ石井さんよろしくお願いしますね！」

「うん」

宮藤さん、ワクワクしてるみたいだ。そりゃあそうだろうな。俺もはじめて連絡船を使って北海道に渡ったときはいろんなことが新鮮だったからなぁ。さてと、俺もバットだとかグローブだとかも準備しておかないと、あれ？。北海道はこの間大雪が道内各地に降り注

いだって新聞に書かれてたけど、野球なんかやることが出来る場所有るのかなぁ…。

早いものであっという間に出発の日を迎えた。相手に電話で聞いたらグローブだけ持ってきてくれればいいんだそうだ。正直なところ助かった、バットは場所を取るからね。

「さてと、それじゃあそろそろ行こうか？」

「はい！。お母さん、おばあちゃん、行ってくるね！」

「気をつけるんだよ、二人とも」

「芳佳、石井さんの言うことをちゃんときいてね」

「うん！」

宮藤さんは意気揚々としている。俺もほっとしながら北海道に向かうべくまずは横須賀駅に向かった。

”横須賀→札幌”

と書かれたきっぷを大切そうに持ちながら宮藤さんは駅の改札口をくぐった。

「楽しみですぅ…サーニャちゃんにもエイラさんにも会えるし」

「そりゃあね。俺も北海道は久しぶりだなぁ…三年ぶりかな？」

そんな雑談を交わしながら俺達は上野駅へと向かった。

俺達が上野駅から乗ったのは急行１０３列車青森行きだ。これは上野駅を朝の１０時丁度に出発して、青森にその日の午後１１時４５分に到着する。この列車を乗り継いでいくと函館で急行の網走行き３列車に接続するようになっている。俺達はこの列車の２等車に乗り込んだ。さすがに遠いから今日は２等で行くことにした。

「ふぅ…さてと、これからこの列車に１３時間くらい乗るから」

「長いんですね…ふわぁ」

朝早くに家を出たこともあって宮藤さんはどうやらお疲れ気味だ。

「眠いんだったら寝ていてもいいよ」

「わかりましたぁ…Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…Ｚｚｚ」

俺は宮藤さんを窓際の席に移すと一人今朝の新聞を読み始めた。さてと、これから長い長い旅行とお迎えが始まるぞぉ…。

97話　Hokkaido　part2

列車はその後も快調に進んだのだが接続する列車だとかの遅れもあって、時刻表から10分遅れの午後11時55分に終点の青森駅に到着した。とは言えども、これぐらいの遅れなどこれだけ長距離を走っている列車には必然かもしれない。さてと、青函連絡船も三等ではなくて、二等の座席を使うことにした。三等車だと客車の中に入れられたまま乗ることになるし桟敷(さじき)席だと他の人と一緒になって宮藤さんに負担を与えてしまうと思ったから、今日は二等の座席を使うことにた。夜遅くと言うこともあって、宮藤さんは雪の中

「石井さ〜ん、寒いですぅ…」

と顔をぶるぶる震わせながら歩いている。確かに冬場の青森は冷える。俺も寒さを否応なしに感じさせられる。気合いを入れに一杯と行きたいけど…それはまずいか。

その後俺と宮藤さんは難なく連絡船に乗船することが出来た。船の中では夜遅くと言うこともあって、ゆっくりとその後は隣の席でゆっくり休んでいた。俺も少し仮眠を取った。

気がつくと連絡船は函館港に入ろうとしているところだった。結局3時間くらい眠っていたことになる。脇ではまだ宮藤さんが寝息を立てている。荷物をそっと確認すると、特に何も盗まれていないようだ。これが不安で俺はさっきの青森までの列車で一睡もすることが出来なかった。おっと、もうすぐ着眼するみたいだ。ここは指定席車を取っておいて正解だった。自由席だと、連絡口を急いで駆けて席取りをしなくてはならないからだ。

「宮藤さん？」

「うぅん…」

「宮藤さん？」

「あ…石井さん。おはようございます」

「うん。もう着くから、そろそろ下船の準備をしてくれないかな？」

「わかりましたぁ…」

さすがにまだ朝の5時前だ。今日はこの後札幌の方は吹雪くかもしれないとのことだそうだ。函館の天気はまだ穏やかである。これから再び列車に乗り込んで札幌を目指す。予定によれば明日の朝方にサーニャさんとエイラさんを乗せた船が小樽港に到着するそうだ。この連絡船は本来、扶桑の敦賀とオラーシャの浦塩と結んでいたのだが、少し前にあった扶桑海事変の影響で小樽に変更になったんだそうだ。まぁこっちはこっちで賑やかだからそんなに替わらないのだが…。ひとまず俺と宮藤さんは列車の中に落ち着いた。

「さてと、まだ眠い？」

「いえ。もう大丈夫ですよ…それにしても函館駅ってこんなに賑やかなんですね」

「ここは北海道と内地を結ぶ重要な拠点だからね。あれが函館山だよ」

「へ～」

「さてと、札幌に着いたら美味しものでも食べようか？」

「いいんですか？」

「来たんだから贅沢しないとね」

「あ、でも明日サーニャちゃん達が来るんですよね？」

「そうだったね。なら明日にしようか？」

「はい！！」

今回は札幌に二泊三日の予定だ。この後はまず北海道帝大に向かおうと思う。そしてその後に時計台だとか大通だとかを散策すればいいかなと思っている。機関車の汽笛が鳴り響きとうとう列車は函館駅を発車した。この列車は石北本線を経由して網走（あばしり）まで向かう列車だ。ところでこの付近に昔住んでいたアイヌ民族の影響もあって、地名も札幌（さっぽろ）だとか長万部（おしゃまんべ）だとか、はたまた女満別（めまんべつ）だとか言う独特な名前になっている辺りが、俺は好きだ。それはさておき、俺達は食堂車に向かった。言い忘れていたが大きな荷物はさっき載るときに荷物車に手荷物（チッキ）で預かって貰うことにしたから、自分の周りには宮藤さんのリュックサックと、自分の肩下げカバンしかない。だから荷物をそのままもって食堂車に向かうことにしよう。幸い、ここは指定席車でさっき検札も来て貰ったから多分大丈夫だろうし。

「それじゃあ食堂車でも行こうか？」

「はい。私、食堂車で食べるってはじめてなんです」

「ははは。喜んで貰えると嬉しいなぁ…」

食堂車に入ると、だいぶ盛況のようであった。５時５５分に出発して早１時間半が経過した。丁度朝食時と言うこともあるのだろう。やっぱり土地柄が出ていて食堂車の中には蟹で取った出汁（ダシ）の味噌汁…要は蟹汁のいい匂いが漂う。

「いい匂いですぅ…」

「えっと…朝定食の味噌汁は蟹汁みたいだから、それを注文しようか？」

「はい！！」

「わかった…あのぅ！」

そう言って俺は朝定食を２人前注文した。値段はそこそこながら味はとってもいい。宮藤さんも大満足のようだった。食事を済ませると俺達は再び自分たちの指定席に戻った。この時、食堂車に寄った序（つい）でに、土瓶に入ったお茶を二つほど購入した。

それからあっという間とまでは行かないがこの時はたまたま晴れていて、蝦夷富士・羊蹄山（ようていざん）を右に見ながら列車は函館本線の山峡（やまかい）をゆっくりと一歩一歩前進していった。

「間もなく、札幌、札幌です。降り口は右側、４番乗り場に到着いたします！」

車掌が車内でそう言いながら、他の車両へとそれを繰り返しに向かったのを見て俺は降りる準備を始めた。列車は琴似（ことに）駅を通過してい

る最中であった。外の景色は雪、雪、雪だ。どうやら吹雪いているようである。俺は宮藤さんに

「吹雪いているみたいだから、足下気をつけてね」

と言った。

「わかりました。気をつけますね」

「うん」

間もなくして列車は札幌駅に到着した。確かに外は弱かったものの幾分吹雪いていた。

「さ、寒い…」

「大丈夫宮藤さん？」

「は、はい。は、ハクション！！」

さすがに冷えるから急いで荷物を受け取ると俺と宮藤さんは待合室に急いだ。幸い、待合室はストーブが焚かれていて暖かかった。その後、タクシーを使って旅館に荷物を置くと、俺達は札幌の繁華街に繰り出した。雪もこの頃にはもう止んでいた。とは言っても空は曇っていて暗く、いつでもまた降り出しそうという天気だった。

「うわぁ！。賑やかな町ですねぇ！」

「さてと、北帝大に行った後はもう帰ろうか？」

「え？」

「明日、サーニャさん達が来るからさ、一緒に行こう？」

「はい！」

どうやら宮藤さんも納得してくれているようだ。まぁここに醇子もいたらさぞ楽しかったんだろうけどなぁ…まぁ醇子とは二人でまた来ればいいかな？。

北海道帝国大学工学部の棟に俺達は入った。すると、中から俺の友人が駆けつけてくれた。

「わざわざ良く来てくれたな！」

「まぁな…えっとねぇ、こちらは前にブリタニアで一緒の隊にいた宮藤さん。今は横須賀に住んでるんだよ」

「は、初めまして！。宮藤芳佳です。石井さんとは…その…えっと」

「ははは。まぁまぁ気にするなって。二人とも寒かっただろ？。さぁおいで」

「あぁ、悪いな。さぁ宮藤さん？」

「は、はい！」

この俺の友人というのは元々、俺と同い年で東京帝大に飛び級で進学したやつで、その後こっちに来て欲しいと要請されて、今はここ北海道の地で研究に勤(いそ)しんでいる。何でも、農学部と工学部を兼ね

ているんだそうで寒さに耐えられるような稲を開発しているんだそうだ。いやはや、米食の自分にとってはありがたい話である。

「ここで実験してるって訳さ」

「なるほどな。この田んぼは人工のもの？」

「勿論、夏場には今は埋もれちゃってるけど外の水田で実験もするんだ。でも、脇を列車が通るからね、煤煙がたまにかかったりもしちゃうんだよ」

「なるほどなぁ…そりゃあ大変だろうな」

「まぁ、お前ほどじゃないけどな？」

「よせやい。照れるだろ？」

「「ははははは」」

俺達が笑いながら話している脇で宮藤さんも関心を抱いているようだった。

「宮藤さん？」

「え…は、はい？」

「どうだい？。面白いかな？」

「えぇ。とっても美味しそうです！」

「はは。そうかそうか。なぁ、こういう人達のためにも美味しいの作ってくれよ？」

「まかせとけって！」

友人は意気揚々とそう答えてくれた。将来がとっても楽しみだ。

その後、俺達は野球の室内練習場に案内されたんだけど、道具を何も持ってきてなかったからまた明日来ると言って一旦旅館に戻った。

「はぁ…ようやく到着だね」

「はい！。北海道ってとってもいいところなんですね」

「はは、気に入ってくれたんだね」

「えぇ」

「明日はサーニャさんとエイラさんを迎えに行くからね」

「はい！！」

食後、風呂を上がり、布団の上に横になると、疲れていたからすぐに眠りに就いた…。

98話　Hokkaido　part3

翌日は昨日を打って変わって快晴だった。サーニャさんとエイラさんが来るのを天気も歓迎してくれているのだろうか?。

「おはよう、宮藤さん」

「ふわぁ…おはようございます」

時間は朝の6時半過ぎ、サーニャさんとエイラさんが乗った船は定刻なら10時頃に小樽港に到着するんだそうだ。今日は小樽行きの臨時列車が出るのだそうだ。それを使えば、丁度いい時間に向こうに着くことが出来そうだ。その列車は8時55分に札幌駅を出発する。本来なら一番近いのは小樽築港駅なのだが、脇に大きな機関区があって、煤煙で汚れる可能性があるとこっちの札幌鉄道管理局が判断したんだそうで、小樽駅からバスで、小樽港に向かうとのことだそうだ。列車は珍しい全車三等車指定席で、上野駅で切符を買った際に前もって購入しておいた。多分サーニャさん達は持っていないだろうから行きは2人分で帰りは4人分を俺は購入しておいた。

その頃…

・・・

とサーニャさんとエイラさんの二人は遠くに見える小樽を眺めながら港に着くのを今か今かと待っているところであった。

・・・

も、定刻通り到着したようだ。

「いよいよだね」

「はい…あっ！！」

「エイラ！、石井さんよ！」

タラップを降りてきたサーニャさんとエイラさんはオラーシャ独特の円筒形の帽子を被りながら俺達の前にやってきた。

「お久しぶりですね…二人とも？」

「こんにちは。石井さんに芳佳ちゃんも来てくれたのね！」

「サーニャちゃん、久しぶり！」

「久しぶりなんダナ。石井、宮藤」

「お久しぶりです、エイラさん」

「エイラ、急いで税関と審査を…」

「そうだったナ。石井、宮藤、と言うわけでまた後でナ」

二人は審査を行う港湾管理局の建物に向かった。

その後再び再会すると、二人はそれぞれトランクを持っていた。着替えだとかが入っているんだろう。ひとまず俺達は小樽駅からまた列車に乗り込み、札幌駅まで引き返した。

サーニャさんとエイラさんの荷物を旅館に預けると、俺達は昨日同様再び札幌の市街地へと繰り出した。

「大きい…」

「本当ダナ。これはみんな公園ナノカ？」

「はい。この大通公園はいまから３３年前に整備された公園なんですよ」

「凄いんですね。通りが公園みたいになってるじゃないですか」

「ははは。さてと、それじゃあ宮藤さんは昨日もいったけど、もう一度北海道帝大に行きましょうか？」

俺はそう言うとみんなを北帝大に案内した。途中のポプラ並木はサーニャさんも気に入ってくれていたようだった。雪に埋もれたポプラの木はこれはこれで幻想的で美しい。機能の友人に会うと、俺達は大きな体育館のようなところに連れて行かれた。

「ここは？」

「中に入ってみれば分かるって」

友人の言葉通りだった。立派な芝生がそこにはあり、まさに室内練習場だった。大体予想はついていたけど、まさかここまで立派だったとは…と少し考えてしまった。その後俺は軽くキャッチボールをすると、再び友人に別れを告げて、再び札幌の大通に戻ってきた。

「雪だわ…」

サーニャさんがそう呟いた。空からは再び雪が降り始めていた。さっきまで晴れていたはずなのになぁとこの時俺は思った。しかしまぁ、札幌の冬には晴れの日よりも雪の日の方が似合っている気がするのは内地の人間だからなのであろうか…。気がつくと、空腹になっていた。時刻も夕方にさしかかっていた、気がつかないうちに昼食を取らないうちに夕方になりつつあった。サーニャさん達もお腹が空いてきているようだ。

「さてと…夕食にでも行きますか？」

「なんなんだ？。扶桑で食べるものははじめてダナ。まさか、また納豆カ？」

「そんなことはないですよ。さぁ…」

そう言って俺は、小さな和食屋に入った。和食屋というか、居酒屋に近いような三瀬で、中に入ると威勢のいい店員が俺達を出迎えてくれた。

「石狩鍋を４人前…」

「はい！！。かしこまりました！！」

俺がサーニャさん達に振る舞いたかったのは…鍋だった。寿司や天麩羅なんて、浅草なんかでも食べられるし，況してやありきたりすぎる。折角北海道に来たんだったら、こういう豪快な食べ物を食べた方がいい。

「さぁてと、来ましたよ！」

「うわぁ…おいしそう」

「熱そうダナ…」

「これが石狩鍋なんですね。鮭だとか色々入ってて、それにこの暖かいスープ」

「まぁね。ここは前から良く来てたんだよ。今日俺があったやつも知ってるんだ。さぁ、冷めないうちに頂きましょう」

そういうとサーニャさんやエイラさんも美味しそうに食べていた。やっぱりここに来て正解だったようだ…。

店を出ると再び札幌は雪が更に強く降り始めていた。吐く息が白くなっている。あっ大会ものを食べていたから当然と言えば当然かもしれない。

「美味しかったわ…ありがとう石井さん」

「アリガトナ。美味しかったゾ」

「石井さん、私もですぅ…」

「それはよかったですよ。さてと、それじゃあ帰りましょうか？」

そう言うと俺達は再び雪の中を旅館の方へと向かって歩き始めた…。

99話　Hokkaido　part4

帰り際、大通公園にある札幌時計台に寄り道した。ここは元々、北海道帝大の前身の札幌農学校が演武場として開設したのが始まりで、１９１１年からは図書館として利用されている。だがこの時計台は，名前の通りの大きな時計があるだけではなくて、夜、特に今日みたいに雪が降っているときには幻想的に俺達の目に写る。

「綺麗…」

サーニャさんがぽつりとそう呟いた。確かにその通りである。北海道という、この雄大な大地を俺はまだまだ知らない。いずれどこかしらに行ってみたいとは思っている。おっと、みんなを旅館まで連れて帰るんだった。急いで帰らないと体が冷えてしまう。

「行きましょうか…」

「そうダナ」

「えぇ」

その後、旅館まではしんしんと降る雪の中、色々な話をしながら歩みを進めた。サーニャさんはエイラさんの協力もあって、あの後幸運にも両親と再会することが出来たんだそうで、家族団らんとしながら楽しく毎日を送っているようだ。エイラさんはエイラさんで、スオムスのスーパーエースな訳で、色々な仕事を毎日こなしているんだそうである。よくもまぁ扶桑に来ていただいたものである。俺と宮藤さんは、同じ家で今のところ俺が住んでいると言うこともあって色々なことが分かる。自分は先月からアルバイトを始めた。機

会があったら、サーニャさん達も自分の職場に連れて行ってあげてもいいけど…危ないんだよなぁ…。そうこうするうちに旅館に俺達は到着して、疲れていたこともあってすぐに床に入った。エイラさんとサーニャさんは布団で寝るというのははじめてだったそうで、寝にくいような素振りを見せていた。

翌日、土産物などの購入を済ませて急行4列車に俺達は乗り込んだ。この列車はここに来るときに乗ってきた急行3列車の折り返しの列車で早朝に網走を発車して、夕方に函館の到着し青函連絡船を乗り継いで青森で夜行列車に接続するようになっている。今回はサーニャさん達も一緒に二等車に乗車した。列車は雪景色の札幌駅を抜け出し、昨日サーニャさん達を迎えに行った小樽にも別れを告げて、再びやまやまの中をひた走り始めた。

「石井さん…」

「はい？」

俺が新聞を読んでいると、サーニャさんはそう話しかけてきた。ちなみに、宮藤さんとエイラさんは疲れたのか寝息を立てている。

「ありがとう。本当に来てくれて」

「いいんですよ。俺も北海道に用がありましたからね…」

「嬉しい…宮藤さんも連れてきてくれたし」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ。連れてきた甲斐がありました」

「ふふ…石井さんは奥さんと一緒に出かけたりはしないの？」

「まぁ。醇子は今ロマーニャにいますしね…」

他愛もない会話を少しの間するとまた俺達４人の席は沈黙に包まれた。新聞を読み終えて、のんびり通路側の座席から窓の外を見ているうちに、サーニャさんもとうとう眠りに就いていることに気がついた。

その後函館に着き、連絡船に乗り換えた。サーニャさんとエイラさんは、連絡船に乗る途中の連絡口から見える貨車が船の中に入っていくところをまじまじと見ていた。

「凄いわね、エイラ…」

「本当ダナ、スオムスとかオラーシャじゃこんなにたくさんは積めないナ」

とりあえず、連絡船の席は寝台を取っておいた。４人個室で丁度よかったからだ。青森に着くのはあと3時間半、部屋のドアは鍵もかけられるから俺も少しの間休むことが出来る。一応、青森からの寝台列車も個室がとれたから幸いだったが…

寝てしまっていいと三人には乗船して部屋に落ち着いたらすぐ伝えたので、早くも寝息を立てていた。俺も少しばかりだけ寝ることにしようと思いベッドに入った。俺のベッドは上段で下段では…見たところサーニャさんとエイラさんが同じベッドで寝息を立てている。

「Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…Ｚｚｚ」

さてと、俺も後を追うか…。

再び目が覚めたら、もうすぐ青森港までと言うところだった。と言っても、またこれから俺達は寝台急行列車に乗車するわけだが、まぁあれだけの睡眠時間じゃ眠気もなくならないだろうし、今は夜の１１時だから、眠気も更に拍車をかける。

「さぁ皆さん。列車に乗り換えますよ…」

「ふわぁ、石井さん、サーニャちゃん、エイラさぁん…待ってくださぁい」

「しっかりしろヨ…。私たちだって眠いんダゾ」

「エイラ…Ｚｚｚ」

「ウ、ウワッ！」

何だかみんなの足取りはとても重たそうだった。その後、急行列車の区分室（こしつ）に何とかして辿り着き、検察を終えるとすぐに俺達は部屋の灯りを消して再び眠りに就いた。ちなみにこの列車は冬期にのみ増発される臨時の急行列車で、青森駅を深夜１１時５６分に上野へ向けて出発する、常磐線経由の列車であった。

翌朝、丁度列車は杜の都、仙台（せんだい）を出発するところで目が覚めた。列車はこれから一晩中駆け抜けた東北本線に別れを告げて常磐線へと入っていく。この列車は丁度昼前に上野駅に到着する予定である。まだ三人は静かに寝息を立てていて、ゆっくりと俺は上段ベッドから梯子を使って下に降りて脇に備え付けられている椅子に腰をかけ

た。この列車の次の停車駅は…原ノ町（はらのまち）だそうだ。そこで朝刊を買うことにしよう。しばらくすると、宮藤さんが起きてきた。

「おはようございますぅ…」

「おはよう。よく眠れたかい？」

「はい。おかげさまで…顔洗ってきますね」

「うん、行っておいで…」

そう言うと宮藤さんは寝間着姿で洗面所の方へと向かった。引き続き列車の中で本を読み始めた。

「何の本ダ？」

「うわっ！！」

突然後ろからエイラさんの声が聞こえて俺は驚いてしまった。

「ナ、ナンダヨ。お、驚かすつもりじゃなかったのニ」

「すいません。突然だったので驚いて…おはようございます。エイラさん」

「オウ。後どれぐらいで着くんダ？」

「そうですね。あと二回乗り換えて…今日の夕方には到着出来ると思いますよ」

「ソウカ。扶桑も列車で移動するのは大変ナンダナ」

「えぇ。でも、楽しいですよ？」

「そうなのカ？」

「はい。みんなでわいわいやっていくと特に」

そう会話をしていると、宮藤さんも戻ってきたし、サーニャさんもボーッとしながらもベッドから出てきた。早速準備を済ませて俺達は食堂車に向かった。この列車には幸いなことに、洋定食も和定食も提供してくれる食堂車があるのでサーニャさん達も割り箸で不便な思いをしないで済んだようだ。あぁ、俺と宮藤さんは和定食を、エイラさんとサーニャさんは洋定食と注文した。

「どうですか？。お味の方は？」

「美味しい…エイラは？」

「私も同じダ。列車の中でこんなに美味しいものが食べられるなんてナ」

「気に入ってもらえて嬉しいですよ」

「石井さん、とっても美味しいです」

「宮藤さんも気に入ってくれて良かったよ。大学の奴らと一緒の時はここで飲んだりもするんだけどね…」

そんな会話をしながらゆっくりと食事を楽しみその後列車は常磐路

をひたすら駆け抜けた。そうそう、途中の水戸駅で宮藤さんがどうしてもって言うから納豆を買ってあげた。エイラさんとサーニャさんは何だか背筋が凍っていたような気もするけど、まぁ俺は気にしない気にしないと言うわけで…その後列車は取手、松戸、俺の住み慣れた町の葛飾の亀有、北千住と順調に通り過ぎて上野駅に定着した。

「大きい…」

「人がたくさんダナ」

「さてと、赤帽さんに頼んで荷物を運んで貰いましょうか…」

そう言って俺は山手線のホームの階段の前まで赤帽さんに荷物を運んで貰った。上野から東京までは山手線に乗り、東京からは横須賀まで横須賀線で一本だ。幾ら鉄道好きの俺でも、草臥れてきた。総武線と乗換の秋葉原を抜けてとうとう東京駅に到着した。

「さてと、いよいよですね。石井さん」

「うん。これが最後の乗換です」

「エイラ、さっきの駅もこの駅も人で一杯…」

「はぐれないようにナ」

「うん」

「サ、サーニャ！！」

この時エイラさんの手をぎゅっとサーニャさんが握りしめたんだそうで、幾分エイラさんは緊張したようだ。ここからは残念ながら三等車を利用することにした。多分サーニャさん達にとっては扶桑ではじめて三等車に乗ることになるのであろう。

「さてと…」

三等車は俺達が乗ったときはまだ空いていたが、いざ発車時刻になってみるとそれなりに混み、立席客こそいなかったもののほぼ全ての座席が何かしらの理由で埋まっていた。吊り掛け駆動の独特な音を奏でながら列車は横須賀まで急いで向かってくれた。この列車の中ではまた俺以外の三人が全員眠ってしまったので特に何もすることがなく、ただただ外の流れゆく景色を俺は眺めていた。

「まもなく、横須賀、横須賀です」

車掌がそう告げながら、車内を歩いて行った。みんなを起こすことにしよう。

「サーニャさん、エイラさん、宮藤さん?」

「うぅん…」

「ナ、ナンダ?。着くのカ?」

「ふわぁ…もう着いちゃったんですか?」

「はい。もうすぐにつきますから、そろそろ…」

そう言って俺達は荷物を纏めて列車を降りた。改札口では記念にと

みんな　札幌　↓　横須賀　と書いてある乗車券に無効印を押してもらい、受け取った。俺も例外ではなかった。おそらく５０１のメンバーと一緒にこんなに長距離を移動したのははじめてだろう。ひとまずサーニャさんとエイラさんは扶桑海軍の軍港の中にある宿舎の中で落ち着くんだそうだ。

「それじゃあ、またナ」

「はい。お疲れ様でした。ゆっくり休んでいってください」

「石井さん…本当にありがとうね…ふわぁ」

サーニャさんもエイラさんも時差ボケかは知らないが、酷く眠そうだった。

「石井さん、私たちも帰りましょうか？」

「そうだね…」

俺と宮藤さんも家に向かって歩き始めた。山の上にある宮藤さんの家に辿り着くまでは本当にあと僅かであった。出来ることなら、やっぱりではあるが醇子とも一緒に行きたかったとこの時俺は思った…。

100話　Station

北海道から帰ってきた翌日から、俺は再び大学に通学した。と言うのも、今日は授業という寄りかはアルバイトもあるから休むわけにはいかないのだ。宮藤さん達にはどんなところで働いているかはまだ話していない。別に話しても良いのかもしれないけど、何となく秘密にしておきたいのだ。

「それじゃあ行ってきますね」

「石井さん、今日はアルバイトの日ですよね？」

宮藤さんのお母さんに玄関でそう尋ねられる。

「はい。少し遅くなります」

「気をつけて行っていてくださいね」

「ありがとうございます…」

そう言って宮藤さんの家の玄関を出て、俺は横須賀駅に向かった。

いつも通りの列車でいつも通りの時間に御茶ノ水（おちゃのみず）駅迄は着いたのだが…

「ん？…旧型車両使用のお知らせ…」

松任町（まつとうちょう）からの都電に乗り換えて俺は帝大まで向かっているのだが…

どうやら先週から千住（せんじゅ）に有る火力発電所が大規模な点検と修繕を当

分の間行うんだそうで、電力不足を解消するために旧型の小型車両を使うとの張り紙が電停の看板の脇に貼られていた。案の所来た電車は車両からはみ出す客もいる具合の満員だった。中の方に入ってしまうと今度は降りるときが大変だから、仕方なく俺は車両からはみ出すような形で乗車することになった。

”寒いなぁ…”

そう心の中で叫びながら電車は、本郷通りを進んでいった。言い忘れていたが、郵便が昨日家に帰ると届いていて、醇子を始め、５０１の元メンバーは扶桑で新年を迎えるんだそうだ。それで全員を乗せた船が到着するのは１２月の後半とのことだそうである。もう少しで淳子に再会することが出来ると思うと嬉しかった。

「おはようございます」

「おぉ、どうだったんだ北海道は？」

「寒かったですよぉ…まぁ、いい結果が出ましたからね」

「そうかそうか。ならこれからも頑張ってくれな」

「えぇ…」

そう言うと、またいつもの通り俺は机に向かって結果と予想の比較を行い、ストライカーを使って午後は試験飛行を行った。午後と言っても、今日はアルバイトがあるから少し早めに大学を抜けて、東京駅に向かった。俺のアルバイトというのは駅の改札の立番である。右と左の双方の乗客の切符を回収したり、定期券を確認したり、不正乗車をしていないかを厳しく見なくてはならないが、結構楽しい

仕事内容である。

「お客様、この切符では降車出来ません。あちらの精算所で運賃の精算をしてください…」

「駅員さん、この列車は？」

「東海道線乗り場から発車しますから、奥の方ですね」

俺のいる場所は東京駅の丸の内口の方だから、東海道線の方が奥になって一番手前に中央線があるような格好になる。

アルバイトも終えて、家には夜の7時過ぎに到着した。食事を取っているところに急いで向かうと、今日はサーニャさんとエイラさんも一緒に夕食を取っていた。

「あれ？。二人とも…どうして？」

「今夜は宮藤の家で食べたいってサーニャがきかなくてナ」

「エイラだって…」

「まぁまぁ。さてと、俺もこれから食べます」

そう言って部屋にの自分がいつも使っている座布団の上に座る。

「石井さん、今夜はサーニャさんとエイラさんがここに泊まっていきたいって言ってるんですけど…」

と、座るやいなや宮藤さんがそう俺に伝えた。

「いいんじゃないかな?。お母さんとかがいいって言ってくれれば」

「はい。おばあちゃんとお母さんもいいって言ってるんですけど…部屋が石井さんが今使っているところしか空いていないんです」

「へぇ…えっ?!」

俺は突然のことに驚いた。まさか、俺のとなりでサーニャさんとエイラさんが寝ると言うことなのか?。醇子にこのことがもしばれたら…ひとたまりもないだろう。

「そ、それは…さ、さすがに…」

そうやって俺は遠慮したように言い返すのだが

「石井さん…ダメなの?」

”石井、わかってるヨナ?”

と二人がものすごい視線と声で言ってくるのだから拒否が出来るはずもなかった。

というわけで、今夜は俺の部屋で宮藤さん、エイラさん、サーニャさんと一緒に寝ることになってしまった。みんなはワクワクしているようだが、俺はもう既に眠たくなっていた。そうこうするうちに、俺は一人で先に、寝息を立ててしまったようだ。

「Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…Ｚｚｚ」

「石井さん、もう寝ちゃったみたいね」

「そうなんダナ。石井は夜に弱いって言うのは本当ダナ」

「私も暫くの間一緒に暮らしていますけど、いつもこうやってこの家で、一番早く寝ちゃうんですよ」

「そういえば、石井さんのアルバイトってなんなのかしらね」

「気になるナ、今度みんなで見に行ってみるカ？」

「いいですね。行ってましょう！！」

俺が寝息を立てているさなか、宮藤さん達はなにやら予定を立てているようだった…。

101話　if　（前書き）

スマートフォンからはじめて投稿します。至らぬところがあるかもしれませんが宜しくお願い致します。

１０１話　ｉｆ

　扶桑へ向かう船のなか。私は明範さんのことが気になってしまって仕方がない。

「ねぇねぇじゅんじゅん。石井にあったらぎゅってするの？」

「えぇっ？！」

突然、ルッキーニちゃんにそう聞かれてわたしはおどろいてしまった。

「こらっ、なに言ってるんだルッキーニ」

「うじゅじゅ。シャーリーは気にならないの？」

シャーリーさんも顔が赤くなっている。確かに、ルッキーニさんの言うとおり、私は明範さんに会ったら間違いなく抱きしめるでしょう。でもそれって、夫婦なら当たり前のことじゃないのかしら？。

「くすっ・・・勿論よ、ルッキーニさん。明範さんに会ったら、ぎゅってしちゃうわ」

「ほらぁシャーリー。言った通りじゃん」

「あのなぁ」

私達、旧５０１統合戦闘航空団は新年を扶桑ですごすべく、今は大平洋上を横須賀に向かって航行中。このまま行けば、１２月２３日

に横須賀港に入港できるそう。あら?、ハルトマンさんたちが、なにか話しているようだわ。行ってみましょうか・・・。

１０２話　尾行　ｐａｒｔ１

今日は１２月２４日だ。どうやら醇子達を載せた船は昨日のうちに横須賀港に定刻に到着したんだそうだが、俺はそのことには気がついていなかった。

「石井さん、気をつけて行ってきてください」

「あぁ、ありがとう宮藤さん」

俺は学校に向かうため家を出た。この時俺は

”ん?、誰かにつけられてるかな?”

と思い後ろを振り向いた。

「石井さん、どうかしたんですか?」

玄関から俺を見送っていた宮藤さんが俺にそう言ってきた。

「あっ…いや…なんでもないよ。行ってくるね」

「はい」

そう言うと俺は再び横須賀駅に向かって歩き始めた…。

・・・

んはどこかに出かけるようだった。

「宮藤さん、どこかに行くの？」

「はい、少し坂本さんのところに…」

坂本さんはたまに俺等の家にも来てくれるので特に気にはしなかった。だがもう夜だ。況してやこの寒い１２月、俺は一応

「一人で大丈夫？」

と訊いてみた。すると

「はい、坂本さんもいますから」

と宮藤さんは元気よく俺にそう言ってきた。確かに宮藤さんの言うとおりだったから俺も特に気にはしなかった。

「そう…気をつけてね」

「はい、ありがとうございます。」

そういうと宮藤さんは自転車をこいで横須賀の軍港の方に去っていった。

実はこの時もう醇子を始め５０１の元メンバー全員は秘密裏に横須賀に集結していた。どうやら俺の私生活を覗こうというのだ。事の発端はエイラさんが海軍宿舎に来た醇子達に

「石井はどうだろうナ～、浮気でもしてるんじゃないカ？」

と皆に言ったことだった。それを皆は真に受けてしまい俺を監視してそうなのかそうでないのか調べようと言うことになったのだ。

宮藤さんは早速坂本さんのいる海軍宿舎に着くと明日、つまり12月24日の行動について確認し始めた。ここでの指揮はミーナ中佐が行っている。

「…それで石井さんの明日の予定は?。宮藤さん」

「はい、石井さんは明日も大学に行くと言っていました」

するとエイラさんは端(はな)からそんなの信用しておらず

「本当カ?、大学以外のところに行ってるんじゃないカ?」

と皆に聞こえるように言っていた。それをサーニャさんが

「エイラ…そんなこと言ったら石井さんに失礼よ」

と注意する。まさにいつもの光景だ。

「…ふぅ、ともかく明日は石井さんの後をつけてみましょう。一応大学側にも許可は取ってあるから問題はないわ」

そうミーナ中佐は皆に言うと、なんだか旅行のように皆喜んでいた。俺の尾行と東京見学が一緒に出来るのだから無理もない。帝大の場所は醇子に一応教えておいたので道も特に迷うことはないだろう。

この時醇子は

”あなた…あなたなら大丈夫よね…”

と心の奥底から心配していた。

「ハックション！。誰か噂してるのかな…」

俺はその時そう呟いた。さすがにもう冷えてきたし宮藤さんのお母さんから風呂が沸いたから入ってくれといわれたので入ることにした…。

・・・

を知っている。だから東京駅に着くとき一番前の車両はとても混むのだ。そのなかで仮に１１人の団体客がいても確認する事なんて不可能に近いのだ。況してや隣の車両なんて。

そんなこんなしているうちに

「ただいま到着しました電車は７：２６分発の普通東京行きの折り返し電車です」

との駅員のアナウンスが流れた。俺はいつもの通りその電車に乗りいつもの座席に座った。醇子達はと言うとはしゃぐルッキーニさんを何とか抑えながら隣の車両に乗っていた。俺はまだ資料読むのに集中していたから全く気がつかない。

「ね～ね～シャーリー」

「ん？、どうしたルッキーニ」

「石井がホントに浮気してると思う？」

「ははは、私はそうは思えないな。あいつは意外と恐がりだからな」

「なんで恐がりだと浮気しないの？」

そうルッキーニさんが言うとシャーリーさんは醇子を指さした。そうするとルッキーニさんも納得したようだった。

「ほら二人とも乗るわよ！」

ミーナ中佐の一言で11人全員は固まって乗車した。実を言うと今日は宮藤さんの学校も開校記念日とかなんとかで休みだったのだが。俺はそんなことは知らなかった。と言うか秘密にされていて気づくことすら出来なかった。

電車は7：26分丁度に横須賀駅を出発した。これだけでもミーナ中佐達をはじめとした扶桑以外の国出身の人は

「おぉ～、本当に時間通りだね～」

とハルトマンさんや

「石井さんの言っていた通りね、エイラ」

「アァ、本当に時間通りダ」

とサーニャさんやエイラさんのように驚いていた。この時醇子は

”あなた…信じてるわ”

と思っていた。俺はまたくしゃみをしてしまった。

”う～ん、風邪かなぁ？”

と思いながらも資料に目を通していた。

電車の混雑は徐々に悪化していった。鎌倉(かまくら)を出る辺りで殆どの席は埋まっていた。これからこの電車は東海道線と同じ線路を走って東京(とうきょう)まで向かう。

「石井の行っているほどでもないナ」

隣の車両にいるエイラさんはそう呟いた。

「そうね…石井さんもっと混むみたいなことを言っていたのに…なんだか残念だわ」

サーニャさんもそれに答えるかのようにそう呟く。何もこの二人に限ったことではない。他の海外組も

「ねぇシャーリー、全然混まないね」

「あぁ、どういうことなんだろうな、石井のやつ？」

「ねぇトゥルーデ、今日は何食べる？」

「こらハルトマン。お前はまた食べ物のことを…」

「えぇ～いいじゃ～ん」

”もぅ、トゥルーデもエーリカも…”

といった具合にまだラッシュアワーの本性を知らないようだ。ただその中でも宮藤さんと一緒にいたリーネさんやペリーヌさんは坂本さんや醇子からどこから混むか聞かされていたからドキドキしていた。

「次の次の大船（おおふな）からかなり混むんだよ、リーネちゃん、ペリーヌさん」

「そうなんですの宮藤さん?。今はそこまで混んでいるようにはお見受けできませんわ」

「まぁそう焦るなペリーヌ。宮藤言うとおりだ大船は他の路線と接続するからかなり乗客が集中するんだ」

「さ、坂本少佐が仰るのであれば、間違いないのかと…」

「ふふ…ペリーヌさんもリーネさんも気をつけていてね」

この時醇子は二人に笑顔でそう言ったのだが、その笑顔はとても怖かったとのことだ。

この電車は8：34分に終点の東京に着く。つまりラッシュのど真ん中だ。俺はもう最近見慣れていたからそうでもなかったのだが大船から一斉に客が乗り込んでくるのだ。北鎌倉(きたかまくら)との差は歴然としている。

「ウワッ!!、こいつら全員乗るのかヨ～」

「そうみたいね…エイラ、私なんだか怖いわ」

北欧の二人は凄さを通り越して恐怖に至っていた。他はどうかと言えば

「な、こんなに乗ってくるのか!」

「面白いね～トゥルーデ」

「石井さんの言っていたことが間違いじゃなかったのね。何なの!

!、扶桑の鉄道って」

「よっ、芳佳ちゃん。この人たち全員この電車に乗ってくるの！！」

「そうだよ。ここは乗換駅だから混むってさっき坂本さんが言っていたじゃん。」

「にしても乗りすぎですわ！！。」

「はっはっは。まぁそう慌てるナペリーヌ。これから更に混んでいくんだぞ。」

そう坂本さんが言うと皆は

「なにっ！！。」

ととても驚いていた。俺が乗っているこのモハ４２型は定員が一両当たり１０４名当たりなのだが、この時点で乗車率は凡そ１１０％ぐらいだった。早い話が席が埋まり、つり革にやドアの柱などに捕まりながらゆったりと乗車できる程度だ、とまぁそこまで混んでいるわけではない。問題はこの後なのだ戸塚（とつか）、保土ヶ谷（ほどがや）、横浜（よこはま）と都心に近づくにつれてどんどん混雑は悪化していくのだ。それから後のことは言うまでもない。俺は資料などをしまった。混んでいる車内で落としてしまうと一大事だからだ。俺は鞄を自分の太ももの上に置いてのんびり外を眺めることにした。一方俺を尾行している他の人たちはこの混雑がとても怖ろしかったのだろう。横浜駅でサーニャさんはエイラさんに抱きかかったそうだった。扶桑の鉄道を先に体験していたサーニャさんとエイラさんでもこのラッシュアワーは恐怖に感じたようだ。

「エイラ…私、怖いわ！！」

「サ、サーニャ！」

”うぅ…石井メ、サーニャをこんな目に遭わせテ…後で覚えてろヨ”

「うわ～、ニューヨークなんかよりも全然凄いな～」

「ねぇシャーリーこの電車に後どれくらい乗るの？」

「え～と、後３０分くらいだな」

「３０分！！。私もうダメ～」

ルッキーニさんも同じようだった。シャーリーさんの胸に飛び込んだ。

「あっコラ！！、ルッキーニ」

「うぅん、シャーリーのここが一番落ち着くよ」

「やめろ～！！、ここは電車の中だぞ」

勿論シャーリーさんの言うとおりで他の乗客は驚いた様子で彼女らの行動を見ていた。

「うわ～。ねぇトゥルーデ、またこんなに乗って来るみたいだよ！」

「な、なんだと！」

「本当ね。こんなに混んでいるのに更に乗ってくるなんて」

皆はこの時初めてラッシュアワーがどういった物なのか理解したようだった。醇子はと言うと

”あなた…あなたが隣にいてくれればこんなに私も怖い思いをしなくてもいいのに…”

と思っていた。確かにこの超満員の列車に女性が乗るというのは相当な勇気がいることだと俺も思う。その時俺はと言うと、さっき駅で買っていた。朝刊を読んでいた。別に新聞くらいだったら、落としてもすぐに車内清掃で何とかしてくれる。況してや読みきりだから特に落としたところで俺も気にしないし誰かがまた読むと考えればそれも悪くない。皆が知るべき情報は共有するものだと俺は思う。

川崎を出ると混雑はピークを迎えていた。もう乗車率は軽く２２０％ぐらいだろう。本も何も読むことが出来ない。と言うかヘタをすると身動きが取れないぐらいだ。この川崎から品川にかけての区間が朝のラッシュのピークとも言える。品川を出ると新橋、東京と言った順に今度は下車客の方が増えていくからだ。

品川に着くと客はドッと降りていく。ここから山手線でこの電車の止まらない田町、浜松町に行く客もいるだろうし、大崎の方、つまり澁谷、新宿、池袋に向かう人もいるからだ。だが品川についても俺のいる一番前の車両も例外ではない。と言っても席は空くわけでもなくようやく１００％ぐらいになるといった感じだ。皆混んでいるときは山手線や京浜線などを使うから更にのってくるという客はそうそういない。

”さてと…もうすぐ東京だな”

俺はそう思いながら皆周りを確かめた。

”財布もあるし、定期券もある…。大丈夫そうだな”

と言った具合に。

とうとう列車は終点の東京に到着した。ここから俺は更に中央線に乗り換えて御茶ノ水（おちゃのみず）まで向かい、例の都電乗り場に向かった。

「やれやれ、またこんなに混んでるのかぁ。いつになったら千住の発電所の工事終わるんだよ…」

俺はそう呟きながら、電停の上に並び、都電に乗り込んだ。最近はいつも車両のステップに乗り、体を外に飛び出させながら帝大まで向かっている。後からつけてきた人達も、俺の姿を見て驚いていたようだ。当然と言えば、当然なのかもしれない。

「あ、明範さん…危ないわ」

「大丈夫か？」

「えぇ。ありがとう美緒。それにしても、通学ってこんなに大変なのね」

「そういえば石井さんがこの間、火力発電所の工事で列車が小型しか来ないから大変なんだって、私に言ってましたよ」

「そうなの…ありがとう宮藤さん」

「エイラ、今度はあれに乗るの？」

「そうみたいダナ。サーニャ、大丈夫カ？」

「何かあったら、助けてくれる…よね？」

「も、勿論ダゾ！。私がいれば大丈夫ダ」

「サンフランシスコのケーブルカーみたいだな」

「シャーリーああいうの乗ったことあるの？」

「まぁな。でも、ここのやつとはだいぶ違ってるけどな」

「ふ～ん…」

「凄いわね。石井さんって朝からこんな思いをして通学していたのね」

「よく体力が持つな。しかしミーナ、見たところ他の扶桑人も通勤・通学には苦労しているようだぞ？」

「えぇ。宮藤さんが言うにはもうすぐ大学に着くって言っているから、あと少しね」

「ミーナ、トゥルーデ～もうヘトヘト～」

「しっかりしろハルトマン。弛んでいるぞ」

「えぇ～」

「ペリーヌさん、大丈夫ですか？」

「な、何のこれしき…ガリア貴族の私ならば」

「ペリーヌ、危ないからな。気をつけろよ」

「さ、坂本少佐。ありがとうございます！！」

「ペリーヌさん、次はあれに乗るそうですよ」

「な、なんと…」

一本後の列車に醇子達が乗ろうとすると、車掌が話しかけてきた。

「お客さん、何人で？」

「えっと…大人１０人、子供１人です」

「あぁ…この時間混んでるからねぇ…ひょっとして、お客さん達全員女性？」

「え、えぇ…それが？」

「この一本後の列車は婦人子供専用車ですから、そちらにご乗車い

ただいた方が…」

「そうですか、ありがとうございます」

言い忘れていたのだが、火力発電所の工事期間中は臨時で婦人子供専用電車が走っているのだそうだ。そうこうするうちに、俺も醇子達も帝大に到着したようだ…。

１０３話　尾行　ｐａｒｔ２

俺が今研究中の物はストライカーの無線にかかわるものである。俺が目をつけたのは鉄道のパンタグラフだった。すり板、つまり上に着いてる集電を行う部分にアンテナをつけて無線の交信が出来ないかと考えたのだ。それでこれから実験を行うのだ。これを俺の事を尾行している人たちが見ていないはずがなかった。そんなこととは知らず俺はいつもの通り大学のグランドに向かった。

俺はグランドに向かう途中友人と会話をしていた。

「そういえばよ…」

「あぁ、どうかしたか？」

「お前の奥さんはいつ帰ってくるんだ？」

「あぁ、一応今日明日辺りには帰ってくると思うんだ。だから今日帰ったら家にいるかもしれないな」

「へ～、ようやく会えるって訳だ」

「ま、まぁそういうところかな？」

俺の友人もこんな感じでお調子者というか俺をよくいじってくる。勿論醇子に関することなのだが…。

「ところでさ？」

「なんだ?。今日は久しぶりに球場でも行きたいってか?」

「違うよ。お前は奥さんのことちゃんと愛してるのか?」

「えっ?」

「だってさぁ、こうもお互いに離ればなれになってるとさ」

俺は友人にそう訊かれた。これを後ろで醇子達が聞いてないはずがなかった。

「くぅ〜、あいつめ許さん!。ちょっと痛い目見せてやる!」

醇子よりもバルクホルン大尉の方がなぜか知らないが怒っている。慌てて皆で

「ちょ、トゥルーデ待ってよ!、まだ石井が何も言ってないんだから!」

「そうよ、フラウの言うとおりだわ。ねっ?」

「くっ、ミーナ達がそう言うなら仕方がない」

そうバルクホルン大尉が答えて皆がほっとしているときに丁度俺は友人に向かって

「愛してないわけないだろ!」

と強めに言い返した。丁度尾行していた人たちも静まりかえっていたのでその後の俺が言ったこともよく聞こえていた。

「まぁ…確かに、俺は妻のことを愛してるからね。そりゃあ早く帰ってきてもらいたいけど、妻は軍人だし、忙しいのは俺の十分に承知してるんだ。だからこそ俺はゆっくり妻が帰ってくるのを待ってるんだ」

俺は友人につい力説してしまった。すると

「ゆっくりか…お前らしいな」

と友人は答えた。俺はすかさず

「だろ…？」

と言い返した。その後俺は友人と笑いながらグランドに向かった。この時醇子は泣いていたそうだ。とても嬉しかったようで…。

「あ、あなた。待って！、今行くから！」

今にも飛び出していこうとする醇子を必死で坂本さんや宮藤さん達は抑えていたそうな…。

俺はグランドに着くと早速自分のストライカーを穿いた。無線交信用パンタグラフをストライカーの後ろ側に装着して。

「よし！、準備オーケーだ。石井、いつでもいいぞ」

「わかった！。なぁ！」

「ん？」

「今日球場行こうよ。これ終わったら…大丈夫だろ?」

「ははは。奥さん帰ってくるかもしれないって言うのに、野球やりたいのか?」

「まぁまぁ…ここ最近やってないからな」

「いいよ。バッティング付き合ってやっから、すぐ帰ってこいよ!」

「おう!」

俺は友人が安全確認を終えると離陸を開始した。今日はここ東京帝国大学から茗荷谷にある東京文理科大学と東京女子師範学校を経由して戻ってくるというコースだ。俺の姿が見えなくなると尾行していた人たちは俺の友人にあったようだった。

「あなたがたは?」

「あぁ…申し遅れて済まない。私は扶桑皇国海軍の坂本美緒少佐だ。石井の上司でな。今日はあいつの後をみんなでずっとつけているのだ」

「はぁ…でもなんで?」

そう言うと醇子はその友人の前に姿を現した。

「いつも夫がお世話になっています」

それを聞いた友人は驚きながら

「…ということはあなたが？」

と訊いた。

「はい。私が石井明範の妻の石井醇子です。これからも夫のことよろしくお願いします」

「いえいえこちらこそ…」

そんなことを話しているのを俺は知るはずがない。それどころか俺は何度も友人のいるところに声を発していた。

「お～い！、お～い！」

と…。友人はそれにようやく気がつき皆に黙っているように指示をした後に俺と無線の交信を始めた。

「どうかしたのか？」

「あぁ、ちょっと腹が痛くなってな」

「そうか…大丈夫か？。悪いな今日は特に寒いのに…」

「いいっていいって、それより試験だ」

「あぁ、わかってるよ。今のところこっちは問題ないぞ、後ろのパンタも異常はない」

「そうか、こちらも無線の感度は良好だ。この調子ならこれも取り

付けられるな！」

「あぁ！。それじゃあまた文理科大学の上辺りに着いたら報告するよ」

「了解！」

俺はそう言うと無線のスイッチを切った。切ったと言っても周囲の音が聞こえないようにという意味で緊急の連絡があった場合はブザーで呼び出すことが出来る。

”にしても…昨日あいつここに泊まったって言ってたからな…寝ているうちにお腹でも冷やしたのかな？”

と不思議な気持ちながら俺は飛行を継続した。

その後俺は試験を終えるとそれに関する結果の整理を行った後にそれを俺の提出する論文に加えた。勿論俺のは転写したものだ。それが終わる頃にはもう3時を回っていた。

「さてと、この研究室も来年までは来ないからな」

「そうだな。それじゃあ球場に行くか？」

「よし！」

今日は教授ももう帰ってしまった。俺等の次の授業は来年の１５日くらいからだろう。大学院というのはかなりのんびりと自分たちのやりたいことを楽しむことが出来るのだ。

「お前さん、良く飛ばしたなぁ」

「まぁね、お前も今日は良く飛ばしてたじゃないか？」

「負けてられるかよ。さてと…」

「それじゃあ、よいお年を」

「あぁ…お前もな」

俺はそう言うと球場を出て電停に向かった。勿論この時醇子達は俺の友人に挨拶を交わした後に俺の後再びつけ始めていた。

俺はバスに乗ると不意に今日がルッキーニさんの誕生日であることを思い出した。実を言うといつ来るかはわからなかったのだが醇子達と一緒に来ているという話を坂本さんから聞いていたのだ。

”何か買って帰るか…”

俺はそう思い、横須賀線の電車を1本棒に振って有楽町（ゆうらくちょう）に向かった。隣に銀座（ぎんざ）が有るこの町はいろいろな物が手に入るのだ。でも俺は何を一体買えばいいのかよくわからなかった。

”ルッキーニさんの好きそうな物は何だろうな…”

そんなことを考えながら歩いていると一軒のスポーツ店を見かけた。

そこには

”野球道具、大安売り！”

と店の表に張り紙がされていた。

”そういえば…前俺が野球を教えたときにバットを眺めてたよなぁ”

何かに導かれるかのようにその店の中に入るとそこには多種多様のグローブ、バット、スパイクと野球道具が置かれていた。すると店主の親父さんが奥の方からやってきた。

「いらっしゃい！、ここにあるのはみんな定価の2割引きだよ！。明日はサトゥルヌス祭だからね～」

「あの～、女性にも使えそうな物を探しているんですけど…」

「えっと、何を買うかにも寄るなぁ…」

「そうですねぇバットですかね。体の小さい子だから、どちらかって言ったらトップバッターに適したようなやつがいいかなって思うんですけど」

「わかった…ちょっと待ってな！」

俺は自分がパワーヒッターだからアベレージ用だとかのヒット狙いの打者が使うバットのことはあんまり詳しくはない。

数分足らずで親父さんは1本のバットを持ってきた。

「これなんかどうだい？、いいもんだと思うぞ」

見ると確かに木目や形、どこをとってもいいバットだった。

「これをもらいます。おいくらですか?」

俺はこの時手持ちで２００円くらいあった。これだけあれば東京と大阪の間を9往復くらいすることが出来る。

「じゃあ１０円３３銭だな」

親父はそう言った。

”ちょっと値切ってみるか…”

俺はそう思いながら

「3銭おまけできません?」

と訊いてみた。すると意外にも店主は

「じゃあ１０円４０銭って事でリボンとかつけるのでどうだ?」

と俺に訊いてきた。まあプレゼントだからいいかなと俺も思ったからそれで妥協した。

俺は早速そのプレゼントを受け取ると東京駅に戻った。実を言うと先に尾行していた人たちは帰っていたのだ。俺を驚かすために…。

俺は東京発５：０７分発の普通列車、久里浜(くりはま)行きに乗り込んだ。この時間はラッシュというわけではないが乗車率１００%前後の状態が慢性的に続いていく。俺の降りる横須賀(よこすか)等の末端の区間まで行くなら別かもしれないが…。夕方のラッシュというのは朝のようにピークがない代わりに混雑が慢性的に最終電車まで続く。だからど

の電車が座れるとかそう言うのは特にはないのだ。と言っても座れないというわけではなくて2，3本駅で電車を待てば座れるのだ。俺の乗った電車は幸いまだラッシュの始まりの少し前だからこれぐらいの混雑で済んでいるのだ。

”今日こそ醇子達…帰ってきてるのかな…”

とそんなことを思いながら俺は横須賀線から流れていく町の明かりに目を向けていた。

「横須賀～、横須賀～、横須賀でございます」

駅員の声がこだまする。俺はいつもの通り横須賀駅に降り立った。もう日は暮れていて辺りは真っ暗だ。

”寒いな～、早く家に帰らないとな…”

俺はそう思いながら改札口に急いだ。俺が改札口に着くとそこには宮藤さんが山川さんと一緒にいた。

「あっ…いたよ、芳佳ちゃん」

「うん、石井さ～ん」

俺はその宮藤さんの声で二人がそこにいるのに気がついた。すると俺が改札口を通りかかったとき駅員のおじさんが

「あの人達１０分くらい前からあなたのこと待っていたみたいですよ」

と俺にしか聞こえないほどの小さな声で語りかけた。俺は静かに礼をしてその場を去った。

「二人とも今帰りなのか?。今日から学校が休みって言ってたけど、どこかにでも出かけてきたの?」

すると二人はドキッとしたような顔をしながらも

「え…えぇ、そうなんです。ねっ、芳佳ちゃん」

「え…う、うん。そうなんです石井さん」

「そぅ…」

俺は変に思いながらも二人が早く帰ろうと急かすのでそうすることにした。

俺はいつもの山道を急いで登る二人に向かって。

「二人とも、どうしてそんなに急いでるんだい?」

と訊いた。するとまたドキッとしながら

「えっ…そんなことないですよ」

「そうですよ、石井さん」

と俺に答えた。

”怪しいな…。まぁ何かしらの用事でもあるんだろう。まぁいいか”

と俺はそう思った。別にどこかに向かっているわけでもなくて家に急いでいるようだからまた教えて欲しいところでもあるのだろう。俺の指導がよかったからかは知らないが宮藤さんも山川さんも席次が大きく上昇したようだ。先週に期末試験が行われ、宮藤さんは学年で１２位、山川さんに至っては学年で2位という好成績を残した。試験の順位が出た一昨日、俺のいる宮藤さんの家には山川さんが親と一緒にやってきて泣きながらお礼を言っていた。勿論それは山川さんのところに限ったことではなくて宮藤さんも同じだった。俺のおかげであることをとても強く言っていたが、俺はそうは思わない。確かに俺も出来るだけのことはしたとは思うが最終的に一番頑張っていたのは本人達自身なのだ。そうそう、宮藤さんと山川さん達は俺より一日早い、今日から冬休みなんだそうだ。

　そんなことをしみじみと思っているといつの間にか宮藤さんの家に着いた。俺は二人のハイペースに疲れてしまった。

”はぁ…はぁ…それにしても、随分急いでたな…二人とも”

そんな疲れ切った俺を心配していたのだろう。俺を見て宮藤さんは

「大丈夫ですか?、石井さん。さぁ早速お風呂に入ってきてください」

「えっ?。二人は?」

そう俺が尋ねると

「わ、私はこれで帰りますから大丈夫ですよ…。ね、芳佳ちゃん」

「はい、みっちゃんの言うとおりです。さっ、石井さん…」

そう言うと俺は宮藤さん達に半ば強制的に風呂に連れて行かれた。まぁ疲れていたから風呂はとても気持ちがよかったのだが…。

風呂を上がると俺はいつも通り寝間着に着替えた。と言ってもさすがにこの季節、浴衣だけではあまりにも寒すぎるだから俺はここのところいつも丹前を着ているのだ。丹前と言ってもただの丹前ではなくて長丹前という足のかかとまで丈のある上着だ。これを着ていればさほど寒くはない。俺が風呂への入口のとを出て廊下を出ると宮藤さんがそこにいて少し俺は驚いてしまった。

「うわ！。宮藤さん」

「あっ、ごめんなさい。驚かせちゃいましたか?」

「いや、まぁそうだけど。気にしないで」

「そうですか…ありがとうございます」

俺はその時宮藤さんのお母さんとお祖母さんの姿が見当たらないことに気がついた。

「宮藤さん、おばさんとお祖母さんは?」

「あっ、お母さんとおばあちゃんなら往診に言っちゃいましたよ。今日は帰れないだろうって言っていました」

「そう…」

こういうときはたまにあったので、別に気にはしなかった。するといきなり俺のお腹は鳴った。気がつくともう7時過ぎだ。お腹も空くだろう。それを見計らったのか

「石井さん、夕食にしましょう」

と宮藤さんは俺にそう言ってきた。

早速俺はいつもの食卓のある部屋の入口のドアに触れるととっさに俺はドアノブから手を離した。

”ドアの向こうに誰かいる…”

俺の左手がそう反応したのだ。俺はもう一度最後に宮藤さんに訊いてみることにした。

「宮藤さん…中に誰かいるよね」

「えぇっ!!。えっ…誰もいないはずですよ」

「そう…。」

と編に思いながらも俺はドアを開けた。すると中は真っ暗だ。俺がドアを開けたと同時に宮藤さんは静かに明かりを落とした。これではまさに真っ暗だ。

「おい…宮藤さん…停電かい?」

すると宮藤さんは棒読みで

「あぁ、すいません。切っちゃいました～、今こっちの明かりをつけますね」

と俺に言ってきた。俺はなんなのだろうと思いながらも静かに明かりが再びつくのを待った。

明かりがつくと俺は驚いた。皆が…５０１の全メンバーが揃っているのだ。

「な！、なんで皆さん…ここに！！」

俺を更に驚かせたのは醇子だった。醇子はいきなりしゃがんだ状態から飛び上がり俺に抱きついてきた。

「じゅ、醇子！！」

「ただいま…あなた」

俺はあまりの衝撃に驚いて何も言え出せなかった。すると

「おかえりは…？」

と醇子は俺に優しく問いかけてきた。

「あぁ…おかえり、醇子。」

俺はそう言うと皆に座らされた。目の前にケーキがあったから勿論今日はルッキーニさんの誕生会であることを悟った。俺等はその後お決まりの歌を歌った後乾杯した。

しばらくすると皆はルッキーニさんにプレゼントを渡し始めた。
そしていよいよ次は俺の番だ。

「ルッキーニさん、お誕生日おめでとうございます」

「うじゅ～、石井にそう言われるとなんだか照れちゃうな～」

俺は顔が赤くなるルッキーニさんを笑顔で見ながら

「それとこれは俺からのプレゼントです」

とルッキーニさんに野球のバットを送った。

「これバットじゃん」

「前、俺がブリタニアで練習してたときバットをずっと眺めていましたよね。だから…」

俺がそう言うとルッキーニさんは

「石井らしい、プレゼントだね。ありがとっ！！」

ととても喜んでくれていたようだった。

それからしばらく俺等は宴会を行った。この間に揉みや藤さんやリーネさんは布団の準備などをしていてくれていた。今日は皆ここに泊まっていくらしい。

今日は幸いにもいい気分で皆酔っていた。ただ俺はいい気分と言ってもどうやら大誤算をしていたようだった。俺が布団に入るとモ

ゾモゾと何かが入ってくるような気がした。俺はいやな予感がしたのだが、俺のすぐ右側には壁があってこれ以上逃げられないのだ。

「あ・な・た」

俺は間違いなくこの時布団に入ってきたのは醇子だと確信した。

「ど、どうしたんだよ！、醇子」

「うふふ…今日は今私がいたところに宮藤さんとリーネさんが寝るの」

そう言うと本当に宮藤さんとリーネさんの二人が隣の布団に入った。

「石井さん、今日は隣で寝てますから何かあったらいつでも起こしてくださいね」

「芳佳ちゃん、石井さん達もう寝ちゃってるよ」

「あぁ、そうみたいだね…リーネちゃん。私たちも寝よっか！」

「うん、おやすみ芳佳ちゃん」

「おやすみリーネちゃん」

そう二人は会話を交わすと数分後にはもう寝息が聞こえてきた。すると醇子は俺に

「実はね…今日は私たちあなたの後をつけていたのよ」

と言ってきた。俺はそう醇子に言われて今日の不信感が一体何だったのか全てがわかった気がした。

「そうだったのか…でもどうして？」

「だって…あなたのことが心配で」

何度も言うようだが醇子は酔っているのだ。だから自我が崩壊していると言っても過言ではない。今にも泣きそうだ。

「わかったわかった。大丈夫だよ」

俺はそう言うと静かに醇子を抱きしめた。すると醇子もとても喜んでいたようだ。

「久しぶりね、あなたにこうしてもらえるなんて…」

「俺も久しぶりだよ。今日は暖かいな」

「ふふ…私もよ」

そう醇子が言うと俺は一呼吸置いて

「寝ようか…醇子」

と俺は問いかけた醇子も

「えぇ…そうしましょう」

と俺に言った。

「おやすみ…醇子」

「おやすみなさい、あなた」

最後にそう俺等は会話を交わすと眠りに落ちた…と言いたかったのだが、それから数分後いきなり醇子は俺に強く寄ってきて

「あなた」

と俺の事を呼んだ。

「どうかしたの?。寒いか?」

「えぇ…背中が冷えるわ」

「う~ん、ごめんな。はい、もう少しそっちに布団を…」

「そういうことじゃないわ。もっと体の芯から温まらないと」

「は?」

「扶桑に帰ってきてからまだ一度もして貰ってない…」

「えっ…むぅ!!」

大胆にも醇子は思いっきり強い力でキスをしてきた。

「どう、温まったかしら?」

「う、うん…とっても」

「よかったわ。それじゃあおやすみなさい、あなた」

「お、おやすみ…」

やれやれ、これから暫くの間はこういう生活を送ることになりそうだ…。

１０３話　尾行　ｐａｒｔ２（後書き）

東京文理科大学は旧東京教育大学、現在の筑波大学の前身にあたり、
また東京女子師範学校は現在のお茶の水女子大学にあたります。

104話　Tokyo　part1

醇子はまだ隣の部屋で寝ている。いや醇子以外の人たちは皆寝ているといった方がこの場合適切だろう。坂本さんも珍しく今日は寝ている。

今は朝の5時半だ。俺がどうしてこんなに朝早く起きているかというと昨日の試験飛行についての報告書を書いているからだ。例の論文を出して今年度卒業は確定したのだがまだまだやらなくてはいけないことはたくさんある。この報告書もその一つだ。昨日で学校の授業自体は終わってしまったが、今日はもう一度大学に行ってこれを提出するつもりだ。やれやれ、昨日で学校からは解放されると思っていたのだが…予想外だ。

”さて…あと少しだな…”

俺はそう思うと不意に

「ふわぁ…」

とあくびが出てしまった。ここのところ俺は睡眠不足なのかもしれない。最近は大学もあるから睡眠時間がヘタをすると3時間だとか4時間半くらいしかない日もある。別に通学に時間がかかるとかそういうわけではなくて、報告書に追われているからである。況してや俺は夜が弱いから必然的に朝早起きをしてこの作業を行わなければならない。報告書の中身の量にもよるが一番早いときで3時、遅いときでも4時半ぐらいには起きている。東京に住んでいたときはそうでもなかったのだがここからだと通学に時間がかかるから朝起きる時間も当然早くなってくる。ちなみ今日は3時半近くに起きた。

でも読者の中には俺がどうやって起きるかわからない人もいるだろう。俺には起きようと思った時間に起きることを昔から訓練していたから3時以降だったら±15分くらいの誤差でいつでも起きることが出来るのだ。

俺は遂に報告書の作成を終えた。時計の針を見るとまだ5時前だ。さすがに寝るには遅いが寒くなってしまったので布団の中でのんびりすることにした。

”それにしても寒いな…って雪が積もってるじゃないか、いつの間に…”

俺等が気がつかないうちにどうやら昨晩から雪が積もっていたようだ。こうなると駅までの俺の通学路は大変なことになるのだ。ここは舗装もされてない下り坂の道路だ。足を取られるとか言う問題ではなくて滑落してしまう。と言っても慎重に歩けばそういうことはないし周りには木がたくさん生えているからそれがいざというときは手すりになってくれる。

”まぁいいや…。その時はその時だ…”

俺はそう思いながら再び布団の中に入った。醇子に殆ど占領されているから俺の空間（スペース）ときたら野球場のホームベース並みだ。

「うぅん…あ…なた」

醇子は目をこすりながら俺にそう言ってきた。

「まだ起きなくてもいいよ。これから俺はここでのんびりしてるから。寒いしね」

「そぅ…なのね…わかった…わ」

そう言うと醇子は再び寝息を立て始めた。彼女もまだ眠たいのだろう。

俺が布団の中で今日の行程を考えていた。

”そうだな～、今日はまず大学に行った後にすこし神保町（じんぼうちょう）にも寄って本でも買おうかな～”

すると醇子は寝ているのにもかかわらず俺にしがみついてきた。

”一体なんなんだ！”

すると醇子は俺と一緒にいる夢でも見ているのだろう。

「好き…よ…ぁ…なた」

と寝言を言っていた。

”全く…醇子は…”

俺はそう思いながらも醇子に布団をかけ直してそのまま今日の行程を再び考え始めた。

それから、数時間が過ぎた。今は朝の８時過ぎだ。皆は宮藤さんが作ってくれた朝食を終えると隣の客間でのんびりしているようだった。俺もそうしていたいところなのだが残念ながらこれから大学に行かなくてはならない。

「さて…と、これで大丈夫だな。あっ…あと財布と定期券だな…」

この二つがないと大変なことになるのだ。前に俺は家に財布を忘れてしまい、昼休みの時に大学の食堂に行ってかなり焦った。幸いにもその時は緊急用のお金を持っていたから問題はなかったのだが…。

「あれ?。財布財布と…」

「はい、あなた。財布よ」

「あぁ、ありがとう…って!」

そこには醇子とエイラさん、そしてサーニャさんがよそ行きの格好をして立っていた。

「どっ…どうしたんですか。皆さんで」

俺が驚いたような顔で三人に訊いた。すると

「もぅ…せっかく帰ってきたんだから一緒に行きましょう」

「石井さん…私、東京に行きたいの…」

「サ、サーニャが買いたい物があるって言うんダ。ダカラ、私たちも連れてってくレ」

俺は正直困った。大学に行かなくてはならないからだ。

「いいですけど…俺は大学に行かなくちゃ行けないですからその後

になると思いますよ」

俺はそう言い返した。すると、醇子は俺と一緒にいられればいいみたいだから問題はないようだったしエイラさんとサーニャさんもそれでも構わないとのことだったから

「…わかりました。それじゃあ一緒に行きましょうか」

と俺は三人に言った。

玄関を出るときには皆が俺等のことを見送っていた。これから501のメンバーは年明けまで扶桑の宿舎にいるそうだ。前線が大変だって言うのによく休暇を皆が同時に取れたものだと感心していたら

「石井さん…早く行きましょう」

と珍しくサーニャさんが俺ことをを急かした。

「石井!、サーニャがこう言ってるんダゾ。ホラ、早く行くゾ」

醇子はと言うと俺と手をつなぎながら笑顔で俺の脇にいる。すると醇子も

「さぁあなた、サーニャさん達もあぁ言ってるんだから行きましょう」

と言いながら半強制的に俺は駅に向かわされた。

”全く…まぁこういう日も悪くはないかな…そういえばなんだか天気が今日はよくないな”

曇り空を不安げに見上げながら、俺は皆と横須賀駅に向かった…。

１０５話　Ｔｏｋｙｏ　ｐａｒｔ２

俺等は早速横須賀駅に着いた。これから東京に向かうわけだがここで困ったことがあった。駅で切符を俺が買おうとすると

「石井さん…三等はもうイヤ…」

とサーニャさんが悲しそうな目で俺にそう言ってきたのだ。

「はい？」

俺がそう聞き返すと

「サーニャはナァ昨日の朝、お前を尾行していたとき二、列車が混みすぎて私に泣きながらよってきたんダゾ！」

とエイラさんが非常に怒りながら俺にそう言ってきた。もしここで俺が意地を張って三等の切符を買ったらエイラさんとサーニャさんが何をしでかすかわからない。それを聞いていた醇子も

「あなた…サーニャさんのこともあるから」

と俺に耳打ちをしてきた。

俺は少し考えてから

「…わかりました。じゃあ二等にしましょうか？」

と三人に言った。

「二等なら大丈夫なのカ？」

「少なくとも三等よりは空いてると思うので…」

「サーニャはドウダ？」

「私もそうしてもらえるならその方がいいわ」

「ソウカ…、石井、私も同じダゾ！」

「あなた、ありがとうね」

どうやら皆も二等の方がいいみたいだ。

「わかりました…それでは買ってくるのでしばらく待っていてください」

そう三人に俺は言うと窓口に切符を買いに行った。

「東京まで二等の切符を大人４枚」

”やれやれ、高いなぁ…”

と俺は思いながらもお金を支払い、切符を受け取った。俺の定期で二等車に乗ることは出来ないので、俺も切符を購入する羽目になった。

俺等は切符に鋏を入れてもらいホームに入った。これから乗るのは８：５６発普通列車東京行きだ。二等車には車両に青色の帯に‘2’と数字が書かれた車両であるからすぐにわかった。二等車の中

は案の定誰もいなかった。こんな平日の中途半端な時間に二等を使う人なんて正直俺等ぐらいだろう。帰りの方が俺はむしろ心配だ。

この路線の二等車は自由席なので俺等は好きな席に座ることが出来た。

「ここがいいわ…」

サーニャさんがそう言ったので俺等はそこに座ることにした。しばらくすると発車のベルが鳴り列車は進み出した。早速検札が俺等のところにやってきた。

「お客様?。ここは二等車ですが」

最初に検札はそう言った。確かに学生服姿で乗っているのを見て不思議に思ったのだろう。だが俺は迷うことなく二等の切符を四人分差し出した。すると

「し、失礼いたしました!」

と慌てた様子で検札は俺等の切符に判子(はんこ)を押した。

「東京駅への到着時刻は１０時丁度でございます」

最後に検札はそう言うと乗務員室の方に戻っていった。

「ふふ…あの車掌さん、私たちのこと三等の乗り間違えだと思っていたみたいね」

醇子は検札がいなくなるとそう俺に言ってきた。

「あぁ、そうだろうね」

俺が答えると

「石井さん」

とサーニャさんは俺にそう言った。

「どうかしたんですか?。サーニャさん」

「石井さんはいつも昨日みたいな電車で通学してるの?」

「えぇ、いつものことですよ。俺が昔使っていた総武線はあれよりもっと酷いですけどね」

「そう…なの?」

「えぇ、昨日俺の後をつけていたってことは都電にも乗ったんですよね?」

「都電?」

「あぁ、あの道路を走る電車のことカ?」

「それです。総武線は慢性的な混雑が続いていて、朝のラッシュはいつもあんな感じですよ・」

と二人はとても驚いていた。総武線は千葉縣、つまり房総や鹿島、そして成田の方へと向かう扶桑の幹線の一つでもあるのだ。だから

両国駅や千葉駅はそれぞれの方面に向かう普通列車や優等列車でいつも賑わっている。俺の使っていた新小岩駅もそれなりに大きな駅だったからそこから電車に…しかも錦糸町や俺の降りる御茶ノ水等に向かう上り列車は殺人的な混雑になる。一番酷かったときで乗車率は３１５％を記録したこともあるぐらいだ。

「扶桑の電車って戦場なのね…」

サーニャさんはぽつりとそう呟いた。

「前に俺が扶桑の通勤の通の字は通うの‘通’ではなくて苦痛の‘痛’だっていいましたよね」

そう二人に訊くと二人もそれに頷いた。

「昨日のことでわかっていただけましたよね…？」

そう更に俺が念押しすると

「うん…その通りだったわ」

「アァ、確かにその通りだったナ」

と二人も理解してくれたようだった。醇子はと言うと

「あなた私がまだいなかったときにそんな話をしていたのね」

と俺に訊いてきた。

「うん…でも二等車はそんな世界とは無縁だけどね…」

俺は醇子をはじめとする三人にそう言った。すると三人もそうだなと言う顔をしていた。

それから俺等は東京駅までずっと話をしていた。これまでのこと、そしてこれからのことを。話をしているうちに大きな煉瓦の駅舎が窓からわずかに見えた。東京駅は気がつかないうちに目の前まで迫っていた…。

横須賀線と中央線、それから都電を乗り継いで俺達は昨日と同じように帝大に到着した。

「昨日と同じ、あなたのいる大学ってやっぱり立派ね」

醇子はぽつりと俺の研究室のある工学部棟を見てそう言った。何でも俺の潮来の東京帝国大学第一工学部は来年度から改組されてただの工学部となるとのことだ。元々千葉にあった第二工学部が‘東京高等工芸学校’として独立するからしい。

「私も…こんなに大きな大学、オラーシャには数えられるぐらいしかないわ」

「スオムスにもあんまり無いナ…」

サーニャさんとエイラさんもしみじみとそう言った。確かに二人のいる国はネウロイによってめちゃくちゃにされてしまっからその気持ちも俺には痛いほどわかる。

「それじゃあ、どうぞこちらへ」

俺は三人を工学部の俺のいる研究室に案内した。と言っても昨日俺の後をつけていたのだからわかっていたようだが…。

研究室の中には誰もいなかった。教授がついさっきまでいたような気配があったが今はいないみたいだ。きっと会議かなんかだろう。

「これを置いてと…」

俺は教授の机に昨日今日で作ったレポートを置いた。これで今日の俺の仕事は完了だ。

「さてと…もう大丈夫ですよ」

俺の作業がこれだけだったと言うことに三人はあっけにとられていた。

「石井…もう大丈夫なのカ?」

「はい、今日は提出だけですからね」

「じゃあ石井さん…」

「えぇ、これから買い物に行きましょうか」

そう言うとサーニャさんとエイラさんはとても喜んでいたようだった。

とりあえず俺等は大学の門の前に辿り着いた。すると

「あなた…どこに行こうかしら?」

と醇子は俺に訊いてきた。

「サーニャさん達は？」

俺はサーニャさんとエイラさんに訊いてみた。俺と醇子は一応扶桑の人間だし況してや俺は東京出身だから大体のことはわかる。ただ肝心のサーニャさんが何を買いたいかで話は変わってくる。するとサーニャさんは何か怯えるように俺にそっと

「あのね…石井さん…」

そう言ってきた。

「どうかしたんですか？」

と俺が聞き返すと今度はエイラさんが

「悪いナ。実はサーニャ、欲しい物なんてないんダ」

と俺等に言ってきた。それからサーニャさんとエイラさんの話を聞くと、どうやら俺が今日、東京に出ることが早いうちにわかっていたみたいだったようで、東京に出かけたかったようなのだ。早い話がせっかく来たんだから観光したいということなのだろう…。

「…そういうことだったんですか」

「ごめんなさい、石井さんに迷惑かけてしまったみたいで」

「いや全然構わないですよ。それじゃあ行きましょうか」

俺はこの時もうどこに出かけるかという案が決まっていたと言っていいだろう。

「行くっテ…どこに行くんダ？」

「そうよ、あなた…もしかしてもう決めたの？」

エイラさんと醇子も俺にそう訊いてきた。

「えぇ、外国人の方だったらいろいろと面白いところだと思いますけどね…」

俺が二人にそう言い返すと醇子もだいぶわかってくれたようだ。醇子は俺にしか聞こえないくらいの声でそっと訊いてきた。

「もしかして…浅草のこと？」

「ダメかなぁ？。多分美味しい物もあるから大丈夫だと思うけど」

すると醇子は突然笑顔になって

「ふふ…あなたに任せるわ。私はあなたの妻なんだから」

と俺に言ってきた。まぁ醇子も浅草に行くことをいいと言ってくれたようだった。

「それじゃあ行きましょうか…」

俺は三人を連れて上野行きの都電に乗り込んだ…。

１０６話　Ｔｏｋｙｏ　ｐａｒｔ３

サーニャさんとエイラさん達に都電の一日乗車券を買っておいて正解だった。これを使えばどの路線に乗っても安くて済む。ひとまず俺達はいつも使う王子駅前から通三丁目を結ぶ１４系統に乗った。その後途中の万世橋で今度は神田の須田町と押上の方にある福神橋を結ぶ２４系統に乗り換えてひとまず上野駅に向かった。実を言うと、この２４系統は浅草駅を経由して押上の方に向かう路線で本来ならばここでわざわざ降りる必要もなかった。

「石井さん…一体どこに行くの？」

サーニャさんは俺等の乗った都電２４系統が万世橋電停を上野駅に向かって発車するとそう俺に訊いてきた。俺と醇子は目を合わせた。そして笑った。

「まぁ、楽しみにしていてくださいよ、サーニャさん」

「大丈夫よ、サーニャさんに何かあったら私が何とかしてあげるから」

そう俺等が言うと

「なんダなんダ！。お前達何を考えているんダ？」

とエイラさんが怒り気味で俺等にそう尋ねてきた。肝心のサーニャさんは安心したようで

「エイラ、もう大丈夫よ」

とエイラさんに向かってそう言っていた。

そんなこんなしているうちに都電は上野駅に到着した。早速俺は地下鉄の乗り場に向かおうとした。そう、俺はサーニャさんとエイラさんに地下鉄を折角だからと地下鉄を経験して貰おうと思ったのだ。

「おい石井！、なんで階段を下りていくんダ？」

「なんでって、地下鉄に乗るからですよ」

「ここから…地下鉄で行くの？」

「えぇ、ロンドンほどではないですけど…扶桑の地下鉄はアジアで初めてですから。」

「そうなんだ…」

「さぁ、あなた行きましょう」

「うん」

俺等は地下へと続く階段を下りていった。

扶桑のこの地下鉄は１９２７年つまり昭和２年の１２月３０日に浅草から上野まで開通した、今は浅草から澁谷までの計画されていた全区間が開通している。因みに言っておくと俺は１９２７年の６月６日に産まれたからこの地下鉄と俺は同い年なわけだ。切符売り場を抜けると、俺等はホームに辿り着いた。

「本日は青山六丁目駅での信号機故障の影響でご迷惑をおかけいたしております。ただいま2番線に到着の電車は当駅折り返しの浅草行き臨時でございます。ただいまのところこの電車は通常の予定時刻、5分で終点の浅草まで到着できる見込みでございます」

ホームに着いたとたんに駅員のアナウンスが流れた。どうやらトラブルが起こっているようだ。

「石井さん…今の放送はなに？」

「石井、どうかしたノカ？」

サーニャさんとエイラさんも言葉こそわからないけれども駅員が奔走している姿を見て少し不安に思っているようだ。

「大丈夫ですよ…この電車に乗れば時間通りに着くみたいですから」

そう二人を安心させると醇子は

「さぁみんな。乗りましょう」

とドアが開くと車内に入っていった。この地下鉄線の大きな特徴は車掌は車掌室でドア扱いを行わず、車内の一部のドアでドア扱いを行うところだ。一番最後尾の車両の一番後ろのドアは車掌がいつもいる。その姿を見てサーニャさん達は不思議に思っていたようだった。この地下鉄の乗務員室は半室構造…つまり通常の運転室の横半分しかないのだ。バスの運転台が左側にあると思ってもらえればいい。つまりこうしないと片方のドア扱いが出来ないのだ。それを説明するとエイラさんもサーニャさんも感心していたようだった。

「あなた…よかったわね」

「うん、二人とも早速喜んでくれているみたいだよ」

そんなことを醇子と話していると電車はドアを閉めて発車した。実はこの後にもとっておきの仕掛けがあるのだ。

「醇子は扶桑の地下鉄に乗るのは？」

「そうね、実は私も今日が初めてなの。私はずっと広島の…」

その瞬間、明かりがしばらく消える。しばらくと言っても2，3秒だ。これは銀座線の集電方式に理由がある。銀座線はトンネルの断面が小さいからパンタグラフを使って集電をすることが出来ない。だから銀座線では車輪の部分に集電靴をつけて脇にある電気を流す専用のレール（サードレールと言う）から電気を得てモーターを動かしているのだ。この方式を‘第三軌条方式’というのだがこの方式には高速運行には不向きである。しかももっと大きな欠点として安全の観点から駅や途中の区間で意図的に線路が切られているのだ（この区間のことをセクションという）。これは万一線路に人が落ちたりした場合に駅構内だけの電流を止めさせたりすることが出来るようにするためである。レールが切られている部分は必然的に集電が出来ないから車両の運転に必要な電源などが得られなくなってしまう。と言ってもレールが切られている区間では仮に電気が流れていなくても惰性走行で通過が出来るようになっているから直接運行に影響が出るわけではない。だが電気が流れないので車内の明かりなどは消えてしまうと言うわけだ。

「きゃっ！」

サーニャさんと醇子はほぼ同時に

「ウオッ！」

とその後に間髪を入れずにエイラさんも驚いたみたいだった。醇子に至っては俺の右腕にしがみついてきた。勿論電気はすぐにつき始めたから三人ともすぐに落ち着いたみたいだったが…。問題はその後だった…。

「あ、あなた、今の何？」

「あぁ、醇子。今のは一時的に電気が流れなかったんだよ」

「どうして？」

「安全上ね…」

「ふ～ん」

醇子はすぐに納得してくれたようだったのだがエイラさんの質問に安易に答えてしまったのが問題の始まりだった。

「でも石井は全然驚いてないじゃないカ！」

「あぁ、俺はよく乗るんで…」

「…ォマエ…」

「エイラさんどうかしたんですか？」

「お前、知っててそれを言わなかったんだナ？」

「え…えぇ。これも扶桑の地下鉄の特徴ですから身をもって体験してもらおうと…」

「ふざけるナ！、サーニャだって驚いたじゃないカ！」

エイラさんはいつもにまして怒った口調で俺にそう突っかかってくる。

「ま、まぁエイラさん…」

「まぁじゃなイ！。お前わかっているの…」

と再びセクションを通過したようだ。すると

「きゃっ！」

と今度はエイラさんの手をサーニャさんがぎゅっと握りしめたようだった。

「サ、サーニャ…」

再び明かりがつくと最初の停車駅である稲荷町に着いたようだった。ドアが開くと

「稲荷町（いなりちょう）、稲荷町です」

と駅員の声が聞こえてきた。と思ったらすかさず電車は発車する。

扶桑の地下鉄は運行間隔がラッシュ時は2分20秒であるからこれぐらいのペースで走らせないと詰まってしまうのだろう。それからというもの幾たびとセクションを通過する度にサーニャさんはエイラさんの手を握りしめていたようだった。

浅草駅に着き階段を上がり明るいところに出るとエイラさんの手には跡がついていた。

「石井！」

エイラさんは俺を呼んだ。

”また怒られるのかな…”

俺はそう思いながらおそるおそるエイラさんのところに向かった。

「さっきはその…悪かったナ、あんなに怒っちゃッテ…」

どうやらエイラさんもサーニャさんに手を握られるのが嬉しかったのだろう。俺に怒るどころか謝罪をしたのだ。勿論俺も笑顔で

「いいんですよ、気にしないでください」

と言い返した。すると

「あなた…私お腹が空いちゃったわ…」

と醇子が俺にそう言ってきた。東武線の浅草雷門（あさくさかみなりもん）駅前にある時計を見ると11時56分ともうお昼時だった。

「それじゃあ食事に先に行きましょうか…」

そう俺が言うと皆もそれに賛成していたようだった。

俺は正直何を昼に食べようか迷った。蕎麦（そば）や饂飩（うどん）でもよかったのだがせっかく来たのだからもっと豪勢なものを食べさせてあげたい。となれば浅草だからそう言った物はいくらでもある。まずはすき焼き、そして天麩羅、他には江戸前寿司と言ったところだろう。勿論どれも食べるにはそれなりの値段はするがこんなところでケチケチしてもしょうがないこういうときはパッと使うのが一番いい。

俺等はひとまず何が食べたいか訊くことにした。

「醇子やサーニャさん達は何が食べたいんです？」

「わたしは、なんでもいいわ。せっかくだからあなた、サーニャさんとエイラさんに決めてもらいましょう」

俺も醇子の意見に賛成だった。実を言うと俺もそうしたかったのだ。

「私は何でもいいゾ！。サーニャは何が食べたいんダ？」

案の定エイラさんはサーニャさんに何が食べたいのか訊いた。ここも俺は計算通りだった。俺と醇子は扶桑人だからここにはいつでも来ようと思えば来られるから譲歩する、そしてエイラさんはサーニャさんが大好きだからサーニャさんの意見に従う…と言う俺の計算が。

「私は…エイラの食べたいものが食べたい」

サーニャさんは恥ずかしそうにそう言った。ここは俺も計算を間違えていたようだった。ただ悪くはない計算違いだ、計算違いというか過程が全然違うのにもかかわらず答えが合っているような感じだ。まあ、一番驚いていたのはエイラさんのようだったが…。

「サ、サーニャ、サーニャの好きな物でいいんダゾ！。ナッ！、石井」

「え？…えぇ、俺と醇子はせっかく来てもらったんですからエイラさんとサーニャさんが食べたいもので構いませんよ」

「だったら、エイラの食べたいものを食べたい！」

俺がそう言うとサーニャさんは強めにそう言った。意外とサーニャさんも頑固というかそう言う面があるような気が俺には感じ取れる。どうやらエイラさんの心もその一言に動かされたようだ。するとエイラさんは

「ソウダナ…これがいいナ…」

と言いながら観光案内の紙の絵を俺に指さした。見ると寿司のようだ。醇子は先に

「わかったわ。あなたそれにしましょう。私美味しいところ聞いてくるから…」

と交番の方に醇子は向かおうとした。

「大丈夫だよ醇子、俺ならわかるから…」

と言いながら俺は慌てて醇子を連れ戻した。早速三人は俺の後を追いながら、俺は三人を連れながらその寿司屋に向かった。

その店は東武線の浅草雷門駅の少し奥にある小さな寿司屋だ。

「石井…本当にここで大丈夫なのカ？」

その店の小ささにエイラさんは少し不安になっていたようだ。

「大丈夫ですよ。さぁ入りましょう！」

俺は勢いよく店の戸を開けた。

「へいいらっしゃい！…ん？、あんた石井さんのところの坊ちゃんじゃねぇかぁ！」

「久しぶりですね大将」

「ん？、それに今日は綺麗な女の子も連れてきてるのか！、モテモテだねぇ！」

「はは…やめてくださいよ。前にブリタニアで一緒してた同僚です」

そう俺は店の大将と軽く会話をするとカウンターに座らせてもらった。席に着くと早速

「ねえあなた、この店のご主人さんと知り合いなの？」

と醇子は訊いてきた。

「うん、大将と俺の親父と大将は先輩後輩の関係でね」

「ふ～ん」

と醇子が頷くと大将は

「ん?、そこの綺麗なお嬢さんとはどういう関係で?」

と俺に訊いてきた。

「あぁ、紹介が遅れていましたね、こちらは俺の妻の醇子です。そしてこちらがエイラさん、スオムスの空軍少尉。その奥がサーニャさんでオラーシャの陸軍中尉なんです。今日は二人がわざわざ扶桑に来てくれたものですから大将の寿司を食べてもらいたいなって…」

「なるほどね…って坊ちゃん結婚したのか!」

「えぇ…今年の8月に」

するとすかさず醇子も挨拶をした。

「ご主人さん初めまして、私は妻の石井醇子です。扶桑海軍の大尉をしています。夫がお世話になっていたようで…」

「いえいえこちらこそ、今日は何でも外国人の方においらの寿司を食べていただけるなんてありがとうございやす」

醇子の綺麗さに大将もたじたじのようだ。すると

「それじゃあ今日からおいらも坊ちゃんじゃなくて石井さんって呼

ばないとな」

と俺に言ってきた。

「えっ？」

「もう、子供じゃないからね。身を固めるんだからよぉ…」

「そうですか…なんだか照れちゃいますよ。そう言われると」

「はっはっは。まぁいいってことよ！！。さてさてそれじゃあ石井さん、今日はどんな風に？」

大将は俺にそう訊いてきた。

「そうですね…う～ん…とりあえず大将のお任せでいいですか？」

そう俺が言い返すと

「あいよっ！」

と大将は前のように威勢よくかけ声を言いながら握り始めた。

できあがった寿司は美しかった。まるで宝石のようだ。

「大将…さすがですね」

「おぅ！、あったりめぇよ！！。この道４０年だからねぇ」

大将は義務教育を終えるとすぐに寿司屋に弟子入りしたと前に親父

から聞いたことがある。何でも扶桑一の寿司職人になると言っていたそうだ。確かにこの味ならそれもあながち間違っていないのかもしれない。その時だ、俺がエイラさんがいきなり

「ウワッ…なんだかツーンとすル～」

と涙を流しながら俺にそう言ってきた。

「あぁ、これはワサビって言うんですよ。毒消しの効果があるんです」

そう言うと納得しながらもエイラさんは泣きながら

「ウゥ…あれ?、食べ終わるとすぐに何ともなくなったゾ！」

と俺にそう言ってきた。

「それがワサビの特徴なんです」

「なるほどナ…ウン、美味しイ」

するとサーニャさんも

「石井さん…美味しいわ。こうやって魚を食べたの初めてだわ」

と笑顔で言ってきた。どうやら満足してくれていたようだ。醇子も勿論

「おいしいわ…あなたこんなに美味しいところ知っていたのね」

と喜んでいた。

「ありがとうございます。大将」

俺が大将にお礼を言うとお茶を飲んでいた大将は

「はは、いいんだよ」

とこちらも笑顔だった。言葉はわからなくてもサーニャさんやエイラさんの笑顔を見れば美味しいと思っているのは大将にも一目瞭然だった。

お茶を飲んでほっとすると

「さて…そろそろ行きますか…」

と三人に言った。三人もそれにどうやら賛同してくれたようだった。俺は会計を済ませようと財布を取り出した。

「大将…お愛想でね…」

「石井さん…今日はお代は結構だよ」

「えっ？」

「おいらはこれぐらいのことしかできないけどよ…結婚祝いだ！」

大将は威勢よく俺にそう言った。俺も笑顔で

「ありがとうございます大将。これからもよろしくお願いします」

と言い店を出た。するともう皆は先に大通りの方に出でていた。

”ありがとう…大将”

俺はそう思いながら皆のところに急いだ。

それから俺等は浅草寺（せんそうじ）に向かった。

「この煙は何なの？」

「これを頭につけると、頭が良くなるって昔から言うんですよ」

「な、なら。私も…ゴホッ、ゲホッ」

「エ、エイラさん。そんなに仰いだら酸欠になっちゃいますよ…」

「エイラ…」

とまぁ、何はともあれサーニャさんもエイラさんも楽しんでくれていたようだ。その後、せっかくだからとハルトマンさんやルッキーニさん達のためにも雷おこしと人形焼きをお土産として買っていってあげることにした。それを終えると俺等は再び地下鉄の乗り場についた。

「石井さん」

俺達が地下鉄乗り場の階段を下りようとした直後だった。突然サーニャさんが俺を呼び止めた。

「どうかしたんですか？。もしかして…忘れ物とか？」

「この切符って…まだ使えるのよね？」

「えぇ。一日乗車券ですから、今日いっぱいはずっと乗り放題ですよ？」

「なら。もっと乗りたい…」

「えっ？」

「わ、私もダゾ。地下よりも、外の方が楽しいんダ」

突然のサーニャさんとエイラさんの要望に若干驚いた。勿論醇子も

「あなた、二人が言ってるんだからそうしましょう？」

と俺に同意を求めてきた。

「わかりました。それじゃあ東京駅まで、ゆっくり都電で行きましょうか？」

それにはエイラさんもサーニャさんも、それから醇子も同意してくれた。なら、折角だから勝鬨橋（かちどきばし）を通るような経路で行くことにしよう。というわけで、早速都電の浅草電停から僅か一区間ではあるが隣の本所吾妻橋（ほんじょあづまばし）まで向かった。この時乗ったのはさっきの２４系統とは違って、須田町から向島区の寺島町二丁目（てらじままちにちょうめ）までを結ぶ３０系統に乗り込んだ。その後今度は、福神橋と月島通八丁目（つきしまどおりはっちょうめ）を結ぶ２３系統を使って終点まで乗り通した。サーニャさんとエイラさんは流れゆく東京の下町の景色にずっと目を奪われていた。その後終点の月

島通八丁目に着くと今度はいよいよ勝鬨橋を通過して新宿駅前(しんじゅくえきまえ)までを結ぶ１１系統に乗り換えた。途中の勝鬨橋では都合良く船がやってきてくれて、船の通る姿を都電の中からゆっくりと眺めた。

「オ、オォ。橋が動いてるナ」

「凄い…万歳してる見たい…」

サーニャさんとエイラさんは橋桁が動く姿に目を奪われていた。その後は数寄屋橋(すきやばし)から大塚駅前(おおつかえきまえ)までを結ぶ１７系統に乗り継ぎようやく東京駅の八重洲口に到着した。

「あなた…二人とも良く寝ているわね…」

「うん、そうだね…醇子」

エイラさんとサーニャさんはよほどはしゃいでいたのだろう。帰りの横須賀線の中では疲れて眠ってしまっていた。

「なぁ醇子…って…」

醇子も例外ではなかった。笑顔でスヤスヤともう寝息を立てていた。

”でもまぁいいか、皆喜んでくれていたみたいだし…”

俺はそう思いながら東京駅の赤煉瓦を見送った。

電車はもうすぐ横浜というところだ。もう陽もあと少しでなくなりそうなくらいだ。

「次は横浜、横浜でございます。桜木町方面と京浜電鉄線、東京急行線、相模鉄道線はお乗り換えです」

車掌が各車両をそう言いながら回っていた。するとその声に反応したのだろうか醇子は起きたようだった。

「ぅうん…あら、おはようあなた」

「あぁ、おはよう…醇子」

おはようという言葉が適切なのかどうかと考えはしたがとりあえず俺はそう答えた。

「もうすぐ…横浜なのね」

「うん…エイラさんとサーニャさんはまだ寝てるね」

「えぇ…」

俺は二人の寝顔を見た。とても楽しそうな顔をしている。

「あら、あなた二人の寝顔に見入ってるわよ」

「えっ！！。あぁごめんごめん」

「もぅ…私も寝ていればよかったわ」

「そ、そんな…」

「ふふふ。あなたのそう言う仕草、私、大好きだわ」

「なんだよもぅ…」

そう言うと俺は醇子とお互いにお互いを見ながら笑った。

「そういえばあなた」

と醇子は何か訊きたそうに俺にそう話しかけてきた。

「ん?、どうかしたのかい?」

「今日はとてもサーニャさんとエイラさんも喜んでくれていたわね」

「あぁ、やっぱり寿司屋に行ってよかったね。あの店は昔からよく行ってたからね」

「でもあなたが坊ちゃんだなんてね…なんだかおかしいわ」

そう言いながら醇子は笑っている。

「おいおい、俺だって子供の時はあったんだぞ!」

「ふふ…わかってるわよ。私にもあったんだからね」

「だろ?」

「えぇ」

俺等が再び笑っていると列車は横浜駅に到着した。停車時の衝撃の影響だろうサーニャさんとエイラさんも起きてしまった。

「石井さん…おはよう…うはぁ～」

「ウ～ン、私たち寝ちゃってたのカ…」

「おはようございます二人とも。後３０分くらいで横須賀に着きますよ」

「３０分カ…せっかくだからいろいろ話さないカ？」

そうエイラさんは俺等に言ってきた。それから俺等は横須賀に着くまでずっと電車の中で話を続けていた。

横須賀駅に着くと俺と醇子はサーニャさんとエイラさんを送りに坂本さんのいる海軍の宿舎に連れて行った。

「こんばんわ坂本さん」

「こんばんわ美緒」

「あぁ、二人ともご苦労だったな。エイラ！、サーニャ！、ほら早く入れ」

そう坂本さんが言うと二人は宿舎の中に入っていった。

「どうだった、東京見学は？」

「えぇ、二人とも喜んでくれていましたよ」

「はっはっは。それはよかったよかった」

「美緒達も来ればよかったのに…」

「そうしたかったんだけどな、私もいろいろと仕事があってな…」

「また今度皆さんで行きましょう？」

「あぁ、そうだな。それじゃあ気をつけて帰ってくれ」

「はい、お休みなさい、坂本さん」

「おやすみ、美緒」

「あぁ、二人もな…」

そういうと坂本さんは宿舎の方には言っていった。俺等が帰ろうと振り返ると宿舎の二階から

「石井～！」

とエイラさんの大声が聞こえた。振り向くとサーニャさんとエイラさんが手を振っていた。どうやら今日のお礼のつもりのようだ。俺等も十分に嬉しかった。サーニャさんとエイラさんの笑顔があんなに素敵だったのだから。俺等が手を振るのを見届けると二人は窓を閉めて部屋の中に消えた。

「帰りましょう…あなた」

「うん」

そう言葉を交わすと俺等は歩き始めた。さすがに冬の横須賀は寒い。寒がっている俺を見て醇子は

「あなた…手がこんなに冷たいじゃない！。ダメよ、風邪引いちゃうわ！」

と言いながら俺の手を握りしめた。正直恥ずかしかったが温かかった。

「ありがとう…醇子」

「ふふ、どういたしましてあなた」

そう言いながら俺と醇子は宮藤さんの家のあるところへ続く坂道を登っていった…。

１０７話　再会

翌日俺は自宅の被災状況を確かめに実家に向かうことにした。と言っても毎月１回の割合で見に行っているからもうだいぶ慣れてはいる。被災状況を確かめるというよりかは窃盗や破壊が行われていないか見に行くといった方が適切かもしれない。朝食を済ませると俺は背広に着替えた。一応学生服でもいいのだが何かとこちらの方が便利だからだ。

「あらあなた、今日も出かけるの？」

醇子は俺が着替え終わると部屋に入ってきてそう俺に言った。

「うん、醇子も来るか？」

「それはうれしいわね…でもどこに向かうのかしら？」

「俺の家が前から被災しているって言ったはずだよな？」

「えぇ。確か今年の夏に大雨が降ったとかで」

「そう、川が氾濫してね…。母さんも親父も今すぐに家に行けない状況だから異常がないか定期的に俺が見に行ってるんだよ」

「そうなのね…そこに私も連れて行ってくれるの？」

「うん。何も今はないところだけど来る？」

俺がそう訊くと醇子がイヤだというわけがなかった。俺に抱きつい

てこう言い返した。

「勿論…行くわ」

「わ、わかったから。離れてくれ…」

ハルトマンさんだとかシャーリーさんだとかが見ていたらきっと‘ラブラブ’だとか‘熱いな’とかといじられてしまいそうな光景だ。

醇子の準備が終わると早速俺等は出発した。山道を下り横須賀駅に着きいつものように切符を買った。

「そういえば醇子」

「なぁに?、あなた」

「電車は…その」

さすがに二日続けて二等に乗ると今の俺には経済的に辛い。それを醇子も悟ってくれたのだろう。

「いいわよ、三等でも」

とほほえみながら俺にそう言ってくれた。さすが‘リバウの貴婦人’と呼ばれていただけのことはある。夫として誇りに思える妻だ。

「ありがとう、それじゃあ買ってくるよ」

俺はそう醇子に伝えると窓口に向かった。

鉄道の定期券というのは重複する区間や二通り以上の方法で目的地に行くことが出来る場合は前もって経由を選択することが出来る。勿論この指定された区間を利用すれば問題ない話ではあるのだがそうしたくない場合もある。それが俺のような場合だ。今の俺の学生定期はここ横須賀から御茶ノ水までの区間で購入しているのだが俺はわざと秋葉原を経由するように購入しているのだ。これは秋葉原という場所に理由がある。ここで電気に関わる細かな部品がたくさん手に入るからだ、だから俺等工学部の電気科の学生にとってここは非常に重要な場所なのだ。そこをギリギリのところで通らないのは勿体ない。だから俺は定期券上は秋葉原を経由することにしているのだ。勿論いつもそんな回りくどい経路で俺が通うことなんて無い。中央線を使えば東京から御茶ノ水まで一本で行けるのだ。今回俺は切符を買わなかった。新小岩に着いたときに精算をすればいいのだ。この場合だと定期券の有効区間は横須賀から秋葉原までとなり精算するときは秋葉原と新小岩の区間分の運賃を支払えばいいのだ。

早速、醇子に切符を渡すと俺と醇子は改札口に向かった。来た電車に俺等は乗った。

「あなた…この電車短くないかしら?」

醇子は乗るやいなやすぐに俺にそう言ってきた。俺等が乗った電車が二両編成だから変に思っているのだろう。この電車は‘チョン行’と呼ばれていて短い区間をピストン輸送する列車のことを指す。その名前がついているだけあってこの電車は逗子(ずし)と久里浜(くりはま)の間をピストン輸送しているのだ。

「うん、逗子止まりだからね」

俺はそう答えた。

「逗子から先は？」

「大丈夫、終点で東京行きが待ってくれているから」

「そう…なら大丈夫ね」

醇子も安心したようだった。確かに見知らぬ土地で一人で列車に乗るというのはなかなか難しいというか大変なものだ。俺みたいに好きな人ならそうでないのかもしれないが単に異動するという目的だけで見知らぬ土地で列車に乗るのは精神的にかなり負担がかかるだろうから…。

列車は5分足らずで逗子駅に到着した。案の定東京行きの普通列車が待っていてくれていた。早速俺等はその電車に乗り換えた。幸いなことにあまり混んではおらず向かい合わせの席を二人で占有することが出来た。俺はこう言うときは決まって進行方向と逆向きの席に座る。朝のラッシュ時などは鉄道の席は争奪戦になる。こういうときは大抵進行方向の向きから埋まっていく。後ろの方に並んでいると余った席は大抵進行方向と逆向きになってしまう。気がつかないうちに俺にはその感覚が当たり前のようになってしまったのだ。ただ俺にとっては醇子と向かい合わせで座れているから問題はないのだが…。

「そういえばあなた」

「ん？」

「鍵とかはどうなっているの？」

列車が出発すると醇子は俺にそう言ってきた。確かに醇子の言うとおりだ。しばらく家を空ける異常俺の家は誰かに見てもらっていないといけない。俺の家族は隣の人に預かってもらっていた。隣の家は二階建てながらも一階部分が駐車場というか物置のようなものだから先の氾濫による浸水を受けても問題はなかったのだ。

「あぁ、となりの人に預かってもらってるよ」

「そう」

「うん、黒江さんって言うんだけどね」

そのときだった。　醇子は俺がそう言うと驚いたような顔をしながら

「えっ！」

と言った。

「ど、どうかしたの？。そんなに驚いて？」

「い、いや…なんでもないわ」

「そうかぁ…」

俺は不思議に思いながらも深く追求しなかった。その後、東京から山手線と総武線を乗り継いで新小岩駅に着いた。駅を出ると確かに何もなかった。バスのロータリーなどはもう整備が整ってはいたが周囲の再開発はまだまだ先の予感がした。駅前には今後についての区長の宣言と区の方針が書かれた看板があった。

「区画整理をするみたいね…あなた」

「あぁ、そうみたいだね」

「あなたのお家は大丈夫なのかしら？」

醇子は心配そうに俺に言ってくる。

「多分大丈夫だよ…あの場所は家とかも残ってるし俺のいるところはもう区画整理も済んでるからね、家さえ直れば問題ないよ」

「そう…よかったわ」

醇子は俺がそう言うとほっとしてくれたようだった。俺と醇子は家に急いだ。

整備はされていないのだが家はしっかりと残っていた。一階の半分くらいの高さまで泥の跡が色濃く残っていた。浸水の時の状況が目に浮かんでくる。

「酷い目に遭ったのね…あなたのお家」

「あぁ、俺はブリタニアにいたからわからなかったけどね…」

俺はそう会話を交わしながらも隣の家に向かった。すると醇子がやけにワクワクしている。

「大丈夫か醇子？」

「えっ？」

「なんだかさっきから随分ワクワクしてるみたいだけど…」

するとほほえみながら醇子は

「何でもないわよあなた…さぁいきましょう」

と言いながら俺を隣人の黒江さんの家に連れて行った。

俺は黒江さんの家のドアをドンドンと叩いた。すると中から

「お、石井かぁ…よく来たなぁ」

と黒江さんがいつものように出迎えてくれた。すると醇子を見ながら

「ん？…！！。お前竹井じゃないか！」

と驚きながらそう言った。

「お久しぶりです黒江大尉」

「あぁ…でもどうしてお前が？。まぁいいや、石井も竹井も中に入ってくれ！」

「はぁ…？」

俺はまだ状況がよく読めなかったがとりあえず黒江さんの家にお邪魔した。

お茶を出されると早速黒江さんは俺に訊いてきた。どうやら聞きたいことがたくさんあるようだ。

「石井…竹井を連れてきてどうしたんだ?」

「あぁ、俺の妻なので連れてきたんですが…」

すると黒江さんは

「妻だと!!!」

とこれまた偉く驚いていたようだった。

「本当なのか竹井?」

「はい。ブリタニアの５０１に派遣されたときに明範さんと…」

すると黒江さんは力が抜けたように

「はぁ～、なるほど…そうだったのか…」

と俺等に言った。すると今度は醇子が俺に説明してくれた。

「私と黒江大尉は上司と部下の関係なの」

「そうだったのかぁ、だから黒江さんって横須賀線の中で俺が言ったら…」

「えぇ、まさかって思ってたんだけどどうやら本当だったみたいね…」

「そうなんだ…私と竹井は昔一緒に戦ったことがあってな…。それが今は石井の妻か」

「えぇ…。醇子、俺を軍に推薦したのは黒江さんだったんだよ」

「あら、そうだったの？」

「あぁ、石井に…いや明範に軍の試験を受けろって言ったのは私なんだ。もしかしたらと思ってな…」

「へ～、でもあなたと黒江大尉はどこで？」

「あぁ、俺がここに引っ越してきたときに知り合いになったんだよ。黒江さん、釣りが得意だったからね。小さいときからよく遊び相手になってくれていたんだよ」

そういうと黒江さんも俺の幼少期を醇子に話し始めた。

「明範はこの辺でも有名になるぐらい小さい頃から勉強が出来たんだよ、それに中学も国立の学校に進学したからみんなこの辺の人たちは喜んでいてな…こんな小松の田舎かから、まさか大塚の東京高師に進学するとは、誰も思っていなかったからなぁ」

俺は中学三年間を東京高師附属中学で過ごした。俺はそれでこそここにでもいるただの中学生だった、勉強が出来るという以外の観点は。

「その後に帝大にも進学したからな」

「聞いたわ、明範さんが…飛び級で入ったって言うのも」

「あぁ、私も驚いたからな。隣人の子供が飛び級だなんて私も信じられなかったよ」

「醇子も黒江さんもやめてくださいよ…恥ずかしいです」

すると黒江さんも醇子も笑いながら

「はは、お前は変わらないな」

「ふふ…あなたらしいわ」

黒江さんが言うには俺は小さい頃からこんな調子だったそうだ。それでも俺に構ってくれた黒江さんは尊敬に値する人だ。

それからしばらくすると皆でたくさん飲んでいたからだろう。お茶がなくなってしまっていた。

「あら…お茶がなくなっちゃったわね」

「あぁ、悪い悪い。今入れてくるよ」

と黒江さんが立ち上がろうとすると

「いいですよ黒江大尉。私が入れてきます」

と醇子が黒江さんにそう言った。

「いやいいよ」

「大丈夫ですよ。久しぶりに会ったんですから黒江大尉は明範さんと話していて下さい」

とほほえみながら醇子は台所の方に向かっていった。すると黒江さんはいきなり俺の方に顔を寄せてきた。

「ちょ、ちょっと！。いきなり驚くじゃありませんか！」

「しぃー。少し私の話を聞いてくれるか？」

と黒江さんは小声で俺にそう言った。俺も状況を少なからず把握することが出来たのでそうすることにした。

「明範、たけ…いや醇子はどうだ？」

「どうって？。それはいつも優しくしてくれていますけど…」

「そうか…」

「どうかしたんですか？」

「いいか、あいつを本気で怒らせたらダメだ」

「えっ？」

「あいつはかなり怒ってる時って笑顔にならないか？」

俺は今までのことを振り返る。ブリタニアにいたときのことを…

”確かに、俺をお説教するときは怒ったような顔をしていたけど。みんなに追いかけ回されたあとにみんなの前でお説教を受けたときは確かに笑顔だったな…”

「えぇ、たしかにそうでしたね…」

「実はな、あいつが本気で怒らせると笑顔になるんだよ。平手打ちとか食らったことあるか？」

「えぇ、何度も…」

「何度も…か。それはどんなときだ？」

「お説教を受けてるときでしたね…。でもそう言われると笑顔でもまだどこかしらに良心の心があったような笑顔でしたけど…」

「それまだ大丈夫なときだ。本当に怒らせるとその平手打ちの軽く2，3倍は超える威力で叩かれるからな」

「本当ですか！」

「あぁ本当だ、わかりやすく言うと…ほら、ほらこんなふうにな…って！！」

「醇子！」

お茶を入れに行くのにそう長く時間がかかるはずもなかった。笑顔のまま醇子は元いた場所に座り皆にお茶を入れた。

「ありがとう、たけ…いや醇子」

「ありがとうな…醇子」

「はい、どういたしまして」

それからしばらく俺と黒江さんは怯えながらも雑談を交わした。

柱時計が三時を指していた。そろそろ帰らないと夕食には間に合わないだろう。俺と醇子は帰り支度を済ませて帰ることにした。

「…それじゃあ気をつけてな、二人とも」

「えぇ、黒江さんもお気をつけて」

「ふふ、黒江大尉もお元気でね」

「また、来てくれたらその時は魚でもごちそうしてやるよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「ふふ…それじゃあ楽しみにしておきます」

醇子はそう言うと先に道路に続く階段を下りていった。俺も後に続けと言わんばかりに降りようとすると黒江さんが

「明範！！」

と小声で呼んだ。

「はい、どうかしましたか黒江さん？」

「醇子のことだ、今日は覚悟しておけ」

俺はその一言を心に深く刻み込んだ。

「わかりました。それじゃあお気をつけて」

「あぁ、またな」

そう言葉を交わすと俺は醇子のところに急いだ。

「なにかあったの？」

「い、いや。お前の家は私が守っておくから安心しろだってさ…」

「そう…あなた」

「ん？」

「寒いから、手をつないでくれないかしら？」

「あぁ…別に構わないけど」

そう俺が言い返すと醇子は俺の右手をかなり強く握った。まるで万力のようだ。

「い、痛いよ…」

「あら、何か言ったか・し・ら？」

醇子の目はもう既に見違えるかのように変貌していた。

その夜、俺が部屋でのんびりお茶を読んでいると急にその場が暗くなった。正確には何かの影が光を遮ったのだ。振り返るとそこには醇子がいた。

「ど…どうかしたの？」

「あら～、隠してもムダよ？。この期に及んでもまだ誤魔化すなんて、あなたらしいわ」

「えぇっ！？」

そう言うと醇子は俺を引っ張って部屋の真ん中に連れて行った。丁度火鉢があるからだろう。

座布団を二つ静かにおくと醇子は急に笑顔になった。しかもその笑顔には良心がどこにも残っていないような笑顔だった。

”まずいな…黒江さんの言っていたとおりだ”

そんなことを俺が思っていると

「あなた…座っていただけますか？」

と醇子は急に敬語で俺にそう言ってきた。

「醇子…これにはその…訳があって…」

俺の言葉を聞いていないような振りをしながら再び醇子は

「座っていただけるか・し・ら?」

と強めに笑顔で言ってきた。この後俺はこってりと二時間、お説教を受けることになった。それは今までの物よりもいっそう過酷な物になっていた。醇子の笑顔と数段強めの平手打ちのせいで…。

１０８話　アルバイト

結局昨日は布団に入ったのは、１１時を少し回った頃であった。

・・・

醇子達を見送ると俺もその後…大体、３０分後くらいには宮藤さんの家を出た。実を言うとまだ醇子達にもアルバイトのことは黙っている。まだまだ秘密のベールに包ませているのだ。というわけで俺は今日もアルバイトをするべく、一路東京駅に向かった。

「おはようございます」

「おぉ。石井か。どうだい、奥さん達帰ってきて？」

「そりゃあやっぱり嬉しいですよ。ようやく会えたって感じです」

「はは。そうかそうか、せっかくの夫婦の時間を悪いな」

「いえいえ、今日は妻も用事がありまして…」

「そうか…おっと、それじゃあ交代だな」

「はい、お疲れ様でした」

そう言うと俺は改札口の中に入って、いざ仕事を開始した。俺の担当は降車用の改札、要は下車客の切符の回収と定期券の確認が主な仕事になる。この仕事は結構楽しいもので、色々な定期券を見ることが出来る。

‘學　尾久　↑（東北線経由）↓　東京’

とか言う通學定期券も見ることが出来るし、

‘通　飯田橋　↑（総武線、東北線経由）↓　東京’

と言った通勤定期券なんかも見ることが出来る。後この間見た珍しい切符は、長旅の切符で

‘山川　↓　東京’

と言ったものであった。山川というと、鹿児島の方の指宿線の方からやってきたお客様になる。道理で日焼けが凄かったものだ。とは言っても、受け取る切符は専ら東京近辺のみ

「はい、駅員さん」

そう例えば

‘横須賀　↓　品川’

とか言ったような切符だ。おっといけない、この切符じゃあ降ろすわけにはいかない。これは精算して貰う必要がある切符だ。

「あぁ、お客さんこの切符じゃ下車出来ませんよ」

「ふむ、どうすればいいんだ?」

「はい。あちらの精算所で精算をしてから、再度この改札をお通りください」

「ありがとうな、石井」

「いえいえ、えっ?」

よく見てみると目の前にいたのは、坂本さんだった。思わず驚いてしまったが、会社の制服を着ている以上は‘お客様と職員’の関係だ。

「わかった。あっちだな」

「はい。左様でございます…」

その後俺は、何時に仕事が終わるのか坂本さんに聞かれた。本当はあんまり教えてはいけないことなんだけども、夕方の４時までだった。最近の勤務時間は午前１１時から午後４時までの昼時の旅行客で混雑する時間を専門で受け持っている。だからこそ、珍しい行先の切符に鋏を入れたり、鋏の入れられた切符を受け取ったりするというわけだ。

「はっはっは。いやぁ、まさかお前があそこでアルバイトをしているとはな」

「えぇ。お金を自分でも貯めておかないと…いつまでも醇子にばっかり負担はかけていられませんし、学生ですからね。あぁいったことでしか、そううまくは行かないんですけどね」

「いやいや。どんな形にせよ、お金を稼ぐと言うことを學ぶというのは偉いぞ」

「それに、自分の好きな仕事ですから」

「はっはっは。お前には天職だな」

「えぇ…」

帰りの横須賀線の電車の中で、俺と坂本さんはそんな雑談を交わした。今日は坂本さんは坂本さんで、霞ヶ関（かすみがせき）の海軍省に用があったんだそうだ。

「そう言えば坂本さん」

「なんだ？」

「このことは…その」

「秘密にしておくんだったな」

「えぇ。どうしても、このことだけは秘密にしておきたいんです」

「わかった。でも、どうしてなんだ？」

「い、いえ。ただ恥ずかしくて…」

「う～ん？。何も恥ずかしいことなんかないじゃないか？」

「俺としてはどうしても恥ずかしいんです」

「そうか…まぁ、お前がそう言うのなら仕方がないな」

「あ、ありがとうございます」

「うむ…ミーナにも行ってはダメか？」

「う、それはぁ…坂本さんに任せます」

「わかった。なら言わせて貰おう」

「は、はい…」

これがこのあとどうなるかを、俺はこの時知る由もなかった。

その夜、俺は昨日同様部屋で本を読んでいた。だが、今日はドアに向かい合う形で座っていた。こうすれば誰が入ってきても、すぐに分かるからだ。

「あなた」

すると、まるで台本通りであるかのように醇子が部屋に入ってきた。

「な、なんだい?」

昨日のこともあるから、多少俺はビクついている。いつまた昨日のように偉い目に遭うか分からない。すると、醇子は驚いたことに布団を早くも敷き終わった。時間は…大体9時半過ぎで、そろそろ眠くはなっていた頃だ。

「さぁ、うつぶせで横になって」

「え、一体?」

「いいから早く」

「う、うん」

俺は急いで自分がいつも寝ている布団の上にうつぶせになった。すると醇子は俺の背中を押し始めた。

「な、何を?」

「こんなにこっちゃって…あなた、今日も一日お疲れ様」

「え?」

「ミーナ中佐と美緒からみんなきいたわ。あなた、東京駅の改札で立番をしているんだって?」

「う…うぅ…」

「どうしたの?。あなた?」

「そうだよ…俺は東京駅の改札でアルバイトをしてるんだ」

「でも、どうして秘密にしていたのかしら?」

「い、いや。何というか、恥ずかしくてね」

すると醇子は背中を押すのをやめて急に俺の背中に抱きついてきた。

「ちょ、ちょっと!!」

「しっ…」

そう言うと醇子は俺の耳元でこう囁いた。

「恥ずかしいことなんてなんにもないわ。あなたが頑張っている姿を想像しただけで格好いいもの。これからもしっかり頑張ってね」

「醇子…」

「だからこれからは私にこのことを隠しちゃダメよ。ちゃんと教えてね」

「う、うん」

俺は心の中がスッキリした。醇子にばれてはしまったが、これはこれで良かったのかもしれないな。

「というわけで…」

「えっ…、わわっ！」

突然醇子は部屋の明かりを落とした。そして、俺の寝ている布団に潜り込んできた。本来なら俺の隣の布団で今日からは寝るはずだったのに。

「私に隠し事をしていた罰よ。今日も抱きしめて、しっかりと私を守ってね」

「お、おい！」

「あらいいの？。また昨日みたいに怒ってもいいのよ？」

「ひっ…それだけは…」

「なら、決定ね」

「う、うん」

やれやれ、今夜もまた体中が痛くなりそうだ…。

１０８話　アルバイト（後書き）

海軍省は、１９４５年の１１月３０日まで存在した日本の内閣の省の一つです。海軍省本部があった場所には現在、農林水産省本省庁舎（中央合同庁舎第１号館）が建っています。

１０９話　母性

それは、私が夜にトイレに向かったときのことだった。

「寒いわ…早く明範さんのところに戻らないと…ふわぁ」

時間はまだ1時過ぎ、寒さもピークである頃。急いで私は、部屋に戻った…

・・・

がこの後、何かしらの柔らかいものに包まれるかのような錯覚に俺は陥って安眠出来たことは覚えている…

・・・

ムニュッと言う何か柔らかい衝撃を覚え俺は起きた。見ると真っ暗だ。

「あらあなた…起きちゃったの？」

見上げると醇子のほほえみがあった。見上げたと言っても俺も醇子も寝ているから正確には見上げたことにはならないのだが。

「今はまだ４時よ…。起きるのには早すぎるわ」

”俺の上…あれ？。どうして醇子の顔が俺の上にあるんだ…！！”

慌てて俺は醇子と同じ高さまで回復した。すると醇子は

「ふふ…さすがにあなたでもわかっちゃったのね…」

と俺にボソッと言った。俺は自分のやってしまったことが恥ずかしくてたまらなかった。

”やっぱり…俺の考えは間違っていなかったんだな…”

俺が醇子を見ると

「もぅ…あなたったらひどいわ…」

と顔を赤くしながら俺にそう言ってきた。

「醇子…その…ご、ごめんね。俺、いつの間にか…」

「あなたは偉いわ…」

なんだか質問に合わないが俺にそう醇子は言ってきた。

「えっ？」

「私をいつも抱きしめながら寝るんだもの。私も今日はじめてあなたにやられたけど体中痛くなっちゃったわ…」

どうやら今日は立場がひっくり返っていたようだ。俺が醇子を抱きながら寝るのではなくて俺が醇子に抱かれて寝るといった感じに…。

「ごめんね。でも、俺も何だか温かくて、安心できた気がするよ」

俺がそう言うと醇子は待ってましたとばかりに俺に抱きついてきた。

「じゅ、醇子。ダメだよ、こんなところ他の人に見られたら」

「ふふ…大丈夫よ。昨日もこうだったでしょ？」

「でも…」

そう言うと醇子はいつもにまして強く俺にしがみついてきた。

「痛いよ…醇子」

「あなたが抱きしめてくれない限りこうしてるわよ…」

「そ、そんなぁ」

そう言っている間もどんどん力は強くなっていく。いつの間にか醇子は使い魔を発動していた。これでは俺に勝ち目はない。早く対応しないと俺も押しつぶされてしまう。

俺はすぐに醇子をそっと抱きしめた。すると力は一気に解かれた。

「これでいいの？」

「えぇ…やっぱり私はここがいちば…」

そう言いながら醇子は眠ってしまった。いきなり朝起きて使い魔を発動したのだ。無理もない。ただ不思議なことに醇子の顔は笑顔であった。寝ている醇子に

「そういえば醇子…前に寝ながら俺の事大好きって言ってくれたよね…。俺も同じだよ…醇子、大好きだ…」

とそっと囁いた。まるで子供の寝顔をほほえみながら眺める父親のように。俺もそう言うと気がつかないうちに眠りに落ちていた。まだまだ、起きるまで時間はしばらくかかりそうだ…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8999u/

In the sky with Electric Power

2011年11月20日02時09分発行